福岡市埋蔵文化財調査報告書　第255集

比恵遺跡群（10）

HIE

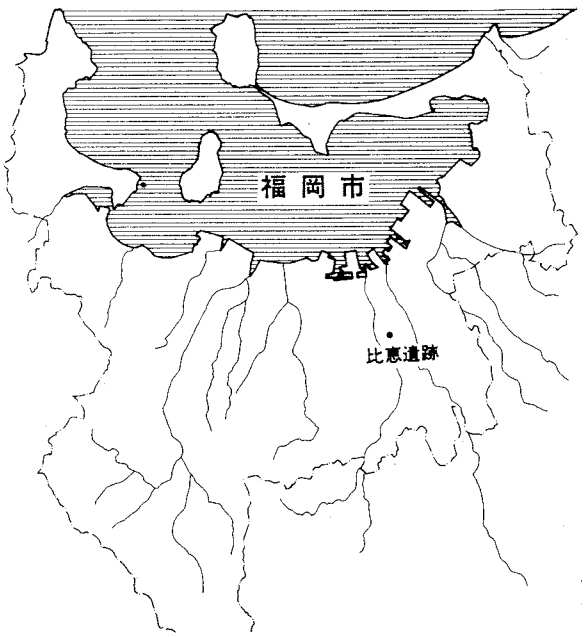
1991

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第255集

HI　E

比恵遺跡群（10）



1991

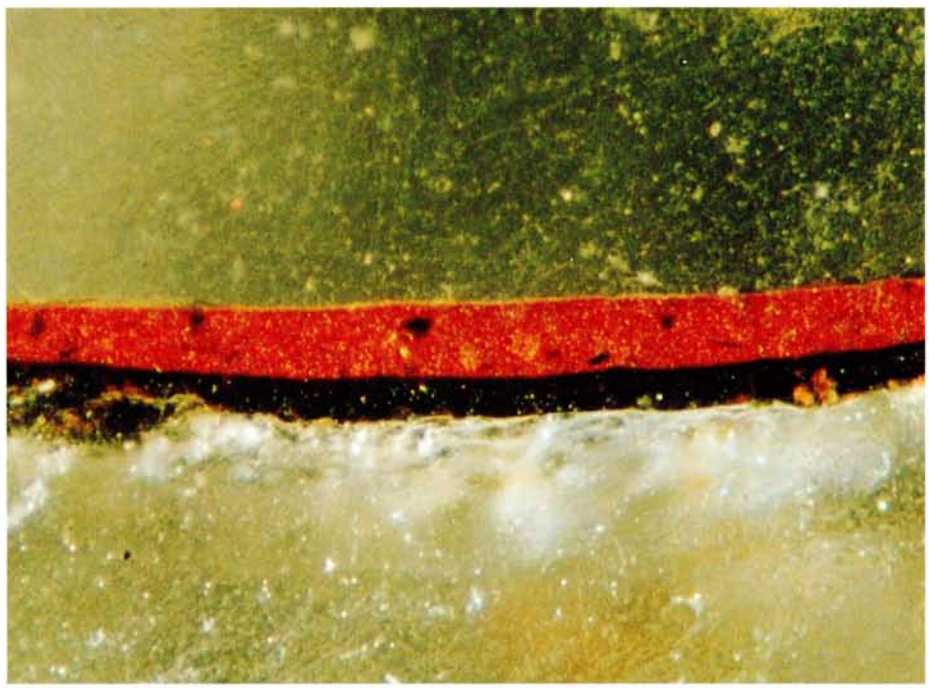
福岡市教育委員会

1）25次調査地点SK-11・12の遺物出土状況

2）25次調査地点出土漆塗り脚付杯

3）25調査地点出土木剣

1） 26次調査地点木器出土状況



2） 木胎漆器断面写真

序

福岡市の博多駅の南側に広がる市街地には多くの埋蔵文化財が包蔵されています。この中でも比恵遺跡群は市内で最も早く調査が行われた遺跡です。

また、この地域は大都市化に伴い再開発が進むつつある地域でもあります。本市ではとくに文化財の保護・活用に努めており、土木工事等に係る文化財については関係者のご理解とご協力のうえに、保護対策の調整を進めているところです。

本書は1988年以降実施いたしました比恵遺跡群の第19、24～28次調査地点の発掘調査報告書です。調査の結果、縄文時代晩期から古代にかけての遺物と遺構が数多く発見されました。

本書が文化財保護と活用の一助となることを願います。

最後になりましたが、株式会社福岡、株式会社松本医科器械、見上株式会社、株式会社瑞穂、福岡信用金庫、東峰住宅産業株式会社をはじめとする関係各位のご協力に対して厚く感謝の意を表します。

また、調査に際しまして指導・助言をいただきました諸先生方にも厚くお礼申しあげます。

平成３年１月10日

福岡市教育委員会

教育長　　井口雄哉

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が1988年から1990年に実施した比恵遺跡群の発掘調査のうち、第19・24～28次調査地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は上記の主体により行なわれ、調査組織は「第１章２　調査体制」の中でそれぞれ示している。

3．遺構実測は主に調査担当者と調査補助員がおこなった。
遺物の実測と浄書は調査担当者と調査補助員、調査整理協力者がおこなった。

4．遺構と遺物の写真は調査担当者がおこなった。また、自然科学的研究と付設に関する写真は担当者がこれにあたった。

5．文章の執筆は本文目次に示し、その他は吉留秀敏がおこなった。

6．本書の編集は吉留秀敏がおこなった。

7．本書に使用した方位は磁北である。真北との偏差は西偏06°21′である。

8．出土遺物図面、写真等の記録類は福岡市埋蔵文化財センターにおいて保管し、活用していく。

9．調査から報告までに以下の方々や機関のご援助、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

株式会社福岡、株式会社松本医科器械、見上株式会社、株式会社瑞穂、福岡信用金庫、東峰住宅産業株式会社

本文目次

第１章　地理的歴史的環境 …… （吉留秀敏）　1
第２章　序説 …… （山口譲治）　3
第３章　第19次調査地点 …… （山口譲治）　5
　1　調査の概要 …… 5
　2　調査の記録 …… 8
　　1）竪穴住居址（SC） …… 8
　　2）井戸（SE） …… 18
　　3）土壙（SK） …… 21
　　4）溝状遺構（SD） …… 27
　　5）掘立柱建物（SB）および柵列（SA） …… 29
　3　まとめ …… 30
第４章　第24次調査地点 …… （吉留秀敏）　31
　1　調査の概要 …… 31
　2　調査の記録 …… 33
　　1）水溜状遺構SX－01 …… 34
　　2）土壙 …… 34
　　3）SX－01および包含層出土遺物 …… 36
　3　まとめ …… 66
第５章　第25次調査地点 …… （田崎博之・小畑弘己）　67
　1　調査の経過と方法 …… 67
　　1）調査・報告書作成までの経緯 …… 67
　　2）調査・記録の方法 …… 67
　2　調査の概要 …… 70
　　1）層位 …… 70
　　2）遺構 …… 72
　3　調査の記録 …… 72
　　1）竪穴式住居跡 …… 72
　　2）土壙 …… 75
　　3）小穴 …… 102
　　4）包含層 …… 102
第６章　第26次調査地点 …… （小畑弘己）　168
　1　調査の概要 …… 168

2　調査の記録 …… 170
1）溜池・溝 …… 170
2）竪穴式住居址 …… 179
3）土壙 …… 182
4）その他の遺物 …… 184
3　調査の記録（包含層） …… 185
4　まとめ …… 199
第7章　第27次調査地点 …… （菅波正人）203
1　調査の概要 …… 203
2　調査の記録 …… 205
1）竪穴住居址 …… 205
2）井戸 …… 206
3）掘立柱建物 …… 213
4）その他の遺構・遺物 …… 217
3　まとめ …… 218
第8章　第28次調査地点 …… （荒牧宏行）219
1　調査の概要 …… 219
2　調査の記録 …… 221
3　まとめ …… 228
第9章　自然科学的調査
1　比恵遺跡群第24・25次調査によって得られた試料の花粉分析 …… （野井英明）229
2　彩文土器・木胎漆器等の赤色顔料について …… （成瀬正和、本田光子、岡田文男）234
第10章　結章
1　比恵遺跡出土のカゴ類について …… （渡辺誠）238
1）出土状態と所属時期 …… 238
2）編み方と形態の観察 …… 238
3）若干の検討 …… 241
2　年代測定の結果報告 …… （中村俊夫）242
3　比恵遺跡群出土の弥生時代の木器について …… （山口譲治）243
1）前半期の木器 …… 243
2）後半期の木器 …… 245
3）まとめ …… 246

挿図目次

Fig. 1　比恵遺跡群と周辺の遺跡 …… xii
Fig. 2　比恵遺跡群と調査地点位置図 …… 2
Fig. 3　第19次調査地点地形実測図 …… 6
Fig. 4　第19次調査地点遺構分布図 …… 7
Fig. 5　第４号竪穴住居址（SC－04）実測図 …… 8
Fig. 6　第４号竪穴住居址（SC－04）出土遺物実測図 …… 9
Fig. 7　第９号竪穴住居址（SC－09）実測図 …… 10
Fig. 8　第９号竪穴住居址（SC－09）出土遺物実測図 …… 11
Fig. 9　第10号竪穴住居址（SC－10）出土遺物実測図 …… 12
Fig.10　第12号竪穴住居址（SC－12）実測図 …… 13
Fig.11　第12号竪穴住居址（SC－12）出土遺物実測図 …… 14
Fig.12　第19号竪穴住居址（SC－19）実測図 …… 15
Fig.13　第19号竪穴住居址（SC－19）出土遺物実測図 …… 16
Fig.14　第１号井戸（SE－01）実測図 …… 17
Fig.15　第１号井戸（SC－01）出土土器実測図　（１） …… 17
Fig.16　第１号井戸（SE－01）出土土器実測図　（２） …… 18
Fig.17　第16号井戸（SE－16）実測図 …… 19
Fig.18　第16号井戸（SE－16）出土遺物実測図 …… 20
Fig.19　第５号土壙（SK－05）実測図 …… 21
Fig.20　第５号土壙（SK－05）出土土器実測図 …… 22
Fig.21　第６号土壙（SK－06）実測図および土層断面図 …… 22
Fig.22　第７号土壙（SK－07）実測図および土層断面図 …… 23
Fig.23　第７号土壙（SK－07）出土遺物実測図 …… 24
Fig.24　第２号溝（SD－02）土層断面図 …… 25
Fig.25　第３号溝（SD－03）土層断面図 …… 25
Fig.26　第３号溝（SD－03）出土遺物実測図　（１） …… 25
Fig.27　第３号溝（SD－03）出土遺物実測図　（２） …… 26
Fig.28　第20号掘立柱建物（SB－20）実測図 …… 27
Fig.29　第21・22号掘立柱建物（SB－21・22）実測図 …… 28
Fig.30　第23・24号掘立柱建物（SB－23・24）実測図 …… 29
Fig.31　第24次調査地点平面図 …… 31
Fig.32　第24次調査地点土層断面図 …… 32

Fig.33　水溜状遺構SX－01平面・断面図……33
Fig.34　土壙SK－02・03、SX－08平面・断面図 …… 34
Fig.35　SK－02出土遺物……35
Fig.36　SX－06出土遺物……36
Fig.37　SX－08出土遺物……37
Fig.38　茶褐色粘質土出土遺物 …… 37
Fig.39　SX－01出土土器　1 ……39
Fig.40　SX－01出土土器　2 ……40
Fig.41　包含層出土遺物　1 …… 41
Fig.42　包含層出土遺物　2 …… 42
Fig.43　包含層出土遺物　3 …… 43
Fig.44　包含層出土遺物　4 …… 44
Fig.45　包含層出土遺物　5 …… 45
Fig.46　包含層出土遺物　6 …… 46
Fig.47　包含層出土遺物　7 …… 47
Fig.48　包含層出土遺物　8 …… 48
Fig.49　包含層出土遺物　9 …… 49
Fig.50　包含層出土遺物　10 …… 50
Fig.51　包含層出土遺物　11 …… 51
Fig.52　包含層出土遺物　12 …… 52
Fig.53　包含層出土遺物　13 …… 53
Fig.54　包含層出土遺物　14 …… 54
Fig.55　包含層出土遺物　15 …… 55
Fig.56　包含層出土遺物　16 …… 56
Fig.57　包含層出土遺物　17 …… 57
Fig.58　包含層出土遺物　18 …… 58
Fig.59　包含層出土遺物　19 …… 59
Fig.60　包含層出土遺物　20 …… 60
Fig.61　包含層出土遺物　21 …… 61
Fig.62　出土木器　1 …… 62
Fig.63　出土木器　2 …… 63
Fig.64　出土木器　3 …… 64
Fig.65　出土木器　4　諸手鍬未製品 …… 65
Fig.66　比恵遺跡第24・25・32次調査地点 …… 折込
Fig.67　第25次調査地点北壁土層断面図 …… 68・69

Fig.68　第25次調査地点の近代遺構 …… 68
Fig.69　第25次調査地点の弥生時代遺構 …… 69
Fig.70　SC－08実測図 …… 73
Fig.71　SC－08出土土器実測図 …… 73
Fig.72　SC－09実測図 …… 74
Fig.73　SK－10実測図 …… 75
Fig.74　SK－10出土木器実測図　1 …… 76
Fig.75　SK－10出土木器実測図　2 …… 77
Fig.76　SK－10出土木器実測図　3 …… 78
Fig.77　SK－10出土土器実測図 …… 78
Fig.78　SK－11実測図　1 …… 80
Fig.79　SK－11実測図　2 …… 81
Fig.80　SK－11出土木器実測図　1 …… 82
Fig.81　SK－11出土木器実測図　2 …… 83
Fig.82　SK－11出土木器実測図　3 …… 84
Fig.83　SK－11出土木器実測図　4 …… 85
Fig.84　SK－11・12出土土器実測図 …… 86
Fig.85　SK－11・12出土石器・土製品実測図 …… 87
Fig.86　SK－11～13上面７～８層出土土器実測図　1 …… 88
Fig.87　SK－11～13上面７～８層出土土器実測図　2 …… 89
Fig.88　SK－12実測図 …… 90
Fig.89　SK－12出土木器実測図 …… 93
Fig.90　SK－13実測図 …… 93
Fig.91　SK－13出土木器実測図 …… 93
Fig.92　SK－14実測図 …… 93
Fig.93　SK－15実測図　1 …… 94
Fig.94　SK－15実測図　2 …… 95
Fig.95　SK－15出土木器実測図　1 …… 96
Fig.96　SK－15出土木器実測図　2 …… 97
Fig.97　SK－15出土木器実測図　3 …… 98
Fig.98　SK－15出土木器実測図　4 …… 98
Fig.99　SK－15出土土器実測図 …… 99
Fig.100　SK－15出土石器実測図 …… 99
Fig.101　SK－16実測図 …… 100
Fig.102　SK－16出土土器実測図 …… 100

Fig.103　SK－16出土石器・土製品実測図 …… 102
Fig.104　SK－54・55実測図 …… 102
Fig.105　6・7層出土土器実測図　1 …… 104
Fig.106　6・7層出土土器実測図　2 …… 105
Fig.107　6・7層出土土器実測図　3 …… 106
Fig.108　6・7層出土土器実測図　4 …… 107
Fig.109　8－3層遺物出土状況実測図 …… 108・109
Fig.110　8－4層遺物出土状況実測図 …… 110・111
Fig.111　8－5層遺物出土状況実測図 …… 112・113
Fig.112　AB－3・4区、8－3・4層出土土器実測図　1 …… 115
Fig.113　A・B－3・4区、8－3・4層出土土器実測図　2 …… 116
Fig.114　C－3・4区、8－3・4層出土土器実測図　1 …… 117
Fig.115　C－3・4区、8－3・4層出土土器実測図　2 …… 118
Fig.116　A～C－3・4区、8－5層出土土器実測図　1 …… 119
Fig.117　A～C－3・4区、8－5層出土土器実測図　2 …… 120
Fig.118　D・E－3・4区、7－2～8－1・2層出土土器実測図 …… 121
Fig.119　D・E－3・4区、8－2・3層出土土器実測図 …… 122
Fig.120　D・E－3・4区、8－3・4層出土土器実測図 …… 123
Fig.121　D・E－3・4区、8－5層出土土器実測図 …… 124
Fig.122　彩文土器実測図 …… 125
Fig.123　8層出土木器実測図　1 …… 126
Fig.124　8層出土木器実測図　2 …… 127
Fig.125　8層出土木器実測図　3 …… 128
Fig.126　8層出土木器実測図　4 …… 129
Fig.127　8層出土木器実測図　5 …… 130
Fig.128　8層出土木器実測図　6 …… 131
Fig.129　8層出土木器実測図　7 …… 132
Fig.130　8層出土木器実測図　8 …… 133
Fig.131　8層出土木器実測図　9 …… 134
Fig.132　8層出土木器実測図　10 …… 135
Fig.133　8層出土木器実測図　11 …… 135
Fig.134　8層出土木器実測図　12 …… 136
Fig.135　8層出土木器実測図　13 …… 137
Fig.136　8層出土木器実測図　14 …… 138
Fig.137　8層出土木器実測図　15 …… 139

Fig.138　8層出土木器実測図　16……140
Fig.139　8層出土木器実測図　17……141
Fig.140　8層出土木器実測図　18……142
Fig.141　8層出土石器実測図……144
Fig.142　7・8層出土石器実測図　1……145
Fig.143　7・8層出土石器実測図　2……146
Fig.144　7・8層出土石器実測図　3……147
Fig.145　7・8層出土石器実測図　4……148
Fig.146　7・8層出土石器実測図　5……149
Fig.147　7・8層出土石器実測図　6……150
Fig.148　7・8層出土石器実測図　7……151
Fig.149　7・8層出土石器実測図　8……152
Fig.150　7・8層出土石器実測図　9……153
Fig.151　7・8層出土土製品実測図……155
Fig.152　6～8層出土土製品実測図　1……156
Fig.153　6～8層出土土製品実測図　2……156
Fig.154　第26次調査地点グリット配置図……168
Fig.155　第26次調査地点遺構分布図……169
Fig.156　第1号溜池（SX－01）出土銅鏃実測図……170
Fig.157　第1号溜池（SX－01）実測図……171
Fig.158　第1号溜池（SX－01）出土土器実測図……172
Fig.159　第1号溜池（SX－01）出土石器実測図　1……173
Fig.160　第1号溜池（SX－01）出土石器実測図　2……174
Fig.161　第1号溜池（SX－01）出土石器実測図　3……175
Fig.162　第2号溝（SD－02）出土遺物実測図……176
Fig.163　溝（SD－03・05・36・37・40およびSD－38）土層断面図……177
Fig.164　第30・37・40号溝（SD－30・37・40）出土土器実測図……178
Fig.165　第50号竪穴住居址（SC－50）実測図……179
Fig.166　第50号竪穴住居址（SC－50）出土遺物実測図……180
Fig.167　第60号竪穴住居址（SC－60）実測図……180
Fig.168　第60号竪穴住居址（SC－60）出土遺物実測図……182
Fig.169　第03・33・34・63号土壙（SK－03・33・34・63）実測図……183
Fig.170　第03・63号土壙（SK－03・63）出土土器実測図……184
Fig.171　その他の遺物実測図……184
Fig.172　谷部包含層土層断面実測図……185

Fig.173　谷部包含層遺物出土状況実測図 …… 186・187
Fig.174　包含層出土土器実測図　1 …… 189
Fig.175　包含層出土土器実測図　2 …… 190
Fig.176　包含層出土土器実測図　3 …… 191
Fig.177　包含層出土石器実測図　1 …… 193
Fig.178　包含層出土石器実測図　2 …… 195
Fig.179　包含層出土石製品・土製品実測図 …… 196
Fig.180　出土木製品実測図 …… 198
Fig.181　第27次調査地点周辺全体図 …… 203
Fig.182　第27次調査地点遺構分布図 …… 204
Fig.183　第１号住居址（SC－01）実測図 …… 205
Fig.184　第１～４号井戸（SE－01～04）実測図 …… 207
Fig.185　第１号井戸出土遺物実測図 …… 209
Fig.186　第２～４号井戸出土遺物実測図 …… 211
Fig.187　第４号井戸出土遺物実測図 …… 212
Fig.188　第７号建物（SB－07）実測図 …… 213
Fig.189　第８号建物（SB－08）実測図 …… 214
Fig.190　第９号建物（SB－09）実測図 …… 215
Fig.191　第10号建物（SB－10）実測図 …… 216
Fig.192　第６号溝（SD－06）、柱穴出土遺物実測図 …… 217
Fig.193　第28次調査地点トレンチ土層断面図 …… 219
Fig.194　遺構配置図 …… 220
Fig.195　SK－01実測図 …… 221
Fig.196　SK－02実測図 …… 221
Fig.197　SK－03実測図 …… 222
Fig.198　SK－04実測図 …… 222
Fig.199　SK－04甕棺実測図 …… 222
Fig.200　SK－01出土遺物実測図 …… 223
Fig.201　SK－03出土遺物実測図 …… 224
Fig.202　SK－01出土石器実測図 …… 225
Fig.203　SK－03出土石器実測図 …… 225
Fig.204　SK－06実測図 …… 225
Fig.205　SK－06出土遺物実測図 …… 226
Fig.206　灰色粗砂出土土製品・石器 …… 226
Fig.207　灰色粗砂出土土器実測図　1 …… 227

Fig.208　灰色粗砂（SX02）出土土器実測図　2 …… 228
Fig.209　柱穴・検出時出土遺物実測図…… 228
Fig.210　比恵遺跡第24・25次調査区位置図…… 229
Fig.211　比恵遺跡第24次調査区における花粉分析試料採取層準…… 229
（第３調査区南北壁）
Fig.212　比恵遺跡第25次調査区における花粉分析試料採取層準…… 229
（E－４－33区調査区壁面）
Fig.213　比恵遺跡第25次調査区における花粉分析試料採取層準…… 229
（A－３－６区調査区壁面）
Fig.214　比恵遺跡第24次調査区第３調査区南北壁から採取した試料の花粉ダイアグラム… 230
Fig.215　比恵遺跡第25次調査区E－４－33区調査区壁面から採取した試料の花粉ダイアグラム …… 231
Fig.216　比恵遺跡第25次調査区A－３－６区調査区壁面から採取した試料の花粉ダイアグラム ……
Fig.217　第25次調査地点出土木胎漆器塗膜断面写真…… 236
Fig.218　出土状態(上左)の概念図と各部分の実測図（実大）…… 239
Fig.219　参考試料（１：比恵第17次調査、２：曽畑貝塚出土　各報告書より）…… 240
Fig.220　比恵遺跡群各調査地点出土農具実測図…… 244

図版目次

図版１　１）19次調査地点全景（北より）
２）拡張区全景（北より）
３）第４号竪穴住居址完掘状況（北より）
４）第９号竪穴住居址完掘状況（北より）
５）第12号竪穴住居址完掘状況（東より）
６）第16号井戸完掘状況
図版２　１）第５号土壙完掘状況（東より）
２）第７号土壙土層堆積状況（東より）
３）第２号溝土層堆積状況（東より）
４）第２号溝土層堆積状況（東より）
５）第３号溝土層堆積状況（東より）
６）第20号掘立柱建物完掘状況（北より）
図版３　１）24次調査地点全景（北より）
２）24次調査地点近景（北より）
３）24次調査地点近景（南より）
４）24次調査地点風景（南より）

図版４　１）24次調査地点SK02遺物出土状態（北西より）
２）SX－02完掘状態（南東より）
３）SK－03完掘状態（南東より）
４）SX－06出土状態（北西より）
５）SX－08出土状態（北西より）
図版５　１）25次調査地点遠景（７－２層除去後　西より）
２）25次調査地点遠景（完掘後　北西より）
図版６　１）25次調査地点全景（完掘後　北東より）
２）SK－10～13検出状況（完掘後　北東より）
図版７　１）SK－10～13検出状況（北西より）
２）SK－10木器出土状況
３）SK－11木器出土状況１
４）　〃　２
５）SK－14（北東より）
図版８　１）SK－12板材出土状況
２）SK－15検出状況（北東より）
図版９　１）A・B－３区７－２～８－２層遺物出土状況（北東より）
２）C－３区７－２～８－２層遺物出土状況（南東より）
図版10　１）C－３区８－３～５層遺物出土状況
２）C－４区８－４層遺物出土状況
図版11　１）A・B－３区８－３層遺物出土状況
２）C－４区８－４層遺物出土状況
３）E－４区８－３層遺物出土状況
４）D－３区８－３層遺物出土状況
５）B－３区８－３・４層遺物出土状況
６）B－４区８－５層遺物出土状況
図版12　SK－10出土木器
図版13　SK－11出土木器１
図版14　SK－11出土木器２
図版15　SK－12出土木器
図版16　SK－15出土木器
図版17　SK－15および８－３～５層出土木器
図版18　８－３～５層出土木器
図版19　１）第26次調査地点Ｉ区全景（南東より）
２）第１号溜池（西より）
３）第50号住居址（南東より）
４）第60号住居址（北東より）
５）第３号貯蔵穴（北西より）
６）第33号貯蔵穴（南より）

図版20　1）第63号貯蔵穴（東より）
2）包含層遺物出土状況（南東より）
3）II区調査風景（東より）
4）木器貯蔵施設（南東より）
5）包含層遺物出土状況（J－8区）
6）包含層堆積状況（北西より）
図版21　出土木製品
図版22　編カゴ出土状況
図版23　編カゴ部分
図版24　1）27次調査地点全景（南より）
2）27次調査地点全景（東より）
図版25　1）SE01遺物出土状況（東より）
2）SE02完掘状況（東より）
3）SE03遺物出土状況（東より）
4）SE04遺物出土状況（南より）
5）P51・67礎板（西より）
6）P66礎板（西より）
図版26　SE01～04出土遺物
図版27　1）28次調査地点全景（北より）
2）第6トレンチ土層断面（南より）
図版28　1）SX-01完掘状況（東より）
2）SK－02完掘状況（南より）
3）SK－03完掘状況（東より）
4）SK－04完掘状況（南より）
5）柱穴柱根と礎板検出状況

表目次

Tab. 1　SK－12出土木器観察表
Tab. 2　出土石器・石製品一覧表
Tab. 3　出土石器・石製品一覧表
Tab. 4　第25次調査地点出土遺物一覧
Tab. 5　黒曜石製石器遺構別出土数
Tab. 6　磨製石器遺構別出土数
Tab. 7　第26次調査地点出土遺物観察表
Tab. 8　赤色顔料分析結果

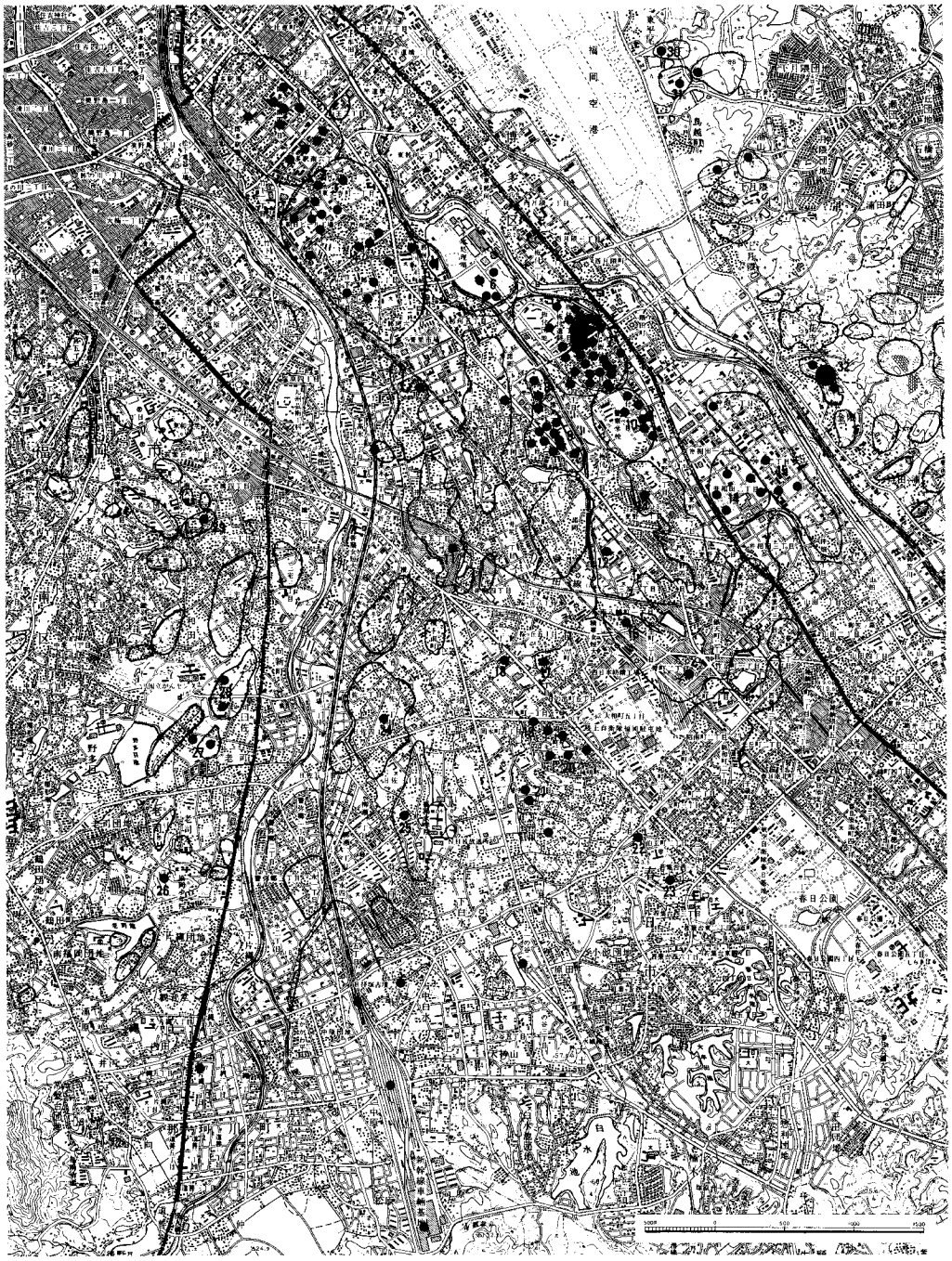


Fig. 1　比恵遺跡群と周辺の遺跡

1．比恵遺跡群
2．東光寺剣塚古墳
3．那珂遺跡群
4．那珂八幡古墳
5．那珂深ヲサ遺跡
6．那珂君休遺跡
7．板付遺跡群
8．諸岡館址遺跡群
9．諸岡遺跡
10．高畑遺跡
11．井尻B遺跡
12．三筑遺跡
13．麦野遺跡
14．井相田C遺跡
15．仲島遺跡
16．南八幡遺跡群
17．須玖永田遺跡
18．須玖唐梨遺跡
19．須玖岡本遺跡
20．岡本四丁目遺跡
21．赤井手遺跡
22．伯玄社遺跡
23．西平塚遺跡
24．曰佐遺跡
25．弥永原遺跡
26．老司古墳
27．野多目拈渡遺跡
28．野多目遺跡
29．三宅廃寺
30．赤穂ヶ浦遺跡
31．宝満尾遺跡
32．金隈遺跡

第１章　地理的歴史的環境

福岡平野は背振山塊、三郡山塊に囲まれ、北に玄界灘を面し、おおよそ南北に広がる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成されている。その沖積平野を貫流する主な河川は西から室見川、樋井川、那珂川、御笠川、宇美（多々良）川があり、それぞれの河川の間には開析の進んだ丘陵や段丘が残されている。ここで福岡平野と呼ぶのは御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡に限る狭義の福岡平野を指している。比恵遺跡群は両河川に挟まれた平野内で最北端の洪積台地上にあり、標高11～５ｍの平坦な台地に立地する。台地の南と東西は沖積平野であり、１kmほどの北の博多遺跡群の乗る砂丘との間は湿潤な後背湿地となっている。

比恵遺跡群では18次調査地点で先土器時代の遺物が出土している。隣接する那珂遺跡群では各所に同時期の遺物が検出され、この時代から人々の生活が営まれていたと考えられる。

弥生時代前期には、板付遺跡とほぼ同時に集落形成がみられる。４次、８次調査地点では貯蔵穴などが検出している。弥生時代も中期になると集落規模が拡大し、台地上のほぼ全域に何らかの遺構が検出される。住居、倉庫、穴倉、井戸などや甕棺や木棺などの墳墓もみられる。

甕棺群は４ケ所に分布するが、そのうち６、16次調査地点では約30×22ｍの墳丘墓がある。中心主体の木棺には銅剣が副葬されていた。また、中期末には15次調査地点に環濠とみられる大規模な溝が検出されている。弥生時代後期にも集落は継続し、１、９、10次調査地点などには終末期に一辺約50ｍの方形環濠が掘られている。居館址の可能性が高い。

古墳時代にも集落は継続し、隣接する那珂遺跡群に全長約70ｍの那珂八幡古墳が築造される。後円部頂の第２主体から三角縁神獣鏡を出土し、最古式の古墳と考えられる。古墳時代中期の遺構は少ないが、５世紀末には再び集落形成が進み、また隣接して東光寺剣塚古墳が築造される。この古墳は三重の周濠をもつ６世紀中葉の首長墓である。また近年、比恵遺跡群や那珂遺跡群でこれまで知られていなかった古墳の周溝が各所で発見されており、この一帯には開発で失なわれた古墳群が存在することが明らかとなってきた。

６世紀後半から７世紀代には７、８、13次調査地点で大規模な掘立柱建物群・柵列が造られている。同様な施設は那珂遺跡群でも検出されている。これらは規模、配置や出土遺物からから官衙的施設とみられ、「那津官家」の可能性が高いと考えられる。

８世紀代以降になると検出される遺構数は減少する。それに対して南側の那珂遺跡群では、建物、井戸などが多数検出される。出土遺物にも瓦、硯、越州窯青磁などがあり、この時期には比恵遺跡群から那珂遺跡群に官衙的施設は移るものとみられる。

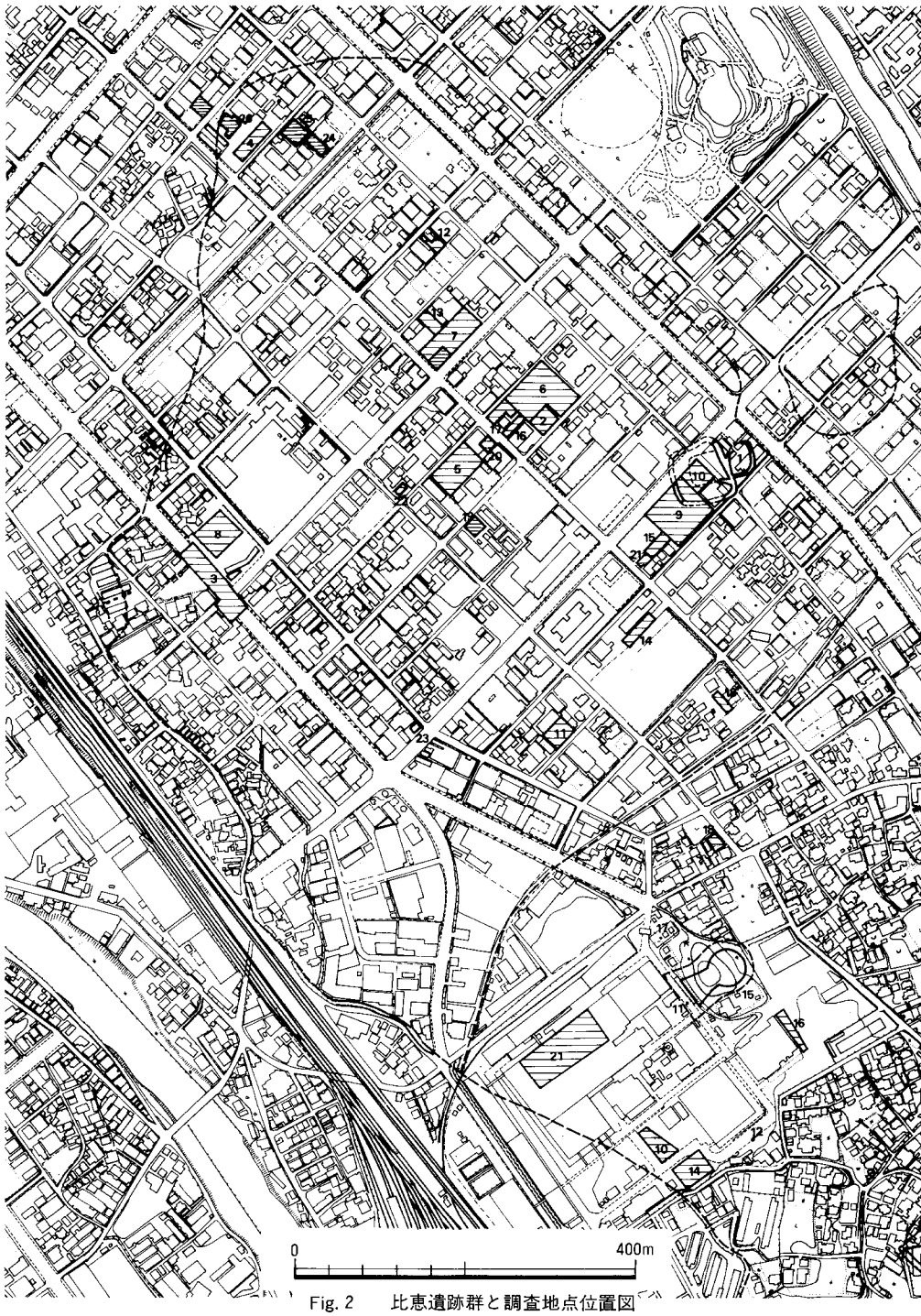


Fig. 2　比恵遺跡群と調査地点位置図

比恵遺跡群　1．第1次調査地点　2．第2次調査地点　3．第3次調査地点　4．第4次調査地点　5．第5次調査地点
6．第6次調査地点　7．第7次調査地点　8．第8次調査地点　9．第9次調査地点　10．第10次調査地点
11．第11次調査地点　12．第12次調査地点　13．第13次調査地点　14．第14次調査地点　15．第15次調査地点
16．第16次調査地点　17．第17次調査地点　18．第18次調査地点　19．第19次調査地点　20．第20次調査地点
21．第21次調査地点　22．第22次調査地点　23．第23次調査地点　24．第24次調査地点　25．第25次調査地点
26．第26次調査地点　27．第27次調査地点

那珂遺跡群　10．第10次調査地点　11．第11次調査地点　12．第12次調査地点　14．第14次調査地点　15．第15次調査地点
16．第16次調査地点　17．第17次調査地点　18．第18次調査地点　21．第21次調査地点

第2章　序説

1．はじめに

比恵遺跡群が所在する博多駅南地区には、近年都市整備事業の進展に伴い再開発が盛んに行なわれ、ビル建設が相次いでいる。埋蔵文化財課では比恵遺跡群も重点地区の一つとして、開発計画が出ると調査を実施し、各開発計画調査の状況を把握すると同時に遺跡保存のため計画変更をお願いしてきている。しかし、破壊が避けられない部分については調査期間・調査費・出土遺物の扱いなどについて地権者と協議を行ない、契約事項が整い次第、記録保存のための調査を実施してきている。

本書には、1988年度調査実施の第19次調査地点、1989年度調査実施の第24～28次調査地点（以下、第○次とする）の報告を掲載する。

第19・27次は比恵遺跡群のほぼ中央部、第24～26・28次は北端部に位置している。第19次は第２・５・６・16・17次の南側100m、第27次は逆に北側100mにあたる。第24～26・28次は第４次周辺にあたる。

国土地理院発行の５万分の１地形図(福岡)でみていくと、第19次は南から16.5cm、東から12.5cm、第27次は南から17cm、東から12.7cm、第24・25次は南から15cm、東から13cm、第26次は南から17.5cm、東から13.2cm、第28次は南から17.6cm、東から13.3cmに位置している。

	第19次調査地点	第24次調査地点	第25次調査地点	第26次調査地点	第27次調査地点	第28次調査地点
遺跡調査番号	8828	8917	8924	8939	8971	8981
遺跡略号	ＨＩＥ-19	ＨＩＥ-24	ＨＩＥ-25	ＨＩＥ-26	ＨＩＥ-27	ＨＩＥ-28
分布地図番号	037-Ａ-1					
調査地 地籍	博多区博多駅 南四丁目88	博多区博多駅 南三丁目37	博多区博多駅 南三丁目3	博多区博多駅 南三丁目58	博多区博多駅 南四丁目10-18	博多区博多駅 南三丁目426
開発面積	784.96m²	468m²	625m²	990m²	282.47m²	540.21m²
調査対象面積	784.96m²	468m²	625m²	400m²	282.47m²	540.21m²
調査実地面積	670m²	353m²	403m²	452m²	165m²	405m²
調査期間	1988年8月31日 ～ 1988年10月8日	1989年5月23日 ～ 1989年6月19日	1989年6月16日 ～ 1989年9月3日	1989年8月7日 ～ 1989年9月31日	1990年3月8日 ～ 1990年2月28日	1990年3月14日 ～ 1990年4月8日

2．調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分な体制を組むことはできなかったが、株式会社福岡、株式会社松本医科器械、見上株式会社、株式会社瑞穂、福岡信用金庫、東峰住宅産業株式会社をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査は順調に進行し、整理作業を行ない報告書を刊行することができました。記して謝意を表します。なお第19次調査地点については、業務繁多から整理報告作業が2年間にわたりました。関係各位にこの場をお借りし、お詫び申し上げます。

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係
教育長　佐藤善郎（前）　井口雄哉
文化部長　川崎賢治　埋蔵文化財課長　柳田純孝
第一係長　折尾学（前）　第二係長　飛高憲雄（現第一係長）

調査担当　山口譲治（第19次）　吉留秀敏（第24次）　横山邦継　田崎博之（第25次）
小畑弘己（第26次）　菅波正人（第27次）　荒牧宏行（第28次）

試掘調査担当　柳沢一男（現第二係長）　横山邦継　小畑弘己　米倉秀紀　佐藤一郎
常松幹雄　吉留秀敏

事務担当　松延好文

調査指導員　阪元恵一郎（九州大学理学部）　横山浩一（福岡市博物館顧問）　西谷正（九州大学教授）　下条信行（愛媛大学教授）　甲元真之（熊本大学教授）
沈奉謹（東亜大学校教授）　郭鍾喆　渡辺正気　後藤直

調査補助員　野井英明（九州大学理学部）　高田一弘　本田光子　林田憲三　前田達雄
牟田裕二（現佐賀市教育委員会）　上方高弘　城戸康利（現太宰府市教育委員会）　浜石正子　入江のり子　撫養久美子　田中克子　田崎真理　大庭友子

調査整理協力者　田中寿夫　杉山富雄　宇都宮千佳　寺井誠　西岡早苗　渋谷格　川野圭司
屋山洋　大塚恵治　石本恭司　清水健一　谷田則之　綱崎良彦　石田晴美
井手かすみ　犬丸陽子　尾崎君枝　甲斐田嘉子　木村絹子　坂井昭美
藤野洋子　星子輝美　山口朱美　山崎美枝子　立山郁子　池見恭子　安部国恵　山口英子　片野ゆき子　小西千晶　野村弥生

第3章　第19次調査地点

1．調査の概要

本調査地点では、株式会社福岡の社屋ビル建設に先だつ調査として実施したものである。調査および整理・本報告書刊行にあたっては株式会社福岡のご協力によるところが大である。記して感謝の意を表します。

本調査地点は、比恵遺跡群のほぼ中央部に位置し、北へ60mに第5次調査地点が、北東100m前後に第2・6・16・17・20次調査地点がある。比恵遺跡のなかでは、比較的調査密度が高い地域に位置している。調査対象地は、北側が道路に面しているほか、他辺は社屋があり、境界にブロック壁があり、ほぼ方形をなしている。隣接地の調査および試掘調査結果から遺構は全面に広がると予想されたが、高いブロック壁に三方を囲まれていることから、各方向とも1m前後の引きを取り、調査区を設定した。また、本調査地点は駐車場として使用されていたためアスファルト舗装がしてあったので、地権者に除去搬出していただいた。(Fig. 2・3参照)

発掘調査は、廃土置場の関係上、北東部の100m²を確保し、20～60cm前後の盛土および表土と攪乱を重機で除去することから始めた。その結果、鳥栖ロームを基盤とする遺構を検出した。なお、廃土置場も廃土を移動して調査を行なった。

検出遺構としては、弥生時代中期後半から終末期の竪穴住居址6基・掘立柱建物6棟・井戸2基・土壙5基・柱穴多数、古墳時代の竪穴住居址2基・掘立柱建物2棟・溝1条・柱穴多数、古代の掘立柱建物1棟・溝1条・柱穴多数がある。

本調査地点検出遺構は、竪穴住居址をSC、掘穴柱建物をSB、土壙をSK、井戸をSE、溝をSD、柱穴をSPと遺構記号を使用し、検出順に遺構記号の後に2桁の通し番号を付した。(例、SE－01・SD－02‥‥SC－04・SK－05‥‥SB－20)。なお、柱穴は遺構記号の後に4桁の通し番号を付し、掘立柱建物として確認できたものには遺構記号・遺構番号の後に2桁の通し番号を付した。(例、SP－0001‥‥SP－0663・SB－2001‥‥SB－2006・SB－2101…SB－2106)。出土遺物は、前述の遺構番号で取り上げた後、本遺跡調査番号の後に5桁の遺物登録番号を付けている。金属器は882800001からの通し番号、石器は882800051からの通し番号、土器・土製品は882800101からの通し番号となっている。しかし、本書は掲載順に通し番号を付けている。本書掲載番号と登録番号対象表を掲載予定であったが、紙数の関係上割愛する。

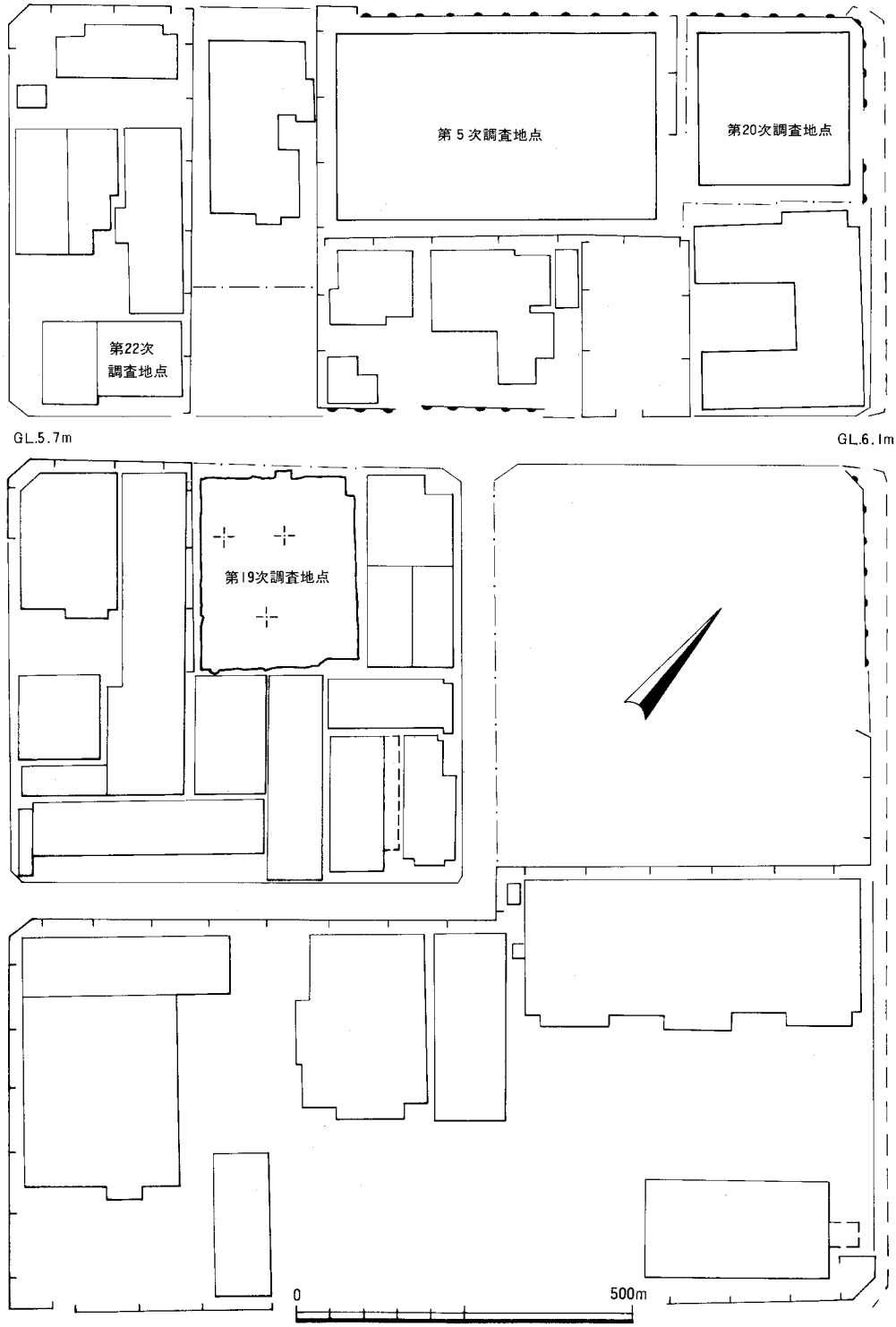


Fig. 3　第19次調査地点地形実測図

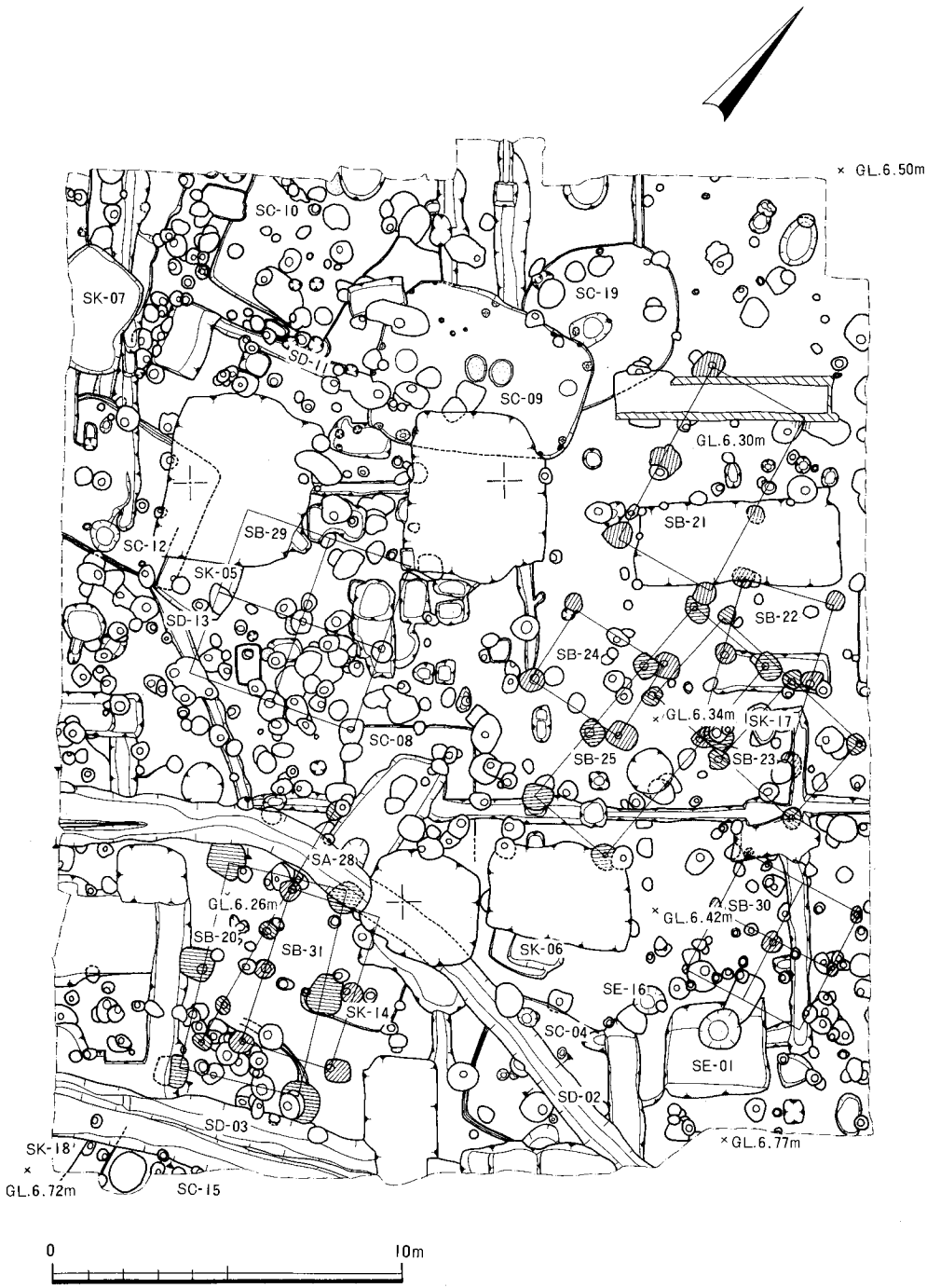


Fig. 4　第19次調査地点遺構分布図

2．調査の記録

1）　竪穴住居址（SC）

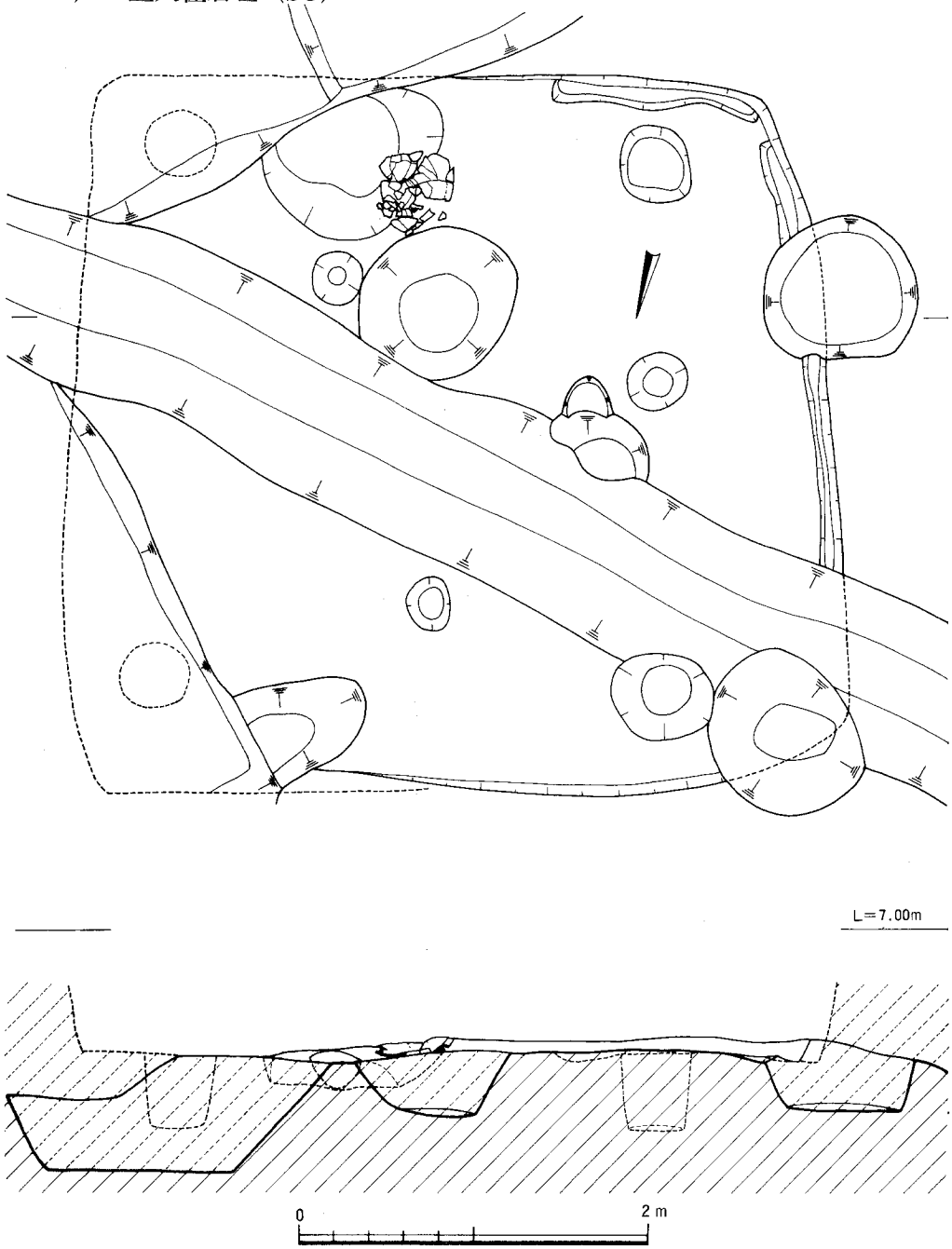


Fig. 5　第４号竪穴住居址（SC－04）実測図

本調査地点では８基の竪穴住居址を検出したが、比恵遺跡群が所在する比恵台地の区画整理によって本調査地点も削平を受けており、残存状態は悪い。本調査地点は、基盤層である鳥栖ロームが西・南方向に緩い傾斜をもっており、比恵台地頂部ではなく、西斜面に位置していると考えられる。竪穴住居址は、本来的には本調査対象地全域に分布していたと考えられる。以下、検出順に述べていく。

SC－04（Fig. 5・6）

本住居址は調査区の南側に位置し、後世の柱穴や第２号溝（SD－02）に切られ、東側・南側を攪乱によって切られている。

一辺3.8m前後の隅丸・胴張りの方形プランをもつ竪穴住居址である。約８cm前後の遺存状態をもち、床面は叩きしめられている。西側は遺存状態が良く５cm前後の壁溝がみられる。壁溝は、巡っていたか。主柱穴は４本と考えられ、４コーナに位置していたと推定できるが、東側は現代の攪乱によって消失している。主柱穴は、床面から45cm前後である。南縁辺に不整形で30cmの深さをもつ土壙があり、土壙のそばで甕形土器１点がつぶれた状態で出土した。炉はほぼ中央部にあったと考えられるが、SD－02によって切られており確認できなかった。

本住居址は遺存状態が悪く、甕形土器の完形品１点が出土したほかは、主柱穴や土壙から少量の黒曜石削片が出土したのみである。１は、口径27cm、器高31.8cm、底径9.9cmで「く」の字状に近い口縁部をもち、底部はやや上げ底で、最大径は胴上半部にもっている。口縁部はヨコナデ仕上げ、胴部表面は、ハケ目調整が施されている。２は、安山岩質凝灰岩ホルンフェンスの薄い板状のものを素材とし、敲打、打ち欠きによって木葉形に整形している。石槍か。

以上から、本住居址は４本柱を主柱とし、一辺に土壙をもち、壁溝が巡る隅丸方形プランをもつもので、弥生時代中期後半のものといえよう。

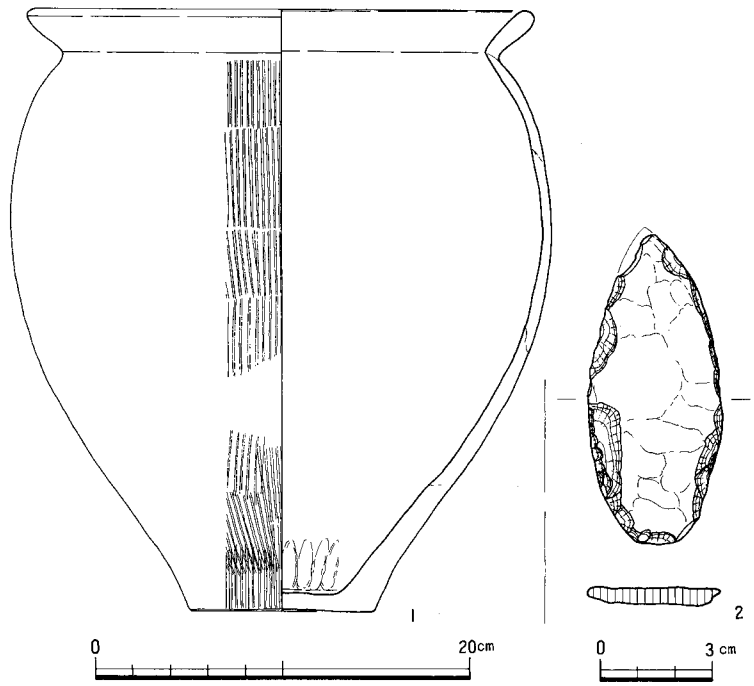


Fig. 6　第４号竪穴住居址（SC－04）出土遺物実測図

SC－08

本住居址は調査区のほぼ中央部に位置し、後世の柱穴や現代の溝によって切られ削平を受けており、南側の立ち上がりは確認できなかった。また、第26号土壙（SK－26）を切っている。

北側は一辺3.8mでコーナーを確認したが、南側は削平を受けている。平面形方形の竪穴住居址と考えられる。主柱穴・炉は確認できなかった。遺物としては、甕形土器などの細片がある。古墳時代前半期のものか。

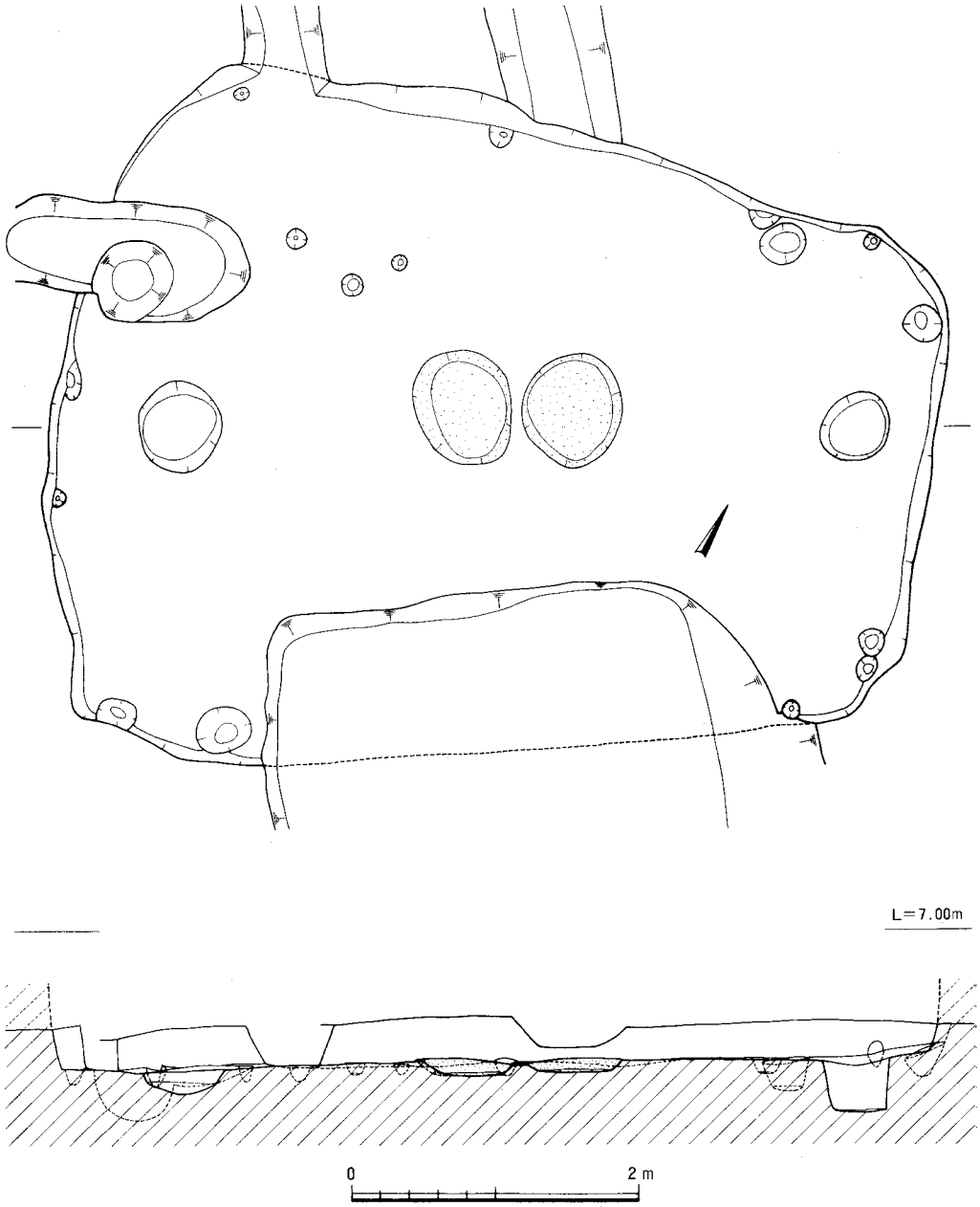


Fig. 7　第９号竪穴住居址（SC－09）実測図

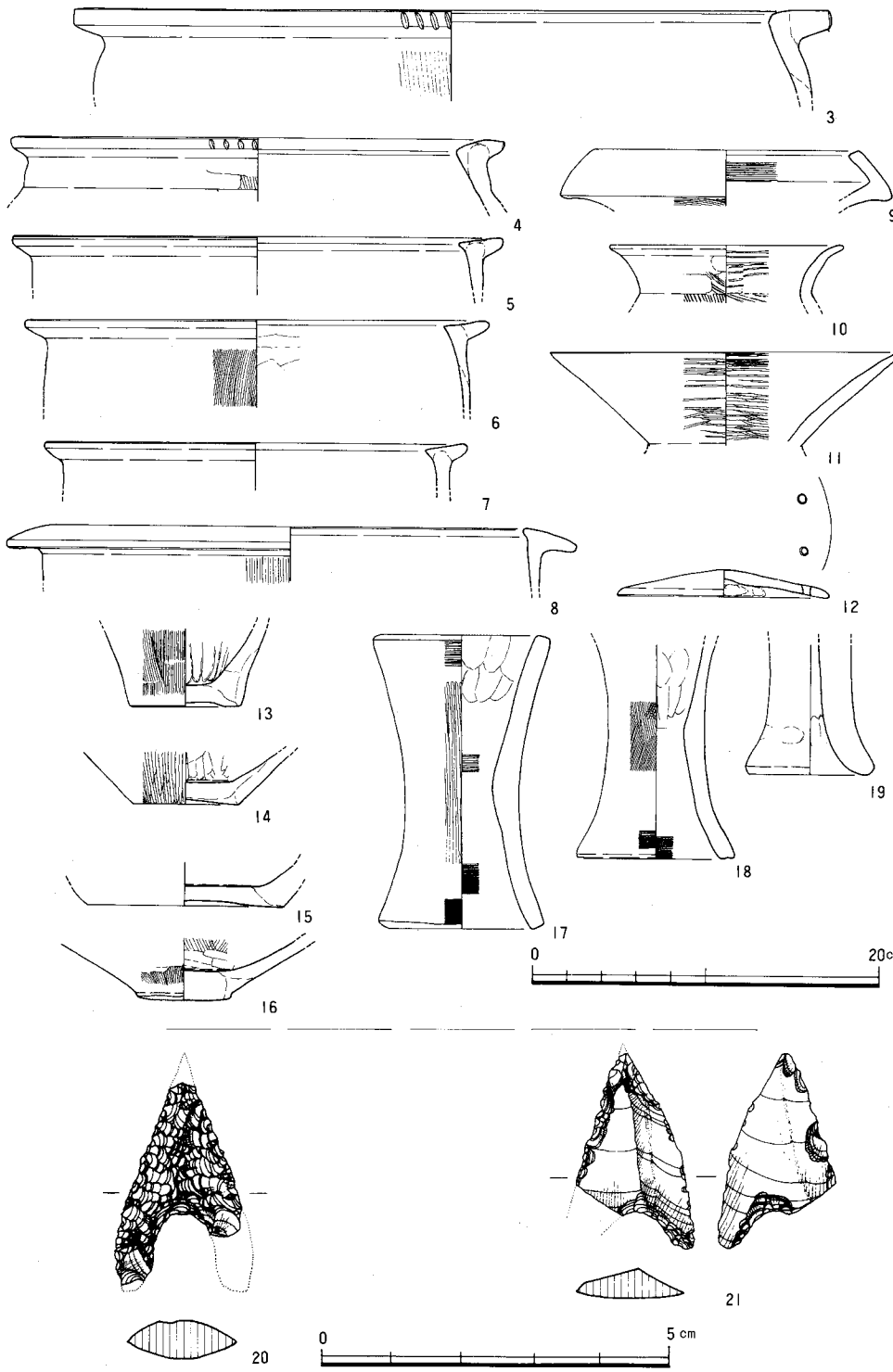


Fig. 8　第９号竪穴住居址（SC－09）出土遺物実測図

SC－09 (Fig. 7 ・ 8)

本住居址は調査区の北側に位置し、後世の柱穴や攪乱によって切られ、第19号竪穴住居址(SC－19) を切っている。

本住居址は、西側が4.5m、東側が3.3mで、東西方向が６ｍと隅丸の台形上の平面プランをもつもので、床面まで30cm前後と比較的遺存状態が良かった。床面は、暗褐色粘質土面で叩きしめられており、その下の暗褐色粘質土混じり黄褐色粘質土、その下の基盤層である鳥栖ロームの面で、それぞれ叩きしめられており、２段階の張り床が行なわれたことが分かる。(掲載図は２段目の床面の実測図である)。主柱穴は２本で東側が36cm前後、西側が16cm前後と浅い。壁に沿って、杭穴がみられるところから、壁に沿って板状のものが張り巡らされていたか。

本住居址からは、破片であるが比較的まとまった量の土器が出土したほか、石鏃や黒曜石製の剝片・削片・残核が出土した。３～８・13は甕形土器、９～11・14～16は壺形土器、12は壺の蓋形土器、17～19は器台である。３は43cm、８は32.8cm・４～７は26cm前後の口径をもっており、13は6.6cmの底径をもっている。３・４は逆Ｌ字状の短い口縁端部に刻目をもつもので、５～７は、口縁平坦面が内傾し、口縁部内面の稜線が明瞭である。８は、口縁端部が垂れたもので、13は、上げ底となっており、内面に炭化物が付着している。いずれも、口縁部下には縦方向のハケ目調整が施されている。９は15cm、10は13.6cm、11は20.4cmの口径をもち、14は6.2cm、15は11.4cm、16は5.5cmの底径をもっている。９は複合縁部をもち、10は緩く外反する口縁をもっており、11は朝顔状にひらく口縁をもち、球形の胴部をもつものである。11は器内外面とも丁寧なミガキが施されており、口縁端部は、ナデ調整で仕上げている。14は、器内外面とも縦方向のミガキが施され、16はハケ目調整後ナデ消している。12は無頸壺の蓋形土器で、器表面は丁寧なミガキが施されており丹塗りである。口径12.4cm、器高1.6cmである。17は、口径9.4cm、底径10.2cm、器高16.8cmである。20・21は黒曜石製で、20は、表裏も丁寧な押圧剝離で仕上げられた鍬形鏃で、横断面はレンズ状をなしている。21は縦長

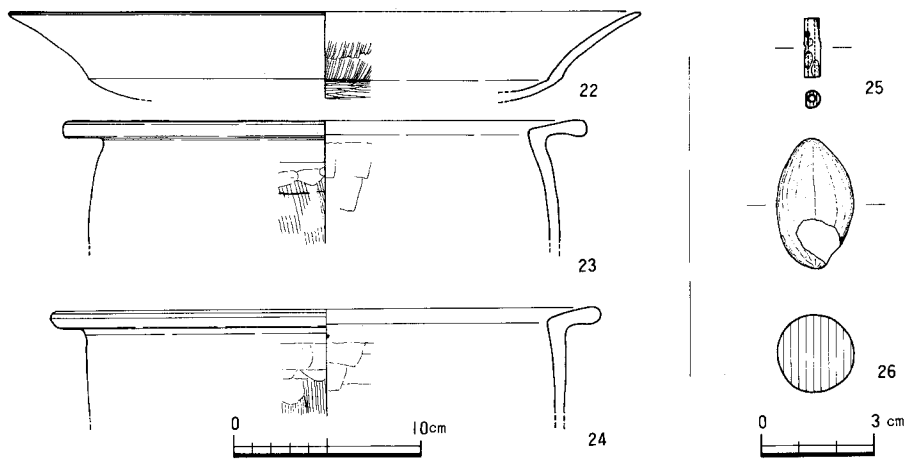


Fig. 9　第10号竪穴住居址（SC－10）出土遺物実測図

剝片を素材とし、剝離加工で先端部と基部を造り出し、縁辺には鋭い素材の縁部が残っている。縄文時代のものか。

本住居址から出土した土器は、3・4に代表される時期、5・6・12・15に代表される時期、9・16に代表される時期、11に代表される時期のものがある。以上から本住居址は、弥生時代終末期から古墳時代初頭のものといえよう。

SC－10 (Fig. 9)

本住居址は調査区の北西部に位置し、後世の柱穴・攪乱によって切られており、2基の住居址が切り合っていると考えられるが、3～5cmと遺存状態が悪く、北側が調査区域外のため確認できなかった。2基とも一辺4m前後の方形プランをもつ住居址と考えられる。炉を調査区ぎりぎりのところで確認し、床面は叩きしめられており、2基とも同じ深さである。1基は、南側に隅丸方形状の40cm前後の深さをもつ土壙を付設している。

出土遺物としては、

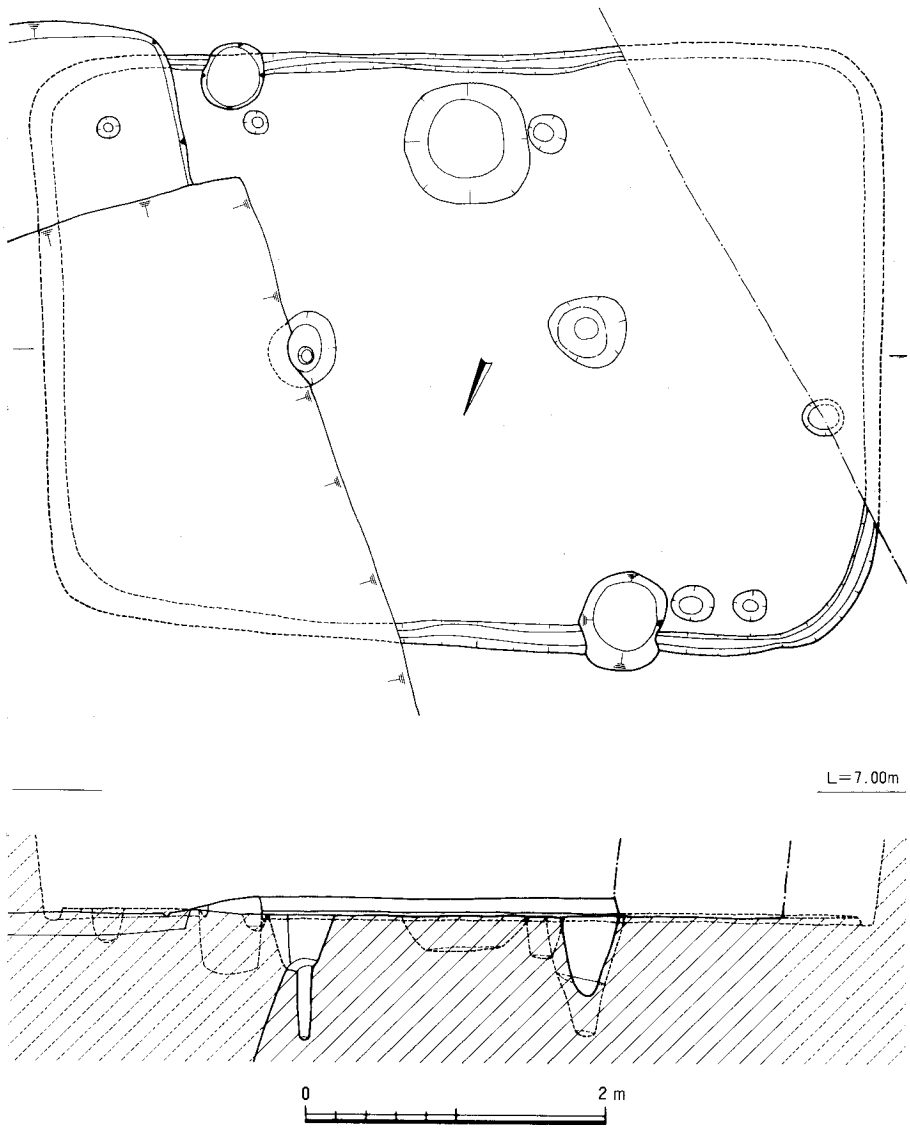


Fig.10　第12号竪穴住居址（SC－12）実測図

甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏・器台などの細片、投弾・管玉などがある。22は高坏、23・24は甕形土器である。22は口径33.2cmで、坏部下位の屈曲部から大きく外反した口縁をもち、器内外面は丁寧なミガキが施されている。23・24はやや内傾する逆L字状口縁をもつもので、口径は28cm強である。25は硬玉製の管玉で、26は土製投弾である。

本住居址は弥生時代中期後半のものを図化したが、土器細片に、布留式土器を含む古式土師器の甕形土器・高坏？・坩などの破片がある。弥生時代中期後半と古墳時代前半の2時期の住居址の切り合いか。

SC－12 (Fig.10・11)

本住居址は、調査区の西側の北側寄りに位置し、後世の柱穴および第5号土壙（SK－05）・第13号溝（SD－13）・攪乱によって切られている。

本住居址は、東側はSK－05・攪乱壙で切られ、西側は調査区域外であるが、北西部のコーナー

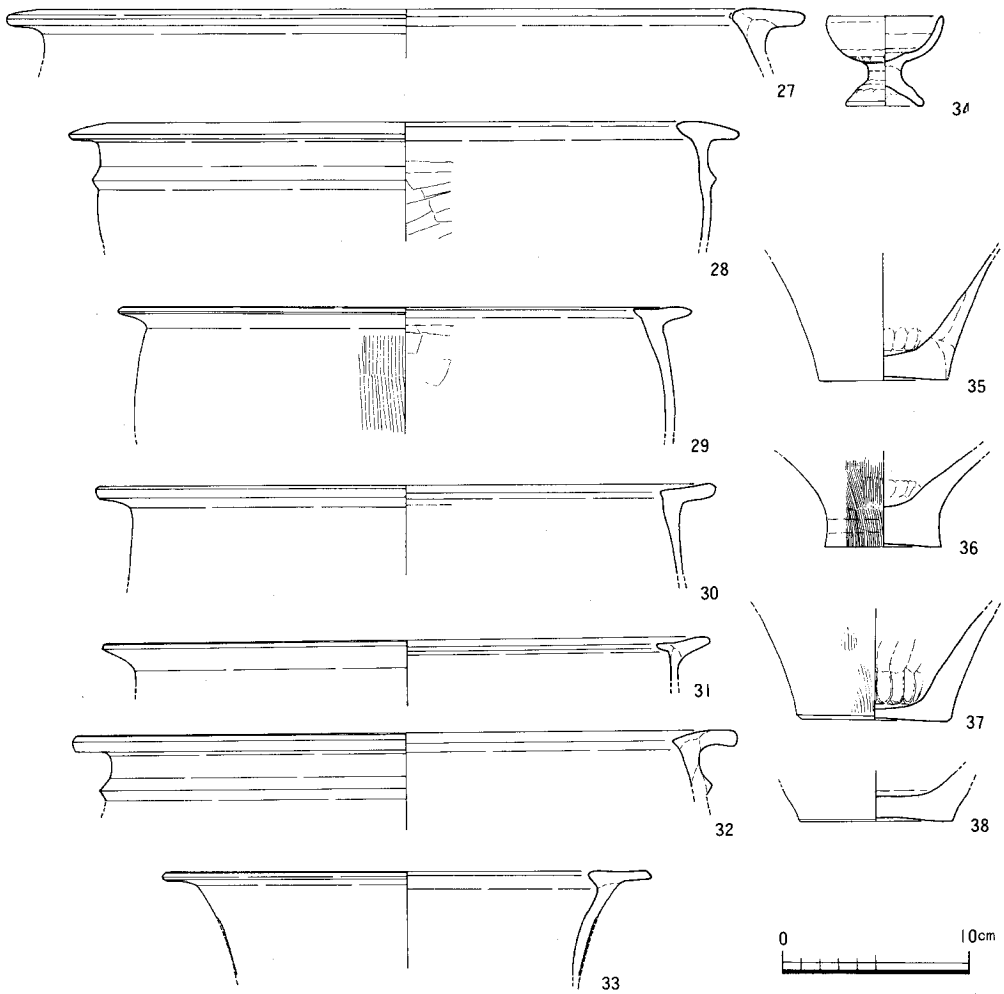


Fig.11　第12号竪穴住居址（SC－12）出土遺物実測図

を確認した。4ｍ×約5.5ｍの隅丸長方形プランをもつと考えられる。12cm前後の遺存で、床面は叩きしめられている。5cm前後の壁溝をもち、主柱穴は2本で、80cm前後の深さをもっている。また、壁沿いに径15～25cmで20～30cmの深さをもつ補助柱穴がみられる。炉は確認できなかった。南壁の壁近くに径80cmで25cmの深さをもつ土壙がある。

本住居址からは、少量の甕形土器・壺形土器・高坏などの土器が出土した。27～32・35～37は甕形土器、33は壺形土器、34は高坏のミニチュアである。27が42.7cm、29が30.8cmの口径をもち、36は6.3cm、37は4.1cmの底径をもっている。27・30・32が逆Ｌ字状の口縁部をもち、28・29・

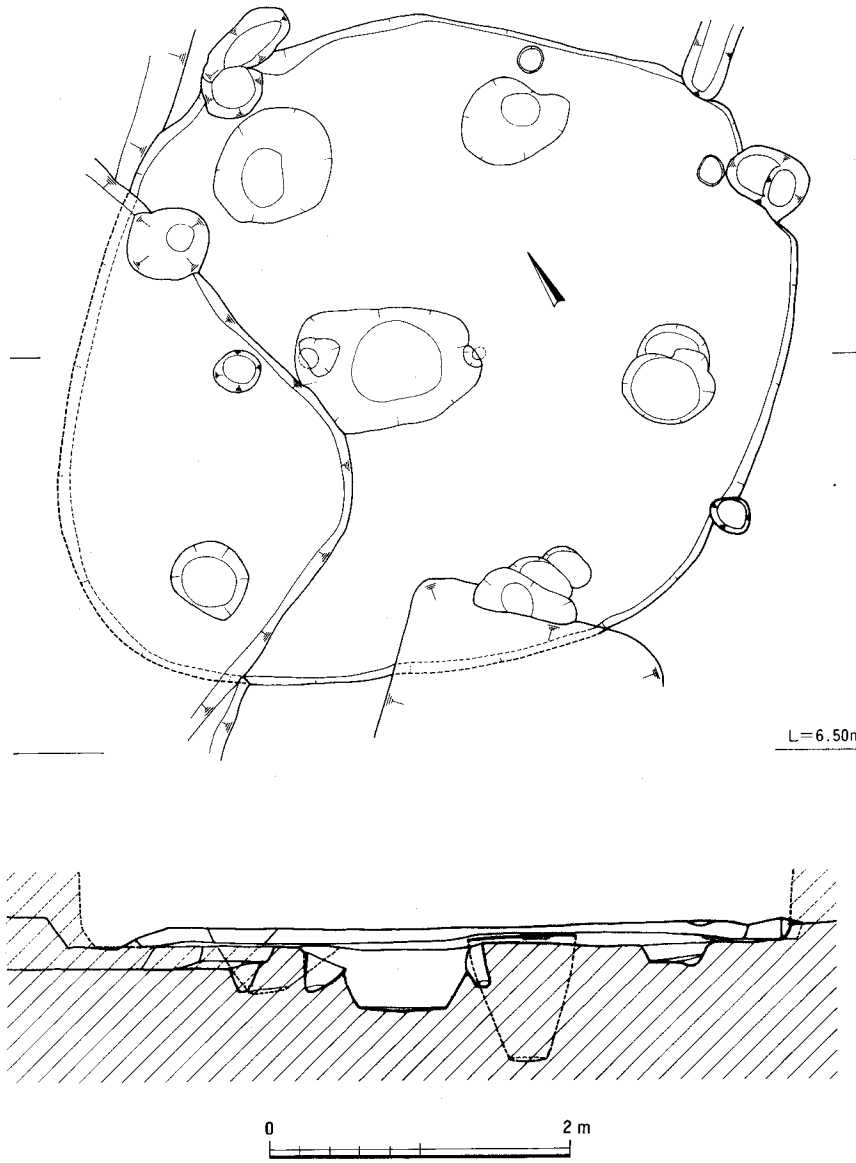


Fig.12　第19号竪穴住居址（SC－19）実測図

31がT字状から逆L字状の口縁部をもっており、28・32は口縁部下に三角凸帯をもっている。底部はいずれもやや上げ底となっている。33は口径26.4cmで、鋤先口縁部をもっている。34は、口径6.4cm、器高4.8cm、底径4.2cm、坏部高2.4cmの高坏ミニチュアで、手捏ね整形後ナデ調整で仕上げ、器内外面とも丹塗りである。

本住居址は、２本柱を主柱とする隅丸長方形の竪穴住居址で、出土土器から弥生時代中期中葉か。

SC－15

本住居址は、調査区の南西端部に位置し、後世の柱穴・第３号溝（ＳＤ－03）に切られている。約８cm前後の遺存で、床面は叩きしめられている。西側の壁が直線的に延びており、方形プランをもつものと思われる。出土遺物としては、弥生時代中期前半から中期後半の甕形土器などの土器片が出土している。

SC－19 (Fig.12・13)

本住居址は、調査区の北側に位置し、後世の柱穴・第９号竪穴住居址（SC－09）や攪乱に切られている。

東西4.55m、南北4.45mの丸みをもった不整形プランで、遺存状態は20cm前後と本調査地点検出住居址のなかでは良好な状態で残っている。床面は叩きしめられており、住居址中央に長

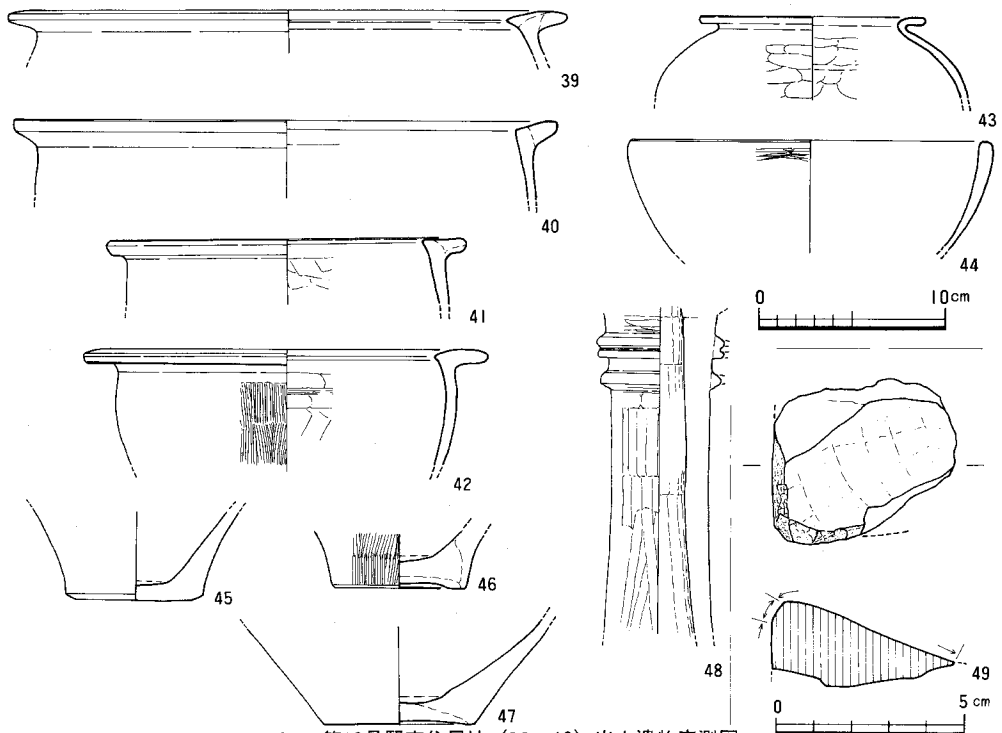


Fig.13　第19号竪穴住居址（SC－19）出土遺物実測図

軸60cm、短軸40cmで45cm前後の深さをもつ不整長方形の中央穴がある。中央穴の両端壁には、杭状のものが打ち込まれている。主柱穴は5本と考えられ、15～80cmの深さをもっている。

本住居址からは、少量の甕形土器・壺形土器などの土器片、砥石や黒曜石製の残核・削片が出土した。39～41・45・46は甕形土器、42・44は鉢形土器、43は壺形土器、48は高坏である。39は30cm、40は29.2cm、41は19.4cmの口径をもち、45・46は7.4cm前後の底径をもっている。甕形土器はT字状から逆L字状口縁をもっている。42は口径2.17cmで、逆L字状口縁をもち、胴部にはハケ目調整が施されている。45は平底、46は上げ底である。44は口径12.6cmで、器内外面とも丁寧なミガキが施されている。台付きか。43は口径12.2cmの無頸壺で、器内外面ともミガキが施されている。47は上げ底の底部で、壺形土器か。48は脚部の高い高坏で、軸部下にM字凸帯と三角凸帯を巡らせている。突帯から上は横方向、下は縦方向のミガキが施されており、丹塗りである。49は砂岩製の砥石である。

本住居址は5本柱を主柱とし、中央穴をもち、丸みをもった不正方形の竪穴住居址で弥生時代中期後半のものといえよう。

SC－27とその他の竪穴住居址

本住居址は調査区の南西部に位置し、幅15cm前後で、3cm前後の深さをもって弧状をなす壁溝を検出したが、

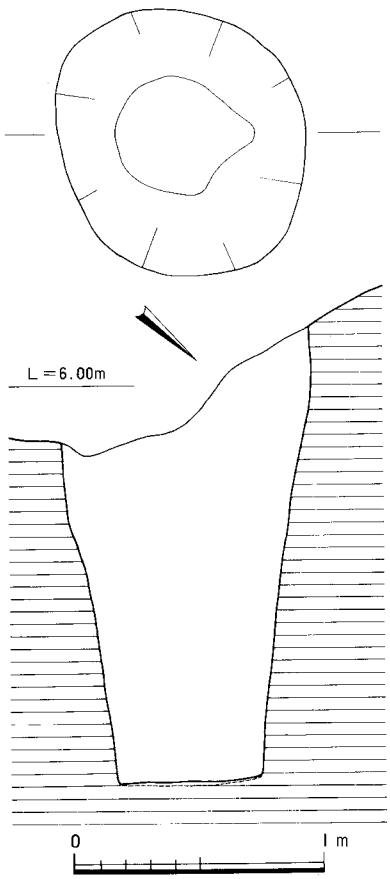


Fig.14　第1号井戸（SE－01）実測図

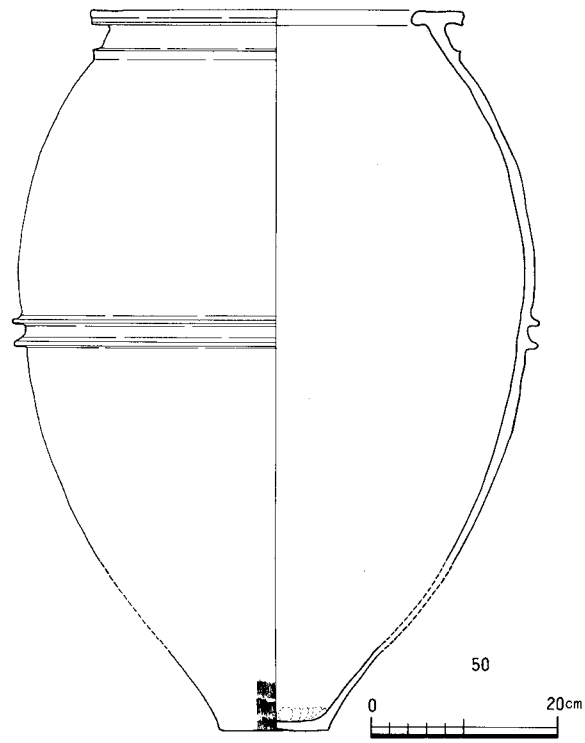


Fig.15　第1号井戸（SC－01）出土土器実測図（1）

後世の柱穴や第3号溝（SD－03）・攪乱に切られ、削平を受けているので規模および時期は分からない。

調査区中央部の第5号土壙（SK－05）と第8号竪穴住居址（SC－08）間で焼土穴2基を検出した。竪穴住居址の炉と考えられるが、床面が削平されており、住居址として認定できなかった。また、本調査地点では多くの柱穴を検出したが、すべてが掘立柱建物でなく、竪穴住居址の柱穴もあると考えられる。

2）　井戸（SE）

本調査地点では、2基の井戸を検出した。2基とも調査区の南側に位置している。

SE－01（Fig.14～16）

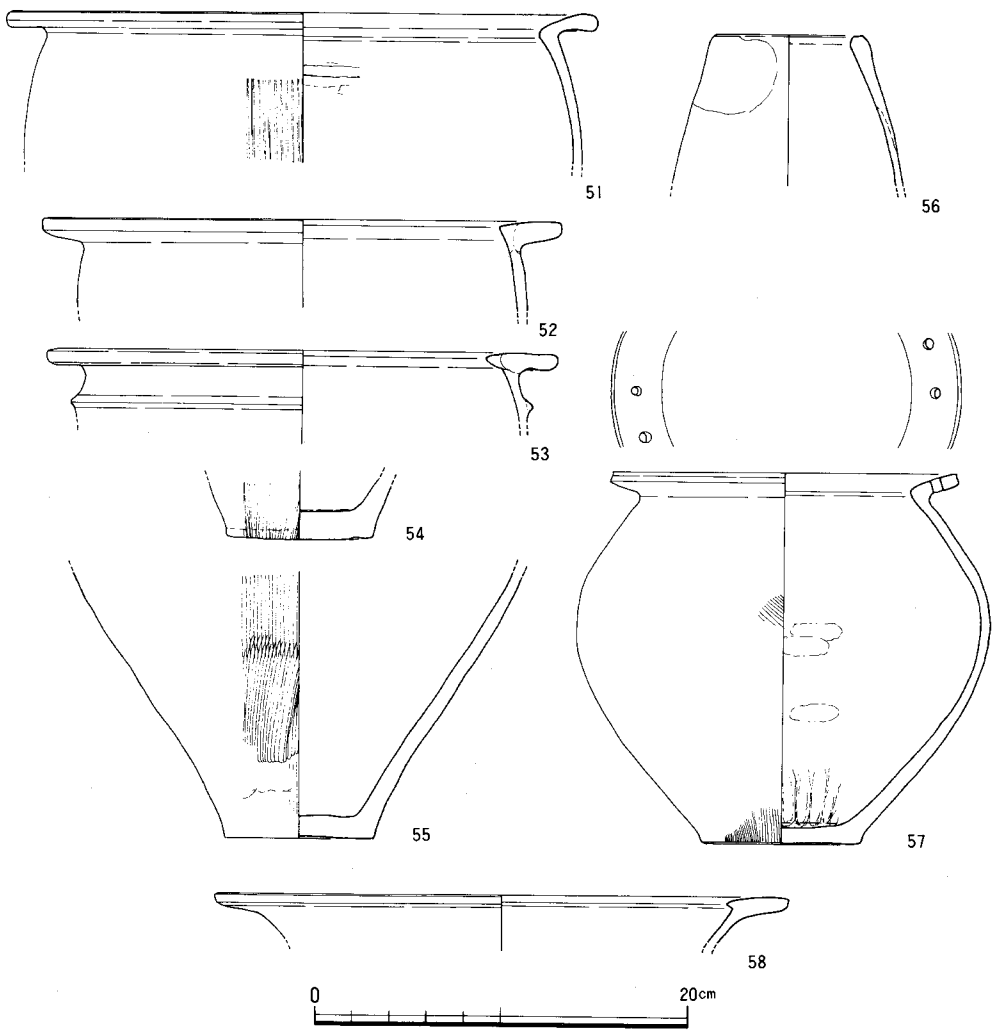


Fig.16　第1号井戸（SE－01）出土土器実測図（2）

本井戸は攪乱壙によって切られており、径１ｍ強のほぼ円形の平面径をもつもので鳥栖ロームを掘り抜き、八女粘土層まで掘り込んで桶状をなしており、1.8mの遺存状態をもっている。鳥栖ロームと八女粘土層の土層境界の湧水が少なかったか。覆土の堆積状態でみていくと、水平層をなしており、短期間の使用で人工的に埋められた結果かもしれない。

本井戸の床面には、１個体分の大形甕が破砕されて敷きつめられており、その上に１個体の無頸壺形土器が潰れた状態で出土した。

本井戸からは、前述の土器のほか、甕形土器などの土器片が下部の黒褐色粘質土から出土した。50は、床面に敷きつめられていた大形甕形土器で底部近くが欠損しているが、ほぼ完形で、口径40cm、器高76.6cm、底形12cmである。なお、最大径は胴部中央の凸帯部にあり、56.4cmを測る。口縁部はＴ字状をなし、口縁部下に三角凸帯が１条、胴部中央にコの字の凸帯が２条巡り、底部はやや上げ底である。51～55は甕形土器、56は鉢形土器、57・58は壺形土器である。51は31.6cm、53は27.4cmの口径をもち、54は7.7cm、55は8.1cmの底径をもっている。51・52は逆Ｌ字状口縁部をもち、53はＴ字状から逆Ｌ字状をなし、口縁部下に三角凸帯を巡らせている。55はやや上げ底である。56は口径7.2cmで湯呑状をなし、器表面から口縁部は丹塗りである。57は口径18.4cm、器高19.7cm、底径8.4cmの無頸壺で、最大径は胴部中央よりやや上にあり21.9cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状をなし、端部はやや凹まる。口縁部の中央に径0.6cmで、3.3cmの間隔で対をなす蓋形土器との組合わせ孔をもっている。底部はやや上げ底である。58は鋤状口縁をもっている。

本井戸は、出土土器から弥生時代中期後半のものといえよう。

SE－16 (Fig.17・18)

本井戸は、80cm弱の径をもつ円形の井戸で、桶状をなし1.5mの遺存である。鳥栖ロームを掘り抜き八女粘土層まで掘り込んでいる。雨水利用の井戸か。覆土は水平層をなし、人工的に埋められたものか。遺物は、上部の暗褐色土と最下部の黒褐色粘質土からおもに出土した。

59～62は上部の出土で、63～71は最下部の出土である。59・63～65・67・68は甕形土器、60は鉢形土器、61・66・69は壺形土器、62は器台である。64は口径30.3cm、器高26.9cm、底径8.4cmで、最大径は胴上半部にあり31.7cmを測る。口縁部は「く」の字状をなし、底部はやや上げ底となっており、口縁部下からハケ目調整が施されている。

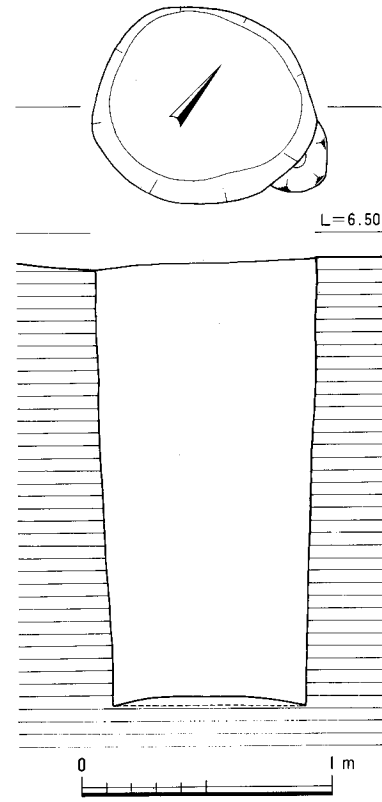


Fig.17　第16号井戸（SE－16）実測図

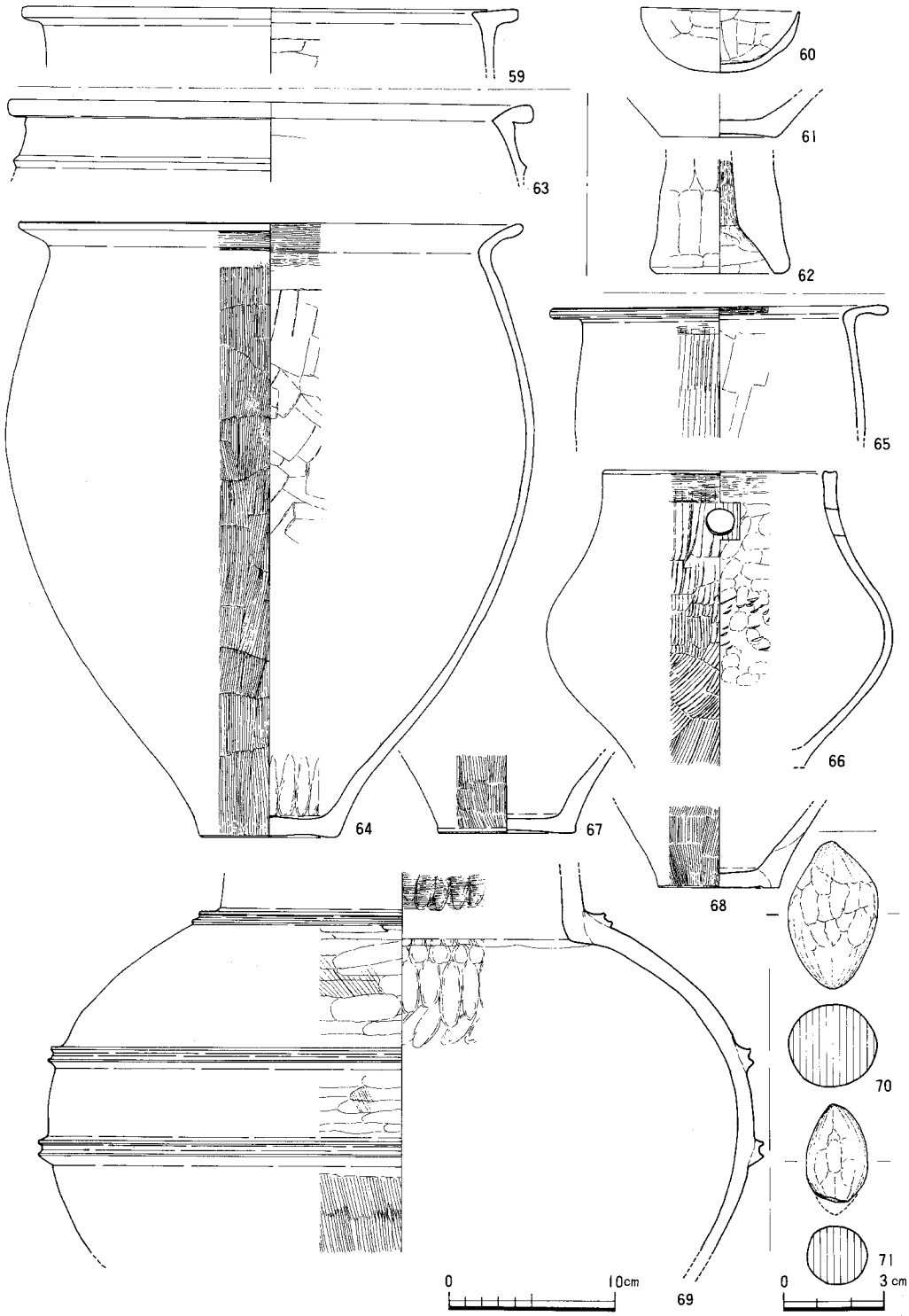


Fig.18　第16号井戸（SE－16）出土遺物実測図

57・63・65は逆L字状の口縁部をもち、口径は27.8cm、31.6cm、20.3cmである。67はやや上げ底となっている。67は8.4cm、68は7.3cmの底径をもっている。66は口径14cm、器高約18cmで、胴部中央に20.8cmの最大径をもっている無頸壺である。口縁部下に径1.6cmの焼成前の穿孔がある。直にする口縁部をもち端部は凹んでいる。口縁部はナデ仕上げ、器表面は縦方向のミガキ、内面は指押さえ後ナデ調整が施され、内面中央には爪跡が残っている。器表面から口縁部にかけては丹塗りである。69は胴部最大径が43.5cmを測り、球形の胴部中央とその直上、頸部変換点にM字状の張りつけ凸帯を巡らせている。胴部中央から上半部はハケ目調整後ミガキが施され、胴下半部はハケ目調整が、直行する頸部はミガキが施されている。器表面および頸部内面の屈曲部より上は丹塗りである。60は口径9.5cm、器高3.8cmで、底部が丸底の木椀状をなす鉢形土器である。70・71は土製投弾である。

本井戸は、出土土器から弥生時代中期後半のものといえよう。

3） 土壙（SK）

本調査地点では、7基の土壙を検出した。土壙には、SK－05・07・14・18・26のように方形、または長方形状をなすものと、楕円形をなし土壙墓状をなすものがある。

SK－05

(Fig.19・20)

本土壙は、調査区の西側中央部に位置し、後世の柱穴・第13号溝(SD－13)、攪乱壙によって切られており、第12号竪穴住居址（SC－12）を切っている。

一辺2m前後の隅丸方形プランをもち、16～30cmの遺存状態をもっている。床面はほぼ平坦で、叩きしめられ、竪穴住居址の床状をなしている。

出土遺物としては、甕形土器・鋤状口縁をもつ壺形土器・袋状口縁をもつと考えられる壺形土器・高坏などの土器片と黒曜石製削片・残核などがある。72・73・76～78は甕形土器、74・75は壺

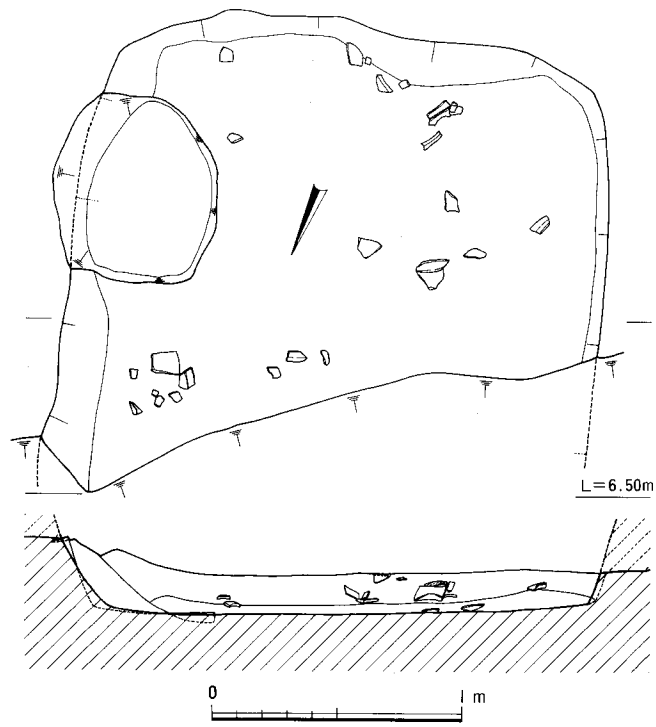


Fig.19　第5号土壙（SK－05）実測図

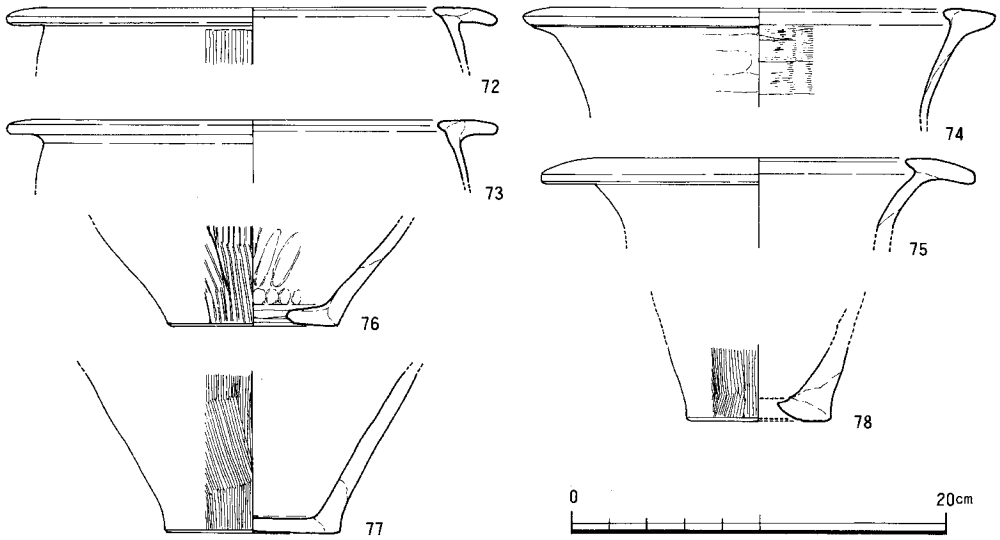


Fig.20　第５号土壙（SK－05）出土土器実測図

形土器である。72・73は口径26cmで逆Ｌ字状口縁部をもち、口縁端部は垂れている。76は底径9.2cmでやや上げ底ぎみで、焼成後内外面から穿孔しておりコシキとして使用されたと考えられる。77はやや上げ底で9.3cm、78は平底で7.8cmの底径である。74・75は鋤状口縁部をもち、口径は25.1cm・23cmである。頸部は丁寧なミガキが施され、75は丹塗りである。

本土壙は、出土土器から弥生時代中期後半のものといえよう。

SK－06

(Fig.21)

本土壙は、調査区の中央よりやや南側、第４号竪穴住居址（SC－04）の北側に位置し、北側を攪乱壙によって切られている。

一辺２ｍ強の方形プランをもつと考えられ、14～20cmの遺存で、床面はほぼ平坦で叩きしめられ、竪穴住居

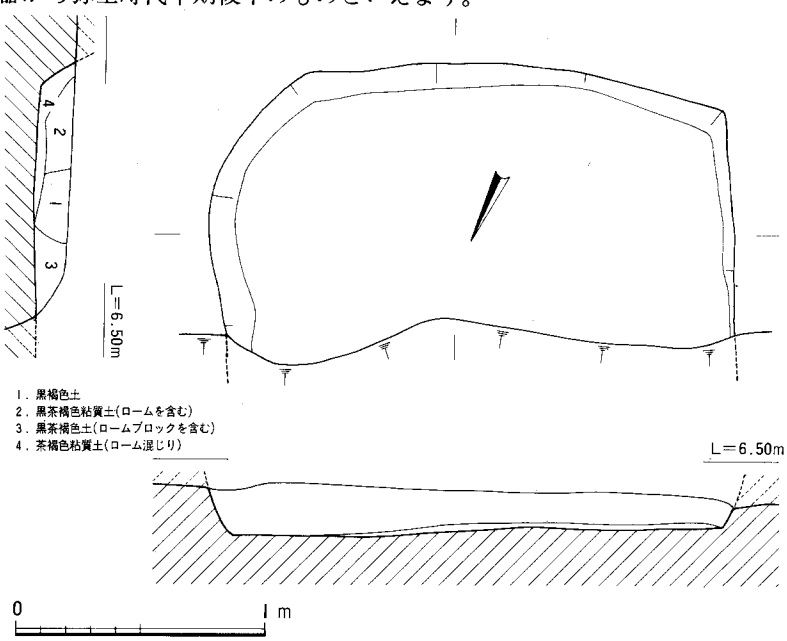


Fig.21　第６号土壙（SK－06）実測図および土層断面図

址の床状をなしている。遺物としては、弥生時代中期前半から中期後半の甕形土器などの土器片が少量出土したのみである。

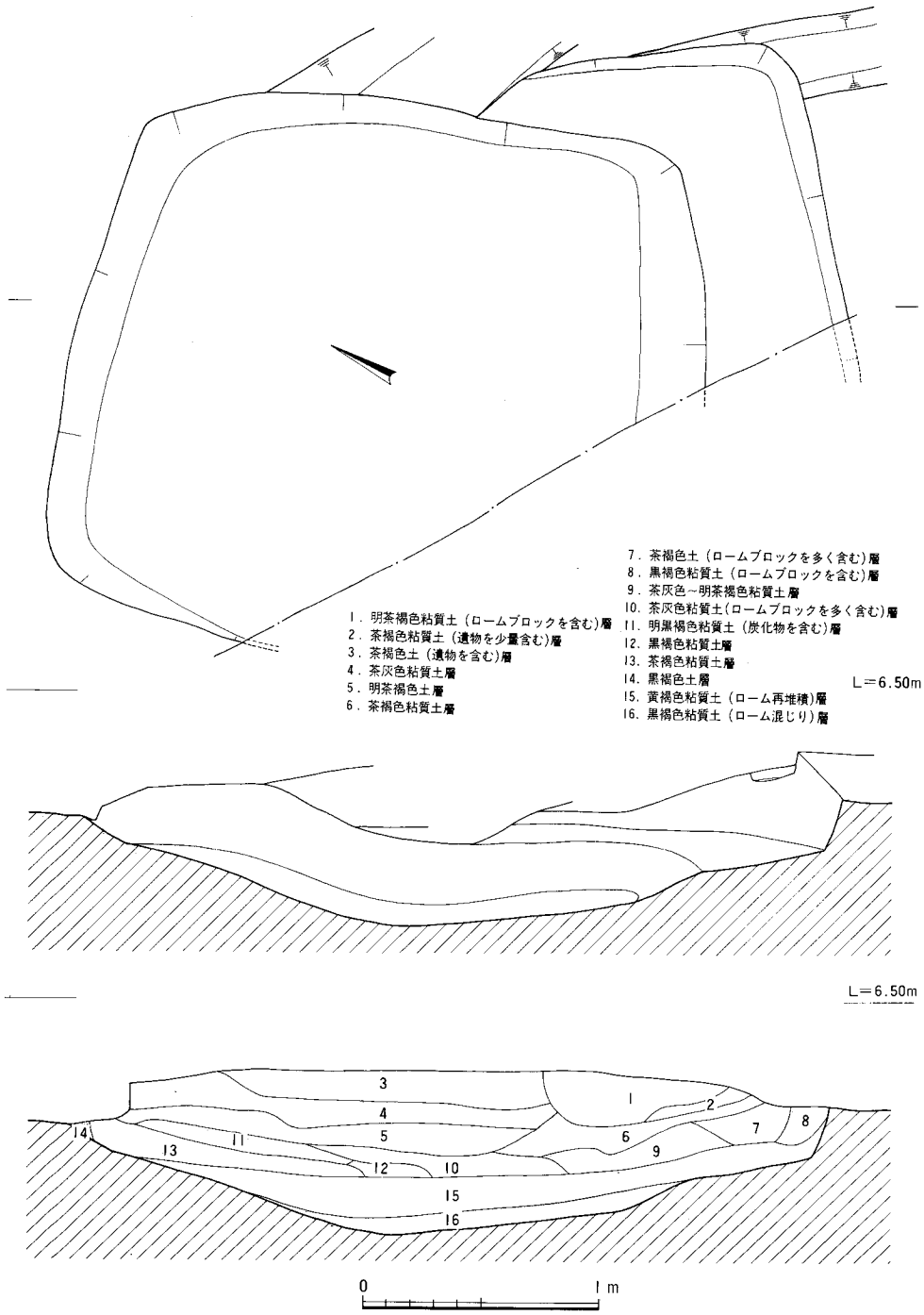


Fig.22　第７号土壙（SK－07）実測図および土層断面図

SK－07 (Fig.22・23)

本土壙は、調査区の北西端に位置し、後世の柱穴や第13号溝（SD－13）・攪乱溝に切られている。

2.2×2.7cm前後の隅丸長方形のプランをもち、68cmの遺存状態をもっている。覆土は断面図で示したような堆積状態をもち、床は皿状をなしている。2.2m前後の2基の土壙の切り合いの可能性があるが、床面の段がつくところからの立ち上がりがみられないため、2段掘りになっていたと考えられる。出土遺物としては、甕形土器・壺形土器などの土器片がまとまった量出土したほか、石庖丁・片刃石斧片・黒曜石製の剝片・削片・残核が出土した。79～82・84～87は甕形土器、83・88・89は壺形土器、70は器台である。79は38.4cm、80は30cm、81は31.8cm、82は25.5cmの口径をもち、84は7.2cm、85は10cm、86は18.3cm、87は8.4cmの底径をもっている。79～82は逆L字状の口縁部をもち、79は口縁部下に三角凸帯を巡らせている。84は上げ底、85・86はやや上げ底、87は平底である。83は無頸壺で、直行する口縁端部は凹んでいる。器表から口縁部は丹塗りで、内面に丹垂れがみられる。88は平底、89はやや上げ底で、器表面は丹塗りである。91は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の半月形石庖丁で、敲打整形後研磨を加え、表裏から穿孔している。紐通し孔間は2.3cmである。

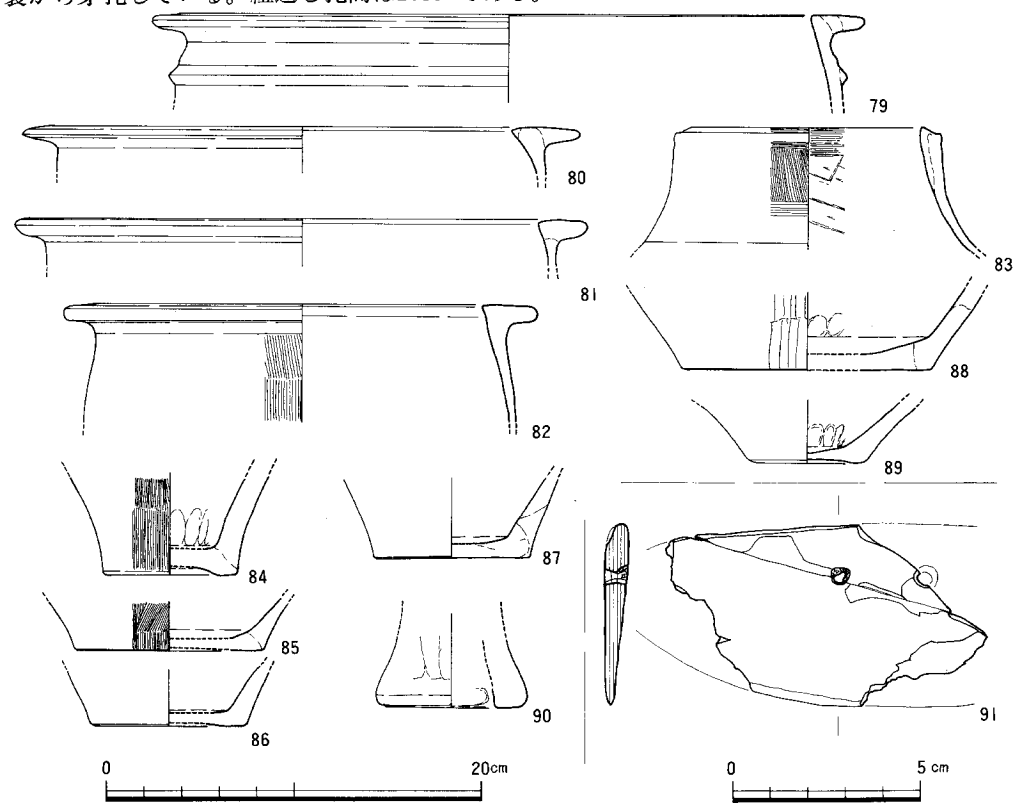
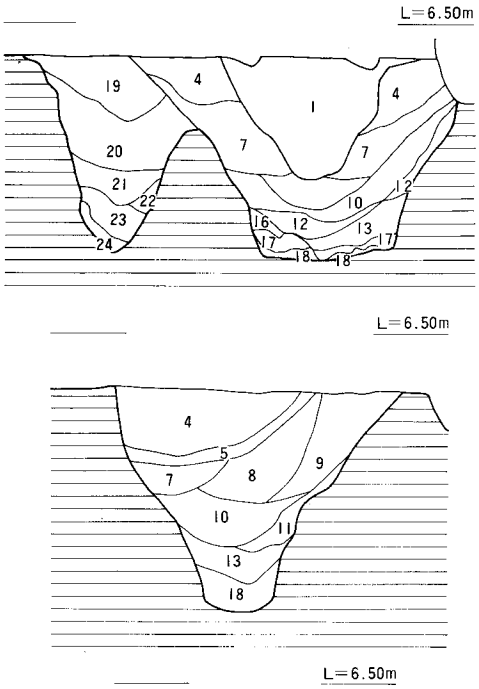


Fig.23　第7号土壙（SK－07）出土遺物実測図

本土壙は、出土遺物から弥生時代中期後半のものといえよう。

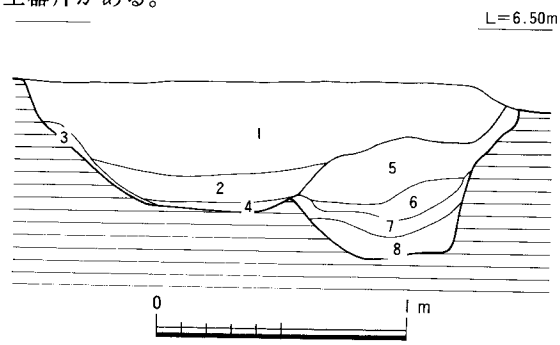
SK－14

本土壙は、調査区の南側に位置し、後世の柱穴・攪乱溝に切られているほか、削平を受けている。一辺2.7m前後の隅丸方形プランをもつと考えられる。約5m前後の遺存状態をもち、床面は叩きしめられており、竪穴住居址の床状をなしている。出土遺物としては、少量の弥生時代の土器片がある。



1. 攪乱
2. 暗茶褐色土層
3. 暗茶褐色粘質土層
4. 茶褐色土(ロームブロックを含む、遺物を多量に含む)層
5. 黄褐色粘質土層
6. 淡茶褐色土(遺物を含む)層
7. 暗茶褐色土(ローム混り、遺物を含む)層
8. 黒褐色土(遺物を含む)層
9. 茶褐色粘質土層
10. 黒褐色粘質土層
11. 暗黒褐色土(遺物を多量に含む)層
12. 暗褐色粘質土(ロームを含む)層
13. 茶褐色粘質土(ロームブロックを含む)層
14. 暗褐色粘質土(ローム混り)層
15. 黒褐色粘質土(ローム混り)層
16. 黒色粘質土(ローム・小礫を含む)層
17. 黒色粘質土層
18. 地山再堆積層
19. 暗茶褐色土(ローム混り)層
20. 茶褐色粘質土(黒色土を含む)層
21. 暗茶褐色土層
22. 黒褐色粘質土層
23. 黒色粘質土層
24. 黒褐色粘質土(ローム混り)層

Fig.24　第2号溝（SD－02）土層断面図



1. 茶褐色弱粘土質土（土器片を含む）層
2. 茶灰色粘質土（土器片を含む）層
3. 茶褐色粘質土（ロームブロックをかなり含む）層
4. 暗茶褐色粘質土（土器片を含む）
5. 茶灰色土(暗茶褐色砂質土が混入し、ロームを少量含み、土器片を含む)層
6. 茶灰色弱粘質土（土器片を含む）層
7. 暗茶褐色粘質土（ロームをやや多く含み、土器片を少量含む）層
8. 黒褐色粘質土（ロームを含み、土器片を含む）層

Fig.25　第3号溝（SD－03）土層断面図

SK－17

本土壙は、調査区東側の中央部に位置しており、攪乱溝によって切られている。長軸1.1m、短軸0.8mの隅丸長方形に近い楕円形状のプランをもち、1.07mの遺存である。鳥栖ロームを掘り抜き、八女

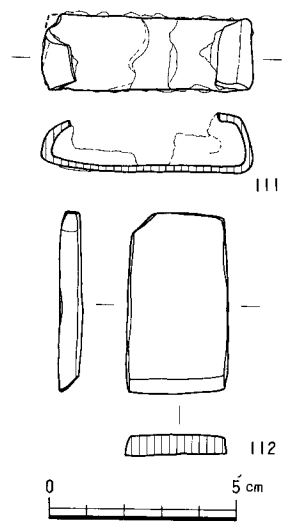


Fig.26　第3号溝（SD－03）出土遺物実測図（1）

粘土層まで掘り込み、床面はほぼ平坦で土壙墓状をなしている。出土遺物は、弥生時代中期後半の土器片がある。

SK－26

本土壙は、調査区のほぼ中央に位置し、後世の柱穴・第8号竪穴住居址（SC－08）、第2号溝（SD－02）・攪乱溝に切られている。1.5×4mの隅丸長方形のプランをもち、10～30cmの遺存である。床面は皿状をなしぼこぼこしている。出土土器としては、弥生時代中期の甕形土器・壺形土器などの土器片がある。

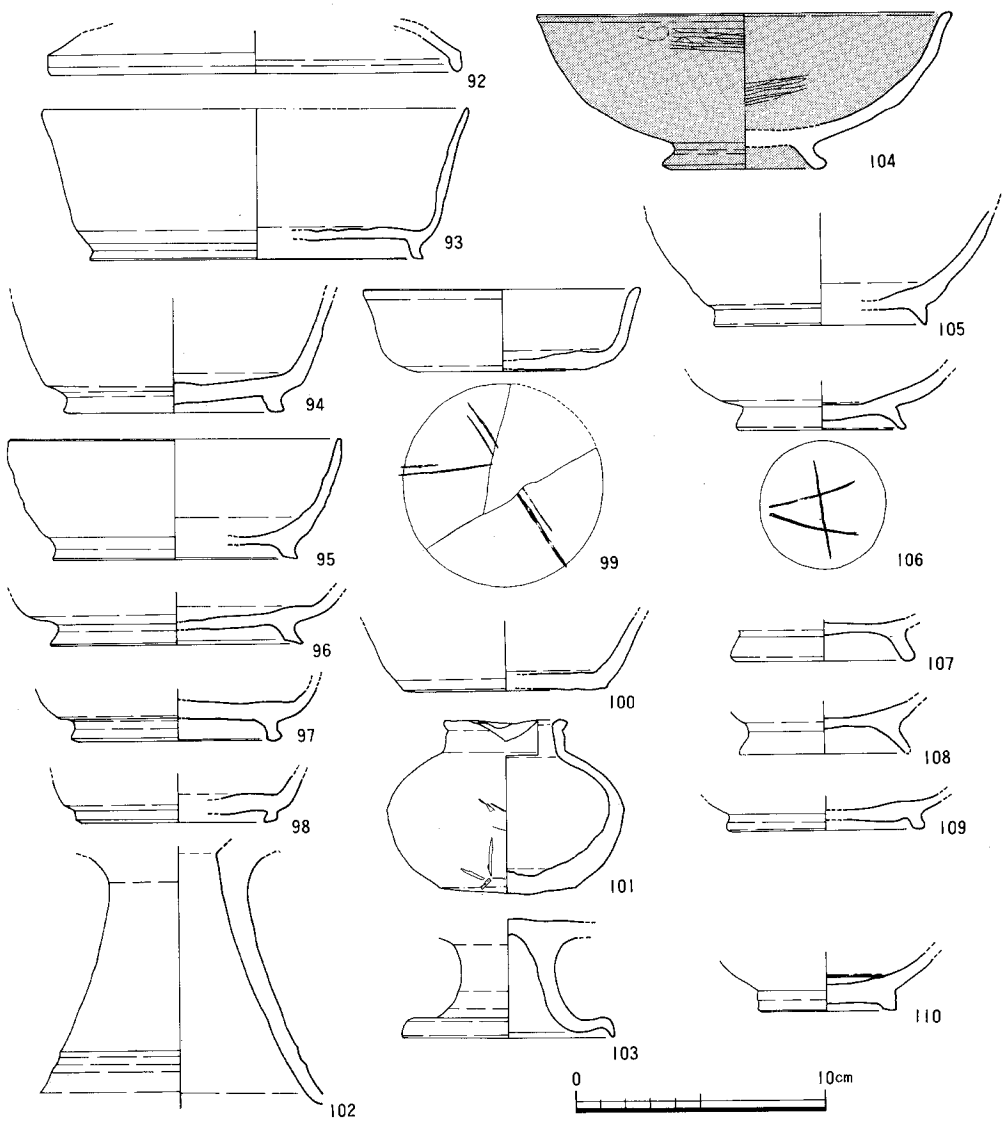


Fig.27　第3号溝（SD－03）出土遺物実測図（2）

4） 溝状遺構（SD）

SD－02 (Fig.24)

本溝は、調査区の南側に位置し、後世の柱穴・攪乱壙に切られ、第4号竪穴住居址(SC－04)・第20号掘立柱建物(SB－20)を切っている。幅1m前後で、ゆるく弧状をなしている。鳥栖ロームを掘り抜き八女粘土層まで達しており、断面は逆L字状をなし、90cm前後の遺存状態を示し、西側では2条となり北側の方が切っている。覆土の茶褐色土・黒褐色土に遺物を多く含んでいる。出土遺物としては、80%以上が弥生時代中期から後期の土器であるが、須恵器の坏身・坏蓋・大形の甕の破片を含んでいる。

本溝は、出土須恵器から6世紀後半のものといえよう。

SD－03 (Fig.25～27)

本溝は、調査区の南側で検出し、攪乱壙に切られているが、本調査地点検出のすべての遺構を切っておりもっとも新しい時期のものといえよう。

本溝は、2m前後の幅をもちS－70°－Wで直線的に延びている。鳥栖ロームの最下部まで掘り込んでおり、2条が切り合っているが、断面形は逆台形状をなしている。

本溝も出土遺物は、弥生時代中期から後期の土器が大半をしめているが、須恵器・土師器などが一定量出土した。92～103は須恵器、104は黒色土器、105～109は土師器、110は緑釉陶器である。92は返しのない坏蓋で、口径は16.6cm、94～98は高台付坏で、94は口径17.2cm、器高6cm、

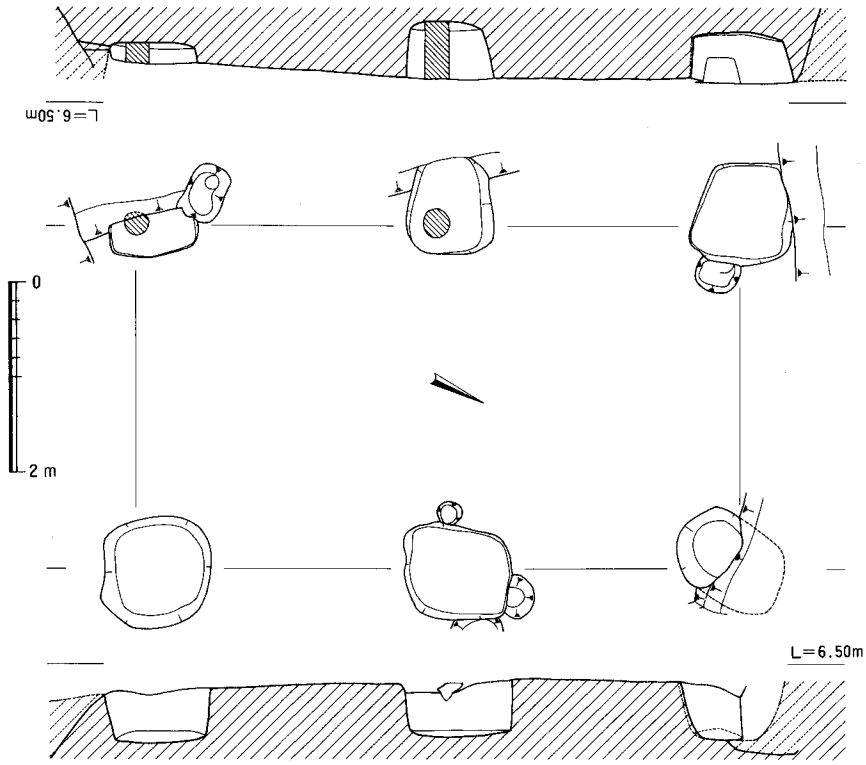


Fig.28　第20号掘立柱建物（SB－20）実測図

底径13.4cmである。95は口径13.4cm、器高4.8cm、底径9.8cmである。94は8.8cm、96は10.1cm、97は8.4cm、98は8cmの底径をもっている。99・100は無高台の坏で、99の底部にはヘラ記号がみられる。99は口径11.2cm、器高3.3cm、底径8cmで、100の底径は8.2cmである。101は直口する口縁部をもつ壺で、口縁端部は丸みをもち、1ヶ所、片口状に垂れている。口径5cm、底径5.5cm。102・103は高坏。104は高台付埦の黒色土器B類で、内外面とも横方向の丁寧なミガキが施されている。口径16.7cm、器高6.2cm、底径6.6cm。105～109は高台坏の坏で、105は8.5cm、106は6.8cm、107は7.4cm、108は8cmの底径をもっている。110は胎土が白灰色の磁器質の高台坏緑釉陶器埦で、見込みには円形の目跡が残っており、器内外面は淡緑色で光沢をもっている。底径5.6cm。111は幅2cm前後、厚さ1.5mm～3mmでせめ金具状の鉄器である。112は扁平片刃石斧で、灰白色の堆積岩を素材とし、敲打、剥離加工後丁寧な研磨を加え、51.5°の角度をもつ刃部を造り出している。器長4.75cm、幅2.7cm、最大厚0.6cm。

本溝は、2条切りあっているがほぼ同じところに位置すること、新しいものがやや広くなっていること、出土土器に8世紀前半から10世紀前半のものがみられることから、さらえや、掘り直しを加えながら約2世紀にわたって使用されたものと考えられる。

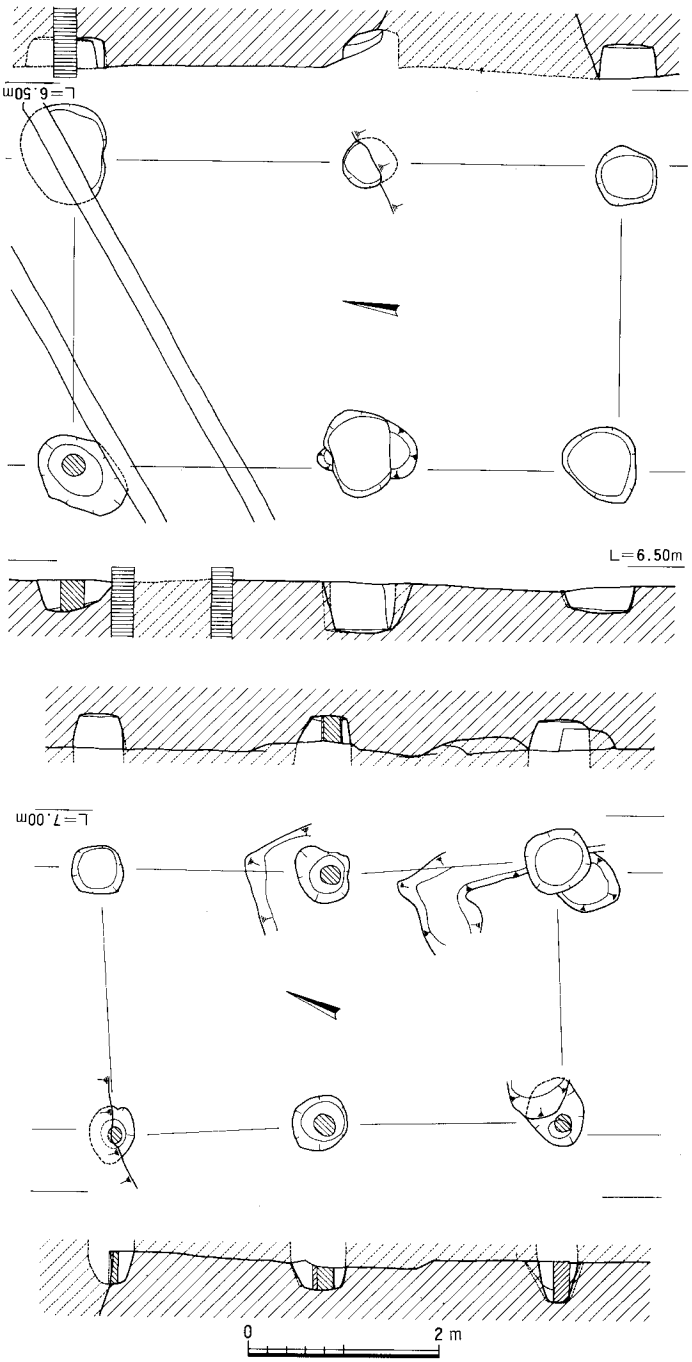


Fig.29　第21・22号掘立柱建物（SB－21・22）実測図

その他の溝

本調査地点では、SD－02・03のほかに、SD－11・13の幅50cm前後で、10cm前後の遺存をもつU字溝を検出した。SD－11は暗茶褐色土を覆土とし、S－75°－Wで直線的に延びている。SD－13は暗灰色シルトを覆土とし、すべての遺構を切っている。前者は古墳時代、後者は古代から中世のものか。

5）　掘立柱建物（SB）および柵列（SA）（Fig.28～30）

本調査地点では、700個弱の柱穴を検出し、そのうちの70%に15～30cmの柱痕跡を確認した。掘立柱建物として確認できたのは9棟である。なお、柵列を1条検出した。

桁行の方位は、SB－25がほぼ磁北のN－10°－Wで、SB－21がN－10.5°－W、SA－28がN－11.5°－W、SB－30がN－12°－Wと11°前後西に振れており、SB－20がN－25.5°－W、SB－22がN－22.5°－W、SB－29がN－20°－W、SB－22がN－22.5°－W、SB－29がN－20°－W、SB－31がN－21°－Wと23°前後西に振れている。SB－23はN－88°－W、SB－24はS－91°－Wとほぼ東西に近い方位をもっている。SB－20～24が1×2間で、SB－25が1×3間、SB－29・30が2×2間の総柱の建物である。

建物の規模はSB－20がもっとも大きく、桁行6.3m、梁行3.6mで桁行の柱間は3.15mを測る。柱穴の掘り方も大きく、1m前後の

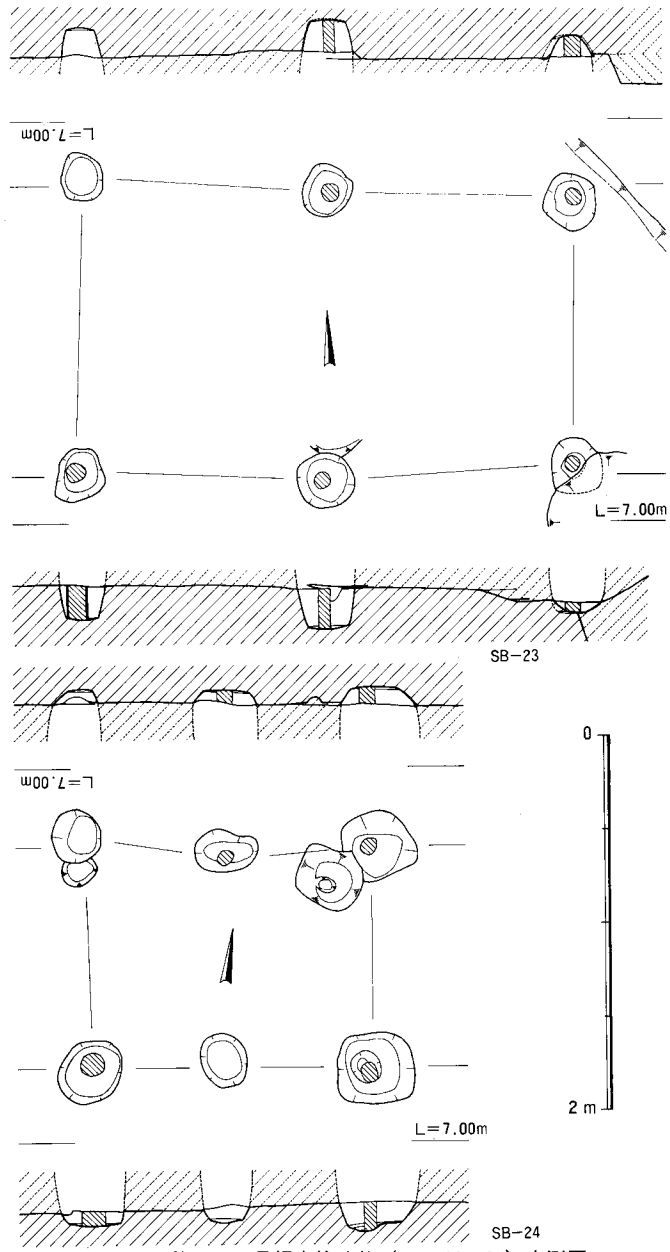


Fig.30　第23・24号掘立柱建物（SB－23・24）実測図

隅丸方形をなし55cm前後遺存しており、柱痕跡が25cm前後ある。なお、SB－20はもう1間南へ延び、1×3間となる可能性がある。SB－21は桁行5.8cm、梁行3.2cmで、柱穴掘り方は80cm前後不整形で、柱痕跡は25cm前後である。SB－22・23・31は、桁行が4.9m・4.8m・4.5mで、梁行が2.8m・3m・2.7mで、柱穴掘り方は60cm前後の隅丸方形で、柱痕跡は20cm・17cm・20cm前後とほぼ同規模の建物である。SB－25は桁行7.05m・柱間2.35m・梁行2.65mで柱穴掘り方は65cm前後の隅丸方形で、柱痕跡は20cm前後である。SB－24は桁行2.96m、梁行2.4mで60cm前後の隅丸方形の柱穴掘り方をもち、柱痕跡は15cmから24cmである。SB－29は5m×5mの総柱建物で柱間は2.5m、柱穴掘り方は70cm前後の隅丸方形をなし、柱痕跡は20cm前後である。SB－30は柱間1.9mの総柱建物で柱穴掘り方は30cm前後の不整円形をなし、柱痕跡は18cmである。SA－28は柱間1.25mで6間分検出した。柱穴掘り方は30cm前後の円形で、柱痕跡は18cm前後である。

建物群の時期は出土遺物からみていくと、SA－28・SB－29に須恵器の破片があるほかは、弥生時代中期中葉から中期後葉の弥生土器片が柱穴掘り方から出土している。切り合い関係でみていくとSB－20が第2・3号溝とSB－31に切られ、SB－31は第2号溝とSA－28に切られている。SA－28は第2号溝を切っている。SB－29は第8号竪穴住居址と第5号土壙を切っている。SB－21～25はそれぞれ切り合い関係にある。図式化すると以下の通りである。

$$\text{SB}-21 > \text{SB}-25 > \begin{matrix}\text{SB}-22 > \text{SB}-23 \\ \text{SB}-24\end{matrix}$$

SB－29は柱穴掘り方の出土土器に6世紀後半の須恵器が含まれていること、第3号溝と同方位をもっていることから、7世紀から9世紀の間のものといえよう。SA－28は古墳時代後半期から。SB－30も古墳時代。SB－20～25は弥生時代後期から古墳時代初頭のものと考えられる。

3．まとめ

本調査地点では、8基の竪穴住居址、9棟の掘立柱建物、1条の柵列、7基の土壙、2基の井戸、4条の溝と多数の柱穴を検出した。本地点検出の遺構は次のⅣ期に分けられる。

第Ⅰ期は、弥生時代中期中葉から後期前半の時期で、SC－04・10・12・15・19・27と7基の土壙とSE－01・16がある。

第Ⅱ期は、弥生時代後期後半から古墳時代前半期で、SC－08・09・10がある。

第Ⅲ期は、古墳時代後半期でSD－02・11・SA－28・SB－30がある。

第Ⅳ期は、奈良時代から平安時代で、SD－03・SB－29があり、SD－13は中世か。

掘立柱建物の7棟は、弥生時代後期から古墳時代の初頭にかけてのものと考えられ、SB－20・23は第Ⅰ期、SB－21・22・24・25は第Ⅱ期と考えられる。

本調査地点では、先土器時代のナイフ形石器や柱穴・土壙から多くの弥生土器が出土しているが、これらの資料については、今後機会をみつけて紹介していくことにする。

第４章　第24次調査地点

１．調査の概要

対象地は博多区博多駅南３丁目37に所在し、駐車場として使用されていた土地であった。この対象地の西約50ｍの地点は1979～1980年に発掘調査が行なわれた第４次調査地点であり、弥生時代の貯蔵穴、甕棺墓などが検出されている。本調査地点は近接地であり、関連遺跡の拡がりの予測される場所であった。

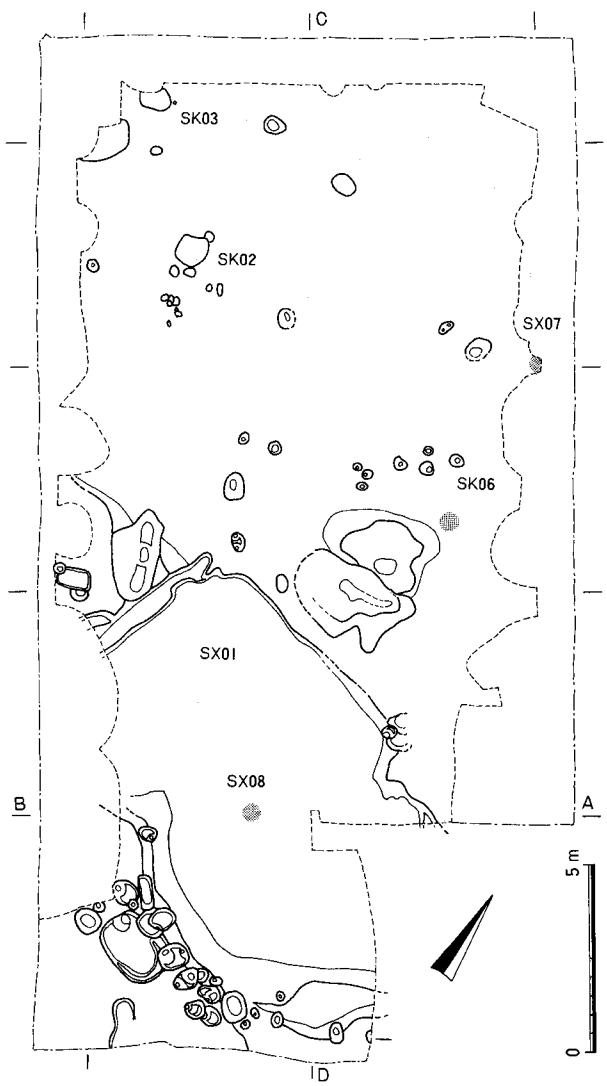


Fig.31　第24次調査地点平面図

株式会社松本医科器械から、対象地における会社ビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査の届出を受けて、1989年１月24日に試掘調査を実施した。その結果、敷地内に洪積台地部と低地に拡がる弥生時代包含層を確認した。この結果に基づき埋蔵文化財の保存策に関する協議を進めたが、工事に関わる部分の破壊は避けられず、発掘調査を行ない記録に残すこととなった。

三方に建物があり、前面が道路のために困難な作業となった。包含層は現地表より1.5～2.0ｍ下位にあり、湧水が多い。そのため周囲に鋼矢板を設置し、常時ポンプで排水を続けながら調査した。

調査は1989年５月23日から同年６月19日に行なった。調査面積は353㎡であった。

なお、調査には株式会社松本医科器械のご理解とご協力をいただいた。記して感謝したい。

調査方法

対象地は現在の地割に沿ってＮ－58°

40′－Wに長軸をもつ長方形の範囲である。幅約13m、長さ31mである。包含層直上まで重機で掘り下げ、以下は人力で掘り下げた。調査用グリットはこの地割に沿って中央に主軸線を設け、6mを基本単位とする区画を設けた。各グリットの名称は北西端を1区とし右下方向への千鳥状に付し、南東端を12区とした。また、土層観察用のベルトは遺存状態の良い場所に任意に設け、主軸線に沿って1条、直行方向に3条設定し、土層観察と記録を行った。なお、本調査中に北側隣地で第25次調査が開始されることになった。遺構などの連続が予測されたため、共通基準による区画を延長設定して対応した。

地形と基本層位

調査前の標高は約5.5mであった。表土直下は造成土であり、約0.7～1.0mの層厚がある。その直下は造成以前の水田土壌であり上面の標高約4.3mを測る。水田耕土下の床土の形成は悪く、水はけの悪さを示している。水田土壌を除去すると調査区南西端で基盤のトスローム層が現われる。最上面は標高約4.6mである。この部分が洪積台地の端部にあたる。これから北側に地山面が急激に下がり、谷部に達する。谷底面は水成作用を受けた火山灰土であり、緩かに北側に下るもののほぼ平坦な地形となる。また、調査区内の東西壁側にこの地山面が高まり、先の洪積台地に続くとみられた。つまり、本調査区は、最初に地山が検出された南西端付近を谷頭とし、ほぼ北に開く小さな谷地形の最深部である。

この谷地形の埋土は大まかに2層に分かれ何れも遺物包含層となっている。上部は茶褐色粘質土であり、クラックが著しい。ほぼ無層理であるが、下位にしたがい暗色が増す。最下面は南側で標高4.3m、北側で4.0mを測る。下部は漆黒色泥質土であり、植物遺体を多量に含む。下面は地山に接し、明瞭に区分される。最下面は南側で標高3.9m、北側で3.6mを測る。なお、下部の漆黒色泥質土は、中ほどに草や葉などの植物遺体が面的拡がりを見せる部分があり、上下に二分される。

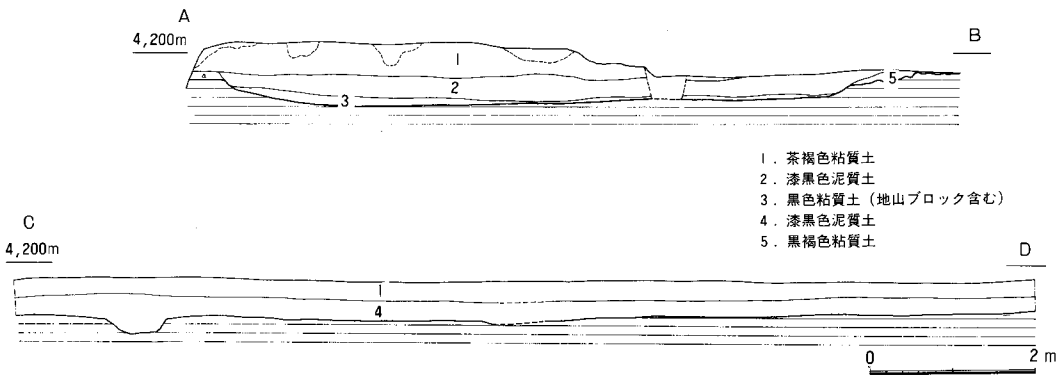


Fig.32　第24次調査地点土層断面図

2．調査の記録

調査は主にグリットごとに掘り下げ、包含層中の遺物取り上げと遺構検出を並行して進めた。上部の包含層では弥生時代中期の土器群が3ケ所でまとまって出土した。出土状態から何らかの掘方が予測されたが、検出できなかった。(SX－06～07)。

下部の包含層中には多量の遺物が出土した。しかし、一定範囲に集中する傾向はみられず、遺構として取り上げられるものではなかった。ただこの5－6区境界付近の漆黒色土上部に、滑石製有孔石製品が4個集中して出土した。また、6区でも土器が集中して出土した (SX06)。これらの掘方は検出できなかったが、その集中は人為的産物とみられる。谷部では少数の遺構を検出した。遺構には直径1m以下の土壙 (SK02、03) と浅いピット20余りがある。また、調査区北東隅部で杭痕跡を数ケ所確認したが性格は不明である。さらに谷部南端の谷頭部分に大きな面積をもつ「水溜状遺構」SX01を検出した。ただし、この遺構については一連の遺構としての判断が遅れ、遺構内遺物の多くを包含層出土として取り上げてしまった。この遺構の北側の隣接して、皿状の落ち込みと地山の低い隆起部分を検出したが、人為的産物かは明らかでない。

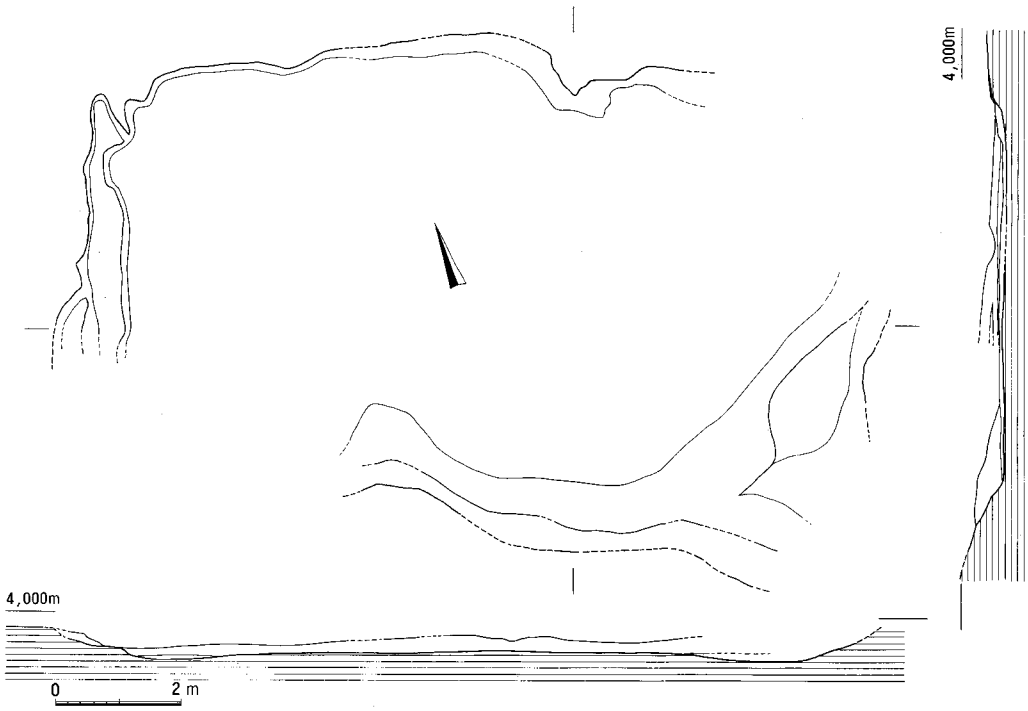


Fig.33　水溜状遺構SX－01平面・断面図

調査区南西端の洪積台地端部に多数の落ち込みを検出した。しかし、これらは不整形であり内部で樹枝状に分かれるなど、遺構とは認め難い。樹根が動物生痕であろうと考えられた。

1) 水溜状遺構SX01

調査区内7～10区で検出し、東端は調査区外にのびる。主軸を約N－70°－Wに取る隅丸長方形の平面形を呈する。東、西隅部の形状は不明である。規模は長さ12.5m、幅約7.0mであり、床面はほぼ平坦であるが、中央がやや高く、周囲がやや低くなる。深さは0.2～0.3mである。長軸壁の1ケ所づつに地山造り出しによる台形の突出部がある。これは南側で幅約2m、長さ1m、北側で幅1.5m、長さ0.8mを測る。西側の短軸壁では幅0.6mの段状の施設があり、床面と10cmの比高差がある。また本遺構の北西隅部に接して両側に、不整形の地山の落ちと高まりがある。明瞭な平面形として線引きが困難であるが、その位置や、分布状態から関連する遺構の可能性がある。

本遺構の床面にはほぼ密着する様に木製農工具や、大形の石器類が多数出土した。

遺構の性格は不明であるが、面積が80m²以上と広く、木器の貯蔵用施設として利用されたとみられる点や、谷頭の台地端に設けられていることから、湧水や雨水を集約貯水する「水溜」状の施設とみられる。

2) 土壙

SK－02 (Fig.34・35)　3区中央に検出した。南北0.95m、東西0.8mをの不整円形を呈する土壙である。断面は逆台形であり深さ約15cmである。床面はほぼ平坦であり南側に径30cm、深さ10cmの掘方がある。土壙内埋土は包含層と同じ漆黒色土である。床面より10cm上位の覆土内

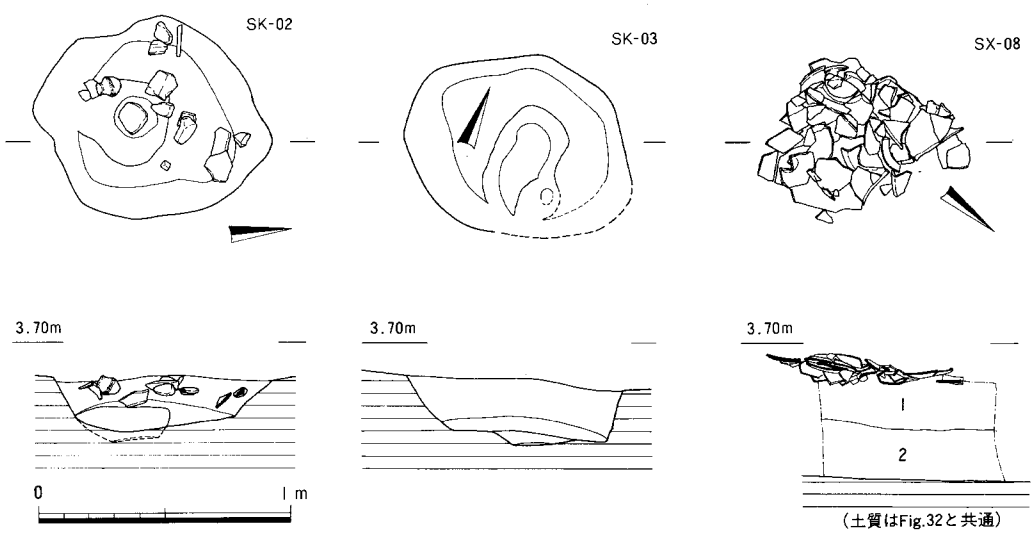


Fig.34　土壙SK－02・03、SX－08平面・断面図

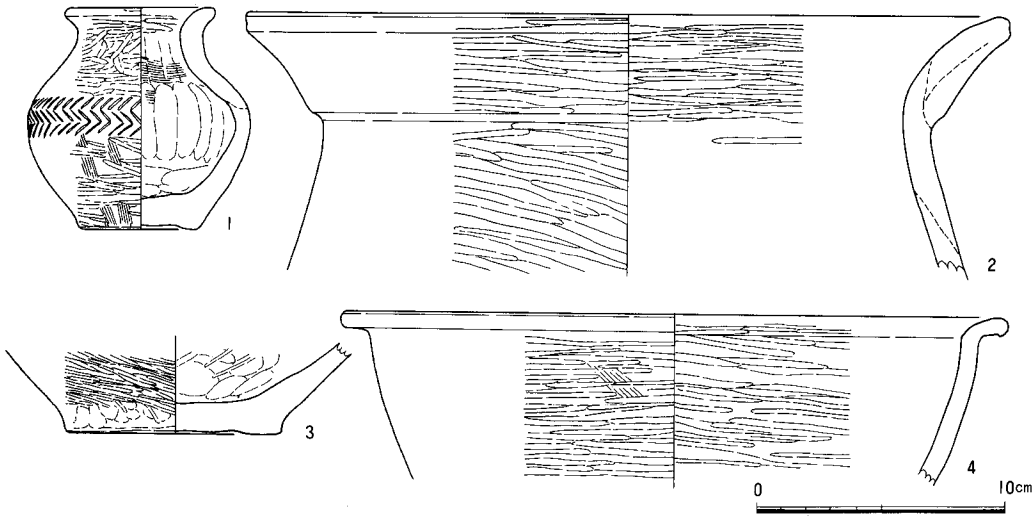


Fig.35　SK－02出土遺物

から土器、礫などが出土した。土器には壺（1～3）と鉢（4）がある。1は完形品であり、器高8.8cm、口径6.0cmの小型品である。外面を丁寧に磨いた後ヘラ描き羽状文を施す。2は口縁部の破片であり、口径約30.5cmである。口縁部を肥厚させ、段を設けている。3は底部であり底径8.6cmを測る。4は口径28.6cmに復元される。やや深めの器形である。これらから、板付II式に位置付けられる。

SK－03 (Fig.34)　1区北西端にあり、西側を攪乱で壊される。南北0.75cm、東西0.95cmを測る。深さは約20cmであり、断面は逆台形を呈する。中央に南北45cm、東西25cm、深さ5cmの掘方がある。土壙内埋土は包含層と同じ漆黒色土である。少量の土器片が出土したのみであり、時期は不明である。

SX－06 (Fig.36)　6区中央の漆黒土層下部において検出した。明確な掘方は検出できなかった直径0.8cmの範囲内に土器片の集中があった。土器には甕（5）と壺（6）がある。5は23.2cmと小型であり、口縁部を肥厚させ段を設ける。口唇部は如意形に外反し、刻み目が入る。外面には煤が付着している。6は胴部中央を欠く。器高約30cm、口径24.4cm、底径9cmである。口縁を肥厚させ、段を設ける。肩部はヘラ描き沈線が二条入る。板付II式に位置付けられる。

SX－07　4区と6区の境にあり、攪乱のために記録化ができなかった。茶褐色土中にあり、甕数個体分の破片からなる。全て風化が強く図化はできない。弥生中期後半とみられた。

SX－08 (Fig.34・37)　7区と9区の境にあり、SX－01の上部にある。0.8cm程の範囲に土器の集中がみられた。掘方は確認できなかった。瓢形土器（7）、甕（8～10）、器台（11）がある。7は破片であったが図上で復元した。口径約25cm、器高約40cmとなろうか。8は口径26.5cm、

器高28.5cmを測る。器台は脚端だけであるがほぼ完周する。これらは須玖II式に位置付けられる。

茶褐色粘質土層出土遺物

SX－07、08と同様の層順において少量の土器片が出土したので報告する。図化できたのは壺(12)甕(13・14)がある。12は鋤先口縁をもつ広口壺であり、口径約28cmである。肩部に二条のM字突帯があり、口縁上に粘土の剝落痕がある。13は跳上口縁となっている。須玖II式の新相に位置付けられる。

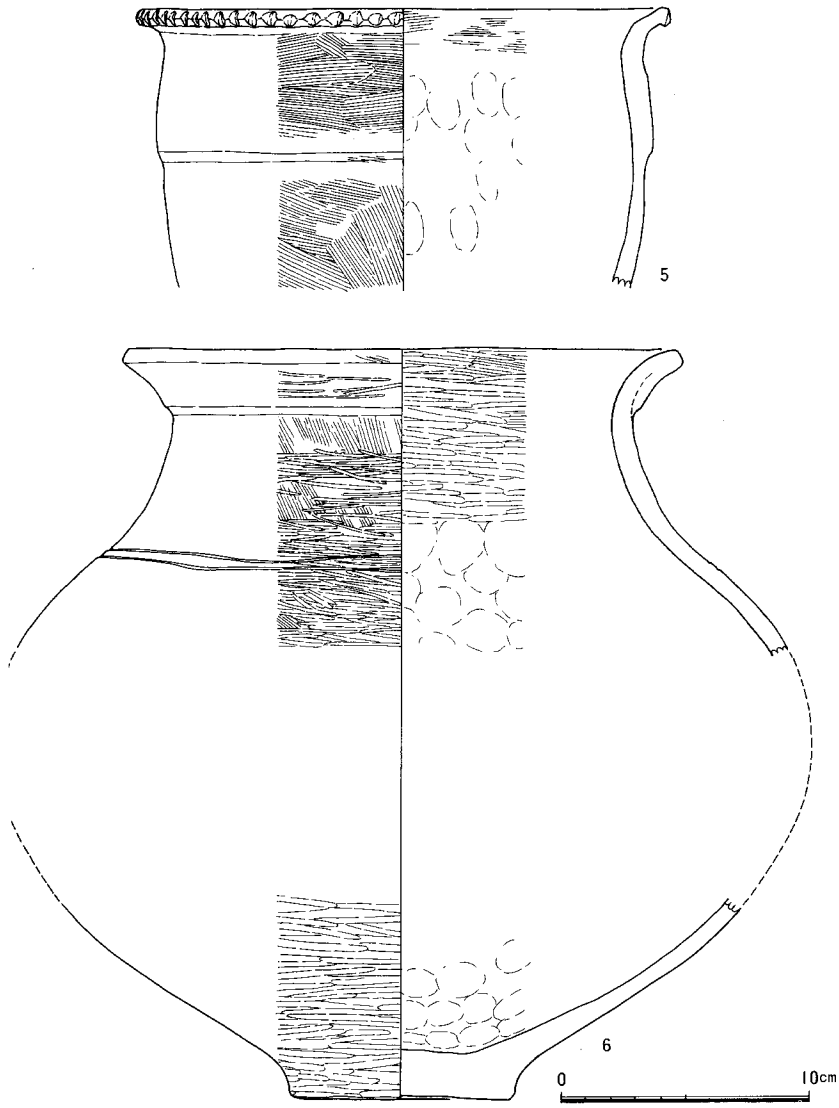


Fig.36　SX－06出土遺物

3) SX－01および包含層出土遺物

すでに触れたように、SX－01の確認が遅れ、遺構内遺物の多くを包含層出土として取り上げてしまった。ここでは確実に遺構内出土とみられるものを取り上げる(Fig.39・40)。その他の漆黒色土包含層出土のものはコンテナ50箱程度あるが、その内1～6区のものを示し(Fig.41)、報告したい。

(1) 土器

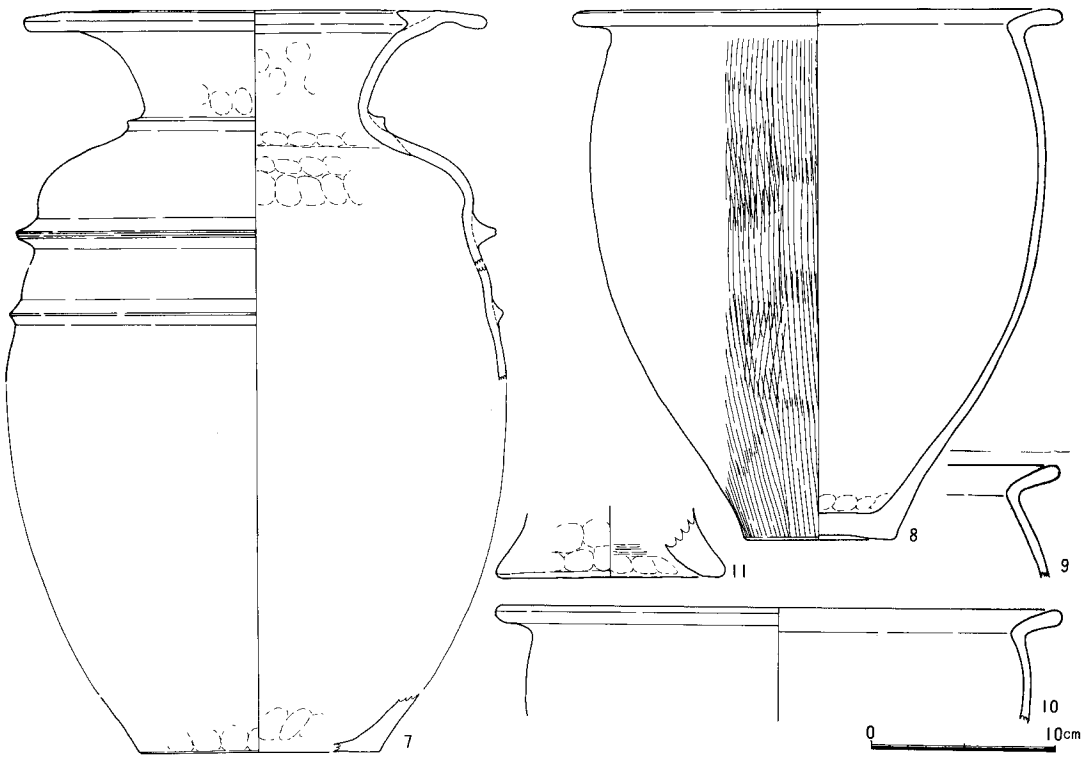


Fig.37　SX－08出土遺物

SX－01からは壺(15～20・23・26・27)、器台(21・22)、高坏（24・25)、甕（28～37）などが出土した。壺には脚付き無頸壺（15)、短頸壺（16)、広口壺（17～20）などがある。15は口径約90cmであり、４もしくは５本の脚が付く。外面は横ヘラミガキで丁寧に仕上げられている。類例はない。16は口径８cm以下の小型である。広口壺はさらに口径の小さいもの（17）と

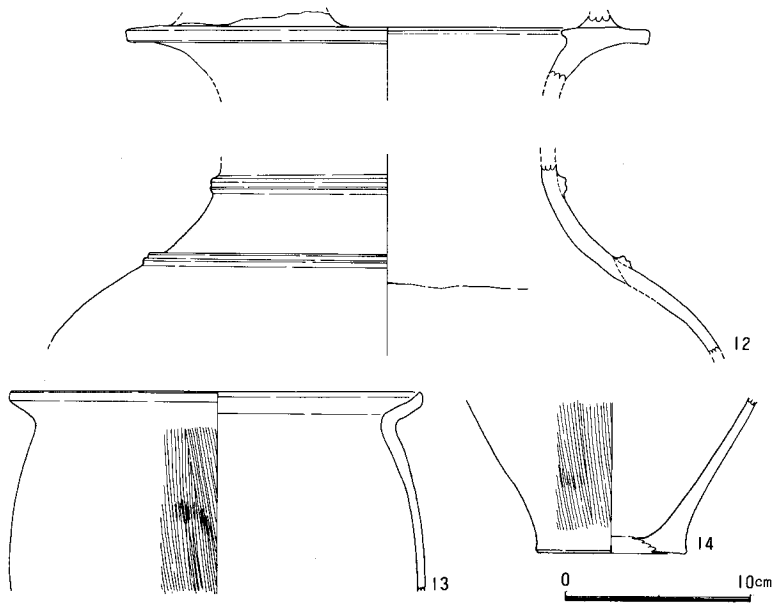


Fig.38　茶褐色粘質土出土遺物

大きいもの（18～20）に分けられる。23は特異なもので細口壺とでもしようか。口径約9cmノ厚手の口唇部をもつ。器台は中空で丁寧に造られたものと（22）、芯持ちで粗製のもの（21）がある。22は器高14cm、口径9.5cm、底径9cmを測る。24は坏部であり、口径16.5cmを測る。粘土帯で複合口縁化し、段の直下には刷毛目原体により刻み目を施す。器表の内外面に黒色顔料を施す。同一個体の破片が25次調査地点でも出土している。25は高坏脚部とみられ、底径18.5cmであり、内外面をハケ調整する。甕は口径で大型（28）、中型（29～32）、小型（33）がある。30～32は口径29～33cmであり、口唇部を外方に拡張し、頸部に一条の突帯を付ける。29と33は口径が25～26cmであり、口唇部を外方に拡張する。34～37は甕の底部である。以上の土器群は前期後葉から中期初頭のものが混在しており、遺構の時期は中期初頭に位置付けられようか。

包含層からは壺（38～46・55）、高坏（47）、甕（48～51・56）、器台（52・53）、ミニチュア（54）などがある。38～40、43・44は板付式系の壺であり、43・44は口縁部を肥厚させ、段を設ける。39・40は口縁部を肥厚、外反させている。前者は板付Ⅰ～ⅡA式、後者は板付ⅡB式に位置付けられる。38は小型の直口壺の頸部で僅かに口縁が外反する。胴部にヘラ描きの横線が入る。42は無頸壺であり、口縁直下に2ケ所の穿孔がある。42・45・46は広口壺である。45は口唇部に刻み目、口縁外方に三角突帯がつく。46は口縁内側を肥厚させ口唇部に刻み目を付ける。55は底部であり、楕円形を呈する。高坏は脚部のみであり、底径11.6cmを測る。器表に黒色顔料を塗布する。48は口縁直下に突帯を設け、口唇部と突帯に刻み目を付す。器台は芯持の小型のもの（52）、中空のもの（52）がある。後者は外面にヘラ磨きを施す。57～110は壺肩部に文様を持つ例を集成した。57～59はヘラ描きの横線を4条巡らすもの。60～67はヘラ描きの弧文を施すもの。68～84は貝殻腹縁で羽状文を施すもの。83は格子文をくわえる。85～106はヘラ描きの羽状文を施すもの。107～110はヘラ描きによる格子文などである。

(2) 石製品、土製品

石製品としては滑石製の紡錘車111・112と有孔石製品（232～236）がある。紡錘車は薄く仕上げられ、径約6cmのもの（111）と径約4.8cmのもの（112）がある。

土製品には紡錘車（113～115）、土錘（117）、投弾（118～126）、円盤（127～132）、不明品（116）がある。投弾は長さ4.5cm以上のもの（118～121）と、長さ4cm以下のもの（122～126）に二分される。円盤は土器片を再利用したものである。116は粘土を楕円形にまるめ、表面に斜位の凹線を4条設ける。裏面には板圧痕が残る。

(3) 石器

剥片石器と礫核石器がある。前者は主に黒曜石製（134～159）であり、1点のみサヌカイト製（133）がある。後者は変成岩、花崗岩、玄武岩、砂岩などを使用している。

133は石匙である。134・135は石鏃であり、136は片面調整の石錐か。137～141は加工、使用痕のある剥片であり、不定形である。142～159は石核である。自然亜角礫を素材とし、礫素材

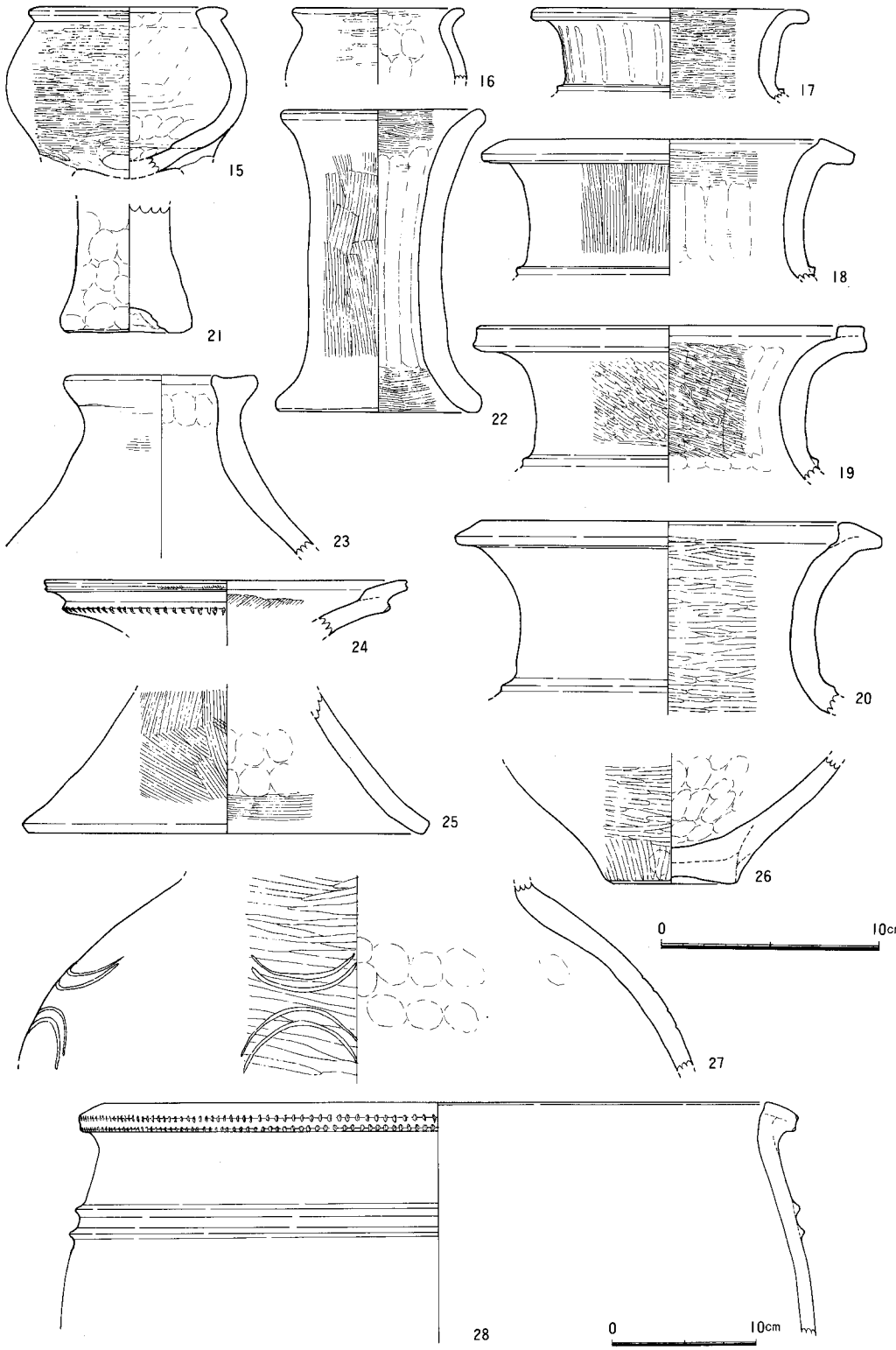


Fig.39　SX－01出土土器　1

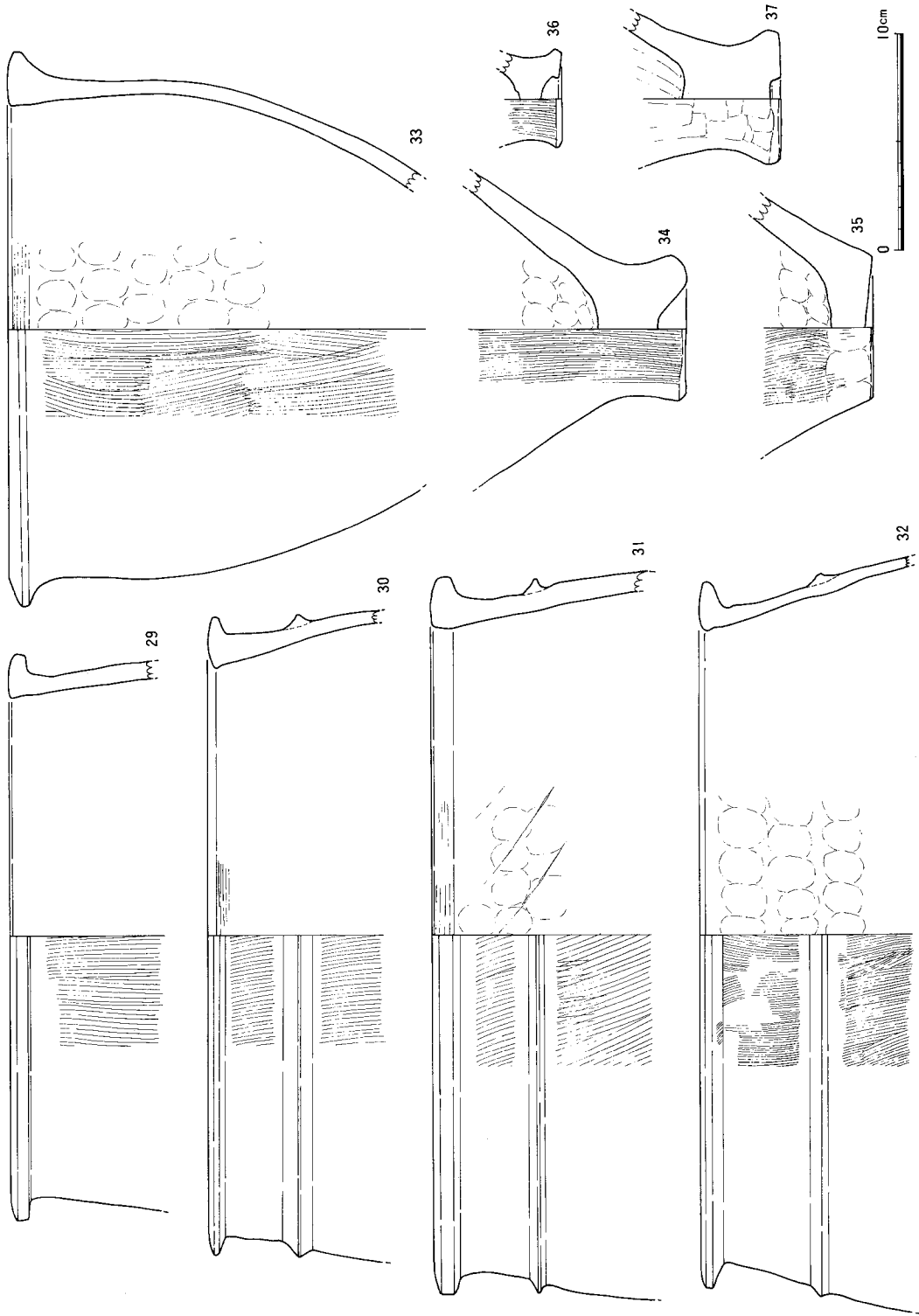


Fig.40　SX－01出土土器　2

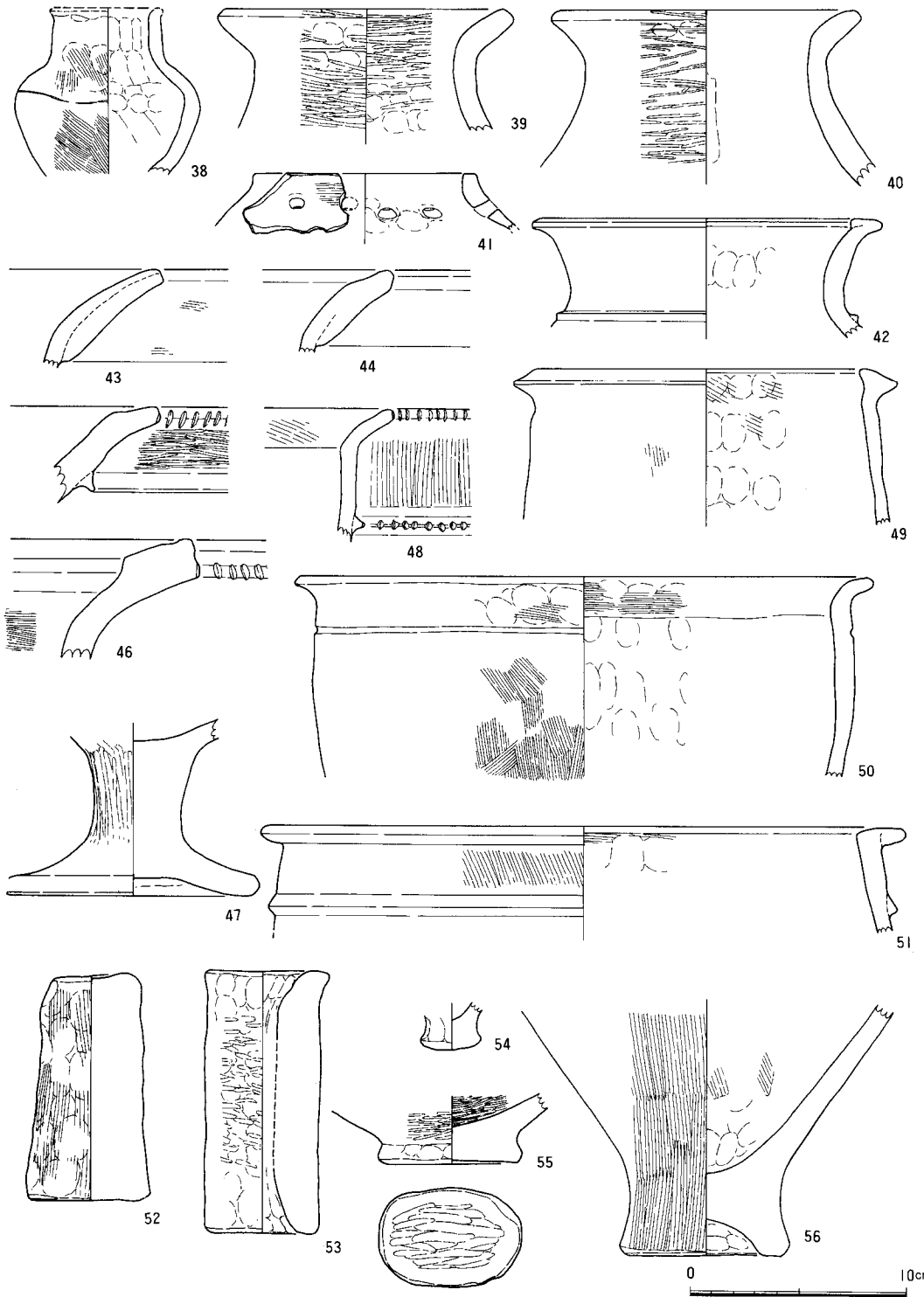


Fig.41　包含層出土遺物　I

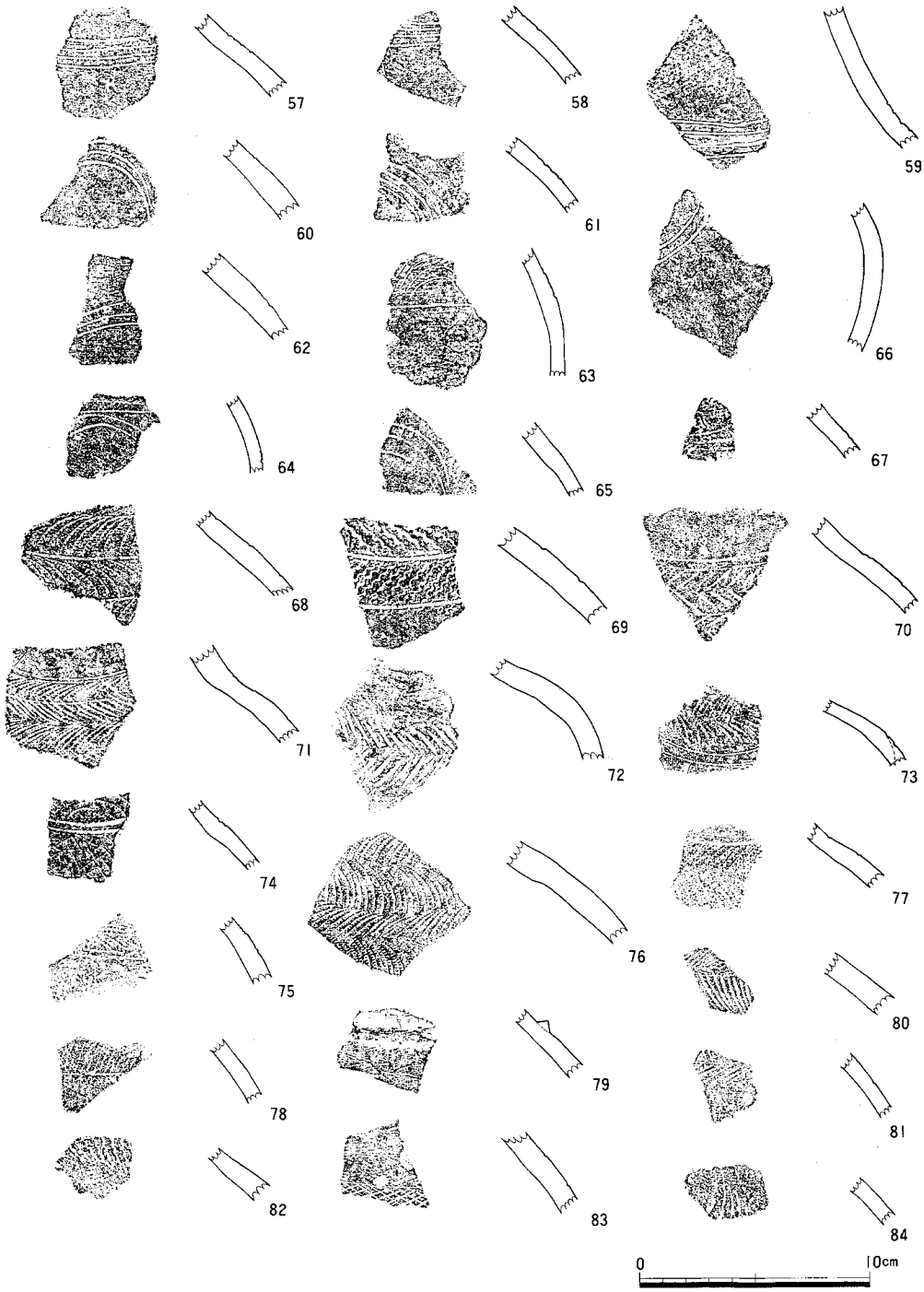


Fig.42　包含層出土遺物　2

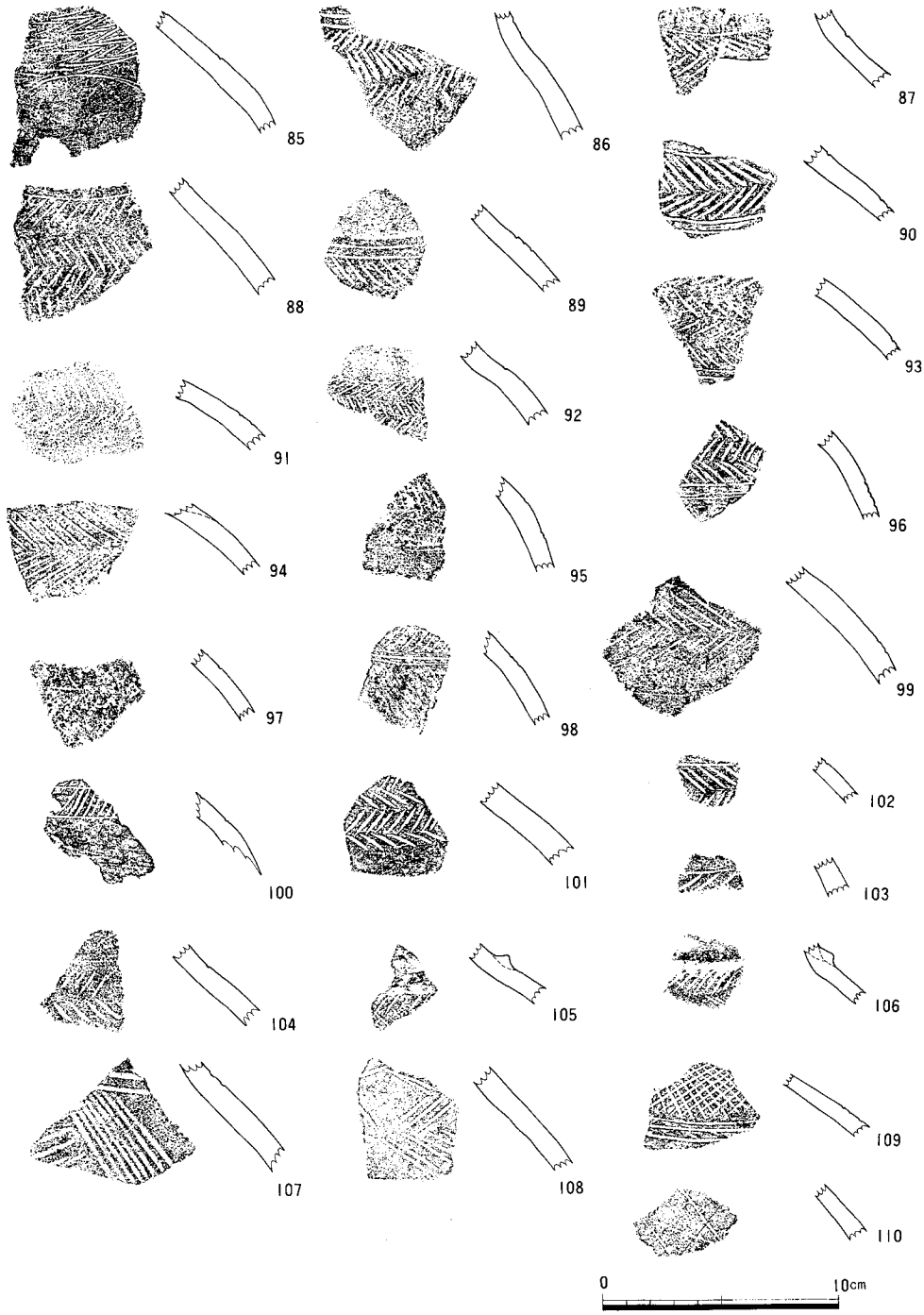


Fig.43　包含層出土遺物　3

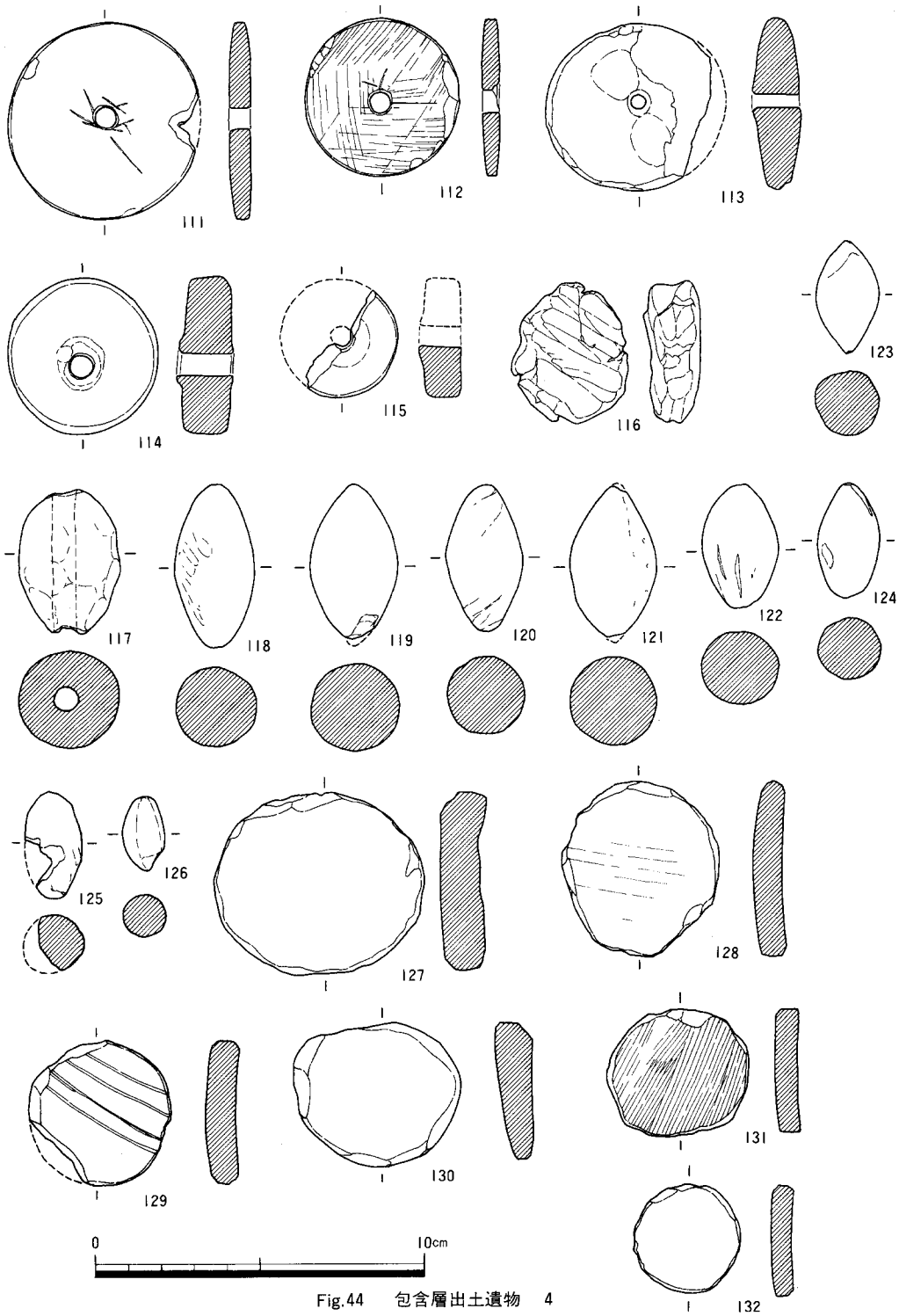


Fig.44　包含層出土遺物　4

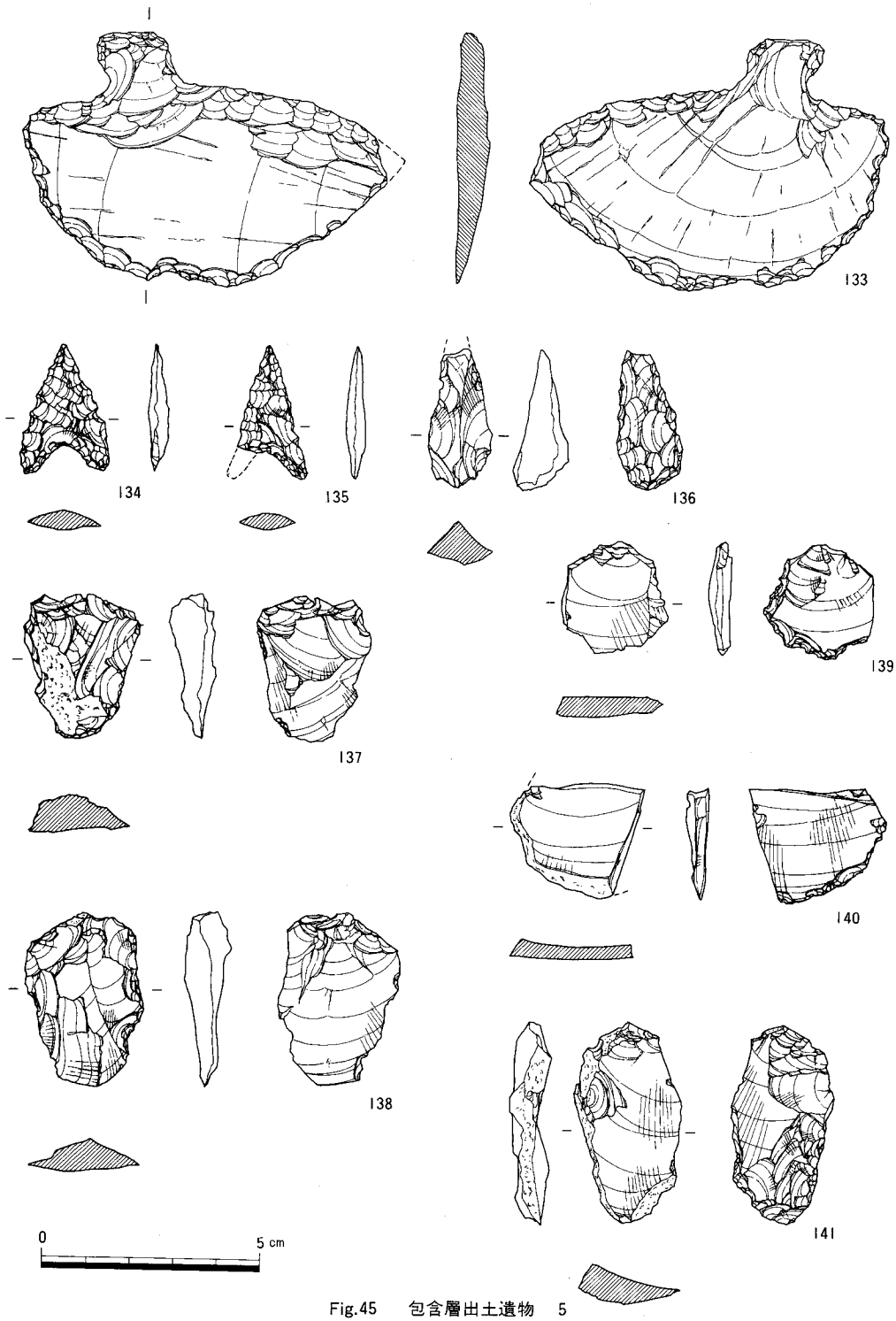


Fig.45　包含層出土遺物　5

Fig.46　包含層出土遺物　6

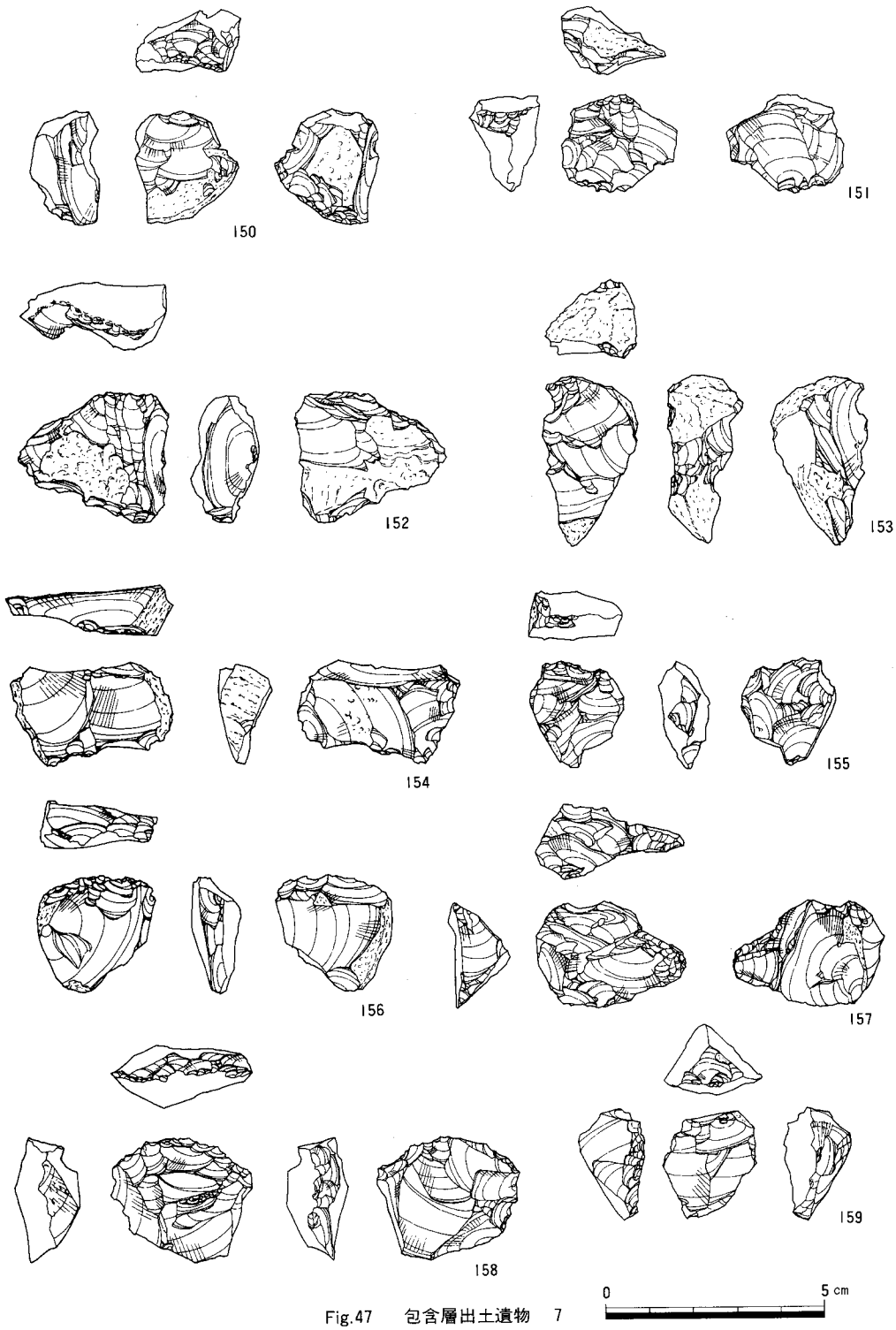


Fig.47　包含層出土遺物　7

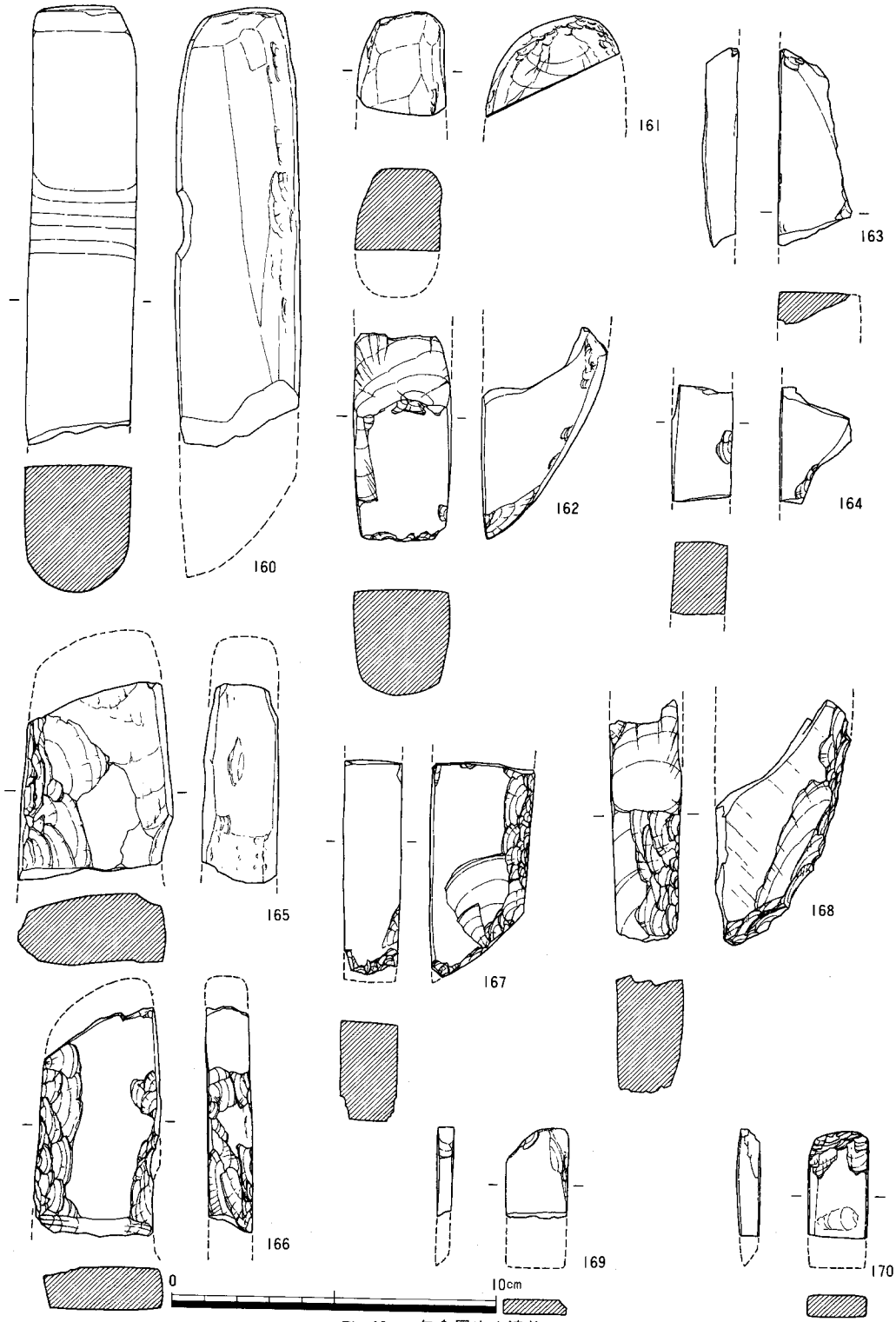


Fig.48　包含層出土遺物　8

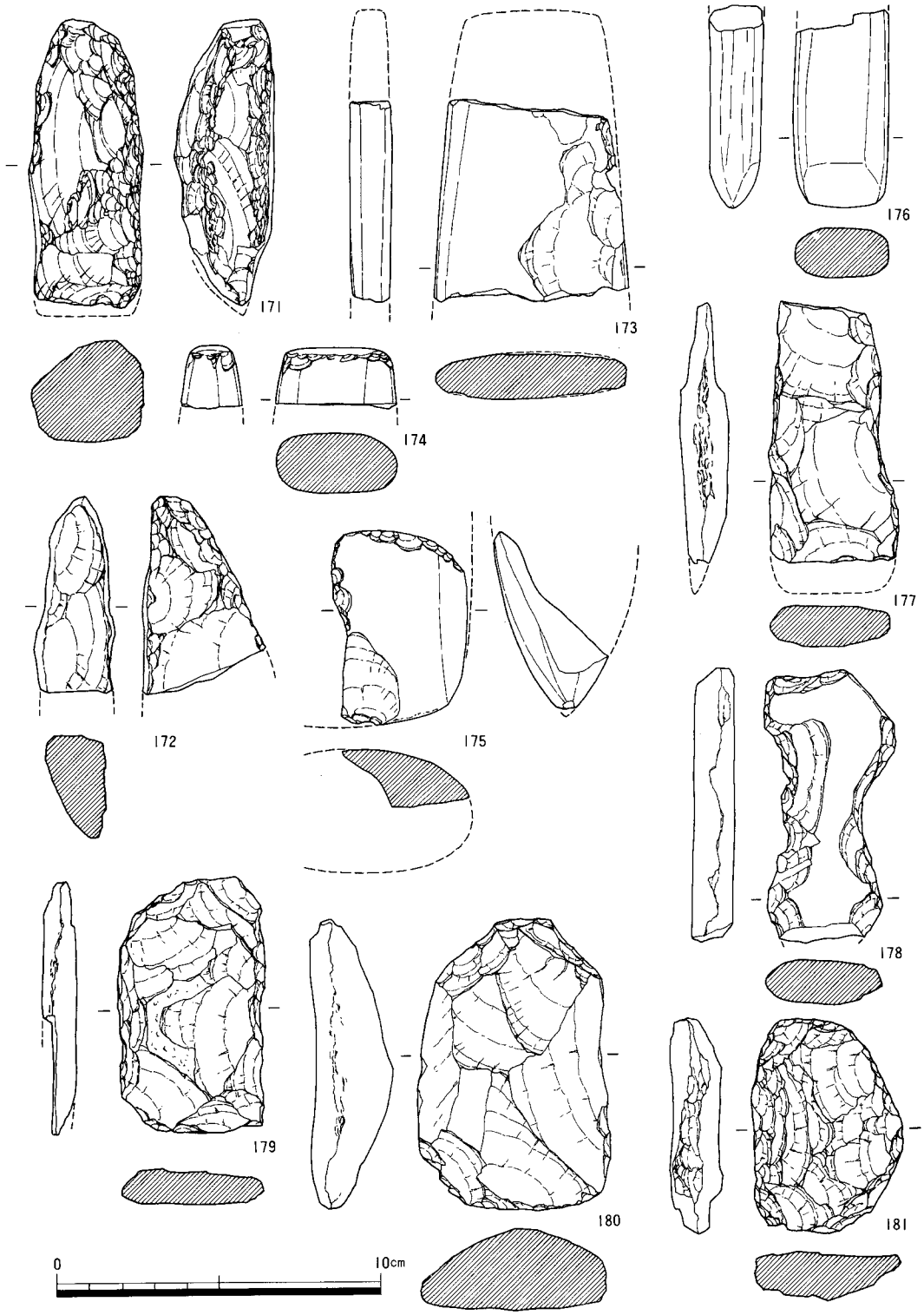


Fig.49　包含層出土遺物　9

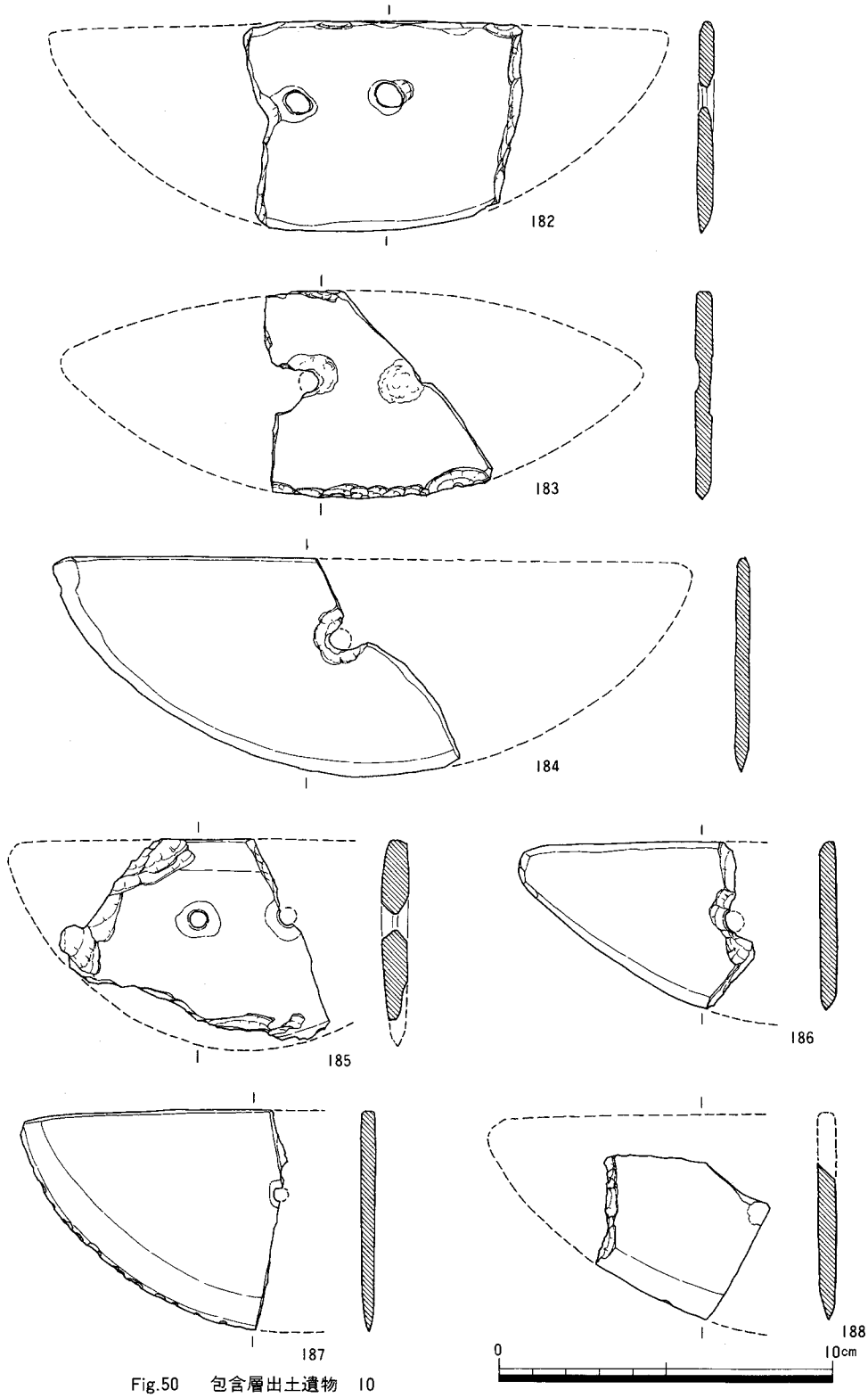


Fig.50　包含層出土遺物　10

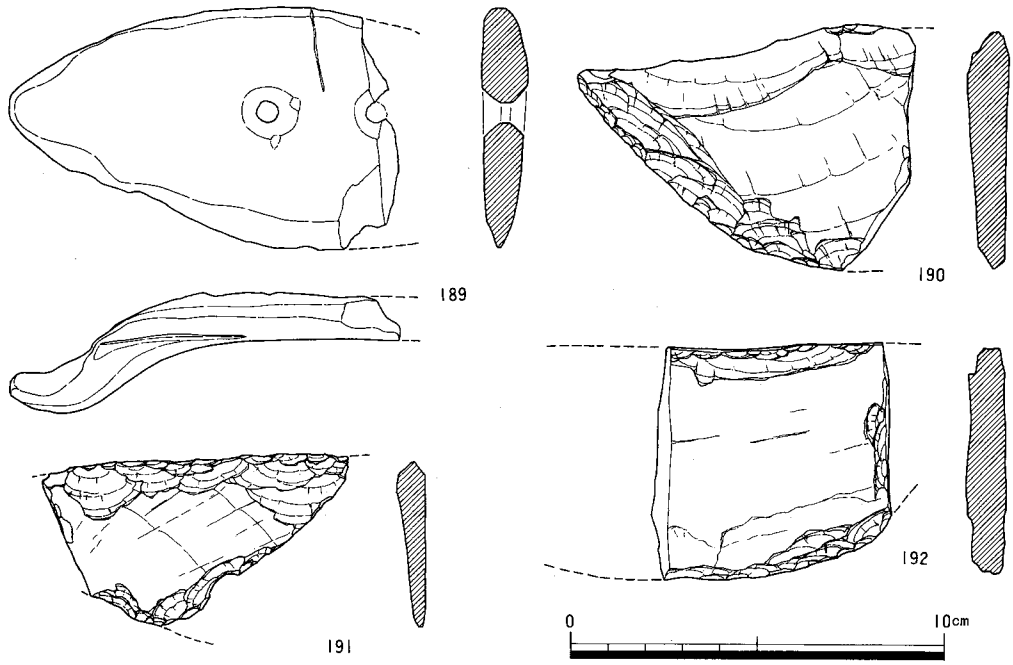


Fig.51　包含層出土遺物　11

のもの（142～154）と剥片素材のもの（155～159）がある。剥片剥離技術は縦長剥片を目的とし数種ある。但し基本的には打面調整を省略し、打面単設もしくは両設のものが主体であり、他はそのバリエーションである。例えば、1）さらに石核調整を加え、剥離面を約90°転移したもの（144～146・149）、2）背面にも剥離面を設定したもの（142・151・154）などがある。なお、2）のうち152と剥片素材石核は一部が稜状打面となっており、「くさび形石器」の形状を呈する。図化していないが、この他に剥片が85点出土しており、総数は111点となる。全体の中で石器の占める率は約7％と低い。

礫核石器には石斧、石包丁、砥石、敲石、磨石、凹石がある。石斧には柱状片刃石斧（160～167）とその未製品（168・171・172）、偏平片刃石斧（169～170）、蛤刃石斧（173～176）、打製石斧（177～181）、太形蛤刃石斧（193～206）とその未製品（207、208）がある。石包丁には半月形（182・184～188）とその未製品（191・192）、杏仁形（189）とその未製品（183・190）がある。189は熱を受け発泡し、変形している。砥石には荒目砥石（209～223）、中目砥石（224）、細目砥石（225～227）があり、荒目砥石には凹面がない棒状砥石（217・221・222）、有溝砥石（209～212）がある。敲石は半欠品であり、2方に敲打痕がある（228）。磨石は半欠品であり、径約10cm程度のもの（229）である。凹石は2点あり、砂岩製（230）と変成岩製（231）がある。何れも片面使用である。この他に石斧製作時の剥片が多数出土している。

232～236は滑石製有孔石製品である。5区と6区の境付近で近接して出土した。232と234は

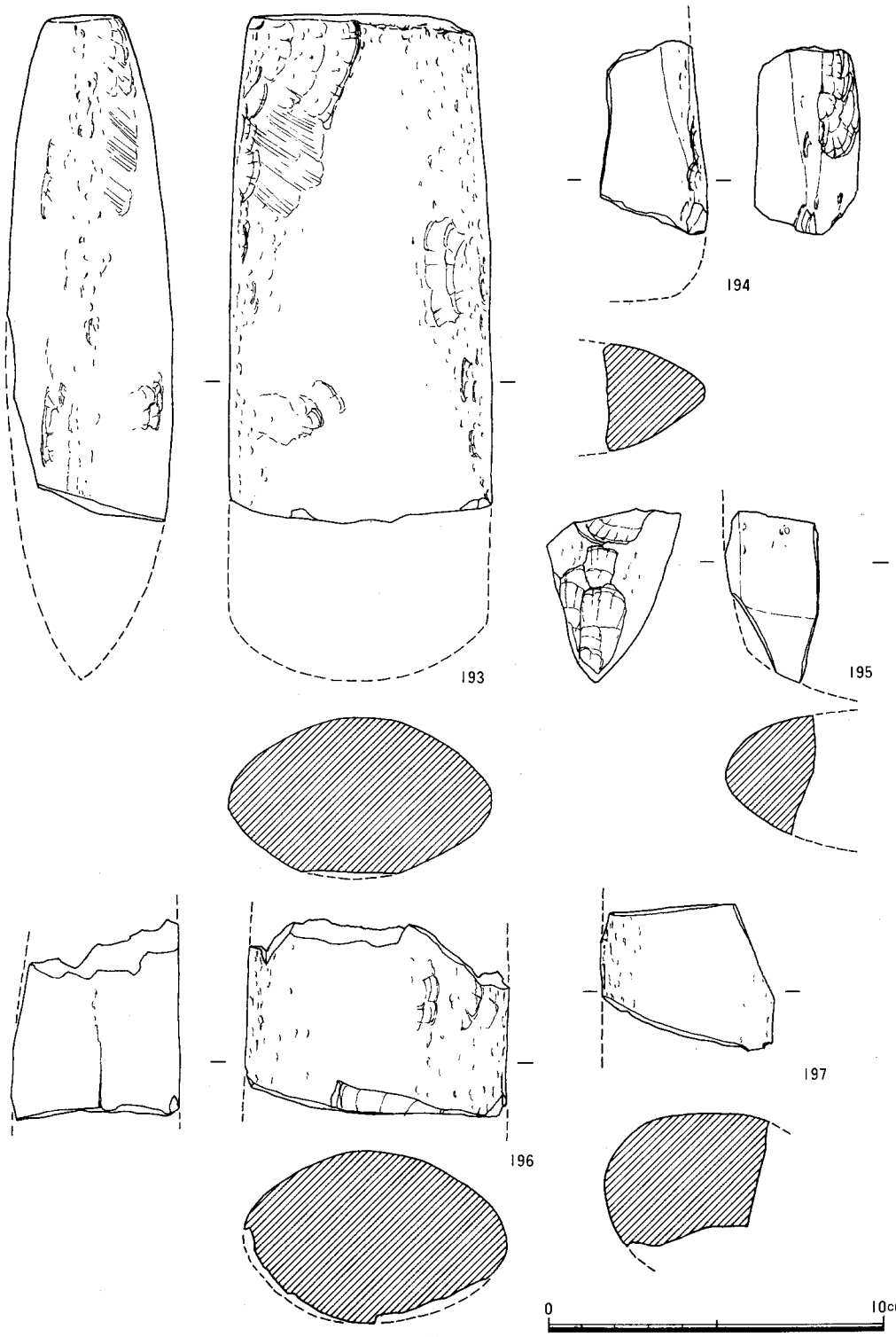


Fig.52　包含層出土遺物　12

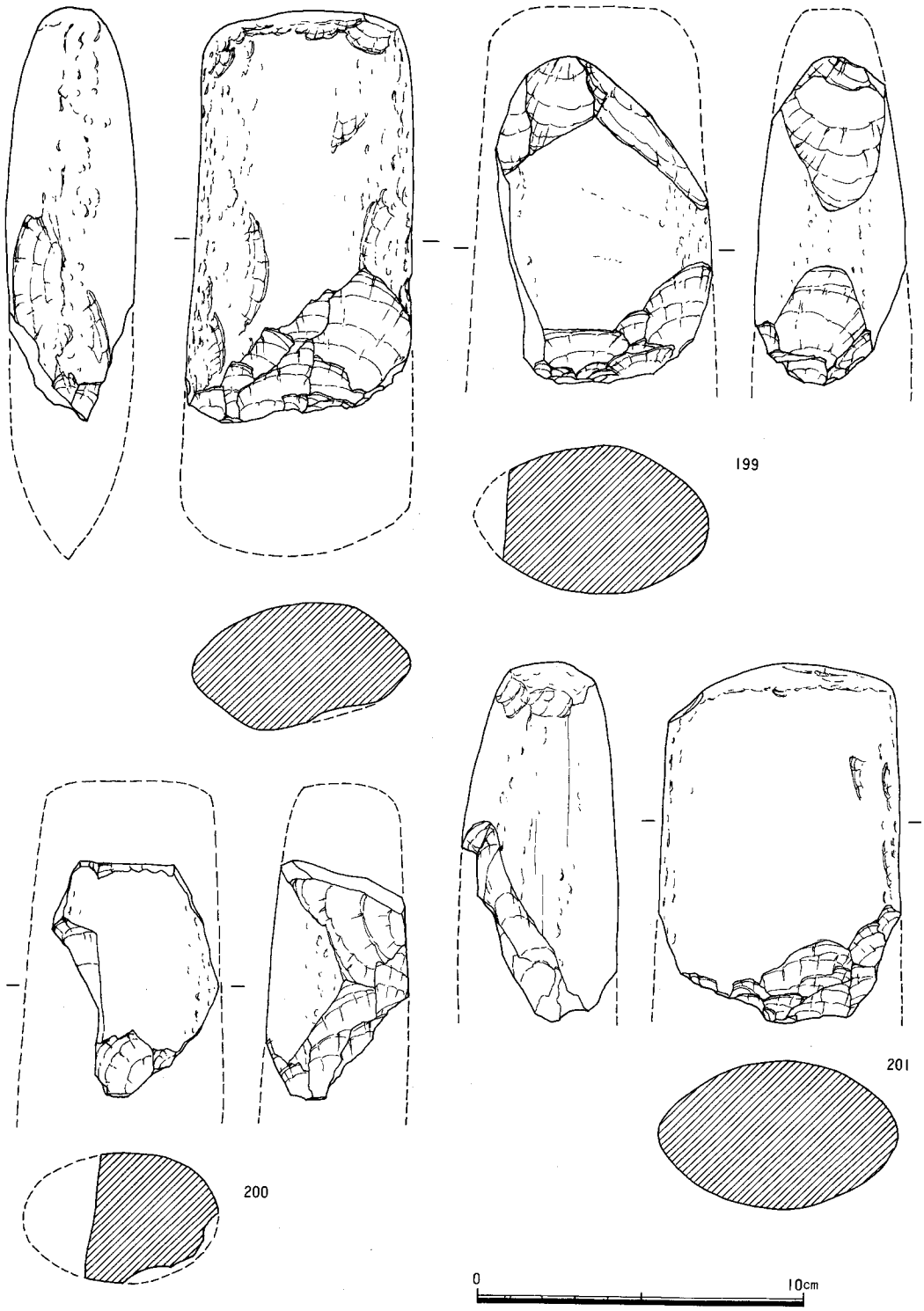


Fig.53　包含層出土遺物　13

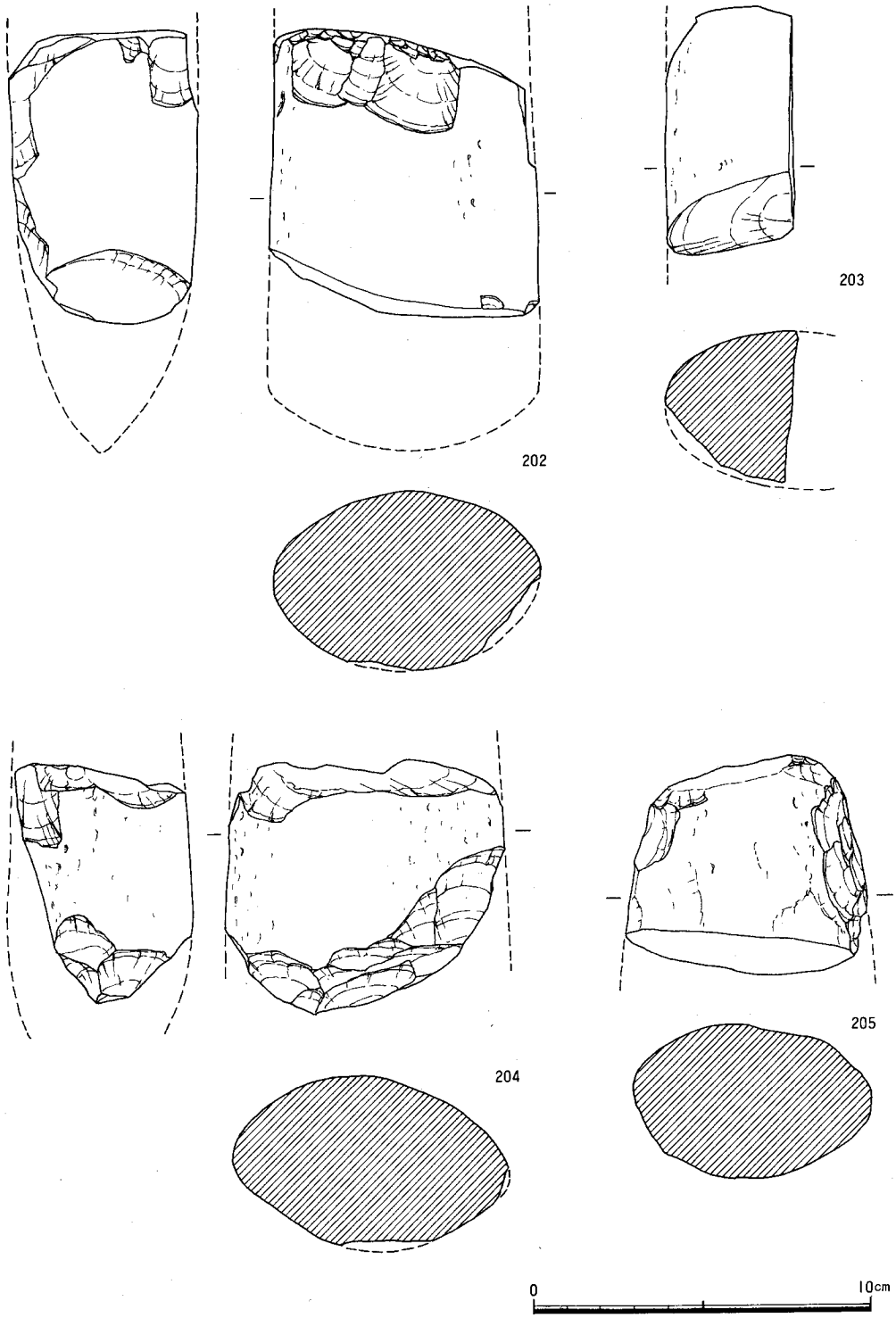


Fig.54　包含層出土遺物　14

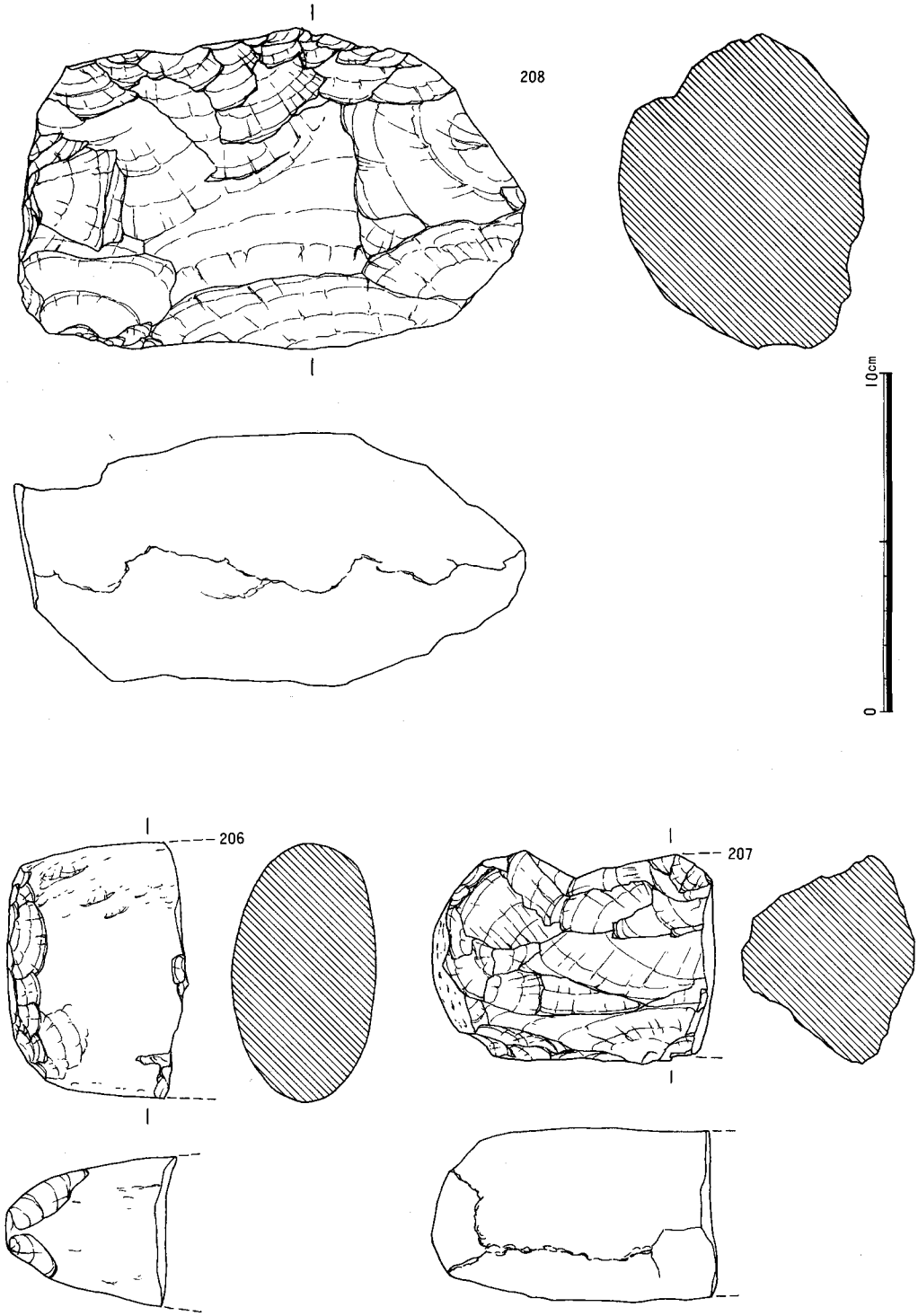


Fig.55　包含層出土遺物　15

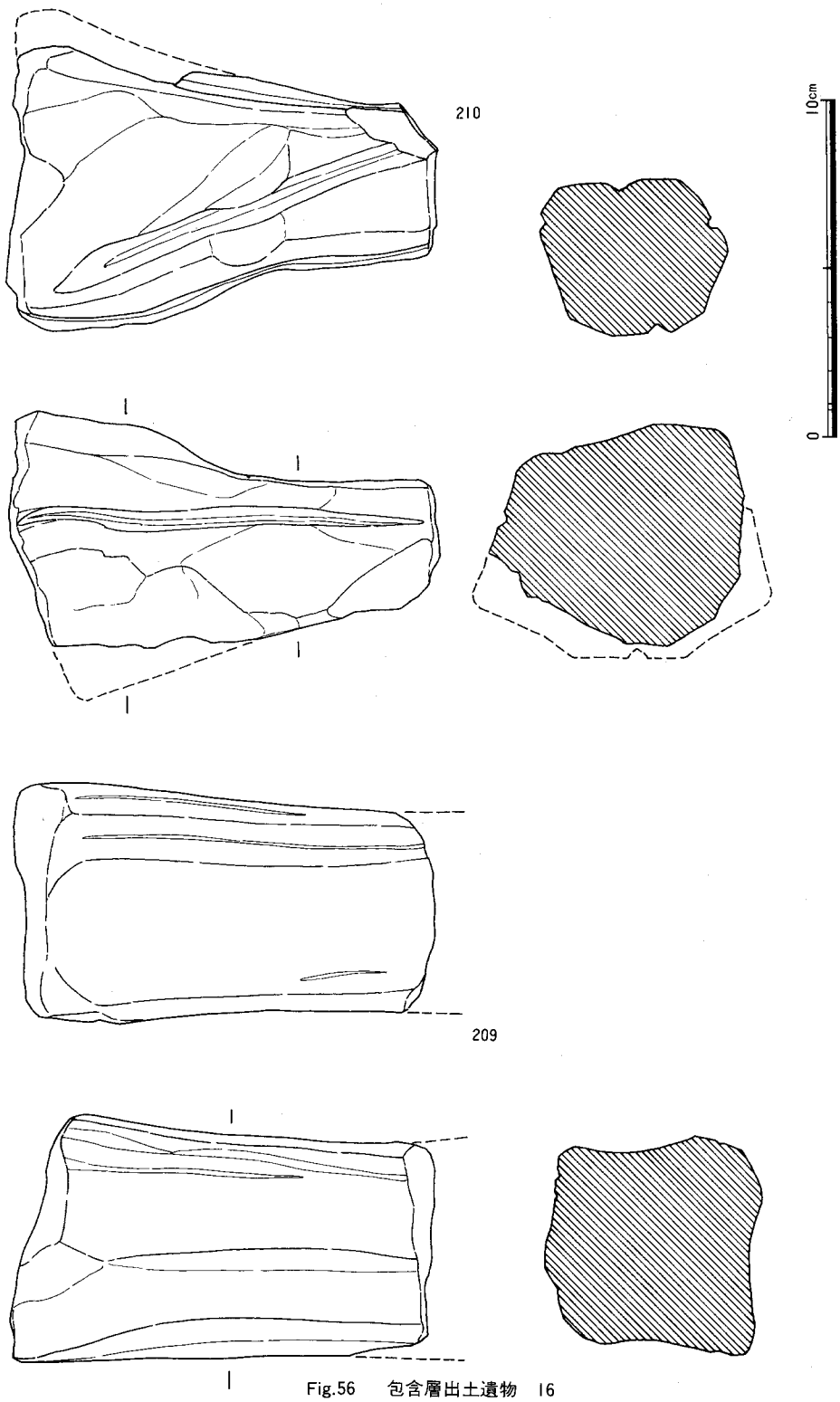


Fig.56　包含層出土遺物　16

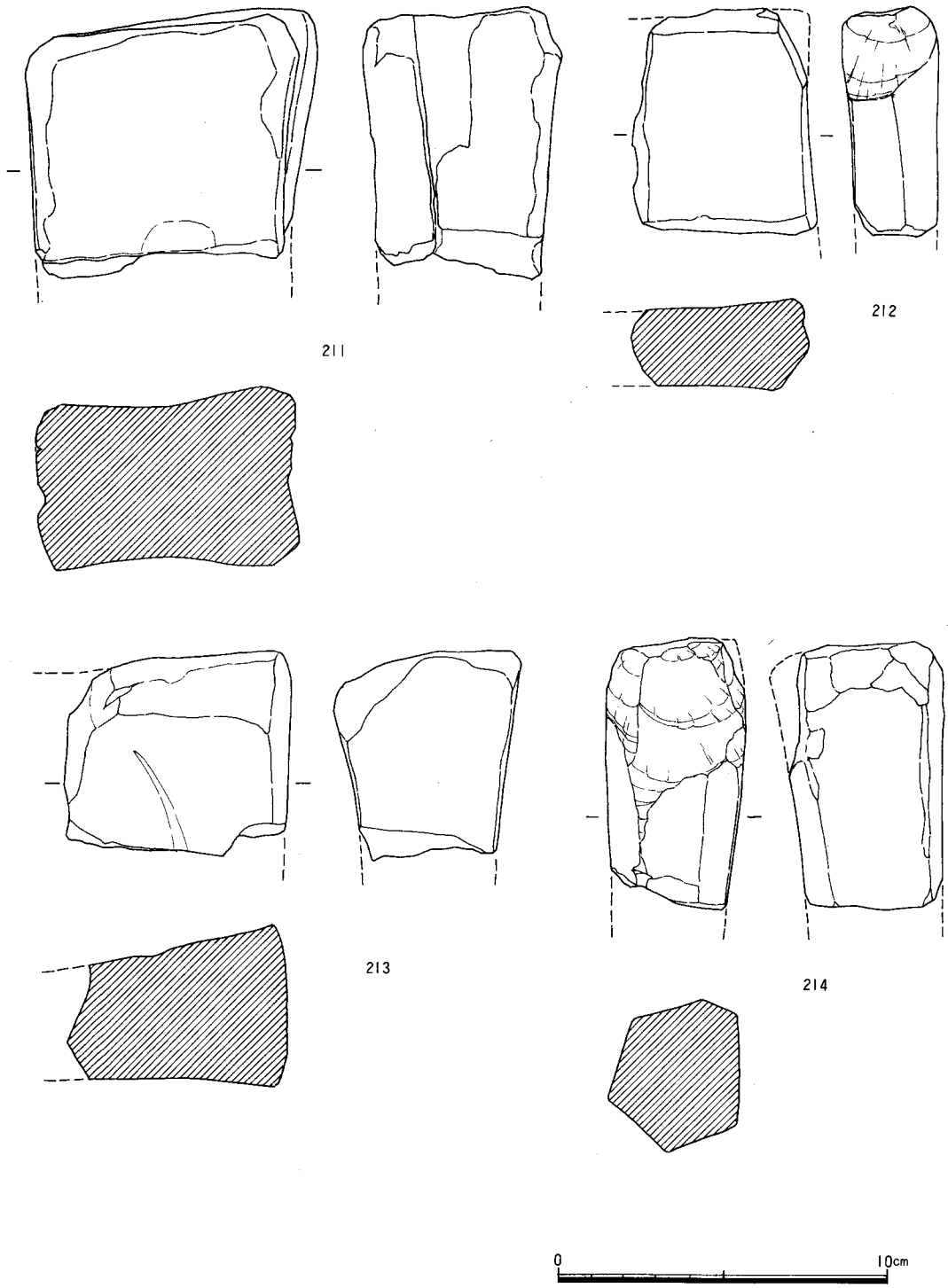


Fig.57　包含層出土遺物　17

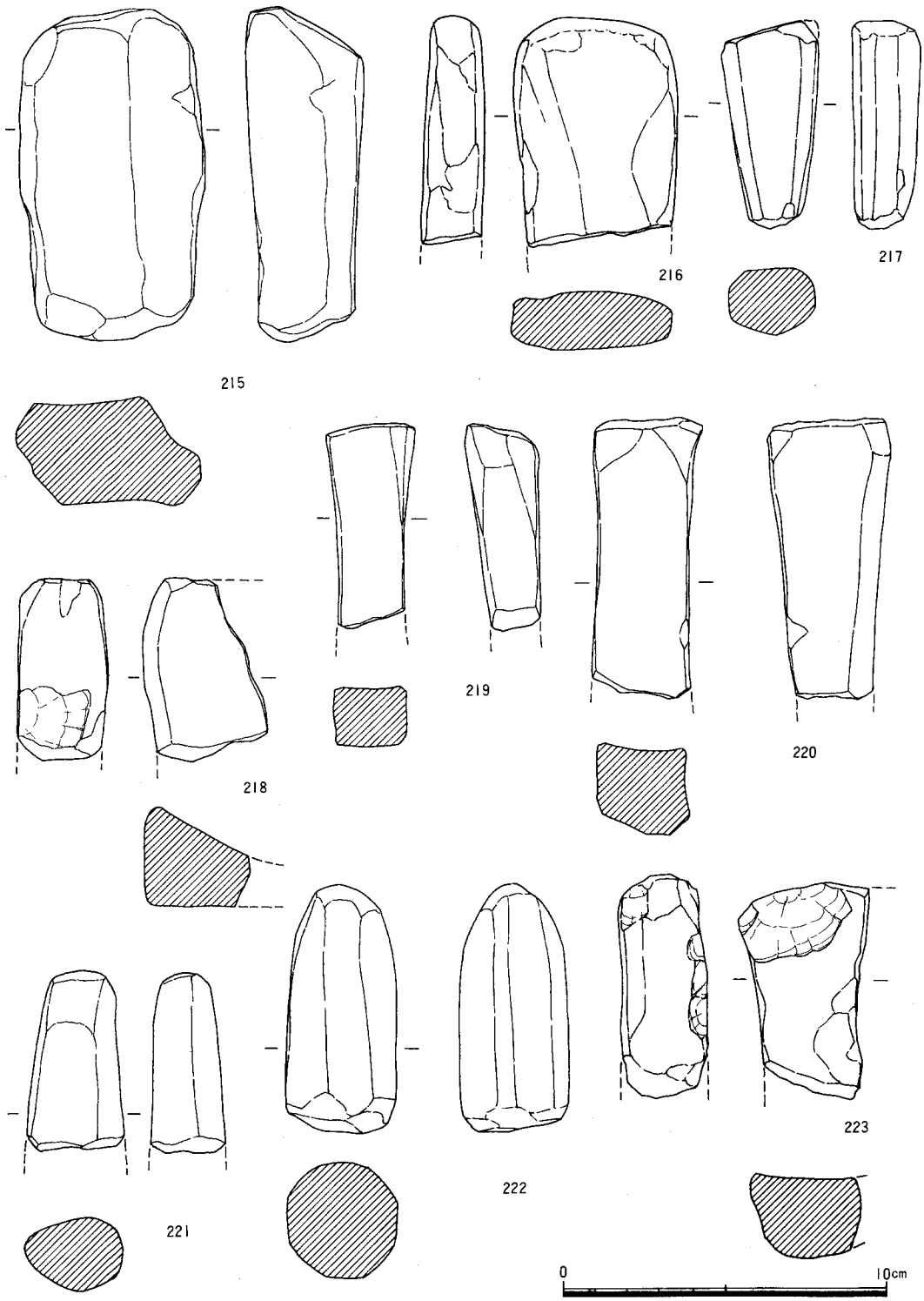


Fig.58　包含層出土遺物　18

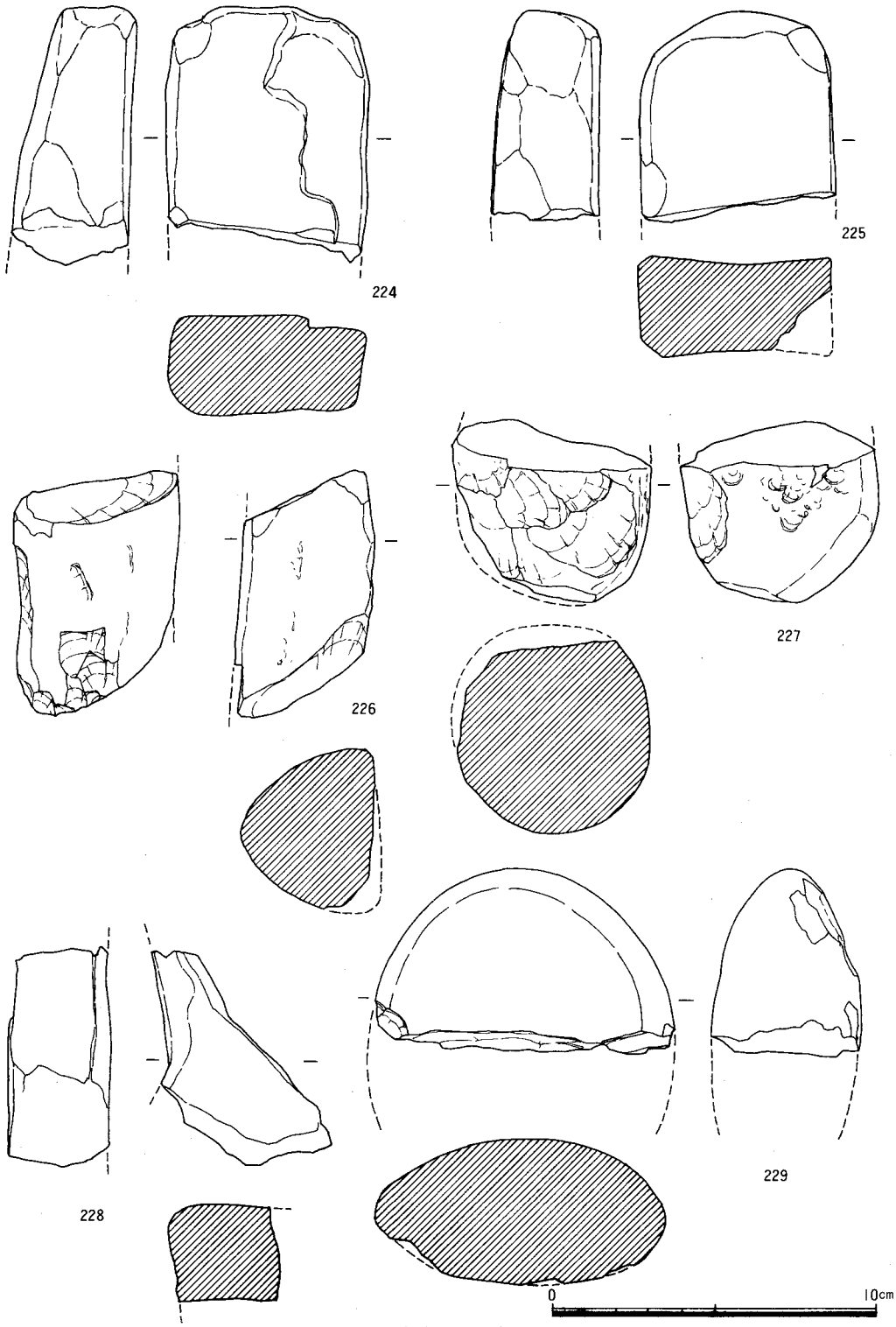


Fig.59　包含層出土遺物　19

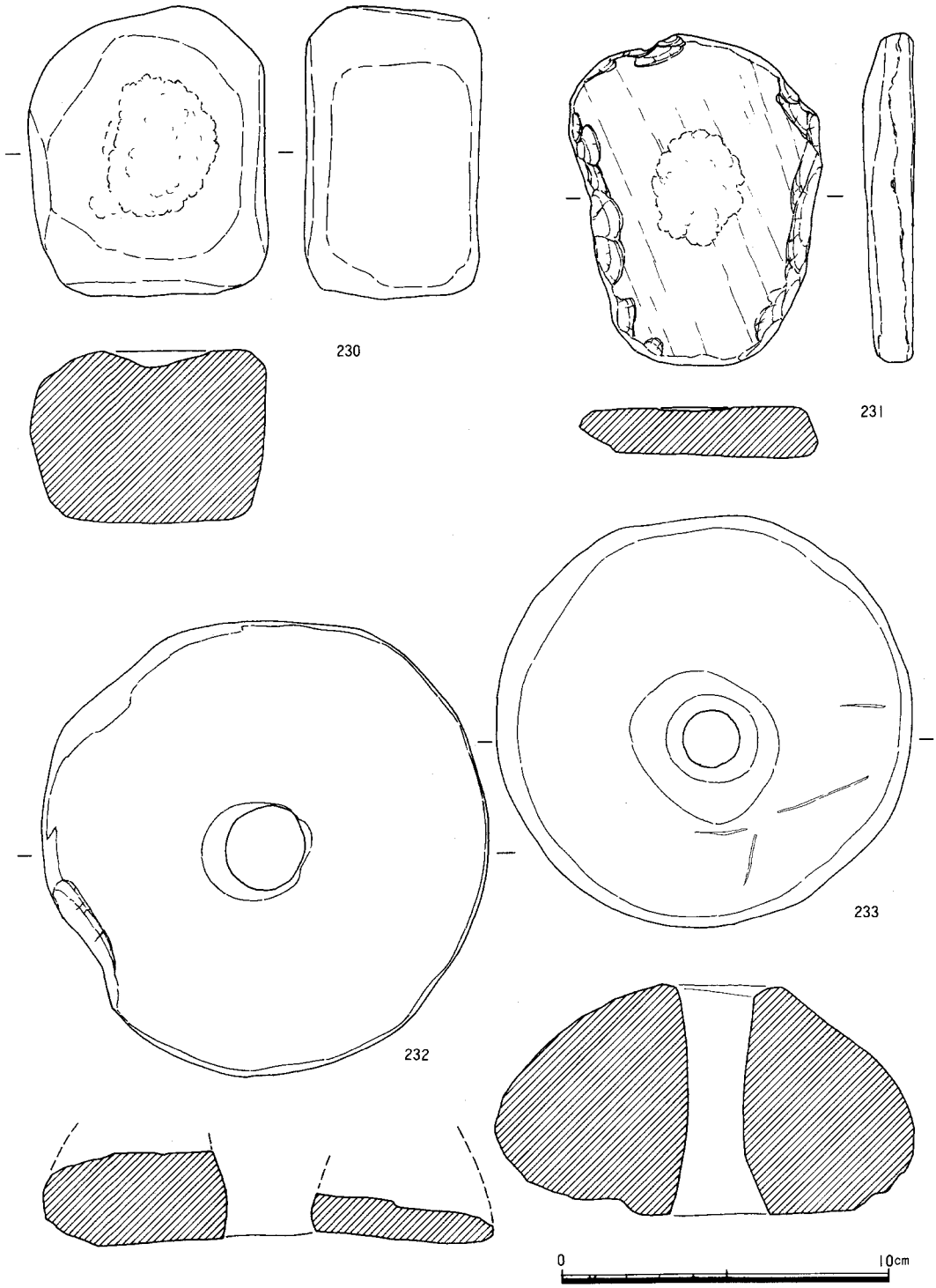


Fig.60　包含層出土遺物　20

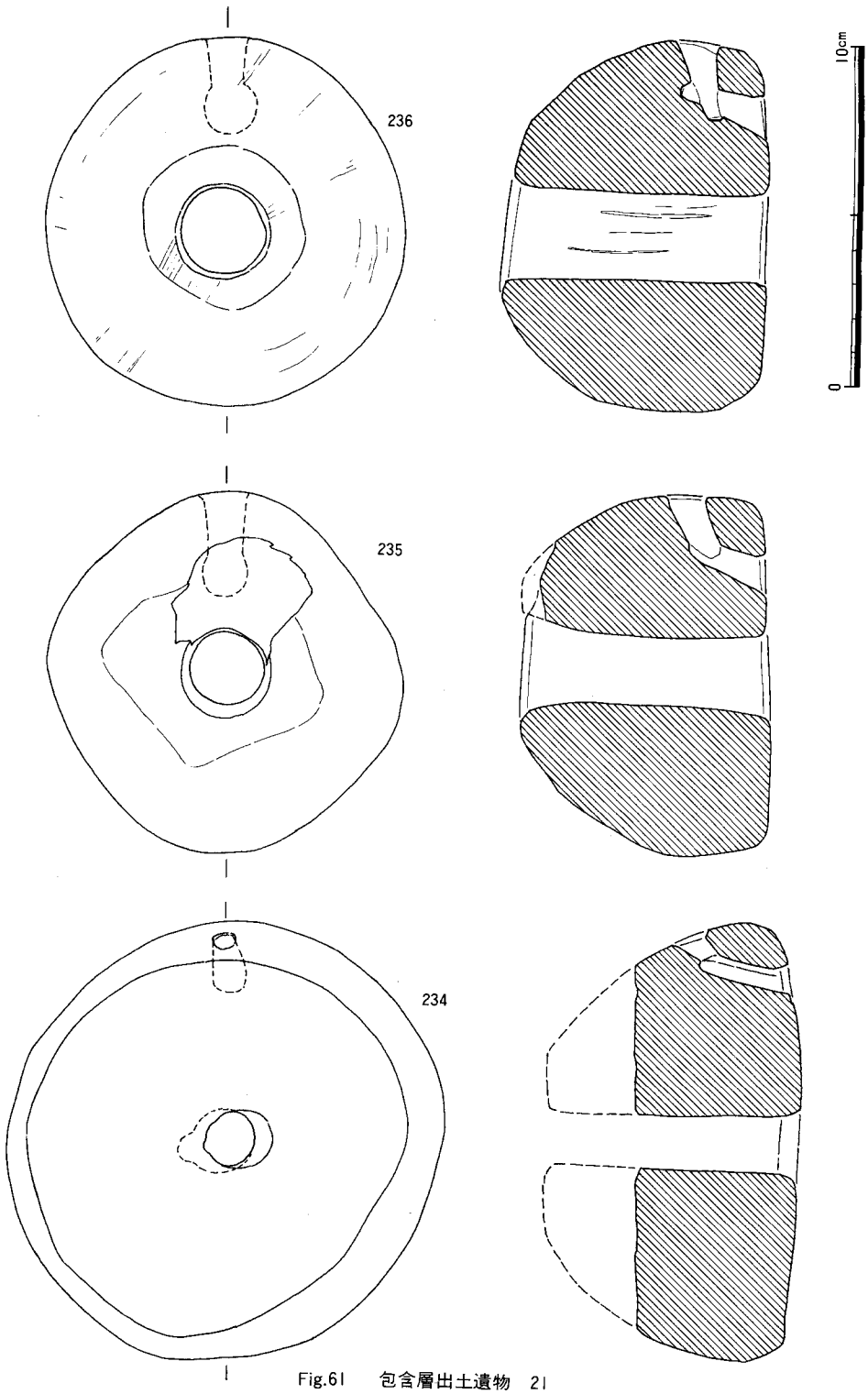


Fig.61　包含層出土遺物　21

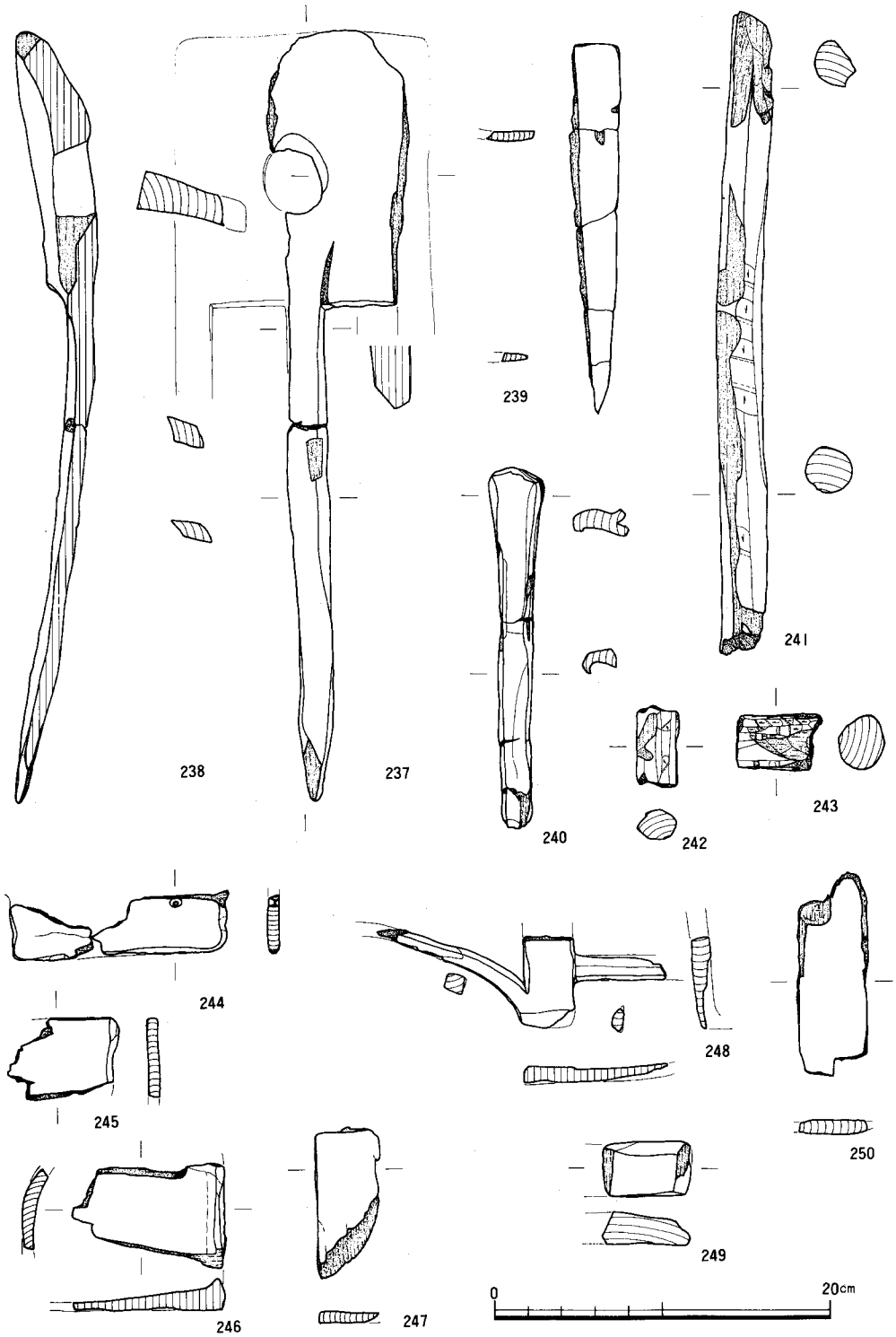


Fig.62　出土木器　I

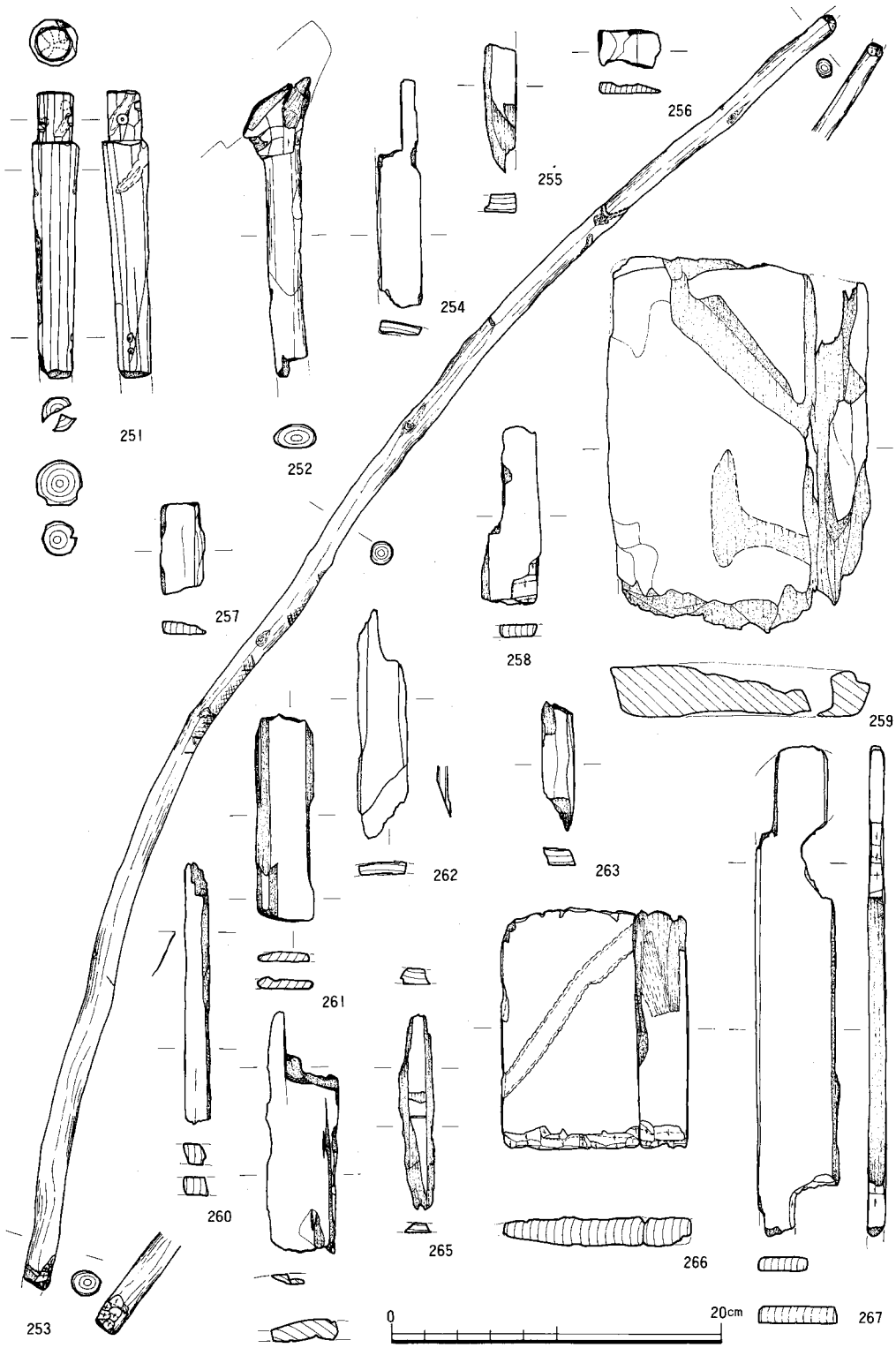

251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
0
20cm

Fig.63　出土木器　2

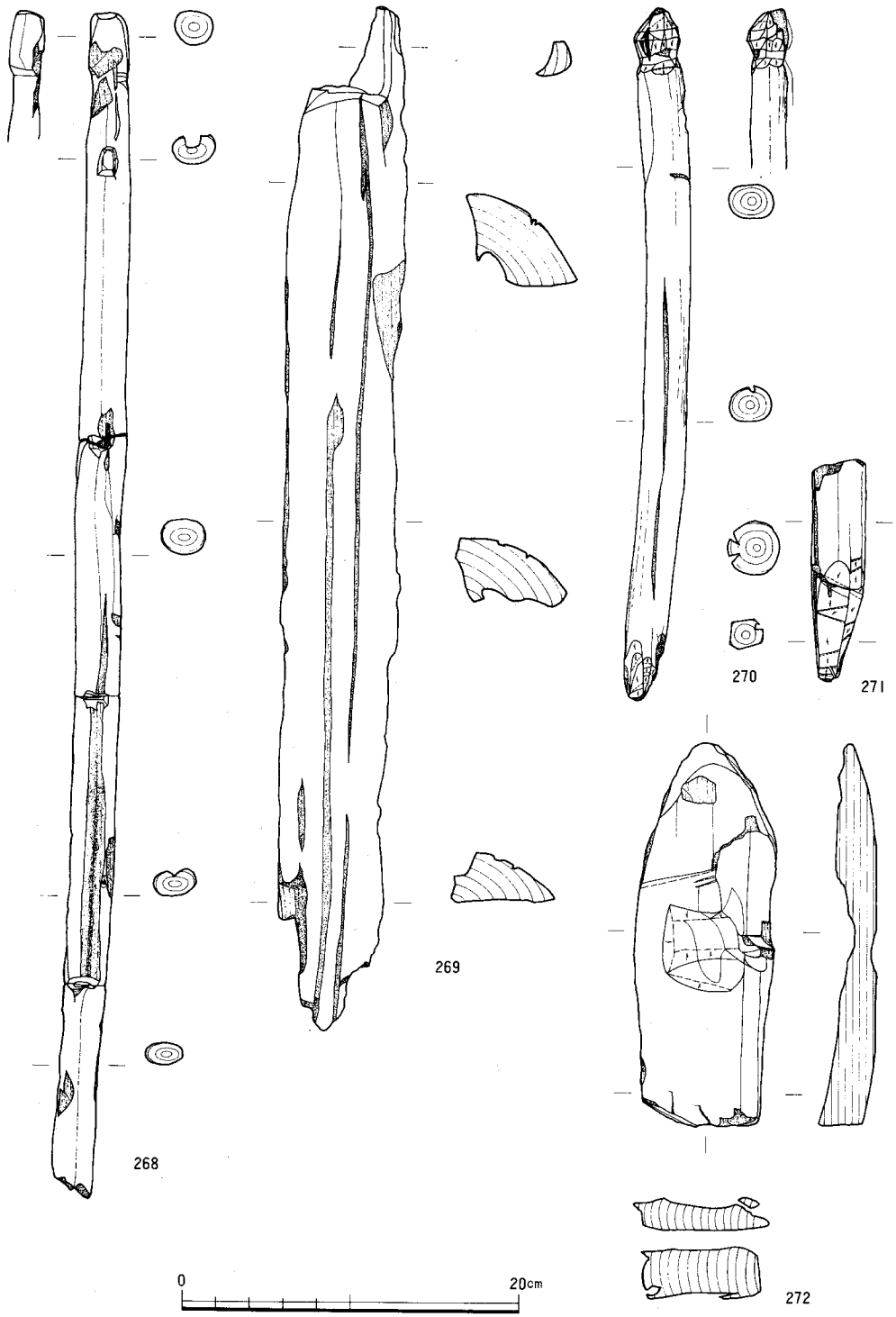


Fig.64　出土木器　3

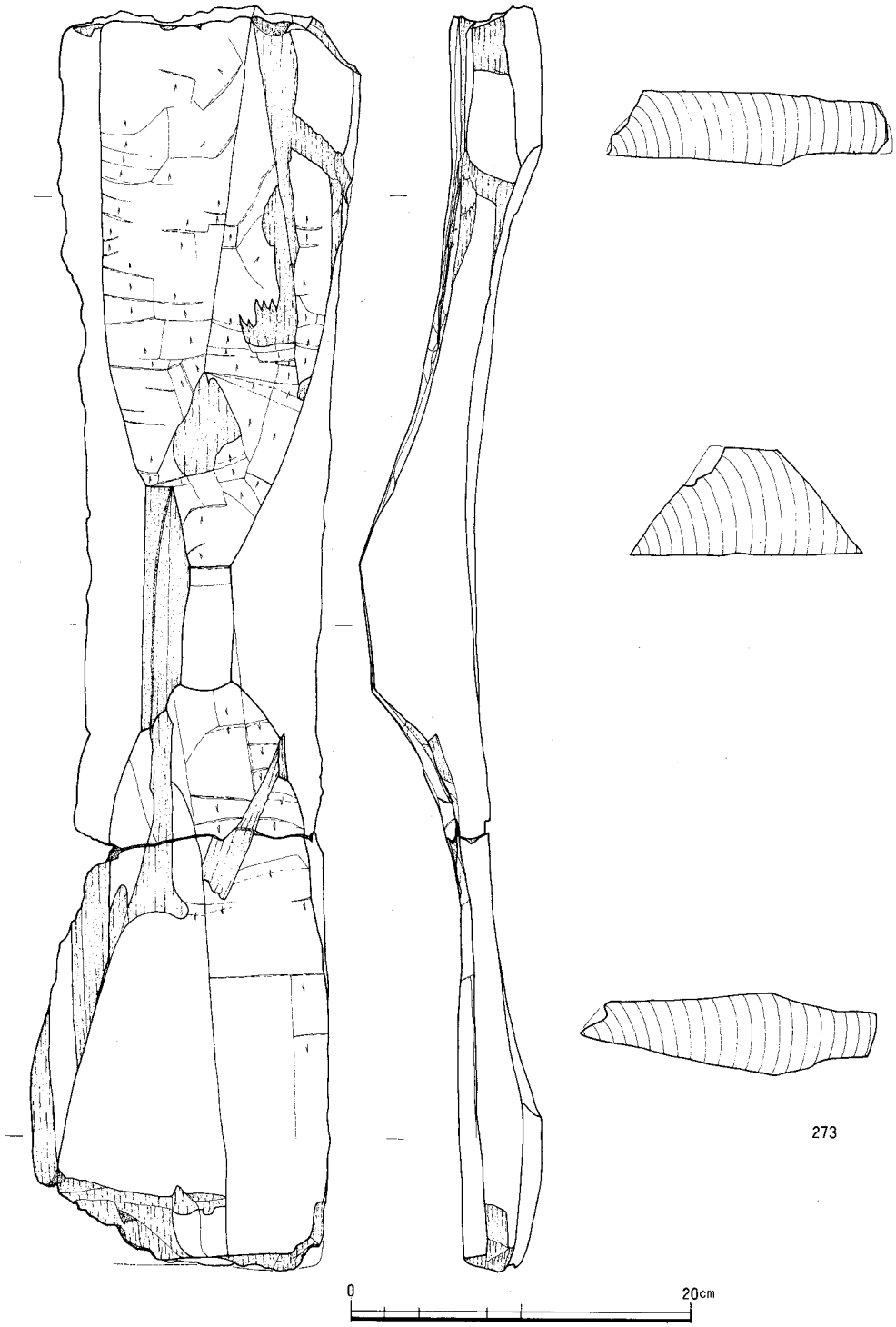


Fig.65　出土木器　4　諸手鍬未製品

上部を欠損し、他はほぼ完形である。直径では13cm前後のもの（232～234）と10cm前後のもの（235・236）に二分される。底側部の穿孔は234～236の３点にみられる。

(4) 木器（Fig.62～65）

本調査地点では、50点弱の木製品が出土した。その中で杭や加工材などを除き36点を図化し報告する。出土木製品は、農具・容器類・工具・漁具・建築材・不明木器と板材がある。

農具としては、三又鍬（238）、諸手鍬未製品（237）、鋤（239・240）、鍬柄？（241・242）があり、いずれもカシの柾目取り材を用材としている。諸手鍬未製品は、柄孔予定部が４×８cmで、柄孔部に紐がかり部の突起をもつものと考えられる。三又鍬は、方形の体部をもち、又部はコの字状をなすものである。不明木製品のうち244・245は、同種の材を用材とし、器形から鉄製摘鎌の木質部か。容器類としては、皿状（246）、脚付容器（247）がある。272も容器か。247はカシ、272はシイ？。工具としては、槌（243）と石斧柄（252）がある。243はカシの割材。漁具としては、網枠（253）がある。建築材としては、Ｌ字の切り込みをもつもの（253）、杭（270・271）がある。268も建築部材か。251は樽の栓状をなしている。248は、カシの板目取り材で加工屑か。板材には、カシを用材とするもの（249・250・256・257）、スギを用材とするもの（258・261・266・267）、ヒノキ？を用材とするもの（255・262・265）、モミを用材とするもの（254）がある。267は半円状の切り込みを２ケ所もっている。

以上の木製品は、弥生時代前期後半から中期前半のものと考えられるが、244・245は後期のものか。（この項、山口譲治）

3．まとめ

本調査地点は比恵遺跡群の立地する洪積丘陵の北端に近く、北側から浸食する小谷の最奥部にあたることが明らかになった。おそらく谷の周囲の台地上には各時期に集落等が展開するものと考えられた。実際第４、25、26次調査地点ではその一部が検出されている。

さて、本調査地点では谷頭部で「水溜状遺構SX－01」を、その北側で土壙２を検出した。前者は規模が大きく、保存状態の良い木器などが多く出土した。現在も僅かではあるが湧水があり、何らかの貯水施設と考えたい。木器等の保存施設としては規模が大きく疑問である。土壙は何れも同じ規模と形態を示す。木実等の貯蔵施設か。前者は弥生中期初頭、後者は弥生前期中葉に位置付けられる。これらの遺構の上位には厚い包含層が形成され、弥生前期中葉～中期初頭の遺物が多量に出土した。これらは西側台地上から廃棄されたものと考えられる。

出土した遺物は多種多様であるが、出土の傾向としては、１～６区に前期後半～末の土器が多く、合わせて、石製品、土製品、石包丁、柱状石斧などが多い。また７～10区には中期初頭の土器が多く、合わせて太形蛤刃石斧、砥石、凹石などが多く出土する。SX－01との遺物の分離が困難なため、これを数値化するのはやめ、傾向の指摘に留めたい。

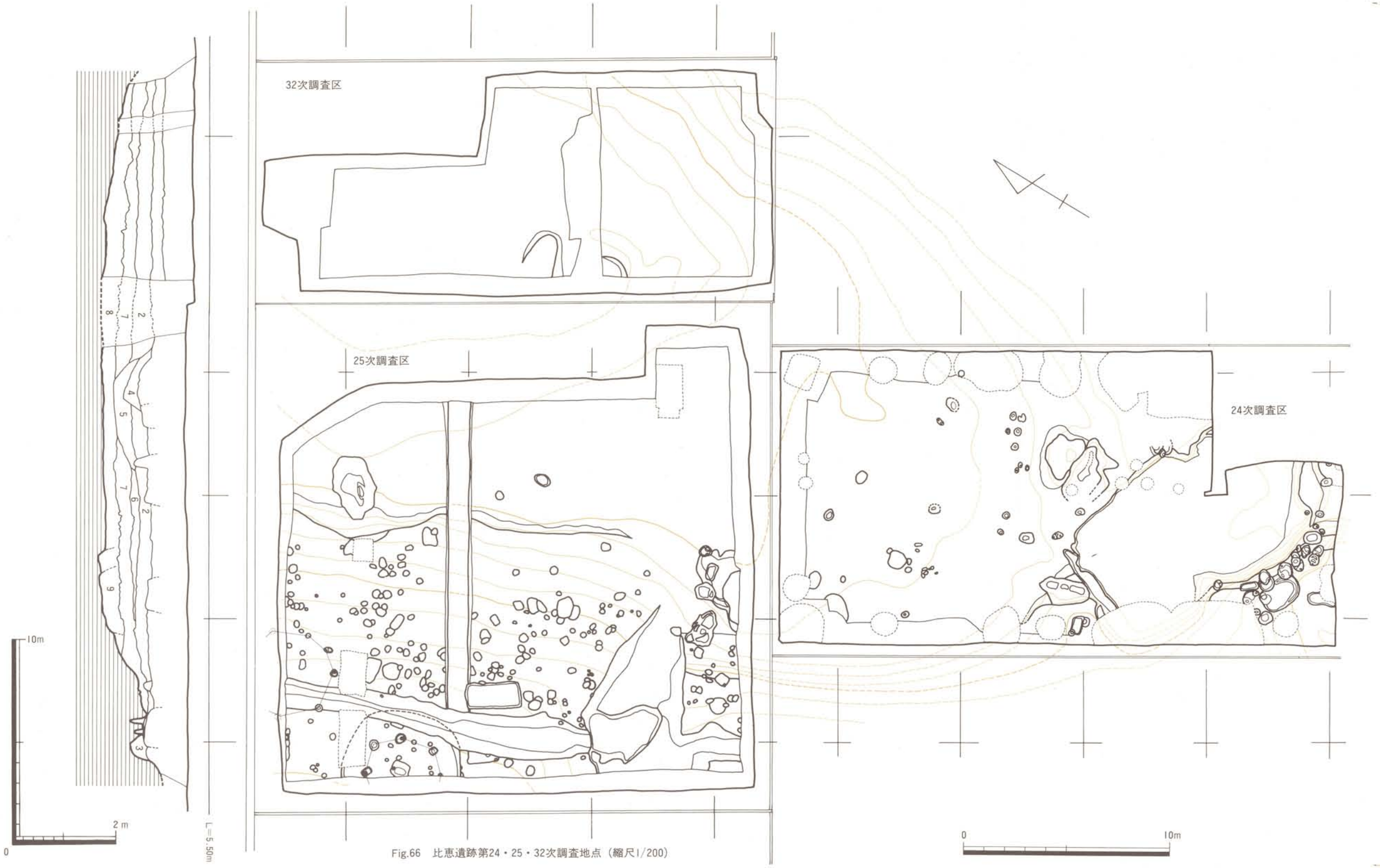


Fig.66　比恵遺跡第24・25・32次調査地点（縮尺1/200）

第５章　第25次調査地点

1　調査の経過と方法

1）　調査・報告書作成までの経緯

25次調査地点は、比恵遺跡群の北端近くに位置する。西側には1980年に調査が行われた４次調査区（瑞穂遺跡）があり、南東側は24次調査区、北東側は32次調査区と隣接する。

比恵遺跡が立地する台地の大部分は、1933年（昭和８年）以来の区画整理により、１ｍ前後削平され、現在はほぼ平坦な地形面となっている。しかし、昭和初期の地図や、明治時代に描かれた絵図をみると、台地の北端や東西縁辺は、幅狭で浅い小谷が複雑に入り込んでいる。

25次調査区付近では、昭和20年代に森貞次郎氏によって、現在の筑紫通り沿いで木製杓子の未成品が採集されている。また、４次調査では、台地上に弥生時代の貯蔵穴・甕棺墓、古墳時代の溝などが調査されている。さらに、西側に落ちる谷状の湿地からは、杭列・木器溜まりが検出され、多量の土器・石器・木器が出土した。このように、比恵遺跡群では、北端付近まで、濃密な遺構と遺物の分布が予想されている。

さて、本調査はリコーテクノネット株式会社九州支社の新社屋建設にともなう事前調査である。福岡市教育委員会埋蔵文化財課は、1988年10月17日と1989年5月20日に試掘調査を行い遺跡の状況を確認し、協議をかさね、発掘調査を６月16日～９月３日に実施した。調査を終了した後には、遺物の洗浄・復元・実測・写真撮影を行い、図面や写真などの記録類を整理し、1990年度に調査報告書を刊行する計画で、その準備にとりかかった。

こうした発掘調査および整理作業・報告書の作成には、リコーテクノネット株式会社の御理解・協力をいただき、順調に進行させることができた。記して感謝いたします。

本報告は、石器については小畑弘己、他は田崎が分担して執筆した。

2）　調査・記録の方法

試掘調査と、南東側に隣接する24次調査区の成果から、本調査区の西側は台地、東側は谷であること、谷の中に堆積した黒色有機質土層は多量の遺物を包含することが認められた。

以上から、調査対象範囲の北東側に寄せて、調査事務所用のユニットハウスと資材置き場を設置し、外周のブロック壁から１ｍの引きを取り調査区を設けた。また、24次調査の調査区画を延長させ、６ｍ方眼の区画を設定した。ただし、南東から北西へA～E、南西から北東へ１～５に分け、両者を組み合わせ、個々の６ｍ方眼区画をA－２区、B－５区、E－３区などと呼ぶこととした。そのため、25次調査区のA－３区と、A－４区は、それぞれ24次調査の１区と２区

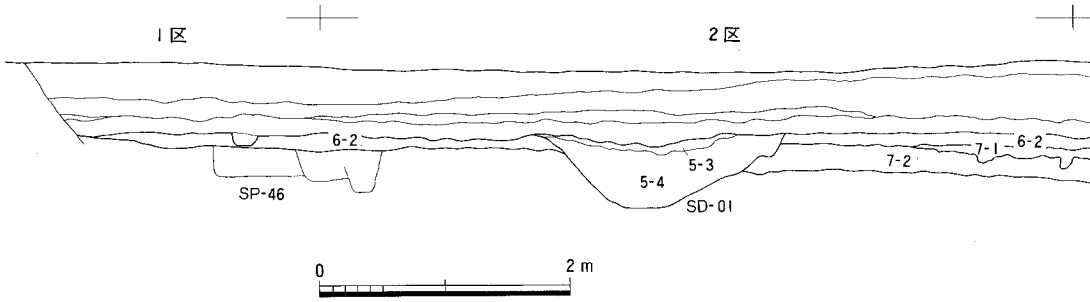


Fig.67　第25次調査地点北壁土層断面図（縮尺 1/60）

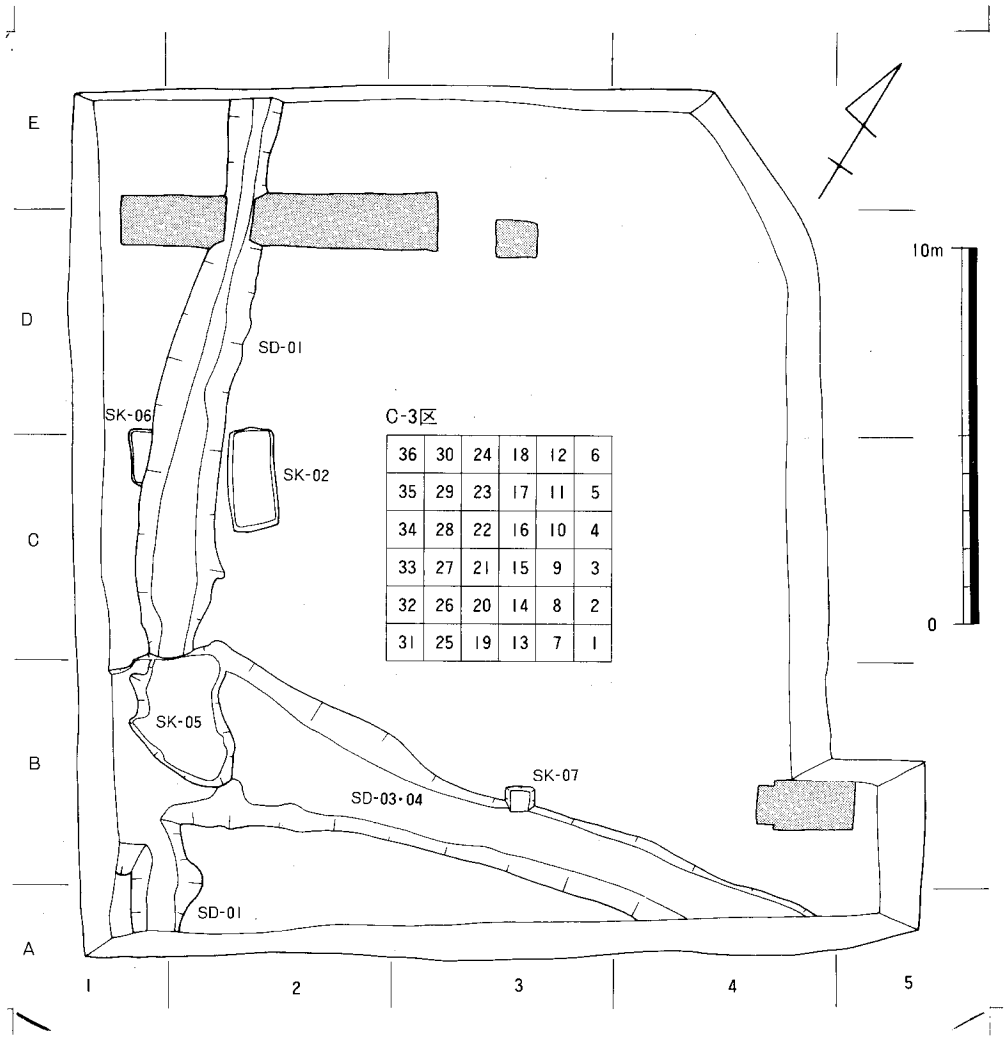
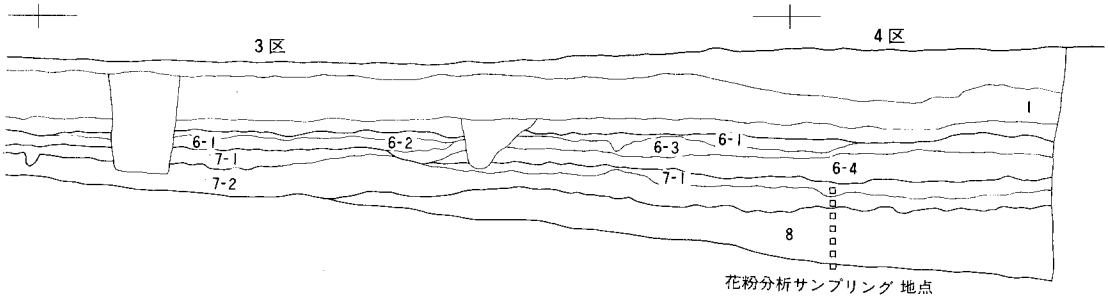


Fig.68　第25次調査地点の近代遺構（縮尺 1/200）



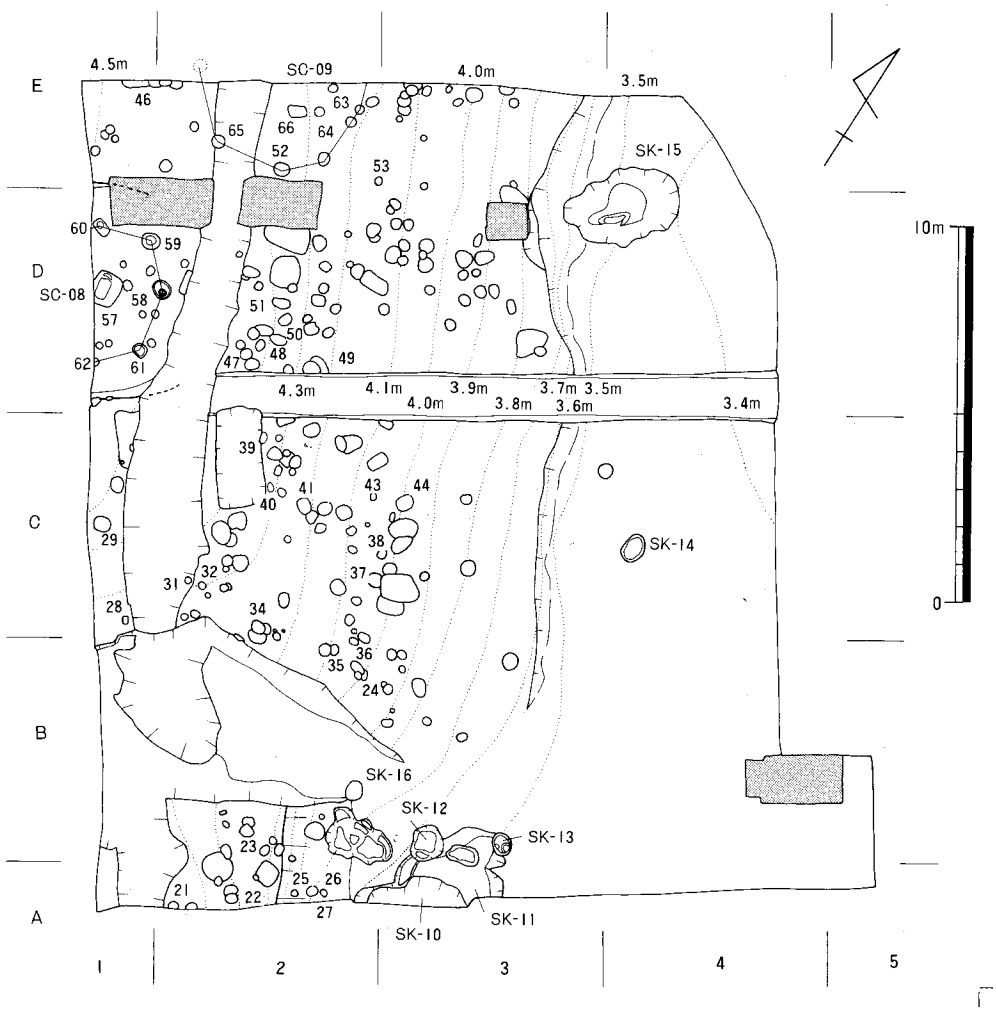


Fig.69　第25次調査地点の弥生時代遺構（縮尺 1/200）

と同じ６ｍ方眼区画である。さらに、遺物の取り上げのために、６ｍ方眼区画を36区の１ｍ方眼の小区画に細分した（Fig.68）。これについては、東から西へ順次１～36の小区画名を大区画名の後につけて、Ｂ－３－４区、Ｄ－４－36区などと呼ぶこととした。

次に、表土層（後述の１層、以下同じ）、調査区のほぼ全域を覆う褐色系の堆積土の中でも遺物をほとんど含まない部分（７層上部）を、バックホーで一気に剥ぎ取り、地権者に搬出していただいた。その際、一部遺物が散布する部分もあったが、６ｍ方眼区画ごとに取り上げに努めた。

表土層の除去後、調査区西側の台地の落ち際に掘られた南北方向の１条の溝と、これにほぼ直交する２条の溝が重複して検出された（Fig.68）。溝の交点には一部レンガ積みの水溜状の遺構が造られていた。これらは出土遺物から近代の遺構であり、昭和初期の地図にも該当する溝が見える。これらを完掘した後、平板測量で記録をとった。

その後、調査区の南側から、弥生時代の遺構の検出と、谷部分の湿地堆積土の調査を進めた。その結果、台地上に竪穴式住居跡、台地の周辺に土壙および多数の小穴（ピット）群を検出した（Fig.69）。

これらの遺構には、検出順に２桁の通し遺構番号を付し、竪穴式住居跡にはSC、溝にはSD、土壙にはSK、小穴にはSPの略号を冠して、遺構の種別をあらわした。ただし、小穴の多くは浅く、自然の凹凸である可能性をもつものである。そのため、しっかりした掘り方の小穴と、遺物が出土した小穴に遺構番号を与えた。

また、谷部分の堆積土中からは、土器・土製品・石器・木器などが多量に出土した。後述するように、Ａ～Ｃ－１～５区では、遺物が集中して出土しはじめた面で、遺物のドットマップを作成し、５桁の遺物番号を付して取り上げた。以下の層あるいはＤ・Ｅ－１～４区では、木製遺物と特徴ある遺物について取り上げ順に遺物番号を与え、他の遺物は１ｍ方眼の小区画ごとに遺物番号をつけて取り上げた。小区画を単位として取り上げた遺物の中で、実測・写真撮影を行ったものについては、その度に別番号をつけた。これらは、そのまま福岡市埋蔵文化財センター収蔵時の遺物登録番号となっている。この遺物番号と本報告中の掲載挿図との対応は、本章の最後の遺物一覧表に記している。

調査の最終段階には、調査区の南壁と北壁の谷部分で、花粉分析用サンプルと、厚さ10cm、30cm四方の土層サンプルを採集した。こうした自然科学的な調査は、九州大学理学部古生物学教室の野井英明氏にお願いした。

2　調査の概要

1）　層位　（Fig.66・67）

調査区内の層位は１～10層の10層に大別できる。以下、調査区の南北壁の土層断面を基準に

説明する。

1層は砂利・ガレキからなる客土層である。

2層は茶黄色粘質土層で、部分的にマンガンと鉄分の集積がみられる。1層の客土が行われる以前の水田床土層である。耕作土部分は、1層を客土する際に、削り取られたものと考えられる。

3層はSD－04、4層はSD－03、5層はSD－01の近代の溝の埋土である。

6層は調査区のほぼ全域にひろがる褐色系統の土層である。6－1～6－4の4層に細分できる。6－1層は明褐色シルト層、6－2層は茶褐色粘質シルト層である。C～E－2・3区に集中して遺物が出土しており、下部の6－4層からは土器の細片が少量出土したのみである。出土遺物は、ほとんどが弥生時代中期後半の土器である。その中に混じり、ごくわずかに奈良時代後半の須恵器の高台付坏、平安時代の土師器破片、近代の陶磁器・陶製の鳩笛が混じる。

この6層は、下部の7・8層とくらべ、かなりしまった土層で、調査区西側の弥生時代の遺構が削平された上を覆い、A～E－4・5区の谷に向かって厚くなる。谷部を埋め、2層の床土層に示される水田開田の際の整地層と考えておきたい。

7層は、A～E－3～5区の谷部分に堆積した有機物を多く含む黒色の粘質シルト層である。7－1層と7－2層に細分できる。7－1層は7－2層とくらべやや明るく白っぽい色調を呈する。D・E－3・4区だけにみられ、弥生時代前期を主に、後期前半までの土器が出土している。7－2層は焦茶色に近い色調である。厚さ1～5㎜ほどの灰白色や黄灰色の粗・細砂をレンズ状に混じえる。木や葉などの有機物を含むが、分解度が高く、残りは悪い。出土遺物は、弥生時代前期末～中期初めの土器を主体とする。

8層は暗黒褐色の粘質シルト層である。7層との接面は、台地から離れるにつれ凹凸が著しく不整合面をなす。未分解のままの有機物を非常に多く含む。層中には、灰白色や黄灰色の粗・細砂、木葉などが1～5㎜ほどの薄いブロックが混じる。8層下部付近には、10層の八女粘土の小ブロックも混じる。8層は、40～50㎝ほどの厚さをもつ。8層は短時間で推積したものとは考えられない。そこで、8層の細分を試みたが、肉眼的に土の違いをつかむことができず、果たせなかった。また、8層上面は、7－2層と分別が困難で、7－2層と一緒に掘り上げた部分もある。こうした8層の上面部分を8－1層とし、以下10㎝ごとに人為的に分層を行いながら調査を進めることとした。この10㎝ごとの人為的層位を、上面から8－2、8－3、8－4、8－5層と呼ぶこととした。8－3層以下については、木器と特徴的な遺物の出土分布図を作成しながら調査を進めた。

9層はSK－10・11の弥生時代の土壙の埋土である。

10層は比恵遺跡がのる台地をつくる八女粘土層で、灰白色の粘質土である。9層の上面は8層と著しい不整合面をつくる。小さな凹みは足跡などの可能性も考えたが、面的に確実に把握

できなかった。

2）　遺構

検出した遺構は、近代と弥生時代のものに分けられる。

近代の遺構には、

溝　SD－01・03・04

土壙　SK－02・05・06・07

がある（Fig.68）。前述したように、溝は昭和時代初期に作成された1／3000地図でも確認できる。埋土は小礫を含む白色・灰白色・黄灰色・青灰色の粗・細砂、青灰色のシルトの薄いブロックが縞状に堆積している。また、部分的に炭化物を含む。SD－01ではC－2区に井堰と考えられる杭列が打ち込まれていた。埋土中から陶器の擂鉢・甕・青磁・白磁のほか、弥生土器破片が少量出土した。SD－03・04からは、青磁・染付の磁器類が多数出土した。土壙の中で、SK－05は3条の溝に伴う水溜状の遺構で、北側の一部がレンガ積みで、内部には多数の杭が打ち込まれていた。陶磁器類のほかに、弥生時代中期の立岩式の成人用甕棺破片などが出土した。

次に、弥生時代の遺構には、

竪穴式住居跡　SC－08・09

土壙　SK－10～16・54・55・57・66

小穴（ピット）SP－21～32・34～53・58～65

がある（Fig.69）。この中で、SK－57とSP－58～62はSC－08にともなう土壙と柱穴で、SP－52・63～65はSC－09の柱穴である。以下、弥生時代の遺構と遺物を中心として報告する。

3　調査の記録

1）　竪穴式住居跡　（遺構記号　SC）

竪穴式住居跡は、D－1・2区でSC－08、E－2区でSC－09の2軒を調査した。ともに台地の縁辺に営まれている。

SC－08　（Fig.70・71）

直径5.5mほどの円形プランの竪穴式住居跡である。西側は調査区外にある。SD－01と試掘壙に切られているため、周壁は部分的にしか残っておらず、南側の周壁も上端は崩れている。また、遺構上面はかなり削平を受けており、周壁は高さ20～25cmほどしか遺存していない。埋土は、1cmから数mm大の炭化物を含む赤褐色粘質シルトが、上層から下層まで満遍なくつまる。

床面の中央付近で土壙SK－57を検出した。埋土は炭化物の小粒が混じる暗赤褐色粘質シルトである。中層部に薄い灰層が堆積していた。壁は焼けていないが、住居の中央に設けられた炉跡と考えた。他に小穴をいくつか検出した。この中で、SP－58～62は、SK－57を中心として、ほぼ同心円上に並ぶ。SC－08にともなう柱穴と考えた。柱間は1.4～1.7mを測る。柱穴の深さ

Fig.70　SC－08実測図（縮尺 1/60）

は、SP－58・59・61が床面から25～30cmと深いが、中央の土壙を挟み対称的な位置にあるSP－60・62は15cm前後とかなり浅い。埋土は、住居内の埋土と比較して、やや濁った赤褐色粘質シルトである。断面観察などで柱痕の確認に努めたが、検出できなかった。柱穴のつくる弧線を延長して、調査区外には2～3本の柱穴が残っていると考えられる。総柱数は7もしくは8本である。

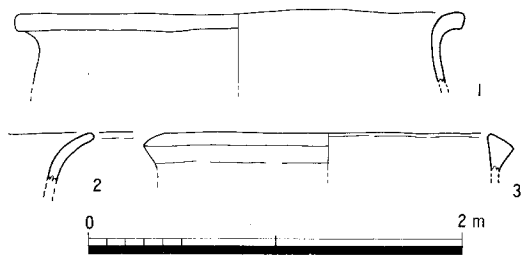


Fig.71　SC－08出土土器実測図（縮尺 1/4）

遺物は、住居の埋土中から弥生土器の細片と安山岩の破片、SK－57、SP－58・59からは弥生土器の細片が、ごく少量出土したのみである。その中で図化できたのは、住居埋土から出土したFig.71－1～3である。1は小片のため口径は不確実であるが、口縁先端が肥厚する壺と考えた。いずれも、弥生時代前期の板付II式土器古段階～中段階のものである。

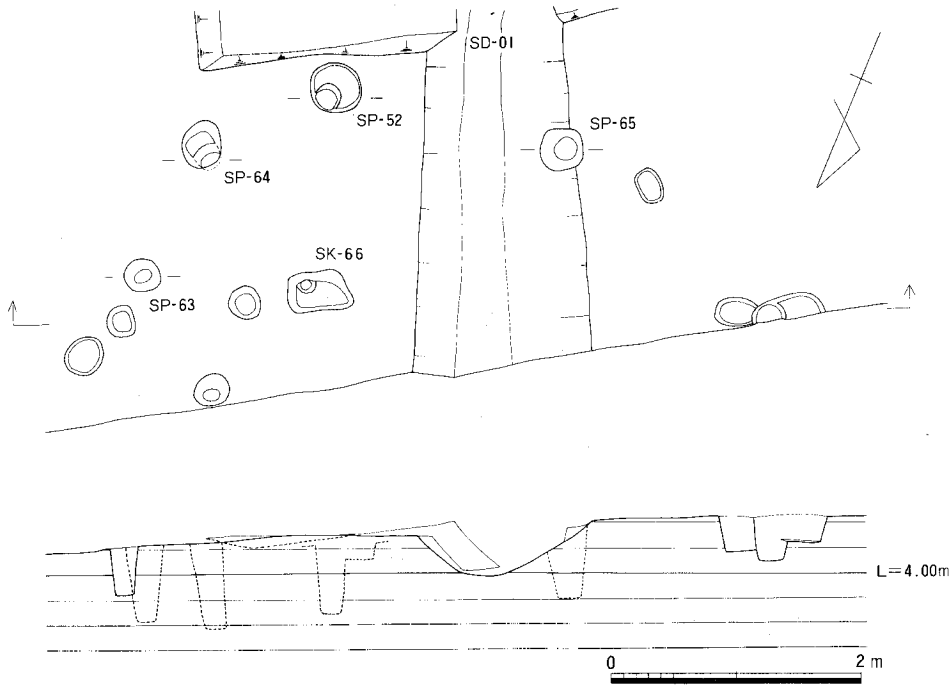


Fig.72　SC－09実測図（縮尺 1/60）

このように出土遺物が少量の上に細片であるため、それらが住居跡が営まれた時期をそのまま表しているとは考え難い。しかし、弥生時代前期の範疇で捉えることはできよう。

SC－09　(Fig.72)

E－2区で住居あるいは掘立柱建物の柱穴かと考えられる小穴をいくつか検出した。周辺を精査して小穴の検出に努めた。その結果、やや不整ではあるが、半径2.2～2.3mの同心円上に並ぶ小穴SP－52・63～65の4個の小穴を確認した。これらは深さが60～70cmと深く、竪穴式住居の柱穴と考え、SC－09とした。柱穴が弧状に並ぶことから、円形プランの住居跡と考えられる。柱穴の間隔はSP－52・63間、SP－52・65間で2mを測り、SP－64はSP－52とSP－63の中間位置に掘られている。前述のSC－08と比べると、柱間がやや広い。柱数は、柱穴の弧線を延長して6本と考えられる。また、SK－66は、弧状に並ぶ柱穴のほぼ中央に位置し、炉跡とも考えたが、埋土は黒色有機質粘質シルトで、この住居跡にともなうとは考えられない。

周壁は、平面的に確認できなかった。調査区壁でも痕跡はなく、6層が検出面の直上に堆積している。柱穴の検出面は、西から東へ緩やかに傾斜している。かなり深く削平されたものと考えられる。他の円形プランの竪穴式住居跡の例では、柱穴がつくる同心円と周壁との間には1mほどの空間があり、SC－09は直径6.5m前後の円形プランの住居と考えられよう。

出土遺物は、SP－52から出土した弥生土器の細片が6片のみである。図示できるものはないが、弥生時代前期の薄い平底がつくとみられる甕の胴下半部破片がある。

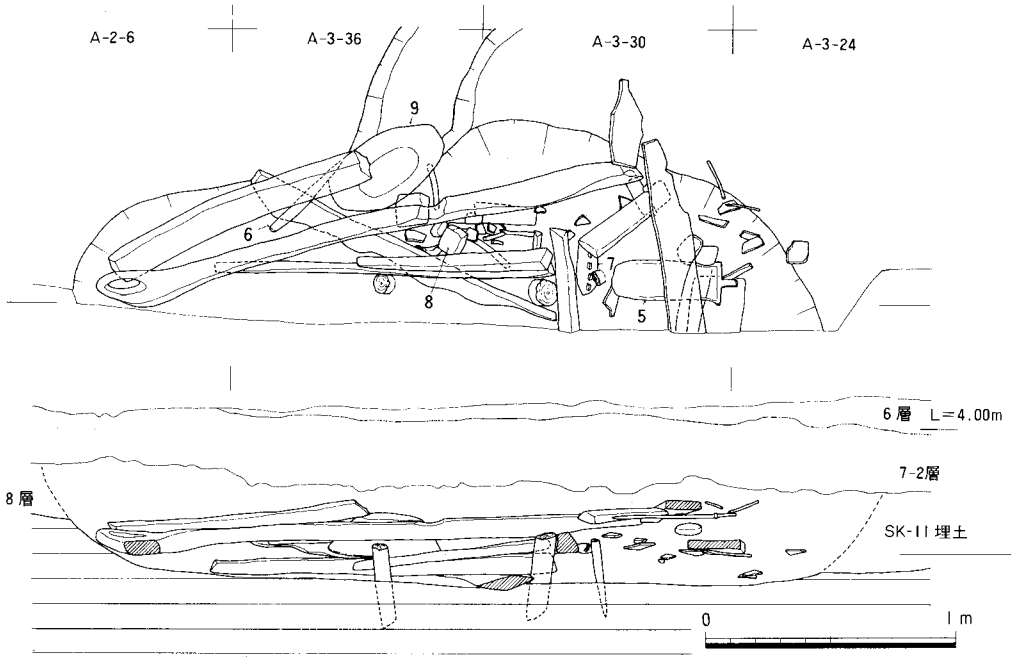


Fig.73　SK－10実測図（縮尺 1/30）

本住居跡は、SC－08と同じく弥生時代前期と考えておきたい。

2）　土壙　（遺構記号　SK）

土壙はSK－10～16・54・55・57の10基を検出した。その中でSK－57はSC－08にともなう炉跡である。また、SK－10・11・12・15からは、木器の未成品・割材・板材・伐採木が出土した。これは、木器や木製品を製作加工する過程で行われた水中浸漬と考えられる。貯木土壙と呼んでおこう。この他、SK－13・14・16・54・55の５基は、性格不明の土壙である。

SK－10　(Fig.73～77・巻頭図版1・Pl.7)

木器の水中浸漬用の貯木土壙と考えた。調査区の南壁沿い、A－３区北西側で、後述するSK－11～13とともに切り合った状況で検出した。不整な楕円形の平面プランの土壙で、長軸長３ｍを測る。南側が調査区外にあり、短軸長は不明である。壙底は舟底状をなす。

７－２～８－１層を除去し、８－２～８－３層を掘り進めていく過程で、木器の未成品や板材が多数出土し始めた。したがって、SK－10の掘り込み面は８層の上層部分と考えた。また、SK－11との切り合い関係は、埋土が同じ暗黒褐色の粘質シルトであり、遺物が折り重なるように出土したため、面的には確認できなかった。しかし、後述するように、SK－11の掘り込み面は８－４層であり、SK－11よりSK－10が新しいと考えた。

出土遺物は木器の未成品と、素材である板材・割材・伐採木が主体である。未成品は上層部分からまとまって出土した。下層部分～壙底には板材・割材や伐採木が積み重ねられ、杭や矢

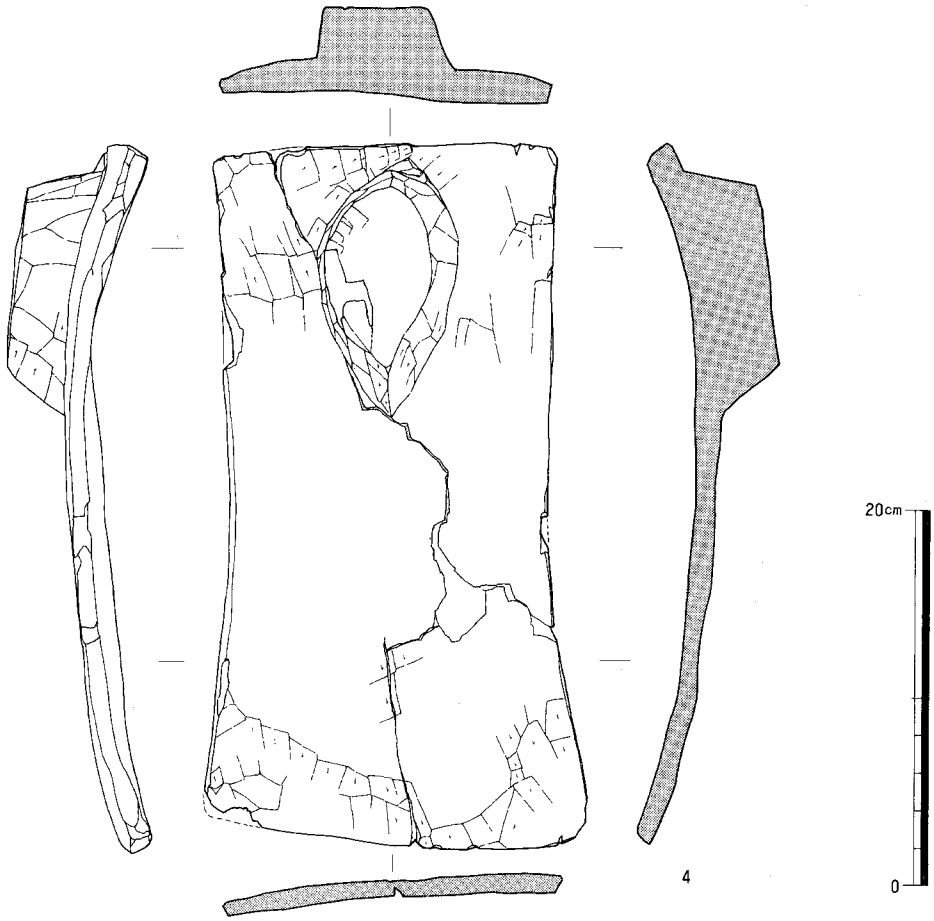


Fig.74　SK－10出土木器実測図　1（縮尺 1/4）

板を打って浮遊を防いでいる。4～6・9は未成品である。4は平鍬で、柾目材を使い、各所に削り痕が残る。5は一本造りの鋤で、柄部を欠損する。鋤身の側縁部分には、幅1.0～1.5cmの段が削り出されている。柾目材を利用。6は芯持ち材の一部を斜めにそぎ取り、幅2cm、長さ13cmほどの面を作る。この面を使う叩き道具の一種であろうか。握り部分にも若干の加工を施している。9は大型の楕円形容器の未成品である。両端に箍部を削り出している。木取りは柾目で、片側に樹皮部分が残っており、ミカン割りされた丸太材は直径60cm以上である。7は脚付きの楕円形容器である。精巧なつくりで、製品と考えられる。破損しており、混入品か。8と638は、クサビ状に片面を斜めに削り取ったものである。割材としては、Pl.12－636と637がある。637は長さ47cmの板目に近い斜めの木取りで、一端に加工を施す。636は長さ124.8cm、幅20cmを測る板目材で、両端にはミカン割する前の丸太材に切断した痕跡が残る。

この他、土器・石片が埋土中から出土している。当初、SK－11とSK－10を区別せず、一緒に

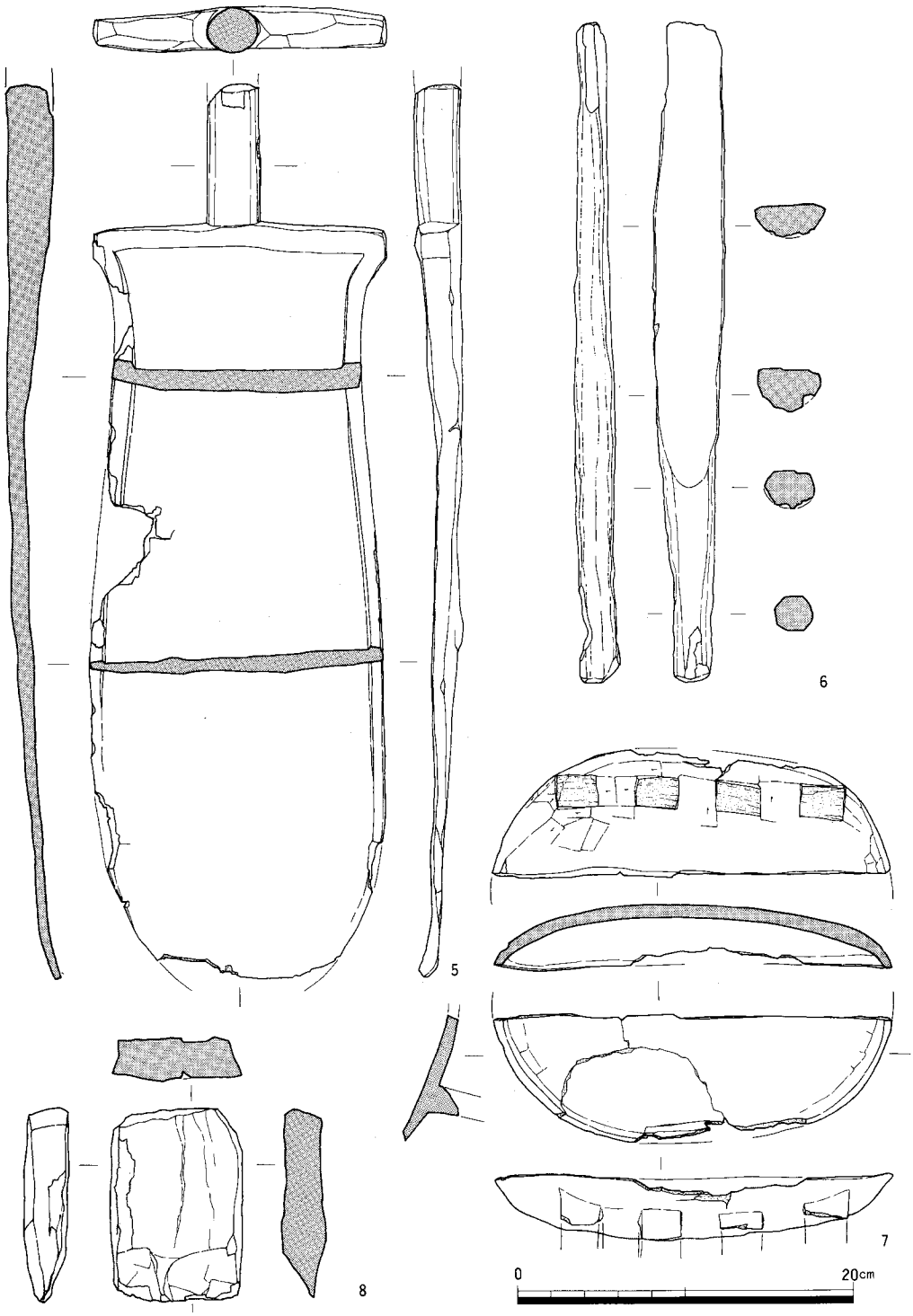


Fig.75　SK－10出土木器実測図　2（縮尺 1/4）

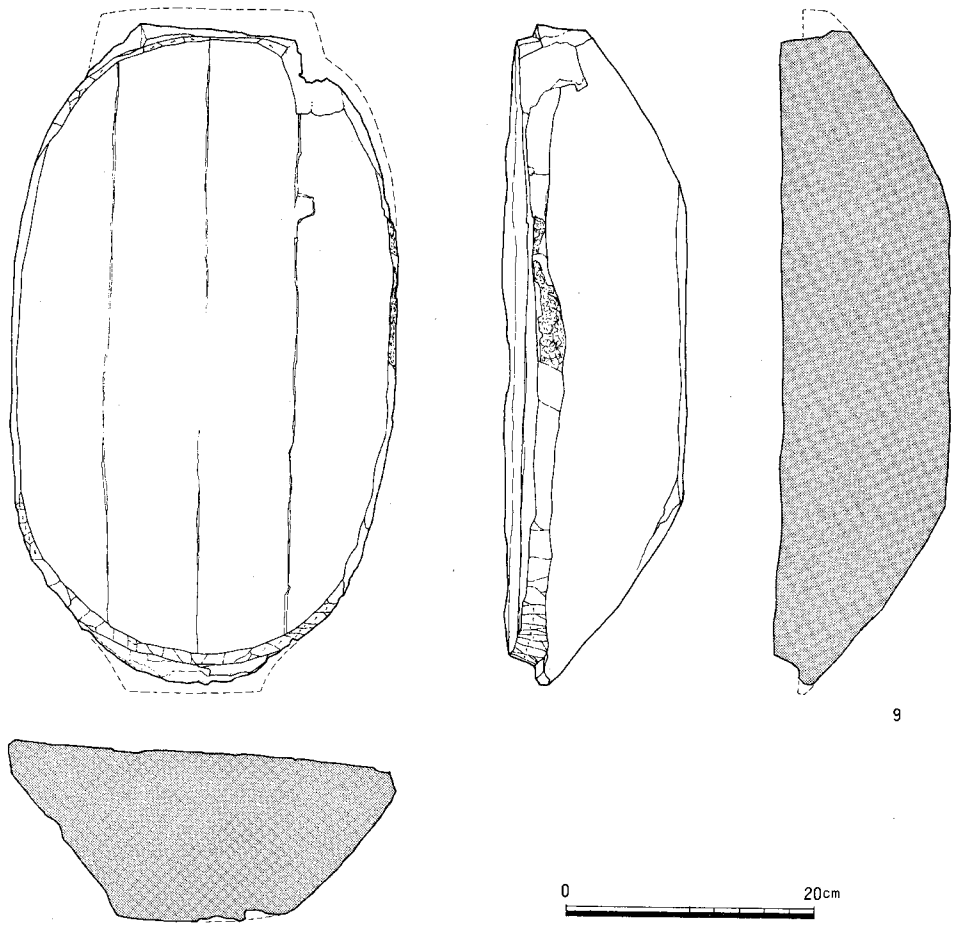


Fig.76　SK-10出土木器実測図（縮尺 1/6）

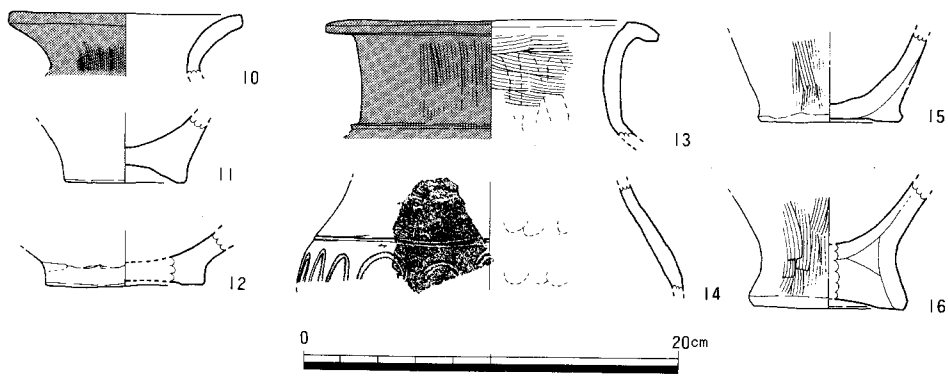


Fig.77　SK－10出土土器実測図（縮尺 1/4）

取り上げてしまった。そのため、若干の混乱があるが、確実にSK－10出土のものは10～12である。10・12は甕の口縁部と底部片で、11は外面がナデ調整を施しているので、鉢の底部片と考えた。いずれも、板付II式土器古段階～中段階に分類できる。他に、13のように肩部から緩やかに屈曲して筒状の頸部へつづく壺や、16のような厚い上げ底の腰のやや高い甕の底部がある。板付II式土器新段階に比定できるものである。これらの土器は、SK－10が貯木土壙であるので、もともとSK－10にともなう遺物ではない。周囲の８層から流し出されたものと考えられる。しかし、これらはSK－10時期の上限を示している。さらに、SK－10の上面に堆積した７－２層からは、多量の遺物が投棄された状態で出土した。それらに含まれる土器は、後述するように板付II式土器新段階～須玖Ｉ式土器古段階のものである。これがSK－10の下限となる。以上から、本土壙の時期は、弥生時代前期末の板付II式土器新段階と考えられる。

SK－11 (Fig.78～85・122・Pl.７)

調査区の南壁沿い、Ａ－３区とＢ－３区の境界部で検出した。SK－10・12・13と切り合う。８－３層を掘り上げた後、Ａ－３－36区とＢ－３－31区で、土壙の西端部分の落ち込みに気がついた。Fig.78に図示したように、SK－11の上層にあたる７－２～８－３層には、破損した土器・石器・木器が、西側の台地から投棄された状態で多量に出土している。(Pl.９)。したがって、SK－11の掘り込み面は、検出面の８－４層と考えられる。

平面形は著しい不整形である。主軸長は2.94ｍを測る。幅はSK－10と切り合っているので、不明である。深さは20～25cmほどである。壙内には、西側に段状のテラス部分があり、北側には長軸長0.87ｍ、短軸長0.5ｍの不整楕円形の凹部がある。東側の壁は凹凸が著しい。複数の土壙が重複した可能性も残すが、ここでは１基として取り扱った。

遺物は埋土中から満遍なく出土したが、木器や割材・板材は、壙底にほぼ沿うように出土した。壙底は西側がやや高くなり、出土レベルが高く、８－３層のものとの分別に手まどった。

遺物には、木器・土器・石器・土製品がある。この中で、木器には未成品・割材や板材の素材のほかに、製品の破損したものが含まれる。当初、８－３層からの混り込みと考えていたが、壙底近くからも破損品が出土しており、混入とばかりは考え難い。このように、SK－11は、木器の未成品や素材が出土することから、貯木土壙と考えたが、破損品が混じることから、SK－10や後述するSK－12・15とは、性格が異なるのかもしれない。

出土木器には、農具・工具・武器・容器などがある。17～21は農具である。17は組み合せ式の鋤の未成品である。刃をたてていないだけの完成直前のものである。カシの柾目材を使っている。18は泥よけ具の未成品と考えた。取り上げ時に一部が細片化してしまい、接合復元ができなくなってしまった。平面形は隅丸方形で、上辺の両隅は、とくに丸く仕上げられる。上面は上辺より中央部分を中心に彎曲する。推定長35cm、幅31.6cmで、福岡市博多区那珂久平遺跡出土の弥生時代後期の例とくらべ、かなり大形である。板目材を素材とする。19・20は諸手鍬

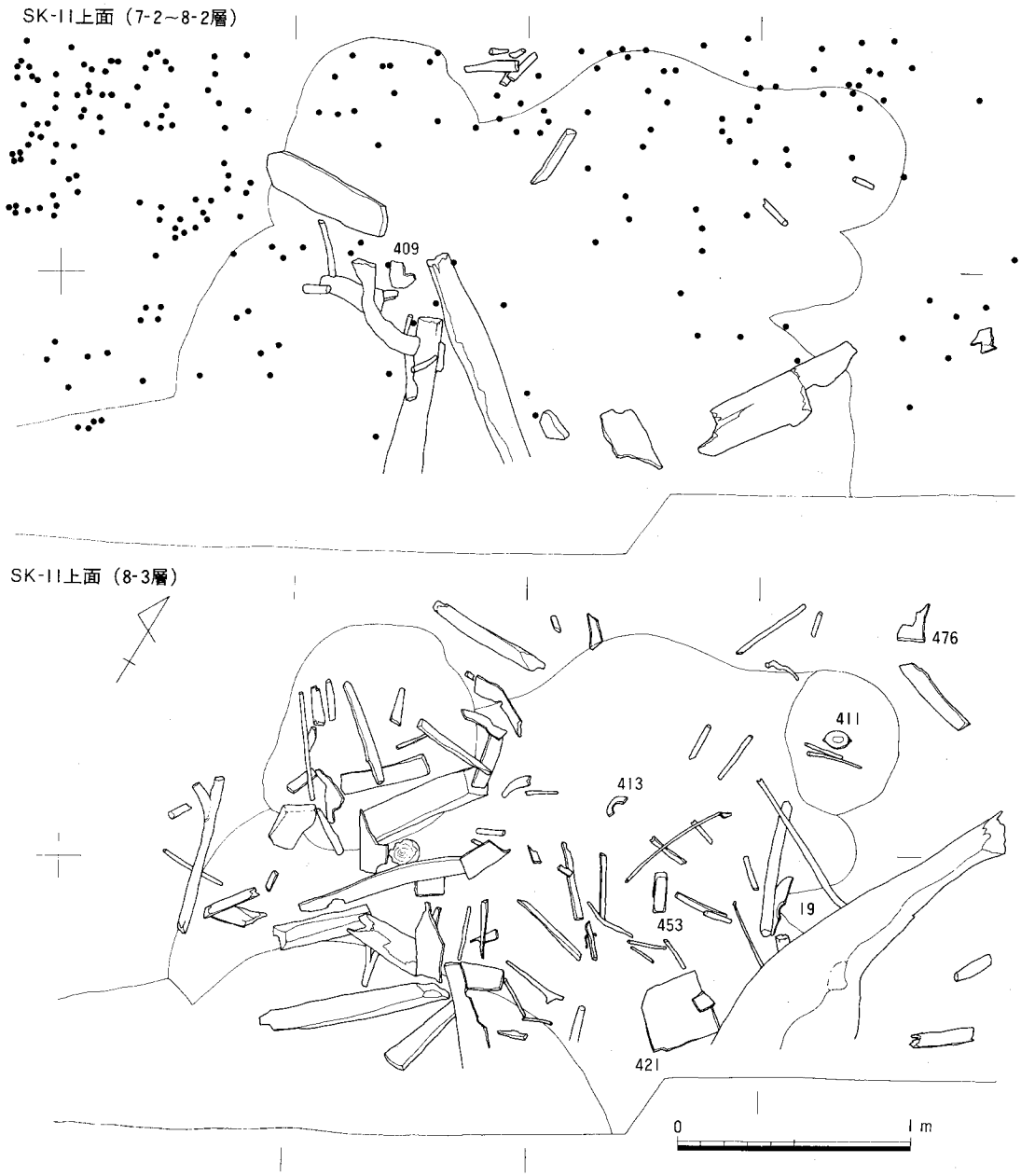


Fig.78　SK－11実測図　1（縮尺 1/30）

の破片である。カシの柾目材を使う。21は芯持ち材で、鍬または鋤の柄と考える。22は竪杵の搗部の破片である。搗部端面は磨滅痕が著しい。割材を利用する。19・20・22は混入か。

23・24は工具である。23は柱状片刃石斧の膝柄の未成品である。樹枝と幹の枝分れ部分を利

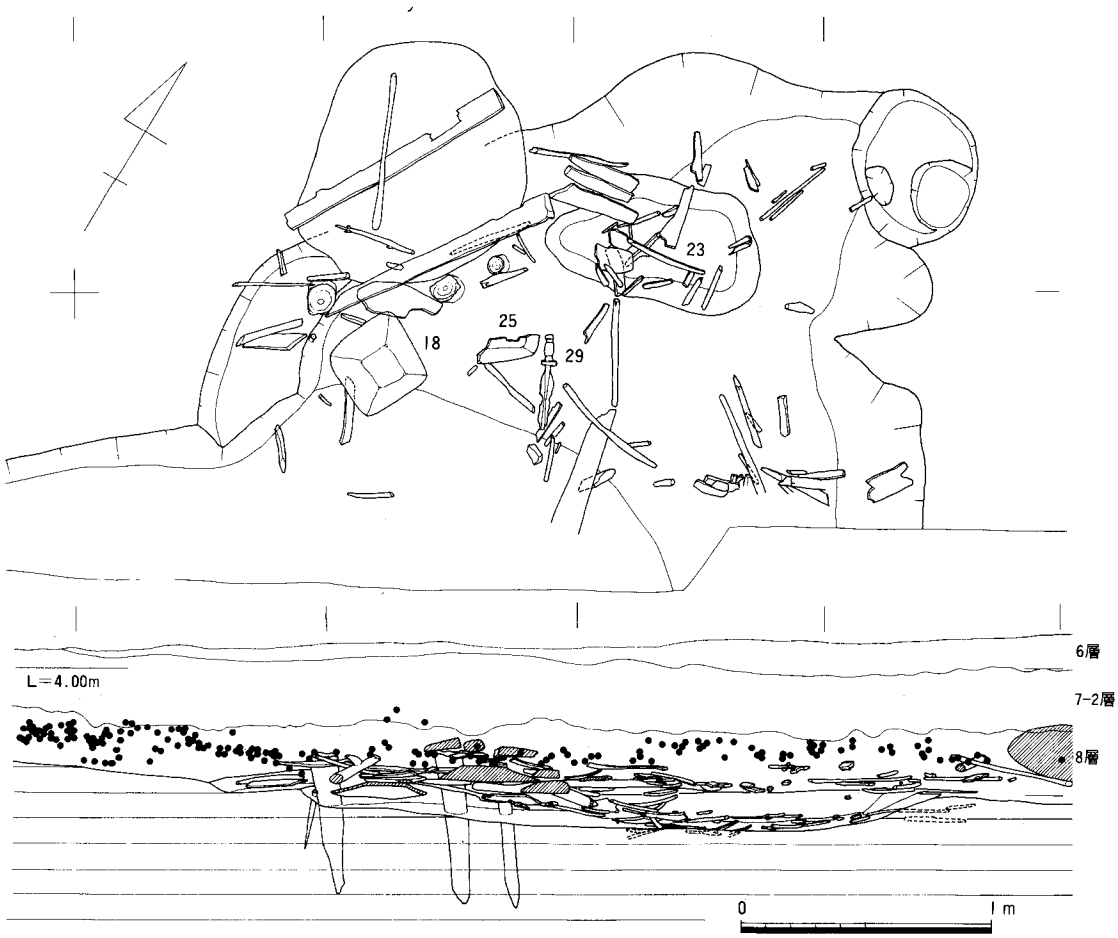


Fig.79　SK－11実測図　2（縮尺 1/30）

用し、木目に沿って半截した幹部を台部とする。台部は芯割りのままである。24は太型蛤刃石斧の直柄である。握部端部に切断痕が残され、未成品と考えられるが、着装孔があけられ、完成直前のものであろう。握部が28cmと短いので、再加工品か。芯近くのミカン割り材を用いている。

25～27は容器の破片である。25は隅丸長方形の容器で、内外面ともにかなり平滑に丁寧に仕上げられる。26は大形の長方形容器であろう。端部は箍状に削られ、手懸かりとされている。27は脚付容器であるが、小片のために形状は不明。SK－10出土の7のように楕円形のものか。

28・29は剣である。28は剣柄部の破片である。中央部がわずかにふくらみ、その上下に段を削り出す。鐔部には脊が折れた痕跡を残す。29も28と同様な柄部をもつ。鋒部と柄尻の一部を欠き、土圧・乾燥で若干変形するが、原状をほぼとどめている。剣身は上から1／3ほどの所で、わずかにくびれる。脊は円柱状で鎬は表現されていない。もと部は緩やかなふくらみをも

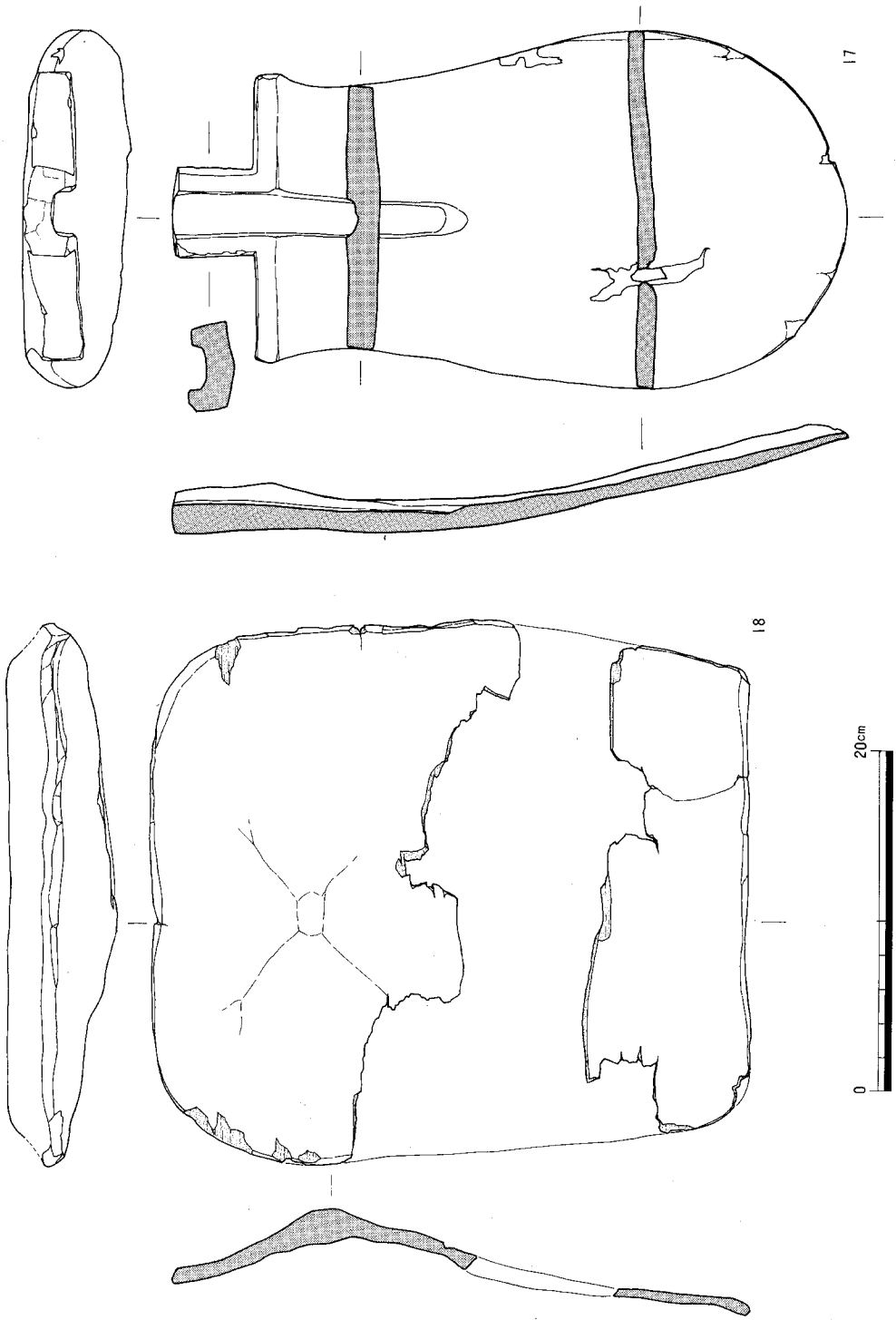


Fig.80　SK－11出土木器実測図　1（縮尺 1/4）

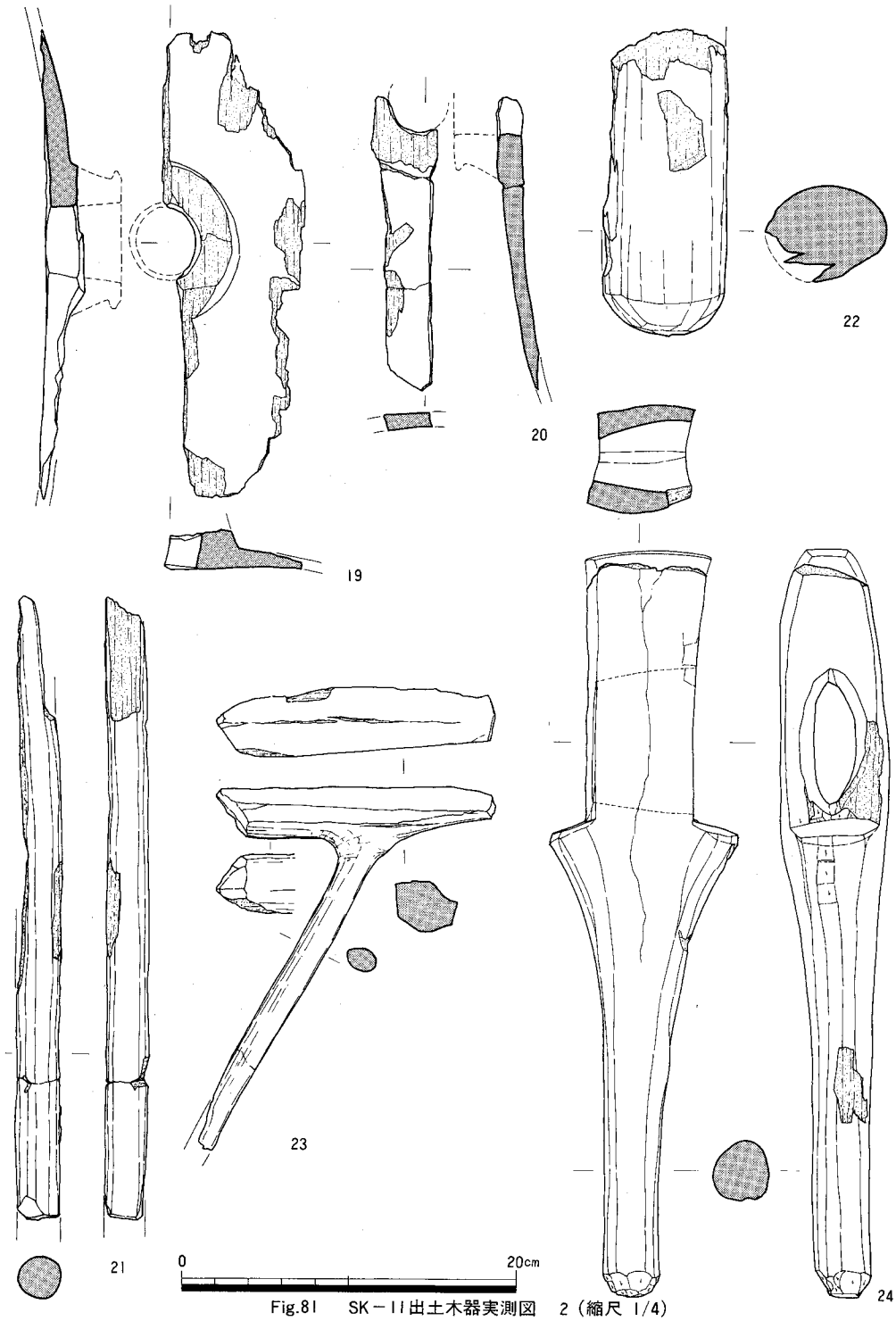


Fig.81　SK－11出土木器実測図　2（縮尺 1/4）

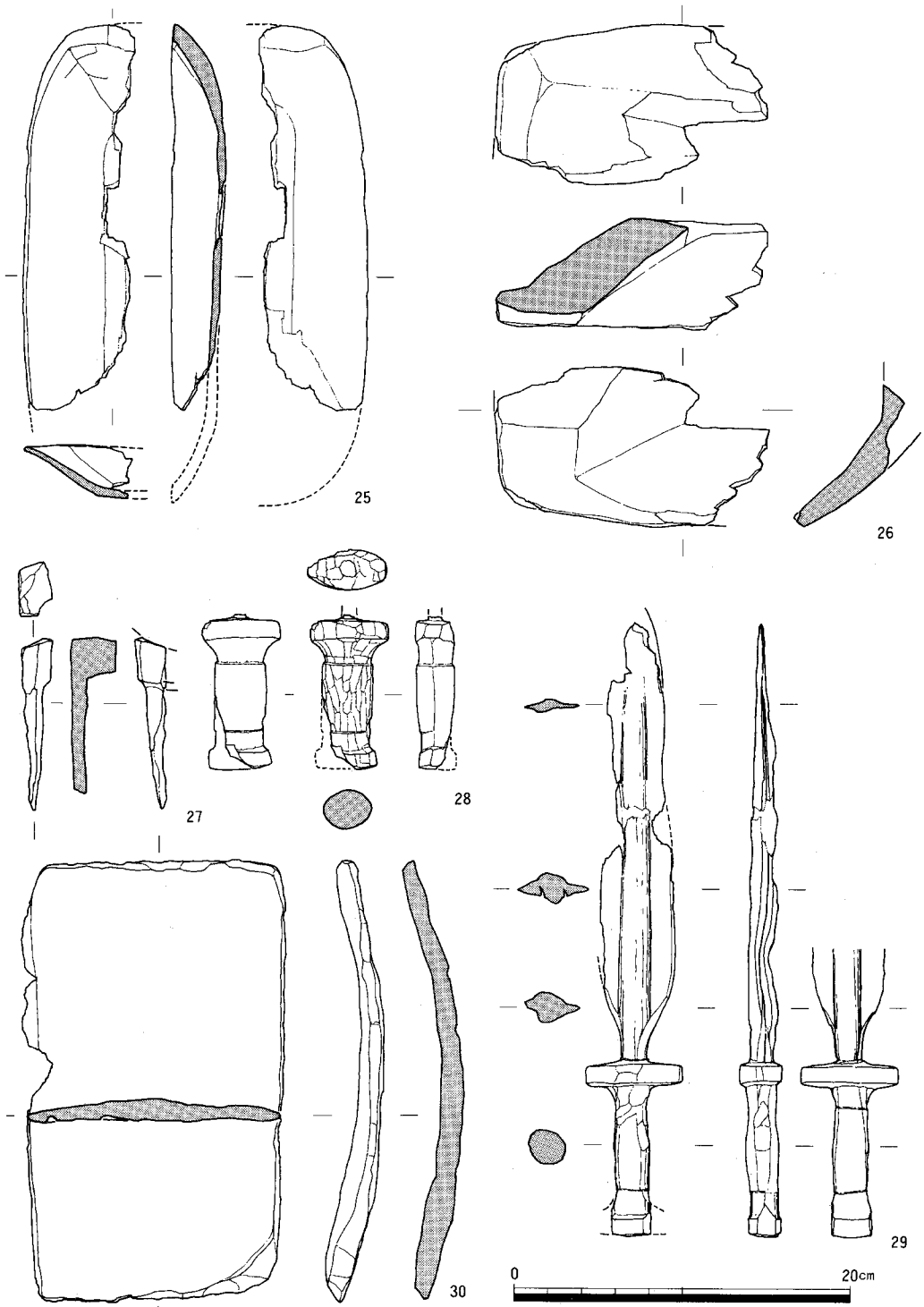


Fig.82　SK－11出土木器実測図　3（縮尺 1/4）

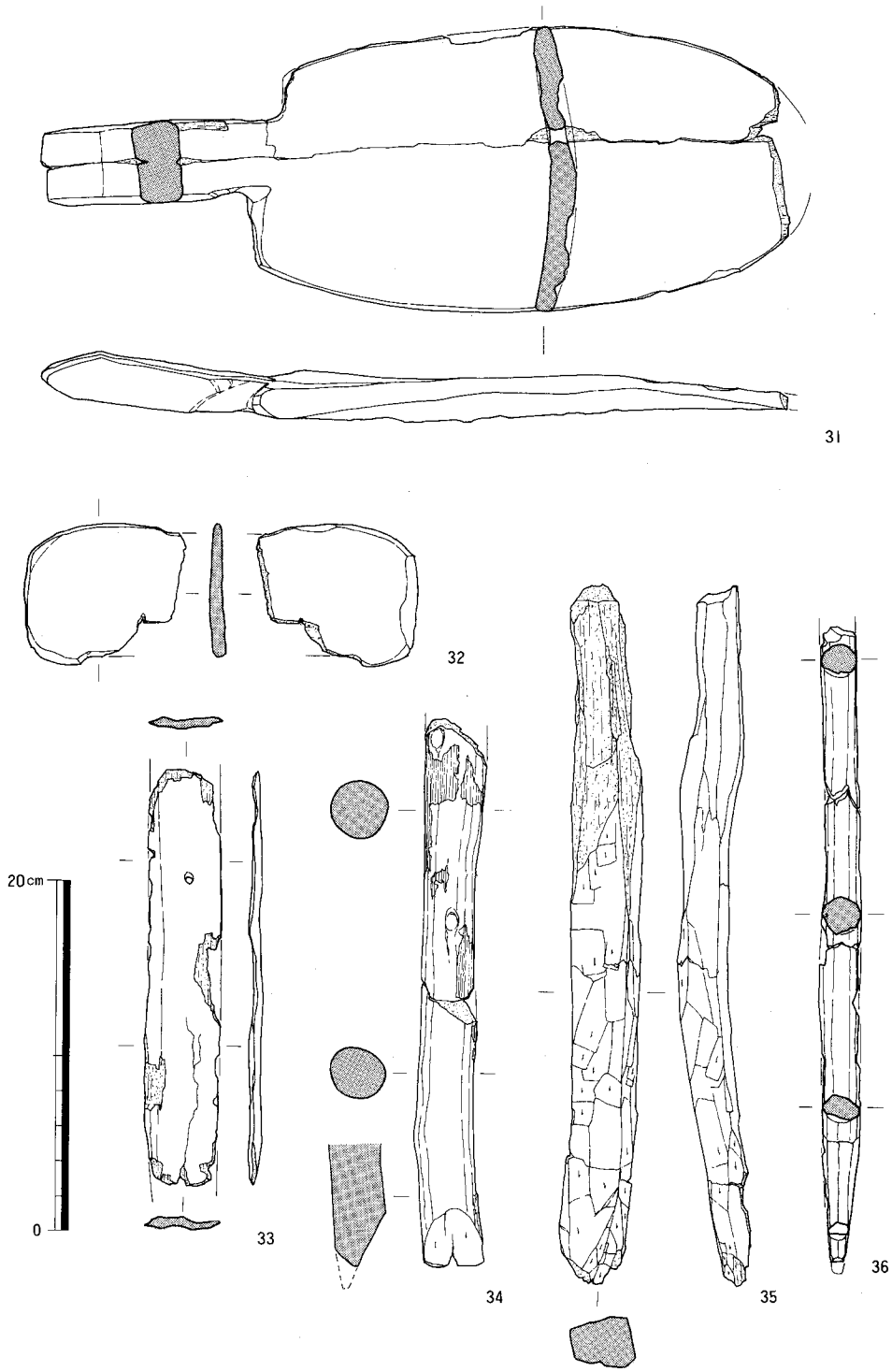


Fig.83　SK－11出土木器実測図　4（縮尺 1/4）

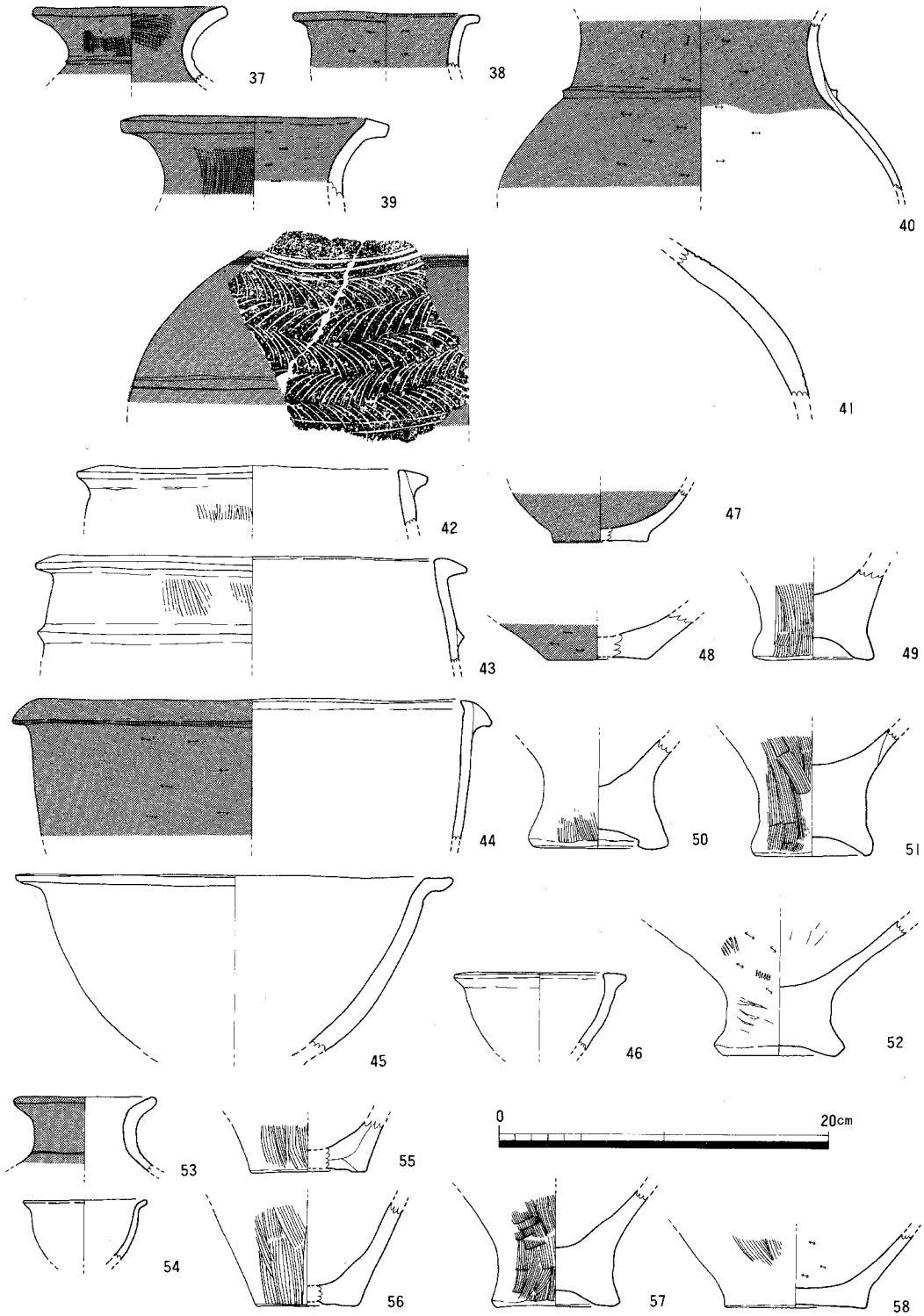


Fig.84　SK－11・12出土土器実測図（縮尺 1/4）

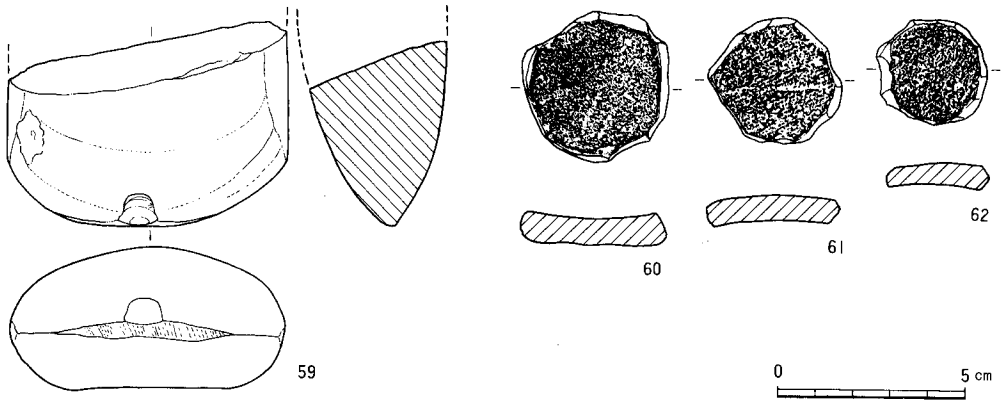


Fig.85　SK－11・12出土石器・土製品実測図

ち、円柱部へつづく。全体としては、脊部が柄部からとび出したような姿である。

31は用途不明の木器である。わずかに彎曲する身部に、短い柄がつく。柄の根元には緊縛痕が残る。形状的には組み合せ式の鋤に近いが、板目材を用いているので考え難い。

30は柾目、32は板目の板材である。30は両端が緩やかに彎曲する。32は上辺と下辺に切り込みがみられる。ともに用途は不明。

36とPl.14－239は端部を削り尖らせた樹枝である。33は割り屑、34は一端を切り落された枝材で、節部を簡単に削り取る。35は四周を削った割材である。加工途中のものか。一端は焼け焦げている。この他、Pl.14－640・641は柾目の板材と割材、642は伐採木である。

次に、土器は埋土中から木器や板材などに混じり、満遍なく出土している。いずれも破片で、完形に接合復元できるものはない。SK－11が掘り込まれた８－４・５層といった８層下部からの流れ出しか、埋没する過程での混り込みと考えられる。

37～41は壺である。外面には黒色顔料が塗布されている。37は頸部の付け根に削り出し突帯がめぐる。41は頸部の付け根に３条、胴部上半に２条の沈線をひき、文様帯を区画して、その中に羽状文をヘラ状工具で施文する。Fig.122－145も壺である。頸部に２条の沈線を巡らす。上方の沈線の周辺にはハケメが意識的に残される。下方の沈線の下には羽状文が施文され、その中に部分的にベンガラが残存していた。頸部の文様帯に帯状にベンガラを塗布したものと考えられる。板付II式土器中段階に分類できる。

42～44は甕の口縁部片である。刻目突帯文土器系統のもので、口縁に断面三角形の突帯を貼付する。他に如意形口縁の破片もあるが、出土量はごく少なく、細片ばかりである。

45・46は鉢である。45は口縁部を強く屈折させ、46と同じく口縁に突帯を貼付したような外観をもつ。

底部破片の中で、47は鉢、48は壺、49～51は甕である。甕の底部は、すべて厚い上げ底で、

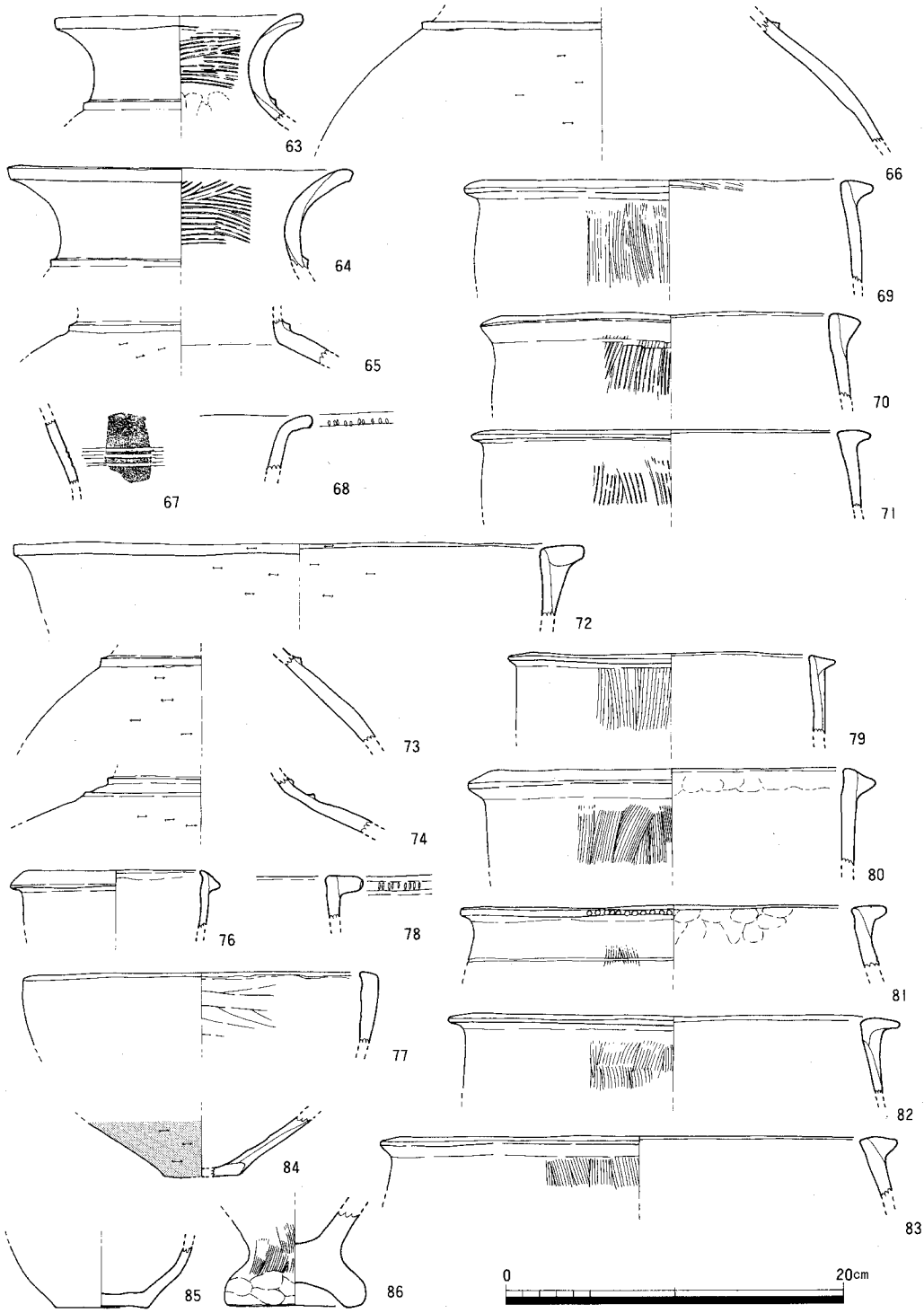


Fig.86　SK－11～13上面７～８層出土土器実測図　１（縮尺 1/4）

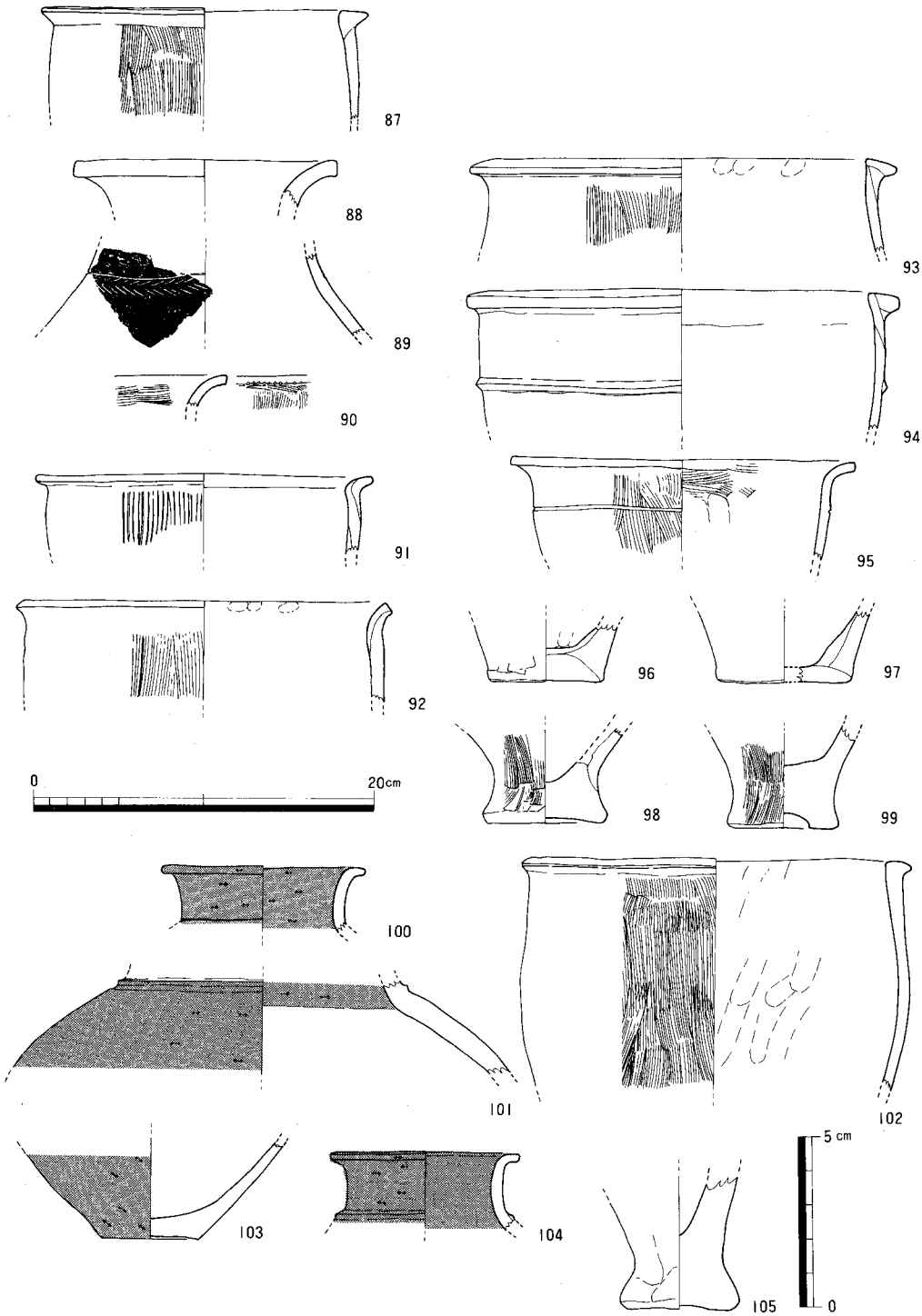


Fig.87　SK－11～13上面７～８層出土土器実測図　２(縮尺 1/4・1/2)

板付II式中段階以前の薄い平底は出土していない。52は胴部下半のひらき具合いが大きく、脚台付鉢と考えた。

以上の埋土から出土した土器は、板付II式土器中段階～須玖I式土器古段階に比定できる。

このほか、SK－10の遺物と混乱したが、60～62の土器片利用の円盤がある。甕や鉢の胴部破片を円形に打ち欠き、周縁を擦って仕上げる。土器と同じく混り込みの遺物と考えられる。

さて、前述した土器だけからは、SK－11の時期が決定できない。しかし、SK－11が埋没した後に、上層に投棄され推積した7～2～8－3層の土器と、SK－11が掘り込まれた8層下部、つまり8－4・5層の土器によって、時期を決定できる。

7－2～8－2層出土の土器をFig.86、8－3層出土のものをFig.87に図示した。前者の土器の中で、壺は、いずれも口頸部が緩やかに反転してひろがるものである。甕と鉢は口縁部に断面三角形あるいは「コ」字形の凸帯を貼付する刻目突帯文土器の系譜をひくものである。如意形口縁をもつ鉢あるいは甕もあるが、ごく少量である。甕の底部は、いずれも厚い上げ底である。他に直口縁の鉢がある。これらは板付II式土器新段階～須玖I式土器古段階に分類できる。

これに対して、8－3層の土器は、若干古いものも含む。たとえば、89は壺の肩部付近の破片で、胴部上半が緩やかにすぼまって頸部へつづく。肩には羽状文をヘラ状工具で施文する。板付II式土器中段階に比定できる。また、甕の底部には薄い平底のものがある。これも板付II式土器中段階まで遡る。

以上のように、SK－11の上層には板付II式土器中段階から須玖I式土器古段階の土器が投棄されている。したがって、SK－11は板付II式土器中段階以前のものと言える。

次に、SK－11周辺の8－4・5層から出土した土器をFig.87に図示した。しかし、SK－10～13周辺の8－4・5層出土の土器は、極端に少ない。100は8－3～8－4層、104は8層出土の壺である。確実に8－4・5層出土と言えるものは、101～103、105である。101は肩部から緩やかに頸部がすぼまる壺である。102は小さめの断面三角形突帯を口縁部に貼付するもので、胴部はほとんど張らない。105はミニチュア土器である。これらは、板付II式土器中段階の範疇で捉えることができよう。

したがって、SK－11が掘り込まれるのは、板付II式土器中段階以降ということになる。以上からSK－11の時期は板付II式土器中段階と考える。

SK－12　(Fig.84・88・89　Pl.8)

B－3－25区で検出した貯木土壙である。SK－11を掘り下げる過程で検出した。SK－11と切り合うが、面的に先後関係を確認できなかった。しかし、SK－11にともなう板材などが上面を覆っていることから、SK－11に先行して造られたものと考えられる。

平面形はほぼ円形を呈する。直径は0.84～0.98m、深さは0.53mを測る。埋土は、上層部が有機質の黒褐色粘質シルト、中～下層部は暗褐灰色粘質シルトである。

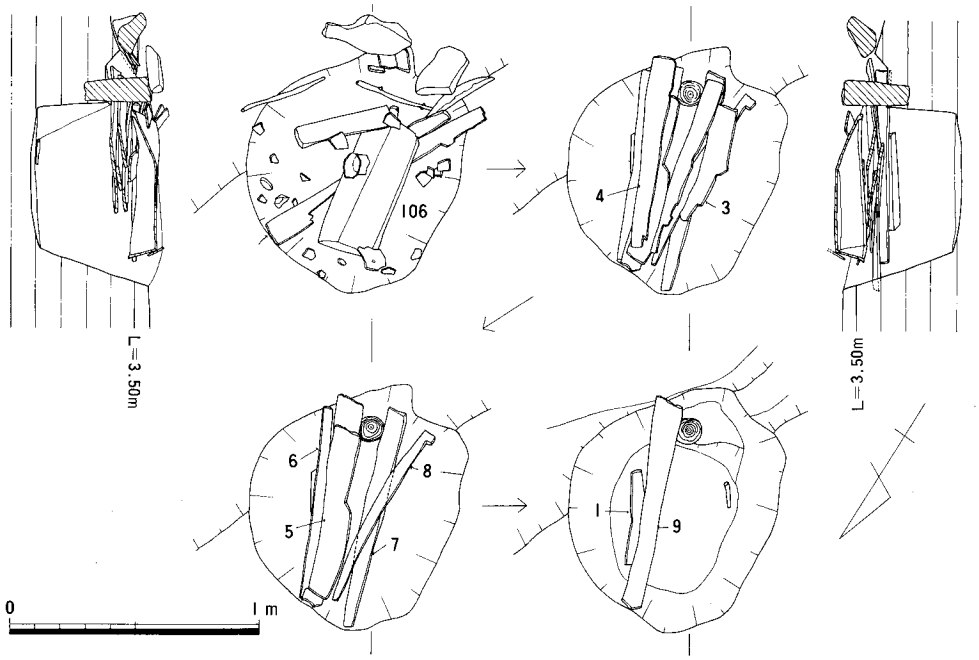


Fig.88　SK－12実測図（縮尺 1/30）

上層部には、木製の大型で長方形の蓋がおかれ、その下に9枚の板材や割材が積み重ねられた状態で出土した。また、土器・石器の破片が混じる。中～下層部には遺物がほとんどなく、壙底近くで木片が1点出土したのみである。このように、遺物が上層部に集中し、埋土が上下でかなり異なることから、本来、ドングリピットなどとして使われた土壙が埋没し、残った凹部に木器・板材や割材を水中浸漬した可能性が強い。

出土遺物の中で、106は大型の容器の蓋と考えた。長さ70.5cm、幅20.1～25.2cmを測る。片側面は面取りされており、同様なものを2つ組み合せて蓋とするものであろう。板目材を刳り抜いて作っている。106の下層に集積された板材と割材は9枚を数える。1枚のみ37.8cmと短いが、他の8枚は長さ60～90cmを測る（Tab. 1）。

Tab.1　SK-12出土の板材・割材の計測値一覧表

Fig.88	Pl.15	計測値 (cm) 長さ	幅	最大厚	特徴	遺物登録番号
1	—	37.8	6.7	1.4	ミカン割り	20101
2	—	64＋α	10.5	1.1	ミカン割り	20243
3	—	63.6	5.8	1.6	板目材	20235
4	645	74.6	8.5	2.5	ミカン割り	20230
5	647	75.4＋α	10.5	2.4	柾目材	20234
6	643	76	10.3	2.3	板目に近い斜めの木取り、穿孔	20049
7	644	78	10.5	2.3	両端に切断痕が残る。ミカン割り	20056
8	646	80	5.7	2.0	ミカン割り	20231
9	—	89.5	14.5	1.9	ミカン割り	20061

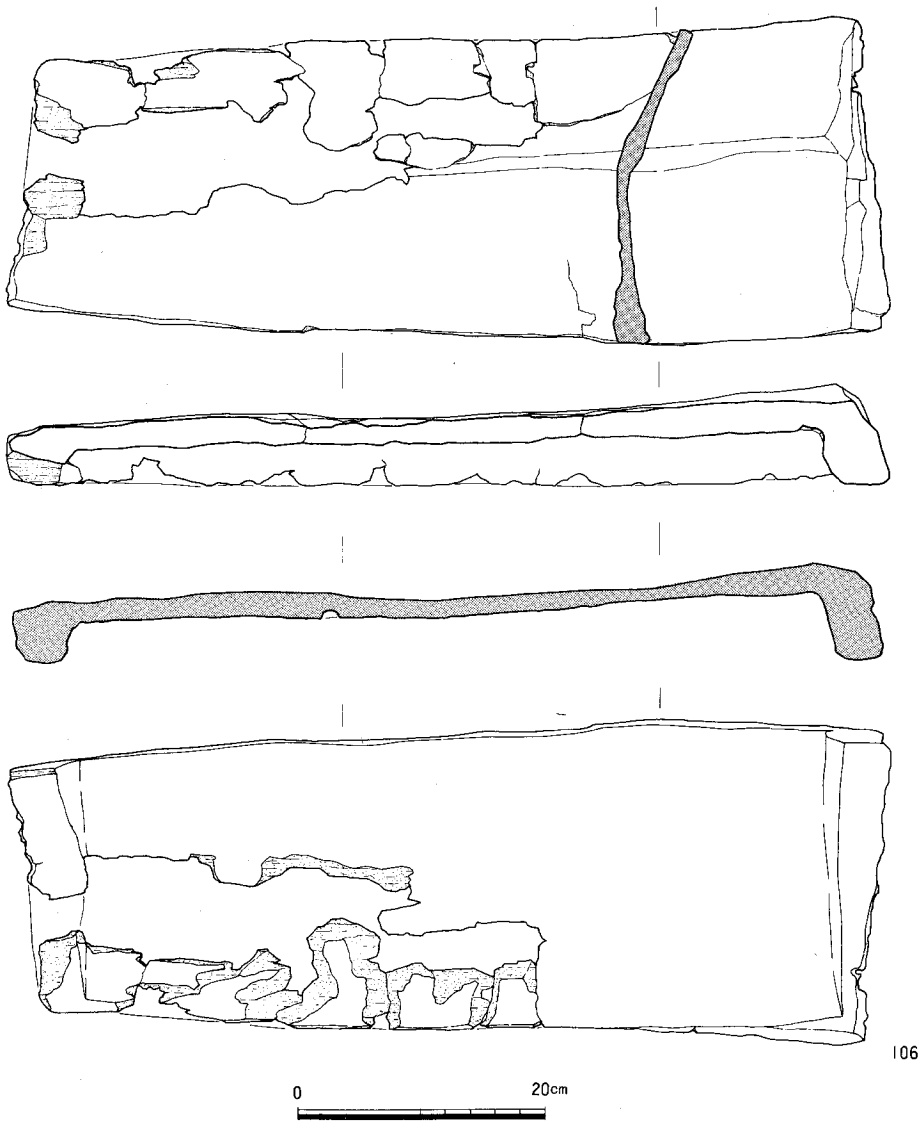


Fig.89　SK－12出土木器実測図（縮尺 1/6）

この他、土器と石器が出土しているが、貯木土壙の性格からいって、混り込みである。53・54は遺物の取り上げ時に混乱を生じたために、SK－11にともなう可能性を残す。確実にSK－12から出土した土器は、55～58である。55～57は甕、58は鉢の底部で、55・56は薄い平底の板付II式土器中段階以前のものである。57は、厚めの上げ底で、内面に乱雑な研磨を施す。須玖I式土器古段階に比定できる。

59は太型蛤刃石斧の刃部破片である。刃部には後に擦った痕跡があり鈍っている。石材は安山岩である。

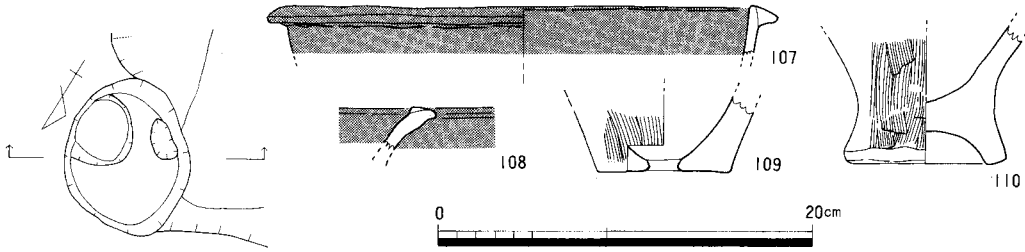


Fig.91　SK－13出土木器実測図（縮尺 1/4）

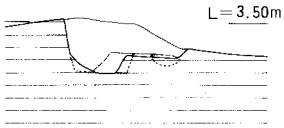


Fig.90　SK-13実測図（縮尺 1/30）

SK－12の時期は、SK－11との先後関係と、埋土中の土器から、板付II式土器中段階で捉えておこう。

SK－13（Fig.90・91）

SK－11の東側、B－3－13区で検出した。SK－11と切り合うが、先後関係は不明である。平面形は楕円形を呈する。長軸長0.63m、短軸長0.51m、深さ0.24mを測る小型の土壙である。壙底には小穴状の凹部がある。

出土遺物には、木片と土器片がある。107は鉢の口縁部片である。108は壺で、口縁部上面に薄く粘土を貼付して肥厚させる。内外ともに黒塗り磨研を施す。109は甕の底部に焼成後の穿孔を施し、甑としたものである。110は厚めの上げ底の甕である。板付II式土器中段階～新段階のものである。

土壙の時期も当該期と考えてよかろう。

SK－14　(Fig.92・Pl.7)

C－4－34区で、10層上面で確認した小型の土壙である。平面形は楕円形で、長軸長0.75m、短軸長0.53m、深さ0.17mを測る。樹枝や木片が、周囲から流れ込んだような状態で出土した。他に出土遺物はなく、時期や性格も不明である。

SK－15　(Fig.93～100・122、Pl.8)

D区とE区の境界部で検出した。8－5層の上面から伐採木や太型蛤刃石斧の直柄の未成品が出土したので、貯木土壙の可能性を考え精査したが、土壙の輪郭を確認したのは10層上面である。その上層の8－3・4層

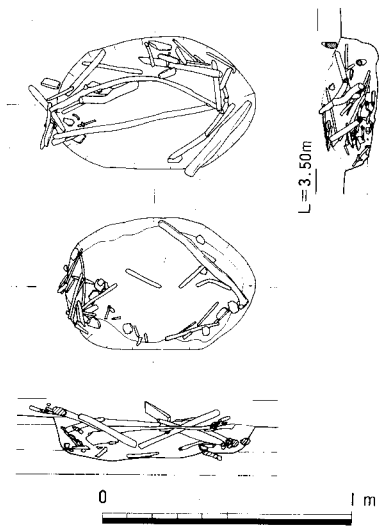


Fig.92　SK－14実測図（縮尺 1/30）

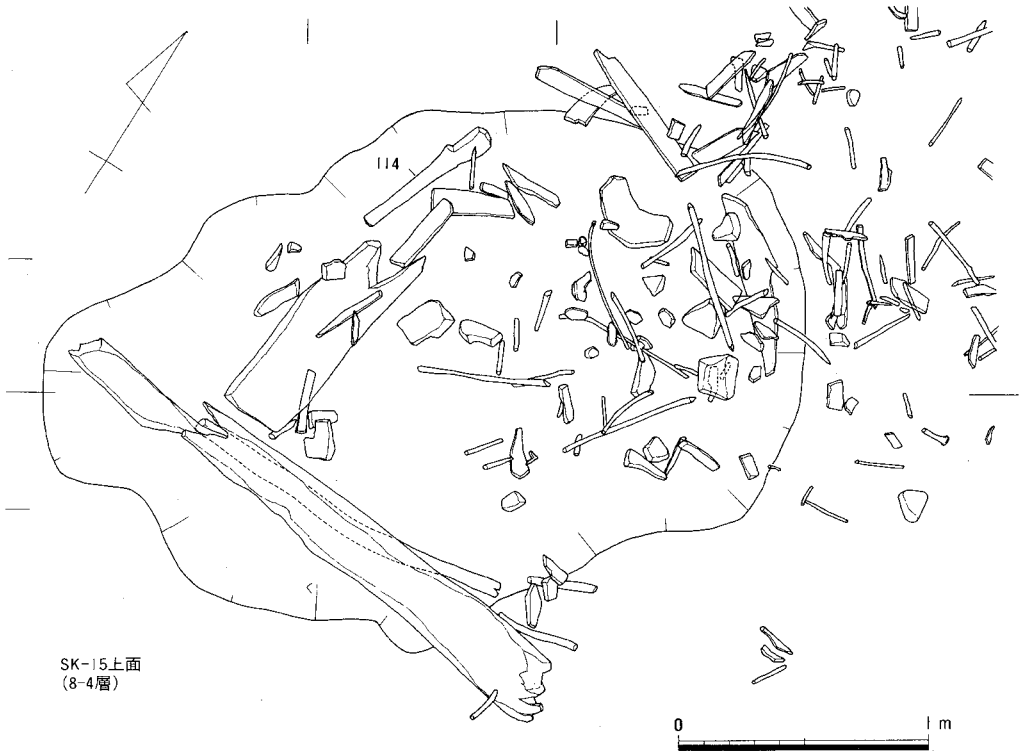


Fig.93　SK－15実測図　1（縮尺 1/30）

には、土器・木器・石器の破損品が投棄された状態で、集中して出土していることから、SK－15の掘り込み面は８－５層上面と考えてよさそうである。

土壙の平面形は不整な楕円形で、長軸長3.08m、短軸長1.9mを測る。８－５層上面からの深さは0.38mである。埋土は上層から下層まで有機質の黒褐色粘質シルトである。

出土遺物には、木器・土器・石器などがある。土器・石器は、いずれも破片である。貯木土壙の性格からいえば、周囲から流れ込み混入した遺物である。また、木器の中にも、８－５層に相当する上層部分には、周囲からの流れ込んだと考えられるものがあり、本来SK－15にともなうものとの分別に手間どった。ここでは確実にSK－15に浸漬されたと考えられる木器をまず報告する。

111はエブリの未成品である。ミカン割り材を素材とする。上部中央には樹皮が残る。上部中央を中心に、柄壺部分をつくるための、荒削りを施した段階のものである。112は鋤の柄部である。下端を欠く。柄身部と握部の境いに段が削り出される。握部は「∇」形に刳り抜かれている。板目に近い斜めの木取りである。113は芯持ちの丸太を素材とした容器の未成品である。円柱状に側面を削り、さらに下半部を削り込み大略の形を整え、上面から柱状片刃石斧を用いて刳り抜きを始めた段階のものである。114・115は太型蛤刃石斧の直柄の未成品である。着装孔

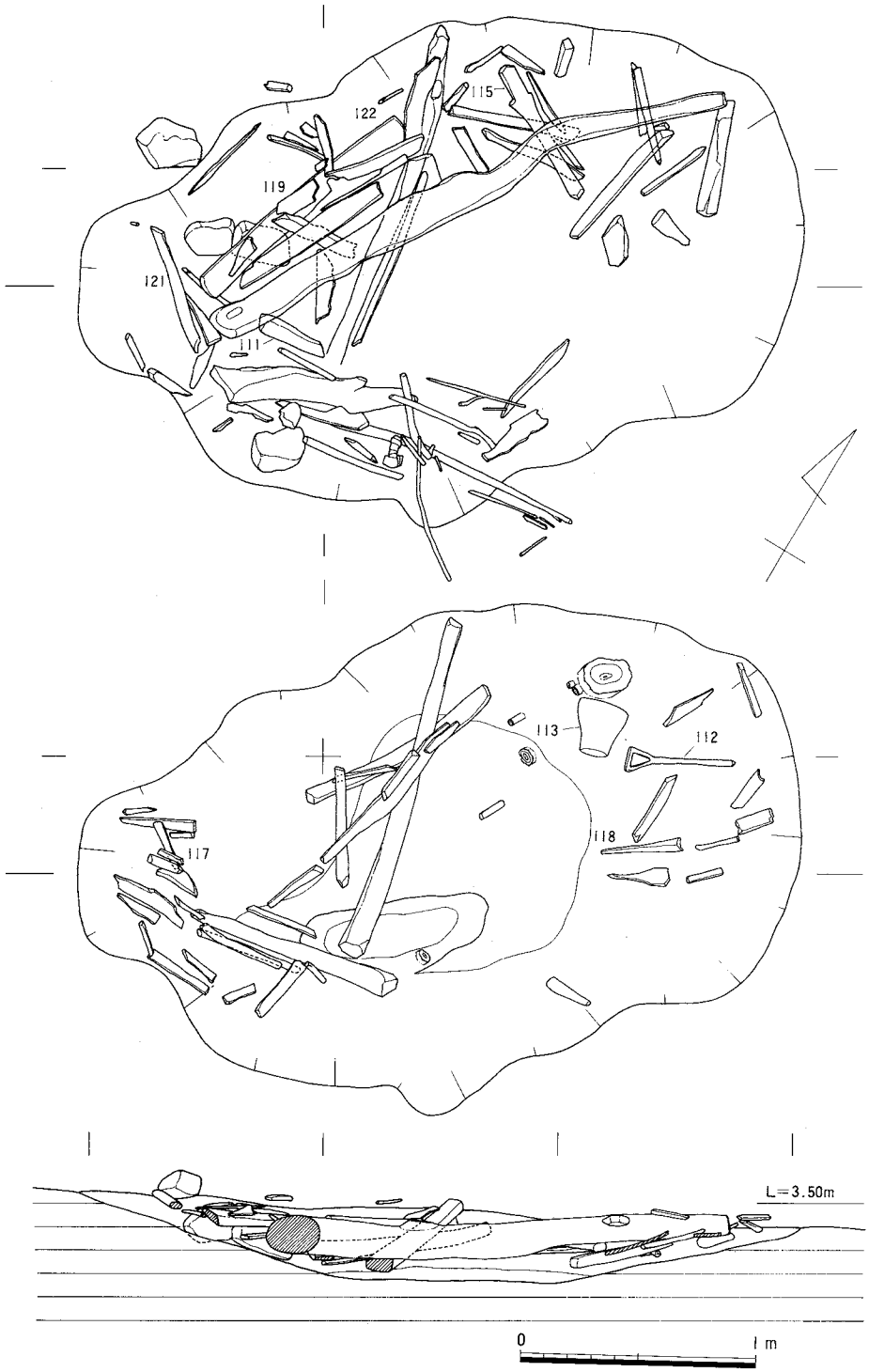
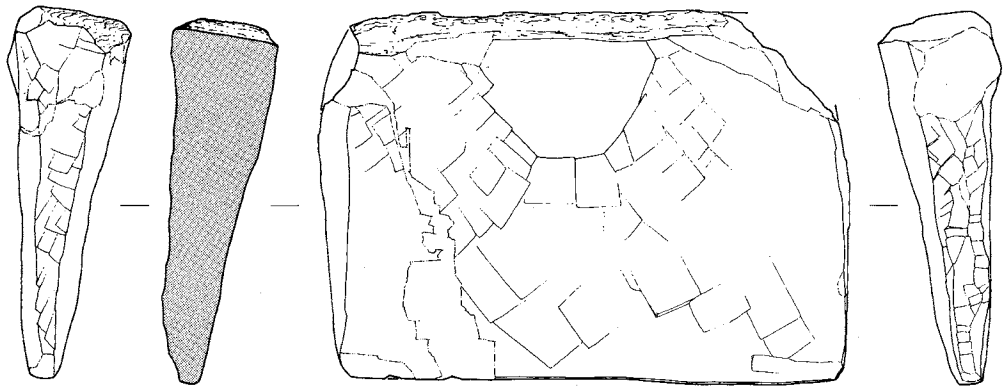
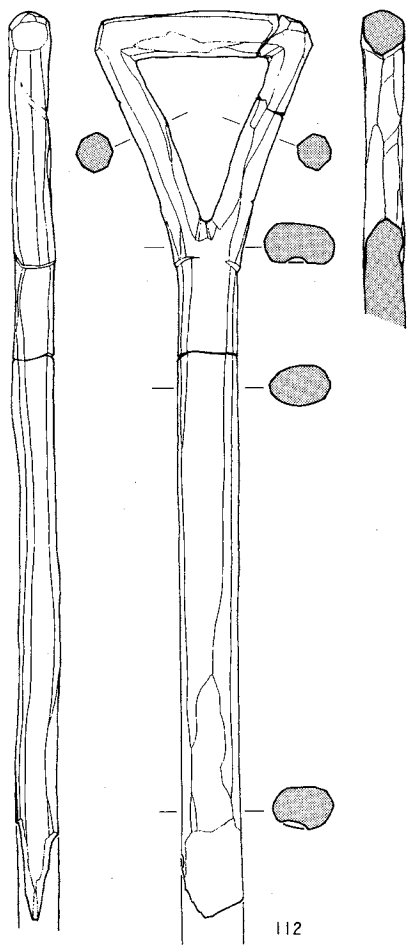


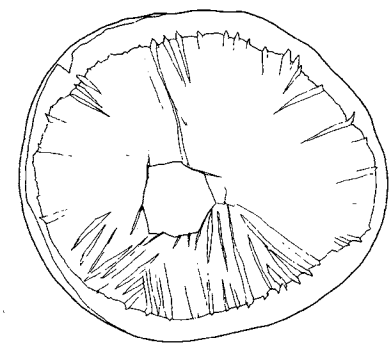
Fig.94　SK－15実測図　2（縮尺 1/30）

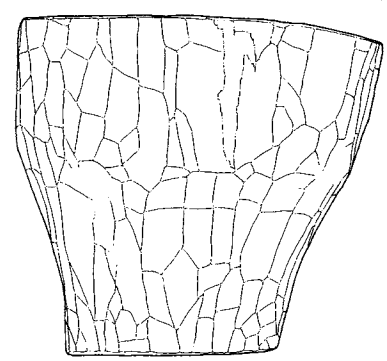


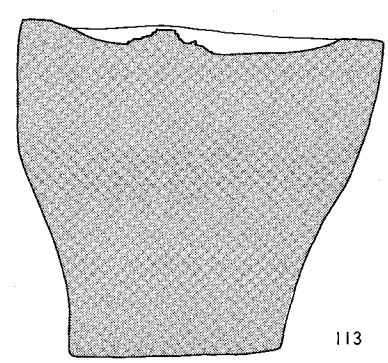
111



112







113

0 20cm

Fig.95　SK－15出土木器実測図　1（縮尺 1/4）

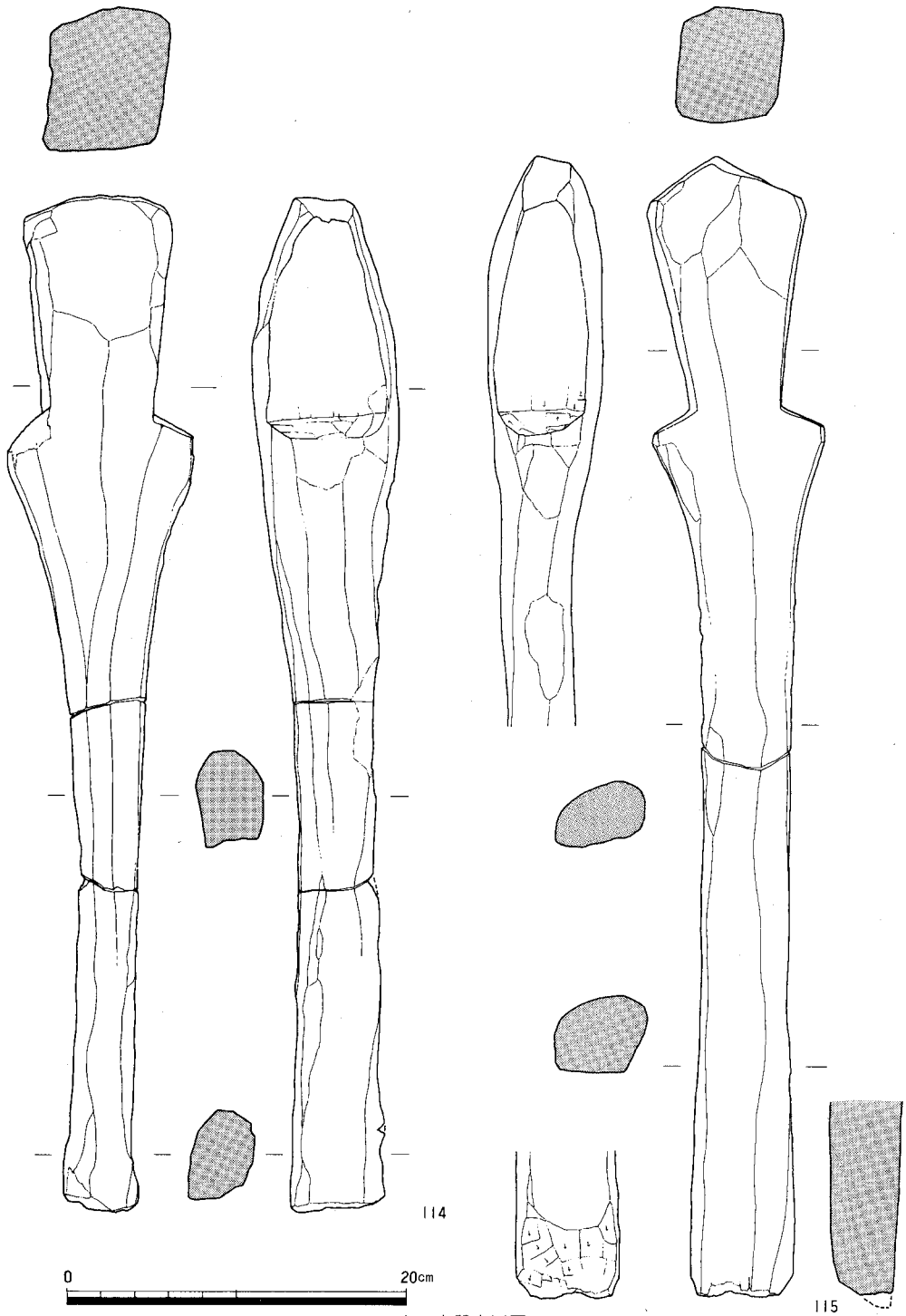


Fig.96　SK－15出土木器実測図　2（縮尺 1/4）

は未だ刳り抜かれていない。115の握部端には切断の削り痕が残る。ともに、芯近くの割材を素材とする。116は樹枝を切り落し、一端に削り込みを入れて頭部をつくり出す。全面に樹皮が残る。部材と考えられる。119は両面に縦方向に段を削り出している。一端を欠損。柾目材を用いる。用途は不明。

117は樹枝を切断したもの、118・120は太めの樹枝を

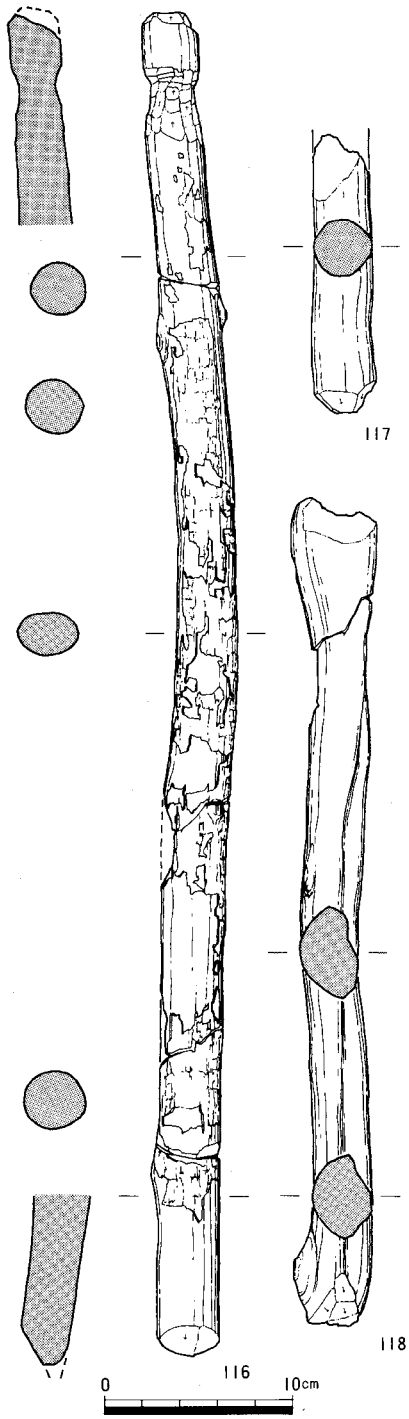


Fig.97　SK－15出土木器実測図　3（縮尺 1/4）

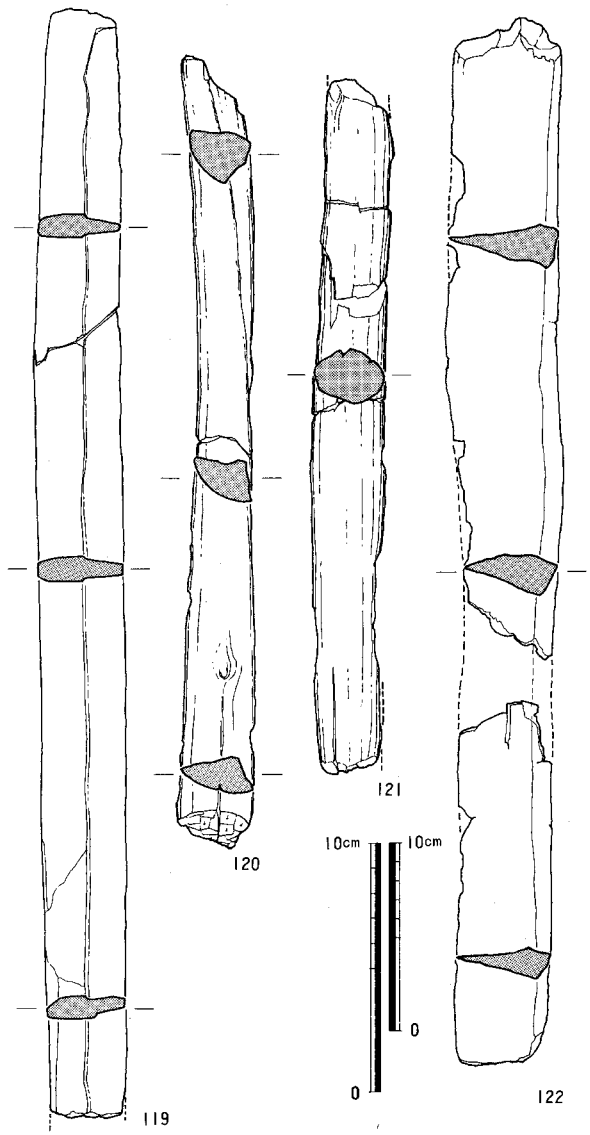


Fig.98　SK－15出土木器実測図　4（縮尺 1/6・1/8）

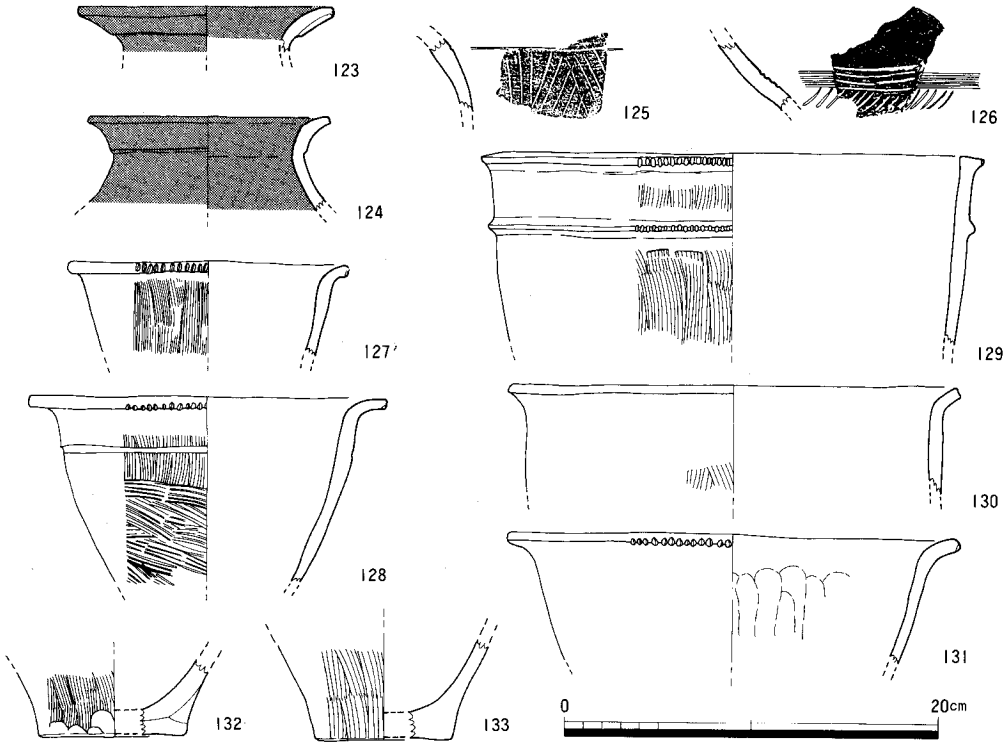


Fig.99　SK－15出土土器実測図（縮尺 1/4）

半截あるいは1／4分割したもので、一端に切断した削り痕を残す。120は一端が焼け焦げている。121は両端を欠損する芯持ち材である。何らかの柄に加工する途中のものか。122はミカン割りの割材である。長さ112cm、幅12cm、最大厚4.8cmを測る。両端にはミカン割りする前の丸太材をつくるための切断痕が残る。この他に多くの割材・樹枝・伐採木などの木製品の素材が出土した。Pl.16－648は桜の樹皮を巻いたものである。

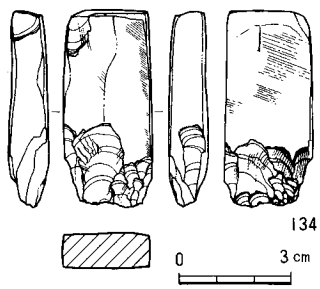


Fig.100　SK－15出土石器実測図（縮尺 1/2）

土器は埋土中から満遍なく出土している。123・124は黒塗り磨研の壺の口縁部である。口縁部外面に段が巡る。125は肩にヘラ状工具で複線の折帯文を施文する。126は肩の段状の沈線の下に、さらに3条の沈線文を加え、羽状文と考えられる短斜線をヘラ状工具で描く。甕と鉢には、如意形口縁をもつものと、口縁部に小さな突帯を貼付する刻目突帯文土器の系譜をひくものの2者がある。前者の割合が多い。127の口唇部にはヘラ状工具で切るようにキザミを施す。128・131のキザミは口唇部下端のみに施される。底部はいずれも薄い平底である。以上は、板付II式土器中段階に比定できる。また、彩文土器が出土している。Fig.122－398と403で、ともに壺の肩部の小破片である。下地に黒色

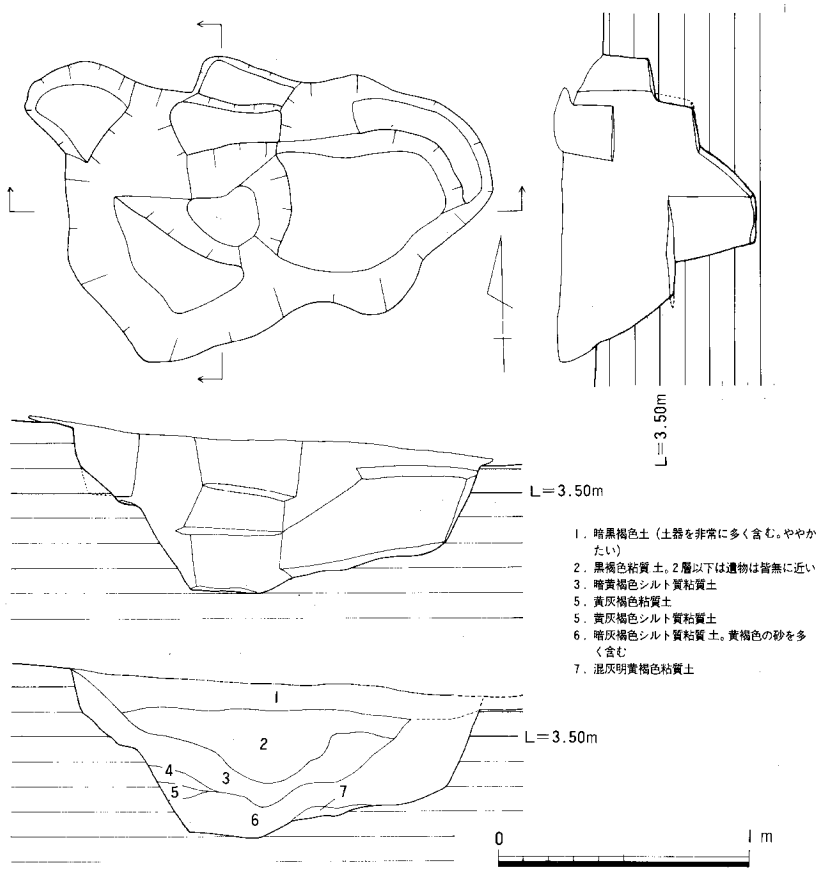


Fig.101　SK－16実測図（縮尺 1/30）

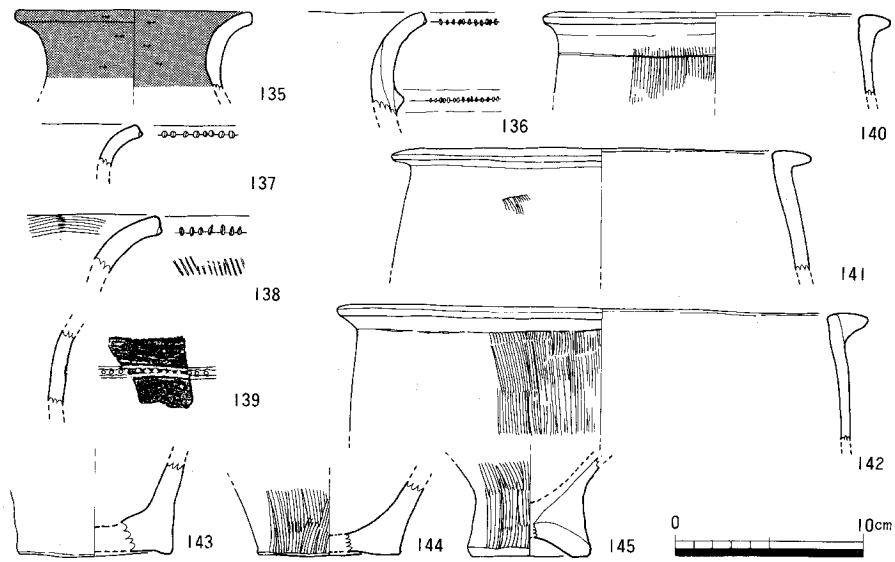


Fig.102　SK－16出土土器実測図（縮尺 1/4）

顔料を塗布し、肩部に直線文を巡らし、下方に398は有軸羽状文、403は目の細かい斜格子文をベンガラで描く。403の頸部には、わずかに縦方向の直線文の一部がみられる。板付II式土器古段階のものである。

134は扁平片刃石斧の再加工途上のものである。刃部側に調整剥離を行い再加工を施そうとしたと考えられる。頁岩製である。他に石錘が1点出土している。

さて、SK－15の時期については、埋土中から出土した土器とともに、上部に投棄され堆積した8－3・4層出土の土器から下限を、SK－15が掘り込まれた8－5層出土の土器から上限を知ることができる。

8－3・4層の土器をFig.119・120に示したが、後述するように、板付II式土器中～新段階に比定できる。これに対して、Fig.121に図示した8－5層の土器は、392のように夜臼式土器、386・389・393のように板付II式土器古段階に比定できるものが混じるが、主体は板付II式土器中段階のものである。以上から、SK－15の時期は板付II式土器中段階に求めることができよう。

SK－16　(Fig.101～103)

B－2区の南東部、SK－10～12の西側に位置する。不整形の土壙で、主軸長は約1.7m、幅は1.25mを測る。7－2～8－1層を除去した後、10層上面で検出した。深さは、検出面から63cmで、段状のテラス部分がみられる。埋土は、上部の1・2層が黒色の有機質粘質土であるのに対して、下部の3～7層は、褐色系統の粘質土である。1層から遺物が集中的に出土した。この他の層からは、6層から数片の弥生土器の細片が出土した以外、遺物は出土していない。

出土遺物には、弥生土器・石器・土製品がある。6層出土の土器は、細片化しているため図化できず、Fig.102・103に示したものは、すべて1層出土の遺物である。

135は、緩やかに反転する口頸部をもつ壺である。内外面とも黒塗り磨研を施す。136～145は甕である。口縁部の形状から、如意形口縁のものと、刻目凸帯文土器系統のものの2者に区分される。前者の甕は、いずれも小片である。139も如意形口縁をもつもので、口縁下に2条のヘラ状工具で沈線をひき、その間に竹管文を押捺施文する。北部九州でも遠賀川以東の地域の土器である。143～145は甕の底部片である。薄い平底と、厚く上げ底に仕上げる2者がある。143は、円筒状の胴部下半がつく。外底面には不定方向のケズリを施す。外底面にケズリを施すことは、板付II式土器ではほとんどなく、板付I式土器の段階まで遡る可能性をもつ。しかし、他の土器は、いずれも、板付II式土器中～新段階に分類できる。

146は太形蛤刃石斧の刃部破片である。石材は安山岩。147は土製投弾である。長さ4cm、直径2.5cm、重量22.1gを測る。

SK－16は、出土土器から弥生時代前期末の板付II式土器新段階に埋没したと考えられる。

SK－54　(Fig.104)

D－3－18区とE－3－13区の10層上面で確認した小型の土壙である。試掘壙で南側を失う。

不整な平面形で、推定主軸長は約1m、幅1.2mを測る。壙底は舟底状で、検出面からの深さは0.12mである。埋土は、黒褐色粘質シルトである。埋土中から、弥生土器の細片が少量出土したが、胴部破片ばかりで、図示できるものはない。時期・性格とも不明な土壙である。

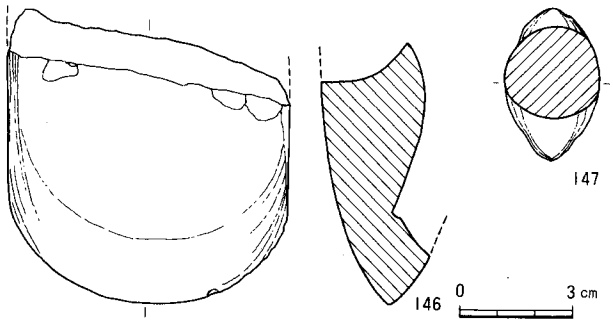


Fig.103　SK－16出土石器・土製品実測図（縮尺 1/2）

SK－55　(Fig.104)

D－3区南西部にある小型の土壙である。平面形は隅丸の三角形で、おむすび形を呈する。10層上面で検出した。主軸長1.05m、幅0.73m、深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、10層の灰褐色シルトの小ブロックが混じる。壙内には直径20cm、長さ30cm以上の2本の丸太が打ち込まれていた。他に埋土中から弥生土器の胴部細片がごく少量出土した。図化できるものはない。時期・性格ともに不明の土壙である。

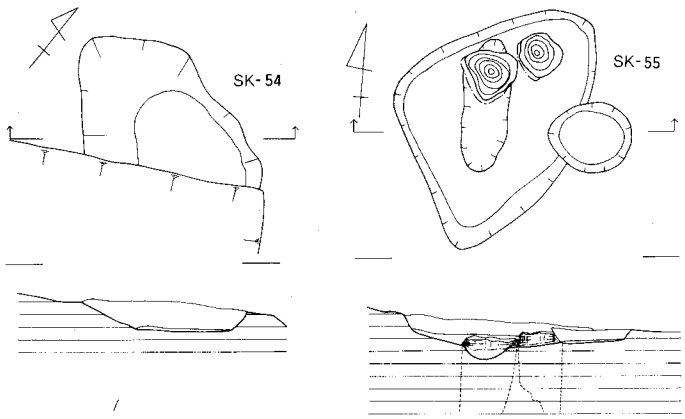


Fig.104　SK－54・55実測図（縮尺 1/30）

3）　小穴　（ピット　遺構記号　SP）

8層上面と10層上面で多数の小穴を検出した。前述したように、ほとんどの小穴は浅く、窪み状のもので、自然の凹凸である可能性が強い。その中で、はっきりした掘り方をもつものと、遺物を出土したものには、SP－21～32・34～53・58～66がある。ただし、SP－58～62はSC－08、SP－52・63～66はSC－09の柱穴である。以外の小穴についての報告は省略する。

4）　包含層

2節1）項で概要を述べたが、6～8層は調査区東側の谷部を中心として堆積した遺物包含層である。しかし、それが形成される時期は、各層位で違いがみられる。遺物が包含されるようになる経緯も、それぞれ異なっている。以下、各層位について、出土遺物も含めて報告する。

6層　(Fig.105)

前述したように、6層は2層の水田床土層を造成する際に、谷部を埋め鎮圧するための整地層と考えた。6層のひろがりは、調査区西側の台地部分へものびている。台地上に営まれた竪穴式住居跡などの弥生時代の遺構は、6層直下で検出される。その遺構上部は、かなり削平されている。6層の下面は東へ向って緩やかに落ち込んでいく。2層にあらわされる水田を開田する以前は、調査区東側は浅い谷状の地形をなしていたと思われる。台地部分を削り、その排土で谷部を埋める整地作業を行ったものであろう。

そのため、出土遺物の大半は、台地部分に営まれていた弥生時代の遺構の遺物が占めている。土器には、弥生時代前・中期の壺・甕・鉢など日常用土器に加え、中期後半の須玖式の成人用大形甕棺の破片も含まれる。これらは細片化している。Fig.105－148は、「く」字形口縁で、口縁端部を上方に跳ね上げた跳ね上げ口縁の甕の破片である。149は須恵器の高台付坏である。高台部の端部が、外方へ跳ねる。8世紀前半に比定できる。また、図化できなかったが土師器埦の胴部破片が1点出土している。しかし、古代の遺物は、ごく少量しかない。

石器には、Fig.145－546の砂岩製の穿孔具、Fig.149－576の砂岩製の砥石があり、Fig.150－587は結晶片岩でつくられた紡錘車である。土製品としては、Fig.151－597の紡錘車がある。これらは、もともと台地部の弥生時代前～中期の遺構にともなうものであろう。

さらに、Fig.153－635は陶製の鳩笛である。近世以降のものであろう。近世の染付、陶器の破片が少量含まれている。

以上から、6層の時期は近世以降と考えられる。明治初年に描かれたとされる「筑前国那珂郡比恵村細方絵図面」では、台地の縁辺部は、水田として図示されている。こうした田園風景が完成されるのは、本調査の6層の形成時期を参考とすれば、近世以降であろう。

7層

7層は7－1層と7－2層に区分できる。7－1層は調査区の北側、D・E－3・4区のみでみられる土層である。これに対して、7－2層は調査区東側の谷部全面にひろがる。ともに黒色粘質シルト層である。

i）**7－1層**（Fig.105・106）

厚さ10～15cmで、西から東へ次第に傾斜しながら堆積している。全体としては黒みをおびるが、6層の下半部分の褐色～明黄褐色の粘質シルトの小ブロックを含み、7－2層と比較すると若干白っぽい色調を呈する。6層の小ブロックを含むこと、後述するように出土土器にかなりの時期幅があることから、6層の形成時に天地返しをうけた可能性がある。

遺物の出土分布をみると、D・E－3区東半部に集中し、D・E－4区ではまばらである。土器・石器・土製品などが多量に出土した。出土土器には、弥生時代前期後半の板付II式土器から中期初の須玖I式土器古段階のものを主体に、若干の中期後半～後期の土器がみられる。

Fig.105－150～152は壺である。150は肩部に竹管文を押捺施文し、その直下と胴部上半に2条

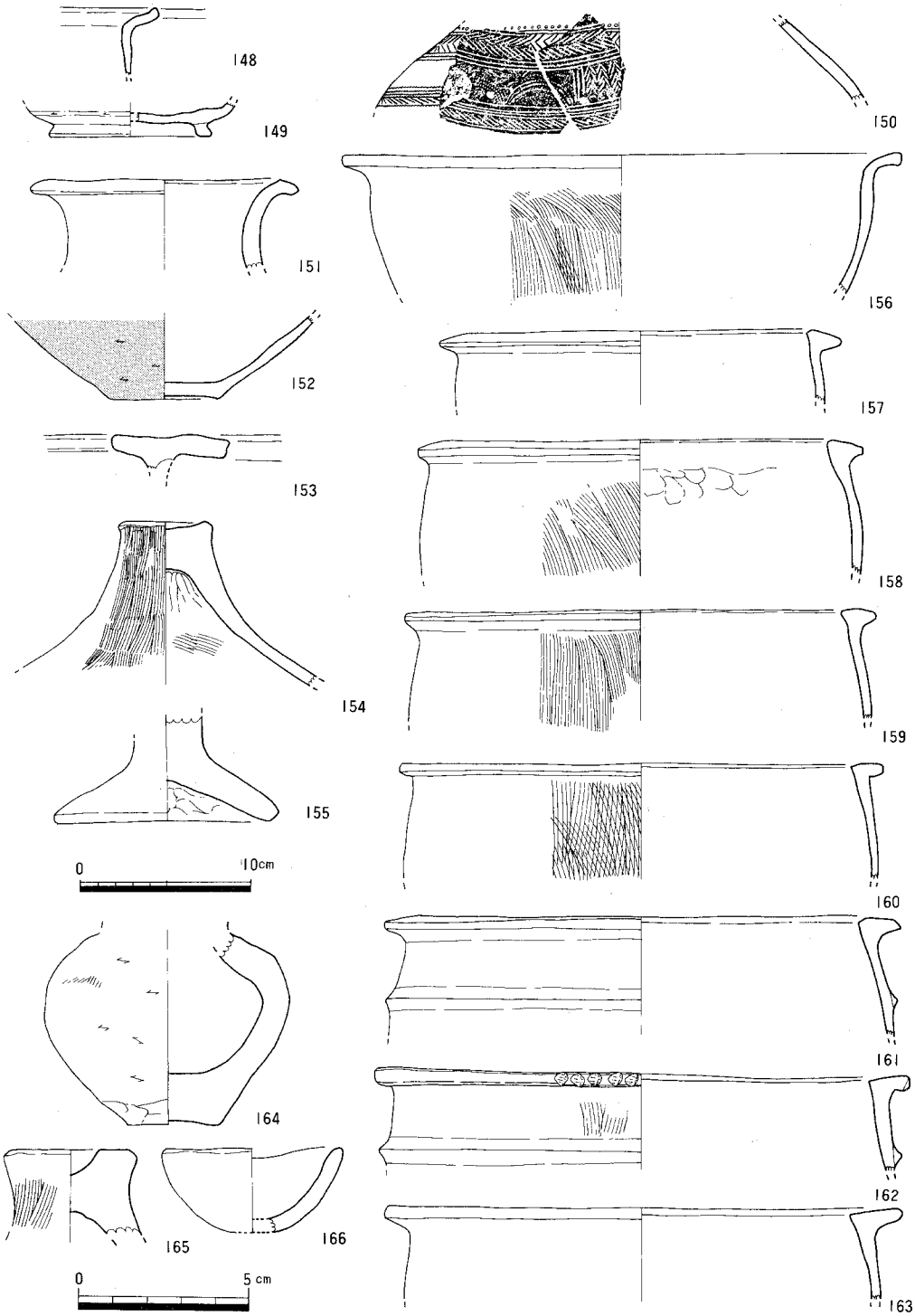


Fig.105　6・7層出土土器実測図　1（縮尺 1/4・1/2）

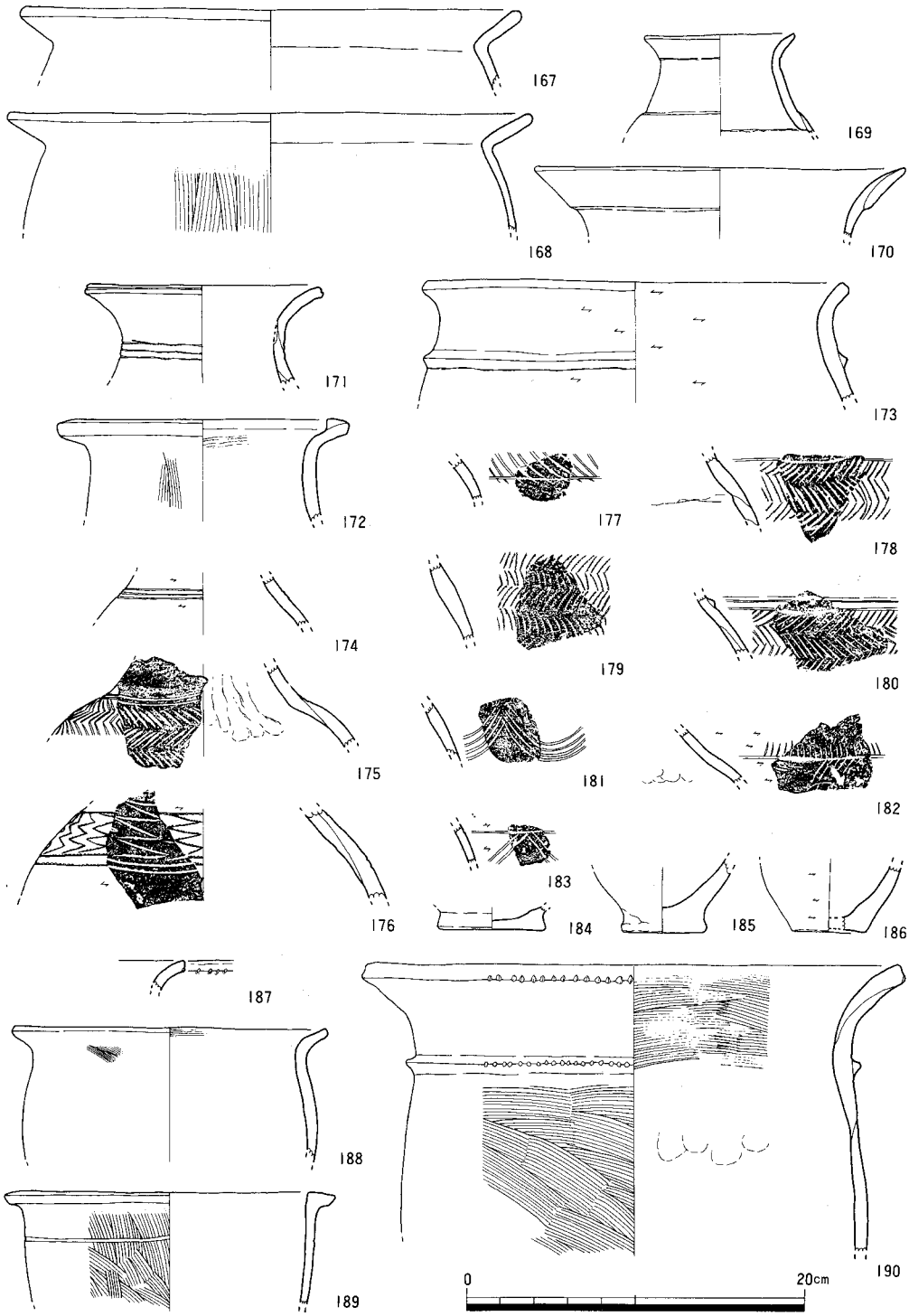


Fig.106　6・7層出土土器実測図　2（縮 1/4）

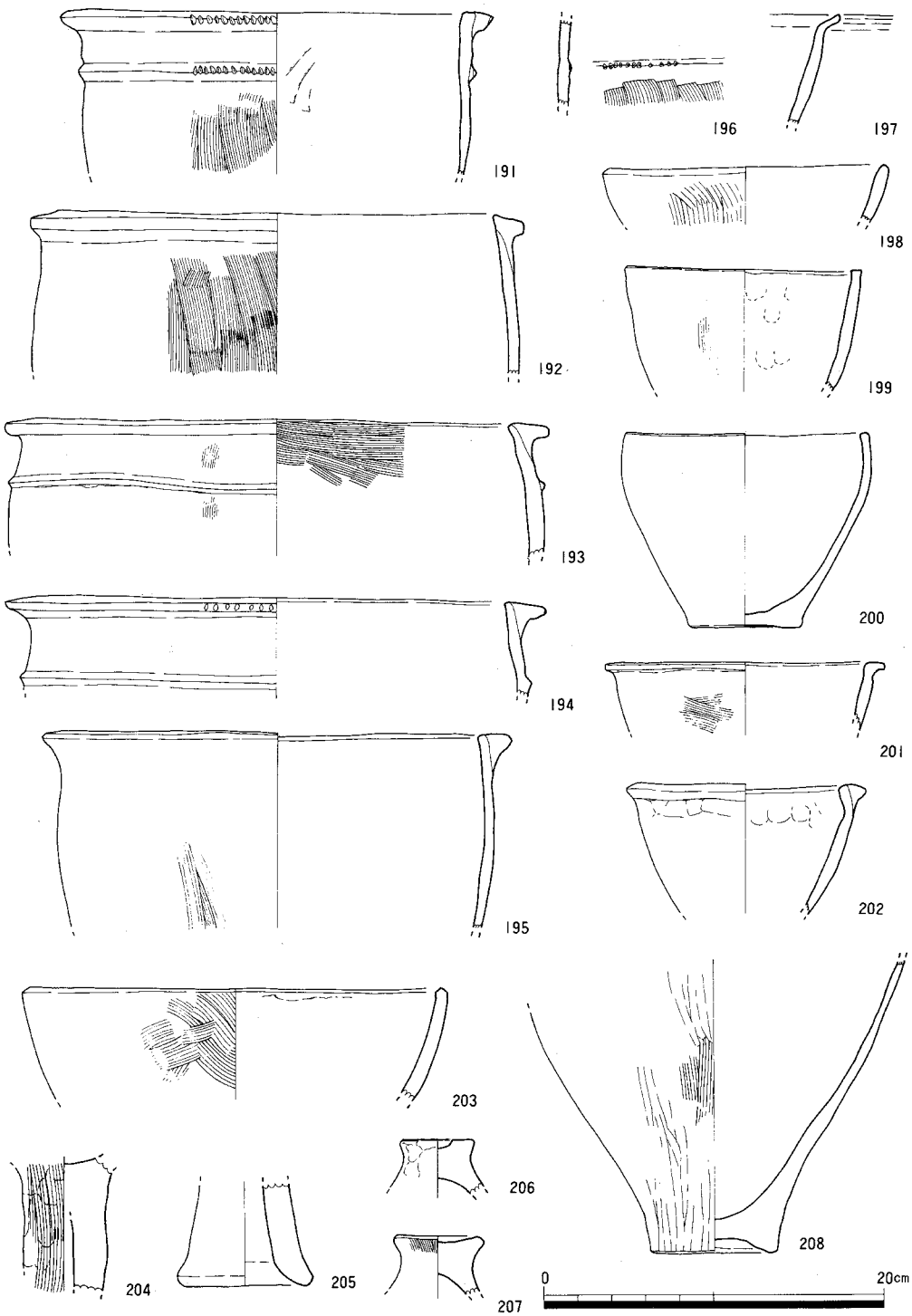


Fig.107　6・7層出土土器実測図　3（縮尺 1/4）

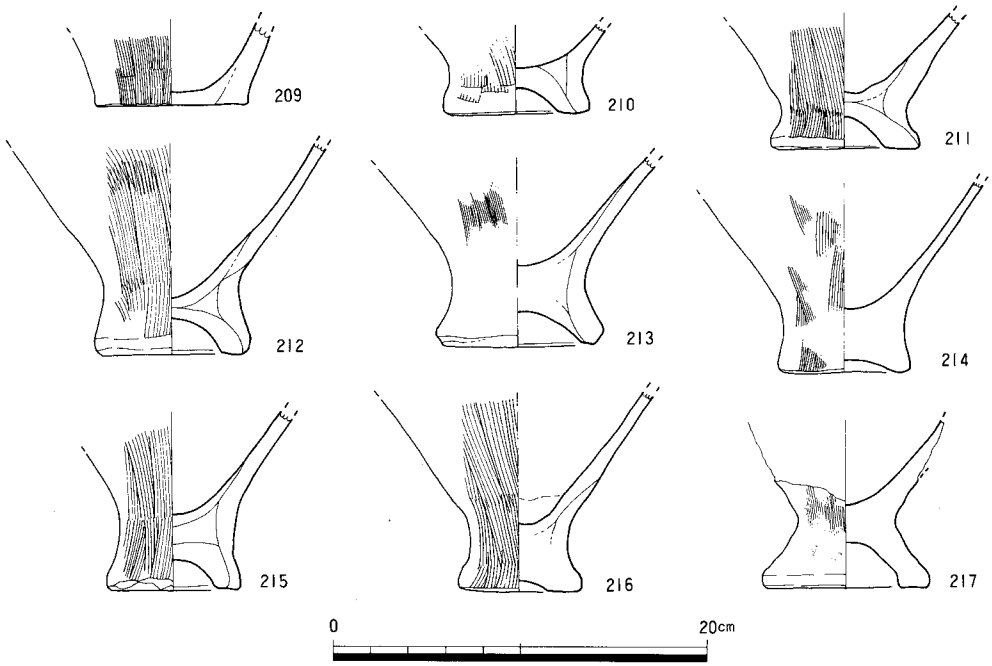


Fig.108　6・7層出土土器実測図　4（縮尺 1/4）

の沈線を二枚貝の腹縁で描き、文様帯を区画する。文様帯は、さらに3条と4条の平行沈線文で上・中・下の3区に分け、上段に羽状文、下段に短斜線文を描く。中段は縦方向に3条の平行沈線を引いて細分し、「ハ」字状文と重弧文で埋める。Fig.112－233に図示した破片も、胎土・焼成から同一個体と考えられ、中段にはさらに羽状文を描く区画が加わる。中段の文様も、すべて二枚貝の腹縁で施文されている。胎土は精選された目の細かな粘土を用い、他の土器とは異なる。こうした多様な文様を描く壺は、北部九州でも遠賀川以東の地域、あるいは山口県西端の響灘沿岸地域の弥生時代前期末～中期初に例が多い。それらの地域からの搬入品と考えた。152は丹塗り磨研の壺である。弥生時代中期の須玖II式土器に比定される。

153は中期後半の須玖式に分類される成人用大形甕棺の口縁部破片である。

甕と鉢には、板付II式土器新段階の如意形口縁をもつ156、断面三角形突帯を貼付した刻目突帯文土器の系譜をひく157、中期初の須玖I式土器古段階に比定される胴張りが目立つ158～161、中期前葉の須玖I式土器中段階の内傾する逆L字形口縁をもつ162・163、後期前半の「く」字形口縁の167・168がある。

石器・石製品には、Fig.142－518の柱状片刃石斧、Fig.148－569の砥石、Fig.150－584の石製紡錘車などがある。土製品としては、Fig.151－593の土製紡錘車、Fig.152－613の土器片利用の円盤が出土している。しかし、7－1層出土の土器は、かなりの時期幅があり、石器・土製品の個々の時期は不明である。

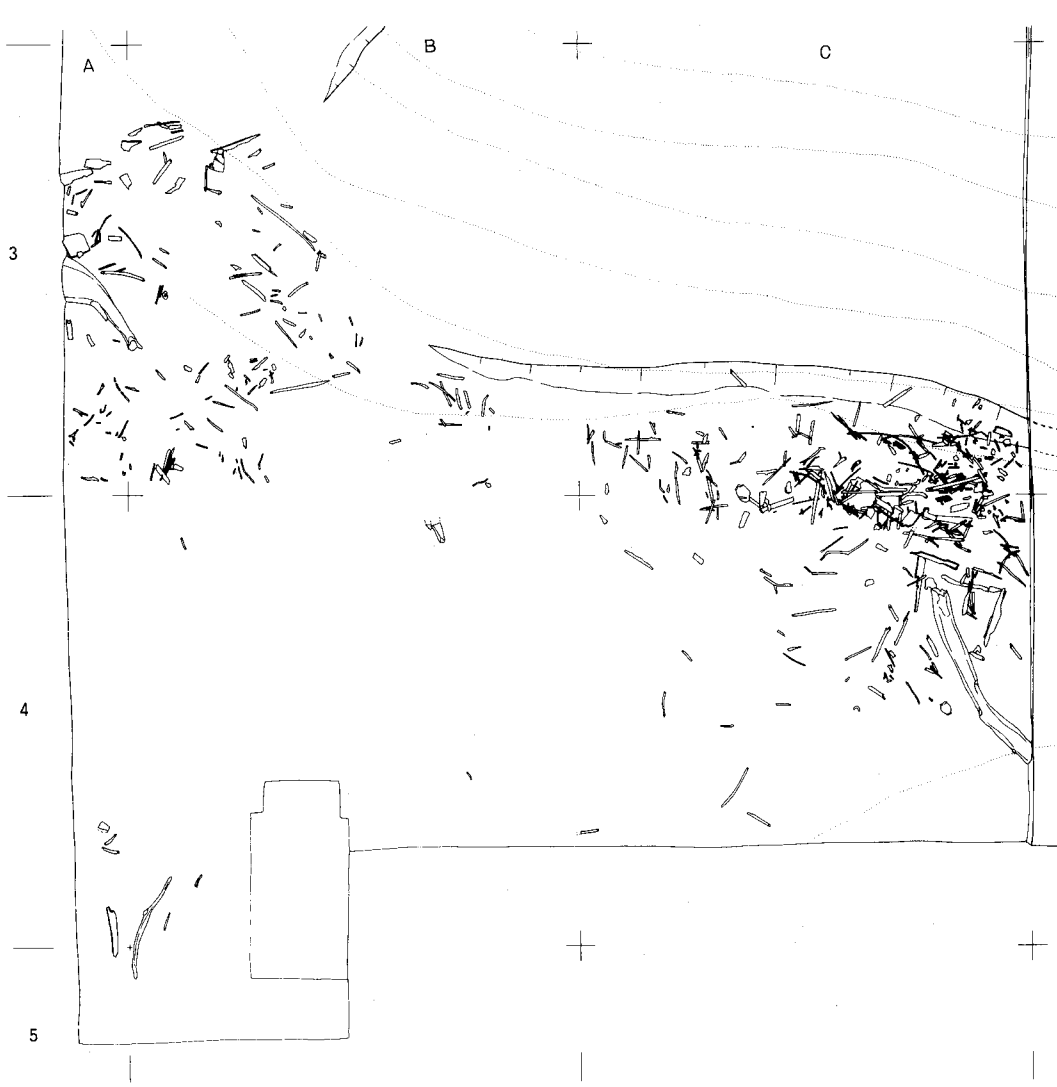
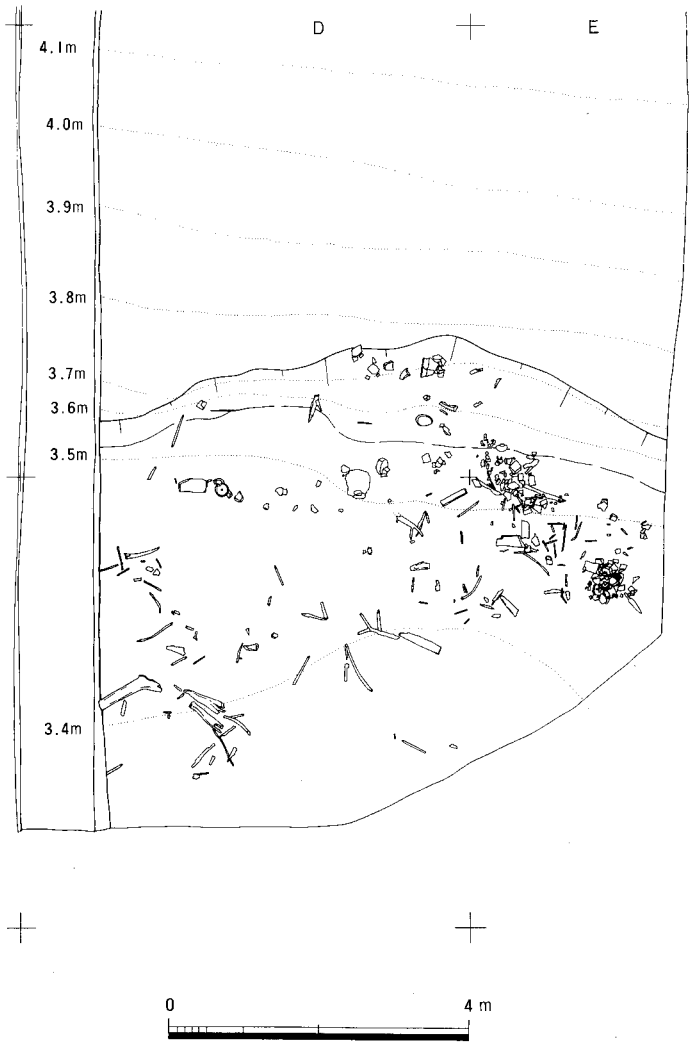


Fig.109　8－3層遺物出土状況実測図（縮尺 1/100）

ii）**7－2層**（Fig.106～108）

7－2層は調査区東側の谷部を埋める堆積物の最上層部にあたる。有機質の黒色粘質シルトで、10～25cmの厚さをもつ。7－1層にみられる6層下部と同質の小ブロックは混じらない。遺物は3区で集中的に出土する（Pl.9）。しかし、4区には遺物がほとんど含まれない。7－2層の堆積する傾斜に沿うように遺物が分布しており、西側の台地側から投棄されたものと考えられる。

出土遺物には、土器・石器・土製品・木製品・樹枝などがある。ただし、A～C－3区の西側の台地ぎわの部分では、7－2層の下に8層が薄くひろがり、取り上げの際に8層まで掘り下



げた所がある。そのため、7－2層出土の遺物の中には、一部8層のものが混じっている可能性がある。

そうした可能性をもつものには、Fig.106－169・170・175・184がある。いずれも小型の壺の破片である。169は口縁部と頸部の境界、頸部と胴部の境界に段がめぐる。また、肩部内面には接合線が段として明瞭に残る。170は口縁部外面に薄く粘土を貼付して肥厚させる。175は、頸部の付け根に段状の沈線を巡らし、下方に沈線を1条加え、さらに羽状文をヘラ状工具で施文する。内面は指頭でナデ調整を施し、接合部分の段を消している。184は円盤貼付状の底部破片である。これらは板付Ⅰ式土器新段階～板付Ⅱ式土器古段階に遡るものである。

これを除くと、他の7－2層出土の土器は、板付Ⅱ式土器中段階以降のものである。中でも板付Ⅱ式土器新段階～須玖Ⅰ式土器古段階の範疇に含まれるものが主体を占める。

171は緩やかに外反してひろがる壺の口頸部片である。口唇部に1条、頸部の中央に3条の沈線を、二枚貝の腹縁を用いて施文する。北部九州の遠賀川以東地域からの搬入品か、それを模倣したものであろう。173は形は甕に近い。しかし、内外面を横方向の研磨で丁寧に仕上げているので、壺とした。板付Ⅱ式土器中～新段階のものであるが、特異な例である。172は口縁部上面に粘土紐を貼付して、水平口縁につくったものである。須玖Ⅰ式土器古段階に比定できる。

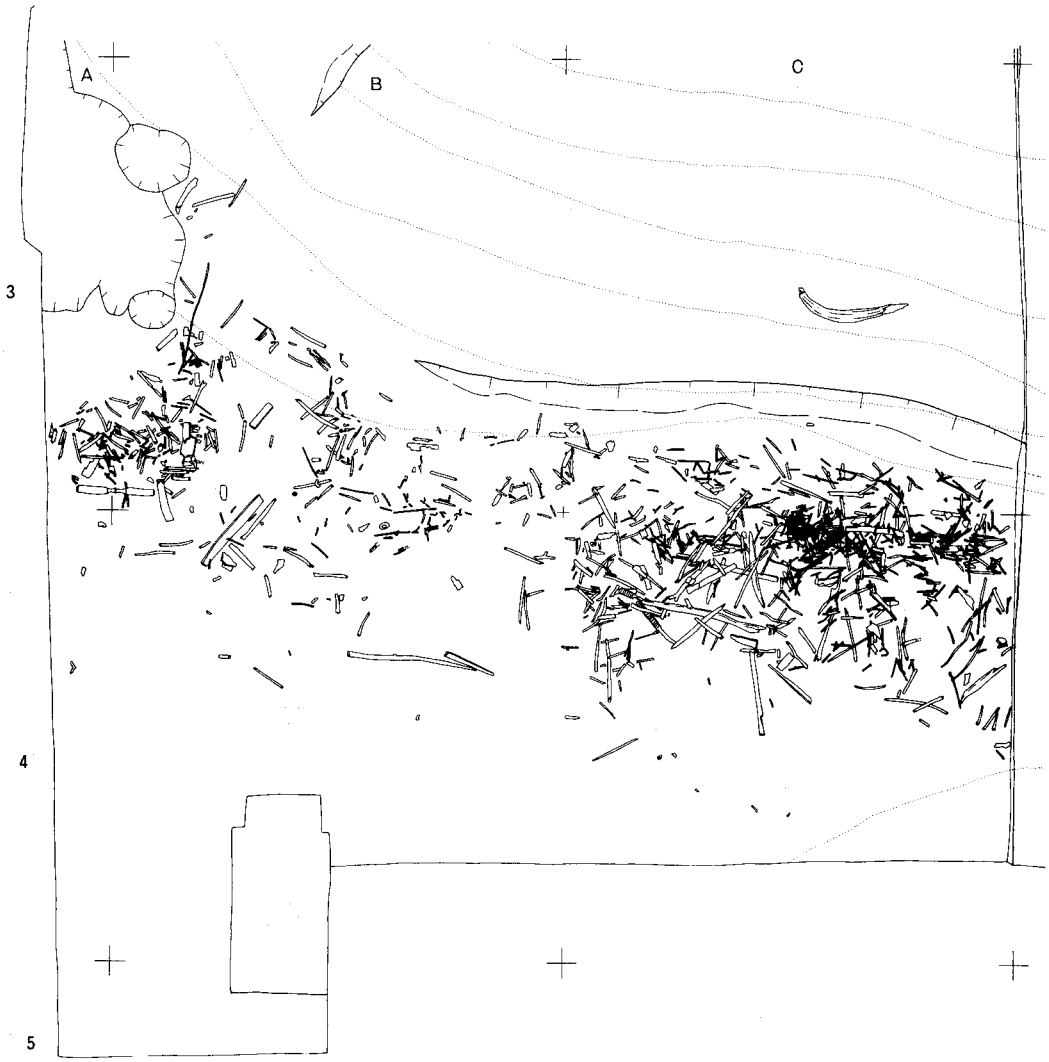
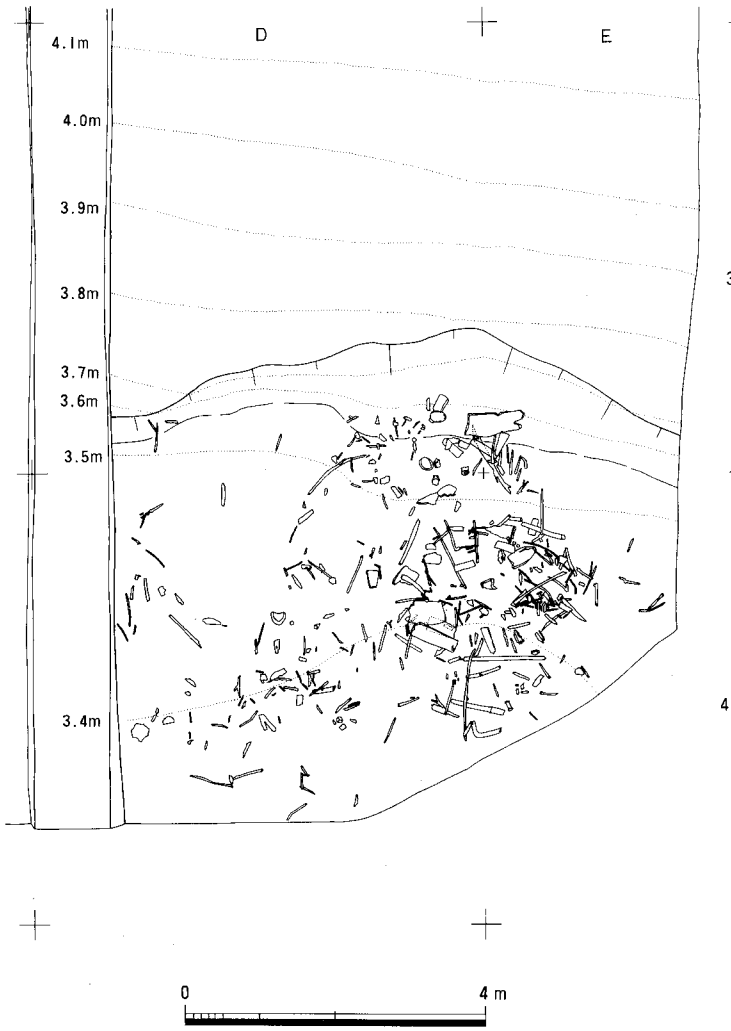


Fig.110　8－4層遺物出土状況実測図（縮尺 1/100）

この他、文様を二枚貝の腹縁やヘラ状工具で描いた壺の胴部片がある。羽状文を施文した例が多い。181は重弧文、182は短斜線文、183は複線山形文を描くが、これらの文様は少ない。いずれも板付II式土器中段階のものである。

甕には、如意形口縁をもつものと、刻目突帯文土器の系譜をひき口縁に突帯を巡らすものの2者がある。量的には前者が少ない。前者に分類される187・190は板付II式土器中段階、188は新段階に比定できよう。後者には、板付II式土器中段階の189、新段階の191・195、須玖I式土器古段階の192～194がある。甕の底部には208～217の例がある。208・209は薄手の平底で、板付II式土器中段階に比定できる。210～214はやや厚めの上げ底で新段階に、215・216は須玖I



式土器古段階のものである。217は特異な例で、上げ底が著しく脚台状につくられる。板付II式土器新段階か。

鉢には、如意形口縁をもつ197、直口縁の198～200・203、口縁部に突帯を貼付する202がある。201は口縁部を強く折り曲げて、突帯を貼付したような外観をもつものである。

204は高坏、205は器台、206・207は蓋のつまみ部の破片である。

石器には、Fig.141－507の黒曜石の両面加工石器、510の石核、Fig.143－531の石剣、Fig.148－570の砥石がある。Fig.150－586は石製紡錘車、Fig.151－592・596は土製紡錘車である。図示していないが、土器片利用の円盤が数点出土している。

この他に、木製品・樹枝が出土している。しかし、そのほとんどは、最近の周辺のビル建設工事により地下水位が下がったため、乾燥して変形したり腐食がすすんで原形をとどめていない。その中で、比較的に遺存状態が良好なものとして、Fig.123－410とFig.138－475がある。410は平鍬の破損品で、柾目材を素材とする。475は上辺と下辺に切り込みをいれた柾目の板材である。

8層

調査区東側の谷部を埋める堆積土の中～下部にあたる。暗黒褐色の粘質シルトで、7－2層とくらべると粘性は低い。多量の未分解の有機物を含む。付篇に収録された花粉分析の結果か

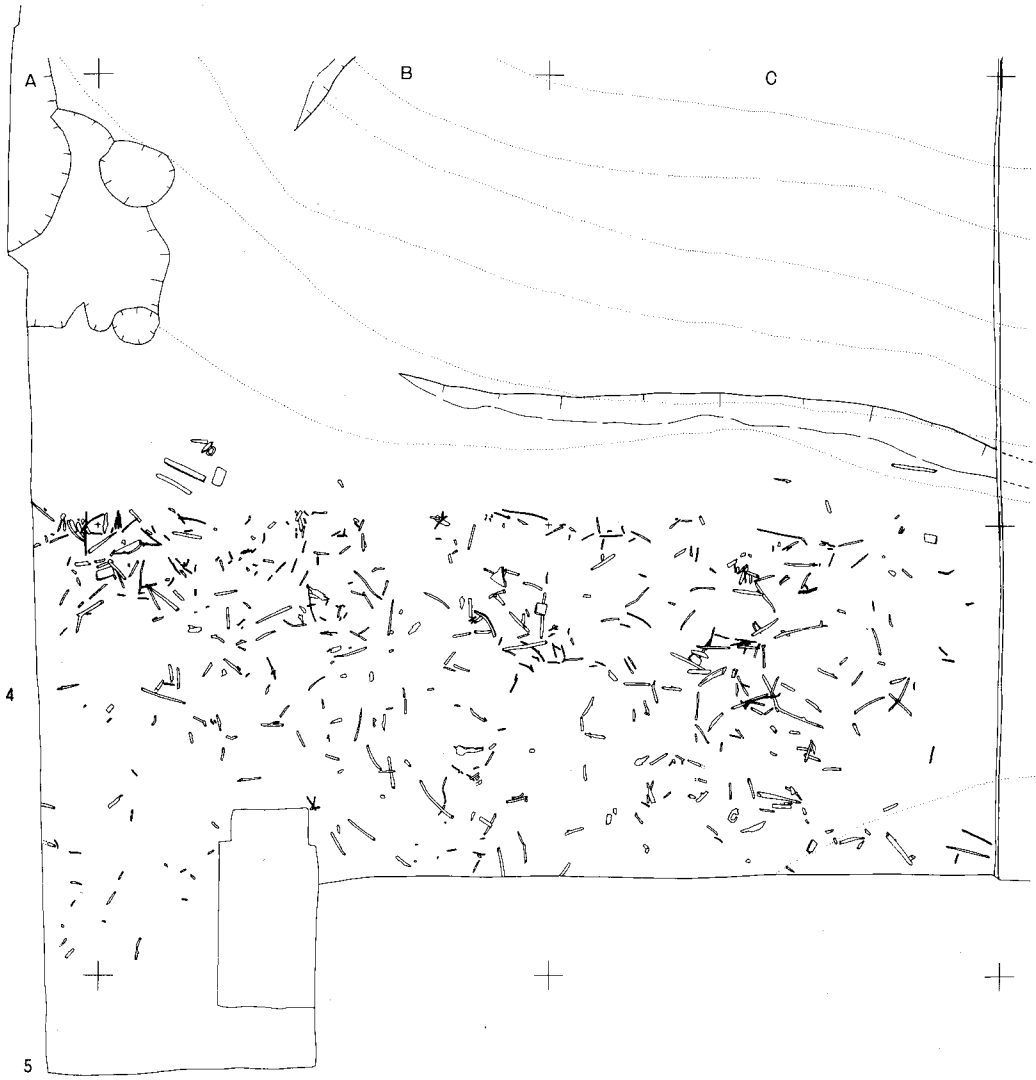


Fig.111　8－5層遺物出土状況実測図　(縮尺 1/100)

ら、ガマやカヤツリグサが繁げる湿地状態にあったと考えられる。また、8層内には非常に薄い粗・細砂のブロックがあることから、間欠的に流水があったと考えられ、それらによって8層の堆積が進んでいったのであろう。

こうした湿地の中から、土器・石器・土製品・木器・樹枝などが出土している。ほとんどは破損品であり、木器・樹枝などには焼け焦げたものが含まれる。台地部から投棄されたものと考えられる。

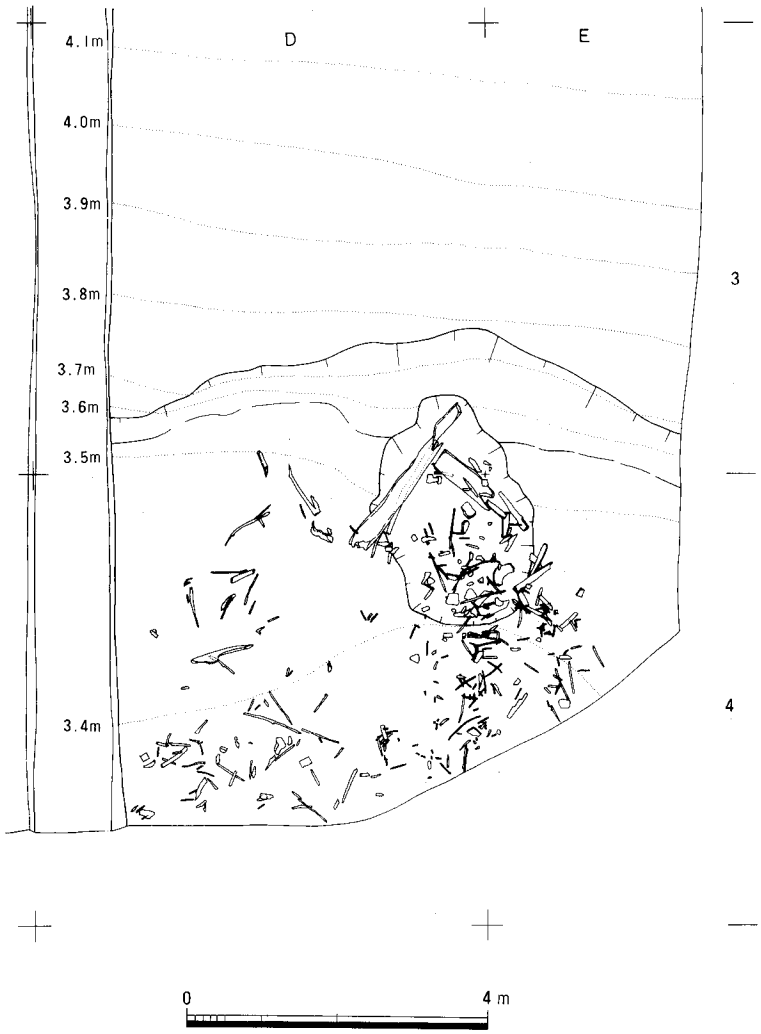


Fig.109～111に遺物の出土状況を図示した。これをみると、遺物はいくつかの集合にまとめられる。これは台地からの投棄がいっきに行われたのではないことを示している。こうした遺物の集合を、以下ⓐ群～ⓖ群の７群に区分した。

ⓐ群；８－３層中のA－３区からB－３区北側にかけてみられる遺物の集合（Fig.109）。土器は細片ばかりで、木器・割材・板材・樹枝が多く、調査区壁近くで直径50cmほどの樹幹が出土している。木器には農具・工具・容器の破損品が多く、割材・板材は焼け焦げたものが多い。

ⓑ群；８－４層中のA・B－３区東側からB－４区西側にかけてみられる（Fig.110）。遺物はⓐ群と同様な構成である。

ⓒ群；８－３・４層のC－３区東側とC－４区西半部にみられる遺物の集合である(Fig.110・111)。C－３区東側の段落ちの下では樹枝が層をなして出土している（Pl.10）。樹枝は折られたり、切断されている。木器には太型蛤刃石斧の直柄の破損品、有刺棍棒などがあるが、容器や農具がみられない。土器・石器の出土量は少ない。

ⓓ群；８－３層のD・E区の境界付近にみられる（Fig.109）。他の群と比較して、木器や樹枝は極端に少なく、ほとんどが土器である。細かくみると、E－３－１区～E－４－31区、E－

4－26・27区に土器が集中して投棄された状態で出土している (Pl.11)。これらは廃棄の最小単位と考えられる。

ⓔ群；8－4層中のD・E区の境界付近にみられる (Fig.110)。ⓓ群とほぼ重複しているが、全体に東へずれている。木器の破損品、割材、板材・樹枝が散乱している。木器には工具が多く、農具が数点混じる。しかし、容器はみられない。土器・石器の破損品も多い。

ⓕ群；8－5層中の遺物は万遍なく分布しているようにみえる。大きくみるとA～C－3・4区の集合とD・E－3・4区の集合とに分けることができそうである。前者をⓕ群とする(Fig.111)。土器・石器・木器・樹枝などが散乱した状態で出土している (Pl.11)。木器には容器・用途不明の板材などがあるが、ⓐ～ⓔ群のように一定の器種が集中することはない。

ⓖ群；前述したように、8－5層中のD・E－3・4区にみられる集合である (Fig.111)。この付近の8－5層と10層の間には、部分的に暗褐灰色の漸移層がみられる。また、遺物は西から東へ向って流れたような分布状況で出土している。出土遺物の中にはSK－15から流し出されたものが含まれる可能性も残る。建築用の部材やハケメ原体などが出土している。土器・石器は細片化したものばかりで、量も少ない。

以上のように、8層中には7群の遺物の集合が認められる。しかし、その出土状況や遺物の構成には、それぞれ差異がある。各群の性格付けは、さらに検討の余地を残すが、一応、ⓐ・ⓑ群は日常用容器を含むことから、日常生活の中で出る破損品を投棄したもの、ⓒ・ⓔ群は工具類と、折ったり切断された樹枝が多いことから、木器や木製品の製作・加工に関わる投棄、ⓓ群は日常用の土器類を一括して投棄したものと考えておきたい。それらは、さらにⓑ群でみられたような廃棄の最小単位に区分される可能性をもつ。ⓕ・ⓖ群については、散慢な出土状況から投棄というより、台地部からの流れ込みや、貯木土壙から流れ出した自然堆積と考えたほうがよさそうである。

8層の出土遺物は、今回の調査で得られた全遺物の90%以上を占める。土器だけでも容積25ℓの整理用コンテナ・ボックスで80箱をこえる。以下、出土遺物を材質・種類ごとに分けて報告する。出土地区・層位については、本章の最後に一覧表を作成しているので参照されたい。

i）**土器** (Fig.112～122)

土器については、前述した7群に分けた遺物の集合の時期を知る手掛りとなるので、各群ごとに報告する。ただし、ⓐ群はSK－11～13の上面にあたる。これについては、すでにSK－11の時期を決めるために、述べているので省略する。

〈A・B－3・4区8－4層〉

Fig.112・113には8－3・4層出土の土器も図示している。その中で、8－4層の土器はⓑ群にともなうものである。

壺はほとんどが板付II式土器中段階のものである。その中で、223・225・228は頸部の付け根

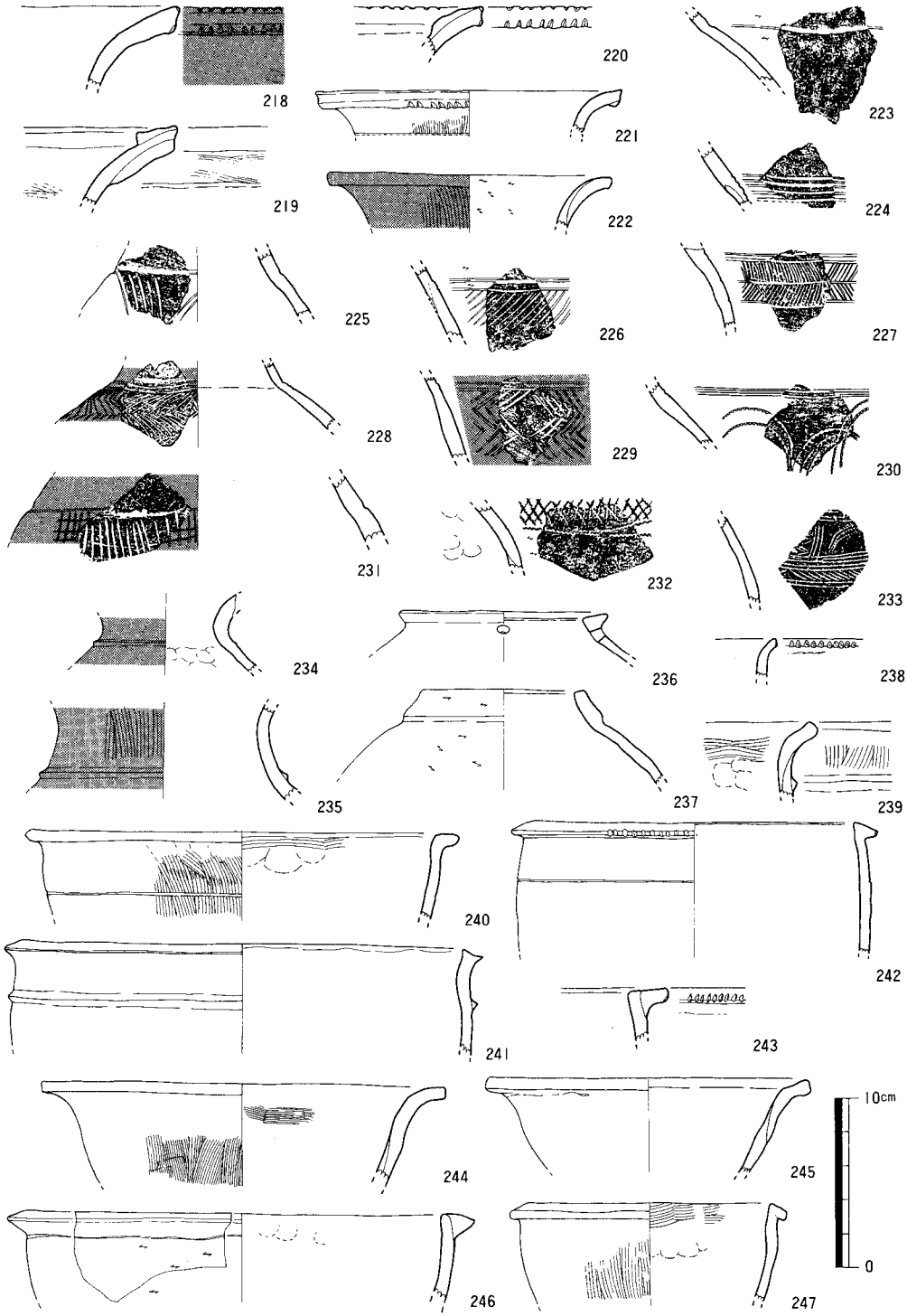


Fig.112　A・B－3・4区　8-3・4層出土土器実測図　1（縮尺 1/4）

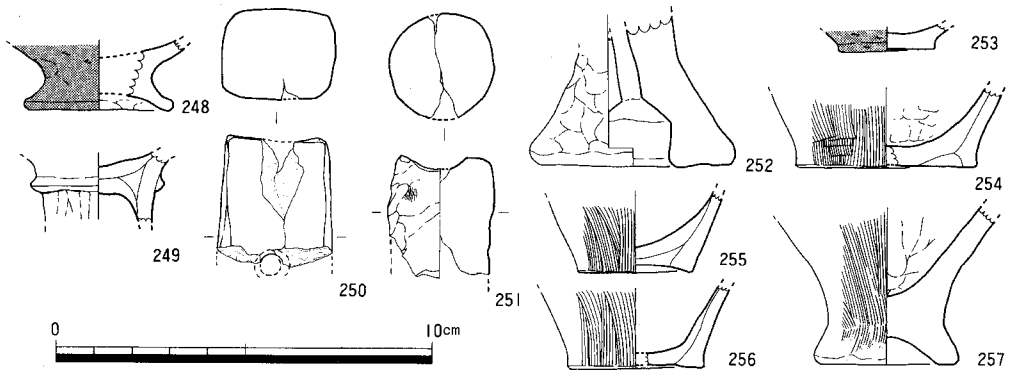


Fig.113　A・B－3・4区　8－3・4層出土土器実測図　2（縮尺 1/4）

に段がつき、頸部と肩部が明確に区分された壺で、板付II式土器古段階に遡るものである。また、253は円盤貼付状の底部をもつ壺である。これも板付II式土器古段階のものである。237は無頸壺で、口縁部外面に粘土を貼付して肥厚させる。同様な例には、後述するE－4－33区8－3層出土のFig.118－333があり、また福岡県行橋市前田山遺跡でも類例が知られている。

甕には、238・239のように如意形口縁をもつものと、240～243のように刻目突帯文土器系統のものの2者がある。量的には前者が少なく、細片のものが多い。238は口唇部を切るようにキザミを施す。板付II式土器中段階に比定できるものである。後者の241～243は中段階の範疇で捉えてよかろう。鉢も甕と同様の2者がある。248は脚台付鉢と考えられる。249は高坏の脚部の付け根付近の破片である。252は支脚である。

以上から、ⓑ群にともなう他の遺物も板付II式土器中～新段階のものと考える。

〈C－3・4区8－3・4層〉

ⓒ群にともなう土器である。かなり時期幅をもつ。258は口頸部が朝顔状にひらく壺である。黒塗り磨研。須玖I式土器古段階のものである。261は頸部の付け根に段が巡り、胴部と明確に区分される。265は粘土紐を巻き上げて成形している。ともに板付II式土器古段階のものである。269・270は口頸部が緩やかに反転しながらひらく。板付II式土器中～新段階。他の壺は、いずれも板付II式土器中段階の範疇で捉えられる。

甕には如意形口縁をもつものと、刻目突帯文土器の系譜をひくものの2者がある。量的には後者が多い。前者としては271～274がある。胴部が張らず、板付II式土器中段階の中で考えてよい。後者には275～280がある。275は口縁部に貼付する突帯が大きく、断面「コ」字形となっており、須玖I式土器古段階としてよかろう。他は板付II式土器中～新段階に比定できる。。甕の底部には、薄い平底の288～291と、厚い上げ底の292・293がある。前者は板付II式土器中段階、後者の中で292は新段階に比定できる。293は厚底化が進んでおり、須玖I式土器古段階で捉えた方がよかろう。

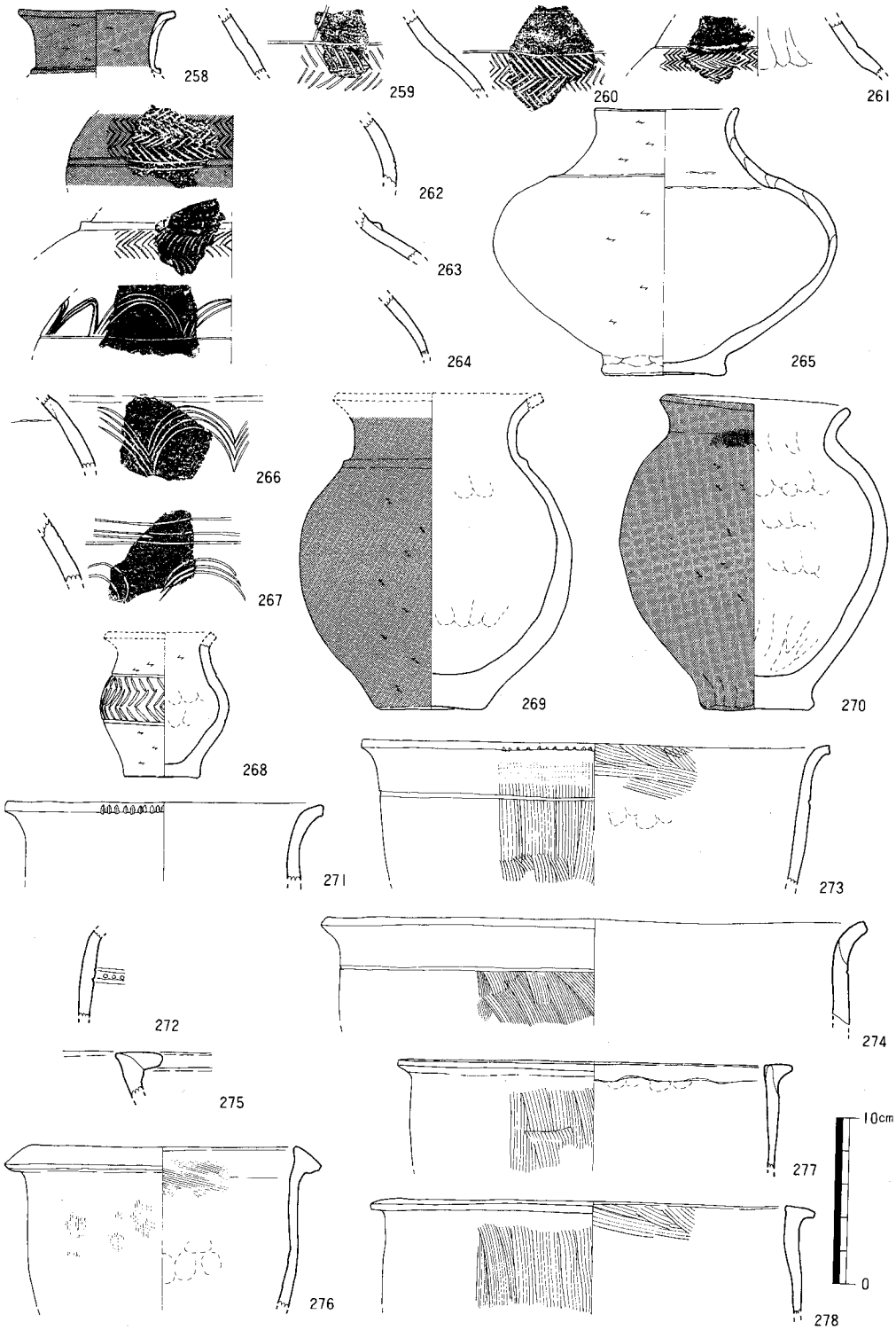


Fig.114　C－3・4区　8－3・4層出土土器実測図　1（縮尺 1/4）

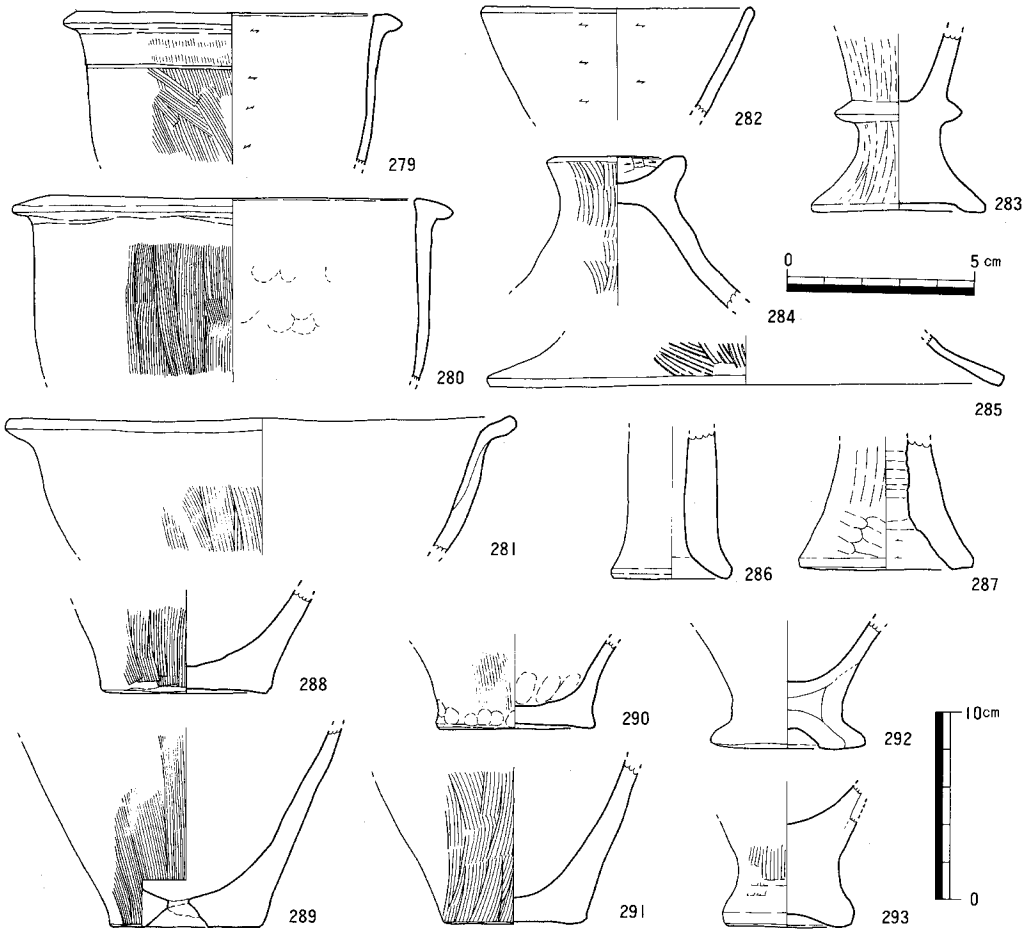


Fig.115　C－3・4区　8－3・4層出土土器実測図　2　(縮尺 1/4)

他に鉢・蓋・器台がある。283はミニチュア土器である。身部が深いので、脚台付杯とした。外面には縦方向の暗文風の研磨が施されている。同形の木製品が福岡市西区石丸遺跡で出土している。後述する漆塗り脚付杯をミニチュア化したものであろう。Fig.122－404は彩文を施した壺の胴部片で下地に黒色顔料を塗布し、直線文をひき、その上下に目の細かな斜格子文をベンガラで描く。

以上、ⓒ群の土器には、かなりの時間幅がある。量的に多いのは、板付II式土器中～新段階のものである。ⓓ群でみるように遺物の廃棄には、さらに細かな推積単位が予想される。ⓒ群は、そうした堆積単位が長期間にわたり積み重なったものと考えられる。

〈A～C－4区8－5層〉

ⓕ群にともなう土器である。Fig.116－294～308は壺である。その中で299は肩部に削り出し突帯を巡らす。胴部上半に文様を描くものが多い。文様は羽状文が多い。対向する羽状文、重弧

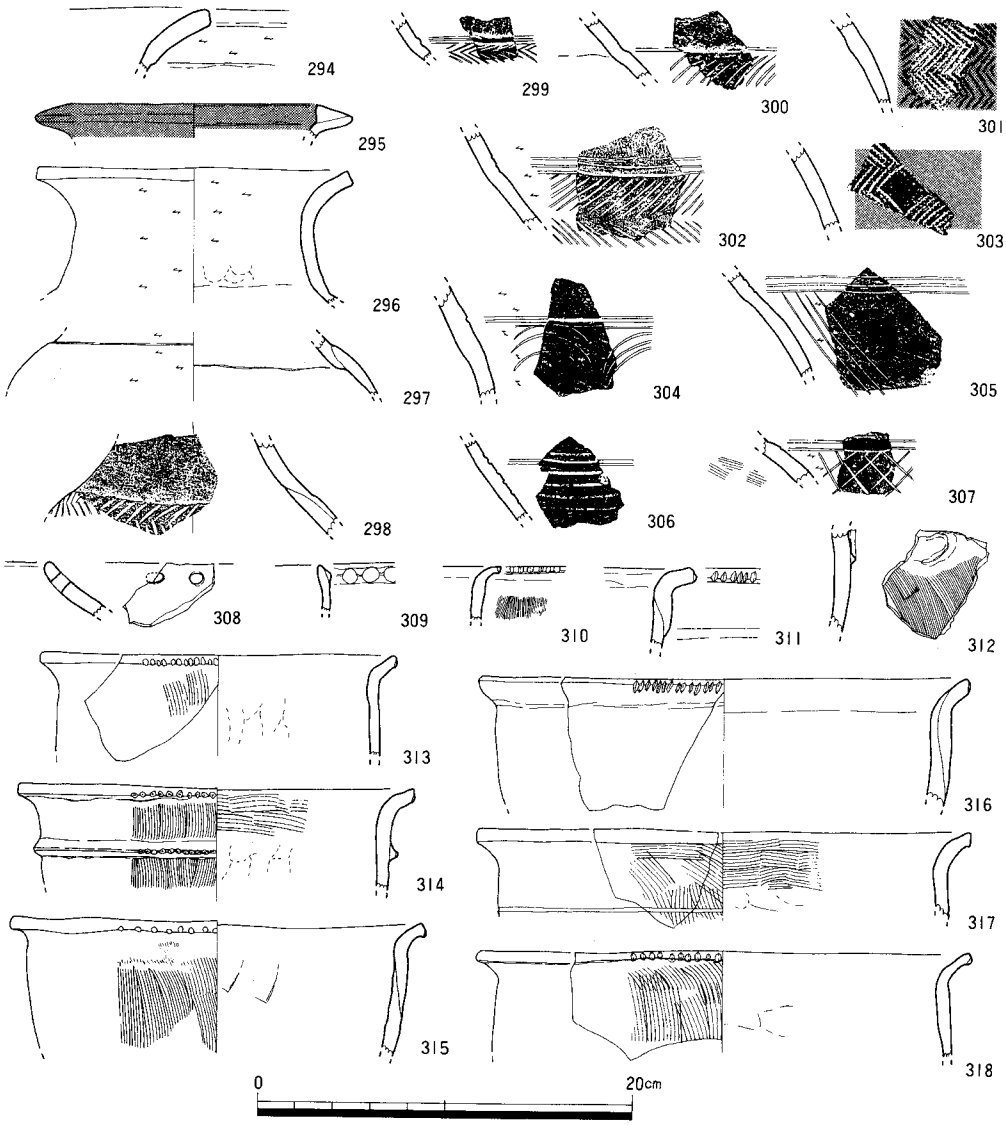


Fig.116　A～C－3・4区、8－5層出土土器実測図　1　(縮尺 1/4)

文、複線山形文（？）、平行沈線文、斜格子文などがあるが、数は少ない。308は無頸壷で、焼成前に2孔1組の穿孔を施す。297は球形の胴部内面の頸部との境界に明瞭な段が残る。板付Ⅰ式土器新段階に比定できる。298は頸部と胴部の境界に段をめぐらし、下方に羽状文を施文。板付Ⅱ式土器古段階。彩文土器が4点出土している。Fig.122－399・400は肩部に有軸羽状文、402は斜格子文をベンガラで、黒色顔料を下地に描く。406は、どのような文様かは不明。板付Ⅰ式土器～板付Ⅱ式土器古段階。他は中段階と考えてよかろう。

309は夜臼式土器である。棒状工具を口縁部突帯に押捺してキザミを施す。310・311・316は

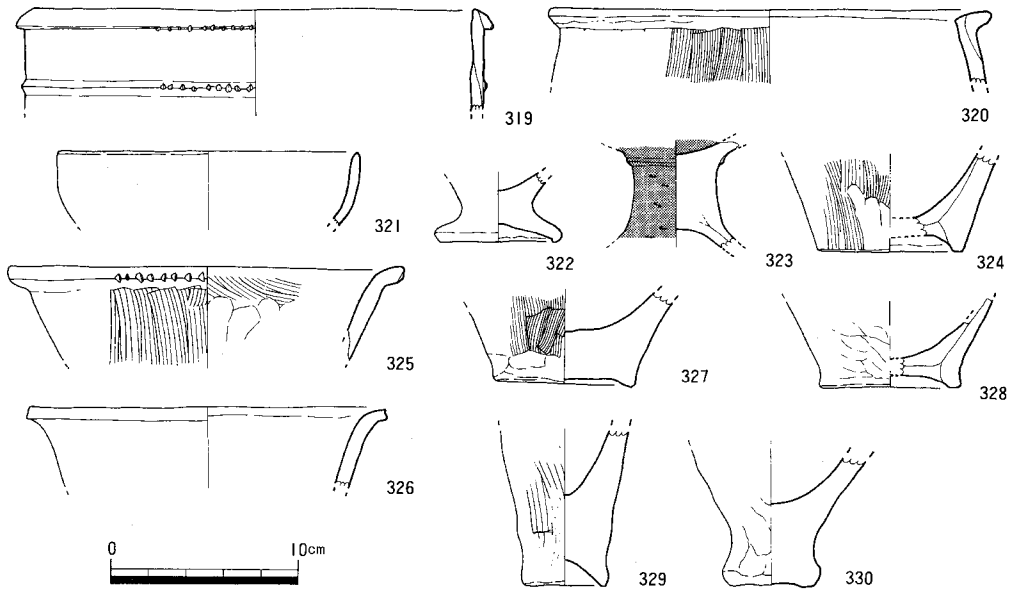


Fig.117　A～C－3・4区　8－5層出土土器実測図　2　(縮尺 1/4)

ヘラ状工具で口唇部を上から下へ切るように施すキザミをもつ。312は口縁下にU字形に粘土紐を貼付した甕である。この種の甕は、北部九州では珍しい例である。310・311・316・319は板付II式土器古段階、他は中段階と考える。

他に鉢・脚台付鉢・ミニチュア土器がある。329は身が深く腰の高い杯形の土器である。

以上、ⓕ群の土器は、少量の夜臼式土器・板付I式土器新段階～板付II式土器中段階のものを含むが、大半は板付II式土器古段階に比定できる。

〈D・E－3・4区8－3層〉

ⓓ群にともなう土器である。Fig.119・120に図示した。壺には緩やかに反転しながらひろがる口頸部をもつ353・354・360、頸部の付け根に段をめぐらして胴部との境界をつける356・358、肩部の段が沈線化した357・359がある。おのおの板付II式土器新段階、古段階、中段階に比定できる。

361は小形の蓋で、壺用か。

甕には、板付II式土器中段階の如意形口縁をもつ363・364、新段階の刻目突帯文土器の系譜をひく367・368がある。底部の破片は、369・370のように厚手の上げ底ばかりである。板付II式土器新段階。

以上、ⓓ群にともなう土器は、少量の板付II式土器古～中段階のものを含むが、板付II式土器新段階のものが主体を占める。

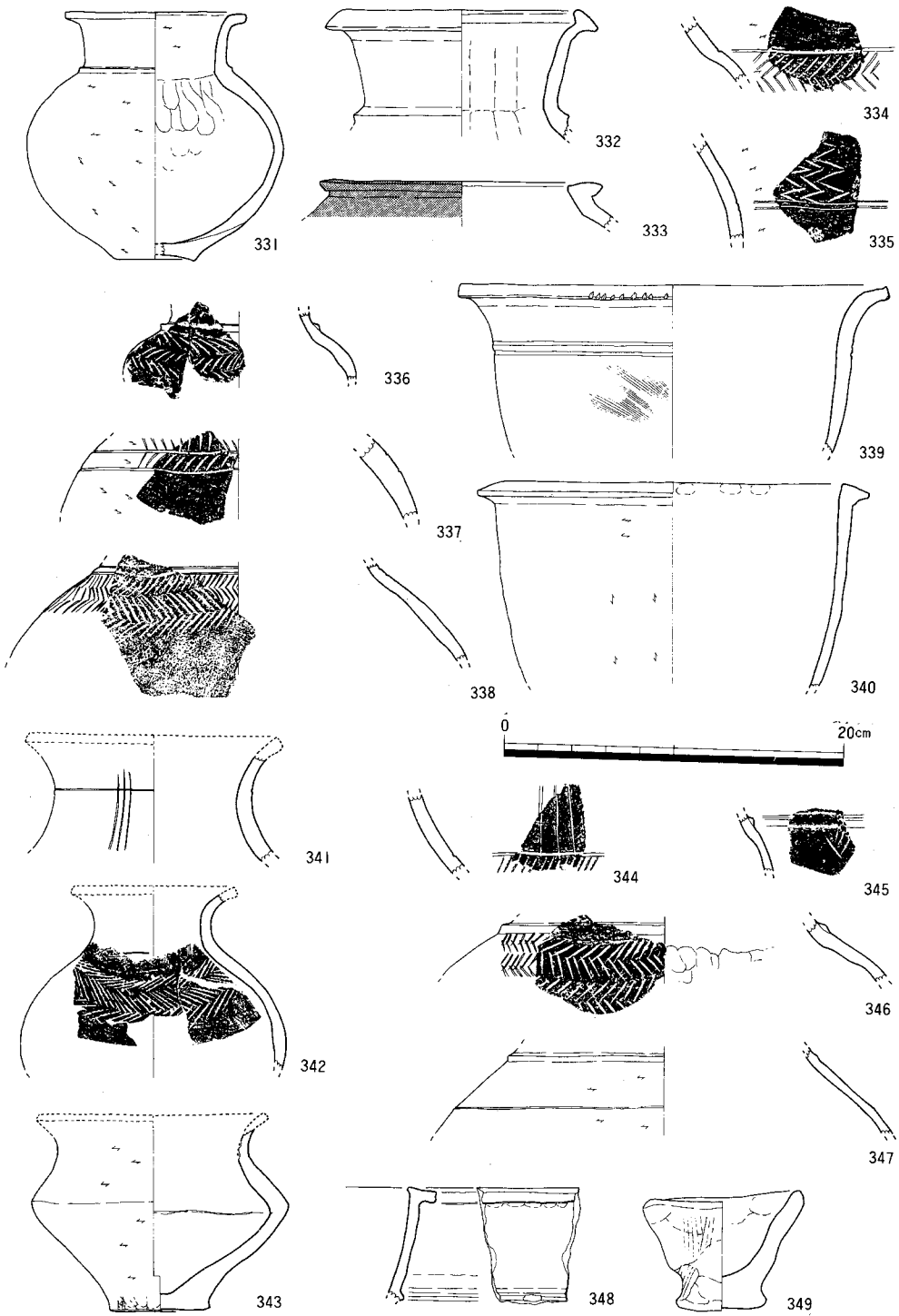


Fig.118　D・E－3・4区　7－2～8－1・2層出土土器実測図　(縮尺 1/4・1/2)

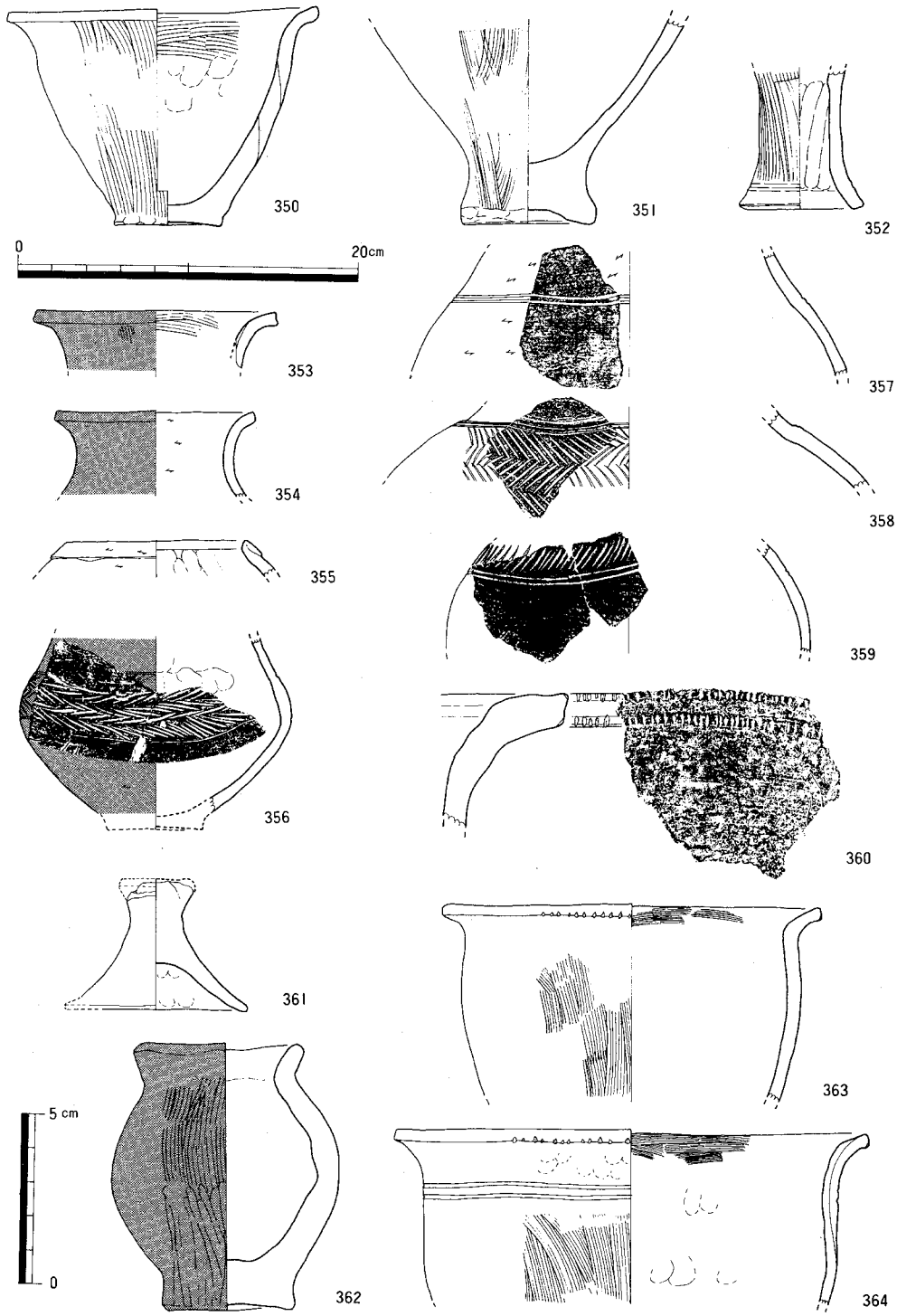


Fig.119　D・E－3・4区　8－2・3層出土土器実測図　(縮尺 1/4・1/2)

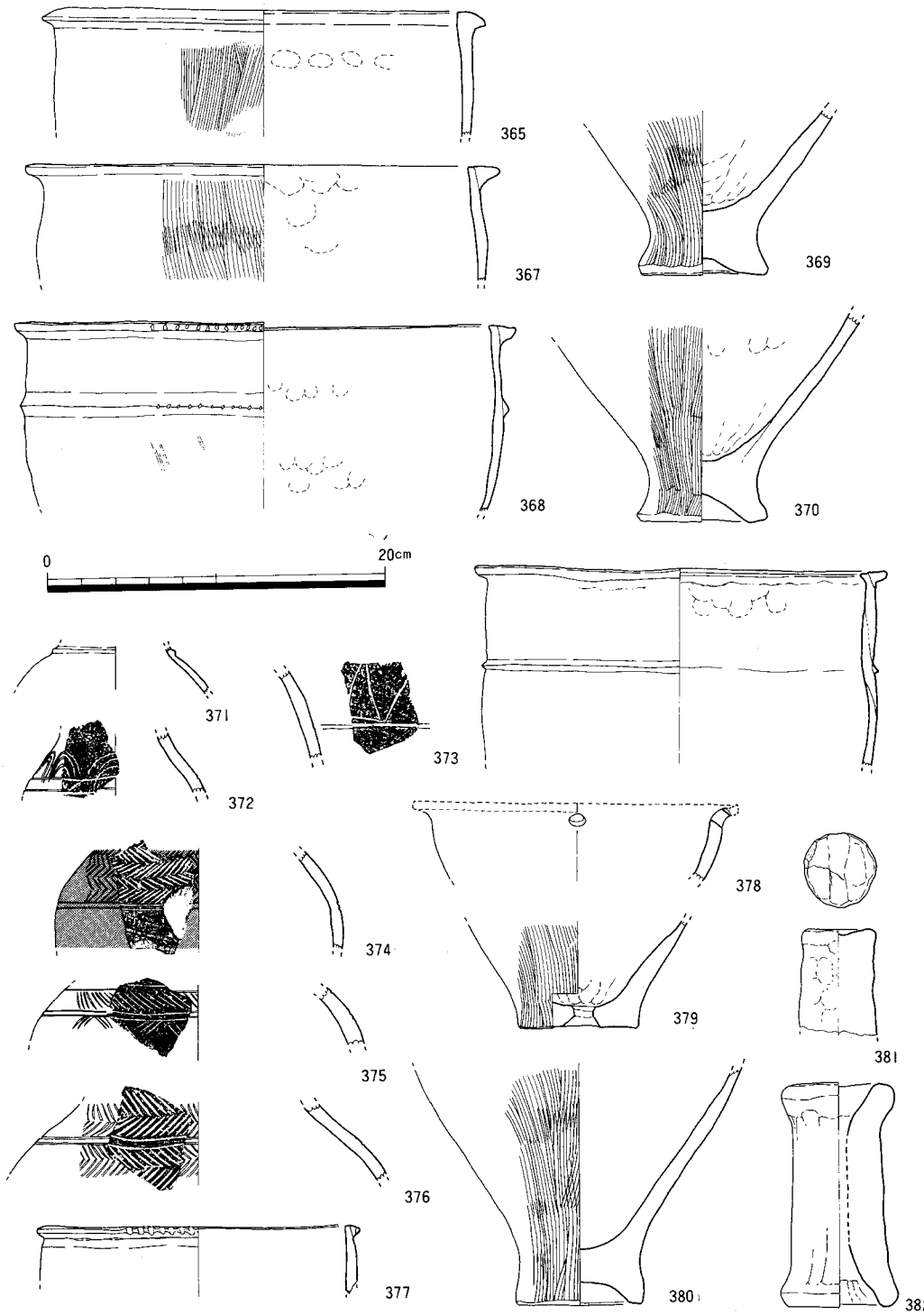


Fig.120　D・E－3・4区　8－3・4層出土土器実測図（縮尺 1/4）

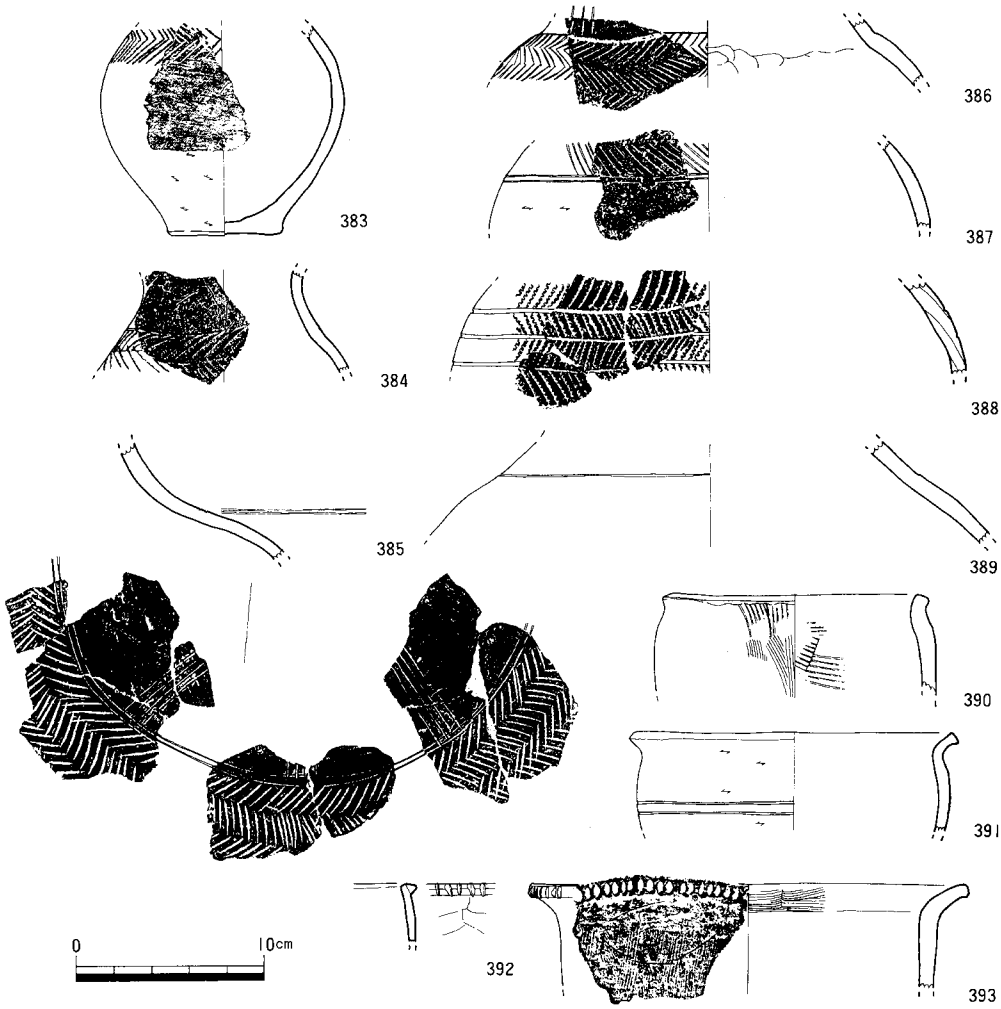


Fig.121　D・E－3・4区　8－5層出土土器実測図　　(縮尺 1/4)

〈D・E－3・4区8－4層〉

ⓔ群にともなう土器である。Fig.120－371～376は壺で、頸部の付け根・肩部に沈線あるいは突帯をめぐらす。板付II式土器中段階のものである。Fig.122－395は壺の口縁部片である。黒色顔料を塗布し、口縁内面に短線文をベンガラで描く。板付II式土器古段階のものか。377は夜臼式土器の甕の破片である。その系譜をひく板付II式土器中段階のものとして378がある。甕の底部の中で、379は板付II式土器中段階、380はつづく新段階に比定される。380については、出土層位が8－3層との境界にあり、8－3層とするべきかもしれない。381は中実の支脚、382は器台で、板付II式土器に通有のものである。

以上、ⓔ群の土器は板付II式土器中段階のものが主体をなしている。

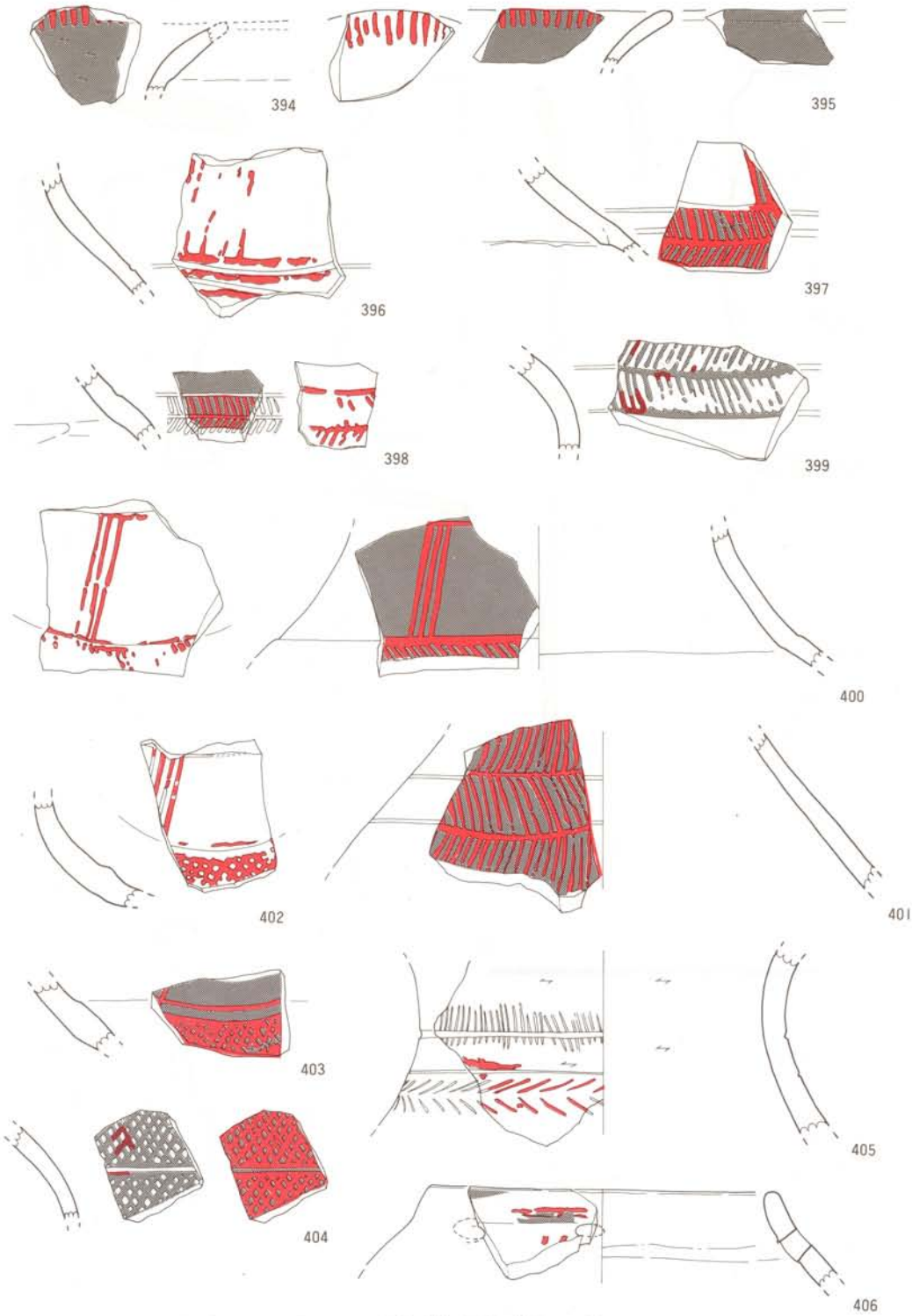


Fig. 122　彩文土器実測図（縮尺 1/2）

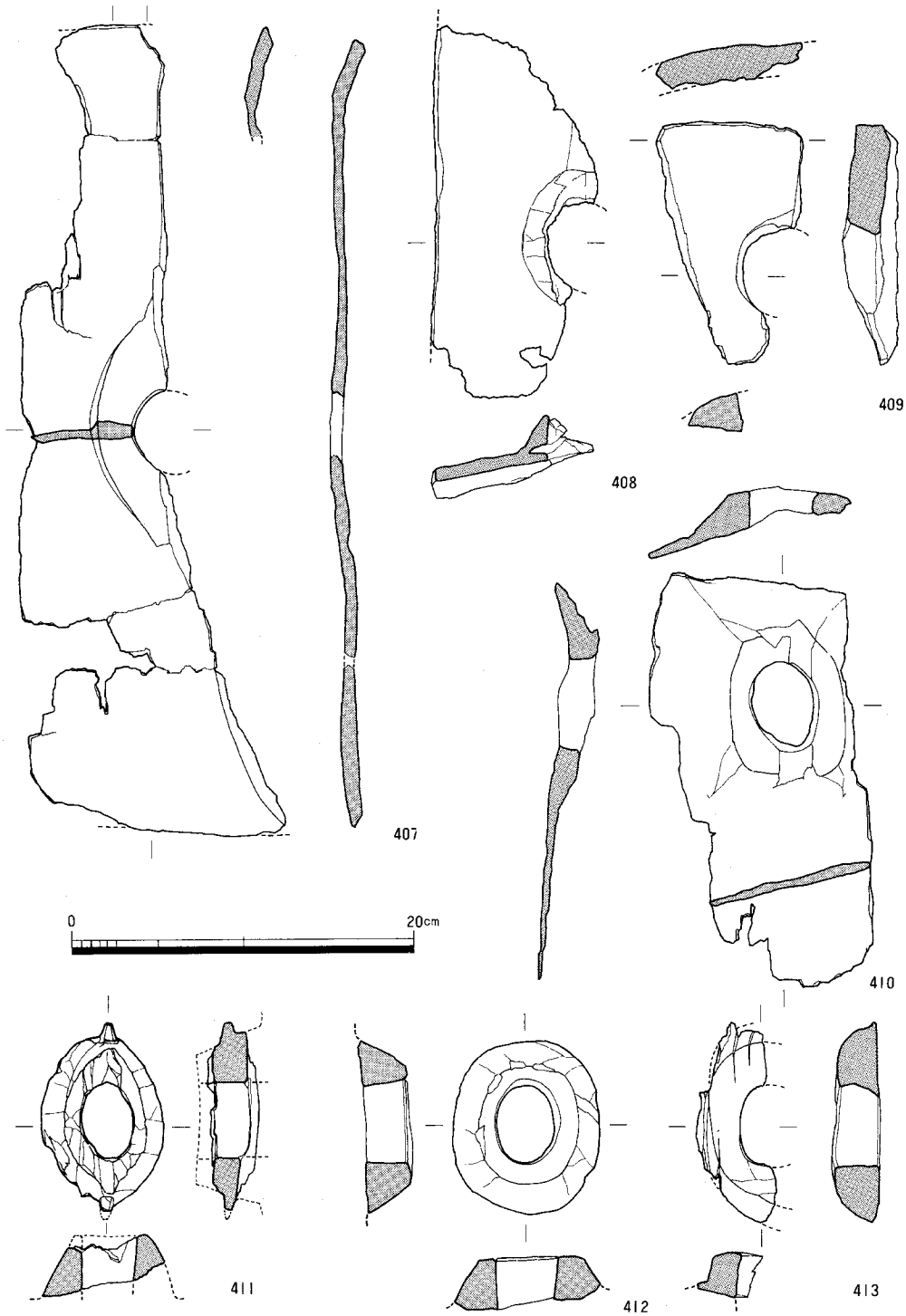


Fig.123　8層出土木器実測図　1　(縮尺 1/4)

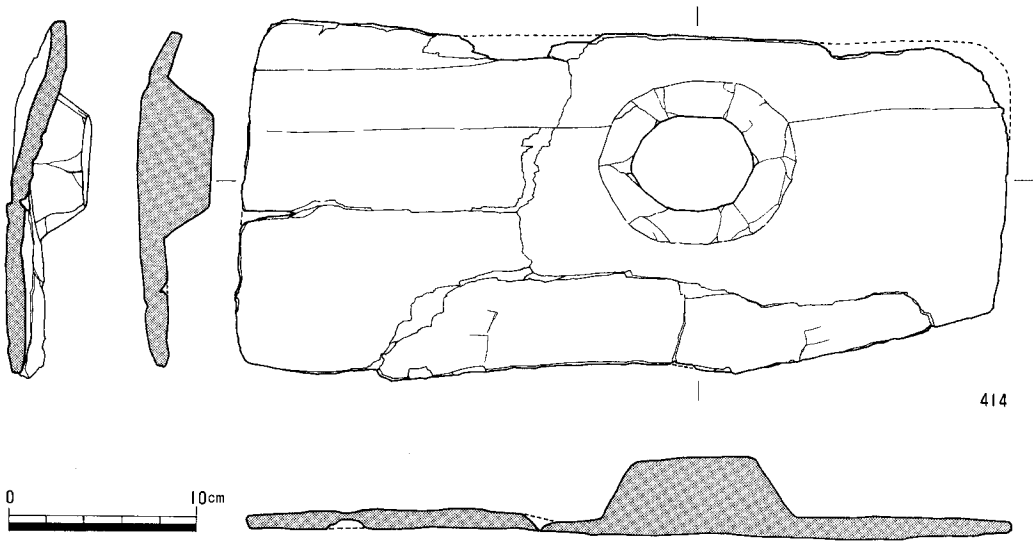


Fig.124　8層出土木器実測図　2　(縮尺 1/4)

〈D・E－3・4区8－5層〉

ⓖ群にともなう土器である。出土量は少ない。特徴的なものだけを選び出して、Fig.121・122に図示した。392は夜臼式土器である。ヘラ状工具でキザミを施す。Fig.122－397は彩文を描く壺で、板付Ⅰ式土器～板付Ⅱ式土器古段階のものである。他は板付Ⅱ式土器中段階のものが主で、一部に新段階の範疇で捉えられるものはほとんどない。ほぼ同じレベルで推積したⓕ群とくらべ、古い段階のものが多い。

ii) 木器・木製品 (Fig.123～140)

8層からは多種・多様な木器・木製品が出土している。貯木土壙から出土したものとくらべ、破損品がほとんどで、土圧あるいは一時的に乾燥したために変形したものが多い。

〈農具類〉

407・408は諸手鍬である。411のような突起状に造り出した隆起部をもつと考えられる。409・410は平鍬で、円形隆起部をもつが変形が著しい。412・413は円形隆起部の破片である。諸手鍬・平鍬ともに柾目材を素材とする。

414はエブリの未製品である。415・416も木取りからエブリの身部の破片と考えた。板目材を用いる。417は叉鍬の歯部の破片であろうか。418～420は鍬の柄である。419が芯持ち材を用いているのに対して、418・420はミカン割材を素材とする。419の頭部は、部分的に面取りされている。420の頭部付近には緊縛痕がみられる。

421は鋤の未成品が加工途中に破損したものか。柾目材を用いる。422は一本造りの鋤の柄部～肩部近くの破片である。ミカン割材を素材とする。

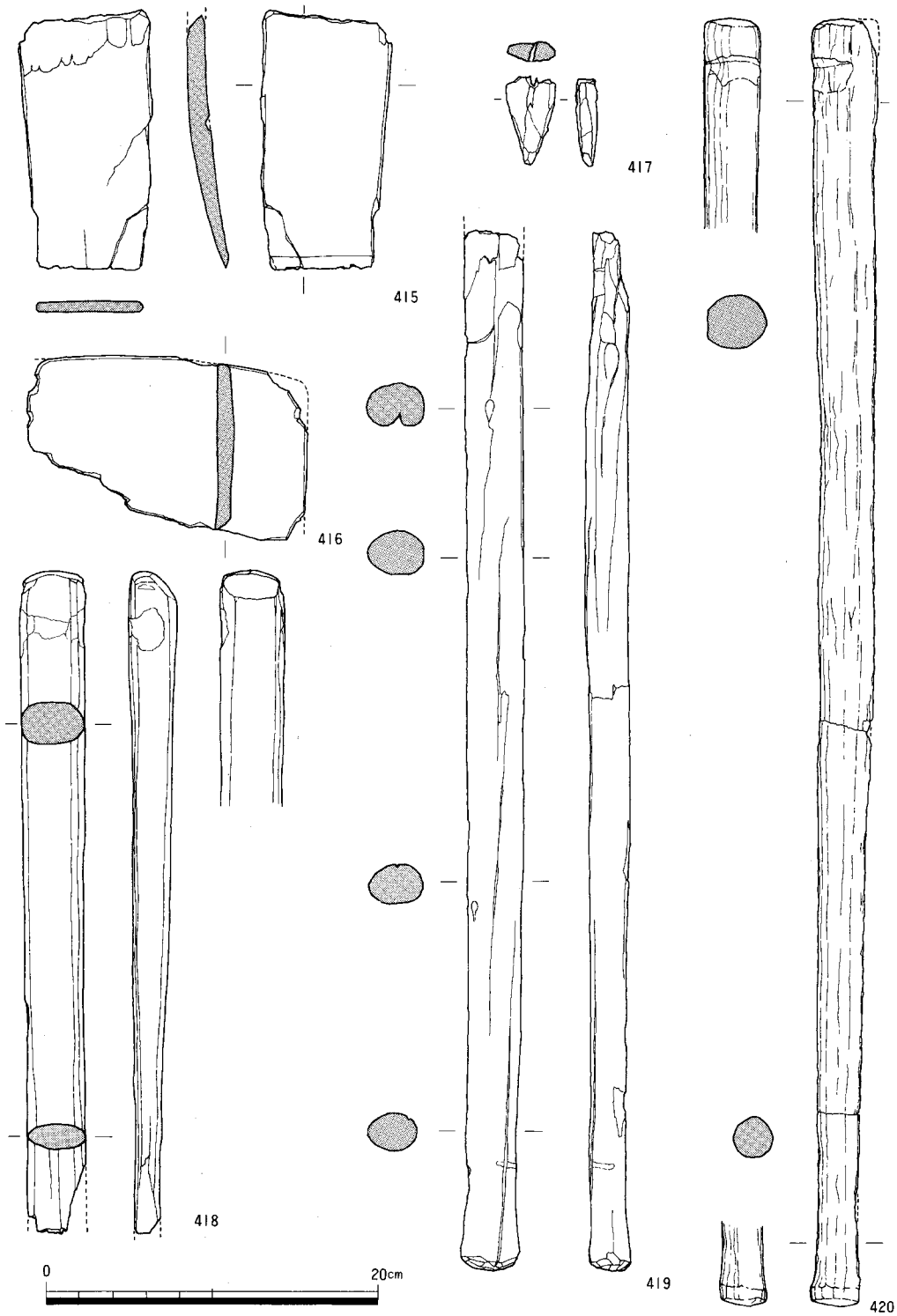


Fig.125　8層出土木器実測図　3（縮尺 1/4）

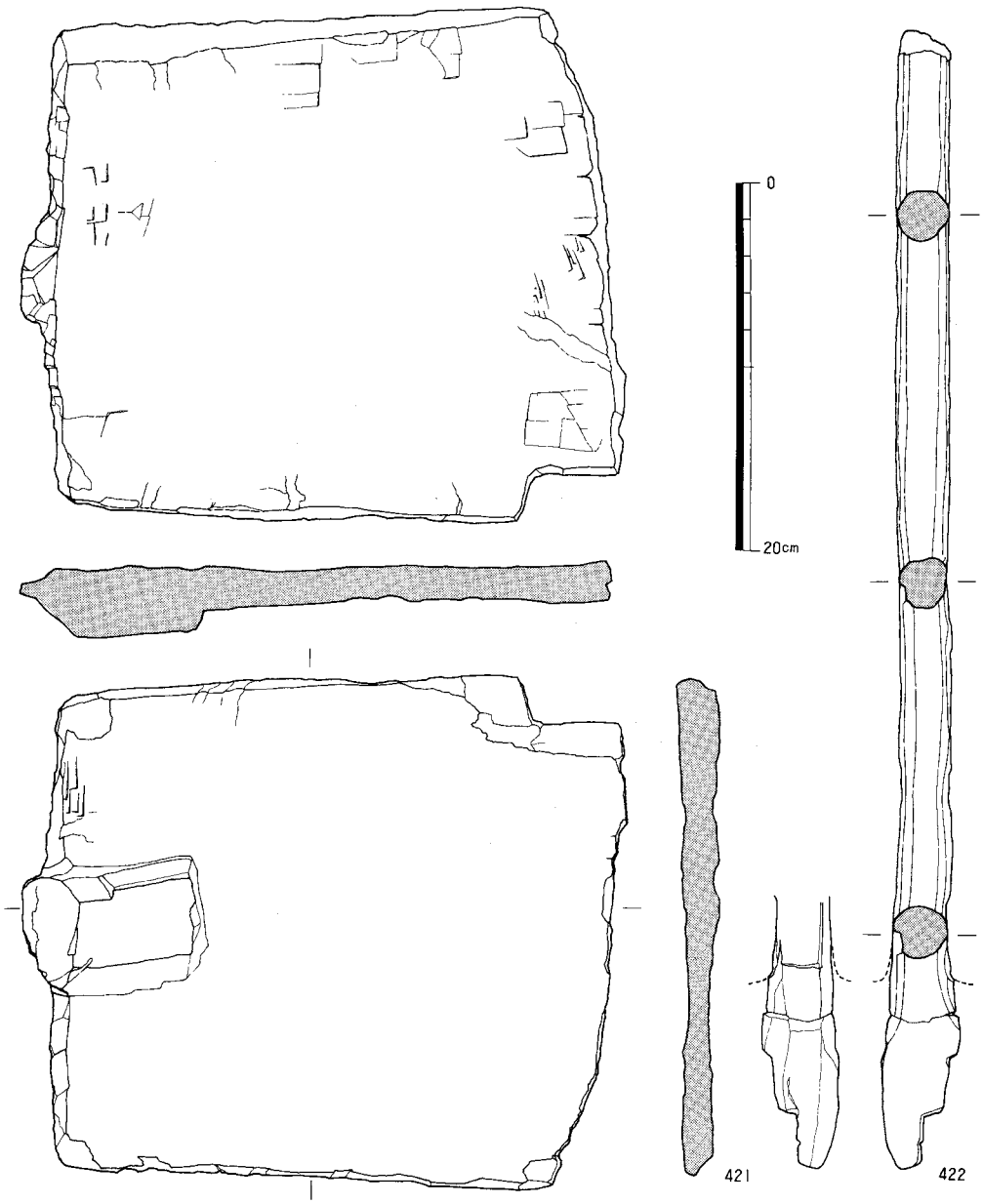


Fig.126　8層出土木器実測図　4（縮尺 1/4）

423は竪杵である。芯持ち材を用いる。搗部端面は両端とも使用のため著しく磨滅している。握部中央にソロバン玉状の造り出し部をもつ。

424～427は横槌である。424・425はミカン割材を素材とする。426・427は芯持ち材を使った小形品である。428は横槌の柄部破片か。

429は上面が凹み、著しく磨滅しているので、小形の臼の破損品と考えた。下端は、かなりいたんでいる。福岡市西区拾六町ツイジ遺跡などで類例が知られている。ミカン割材を用いる。

〈紡織具〉

430は織機の経打具と考えられる。割材を利用し、両端を削り落している。使用痕は認められらない。未成品か。小孔があるが、これは植物の根によるものか。

〈工具類〉

431は火鑽臼である。芯持ち材を1.0×1.3cmの角柱状に削る。片側に寄せて、火鑽杵をあてがう方形の凹みを刻み込んでいる。使用面周辺は炭化している。

432・433は細長い着装孔を穿つ直柄である。石鎌の柄、雇柄を用いた縦斧の柄など考えられるが判断できない。ミカン割材を素材とする。

434・435は柱状片刃石斧の膝柄である。自然木の枝分れ部分を切り取り、幹部を半截して台部をつくる。434は未成品で、握部には樹皮をつけたままである。435は製品と考えられる。握部端部には、枝の先端を切り落した切断痕が残る。

436は割材を利用したもので、工具の握部の破片か。先端付近には両側から穿孔が施されている。

437～442は太型蛤刃石斧の直柄である。437～440は台部の破片で、着装孔の一部が残る。他に1点残片が出土しているが、図化できなかった。439は着装孔の上部に段が造り出されている。今回の調査で出土した他の9点の太型蛤刃石斧の直柄には、439のような段を造り出すものはない。441・442は着装孔を刳り貫く以前の未成品である。442は片面が著しく腐食している。いずれもミカン割材の芯近くを用いてつくられている。

443き長方形の柾目材である。両小口部を結ぶ中軸を境として両側から交差する面ができている。この面では、小口部に直交する年輪の春材部が凹み、夏材部がわずかに凸起している。この凹凸のある面は、比較的やわらかなものを何回も擦過することで、小口部が磨滅して面ができ、さらに春材部が磨耗してできたものと考えられる。こうした擦過を繰り返すこと、対象物が比較的やわらかいことから、土器の整形時に用いる板材、つまりハケメ原体であることを考えた。片面には削り痕が残り、横断面は中央がわずかにふくらんでいる。2ケ所に穿孔が施され、側辺には切り欠きがみ

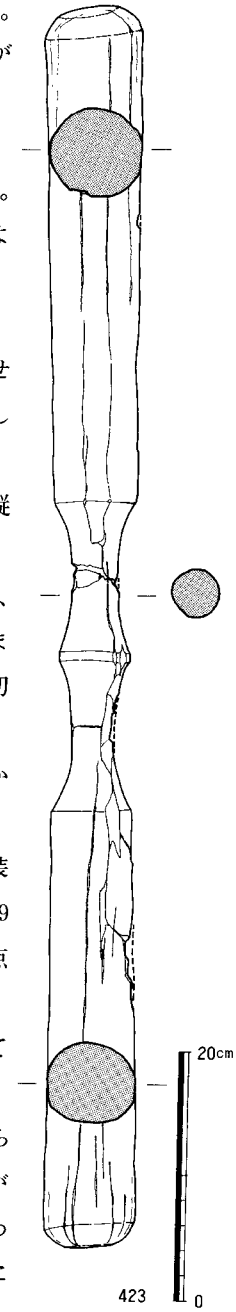


Fig.127　8層出土木器
実測図 5（縮尺 1/6）

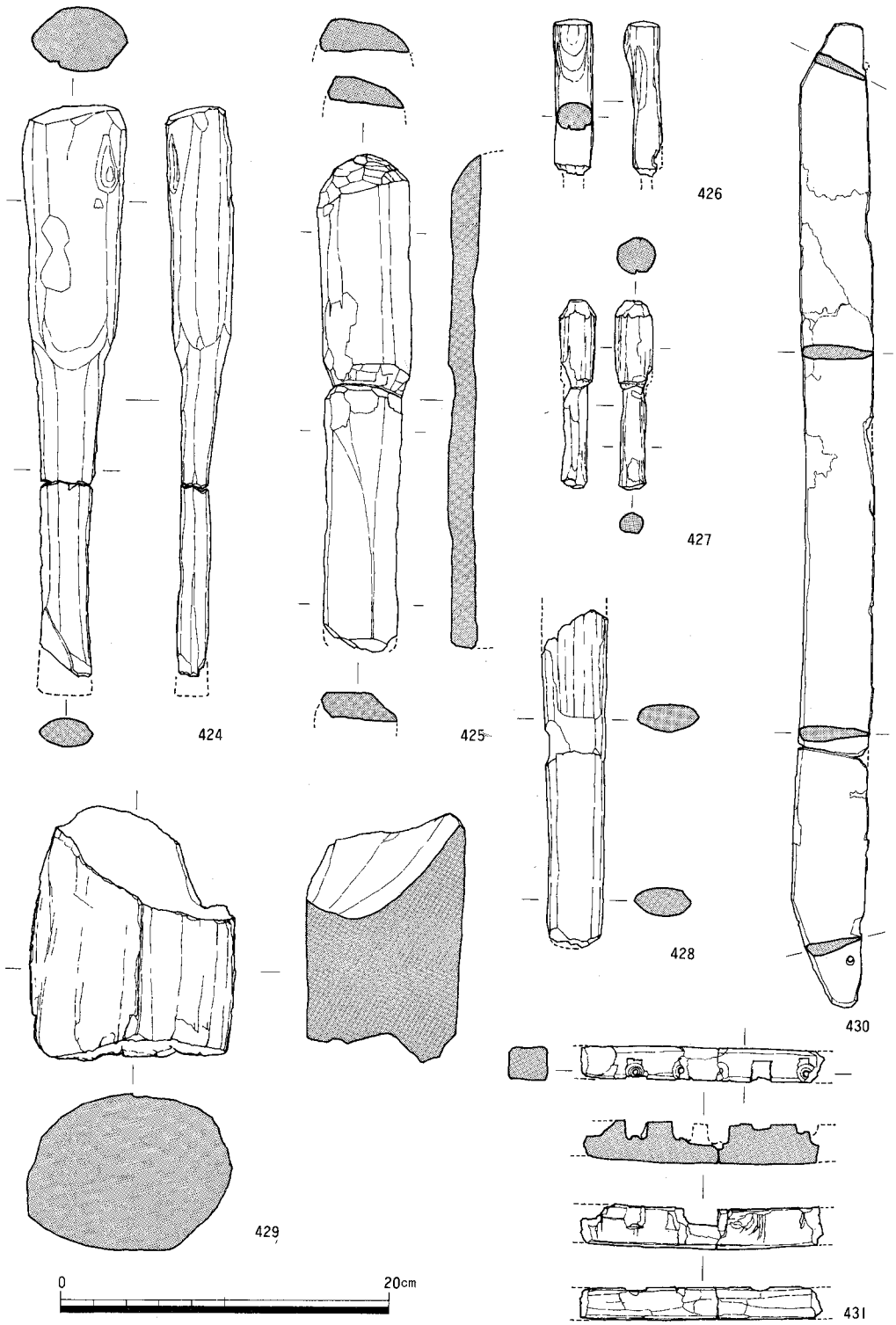


Fig.128　8層出土木器実測図　6（縮尺 1/4）

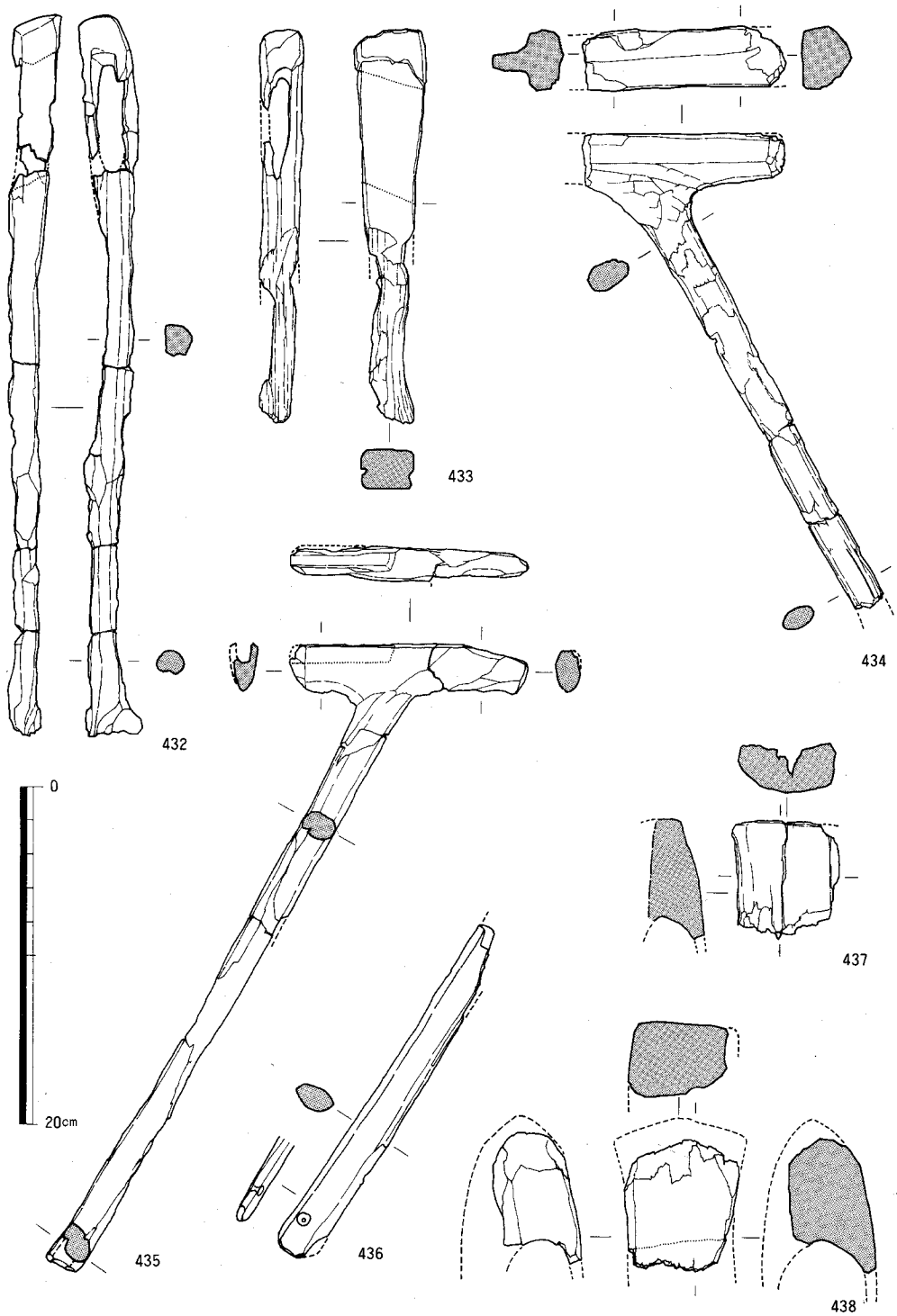


Fig.129　8層出土木器実測図　7（縮尺 1/4）

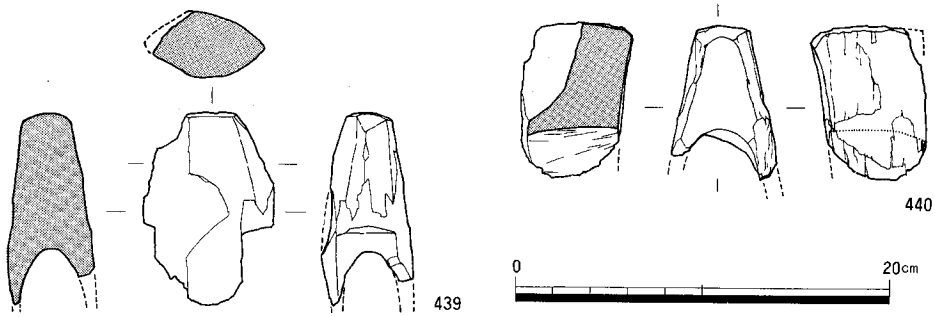


Fig.130　8層出土木器実測図　8（縮尺 1/4）

られる。

本例は明瞭に擦過した痕跡が残る。Fig.137－472・473の柾目の板材の一方の小口部にもわずかながら擦過痕を認める。これらもハケメの原体である可能性をもつ。

〈武器類〉

444は磨製石剣の柄部破片である。柄部の中央に丸い節部を削り出している。坏部にあけられた着装孔の大きさから有莖式石剣が装着されたと考えられる。柾目材を用いる。

445・446は鏃であろうか。ともに莖部を削り出している。445は先端付近が割れて欠損する。

〈容器類〉

447・449は長方形容器である。447は一度乾燥したため変形が著しいが、深い体部をもつ鉢に近い器形と考えられる。448の体部は浅く、盤に近い。448～452は楕円形あるいは舟形の容器である。452は未成品であろうか。削り痕が著しい。453は低い4脚をもつ長方形容器である。448・449・451が丁寧なつくりであるのに対して、450・453は加工が荒く粗製なつくりである。

454は蓋と考えた。両端に耳を造り出し、2孔ずつ穿孔を両面から施す。裏面の端部には浅い段が削り出される。板目材を素材とする。

455は竪杓子の破損品である。柄部の付け根に浅い段が削り出されている。

456～460は漆塗りの容器である。456は上端に赤漆が残ることから、脚付杯と考えた。全面に黒漆を下地として塗り、赤漆で文様を描く。長崎県北松浦郡田平町の里田原遺跡で類例が知られている。457は高坏の坏部破片とも考えたが、組み合せ式の把手をもつ鉢と考えた。内外面ともに黒漆が塗布されている。458は中心を方形に刳り貫く組み合せ式の容器。全面に薄く漆を塗り、外面だけに赤漆をかける。459・460は高坏である。459は脚裾部の破片で、透し孔が刳り貫かれている。外面にのみ黒漆を塗布する。460は坏部の口縁破片である。口縁の内側に突起を削り出す。内外面ともに黒漆が塗られている。

〈雑具・部材・その他〉

Pl.18－461・649は刺を刻み出した棍棒である。ミカン割材を素材とする。649は焼け焦げてい

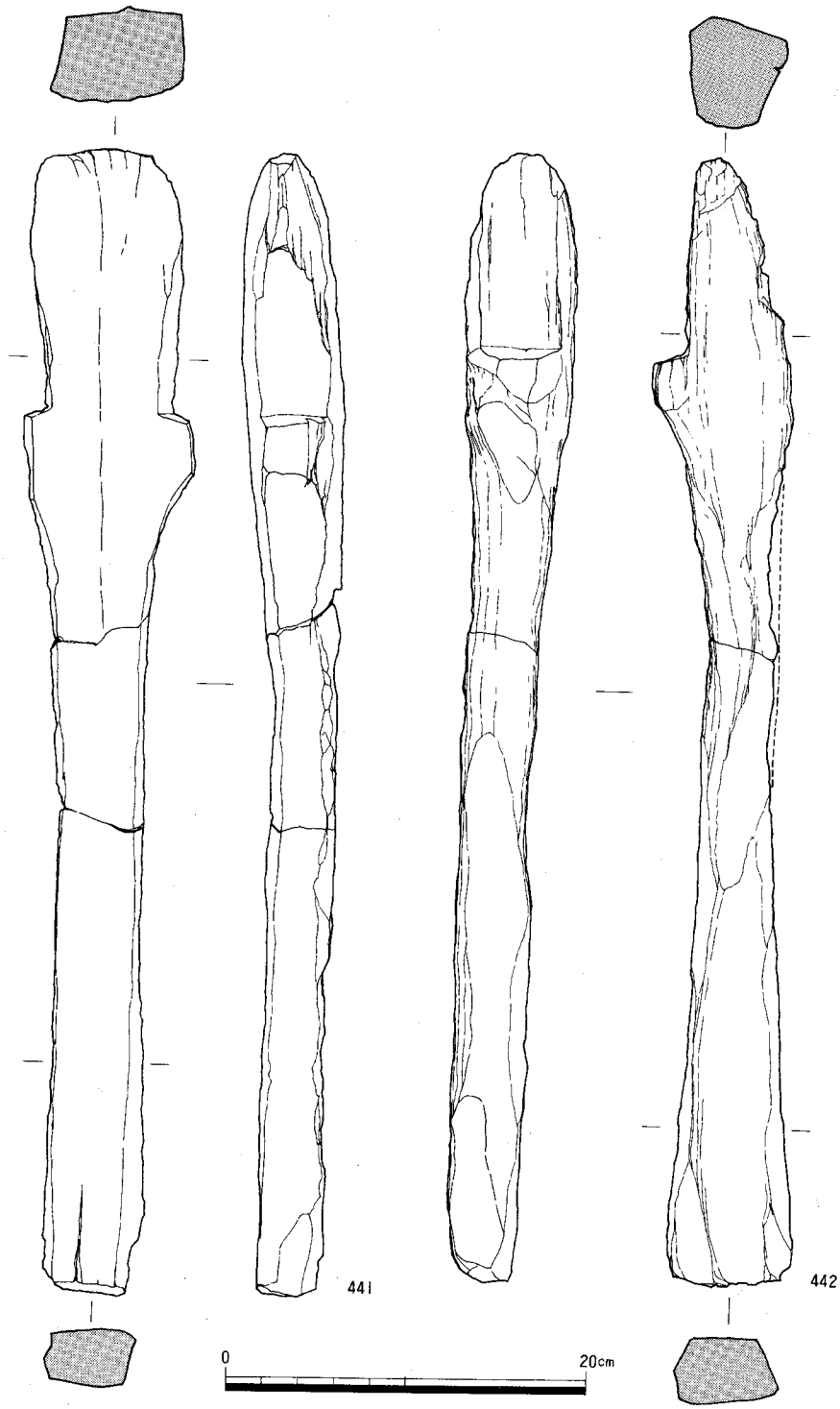


Fig.131　8層出土木器実測図　9（縮尺 1/4）

る。用途は不明。462は大足状の小形の木製品である。板目材を利用する。463は杓文字状の木製品である。わずかに彎曲する。板目材を用いる。464は三角形の柾目材である。3ケ所に穿孔が施される。465は板目に近い斜めに木取りされた半月形の木製品である。端部に両面穿孔が施されている。466と468は樹枝が二叉に分かれる部分を整形した鉤状の木製品である。468の上端部には切り込みが入れられている。467はU字形の板目材に穿孔を施したものである。

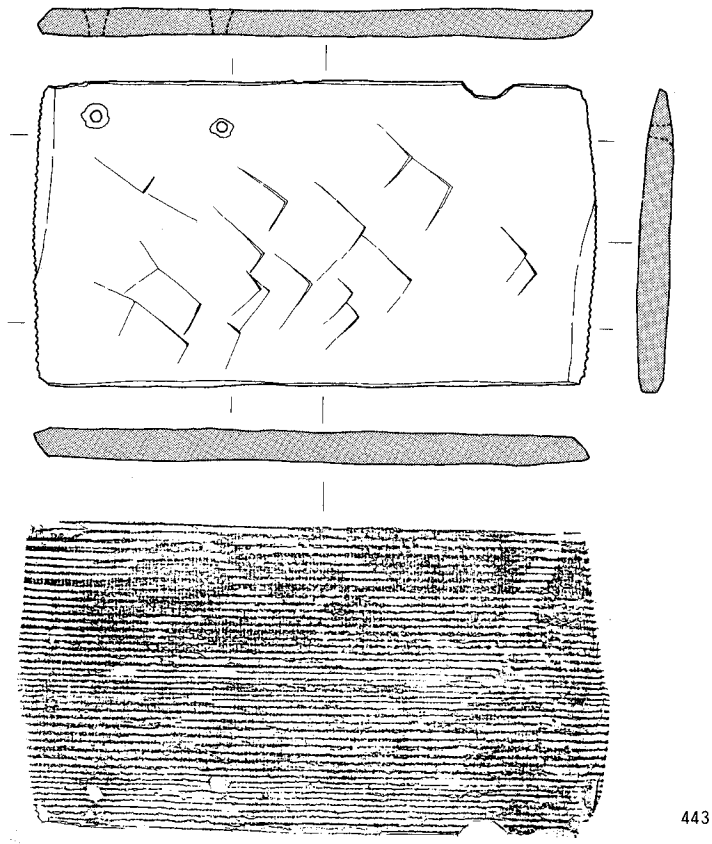


Fig.132　8層出土木器実測図　10（縮尺 1/2）

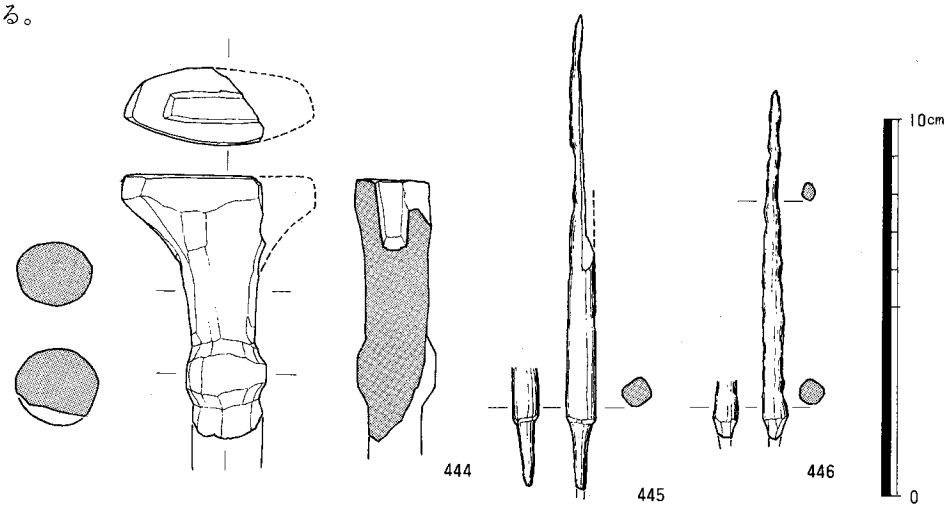


Fig.133　8層出土木器実測図　11（縮尺 1/2）

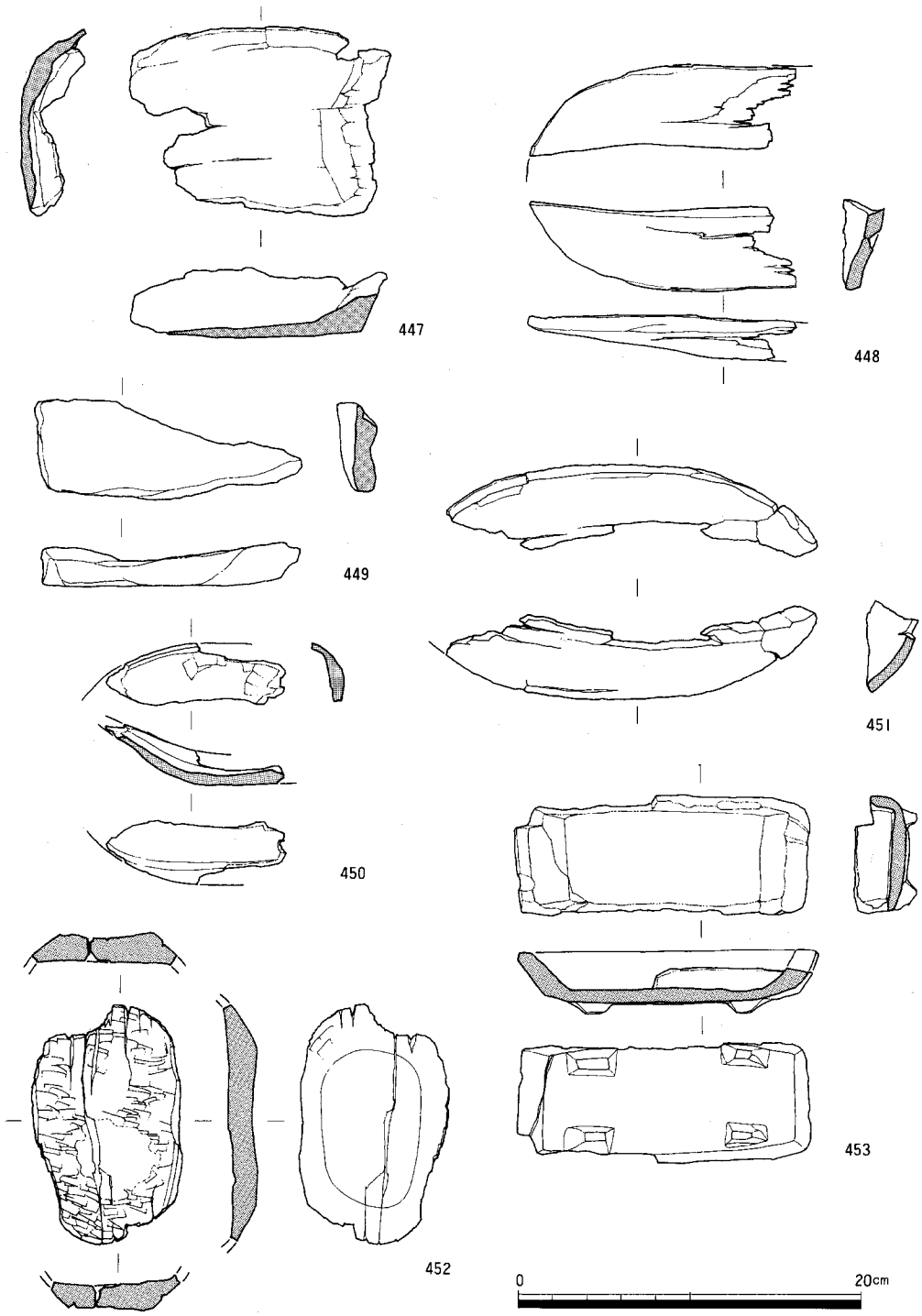


Fig.134　8層出土木器実測図　12（縮尺 1/4）

469・477は板材の破片である。469は柾目材、477は板目材である。470・471は棒状の木製品で、削り痕が残る。470の一端は焼け焦げている。472～474はスギの柾目材である。476・478は板目材である。479は先端部を平たく尖らせる。わずかに反る。板目に近い斜めに木取りされる。

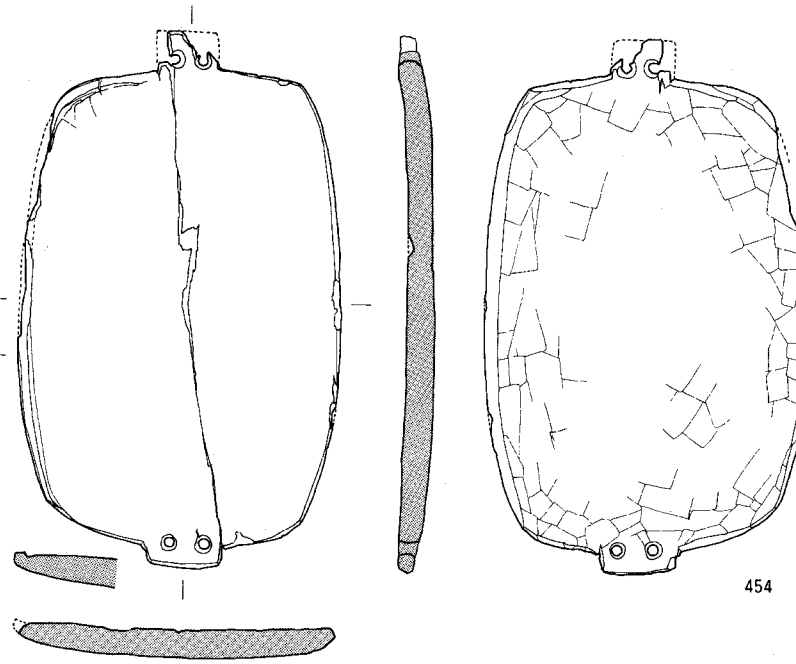
480・481は建築用の部材である。480はほぼ等間隔に切り欠きを施す。481は両端を鉤状に加工する。全面に削り痕が残る。ともに芯持ち材を素材とする。

482～488は樹枝の一端に頭部を削り出したものである。489～494は樹枝の一端を削り尖らせたものである。495～497は樹枝が切断されたものである。498・499は割り屑、500は削り屑である。

iii) 石器・石製品

(Fig.141～150)

包含層や貯木土壙の埋土などから多量の石



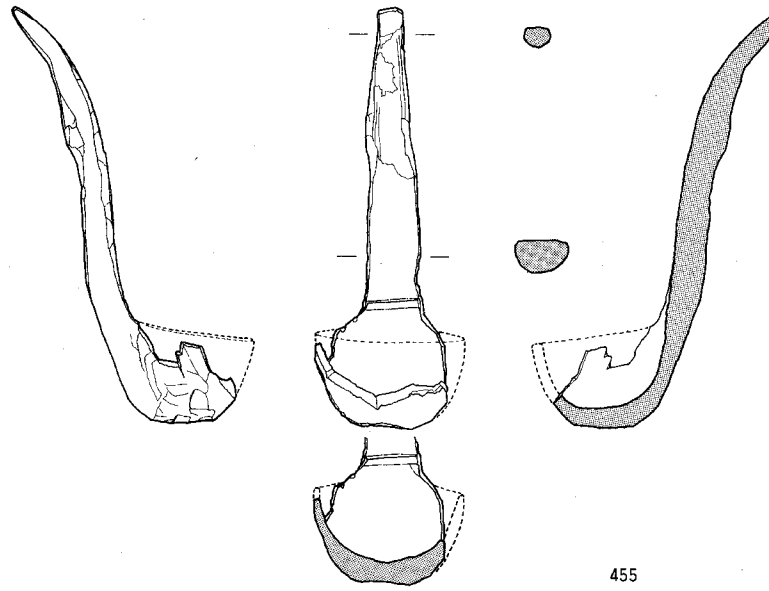


Fig.135　8層出土木器実測図　13（縮尺 1/4）

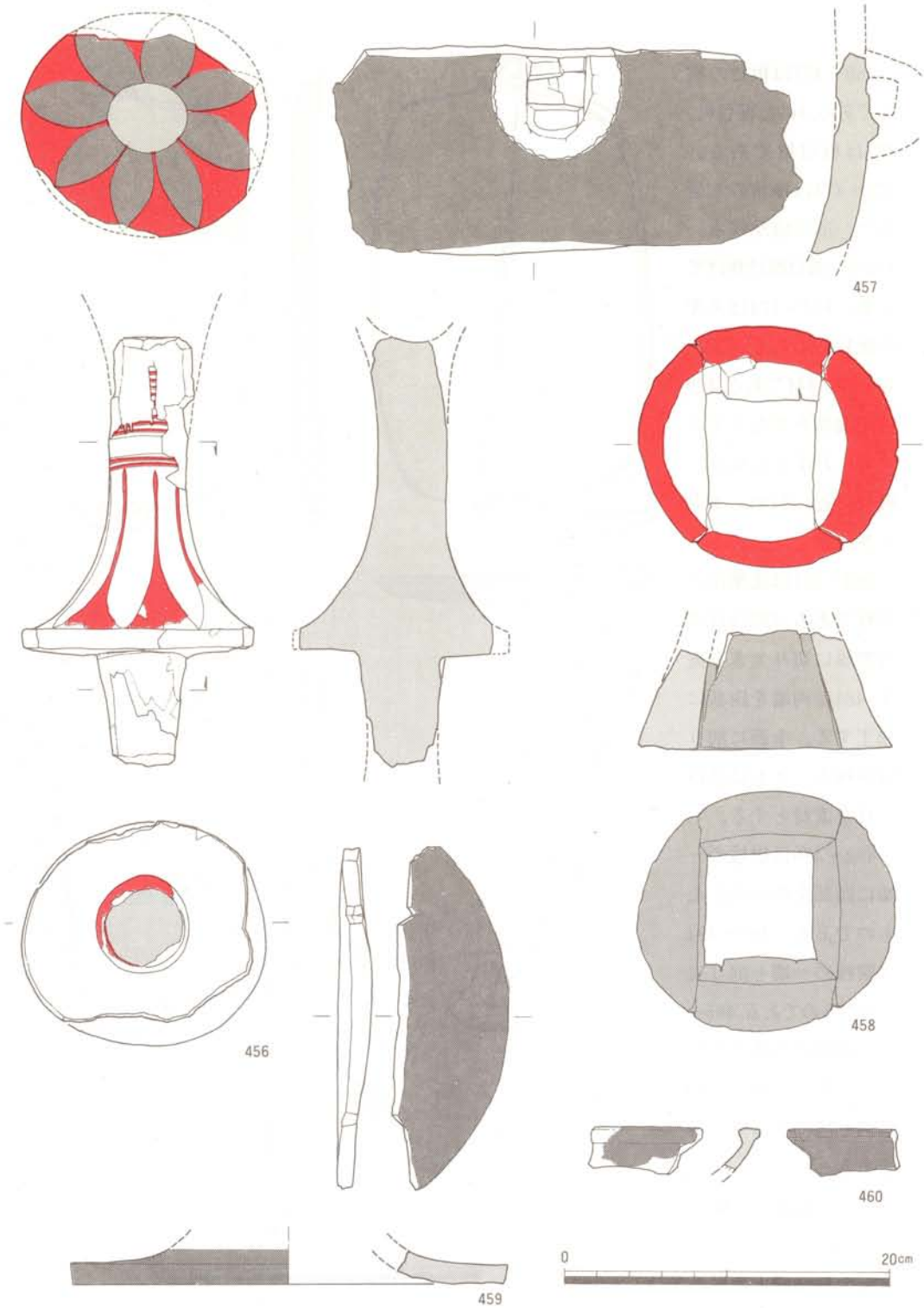


Fig.136　8層出土木器実測図　14（縮尺 1/2）

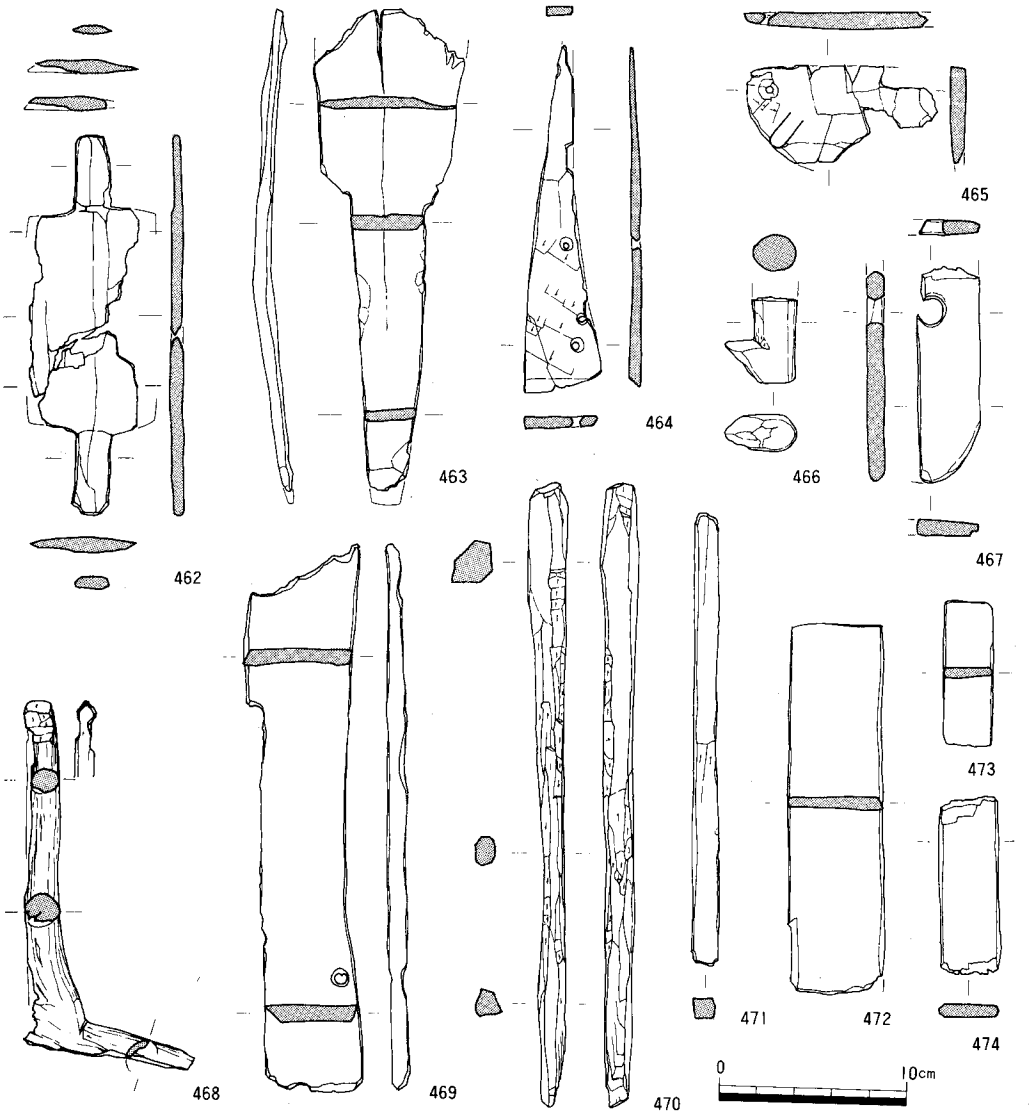


Fig.137　8層出土木器実測図　15（縮尺 1/4）

器・石製品が出土した。基本的には弥生時代前期中葉～中期初にともなうものである。種類と数についてはTab.2・3 に示すとおりである。種類については製作法の違いから大きく磨製と打製の2種に分けられ、それぞれに原料、素材、加工途上のもの、製品、欠損品などがある。ほとんどが欠損して廃棄されたものばかりである。また、軽石や焼けた石塊などもわずかながら存在する。

打製石器の材料のほとんどは黒曜石である。黒曜石は佐賀県伊万里市腰岳産と思われる5cm

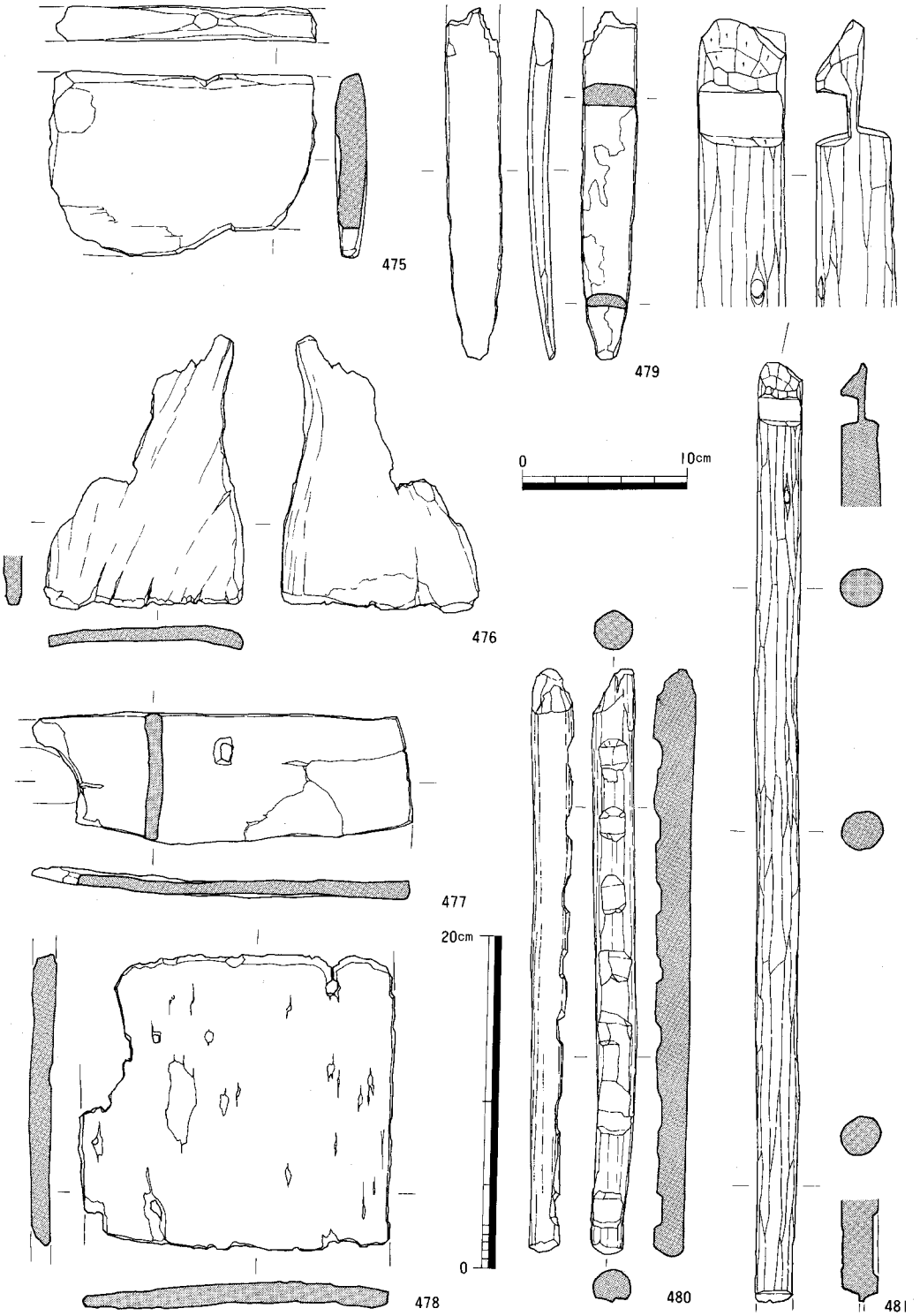


Fig.138　8層出土木器実測図　16（縮尺 1/4）

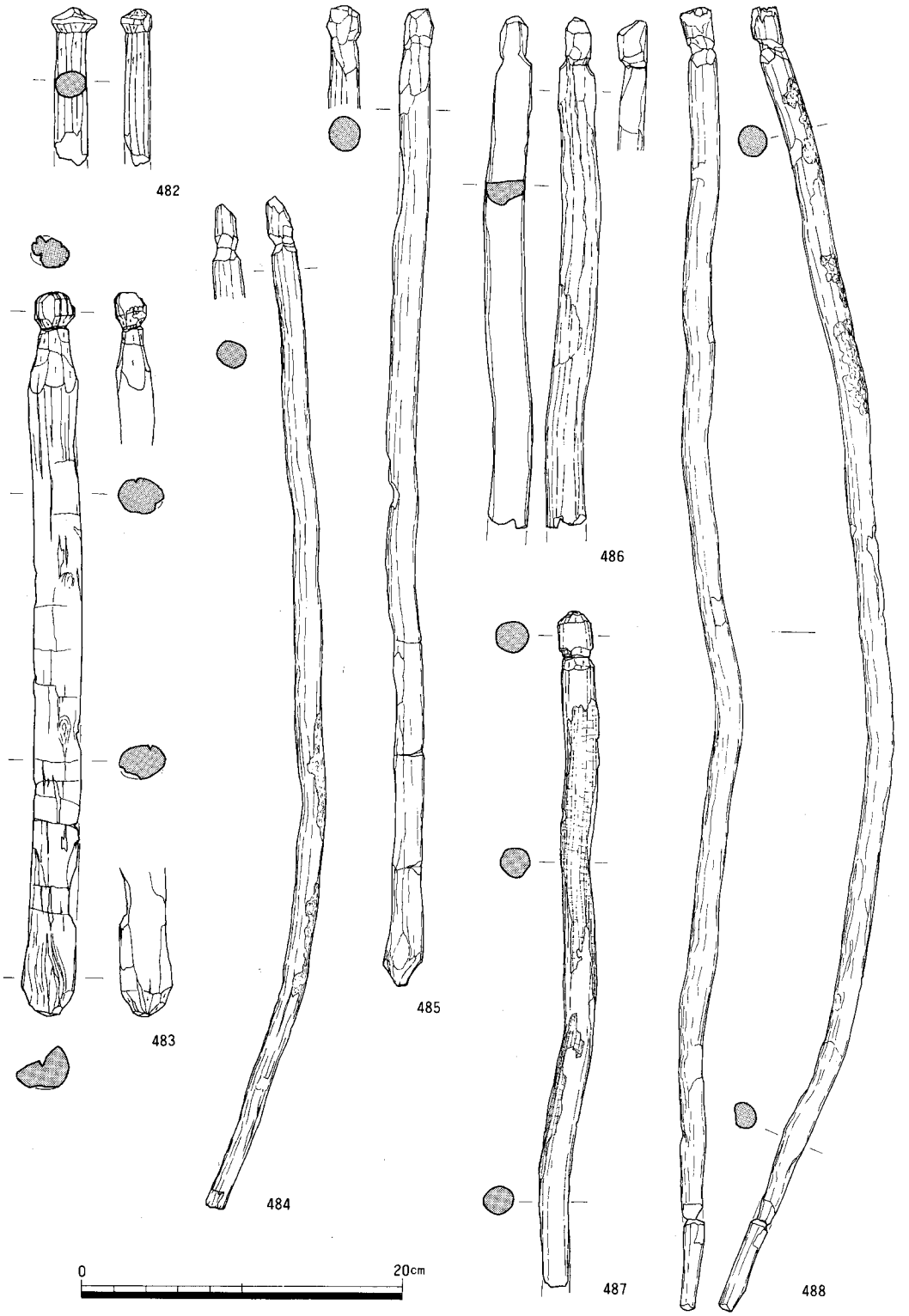


Fig.139　8層出土木器実測図　17（縮尺 1/4）

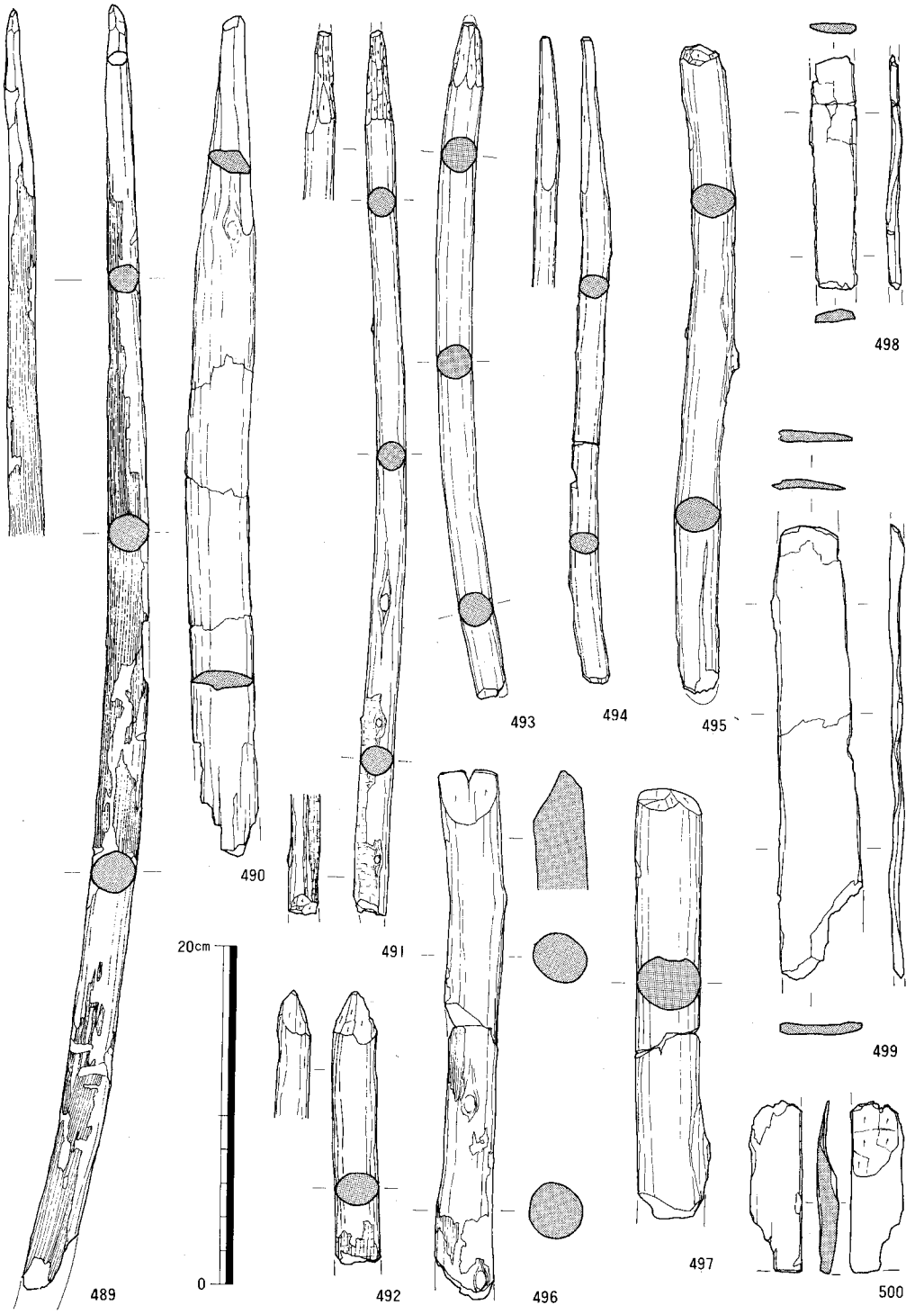


Fig.140　8層出土木器実測図　18（縮尺 1/4）

前後の小角礫を使用している。509～511などのように、剥片剥離の方法は石核の自然面および剥離面打面（無調整）から打面を頻繁に転移させながら剥離を行うもので、縄文時代晩期から弥生時代前期の西北九州の諸遺跡に特徴的なもので、「十郎川技法」と称される。剥片も90%以上が打面や背面に原礫の表皮を残し、5cmを越えるものはなく、背面に残された剥離面も90度や180度の交錯した方向からのものが複数存在しており、この剥離法を裏付けている。

打製石器に、石鏃（501・502）や両面加工品（507）、使用痕（505）や加工痕（504）のある剥片などがある。502は抉りの入ったような剥片を利用して石鏃に加工しようとしたものであろうか。剥片の打面（自然面）を残したままで先端は未加工のままである。504は縦長の剥片の両側辺に錯交状に連続する細かな剥離を施している。506は石刃状の剥離痕を背面にとどめており、旧石器時代の産物の可能性もある。503は扁平な板状礫の小口面を剥離したもので、剥離面が小さいことから、石核とは考えにくい。また、508も剥離痕が細かく、残核を掻器などに加工しようとした可能性もある。

このような小さな連続する剥離痕をもつ石核や剥片は数多く認められ、加工痕のある剥片や石器の加工途上品と区別がつかないものもある。剥片や石核の数に比べて石器の数が少なく、総数からみても石器や使用痕・加工痕ある剥片の黒曜石製品に占める割合はわずか11.9%と低い数値を示している。石器の少なさや、このような用途不明の所謂「不定形な石器」が多いのも当該期の石器群の特徴と言えるかも知れない。

磨製石器には、武器として石剣・石戈が、漁撈関連具として石錘・大型円盤状製品が、収穫具として石包丁・石鎌が、伐採・加工具として石斧・砥石・磨石・凹石・敲石・穿孔具・台石などがある。この他、紡錘車などがある。

石包丁も破片がほとんどで、形を知り得るものは512～514のような外彎刃半月形のものが多い。515は紫色の輝緑凝灰岩製の石鎌を転用している。石材は、砂質頁岩が多用されている。

石鎌は516以外は小片である。両面ともよく研磨されている。

石斧には太形蛤刃石斧（535）、柱状片刃石斧（抉入）（517・518・521）、扁平片刃石斧（519・

Tab.2 黒躍石製石器出土数一覧

出土地点	石　器	R・フレイク	U・フレイク	フレイク・チップ	石　核	原　石	合　計
包含層	4	31	33	431	52	12	563
その他	0	0	1	13	1	2	17
合　計	4 (0.7%)	31 (5.3%)	34 (5.9%)	444 (76.6%)	53 (9.1%)	14 (2.4%)	580 (100.0%)

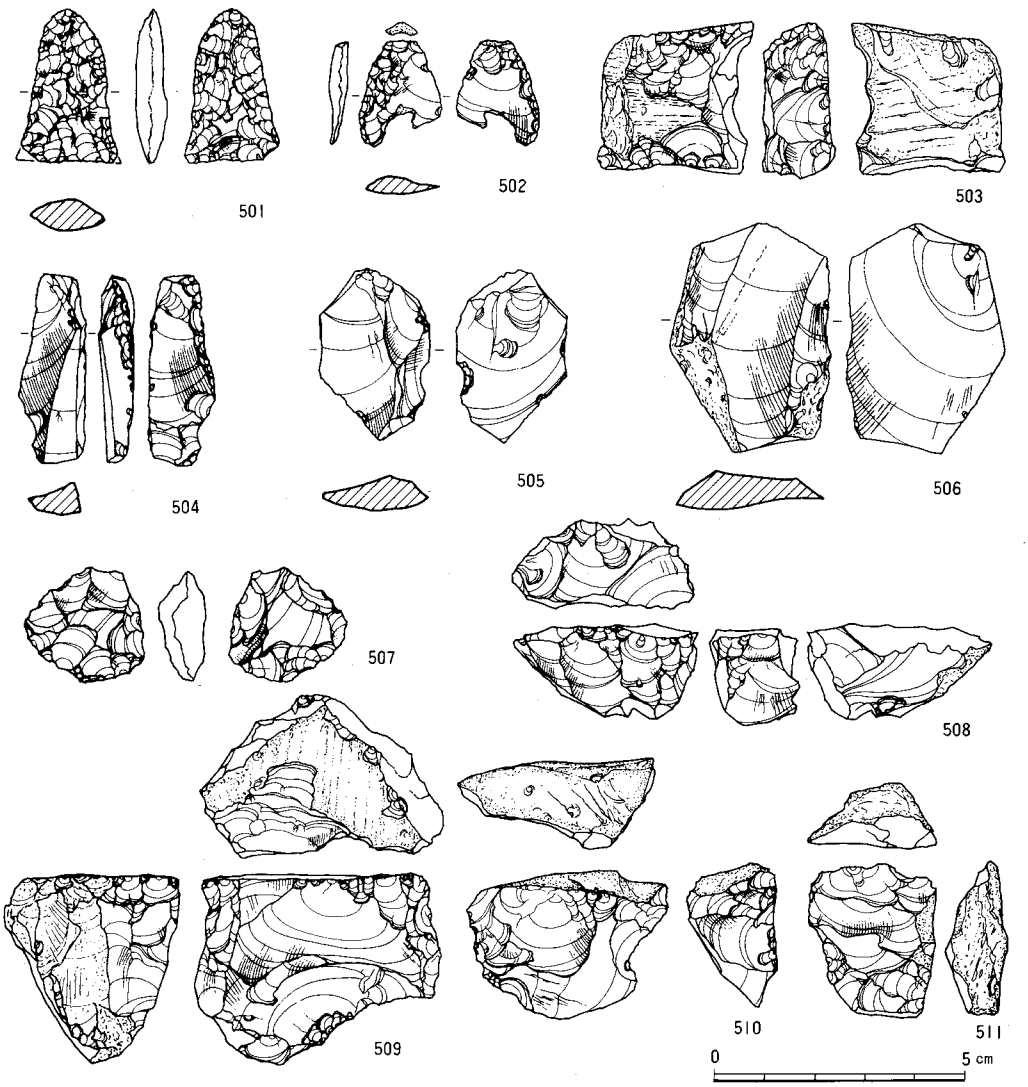


Fig.141　8層出土石器実測図　（縮尺 2/3）

520・522)、小型のノミ状の片刃石斧（523～525）などがある。蛤刃石斧が39点ともっとも多いが、ほとんどは欠損もしくは再加工の際の小片である。破損した石斧は536～538のように礫器や磨石として再利用されている。計数は行ってないが、39点の中には、こうしたものも含まれている。片刃石斧の517や519は欠損した刃先を再加工している痕跡が認められる。526と528は柱状片刃石斧と扁平片刃石斧の未製品で、素材の剥片を剥離成形した後、研磨を施している。527は母岩から手頃な素材剥片を取る際の剥片であろう。石材としては、蛤刃石斧が玄武岩（安山岩を含む）やシルト岩が、それ以外の片刃石斧類には主に頁岩が使用されている。

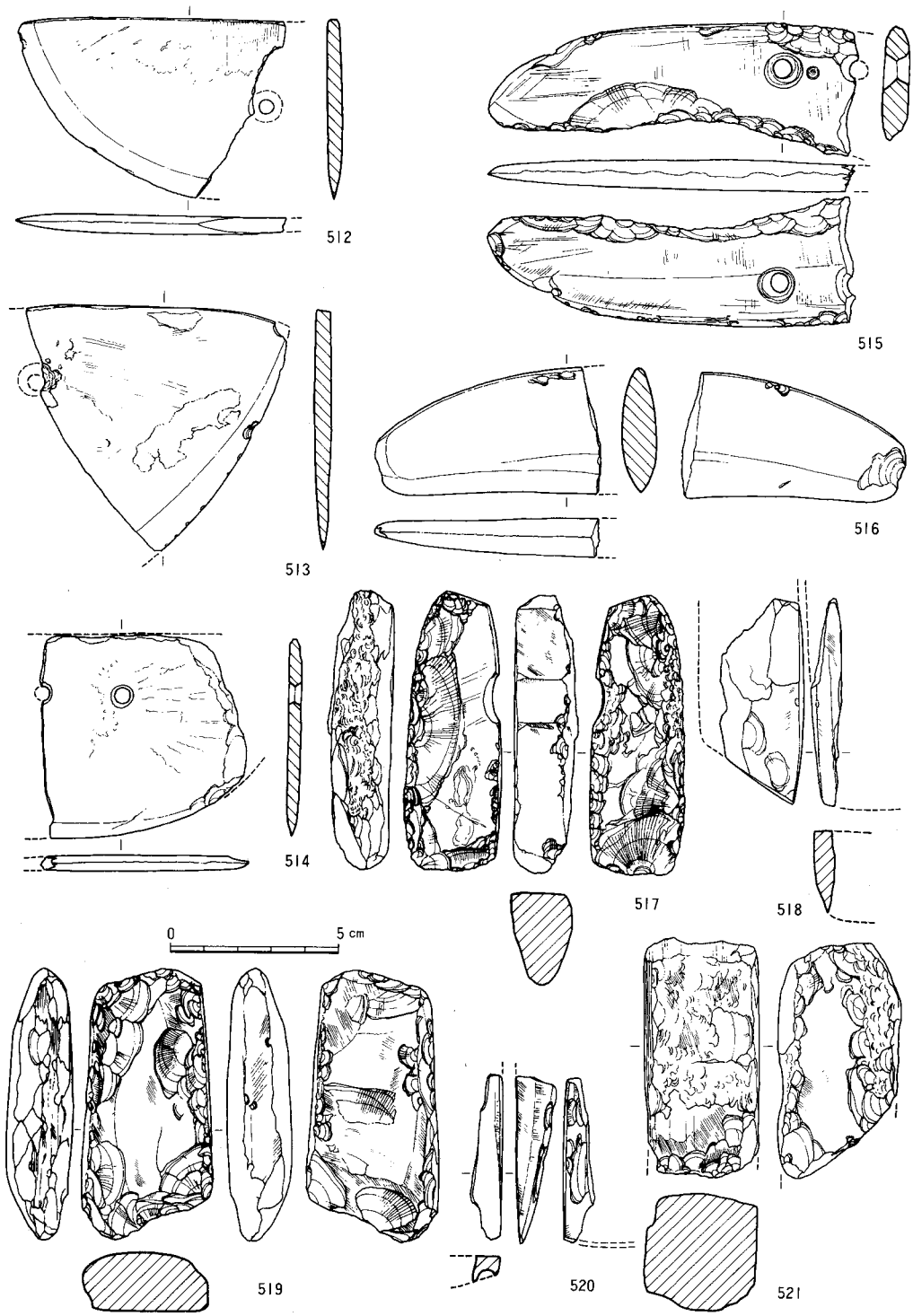


Fig.142　7・8層出土石器実測図　Ⅰ（縮尺 1/2）

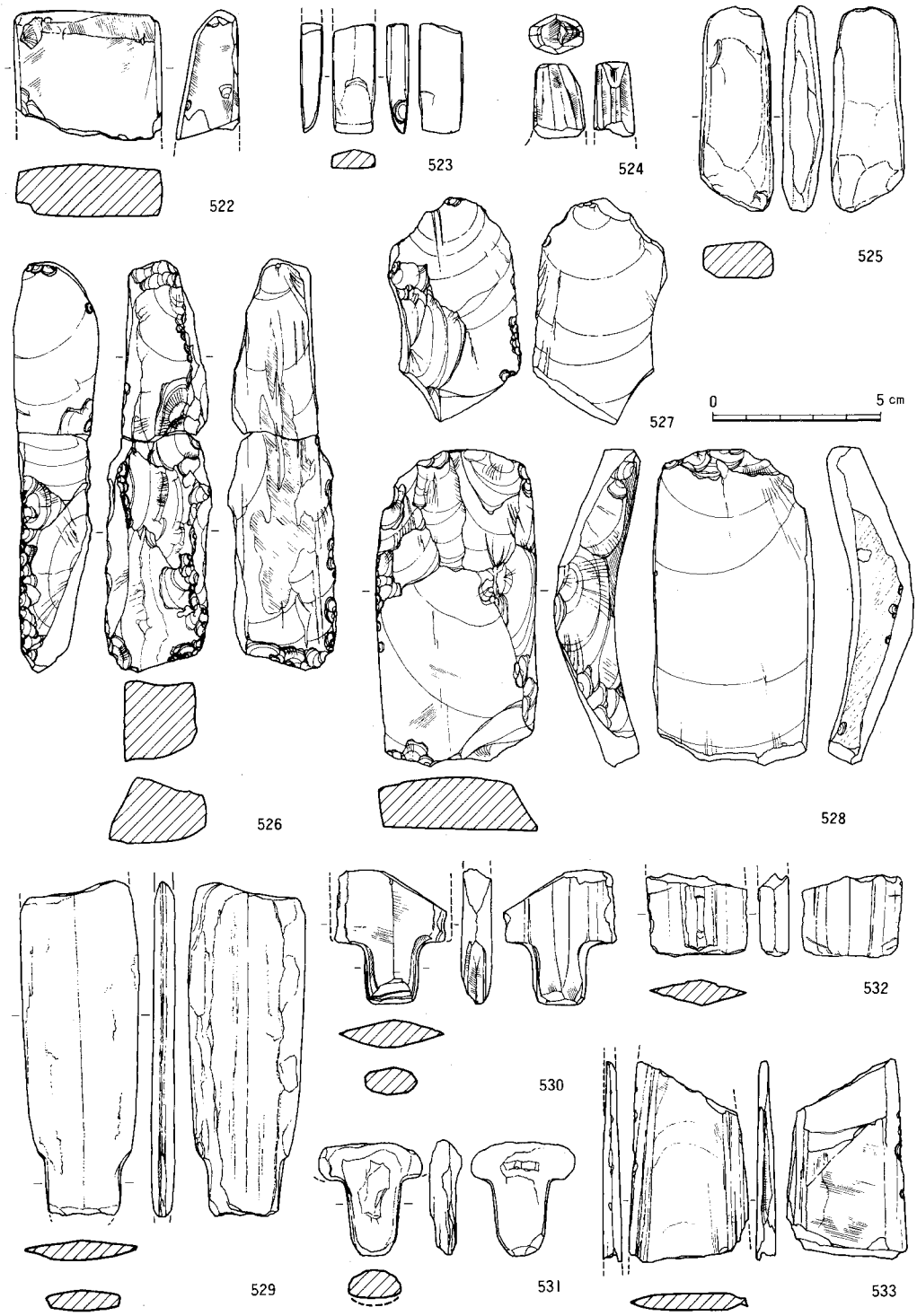


Fig.143　7・8層出土石器実測図　2　(縮尺 1/2)

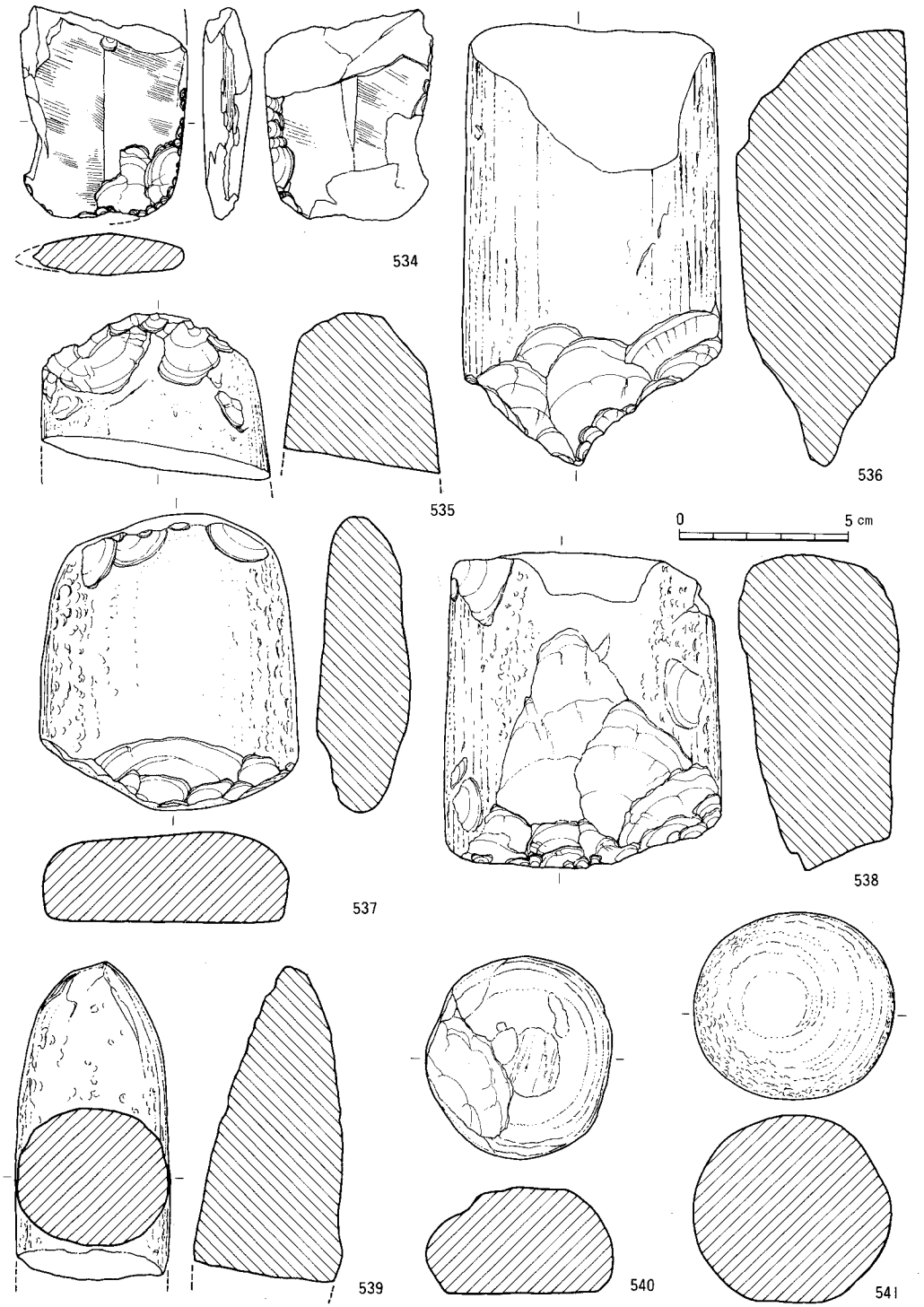


Fig.144　7・8層出土石器実測図　3　(縮尺 1/2)

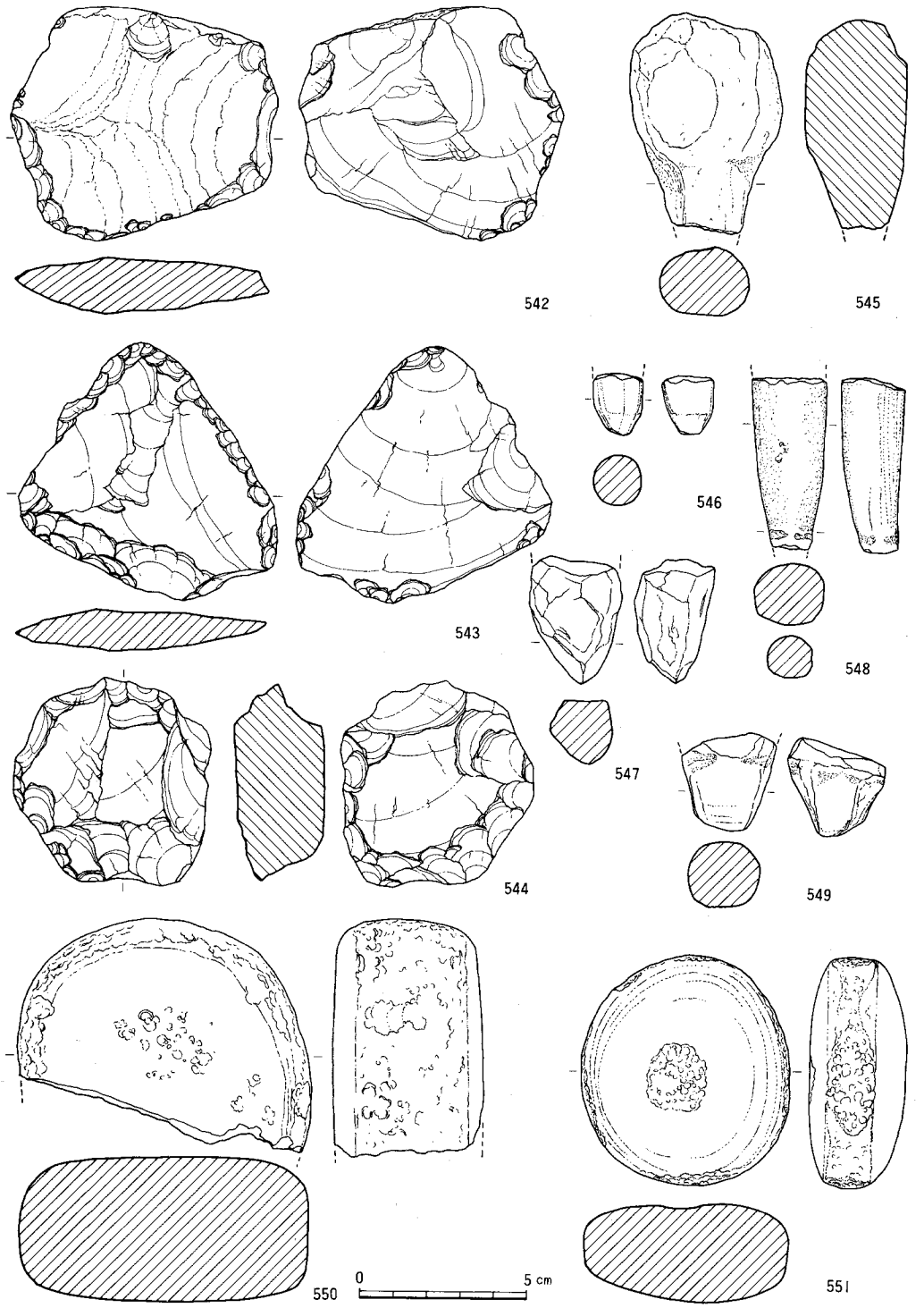


Fig.145　7・8層出土石器実測図　4　(縮尺 1/2)

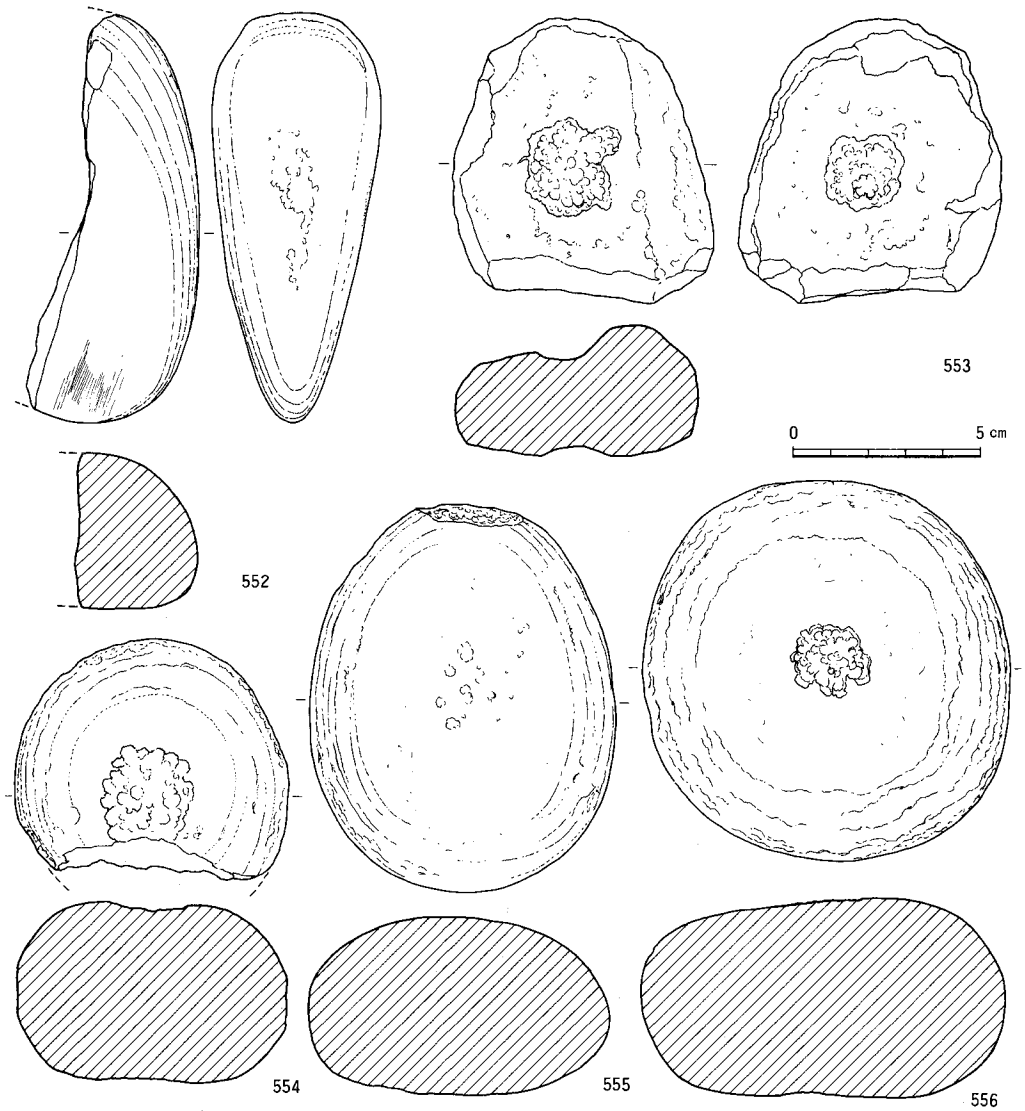


Fig.146　7・8層出土石器実測図　5（縮尺 1/2）

石剣は破片がほとんどで、有茎のもの（529・530・531）と無茎のもの（532）がある。539は両側辺に表裏からの擦り切りの痕をとどめており、加工途上に破損したものであろうか。石材としては、砂質頁岩や層灰岩が使用されている。

534は石戈の基部の破片と考えられる。両面に鎬をもつ。

539～541は敲石である。539は砂岩製の円錐形をしたもので、側面には敲打調整が認められる。磨製石器の敲打器として使用されたものであろう。

542～544は打製石器の部類に入るが、玄武岩（安山岩を含む）製の礫器や剥片石器である。

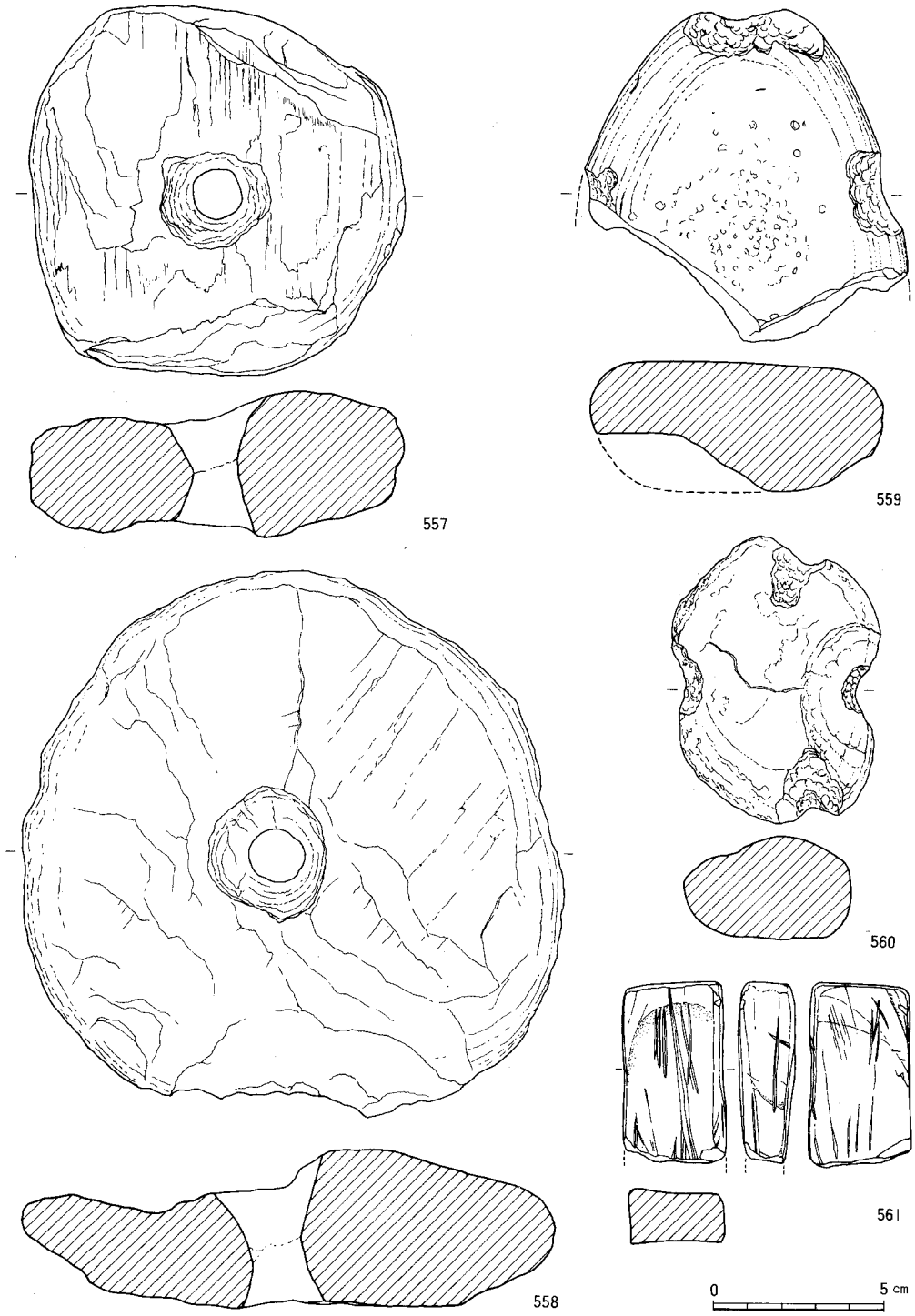


Fig.147　7・8層出土石器実測図　6（縮尺 1/2）

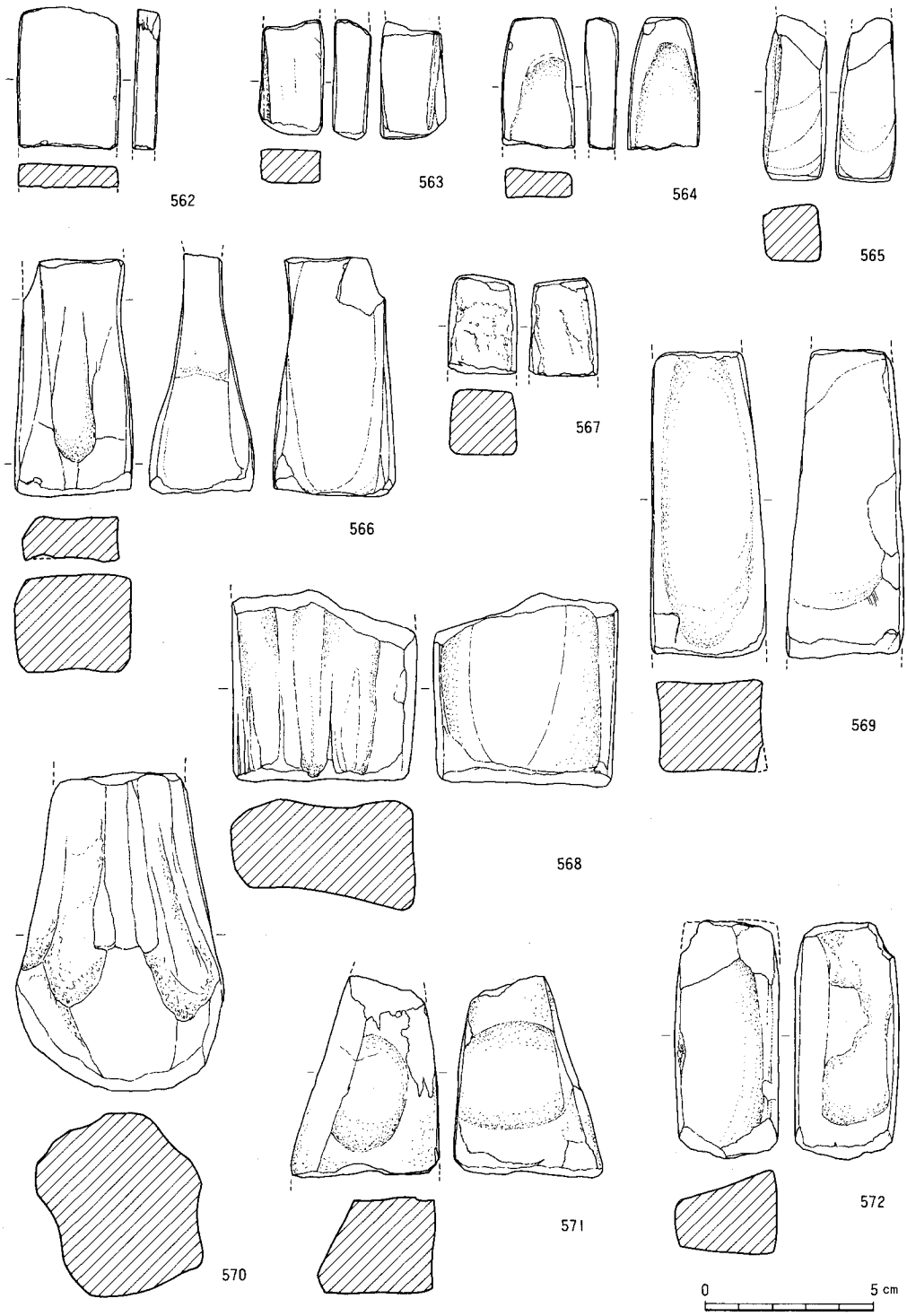


Fig.148　7・8層出土石器実測図　7　(縮尺 1/2)

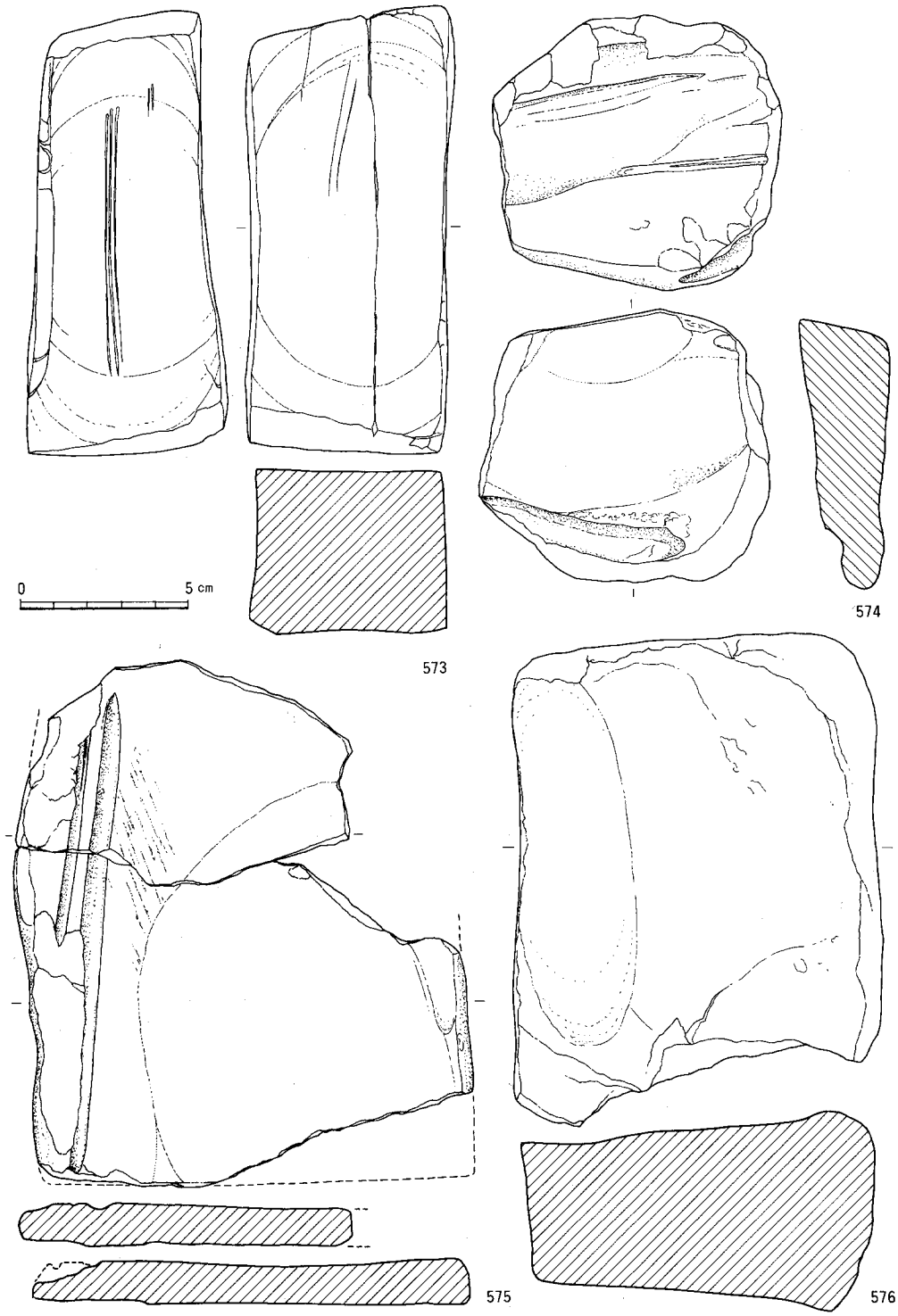
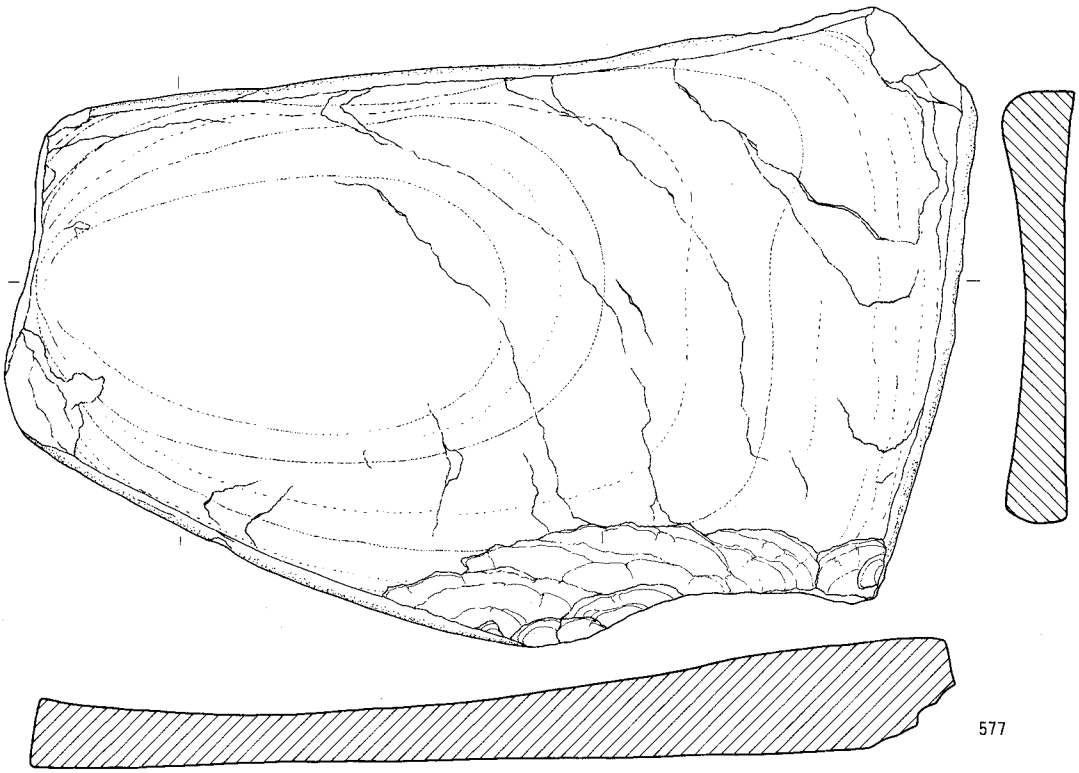


Fig.149　7・8層出土石器実測図　8　(縮尺 1/2)



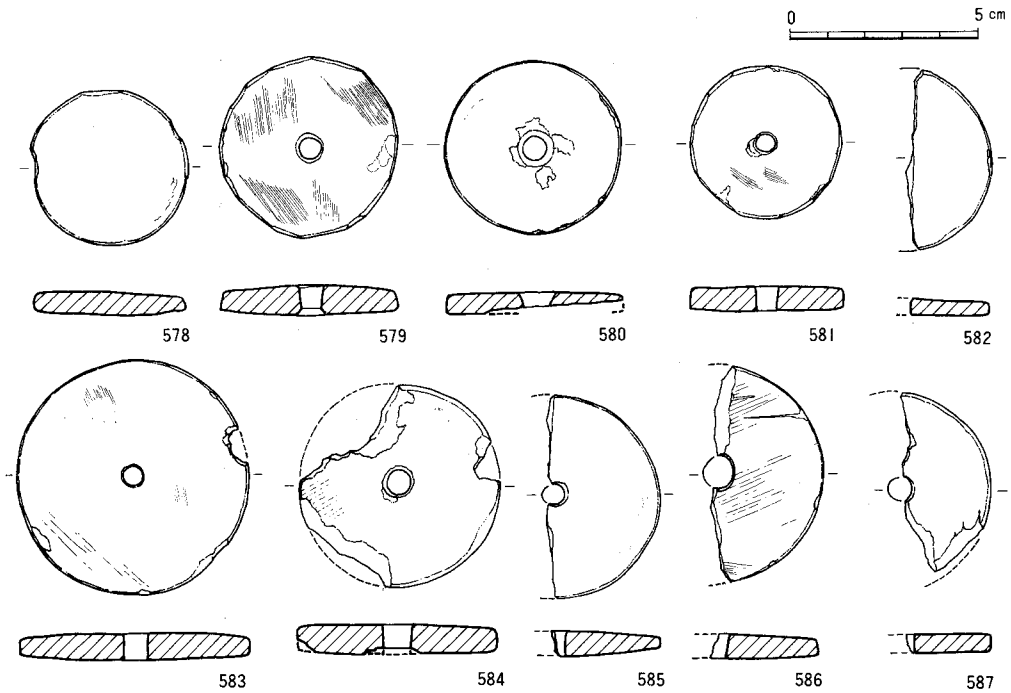


Fig.150　7・8層出土石器実測図　9（縮尺 1/2）

Tab.3 磨製石器出土数一覧

種類 / 地点	製品・欠損品・転用品・未製品																				原材・素材・石片							その他	
	石戈	石剣	石錘	石庖丁	石鎌	石斧 蛤刃	石斧 両刃	石斧 扁平片刃	石斧 柱状片刃	石斧 小ノミ形	砥石	磨・凹石	石皿	敲石	台石	穿孔具	大形円盤器	玄武礫器	玄武剥片石器	紡錘車	不明磨石器	玄武岩 原石	玄武岩 石核	玄武岩 剥片	剥片 頁岩	剥片 シルト岩	剥片 砂岩	剥片 その他	軽石	焼石
包含層	1	7	2	29	3	39	6	17	5	2	62	7	1	66	6	6	2	19	29	10	9	4	191	67	16	11	21	43	3	13
その他	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	2	0	7	0	0	0	2	1	0	0	0	0	6	0	0	2	1	0	0
合計	1	7	2	30	3	39	7	18	5	2	62	9	1	73	6	6	2	21	30	10	9	4	191	73	16	11	23	44	3	13
	343																					290								
	633																												16	

これは石斧の未製品と異なり、大きさも10cm以下のものがほとんどで、周辺を加工して刃部を作り出しているが、刃部が磨耗しているものが多い。これを含め、玄武岩（安山岩）の原材料や剥片は出土総数の4割にも達している。剥片の中には蛤刃石斧の粗割り段階のものも含まれていると考えられ、石斧の製作が消費地である集落遺跡で、どの段階から実施されたのかを明確にするためにも今後はこの種の石器に注目していく必要がある。

545～549は砂岩製の穿孔具である。いずれも大形品で、大型円盤状製品などの穿孔に使用されたと考えられる。

550～556は磨石・凹石の類である。石材は砂岩、花崗岩、角閃石、安山岩など多種におよぶ。

557・558は大型の円盤状製品で、いずれも結晶片岩を使用している。漁網などの沈子として使用されたのであろう。559・560は扁平な円礫の四方を打ち欠いた石錘である。559は表面が滑らかで磨石を転用した可能性がある。

561～576は砥石である。敲石に次いで62点と出土量が多い。砂岩を主に用い、粗砥、中砥、細砥などがある。大形品（566・568～576）は置砥、小形品（561～565・567）は手持砥であろう。かなり使用されて中央部が細くなり、撥形を呈するもの（566・570）もある。また、玉砥石として使用されたのであろうか、浅い断面U字形の溝を有するもの（574・575）がある。

577は大形品で中央部が浅く擂鉢状に凹み、石皿と考えられる。

578～587は紡錘車である。578以外は製品である。石材は結晶片岩が多用されている。

このほか、図示していないが、ベンガラが付着した粘板岩の石片がある。破面にもベンガラが付着しており、用途は不明。

ⅳ）土製品 (Fig.151～153)

558～599は紡錘車である。600・601は土器片の周囲を打ち欠いて擦り、円盤状に整形して穿孔を施して紡錘車としたもので、601は穿孔途中のものである。602～621は土器片利用の円盤である。直径4cm以下の小形品と、4～7cmの大形品がある。後者は600・601と同じく紡錘車に加工途中のものと考えられる。前者の小形品の用途は不明。622～630は投弾、631は土錘である。

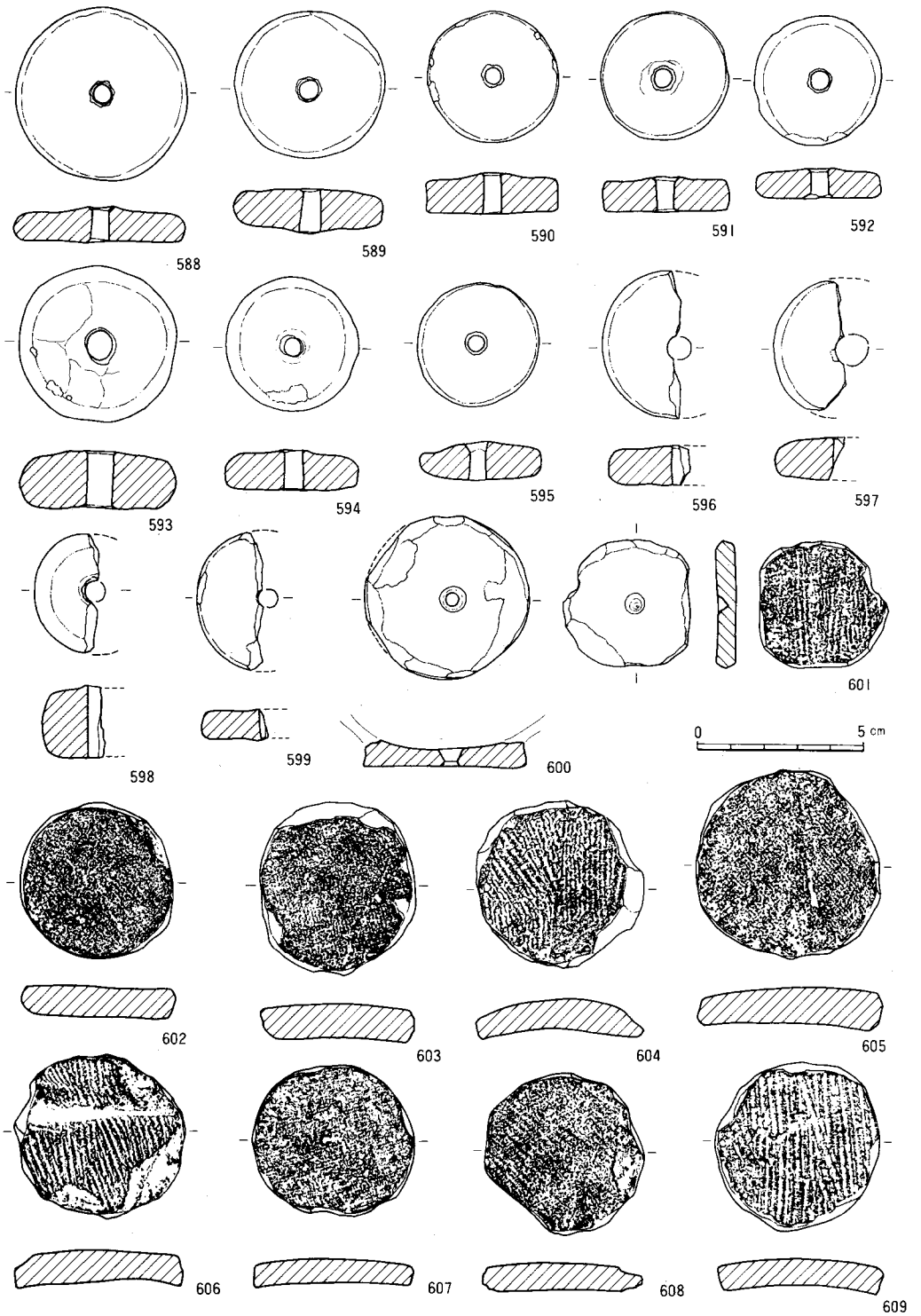


Fig.151　7・8層出土製品実測図　（縮尺 1/2）

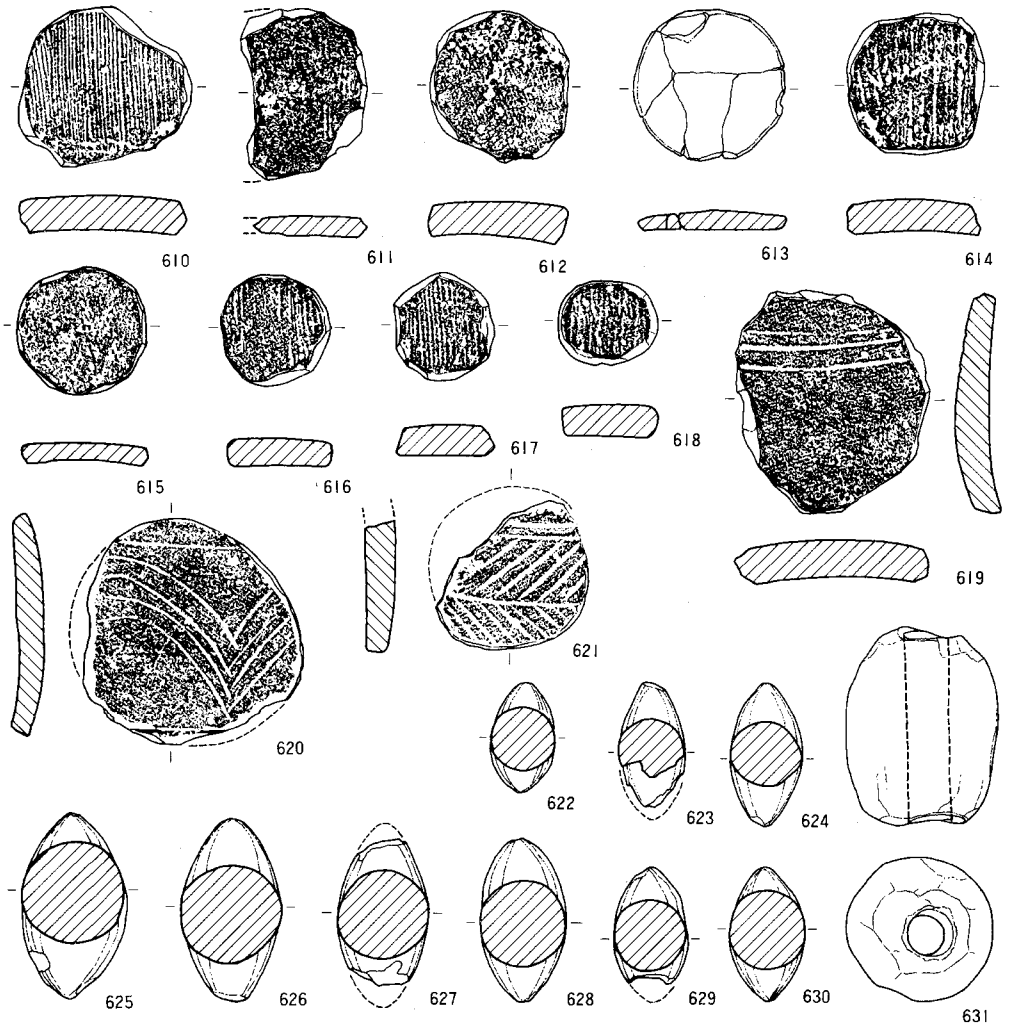


Fig.152　6～8層出土土製品実測図　1（縮尺 1/2）

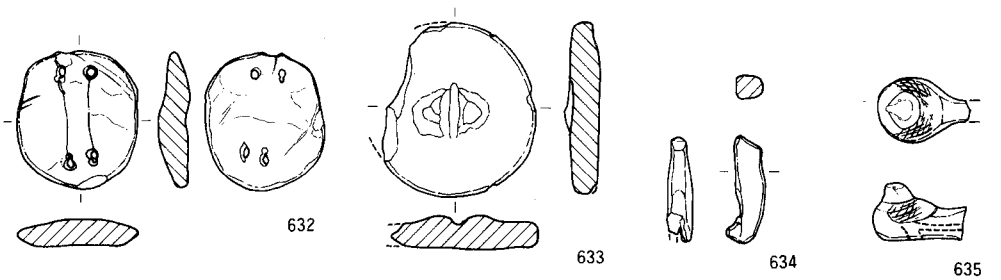


Fig.153　6～8層出土土製品実測図　2（縮尺 1/2）

632～634は用途不明の土製品である。632は扁平な円盤で、焼成前に上下端に櫛状の工具で刺突して2孔1組の小穴が穿孔されている。片側の面には、小穴間に細く浅い条線が残る。類例が山口県下関市綾羅木郷遺跡で知られている。633はほぼ正円の円盤である。表面は周縁がわずかに凹み、中央がふくらむ。裏面中央には小さなつまみ状の突起部がある。突起部の上端は崩れているが、紐穴状の細長い凹みが残る。古墳時代後期の土製模造鏡に類似する。

V）その他の遺物

イノシシの歯冠が3点出土した。大分市歴史資料館館長の木村幾多郎氏に、鑑定をいただいた。

①B－3－17区　8－5層　イノシシ　下顎左M_3歯冠　咬耗が著しい

②D－4区　8－4層　イノシシ　上顎右M_3歯冠　咬耗していない

③SK－15　下層　イノシシ　上顎左M_2歯冠　咬耗あり

いずれも成獣の歯冠である。③については、SK－15に本来ともなうものではなく、周囲から流れ込んだ混入物と考えられる。

このほか、火熱を受け固まった粘土塊が、SK－15の埋土中と、C－4－10区8－5層から2点出土している。

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.71-1	壺or甕	D－1		SC－08	内外面ともに荒れが著しい、壺にしては口径が大きい	20588
2	甕？	D－1		SC－08	小片で、内外面の荒れが著しく、調整の子細不明	20589
3	甕	D－1		SC－08	中形の凸帯を口縁に貼付、内外面ともに荒れが進む	20590
Fig.74-4	平鍬			SK－10	柾目材を素材とする未成品、削り痕が明瞭に残る	20266
Fig.75-5	鋤	A－3	30・29	SK－10	一本造り、未成品、柄部は欠損、土圧変形、柾目材	18099
6	槌	A－3	36	SK－10	芯持ち材を斜めに割り、面を作り、握り部分を削る	19216
7	脚付き容器	A－3	30	SK－10	八脚をもつ容器の半分の破片、器面は丁寧に研磨	18112
8	クサビ？	A－3	36	SK－10	一端を片側から削りクサビ状とする、板目に近い斜め木取り	19217
Fig.76-9	楕円形容器	A－3	36	SK－10	未成品柾目材.一方の側面には樹皮が残る	19215
Fig.77-10	壺			SK－10	外面はハケメの後に横ナデ仕上げ.外面は黒塗り	20641
11	壺or鉢	A－3	36	SK－10壙底付近	外面はナデ、内面は荒れが進む	20654
12	壺			SK－10	外面はヘラによる丁寧なナデ	20640
13	壺	A－3	30	SK－10壙底付近	ハケメの後に外面は研磨、内面はナデ仕上げ.外面は黒塗り	20593
14	壺	A－3	30	SK－10壙底付近	肩の2条のヘラ描き沈線の下に、重弧文を貝殻施文	20587
15	甕	A－3	30	SK－10壙底付近	外面はハケメの後に軽くナデ、内面には炭化物が付着	20592
16	甕	A－3	30	SK－10壙底付近	外面はハケメの後にナデ、内面には炭化物が付着	20591
Fig.80-17	鋤	B－3	19	SK－11	組合せ式柾目材を素材とした未成品.遺存状態良好	20018
18	泥よけ	A－3	30	SK－11	取り上げに失敗し一部を欠く.板目材、非常に薄い	20060
Fig.82-19	諸手鍬	A－3	18	SK－11	破損品、柾目材を使用	19094
20	諸手鍬	A－3	24	SK－11	柄壺付近の鍬身部分の破片、柾目材を使用	20008
21	鍬鋤の柄	合$\frac{-3}{-3}$	$\frac{24}{19}$	SK－11	芯持ち材、直線的に加工され、鍬または鋤の柄と考えた	20003
22	竪杵	A－3	18	SK－11	搗部の破損品、柾目材を素材とする	19092
23	柱状片刃石斧柄	B－3	19	SK－11	未成品、台部の両端、上面は切断され荒割りのまま	20078
24	太型蛤刃石斧柄	合$\frac{-3}{-3}$	$\frac{24}{9}$	SK－11	芯近くのミカン割り材が素材.部分的に削り痕が残る	20047
Fig.82-25	楕円形容器	A－3	30	SK－11	割材をくり抜き、かなり薄く削りあげられる	20007
26	長方形容器	B－3	19	SK－11	大形品、柾目材をくり抜く	20034
27	脚台付容器	A－3	24	SK－11	小破片、柾目材をくり抜く	18103

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録 番号
Fig.82-28	剣			SK－11	剣柄部分の破片、柾目材.削り痕が残る	20261
29	剣	A－3	30	SK－11	板目材.土圧変形が著しい.	20023
30	板材	A－3	30	SK－11	柾目材の板材で、両端が緩やかに彎曲する	19242
Fig.83-31		A－3	36	SK－11	板目材を素材.柄の付け根部分に緊縛痕が残る	19213
32	部材	A－3	24	SK－11	板目材、上下辺に切り込みを入れた部分あり	18100
33	割り屑	A－3	24	SK－11	木器の製作途中ではつられた割り屑	19227
34	切断痕をもつ樹枝	A－3	30	SK－11	芯持ちの樹枝の一端を片側のみから削る	20220
35		B－3	南半部	SK－11	柾目材、多くの削り痕が観察される	20002
36		B－3		SK－11	芯持ち材、一端を削り尖らせている	20276
Fig.84-37	壺			SK－11北側	ハケメの後にナデ仕上げ、内外面ともに黒塗り	20642
38	壺			SK－11北側	内外面ともに横方向の研磨、黒塗り	20634
39	壺	A－3	30	SK－11	頸外面はハケメ後ナデ、他は横方向の研磨、内外とも黒塗り	20633
40	壺	A－3	30・36	SK－11	内外面ともに丁寧な黒塗り磨研	20637
41	壺			SK－11	肩部にかなり乱雑に羽状文をヘラで施文、黒塗り磨研	20629
42	壺			SK－11上層	外面はハケメの後にナデ、口縁～内面はナデ	20594
43	甕	A－3	24	SK－11壙底	外面はハケメの後ナデ、口縁～内面はナデ、外面に煤が付着	20598
44	甕	A－3	36	SK－11	外面は黒塗り磨研、内面は丁寧なナデ仕上げ	20639
45	鉢	B－3	25	SK－11	内外面ともにナデ、とくに内面は非常に丁寧に仕上げ	20635
46	鉢	A－3	24	SK－11	内外面ともにナデ仕上げ	20597
47	壺			SK－11上層	内外面ともにナデ仕上げ、黒塗り	20595
48	壺			SK－11北側	外面は黒塗り磨研、内面はナデ	20632
49	甕			SK－11上層	外面はハケメの後に軽くナデ仕上げ、内面は指頭によるナデ	20596
50	甕			SK－11凹部	外面の器面の剥離が著しい、ハケメが部分的に残る	20631
51	甕			SK－11	外面はハケメ、内面は指頭によるナデ、炭化物が厚く付着	20638
52	脚台付鉢			SK－11北側	外面はハケメ後に研磨、内面はヘラナデ、帯状に炭化物が付着	20624
53	壺	B－3	25	SK－11・12	口縁～外面は横ナデの後に研磨、黒塗り、内面はナデ	20599
54	鉢	B－3	25	SK－11・12下半部	ミニチュアの鉢で、内外面ともに丁寧なナデ仕上げ	20620
55	甕			SK－12	外面はハケメ、内面はナデ、炭化物が付着	20627
56	甕			SK－12	外面はハケメ、内面はナデ	20636
57	甕			SK－12	外面はハケメ、内面は指頭によるナデ	20625
58	鉢			SK－12	外面は荒れ、一部にハケメが残る.内面は乱雑な研磨	20626
Fig.85-59	太形蛤刃石斧			SK－10～13	安山岩製	30043
60	土器片利用円盤	A－3	30	SK－10・11	鉢の胴片を利用.周縁を打ち欠いて擦る.重量20.75 g	30002
61	土器片利用円盤	B－3	30	SK－10・11	鉢の胴片を利用.周縁は打ち欠くのみ.重量10.7 g	30031
62	土器片利用円盤	B－3	13	SK－10・11	甕の胴片を利用.周縁は打ち欠き後に擦る.重量6.45 g	30003
Fig.86-63	壺	B－2	1	7－2～8－1層	口頸部はハケメ後に、外面のみに横ナデ、付け根には指頭痕	1842
64	壺	B－2	1	7－2～8－1層	外面は丁寧なナデ、内面はハケメの後にナデ仕上げ	1794
65	壺	B－2	1	7－2～8－1層	外面は横方向の研磨、内面はナデ	1877
66	壺	B－2	1	7－2～8－1層	外面は横方向の研磨、内面はナデ	1948
67	壺	A－2	6	7－2～8－1層	外面は研磨、肩部に棒状工具による3条の平行沈線文	2231
68	鉢	B－3	31	7－2～8－1層	口唇は横ナデ、下端ヘラキザミ、胴外面はハケメ後にナデ	2037
69	甕	B－2	1	7－2～8－1層	外面は細かい細密条線に近いハケメ、口縁内面にもハケメ	1914
70	甕	B－2	1	7－2～8－1層	外面はハケメ後にナデ、口縁～内面はナデ	1802
71	甕	B－2	1	7－2～8－1層	外面はハケメ後にナデ、煤が付着、口縁～内面はナデ	1881
72	鉢	B－2	1	7－2～8－1層	内外面ともに横方向の研磨	1795
73	壺	B－2	1	8－2層	外面は横方向の研磨、内面はナデ	1885
74	壺	B－2	1	8－2層	凸帯付近と内面は横ナデ、他は研磨	1760
75	欠　番					
76	鉢	B－3	31	8－2層	口縁～胴外面は横ナデ、内面はナデ	2062
77	鉢	B－3	31	8－2層	外面は荒れが著しい、内面はヘラによるナデ	2042
78	甕	B－3	31	8－2層	口縁内外ともに横ナデ、口唇にヘラによるキザミ	2046
79	甕	B－2	1	8－2層	外面はハケメ後にナデ、口縁は横ナデ、内面はナデ	1714
80	甕	A－2	6	8－2層	外面はハケメ、煤が付着、口縁は横ナデ、内面はナデ	2308
81	甕	B－3	31	8－2層	外面はハケメの後ナデ、内面に指頭痕、口縁端に棒キザミ	2070
82	甕	B－2	1	8－2層	内から巻くように口縁を接合、外面はハケメ後にナデ	1765
83	甕	B－2	1	8－2層	外面はハケメ後にナデ、口縁～内面はナデ	1729
84	壺	A－2	6	8－2層	外面は研磨、焼成後に丹塗り	2314
85	壺	A－2	6	8－2層	器面は荒れ、調整の子細不明	2362
86	甕	B－2	1	8－2層	外面はハケメの後ナデ、底部側面には指頭痕	1915
Fig.87-87	甕	B－3	13	8－2～8－3層	側からは粘土を内から巻くように口縁成形、外面はハケメ後ナデ	1622
88	壺	A－3	36	8－3層	口縁内外ともに横ナデ	2379

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	地区 小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.87-89	壺	A－3	36	8－3層	肩部にヘラによる沈線と、下方に羽状文を施文	20700
90	甕	A－3	30	8－3層	ハケメの後にナデ、口唇下端にヘラによるキザミ、外面に煤付着	1695
91	甕	B－3	13	8－3層	口縁周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、内面はナデ	12044
92	甕	B－3	19	8－3層	胴外面はハケメの後ナデ、口縁内面には指頭痕	1640
93	甕	B－3	25	8－3層	外面はハケメの後ナデ、口縁内面には指頭痕	2081
94	甕	B－3	19・20	8－3層	内外面ともナデ仕上げ、外面には煤が付着	1505
95	甕	A－3	36	8－3層	口縁～外面はハケメ、内面は指頭ナデ、外面に煤付着	2387
96	甕	B－3	31	8－3層	外面はヘラによるナデ上げ、ナデは指頭によるナデ	2064
97	甕	B－3	31	8－3層	外面は器面の荒れが著しい、内面はナデ仕上げ	2022
98	甕	B－3	31	8－3層	外面はハケメ、内面はナデ、接合面で割れている	2027
99	甕	A－3	36	8－3層	外面はハケメ、内面はナデ	2384
100	壺	B－3	19	8－3～8－4層	内外面とも、黒塗り磨研、頸部付け根に細い沈線1条	12161
101	壺	A－3	18・24	8－4層	内外面ともに横方向の研磨、外面～頸内部は黒塗り	12279
102	甕	B－3	19	8－4層	胴外面はハケメ、煤が付着、内面にはヘラ痕、指頭痕が残る	12031
103	壺	B－3	2・19・20	8－4層	外面は斜方向の黒塗り磨研、内面はナデ仕上げ	12015
104	壺	A－3	30	8層	内外面ともに横方向の研磨、黒塗り	20701
105	ミニチュア	A－3	36	8－5層	甕形(？)、外面には指頭痕が多く、精選粘土を用いる	20618
Fig.89-106	蓋	B－3	25	SK－12	ミカン割材をくり抜く.遺存状態はかなり悪い	20057
Fig.91-107	鉢			SK－13	内外面ともに横ナデ、黒塗り	20600
108	壺			SK－13	内外面ともに黒塗り磨研	20602
109	甑			SK－13	甕の底部に焼成後に穿孔を施す.内面には炭化物が付着	20601
110	甕			SK－13	外面はハケメ、内面はナデ、炭化物が厚く付着	20628
Fig.95-111	エブリ	D－3	6	SK－15	みかん割りの板目材を素材とした未成品、削り痕多し	20044
112	鋤柄	E－4	30 25	SK－15	柾目に近い斜め材を用いる	20013
113	容器	E－4	25	SK－15	芯持ち材、容器の大体の形を整えた段階の未成品	20043
Fig.96-114	太型蛤刃石斧柄	E－4	31	SK－15	芯近くの柾目の割材を素材とする	20052
115	太型蛤刃石斧柄	E－4	30・36 31	SK－15	芯近くの柾目の割材を素材とする	20048
Fig.97-116	部材	D－4	36	SK－15	芯持ち材、一端を削り込み頭部を作る.他端には切断痕	20245
117	切断痕をもつ樹枝	D－3	6	SK－15	芯持ち材、周りから削り込みを入れて折る	20040
118	切断痕をもつ割材	D－4	30	SK－15	芯持ち材を半截している、一端に削り痕を残す	20035
Fig.98-119		E－4	31	SK－15	柾目材を素材とする、一端を欠損	20228
120	切断痕をもつ割材	D－4	30	SK－15	芯持ち材を1／4に分割.一端を削り、他端は焼け焦げ	20246
121	農具柄	D－3	6	SK－15	芯持ち材、両端を欠損する	20237
122	割材	D－3 D－4 E－4	6 36 31	SK－15	ミカン割材、両端には切断の痕跡が残る.全長約110cm	20012
Fig.99-123	壺			SK－15	内外ともに横ナデ、外面黒塗り	20702
124	壺			SK－15	内外面ともに横方向の研磨、外面は黒塗り	20605
125	壺	E－4	31	SK－15	肩に沈線を巡らし、複線の折帯風の文様をヘラで施文	20703
126	壺			SK－15	肩に4条の沈線を巡らし、短斜線をヘラで施文、羽状文か？	20704
127	甕			SK－15	外面はハケメ、煤が付着.口唇を切るようにキザミ	20606
128	甕			SK－15	胴外面には横方向のハケメ、煤が付着.口唇下端にキザミ	20608
129	甕			SK－15	外面はハケメ、煤が付着.口縁端と凸帯にヘラによるキザミ	20607
130	甕	D－4	30	SK－15上層	口縁付近に横ナデ.胴外面にはハケメ、煤が薄く付着	20603
131	鉢			SK－15	内外ともにナデ、内面には指頭痕.外面には煤が付着	20604
132	甕	D－4	30	SK－15	外面はハケメ、裾には指頭痕が残る.内面に炭化物が付着	20705
133	甕			SK－15	外面はハケメの後にナデ、内面はナデ、炭化物が付着	20706
Fig.100-134	扁平片刃石斧	E－4	31	SK－15	頁岩製、再加工品	30054
Fig.102-135	壺			SK－16・1層	内外面ともに黒塗り、横方向の研磨	20609
136	甕			SK－16上層	内外面ともに横ナデ、口唇下端と凸帯にヘラによるキザミ	20611
137	甕			SK－16上層	内外面ともに横ナデ、口唇下端にヘラによるキザミ	20613
138	甕			SK－16・1層	ハケメの後に横ナデ、口唇下端にヘラによるキザミ	20707
139	甕			SK－16上層	口縁下の2条のヘラ描き沈線間に竹管文を押捺.外面に煤	20708
140	甕			SK－16上層	外面はハケメ、煤が薄く付着.内面はナデ	20612
141	甕			SK－16・1層	外面はハケメの後にナデ、内面はナデ	20610
142	甕			SK－16上層	口縁周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、内面はナデ	20614
143	甕			SK－16・1層	外面はナデ、外底面にはケズリを施す	20709
144	甕			SK－16・1層	外面はハケメ、内面はナデ	20710
145	甕			SK－16・1層	外面はハケメの後にナデ、内面は接合面で剥離している	20711
Fig.103-146	太型蛤刃石斧			SK－16	安山岩製.破損品	30053
147	投弾	A－2	6	SK－16上層	土製品.表面は丁寧にナデ仕上げされる.重量22.1g	30001
Fig.105-148	甕	B.C－2・3		6層	跳ね上げ口縁.内外面ともに荒れ、調整の子細は不明	20712
149	高台付坏	C－4	36	6層	須恵器.外底面は回転ヘラ切り、内面はナデ	20713

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	地区 小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.105-150	壺	D－3	2	7－1層	竹管や貝殻で羽状文、重弧文、斜短線文などを施文	5980
151	壺	E－3	13	7－1層	口縁の周辺は横ナデ、他はナデ仕上げ	20714
152	壺	D－3	12	7－1層	外面は丹塗り磨研、内面はナデ	20715
153	甕棺	E－4	34・36	7－1層	内外面ともに荒れ、調整の子細は不明、接合面で割れ	20716
154	蓋	E－3	7	7－1層	外面はハケメ、内面は指ナデの後にハケメ、さらにナデ仕上げ	20717
155	脚付鉢？	D－3	2	7－1層	外面はナデ仕上げ、脚内面には指頭痕が多く残る	20718
156	甕	E－3	13	7－1層	口縁の周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、内面はナデ	20719
157	甕	D－4	33	7－1層	器面の荒れが進み、調整の子細は不明	20720
158	鉢	E－3	13	7－1層	口縁の周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、内面はナデ	20721
159	甕	D－3	2	7－1層	口縁の周辺は横ナデ、胴外面はハケメの後にナデ、内面はナデ	20722
160	甕	E－3	8	7－1層	口縁の周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、内面はナデ	20723
161	甕	E－3	13	7－1層	器面の荒れが進み、調整の子細は不明	20724
162	甕	E－3	8	7－1層	器面は荒れ、一部ハケメが残る.口縁にハケメ押捺のキザミ	20725
163	甕	E－3	8	7－1層	器面の荒れが進み、調整の子細は不明	20726
164	壺	E－3	13	7－1層	ミニチュア、外面はハケメの後に研磨、内面はナデ	20619
165	蓋	D－3	11	7－1層	ミニチュア？外面はハケメの後にナデ	20617
166	鉢	E－3	7	7－1層	ミニチュア、器面の荒れが著しく、調整の子細は不明	20616
Fig.106-167	甕	E－3	8	7－1層	器面の荒れが進み、調整の子細は不明	20727
168	甕	E－3	7	7－1層	口縁の周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、内面はナデ	20728
169	壺	B－3	24	7－2層	器面の荒れが著しい、外面は研磨か？	360
170	壺	C－3	23	7－2層	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細不明	5880
171	壺	C－3	22	7－2層	器面は荒れ、調整の子細不明、頸に貝殻で沈線文3条	5074
172	壺	B－3	23	7－2層	内外面ともハケメの後にナデ仕上げ	435
173	壺？	C－3	17	7－2層	内外面ともに横方向の研磨	5436
174	壺	B－3	27	7－2層	肩部に3条のヘラ描き沈線、外面は研磨、内面はナデ	1593
175	壺	B－3	17	7－2層	肩に2条の沈線文、下方に羽状文をヘラで施文	474
176	壺	C－3	10	7－2層	肩に1条、胴に2条の沈線文、間に羽状文を貝殻で施文	4466
177	壺	B－3	28	7－2層	胴上半に沈線1条、上方に羽状文？をヘラで施文	768
178	壺	B－2	2	7－2層	肩に1条の沈線、下方に羽状文を貝殻で施文	2123
179	壺	B－3	21	7－2層	胴上半に貝殻で羽状文を施文	1496
180	壺	B－3	27	7－2層	肩の凸帯下端にヘラ沈線、その下方に羽状文を貝殻で施文	1521
181	壺	C－3	23	7－2層	胴上半に下向きの4条の重弧文をヘラで施文	5940
182	壺	C－3	12	7－2層	肩に沈線1条、下方に6条の短斜線文と不規則な重弧文	5778
183	壺	B－2	1	7－2層	肩に沈線を1条、下方に複線山形文をヘラで施文	1858
184	壺	C－3	18	7－2層	外面は横方向の研磨、内面は丁寧なナデ	5806
185	壺	B－3	34	7－2層	内外ともナデ、内面が薄く黒変	725
186	壺	C－3	9	7－2層	外面は横方向の研磨、内面はナデ	6222
187	甕	C－3	21	7－2層	内外面ともに横ナデ、口唇下端にヘラによるキザミ	5018
188	甕	C－3	17	7－2層	器面の荒れが著しく、部分的にハケメが残るのみ	5512
189	鉢	C－3	16	7－2層	外面は荒れ、部分的にハケメが残る、内面には指頭痕	4217
190	甕	D－4	12	7－2層	口縁内面はハケメ後にナデ、口唇下端と凸帯にキザミ	17256
Fig.107-191	甕	C－3	22	7－2層	口縁端と胴部凸帯にヘラでキザミ、外面には煤が付着	5015
192	甕	B－3	16	7－2層	胴外面のハケメは細密条線に近い、煤が付着	970
193	甕	C－3	7	7－2層	口縁～胴外面はハケメ後にナデ、内面はナデ	4019
194	甕	C－3	9	7－2層	口縁～胴外面は横ナデ、口縁先端にキザミ、口縁下に煤	6223
195	甕	C－3	16	7－2層	外面は荒れ、部分的にハケメが残るのみ	5153
196	甕	C－3	16	7－2層	口縁下に段状の凸帯、ハケメによるキザミを入れるが部分的	5165
197	鉢？	C－3	19	7－2層	口縁の周辺は横ナデ、他は丁寧なナデ仕上げ	20565
198	鉢	C－3	10	7－2層	外面はハケメの後にナデ、他は横ナデ	4455
199	鉢	C－3	16	7－2層	器面は荒れ、部分的にハケメが残るのみ.内面には指頭痕	5209
200	鉢	B－3	24	7－2層	口縁周辺は横ナデ、外面はナデ	358
201	鉢	C－3	16	7－2層	外面はハケメの後にナデ、他は横ナデ	5200
202	鉢	C－3	12	7－2層	口縁直下に指頭痕が残り、口縁周辺は横ナデ	5743
203	鉢	C－3	12	7－2層	外面は細かなハケメ、内面はナデ	5781
204	高坏	C－3	11	7－2層	外面は指頭によるナデの後にハケメ	5373
205	器台	A－2	12	7－2層	外面はナデ、全面に2次的な火熱を受けている	2201
206	蓋	B－3	22	7－2層	外面は指頭によるナデ、内面は丁寧なナデ	784
207	蓋	B－3	16	7－2層	外面はハケメの後にナデ	892
208	甕	C－3	21・22	7－2層	外面はハケメの後にヘラ？で縦方向のナデ	5022
Fig.108-209	甕	C－3	11	7－2層	外面はハケメ、内面は指頭によるナデ	5365
210	甕	B－2	1	7－2層	外面はハケメの後ナデ、内面は接合面で粘土帯が剝離	1855
211	甕	B－3	23	7－2層	外面はハケメ、内面ナデ、黒変	415

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	地区 小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.108-212	甕	C－3	14	7－2層	外面はハケメ、内面はナデ	4280
213	甕	B－3	23	7－2層	外面はハケメの後にナデ、内面はナデ	398
214	甕	C－3	10	7－2層	外面はハケメの後にナデ、内面はナデ	4511
215	甕	B－3	22	7－2層	外面はハケメの後にナデ、内面は炭化物が薄く付着	827
216	甕	C－3	12	7－2層	外面はハケメの後にナデ、内底面は指頭によるナデ	5790
217	甕	C－3	19	7－2層	外面はハケメの後に裾部を中心としてナデ、内面はナデ	20564
Fig.112-218	壺	B－3	2	8－4層	器面は丁寧なナデ、黒塗りの痕跡、口唇上下端にキザミ	12485
219	壺	B－3	9	8－4層	口縁の内外に粘土帯を貼付、内外面ともにハケメの後にナデ	20533
220	壺	B－4	29	8－4層	内外面ともに横ナデ、口唇上下端にヘラによるキザミ	10939
221	壺	B－3	7	8－4層	外面はハケメの後にナデ、口唇下端にヘラによるキザミを施す	20525
222	壺	B－3	3	8－4層	内面は研磨、外面はハケメ後に横ナデ、黒塗り	12573
223	壺	B－3	10	8－4層	外面は横方向の研磨、肩には段が巡る	12881
224	壺	B－3	3	8－4層	肩に棒状工具による4条の平行沈線文が巡る	20515
225	壺	B－3	9	8－3層	肩の段に沈線をいれ強調、下方に5条1単位の山形文？	20528
226	壺	B－3	1	8－3層	肩の段の下に1条の沈線と短斜線文をヘラ描き施文	20502
227	壺	B－3	10	8－4層	肩にヘラ描きの有軸羽状文を施文、外面は横方向の研磨	12486
228	壺	B－3	3	8－4層	肩に3条のヘラ描き沈線と、羽状文を貝殻で施文、黒塗り	20517
229	壺	B－3	8	8－4層	肩に対向する羽状文をヘラ描き施文、外面は黒塗り	20527
230	壺	B－4	22	8－4層	肩にヘラで沈線文、下方に貝殻で不規則な重弧文を施文	10732
231	壺	B－3	15	8－3層	沈線に近い段を巡らし、格子文をヘラ描き施文、黒塗り	20729
232	壺	B－3	2	8－4層	胴上位に沈線、上方に斜格子文を貝殻で施文	20511
233	壺	B－3	14	8－3層	羽状文、重弧文、短斜線文、平行沈線文を貝殻で施文	20730
234	壺	B－3	10	8－3層	肩に削り出し凸帯、外面は黒塗り磨研	20534
235	壺	B－4	23	8－4層	外面はハケメの後に横ナデ、黒塗り、内面は指頭によるナデ	10930
236	壺	B－3	5	8－3層	内外ともに横ナデ、口縁直下に焼成前に穿孔	20523
237	壺	B－3	9	8－3～8－4層	無頸壺、外面は研磨、内面は丁寧な横ナデ	12674
238	甕	B－3	2	8－4層	内外ともに横ナデ、口唇を切るようにキザミを施す	20512
239	甕	B－3	15	8－3層	口縁～胴外面はハケメの後に横ナデ、内面には指頭痕	12814
240	鉢	B－3	8	8－3層	ハケメの後に指頭により口縁を外反させ、横ナデ	12457
241	甕	B－3	10	8－4層	口縁～胴外面は横ナデ、煤が付着	12857
242	甕	B－4	35	8－3～8－4層	口縁は横ナデ、胴外面はハケメの後にナデ、煤が厚く付着	20541
243	甕	B－4	34	8－4層	内外面とも横ナデ、外面には煤が付着.口唇下端にキザミ	10667
244	鉢	B－4	26	8－4層	口縁～胴外面は細かなハケメ、外面には煤が付着	10446
245	鉢	B－3	4	8－4層	胴外面はケズリに近い乱雑なナデ、内面は丁寧なナデ	12616
246	鉢	B－3	1	8－4層	口縁周辺は横ナデ、他は横方向の研磨	12337
247	甕	B－3	26	8－3層	口縁～胴外面はハケメ後に口縁のみ横ナデ、煤が付着	12720
Fig.113-248	脚台付鉢	B－4	2	8－4層	外面は指頭によるナデ、黒塗り	11502
249	高坏	B二3/4	20/10	8－4層	坏部内面は研磨、外面は横ナデ、脚外面はヘラナデ	10792
250	支脚	B－3	27	8－3層	上端面は帯条に凹み、中位には焼成前に穿孔	12818
251	支脚	B－3	2	8－3層	中実の粘土柱で、上面には凹部あり	20508
252	支脚	B－4	2	8－4層	柱状の体部内に細い穴が通る.外面には指頭痕が残る	126
253	壺	B－3	10	8－4層	外面は黒塗り磨研、内面はナデ	20535
254	甕	B－3	7	8－4層	外面はハケメの後にナデ、内面はナデ	12380
255	甕	B－3	9	8－3層	外面はハケメ、部分的に煤が付着、内面はナデ	20529
256	甕	B－3	3	8－3層	外面はハケメの後にナデ、内面はナデ	20513
257	甕	B－3	20	8－3層	外面はハケメの後にナデ、内面は指頭による調整の後にナデ	12073
Fig.114-258	壺	C－4	21	8－3層	内外面ともに黒塗り、横方向の研磨	3204
259	甕	C－4	27	8－3層	口縁内面に接合線が残る、外面には煤が付着	3171
260	壺	C－4	24	8－3層	肩に沈線を1条、その下方に羽状文をヘラで施文	3713
261	壺	C－3	4	8－3層	肩の段の下にヘラ描きの羽状文を施文	20731
262	壺	C－4	27	8－3層	胴上半に沈線1条、羽状文をヘラ描き施文.外面黒塗り	20732
263	壺	C－3	6	8－3層	肩の貼付け凸帯の下に羽状文を貝殻で施文	20733
264	壺	C－4	14	8－4層	胴上半に沈線1条、上向きの重弧文をヘラ描き施文	20734
265	壺	C－3	3	8－3層	外面は横方向の研磨、口縁端は収束するか不明	4876
266	壺	C－3	9	8－4層	肩には不明瞭な段、下に4条1単位の重弧文をヘラ描き施文	20735
267	壺	C－3	2	8－4層	肩に乱雑に沈線を巡らし、下方に重弧文をヘラ描き施文	20736
268	壺	B－4	34	8－2層	肩に棒状工具で羽状文を施文	17126
269	壺	C－3	1	8－3層	外面は斜方向の研磨、黒塗り、外底はかなり擦れている	4118
270	壺	C－4	23	8－3層	外面はハケメ後に斜方向の研磨、黒塗り、内面には指頭痕	3840
271	甕	C－4	34	8－3層	口縁周辺は横ナデ、胴内外面はナデ、口唇下端にキザミ	3993
272	甕	C－3	3	8－3層	口縁下の2条の沈線間に竹管文を押捺	20547
273	甕	C－4	30	8－3層	口縁から胴外面はハケメ、口唇下端にヘラキザミ、内面に指頭痕	3865

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	地区 小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.114-274	甕	C－3	5	8－3層	外面はハケメ、その後全面に横ナデ、胴中位の接合面で破損	6447
275	甕	C－4	28	8－3層	内外面ともに横ナデ、外面には煤が付着	3949
276	甕	C－4	22	8－4層	ハケメの後にナデ、内面には指頭痕、外面には煤が付着	20567
277	甕	C－4	27	8－3層	口縁周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、薄く煤付着、内面ナデ	3167
278	甕	C－3	6	8－3層	胴外面と口縁内面にはハケメが残る、口縁周辺は横ナデ	5622
Fig.115-279	甕	C－3	3	8－4層	口縁周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、内面はナデ	20548
280	甕	C－3	4	8－3層	口縁付近は横ナデ、胴外面は細かなハケメ、内面には指頭痕	4692
281	鉢	C－4	33	8－3層	口縁周辺は横ナデ、外面はハケメ、煤が付着	3142
282	鉢	C－3	3	8－3層	内外面ともに横方向の研磨、口縁端に煤が薄く付着	20546
283	脚付き坏	C－3	12	8－2層	ミニチュア、外面全面に縦方向の暗文風の研磨	20615
284	蓋	C－3	4	8－3層	外面はハケメ、煤付着、つまみ上面はヘラ切り成形	4768
285	蓋	C－4	24	8－3層	外面はハケメ、内面はナデ、裾内面には煤が付着	3706
286	器台	C－4	21	8－4層	器壁は厚く、全面指頭によるナデ	20566
287	器台	C－3	5	8－3層	外面はヘラによるナデ、内面には絞り痕が残る	20553
288	甕	C－3	6	8－3層	外面はかなり細かなハケメ、内面はナデ	5628
289	甑	C－4	30	8－3層	外底面から焼成後に穿孔、外面はハケメの後にナデ	3851
290	甕	C－3	4	8－3層	外面はハケメ、裾には指頭痕、内面には炭化物が付着	20550
291	甕	C－3	5	8－3層	外面はハケメ、内面には厚く炭化物が付着	6504
292	甕	C－3	3	8－3層	内外面ともナデ、外面には薄く煤付着	4833
293	甕	C－3	2	8－3層	外面はハケメ、内面には幅広のヘラナデ痕が残る	20544
Fig.116-294	壺	B－4	27	8－5層	外面は横方向の研磨、内面は横ナデ	10538
295	壺	B－4	1	8－5層	内外面とも横ナデ、黒塗りを施す	11532
296	壺	A－3	30	8－5層	内外面とも横方向の研磨、頸の付け根の内面に指頭痕	10070
297	壺	B－3	9	8－5層	外面は横方向の研磨、内面には頸を接合した段が特徴的	20532
298	壺	B－3	1	8－5層	肩に削り出しの段、下方にはヘラで羽状文を施文	20504
299	壺	B－4	25	8－5層	肩に削り出し凸帯、その下方にヘラで羽状文を施文	10224
300	壺	B－4	24	8－5層	肩に不明瞭な段を巡らし、下方にヘラで羽状文？を施文	11135
301	壺	B－3	1	8－5層	胴上半に貝殻で羽状文を施文、外面は黒塗り磨研	20505
302	壺	B－4	10	8－5層	不明瞭な肩の段の上方に沈線文、下方に羽状文をヘラ施文	10813
303	壺	C－4	14	8－5層	胴上半に対向する羽状文を貝殻施文、外面は黒塗り磨研	20737
304	壺	B－4	26	8－5層	肩に段状の沈線、下に3条1単位の重弧文をヘラで施文	20738
305	壺	C－3	3	8－5層	肩に3条の平行沈線文、さらに山形文？をヘラ描き施文	20739
306	壺	C－3	3	8－5層	肩の沈線状の段を中心に6条の平行沈線文を巡らせる	20740
307	壺	B－4	30	8－5層	肩の段状部分に2状の沈線、下方に斜格子文をヘラで施文	11036
308	壺	C－3	10	8－5層	内外ともに荒れが著しい．口縁下に2孔を焼成前に穿孔	20622
309	甕	C－4	21	8－5層	器面の荒れが著しい、キザミは棒状工具を押捺して施す	20741
310	甕	C－4	34	8－5層	口縁周辺は横ナデ、口唇を切るようにキザミを施す	20572
311	甕	B－3	2	8－5層	内外ともに横ナデ、口唇を切るようにヘラでキザミを施す	20510
312	甕	B－4	15	8－5層	口縁下にU字形の凸帯を貼付、外面はハケメ、内面はナデ	11185
313	甕	B－4	23	8－5層	口唇下端にキザミ、胴外面はハケメの後ナデ、煤が厚く付着	10900
314	甕	B－4	30	8－5層	口縁～胴外面はハケメ、口唇下端と凸帯にハケメ押捺のキザミ	11052
315	甕	B－4	36	8－5層	口唇下端にキザミ、胴外面はハケメ、煤が付着	11020
316	甕	B－4	30	8－5層	口縁周辺は横ナデ、他はナデ、外面には煤が厚く付着	11032
317	甕	B－4	28	8－5層	口縁～胴外面はハケメ、口縁下に浅い沈線	10634
318	甕	B－4	30	8－5層	外面は口縁直下までハケメ、煤が付着、口唇下端にキザミ	11034
Fig.117-319	甕	A－4	24	8－5層	口縁～胴外面は横ナデ、口縁端と凸帯にキザミ、煤付着	10058
320	甕	B－4	18	8－5層	口縁周辺は横ナデ、胴外面はハケメ、煤が厚く付着	11136
321	鉢	B－4	34	8－5層	内外面ともナデ仕上げ、口径は小片のため疑問あり	10653
322	脚台付鉢	A－4	24	8－5層	内外面ともナデ、脚裾端は内側に粘土がめくれている	10047
323	脚付鉢	B－4	33	8－5層	脚外面は横方向の研磨、鉢部は内外面ともに黒塗り	10493
324	甕	B－3	2	8－5層	外面はハケメの後にヘラでナデ、内面はナデ仕上げ	20509
325	鉢	B－4	18	8－5層	外面はハケメ、内面は指頭成形の後ハケメ、外面には煤が付着	11124
326	鉢	B－3	4	8－5層	口縁～胴外面は横ナデ、口唇は凹む、外面には煤が付着	12623
327	甕	A－4	36	8－5層	外面は底部側面を指頭によるナデの後ハケメ、外底はヘラケズリ	10122
328	鉢	B－4	24	8－5層	外面は指頭による乱雑なナデ、内面は不定方向の研磨	11091
329	甕？	B－4	19	8－5層	ミニチュアで、外面はハケメの後ナデ、内面に指頭痕が残る	10294
330	甕？	A－4	18	8－4層	ミニチュアで、外面はハケメの後ナデ、内面に指頭痕が残る	11334
Fig.118-331	壺	D－4	35	7－2～8－1層	外面～頸内面は研磨、肩内面には指頭痕が残る	20742
332	壺	D－3	5	7－2～8－1層	口縁の周辺は横ナデ、他はナデ．	20578
333	壺	E－4	33	7－2～8－1層	内外面ともに横ナデ、部分的に黒塗りの痕跡	20743
334	壺	D－3	2	7－2～8－1層	肩に沈線1条、羽状文をヘラで施文	20744
335	壺	D－3	12	7－2～8－1層	胴上半に帯状に羽状文を貝殻で施文	20745

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	地区 小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.118-336	壺	D−3 / E−3	5 / 7	7−2〜8−1層	肩に貼付け凸帯、有軸羽状文をヘラで施文	20746
337	壺	D−3	3	7−2〜8−1層	胴上半に有軸羽状文をヘラで施文、外面は横方向の研磨	20747
338	壺	D−3	5	7−2〜8−1層	肩に2条の沈線、下に羽状文を貝殻で施文	20748
339	甕	D−3	12	7−2〜8−1層	胴外面はハケメの後にナデ、煤が薄く付着	20582
340	甕	D−3	5	7−2〜8−1層	口縁周辺は横ナデ、胴外面は乱雑に研磨を施す	20577
341	壺	D−4	34・35	8−2層	内外とも荒れ調整は不明、口縁下にヘラ描き沈線文を施文	17150
342	壺	D−3 / D−4	6・12 / 36	8−2〜8−5層	肩に1条の沈線を巡らし、下に貝殻で羽状文を施文	20749
343	壺	E−3	1	8−2〜8−3層	外面は横方向の研磨、底裾にはハケメと指頭痕が残る	17167
344	壺	D−3	4	8−2層	頸に縦方向にヘラで平行沈線文、肩に貝殻で羽状文を施文	20750
345	壺	D−3	12	8−2層	肩の貼付け凸帯下にヘラで施文、小片なので傾き疑問	20751
346	壺	D−4	34	8−2層	肩に貼付け凸帯とヘラで羽状文を施文	20752
347	壺	D−4	36	8−2層	外面は横方向の研磨、内面はナデ	20753
348	鉢	D−3	5	8−2層	内外面ともに横ナデ	20579
349	鉢	D−4	35	8−2層	ミニチュアで、指頭による成形の後に部分的にハケメ	17130
Fig.119-350	鉢	D−3	12	8−2層	口縁〜外面はハケメの後にナデ、胴中位に2次的な火熱	20754
351	甕	E−3 / E−4	1 / 31	8−2〜8−3層	外面はハケメ、内面は指頭によるナデ、炭化物が厚く付着	17196
352	器台	D−4	17	8−2層	体部はハケメ、端部は横ナデ.端部近くに沈線が1条巡る	20586
353	壺	E−3	1	8−3層	器面はハケメの後に丁寧な横ナデ、外面は黒塗り	17223
354	壺	E−4	32	8−3層	外面はナデ、部分的に黒塗りの痕跡、内面は研磨	17183
355	壺	E−4	33	8−3層	外面は横方向の研磨、内面には指頭痕	20755
356	壺	D−3	3	8−3層	外面は黒塗り磨研.肩にヘラ描きの羽状文を施文	20756
357	壺	D−4	32	8−3層	肩に2条の平行沈線を巡らす	20757
358	壺	D−3	3	8−3層	肩の段の中に沈線.3条の沈線文と羽状文はヘラ描き施文	20758
359	壺	E−4	32	8−3層	胴上半の沈線上に短斜線(羽状文？)をハケメ小口部で施文	20759
360	壺	D−3	5	8−3層	内外面ともに横ナデ、口唇の上下端にヘラによるキザミ	20580
361	蓋	E−4	26	8−3層	内外ともナデ、内面には指頭痕、外面には煤が付着	17044
362	壺	D−4	29・35	8−3層	外面はハケメの後に下半のみをヘラナデ.外面は黒塗り	17015
363	甕	E−3	1	8−3層	口縁〜胴外面はハケメの後ナデ、口唇下端にハケメ押捺のキザミ	17254
364	甕	D−3	12	8−3層	口縁〜胴外面はハケメ後ナデ、口唇下端にヘラキザミ、外面に煤	17266
Fig.120-365	甕	D−4	14	8−3層	口縁は横ナデ、胴外面はハケメ、煤が付着、内面には指頭痕	20584
366	甕	D−4	35	8−3層	外面はハケメの後にナデ;煤が付着.内面には指頭痕	17161
367	甕	E−4	33	8−3層	口縁は横ナデ、胴外面はハケメ、内面には指頭痕、煤が付着	17087
368	甕	D−3	6	8−3層	胴外面はハケメの後ナデ、口縁端と凸帯にヘラキザミ、外面に煤	10182
369	甕	E−4	26	8−3層	外面はハケメ、内面は指頭によるナデ	17031
370	甕	E−4	32	8−3層	外面はハケメ、煤が付着、内面には炭化物が厚く付着	17181
371	壺	E−3	1	8−4層	外面はごく丁寧なナデ、口頸部の付け根に凸帯が巡る	17222
372	壺	E−4	13	8−4層	肩に乱雑に2条の平行沈線文と重弧文をヘラ描き施文	20760
373	壺	D−4	34	8−4層	外面は研磨、ヘラで施文	20761
374	壺	E−4	26	8−4層	肩に2条の平行沈線文と羽状文をヘラで施文.黒塗り研磨	20762
375	壺	D−4	9	8−4層	肩に沈線に挟まれた短斜線文と、下に山形文をヘラで施文	20763
376	壺	E−4	25	8−4層	肩の2条の平行沈線文を挟み、上下に羽状文をヘラで施文	20764
377	甕	D−4	14	8−4層	外面はヘラナデ、口縁凸帯のキザミは棒状工具による	20585
378	鉢	E−4	25	8−4層	内外面とも横ナデ、口縁下に焼成前に穿孔	20621
379	甑	D−4	28・29	8−4層	外面はハケメ、内面はナデ、外底には焼成後に穿孔	17141
380	甕	D−4	36	8−4層	外面はハケメ、内面はナデ、内底には厚く煤が付着	17156
381	支脚	E−4	25	8−4層	中実で、指頭による成形、上端面の中央が凹む	17124
382	器台	E−4	13	8−4層	外面は指頭によるナデ、端部内面には指頭痕が残る	17117
Fig.121-383	壺	D−3 / D−4	6 / 30	8−5層	外面は横と斜方向の研磨、肩部に羽状文を貝殻施文	17179
384	壺	D−4	29	8−5層	肩に細い沈線を巡らし、貝殻で羽状文を施文	20765
385	壺	E−4	32	8−5層	ヘラで肩に沈線2条、頸に縦方向の平行沈線、胴に羽状文	20766
386	壺	D−4	36	8−5層	肩には段、段下には羽状文をヘラ描き施文	20767
387	壺	E−4	25	8−5層	肩に短斜線(羽状文？)をヘラ描き施文	20768
388	壺	E−4	19・20	8−5層	胴上半に貝殻で羽状文を描き、さらにヘラで軸を施文	20769
389	壺	E−4	32	8−5層	肩に沈線条の段、外面は研磨、内面はナデ	20770
390	甕	E−4	27	8−5層	ハケメの後に内面だけナデ、口縁下に煤が付着	20771
391	甕	E−4	32	8−5層	外面は横方向の研磨、内面は丁寧なナデ	20772
392	甕	E−4	13	8−5層	外面はケズリ、口縁凸帯のキザミはヘラで施す	20773
393	甕	D−4	12	8−5層	口縁〜外面はハケメ、煤が付着、内面はナデ	20583
Fig.222-394	壺	D−4	4	8−4層	口縁内外を黒塗り磨研した上にベンガラで短線を描く	20653
395	壺	D−4	16	8−4層	口縁内外を黒塗り磨研した上にベンガラで短線を描く	20651
396	壺	B−3	11	8−5層	肩の沈線の上下、頸に縦方向に平行線をベンガラで描く	20647
397	壺	D−4	24	8−5層	黒塗り磨研の器面に、ベンガラで有軸羽状文と斜線文	20652

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	地区 小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.122-398	壺			SK－15	黒塗り磨研の器面に、ベンガラで有軸羽状文を描く	20644
399	壺	B－3	6	8－5層	ベンガラは落ち、下地の黒色顔料で有軸羽状文を確認	20646
400	壺	C－4	15	8－5層	頸と肩をつなぐ平行線文、肩の羽状文？を描く	20648
401	壺			8層	黒塗り磨研の器面に、ベンガラで有軸羽状文を描く	20650
402	壺	B－4	30	8－5層	黒塗り磨研の器面に、ベンガラで斜格子文ほかを描く	11028
403	壺			SK－15	黒塗り磨研の器面に、ベンガラで斜格子文を描く	20645
404	壺	C－3	8	8－3層	黒塗り磨研の器面に、ベンガラで上下に斜格子文を描く	17007
405	壺	A－3		SK－10・11	頸の付け根にヘラで施文された羽状文内にベンガラが残存	20643
406	壺	C－4	27	8－5層	口縁近くにベンガラが付着しているが、子細不明	20649
Fig.123-407	諸手鍬	E－4	31	8－4層	柄壺部分と身部のおおくを欠く.土圧変形.柾目材	20053
408	諸手鍬	E－4	31	8－3層	鍬身の片側と柄壺の一部分を残すのみ.柾目材	18643
409	平鍬	D－4	36	8－5層	変形が著しい.孔周辺の膨らみから平鍬と考えた.柾目材	20104
410	平鍬	A－3		7－2～8－2層	変形が著しい.柄壺の隆起の境は明瞭でない.柾目材	20031
411	諸手鍬	B－3	13	8－3層	柄壺部分の破片.柾目材、柄壺上面のいたみが著しい	19096
412	平鍬	B－4	34	8－4層	柄壺部分の破片	19794
413	平鍬	B－3	20	8－3層	柄壺部分の半欠の破損品	19090
Fig.124-414	エブリ			8層	土圧によりやや変形.板目材を素材とする	20273
Fig.125-415	エブリ	C－4	10	8－5層	身部の破片.板目材を使用	19839
416	エブリ	D－4	18	8－5層	身部の破片.板目材を使用	20253
417	又鍬？			8層	両側面を削り尖らせており、又鍬の歯先と考えた.木取	20265
418	鍬柄	D－4	14	8－5層	柾目材を素材とする.先端に緊縛痕が残る	18970
419	鍬柄	B－3	1.2	8－5層	芯持ち材を利用.先端は一面だけ平坦に仕上げる	19120
420	鍬柄	C－3	4	8－4層	柾目材を素材とする.先端部には緊縛痕が残る	18800
Fig.126-421	鋤	A－3	24	8－3層	一本造り、未製品、木取りは柾目、削り痕が多く残る	19087
422	鋤	D－4	21・26	8－4層	一本造り、鋤身部分の大半と柄の握り部分を欠く.柾目材	18627
Fig.127-423	竪杵	合 B－3	6	8－4層	芯持ち材を素材とする。両端ともによく使い込まれている	19113
Fig.128-424	横槌	D－4	18	8－4層	柾目のミカン割り材を素材とする	18918
425	横槌	E－4	25	8－4層	握り部の太さは槌部とほとんど変わらない.木取りは	20011
426	横槌	B－3	4	8－4層	小形品で、柄部を欠く.芯持ち材を利用	19157
427	横槌	B－4		8－3～8－5層	小形品で、先端部分の一部を欠く.芯待ち材を利用	20020
428	横槌？	B－4	36	8－3層	柾目材を利用.長さ、太さから横槌の柄部と考えた	18126
429	臼	D－4	8	8－5層	ミカン割材を素材.内面は擦過が著しい	20258
430	経打具	B－3	26	8－4層	織器.未成品？柾目材を利用	19118
431	火鑽臼	B－4	26	8－5層	両端を欠損、芯持ち材の四面を加工している	19001
Fig.129-432	柄			8層	柾目材を素材とする.傷みがとくに著しい.	20274
433	柄	B－3	10	8－4層	柾目材を素材とする.柄部分の大半を失う.	19151
434	柱状片刃石斧柄	E－4	25・26	8－4層	未製品、台尻部分と柄の先端部を欠損	20021
435	柱状片刃石斧柄	B－3	7.8	8－4層	柄尻は切断のままで未処理	19203
436	柄			8層	柾目材を素材とする工具の柄と考える.柄尻に両方穿孔	20227
437	太型蛤刃石斧柄			8層	頭部の半裁破片、ミカン割材の芯近くを利用	20269
438	太型蛤刃石斧柄	D－4	24	8－5層	頭部の半裁破片、ミカン割材の芯近くを利用	20222
Fig.130-439	太型蛤刃石斧柄	C－4	14	8－5層	頭部の破片、ミカン割材の芯近くを利用	19574
440	太型蛤刃石斧柄	C－4	14	8－4層	頭部の破片、ミカン割材の芯近くを利用	19576
Fig.131-441	太型蛤刃石斧柄	E－4	18	8－4層	未製品、ミカン割材の芯近くを利用	18919
442	太型蛤刃石斧柄			8層	未製品、ミカン割材の芯近くを利用、片側の主面は腐植	20229
Fig.132-443	板状工具	D－4	16	8－5層	ハケメの原体、柾目材を素材	20019
Fig.133-444	石剣柄	B－3	4	8－4層	石剣の柄.柾目材を利用	19816
445	鏃	C－3	11	8－3層	浮きの可能性もあり	20027
446	鏃	C－3	2	8－4層	浮きの可能性もあり	18524
Fig.134-447	長方形容器	C－4	32	8－4層	刳り貫き	19916
448	舟形容器	B－3	20	8－3層	刳り貫き	19098
449	長方形容器	A－3	6	8－4層	刳り貫き	19112
450	舟形容器	B－3	10	8－4層	刳り貫き	19150
451	舟形容器	B－3	8	8－4層	刳り貫き	19107
452	楕円形容器	B－3	2.8	8－5層	刳り貫き、削り痕が多く残る	19108
453	脚付長方形容器	A－3	24	8－3層	刳り貫き	19089
Fig.135-454	蓋	B－3	1・2	8－4層	板目材を利用	19118
455	竪杓子	A－3	6	8－5層	全体に焼け焦げている	18071
Fig.136-456	脚付杯	B－4	27	8－5層	漆塗りの容器	20009
457	鉢	B－4	24	8－5層	漆塗りの容器	19086
458	組み合せ式容器	B－3	3	8－4層	漆塗りの容器、高杯？	20252
459	高杯	B－3	19	8－4層	漆塗りの容器	20001

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録 番号
Fig.136-460	高杯	B－4		8層	漆塗りの容器	20264
461	有刺棍棒	C－4	26	8－4層	柾目材を素材とし、刺を彫り出している	20054
Fig.137-462	部材？	A－3	1・6	8－4層	大足状木製品.板目材	18102
463	部材？	C－3	33	8－4層	杓文字形木製品.板目材	19892
464	部材？	A－3	6・12	8－4層	三角形木製品.柾目材	18101
465	部材？	B－4	22	8－5層	半月形木製品	19061
466	部材？	A－3	6	8－5層	鉤状木製品	18069
467	部材？	C－4	10	8－5層	U字形木製品.板目材	19584
468	部材？	B－3	10・16	8－4層	鉤状木製品、枝部分の先端に切り込みを入れる	19161
469	板材	E－4	2	8－5層	製品の破損品？柾目材	20010
470				8層	芯持ち材、四周から削り	20263
471		D－4	23	8－4層	角柱状、柾目材	20004
472	板材	D－4	17	8－5層	柾目材、小口部の一端に擦過の痕跡	20270
473	板材	A－3	24	8－5層	柾目材、小口部の一端に擦過の痕跡	18105
474	板材	D－4	30	8－5層	柾目材、両端を欠損	20015
Fig.138-475	板材	B－2	3	7－2～8－2層	両側に切り欠き.板目材	20223
476	板材	B－3	13	8－4層	中央がくびれる.柾目材	19116
477	板材			8層	製品の破損品？板目材	20268
478	板材	B－4	30	8－5層	方形.板目材	20275
479	板材	C－3	31	8層	板目材	19533
480	建築部材	C－4	33	8－4層	芯持ち材	19730
481	建築部材	B－4 E－4	24 16	8－4層	芯持ち材	18645
Fig.139-482	加工樹枝	C－4	36	8－4層	芯持ち材	19974
483	加工樹枝	B－3	9	8－4層	有頭状木製品,芯持ち	19290
484	加工樹枝	C－3	5	8－3層	有頭状木製品,芯持ち	18507
485	加工樹枝	E－4	31	8－4層	有頭状木製品,芯持ち	20244
486	加工樹枝	C－4	24	8層	有頭状木製品,芯持ち	19631
487	加工樹枝	B－3	26	8－4層	有頭状木製品,芯持ち	19219
488	加工樹枝	C－3	5	8－3層	有頭状木製品,芯持ち	18312
Fig.140-489	加工樹枝	C－4	25・26	8－5層	尖頭状木製品、芯持ち	19557
490	加工樹枝	D－4	11・17	8－5層	尖頭状木製品、芯持ち	20271
491	加工樹枝	C－4	28	8－5層	尖頭状木製品、芯持ち	19705
492	加工樹枝	D－4	10	8－5層	尖頭状木製品、芯持ち	20096
493	加工樹枝				尖頭状木製品	19283
494	加工樹枝	B－4	31	8－5層	尖頭状木製品、芯持ち	18089
495	加工樹枝	B－3	1.2	(99) (98)	尖頭状木製品、芯持ち	19277
496	欠番				Fig.83－34と重複	
497	加工樹枝	C－4	33	8－5層	樹枝の一端を削り、切断、節はとっていない	19888
498	割り屑	E－4	25	8－5層	柾目材	20006
499	割り屑	E－4	25	8－5層	柾目材	20005
500	削り屑			8層	削り痕を残す.柾目材	20267
Fig.141-501	打製石鏃	D－3	10	7－2～8－1層	黒曜石	30079
502	打製石鏃	B－3	12	8－4層	黒曜石	30151
503	R.石核？	C－4	7	8－4層	黒曜石	30396
504	R.フレイク	B－2	2	7－2～8－2層	黒曜石	2089
505	U.フレイク	A－3	12	8－4層	黒曜石	12238
506	剝片	C－4		8－2層	黒曜石	30311
507	両面加工石器	B－3	24	7－2層	黒曜石	357
508	石核？	C－4	18	8－4層	黒曜石	30400
509	石核	B－3	15	8－3層	黒曜石	30358
510	石核	A－2	12	7－2層	黒曜石	2182
511	石核	D－4	32	7－2～8－1層	黒曜石	30285
Fig.142-512	石包丁	B－3	32	7－2層	砂質頁岩	2021
513	石包丁	C－3	4	8－5層	砂質頁岩	18766
514	石包丁	B－4	11	8－5層	砂質頁岩	10833
515	石包丁	C－3	7	7－2～8－1層	紫赤色頁岩	30077
516	石鎌	D－4	28	8－4層	流紋岩質岩石	17111
517	柱状片刃石斧	B－4	27	8－5層	凝灰質頁岩	10553
518	柱状片刃石斧	E－3	13	7－1層	凝灰質頁岩	30067
519	偏平片刃石斧	C－4	22	8－3層	凝灰質頁岩	3837
520	偏平片刃石斧	C－4	31	8－3層	凝灰質頁岩	30143
521	柱状片刃石斧	B－3	3	8－4層	凝灰質頁岩	12647

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.143-522	偏平片刃石斧	A・B－	4・5	8－3層	凝灰質頁岩	30108
523	ノミ形片刃石斧	C－2		6層	凝灰質頁岩	30187
524	ノミ形片刃石斧	B－3	12	8－3層	凝灰質頁岩	30142
525	ノミ形片刃石斧	C－4	27	8－3層	凝灰質頁岩	3162
526	片刃石斧	C－3	12	7－2～8－2層	凝灰質頁岩、未成品	5696
527	剝片	A－2	12	7－2層	凝灰質シルト岩	2196
528	片刃石斧	B－4	27	8－5層	凝灰質頁岩、未成品	10520
529	石剣	D－4	15	8－3層	砂質頁岩	17014
530	石剣	B－4	2	8－3～8－4層	層灰岩	30145
531	石剣	B－3	5	7－2層	砂岩	670
532	石剣	B－4		試掘壙	層灰岩	30196
533	石剣？	B－4	33	8－5層	頁岩	10494
Fig.144-534	石戈？	B－4	13	8－4層	粘板岩	11309
535	蛤刃石斧	B－3	8	8－4層	安山岩	12435
536	礫器	D－3	6	8－3層	砂岩、石斧転用	17154
537	磨石	A－2	6	8－3層	砂岩、石斧転用	13049
538	礫器	E－3	1	7－2～8－1層	安山岩、石斧転用	30085
539	敲打具	A－3	36	8－3層	砂岩	30112
540	敲石	B－3	12	8－3層	閃緑岩	12953
541	敲石	B－3	32		閃緑岩	1988
Fig.145-542	剝片石器	C－4	29	8－5層	安山岩	30545
543	剝片石器	D－4	18	8－4層	安山岩	30569
544	礫器	D－4	18	8－5層	安山岩	30572
545	穿孔具	D－4	22・28	8－4層	砂岩	17018
546	穿孔具	C－3		6層	砂岩	30180
547	穿孔具？	B－4	13	8－5層	砂岩	11306
548	穿孔具	A－2	6	8－2層	砂岩	30094
549	穿孔具	B－3	9	8－3層	砂岩	30128
550	磨石	B－	20	8－4層	玢岩	10442
551	凹石	E－4	24	8－5層	安山岩	30164
Fig.146-552	磨石	B－4		8－3層	安山岩	30116
553	凹石	B－3	17	8－3層	砂岩	30115
554	凹石	D－4	14	8～4層	角閃石	30146
555	磨敲石	B－3	32	8－2層	石英閃緑玢岩	1976
556	凹石	B－3	19	SK－11		30042
Fig.147-557	大型円盤状石器	A－2	6	7－2～8－2層	結晶片岩	2363
558	大型円盤状石器	B－4	33	8－2層	結晶片岩	17127
559	石錘	C－3	3	8－3層	安山岩	30118
560	石錘	E－4	25	8－5層	砂岩	17276
561	砥石	B－4	35	8－4層	砂岩	10997
Fig.148-562	砥石	D－4	22	8－2層	砂岩	30100
563	砥石	E－4	25	8－4層	砂岩	30154
564	砥石	D－4	23	8－4層	砂岩	17113
565	砥石	E－3	2	7－2～8－1層	砂岩	30081
566	砥石	B－3	10	8－2層	砂岩	1071
567	砥石	B－4	19	8－4層	砂岩	10288
568	砥石	C－3	12	8－3層	砂岩	17005
569	砥石	D－3	11	7－1層	砂岩	30065
570	砥石	C－3	15	7－2層	砂岩	4412
571	砥石	C－3	8	7－2～8－2層	砂岩	6108
572	砥石	B－4	8	8－5層	砂岩	11388
Fig.149-573	砥石	E－4	31	8－2～8－3層	砂岩	17175
574	砥石	C－3	4	8－3層	砂岩	4790
575	砥石	C－4	35	8－2層	砂岩	30099
576	砥石	C－3		6層	砂岩	30182
Fig.150-577	砥石	D－4	29	8－4層	砂岩	17114
578	紡錘車	C－3	1	7－2～8－1層	結晶片岩、未成品、重量18.9 g	30075
579	紡錘車	C－3	24	8－4層	結晶片岩、重量32.35 g	6000
580	紡錘車	B－3	9	7－2～8－2層	結晶片岩、重量16.2 g	1267
581	紡錘車	B－4	30	8－4層	結晶片岩、重量20.1 g	11040
582	紡錘車	B－3	29	7－2層	蛇紋岩、半欠、残存重量7.2 g	383
583	紡錘車	C－4	35	8－5層	結晶片岩、重量43.1 g	17116

Tab.4　第25次調査地点出土遺物一覧

Fig. 遺物No.	遺物 器種	地区 大区	小区	遺構 層位	遺物の特徴	遺物登録番号
Fig.150-584	紡錘車	E－3	8	7－1層	結晶片岩、一部欠損、残存重量30 g	30062
585	紡錘車	D－4	27	8－3層	結晶片岩、半欠、残存重量19.4 g	30124
586	紡錘車	C－3	21	7－2層	結晶片岩、半欠、残存重量16.8 g	5036
587	紡錘車	C－3		6層	結晶片岩、半欠、残存重量8.5 g	30178
Fig.151-588	紡錘車	D－4	21	8－2層	土製、重量33.75 g	30013
589	紡錘車	C－3	34	8－4層	土製、重量31.9 g	17009
590	紡錘車	C－3	9	7－2～8－2層	土製、重量23.9 g	6325
591	紡錘車	E－4	32	8－4層	土製、重量21.8 g	30027
592	紡錘車	C－3	7	7－2層	土製、重量16.7 g	4052
593	紡錘車	D－3	2	7－1層	土製、重量39.1 g	30005
594	紡錘車	A－4	30	8－5層	土製、重量23.35 g	10013
595	紡錘車	C－3	2	8－3層	土製、重量15.9 g	17008
596	紡錘車	C－3	12	7－2層	土製、半欠、残存重量14.2 g	5779
597	紡錘車	D－2		6層	土製、半欠、残存重量8.85 g	30004
598	紡錘車	E－3	1	8－3層	土製、半欠、残存重量16.2 g	17152
599	紡錘車	B－4	35	8－2層	土製、半欠、残存重量10.8 g	30010
600	紡錘車	B－3	2	8－4層	壺の底部破片の周縁を打ち欠き、穿孔.重量20.05 g	30025
601	紡錘車	B－4	19	8－5層	甕の胴部破片を利用.穿孔途中.重量12.15 g	30028
602	土器片利用円盤	B－4		8－3～8－4層	壺の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量28.2 g	30023
603	土器片利用円盤	B－3	12	8－3層	壺の胴片を利用.周縁を打ち欠きのみ.重量32.7 g	30016
604	土器片利用円盤	B－4	34	8－5層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量29.5 g	17004
605	土器片利用円盤	B－3		8－4層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量49.2 g	30024
606	土器片利用円盤	B－4	29	8－4層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量29.1 g	10948
607	土器片利用円盤	E－4	20	8－4層	壺の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量22.1 g	30026
608	土器片利用円盤	C－4	27	8－3層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量20.6 g	30020
609	土器片利用円盤	E－4	19	8－5層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量29.9 g	30030
Fig.152-610	土器片利用円盤	D－3	4	8－2層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量23.7 g	30012
611	土器片利用円盤	C－3	5	8－3層	壺の胴片を利用.周縁を打ち欠きのみ.半欠.重量9.4 g	17012
612	土器片利用円盤	D－4	27	8－2層	壺の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量19.8 g	30014
613	土器片利用円盤	E－3	20	7－1層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量9.4 g	30007
614	土器片利用円盤	D－4	11	8－5層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量19.25 g	20659
615	土器片利用円盤	D－3	4	7－2～8－1層	鉢の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量8.7 g	30008
616	土器片利用円盤	D－4	28	8－2層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量8.2 g	30015
617	土器片利用円盤	C－4	33	7－2～8－2層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量8.45 g	3141
618	土器片利用円盤	D－3	6	8－3層	甕の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量6.6 g	30022
619	土器片利用円盤	D－3	3	8－2層	壺の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量37.7 g	30011
620	土器片利用円盤	C－3	5	8－4層	壺の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量20.3 g	20657
621	土器片利用円盤	C－4	30	8－4層	壺の胴片を利用.周縁を打ち欠き擦る.重量14.1 g	20658
622	投弾	B－3	13	7－2～8－2層	土製、重量8.2 g	1623
623	投弾	C－3	2	8－3層	土製、一部欠損、残存重量7.5 g	4943
624	投弾	B－3	26	7－2～8－2層	土製、重量11.1 g	1467
625	投弾	B－4	29	7－2～8－2層	土製、重量32.65 g	34
626	投弾	B－4	11	8－5層	土製、重量30 g	10838
627	投弾	C－3	4	8－3層	土製、両端部を欠損、残存重量19.75 g	30018
628	投弾	C－3	4	8－3層	土製、重量19.4 g	30019
629	投弾	B－3	1	8－5層	土製、一部欠損、残存重量9.95 g	12305
630	投弾	E－3	1	7－2～8－1層	土製、重量13.1 g	30009
631	土錘	D－3	2	8－3層	管状の土錘で、重量83.6 g	30021
Fig.153-632	有孔円盤	C－3	6	8－3層	用途不明の土製品.2孔1組の焼成前の穿孔が2ケ所あり	17006
633	つまみ付き円盤	B－4	36	8－3層	土製円盤、紐孔状の孔痕のあるつまみをもつ、重量18 g	30017
634	土製品	C－3	10	7－2～8－3層	用途不明の土製品破片、下端にヘラで切れ目を入れる	20655
635	鳩笛	D・E		6層	陶質の土笛	20656
Pl.12-636	板材			SK－10	板目、長さ124.8cm、幅20cm、厚さ3.1cm	18113
637	板材			SK－10	斜め木取り、残存長47cm、幅20cm、厚さ3.7cm	18109
638	クサビ？			SK－10	柾目、幅14.8cm、長さ14.5cm、厚さ5.4cm	20099
Pl.14-639	加工樹枝			SK－11	半截の割り材の一端を削る。残存長16.3cm	20199
640	割材			SK－11	ミカン割り材、残存長32.2cm、幅3.6cm、厚さ1.5cm	20100
641	板材			SK－11	柾目、残存長32.5cm、幅5cm、厚さ0.9cm	20083
642	伐採木			SK－11	残存長43cm、一端は焼け焦げ	20224
Pl.15-643～647				SK－12	Tab.1参照	
Pl.16-648	樹皮			SK－15	桜.円筒状に巻いてあった。長さ28cm	20059
Pl.18-649	有刺棍棒	C－4	25・26	8－4層	ミカン割り材を利用、残存長36.5cm	19514

第6章　第26次調査地点

1．調査の概要

去る1988年5月17日、埋蔵文化財課に対して、見上株式会社より、博多区博多駅南3丁目58番地における埋蔵文化財の事前審査願いが提出された。これを受けた当課では、該地が比恵遺跡群に包括されることから、試掘調査の必要があると判断し、双方協議のうえ同年6月7日に試掘を実施した。その結果台地上の遺構は希薄であったが、該地の南の隣接地で実施された第4次調査の結果も踏まえ、谷部の包含層に主眼を置いた調査が必要とされた。このため、調査面積400m²を調査対象とし、1989年8月7日より同年9月31日までの約40日間調査を実施した。調査は、8月下旬の例年にない長雨に悩まされながらも、見上株式会社及び関係各位の協力を得て、無事終了することができた。ここに感謝の意を表します。

調査区は、比恵遺跡群の立地する洪積世台地の北部にあたり、その最も北に延びた幅80mの舌状の台地の西北端に位置している。調査の結果、調査区の西側は台地が落ちる谷際にあたり、遺物包含層を形成していた。また、台地上は後世の水田化に伴い、かなり削平を受けているが、遺構の残りは想像以上によく、弥生時代前期後半を中心とする集落遺跡の一端を復元するのに好材料を与えてくれた。台地上の遺構の拡がりや谷部の包含層の状況を追及するため調査も後半に至って、調査区を拡張して、II区（12m²）とIII区（40m²）を設けた。

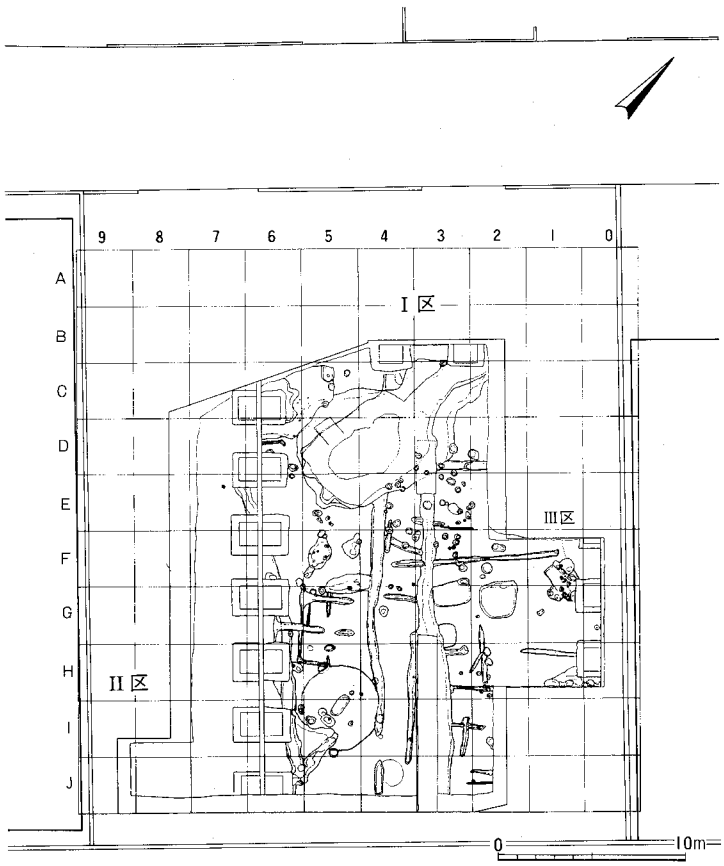


Fig.154　第26次調査地点グリット配置図　（縮尺 1/400）

調査区に敷地の主軸方向にあわせて3m間隔でグリッドを設定した。南北方向を

北からA~J、東西方向を東から0~9とし、その組み合わせで呼称した（Fig.154）。包含層は東方向を上とし、左から1~3の、その下段を4~6の、その上段を7~9の1m²ずつの小区分とし（Fig.173）、それぞれの小区分を単位として遺物の取り上げを行った。

主な遺構としては、中世の溝1条、弥生時代終末以降の溜池1基、弥生時代前期の住居址2基、貯蔵穴3基、溝4条、土壙1基、柱穴多数がある。包含層中に木器貯蔵遺構があった。出土遺物には、多量の土器や石器類のほか、笊、竪杵、容器などの木製品、銅鏃などがある。

調査にあたっては、山口譲治氏、田崎博之氏、横山邦継氏、池田祐司氏、長家伸氏らの多大な御協力を得た。また、出土遺物の分析に際して、名古屋大学渡辺誠先生、中村俊夫先生に御尽力頂き、その結果を本報告書に掲載させて頂いた。記して感謝の意を表します。

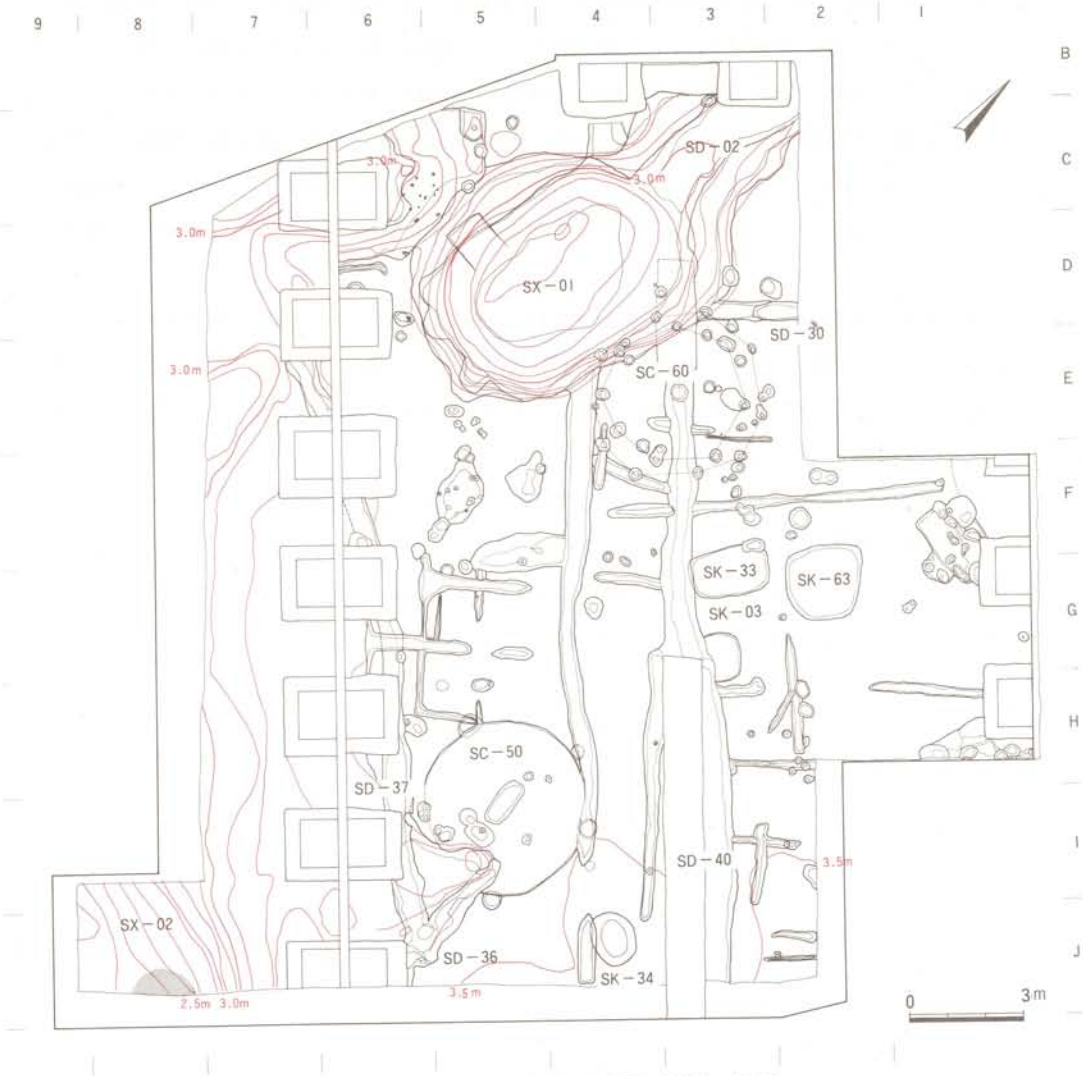


Fig.155　第26次調査地点遺構分布図（縮尺 1/200）

2．調査の記録－台地部－

1）　溜池・溝

SX-01 (Fig.156～161)

調査区の北部C～E-3～5区で検出した溜池と思われる遺構で、SD－02と連結する。形態は7×6mの不整楕円形で、検出面からの深さは約90cmである。二段掘り状に掘り込まれており、二段目の平面図は隅丸の長方形である。覆土は上からシルトと粘土から成る水成層で、間に粗砂の層を含む部分もあるが、比較的穏やかな堆積環境であったと思われる。灰褐色や青灰色から構成され、しかもSC－60や弥生時代前期後半の暗茶褐色の包含層（Fig.157.11層）を切り込んでいるため、それ以降の遺構であろう。最上層からは土師器の坏と思われる破片も出土しているが、出土土器は量的な違いはあるものの弥生時代の前期から終末までのものが存在している。このため遺構の形成時期を確定できなかった。また、SD－35や40との切りあい関係をつかめなかったことも時期決定を困難にした一因であった。しかし、第4次調査の「クリーク状遺構」と形状が似ていることから、中期後半に掘削されたという見解は、本遺構の時期決定の参考になろう。

最下層の暗灰褐色粘土層からは、多量の木枝とともに木製品や石器、前期後半を主体とする土器片が出土した。SD－02との境付近には弥生時代終末の土器片などもわずかに含まれており、底面近くから出土した笊は年代の決め手に欠くため、C14年代測定を実施した。この笊の分析と年代測定の結果については第9章に報告がある。

Fig.156はD-4-4区10層から出土した銅鏃である。検出時には粘土層中にパックされた状態のため、赤銅色に輝いていた。

土器には甕形土器、壺形土器などの底部を中心として、コンテナ1箱ほどの出土がある。代表的なものを図示した（Fig.158）。2～9は壺形土器である。2･3･5はヘラ状工具で複線の平行沈線文とその間に山形文を施している。3はそれに重弧文を組合わせている。10～16と21は甕形土器である。19・20は小型の鉢形土器で、20には口唇部に刻目を施す。18は蓋、22は高坏である。出土土器の主体は前期中葉から末にかけてのものであるが、10の夜臼式の甕形土器、中期後半の逆L字口縁をもつ甕形土器、16の甕形土器と23の脚付鉢などの終末期の土器のように各時期の土器が混在している。

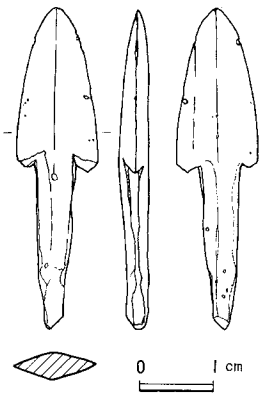


Fig.156　第1号溜池（SX-01）出土銅鏃実測図（縮尺 実大）

石器は遺構のなかで最も多く出土している。内訳については包

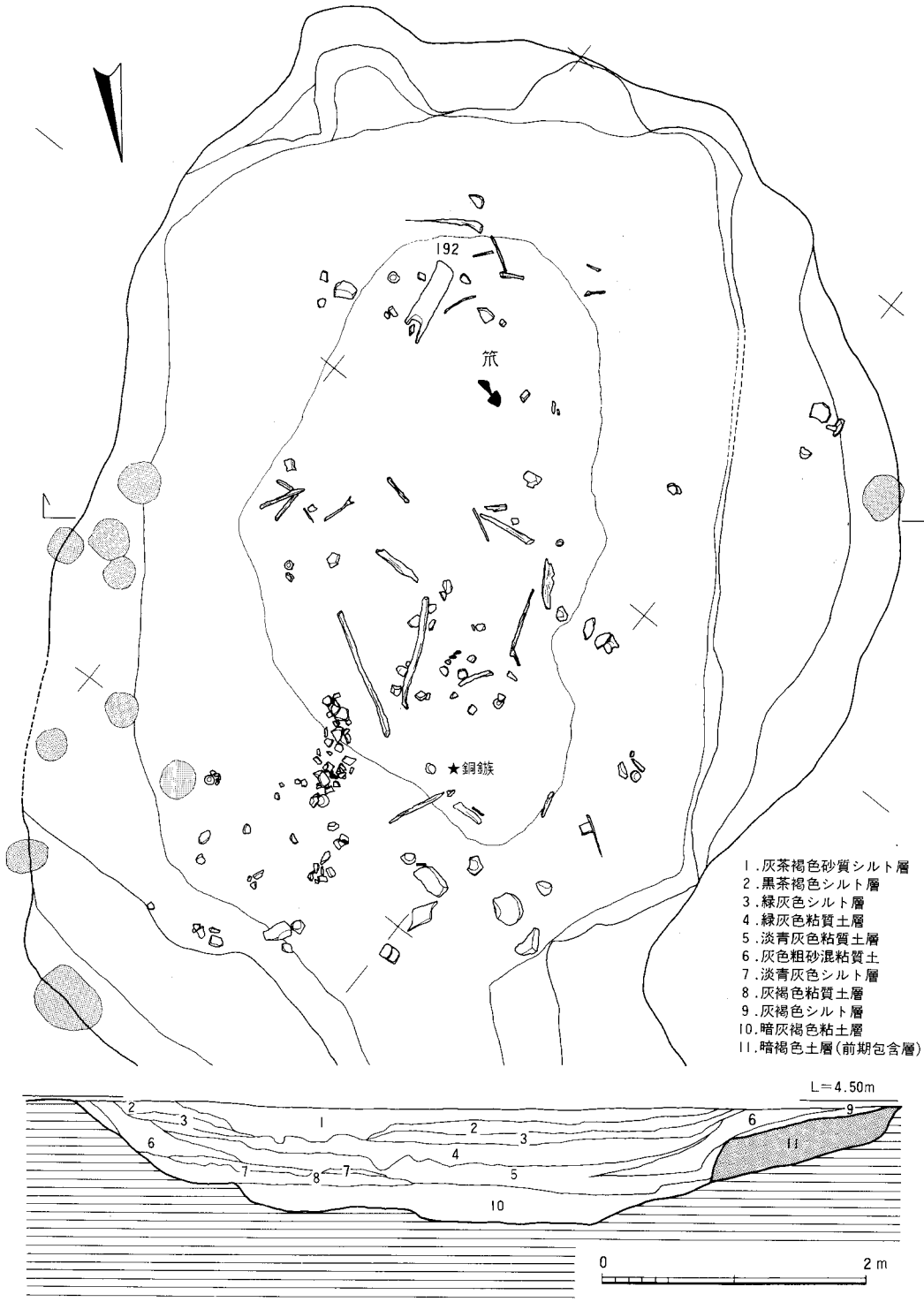


Fig.157　第1号溜池（SX-01）実測図（縮尺1/50）

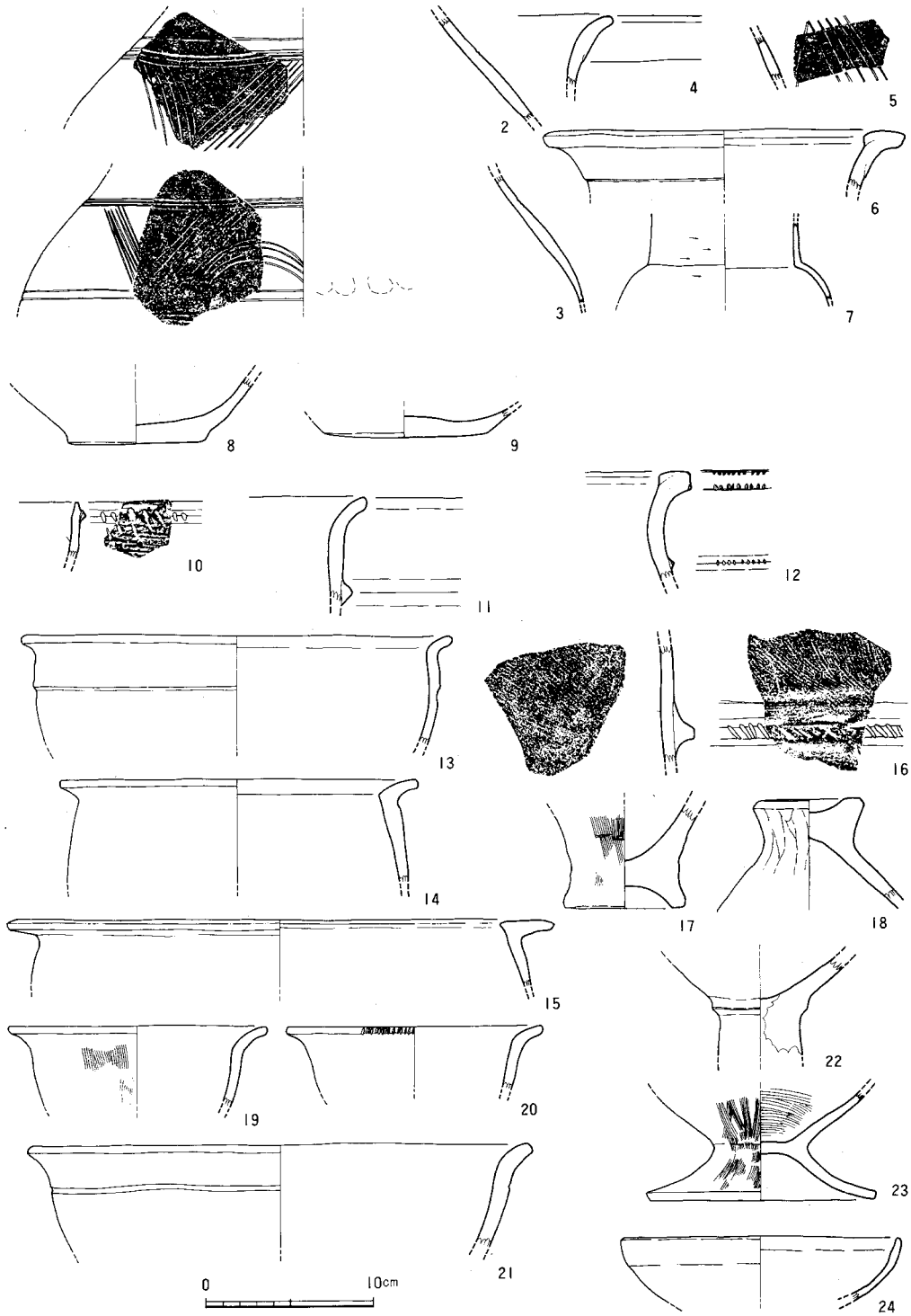


Fig.158　第1号溜池（SX－01）出土土器実測図（縮尺1/4）

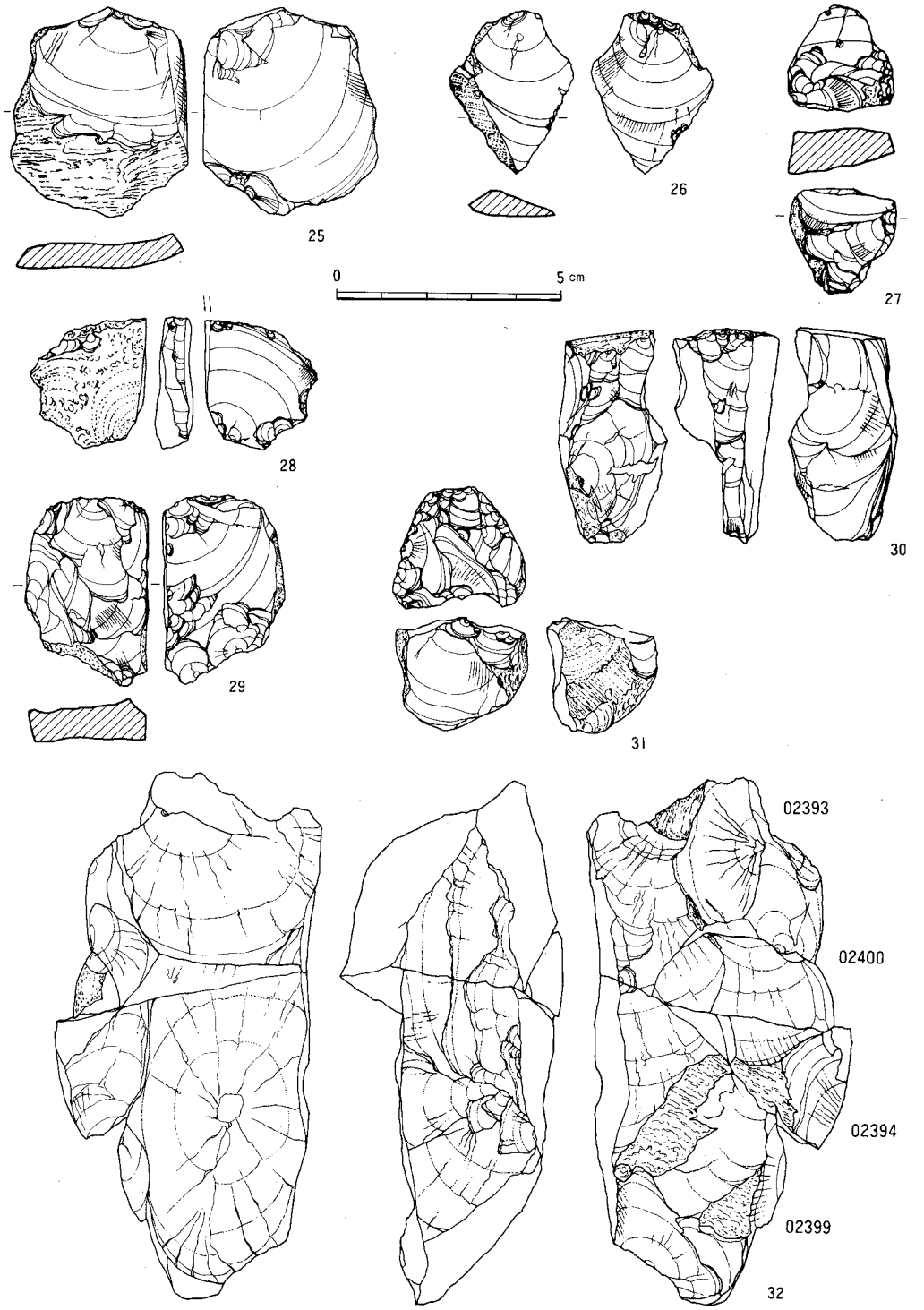


Fig.159　第Ⅰ号溜池（SX－01）出土石器実測図　Ⅰ（縮尺2/3）

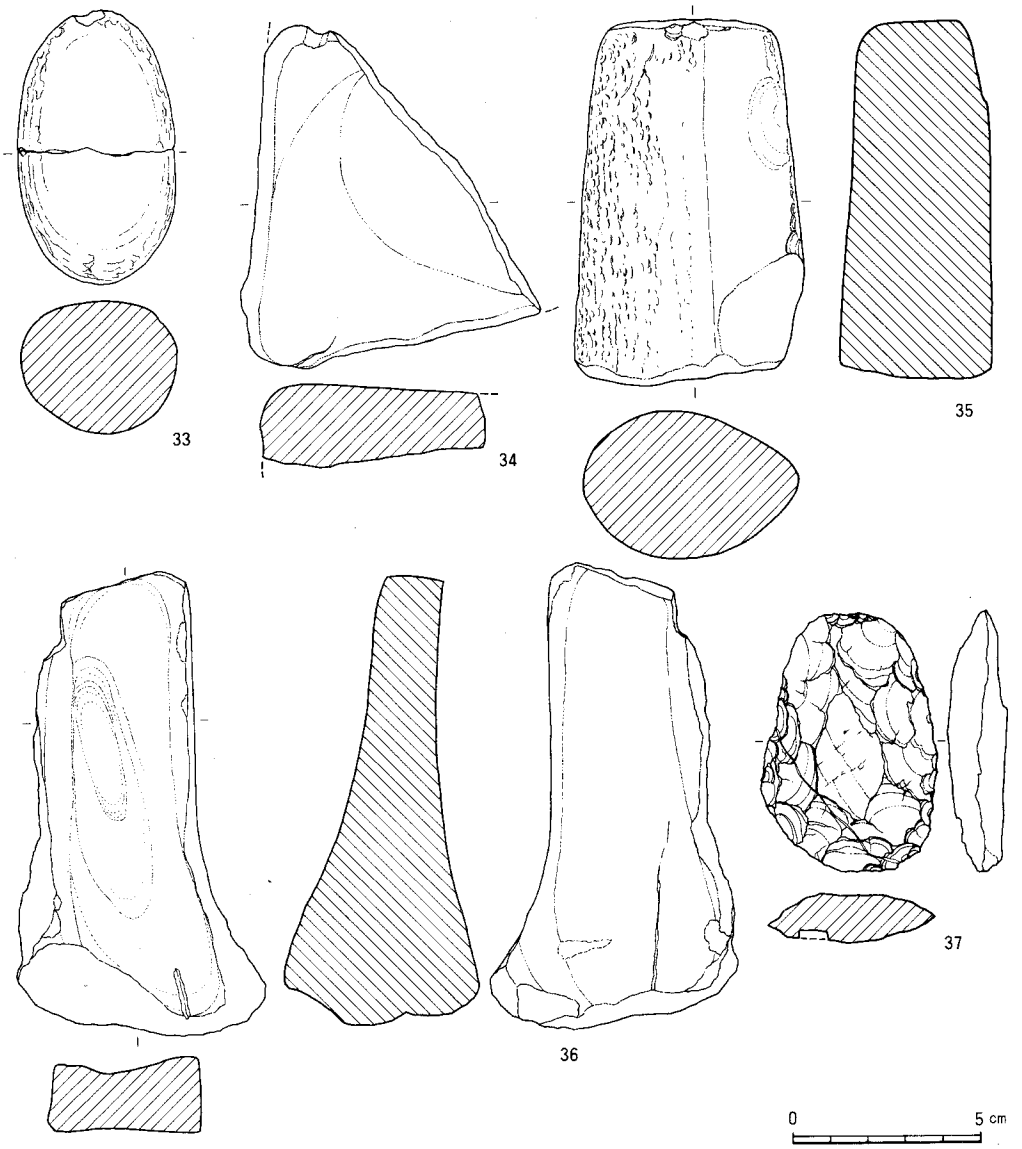


Fig.160　第１号溜池（SX－01）出土石器実測図　2　（縮尺1/2）

含層出土の石器の項に一括して掲載した。石器の種類としては、石剣、石庖丁、石鎌、石斧、磨石、凹石、砥石、その他の磨製石器の製作剥片や欠損品がある。とくに玄武岩や安山岩の礫や剥片が量的に多く、それを加工した石器などもある。これらの石器はこれまであまり注目されていなかったが、用途不明の石器として扱われたものもある。周辺の剥離で刃部らしきものを形成するが、磨耗しているものが多い。剥片石器としては黒曜石の剥片が最も多く、使用痕（Fig.159－25・26）や加工痕のある剥片（29）がこれに次いでいる。他に彫器（28）と楔形石

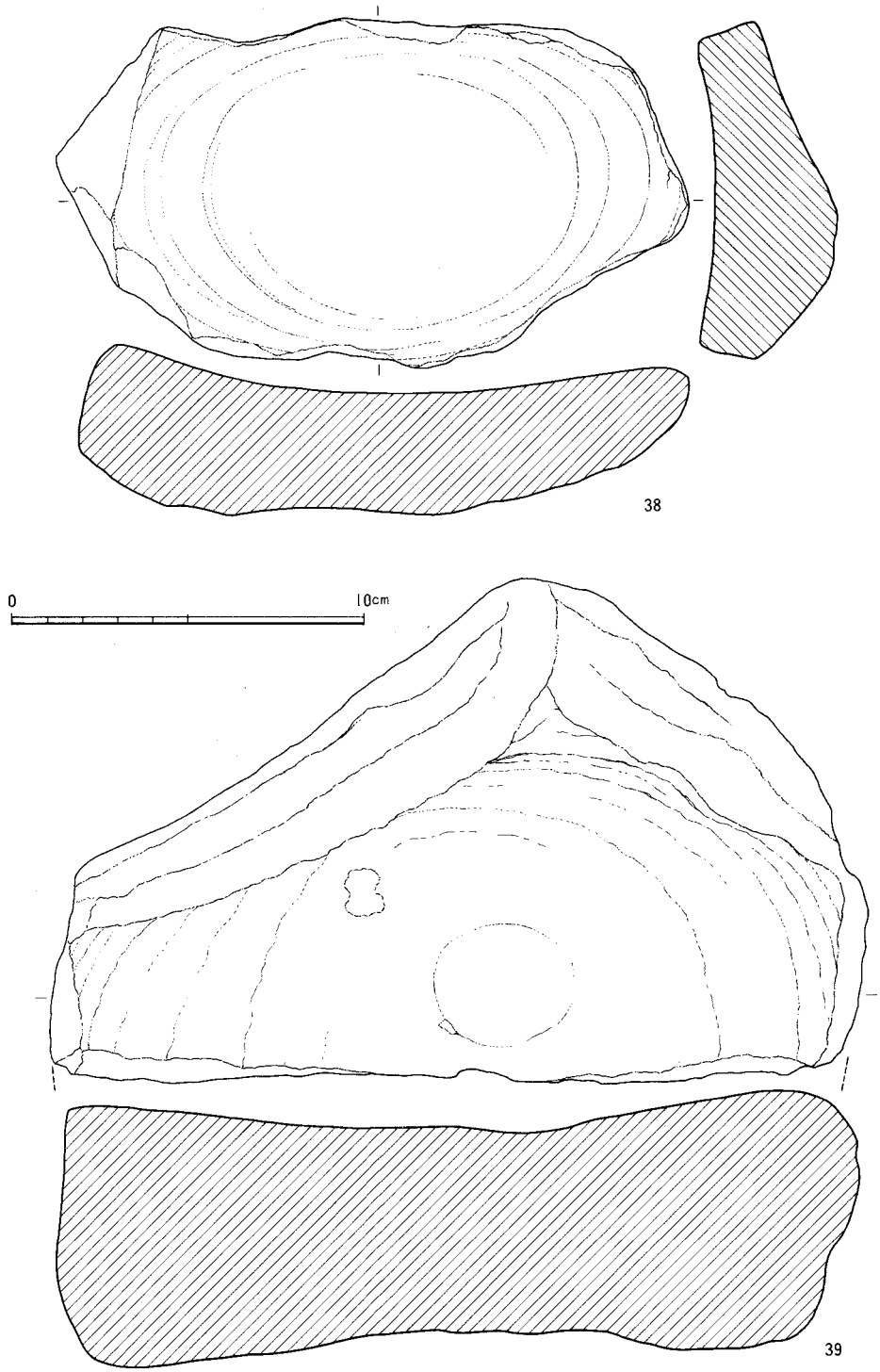


Fig.161　第1号溜池（SX－01）出土石器実測図　3　（縮尺1/2）

器（27）がある。32はサヌカイト製の石核で前面に剥片剥離面を残しているが、分割されて廃棄されている。4点のうち1点はSD－02出土である。同じ個体と思われる破片が他に4点出土している。

木製品には、樋状製品、鋤柄などがある（Fig.180－192・189）。192は木の幹を半裁した後、内部をくり抜いたもので、外側の樹皮は残している。類例は那珂君休遺跡の第4次調査にある。

SD－02（Fig.155・162）

SD－01に流れ込む幅4m、深さ40cmほどの溝である。北側への拡がりは不明である。SD－01から外へ流れ出た痕跡は認められない。覆土は上層の青灰色粘土と下層の赤褐色粗砂層である。

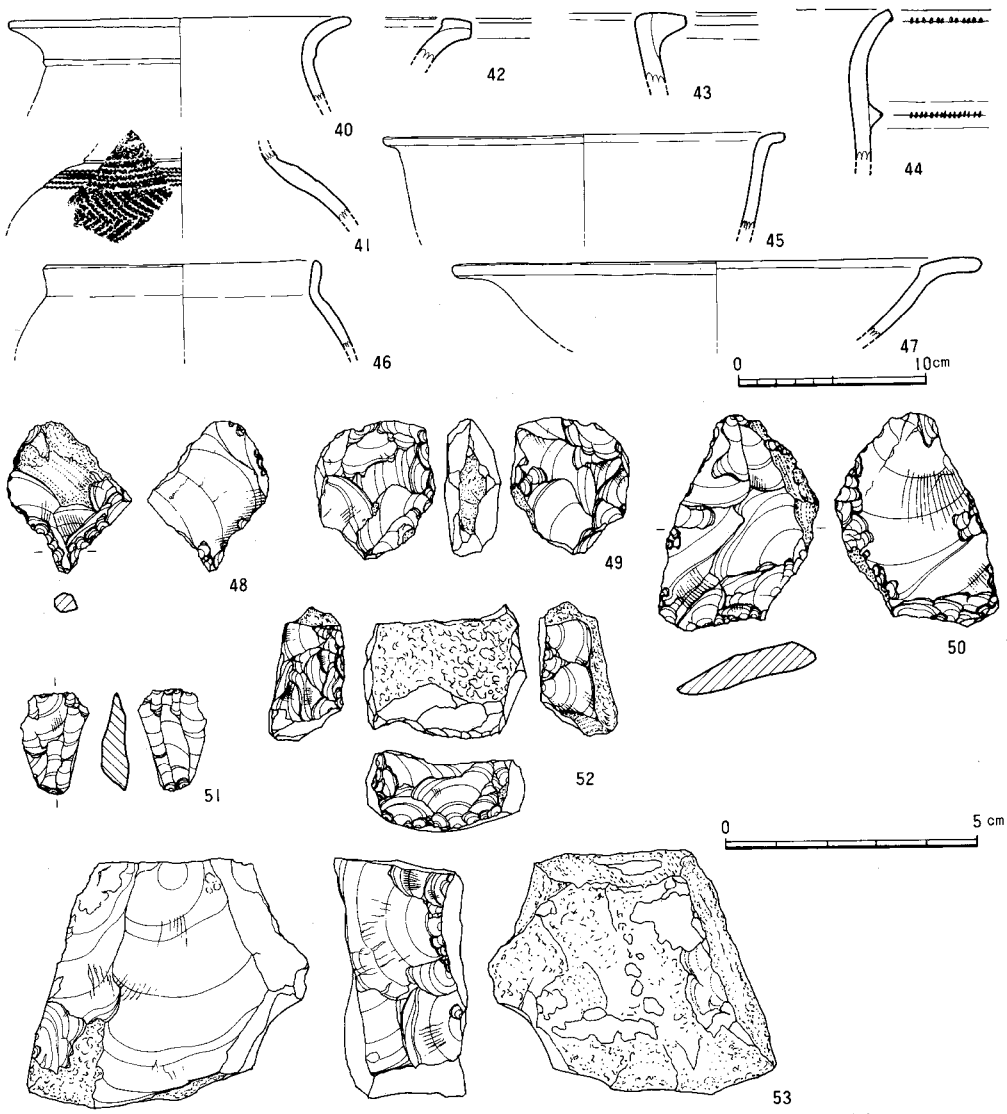


Fig.162　第2号溝（SD－02）出土遺物実測図（縮尺40～47；1/4　48～53；2/3）

出土土器には壺形土器（Fig.162－40～42.46）、甕形土器（43～45）、高坏形土器（47）がある。41の肩部には貝殻腹縁による施文がある。弥生時代前期前葉から後期にかけてのものが出土している。石器には、石剣、石庖丁、石斧、砥石、磨石などの破片の他、剥片石器として黒曜石製の錐（48）、両面加工品（49）、楔形石器（51）などがある。52は直方体の原石の3側面に剥離を加えたものである。

SD－01に連結することから、同時期の遺構と考えられる。

SD－35（Fig.163）

4区を南北に流れる水路で、F・G-4・5区の取排水口と思われる遺構と連結している。SD－01の北側へ続くが、切りあい関係は不明であった。覆土は青灰色に近い土で、断面は逆台形を呈する。幅70cm、深さ10cmを測る。

出土土器には成人用甕棺胴部片の他、若干の前期を中心とした弥生式土器がある。

SD－50を切っており、水田用の水路であることなどから、弥生時代以降の所産であると考えられるが、明確な時期はおさえ難い。

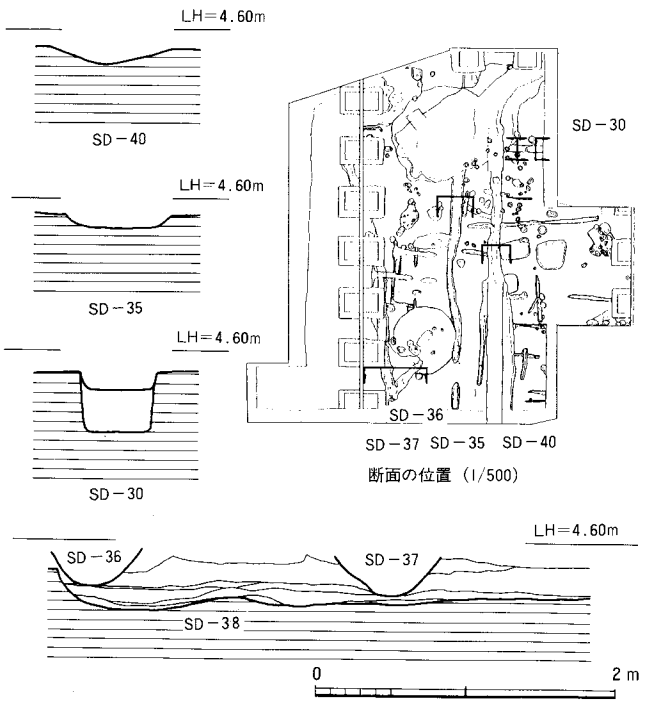


Fig.163 溝（SD－03・05・36・37・40およびSD－38）土層断面図（縮尺1/50）

SD－40（Fig.163・164）

3区を南北に流れる水路で、幅80cm、深さ15cmを測る。断面三角形を呈する。SD－01との切りあいは不明である。弥生式土器に混じって近世の陶器片がわずかながら出土している。しかし、位置的には第4次調査地点で検出された「小溝状遺構」に連なる。この小溝は、出土した瓦器碗より11～12世紀とされている。

Fig.164の55と56は成人用甕棺の口縁部の破片である。中期後半に比定される。

SD－30（Fig.163・164）

D-2・3区にある幅50cm、深さ10～40cmの断面方形の溝である。方

向は東西で一段深くなっている。覆土は暗茶褐色で、弥生式土器を含む。

Fig.164・54は弥生時代前期後葉の甕形土器の底部である。出土土器から弥生時代前期後葉の遺構と考えられるが、ほぼ同じ時期のSC－60の柱穴（M56）を切ることから、住居址より新しいものであろう。

SD－36・37 (Fig.163・164)

黒褐色を呈する覆土をもつ溝で、36号溝はSC－50（住居址）を切っている。37号溝は、南から北方向をとり、谷の落ち際に沿うように掘削されている。断面形はいずれもU字形で、幅70cm、深さ20cmほどである。

Fig.164－57は壺形土器の底部である。58と59は甕形土器で、59はいわゆる亀ノ甲タイプの口縁部片である。62は蓋のつまみ部の破片である。いずれも弥生時代前期後葉に比定できよう。

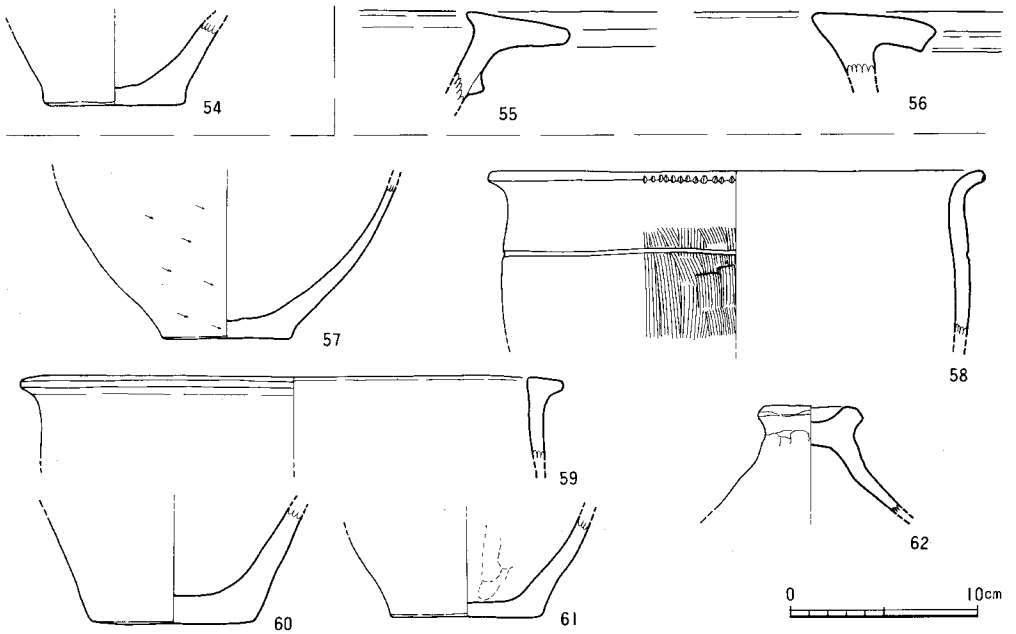


Fig.164　第30・37・40号溝（SD－30・37・40）出土土器実測図（縮尺1／4）

2)　竪穴式住居址

SC－50 (Fig.165・166)

H・I-4～6区にある円形の竪穴住居址である。直径4.3mほどの正円形の外側の5個所に柱穴をもち、内部に2本の主柱穴とその間に幅55cm、長さ130cmの炉跡を設ける構造である。2本の主柱穴以外は、炉、壁、柱穴とも削平が著しいため約5cmほどしか残っていなかった。南側の一部が

侵食により壊れている。内部からは、多量の黒曜石と若干の土器片が出土した。外側の柱穴のうち42号ピットからは土器片と刃部を破損した石斧1個（Fig.166－80）が出土した。

Fig.166－63は壺形土器の口縁部破片である。頸部の付け根に沈線を巡らす。外側は丹塗り磨研を施す。64は深鉢形土器の口縁部の細片である。65～69は如意形口縁の甕形土器あるいは鉢形土器の口縁部破片である。70は高坏の口縁部破片である。上面に薄く粘土を貼付して肥厚させる。71は壺の底部破片で、2cmほどの太さの粘土紐を渦状に巻いて成形している。

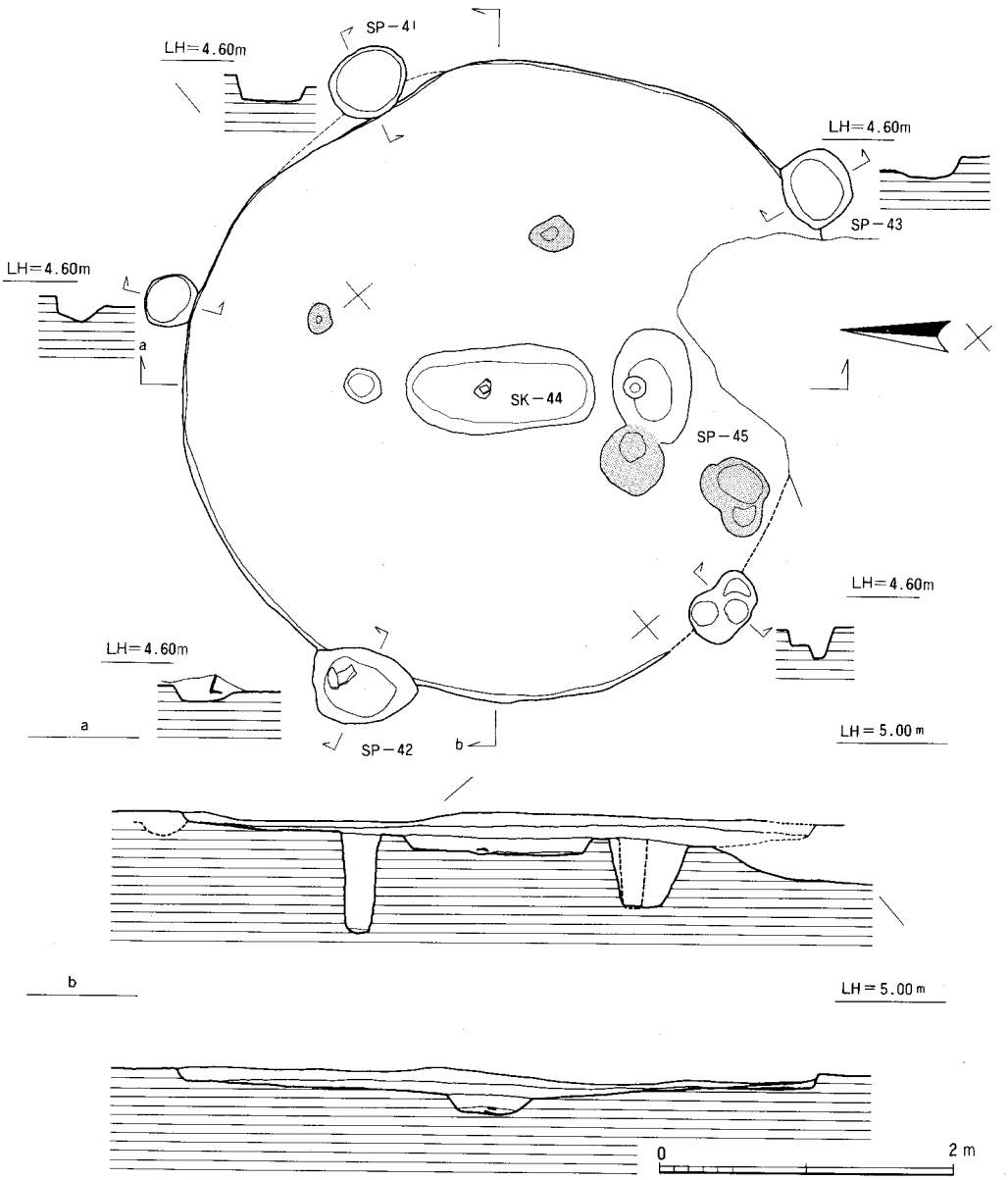


Fig. 165　第50号竪穴住居址（SC-50）実測図（縮尺1/50）

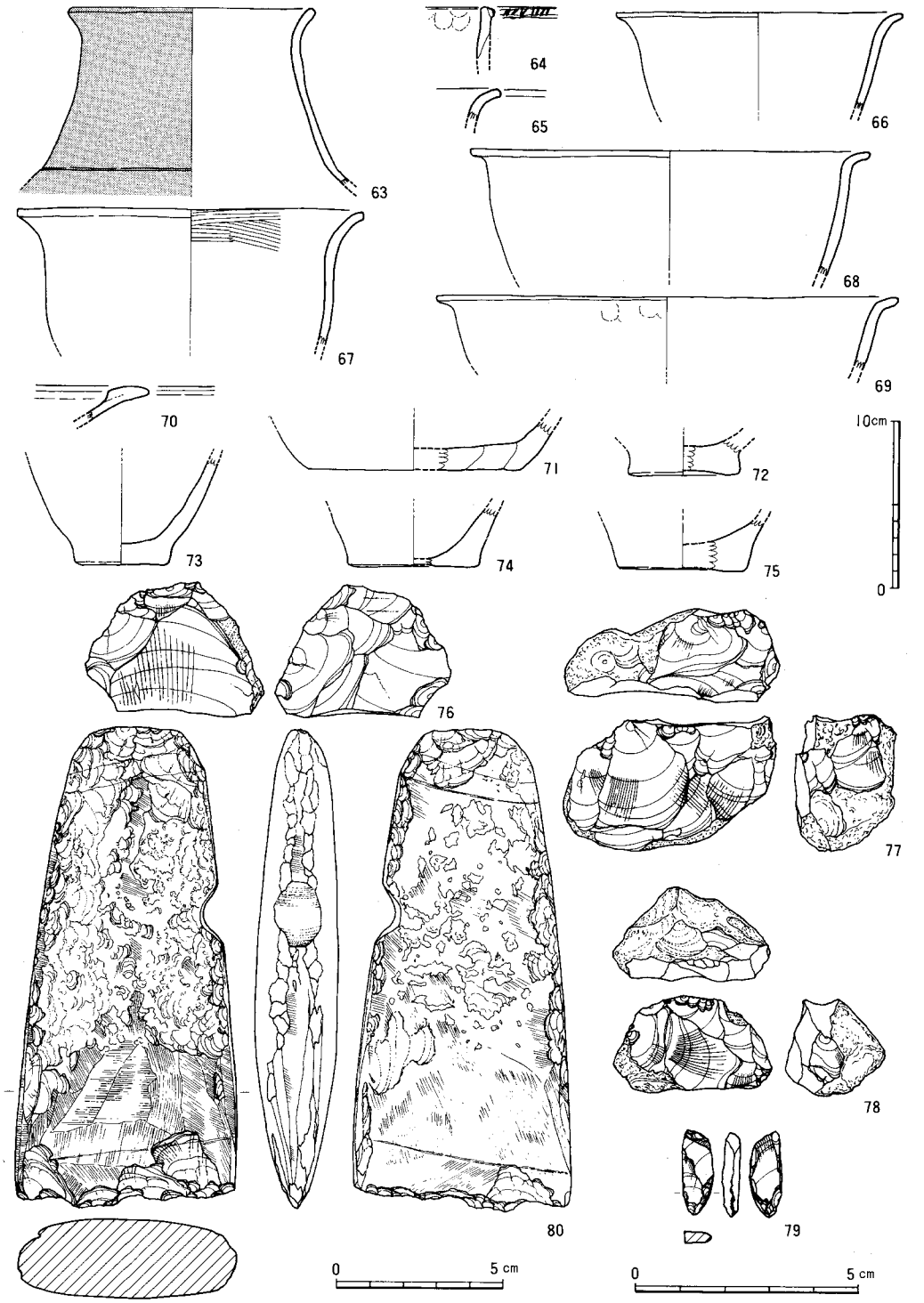


Fig.166　第50号竪穴住居址（SC－50）出土遺物実測図
（縮尺63～75；1/4、76～79；2/3、80；1/2）

磨製石器としては、石斧片、砥石などがある。80の石斧は胴から頭部にかけて敲打痕を残しあまり研磨していない。柄に装着する際の摩擦抵抗を大きくするためであろう。また、緊縛のため一側面に抉りをいれて丁寧に研磨している。黒曜石製の剥片石器は114点とSD－01に次いで多いが、これは分布図を作るために精査した結果、チップが多く検出されたためである。79は剥片の先端を加工したもので、一側辺に著しい擦痕を残している。

出土土器から弥生時代前期前葉の時期であろう。

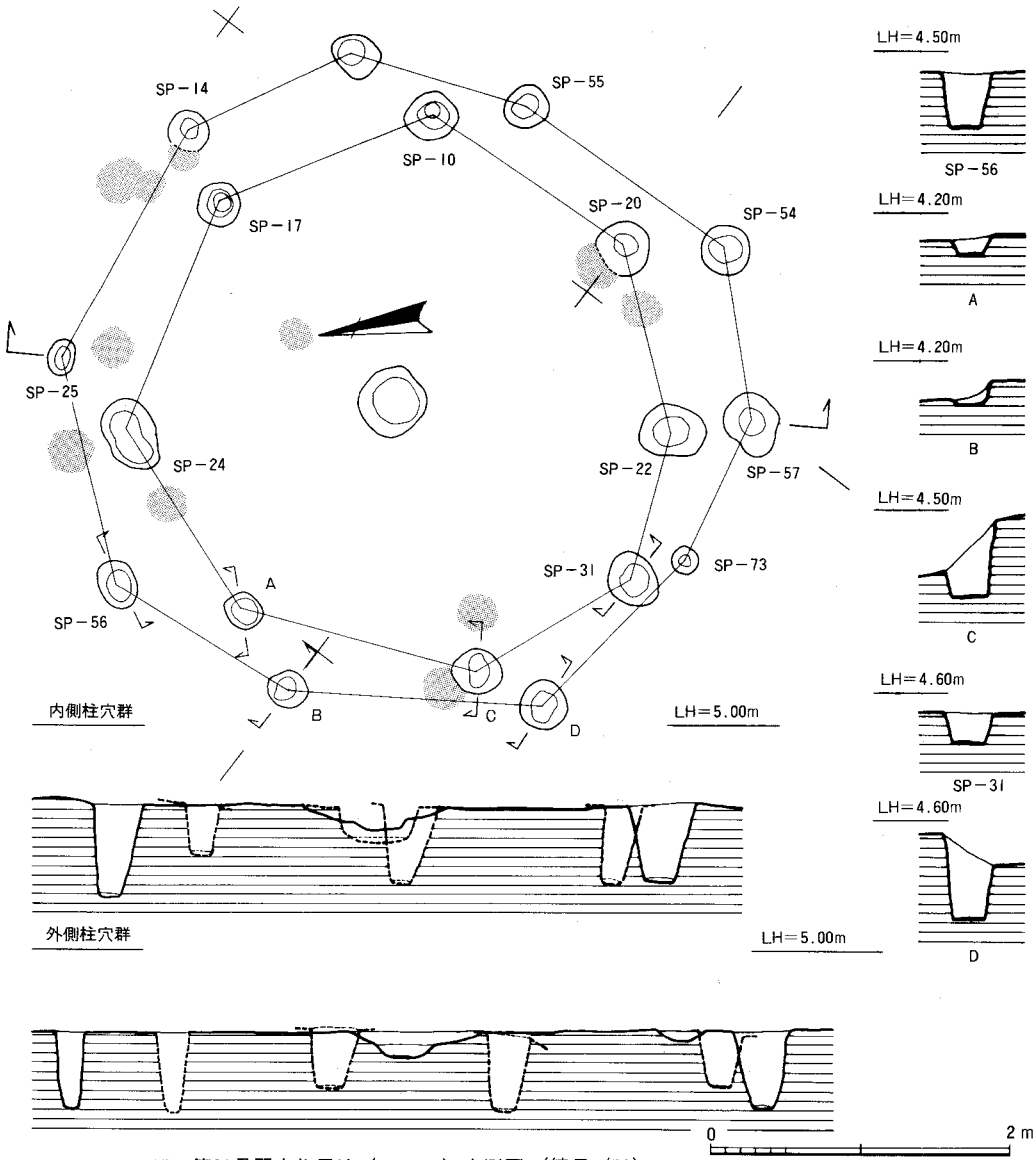


Fig.167　第60号竪穴住居址（SC－60）実測図（縮尺1/50）

SC－60 (Fig.167・168)

D～F-3・4区にある円形の竪穴住居である。削平のため柱穴と炉跡のみしか残存していない。炉を中心に取り巻くように8個の柱穴群とその外側に10個の柱穴群がある。この2つの柱穴群は炉を共有していることから、同時期に併存したか、建て換えの結果の両者の可能性がある。外側の柱穴群で直径約5mを測る。

遺物は各柱穴より出土したものを図化した。Fig.168－81・82は壺形土器の破片である。81は肩部にあたり、ヘラ状工具で羽状文を施文する。82は口縁内面に粘土帯を貼付して肥厚させている。83・84は甕形土器の口縁部片である。83は亀ノ甲タイプ、84は如意形口縁タイプのものである。底部には壺形土器（85）と甕形土器（86～89）のものがある。

石器には、紡錘車（90）と数点の使用痕・加工痕のある剥片がある。

遺構の時期は弥生時代前期後葉が考えられる。

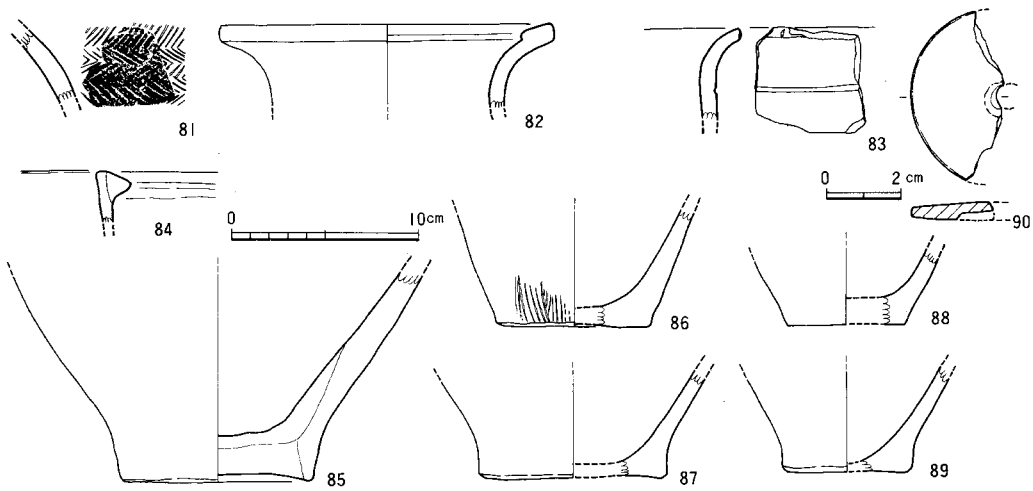


Fig.168　第60号竪穴住居址（SC－60）出土遺物実測図（縮尺81～89；1/4、90；1/2）

3）　土壙

SK－03 (Fig.169・170)

G・H-3区にある貯蔵穴と思われる土壙で、削平のため深さ10cmほどと残りが悪い。長さ1.3m、幅1.1mを測る。覆土は暗茶褐色土である。甕形土器の破片が出土している。

Fig.170－91は膨らみをもった胴部に如意形の口縁部がつく甕形土器の破片である。口縁下端に棒状工具で刻目を密に施している。弥生時代前期後葉のものであろう。

SK－33 (Fig.169)

SD－03の北側に隣接する貯蔵穴である。SD－03号と同じく残りが悪い。長さ2.1m、幅1.4m

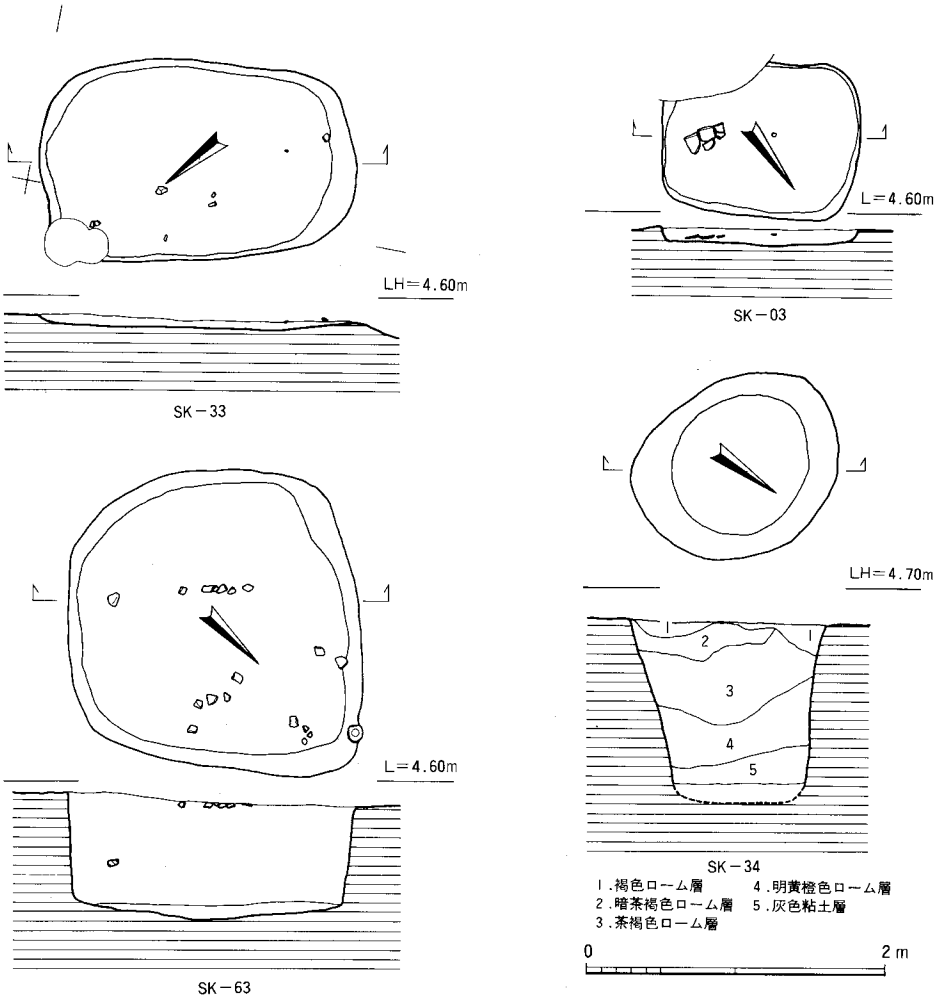


Fig.169　第3・33・34・63号土壙（SK－03・33・34・63）実測図（縮尺1/50）

を測る。覆土は暗茶褐色土である。土器はいずれも細片で図化できない。

SK－63（Fig.169・170）

F・G-2区にある隅丸方形を呈する土壙で、貯蔵穴と思われる。前二者に比べると残存状況は良い。長さ2.1m、幅1.9m、深さ0.8mを測る。覆土は暗茶褐色である。遺物は検出面、底より70cm上位に集中した状態で出土した。

Fig.170－92は如意形の口縁をもつ鉢形土器の細片である。93は甕形土器の口縁部破片で、如意形である。ヘラ状工具で刻目を密に施す。94は壺形土器の、95～97は甕形土器の底部である。97は焼成後に穿孔して甑としている。弥生時代前期中葉に比定できよう。

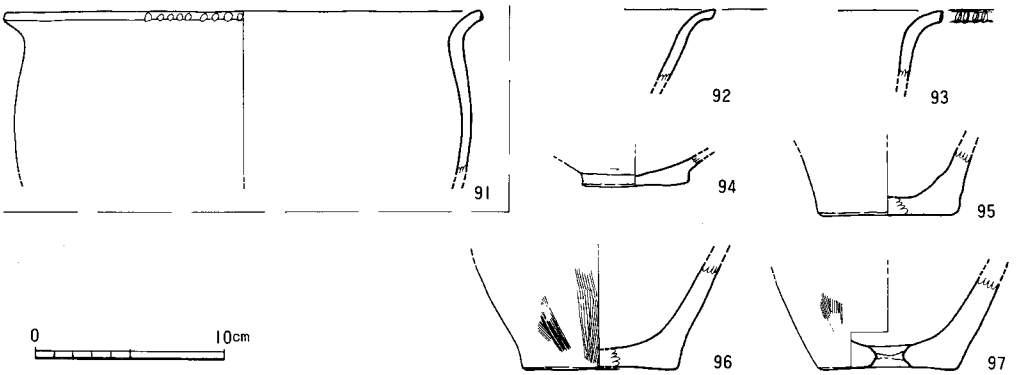


Fig.170　第3・63号土壙（SK－03・63）出土土器実測図（縮尺1/4）

SK－34 (Fig.169)

J-4区にある円形土壙である。当初井戸と考えたが、深さ1.3mと浅く、湧水層に達していない。用途不明。覆土は上部が暗褐色ロームで埋められ、最下層が灰色の粘質土である。平面形は1.2×1.0mの楕円形である。出土遺物は無い。

4)　その他の遺物 (Fig.171)

98は灰釉陶器である。やや外反する口縁部をもつ。99～101は黒曜石製の石鏃である。102は磨石で上下両面が使用によって平坦になっている。

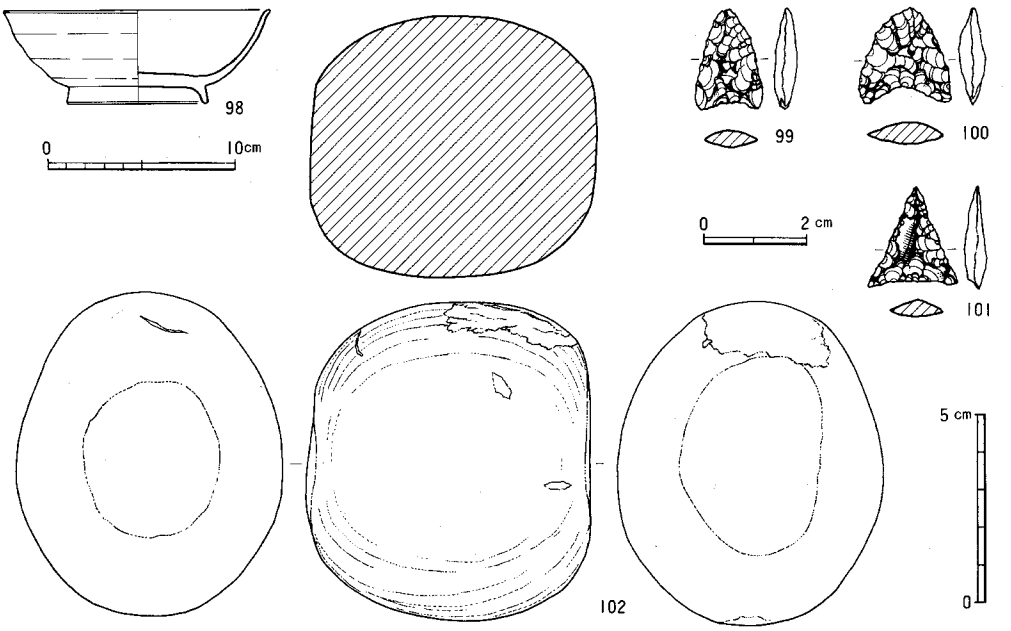


Fig.171　その他の遺物実測図（縮尺98；1/4、99～101；2/3、102；1/2）

3．調査の記録－包含層－

包含層は前項でも説明したように、6～7区を境として谷の落ち際があり、その傾斜部に堆積していた。7区は前期後葉から中期初頭の土器片が混在しており、明確に層位的な分離は不可能であった。そのためJ・I-8・9区の一部（II区）を拡張し、包含層の状態を観察することとした。包含層の堆積状況はFig.172の（1）に示したように旧水田土（①～③層）の下にわずかな傾斜を持ってほぼ水平に堆積している。遺物は⑦層以下まんべんなく出土するが、⑧層以下に個体の大きいものがめだった。⑩層中には人頭大の礫5個で囲んだ木製品および木材の貯蔵施設(SX－02）があった。ここからは完成の竪杵をはじめとする木製品や板材が出土した（Fig.173の（d）参照)。⑧～⑩層は第4次調査の低湿地6層、⑫層は同8～9層に相当すると考えられる。基盤は白黄色の八女粘土層である。第4次調査の低湿地9層に相当する黒色粘土層はII区の北と西の壁の土層の最下層に認められるが、第4次調査のように間層を挟んでいない。これは谷の落ち際の状況をあらわしており、谷のより深い部分では間層を挟む可能性もある。

第4次調査では間層である7層を境に前期と中期前半の土器が明瞭に分離されるとの見解であるが、本調査地点では層位によって出土土器の時期の分離は不可能であった。今回の調査では谷の深い部分では前期初頭の遺物がより下部から出土する傾向をもつが、⑧～⑩出土土器のほとんどは前期後半の時期におさまるもので、台地の落ち際部分において中期前半の土器が混じるといった状況であった。

以下、出土遺物について土器、石製品、土製品、木製品の順に概要を述べる。

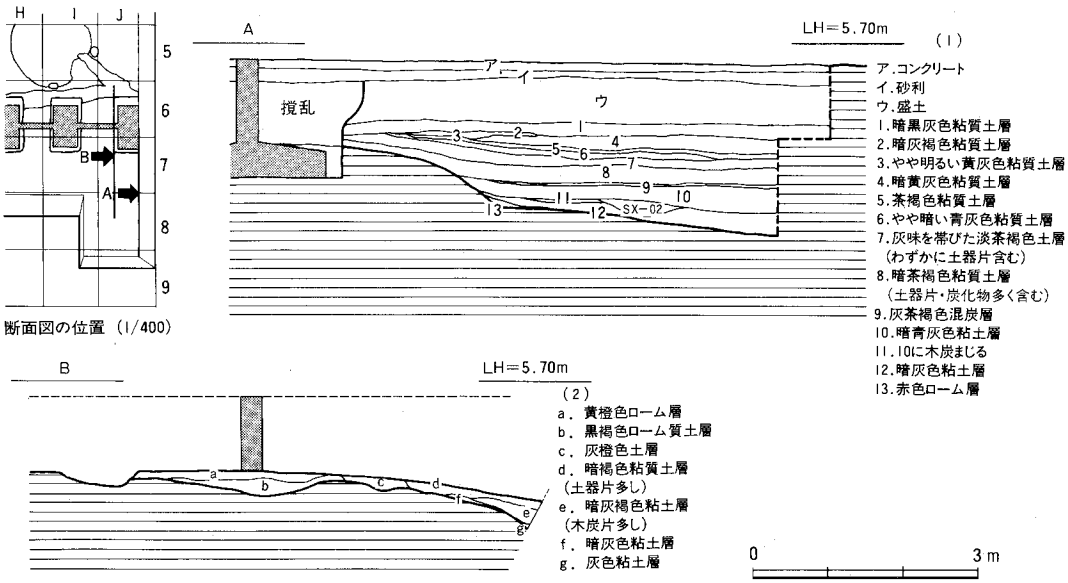
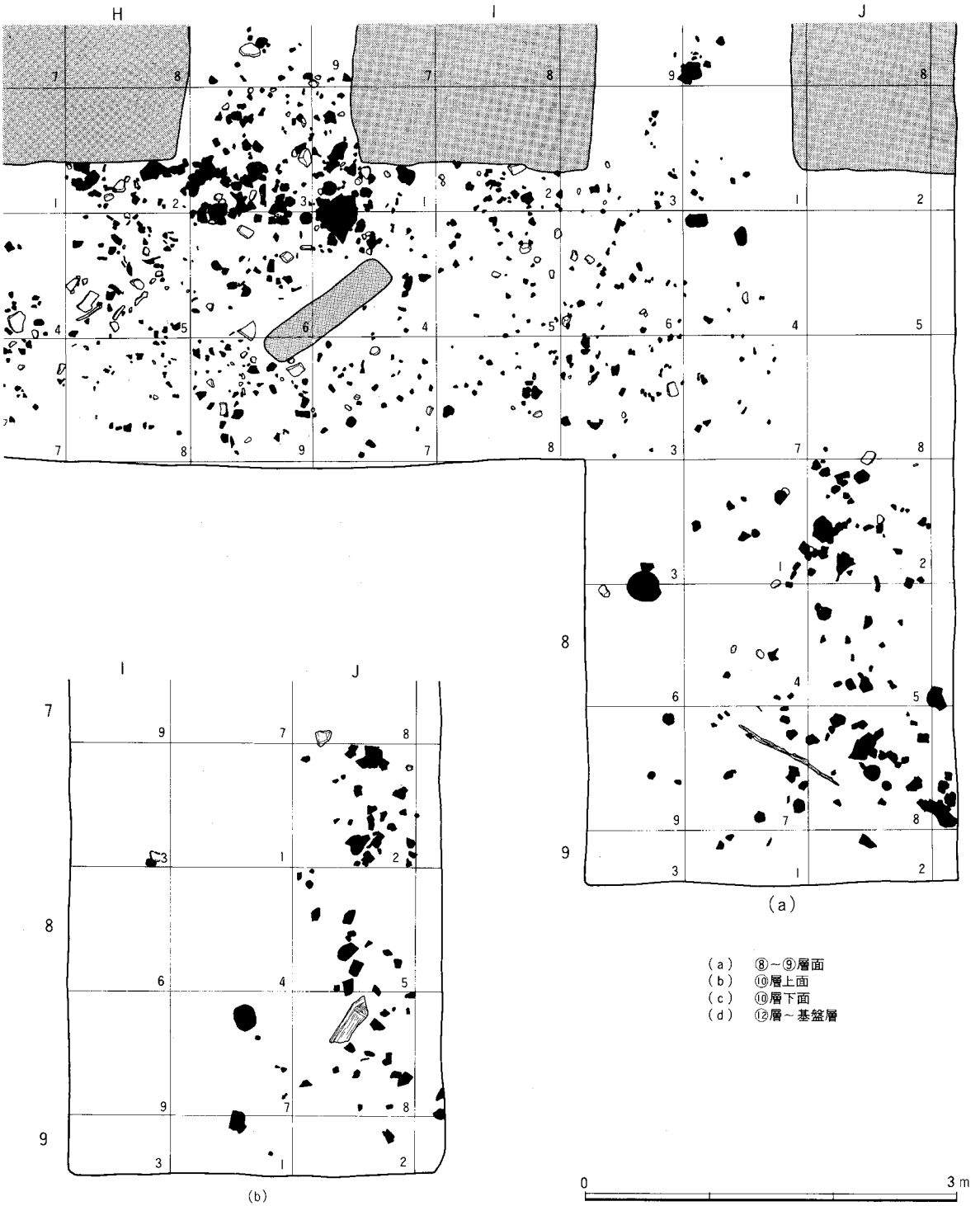


Fig.172　谷部包含層土層断面実測図（縮尺1/100）

Fig.173　谷部包含層遺物出土状況実測図（縮尺1/50）


H
I
J
(a)
(b)
(a)　⑧～⑨層面
(b)　⑩層上面
(c)　⑩層下面
(d)　⑫層～基盤層
0
3 m

1）　土器（Fig.174－176・103～151）

調査区の西側で検出した谷状の落ち込みに堆積した黒色有機質土には、多量の土器が包合されていた。これらは谷に廃棄された状態で出土した。器種的には、壺・甕・鉢・高坏・蓋・ミニュチア土器、他に図示していないが、支脚・器台もある。

壺は形状から3種に大別できる。103～113は、球形の胴から頸部が緩やかにすぼまり、口縁部が反転する。105・106は口縁部を肥厚させ、頸部との境界に段をつける。103・104は、段にかわり沈線を巡らす。肩部には平行沈線文・羽状文・重弧文・短斜線文が施文されるものがある。文様は、ヘラ状工具・貝殻で描かれている。109は短斜線文をハケメ原体の小口部で押捺施文している珍しい例である。103の肩部文様帯にはベンガラが塗布されていた。これらは、いずれも板付II式土器の古段階～中段階に比定できるが、106は板付I式土器新段階まで遡る可能性をもつ。

114～116は、口頸部が円筒状で、緩やかに外反する。口縁内側を肥厚させたものが多い。板付II式土器の新段階に比定できる。

117は無頸壺である。焼成前に2孔1組の穿孔を施す。この種の壺は、板付1式土器新段階～板付II式土器中段階に類例が知られている。118・119は小形壺の底部である。119は円盤貼付状の平底で、板付I式土器新段階に比定できようか。

甕には、如意形口縁の甕と、いわゆる「亀ノ甲式」と呼ばれてきた刻目凸帯文土器の系譜を引く甕がある。120～125は前者の甕で、胴部の張りから新古に区分できるが、いずれも板付II式土器の範疇のものである。126～131は後者の甕である。その中で、126は口縁凸帯が小形でキザミをもち板付II式土器古段階、127・128は口縁凸帯がやや大きい。129は口縁を強く折り曲げている。板付II式土器中段階に比定できる。130・131は大ぶり口縁凸帯をもち胴部が張り、板付II式土器新段階に分類できる。

甕の底部には薄い平底と、厚めの上げ底部がある。前者は板付II式土器古段階～中段階に、後者は板付II式土器新段階に比定できる。

鉢には、如意形口縁のもの、刻目凸帯文土器系統のもの、直口縁のものがある。いずれも板付II式土器に分類できるが、細かな時期差は把握できない。特異な鉢として147がある。口縁を「く」字形に曲げて段をつける。丸みのある胴部がつく。板付II式土器古段階に分類できる。

148は高坏の脚部破片である。脚部の付け根に断面三角形凸帯が巡る。比較的深めの坏部分がつくと考えられる。板付II式土器。149・150は蓋である。前者は傘形の蓋で、後者は小形で偏平なものである。板付II式土器古段階～中段階のものか。151は鉢形のミニチュア土器である。

以上のように、谷に廃棄された土器は、いずれも弥生時代前期後半の板付II式土器の範疇に属する。

（この項　田崎）

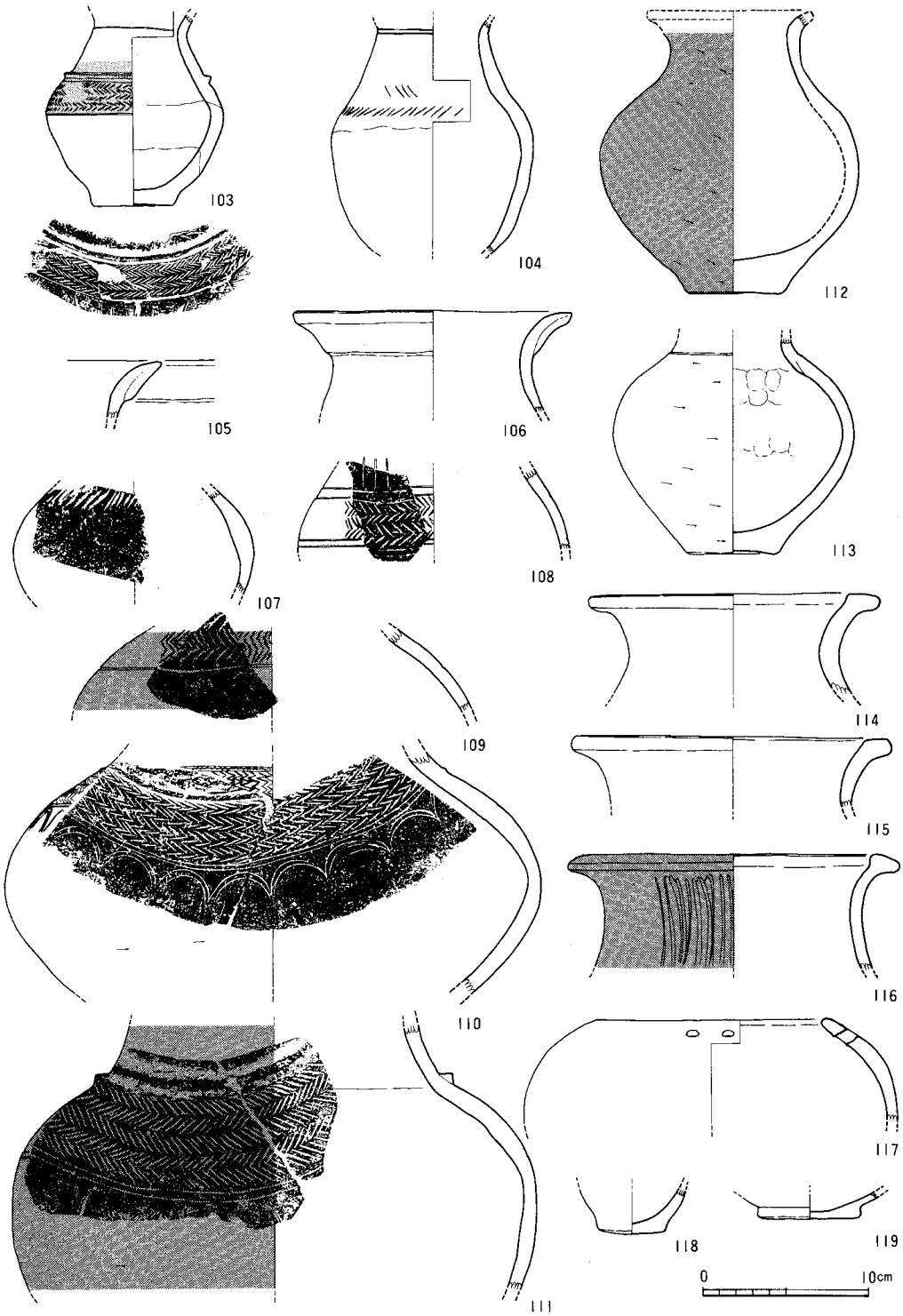


Fig.174　包含層出土土器実測図　1　(縮尺1/4)

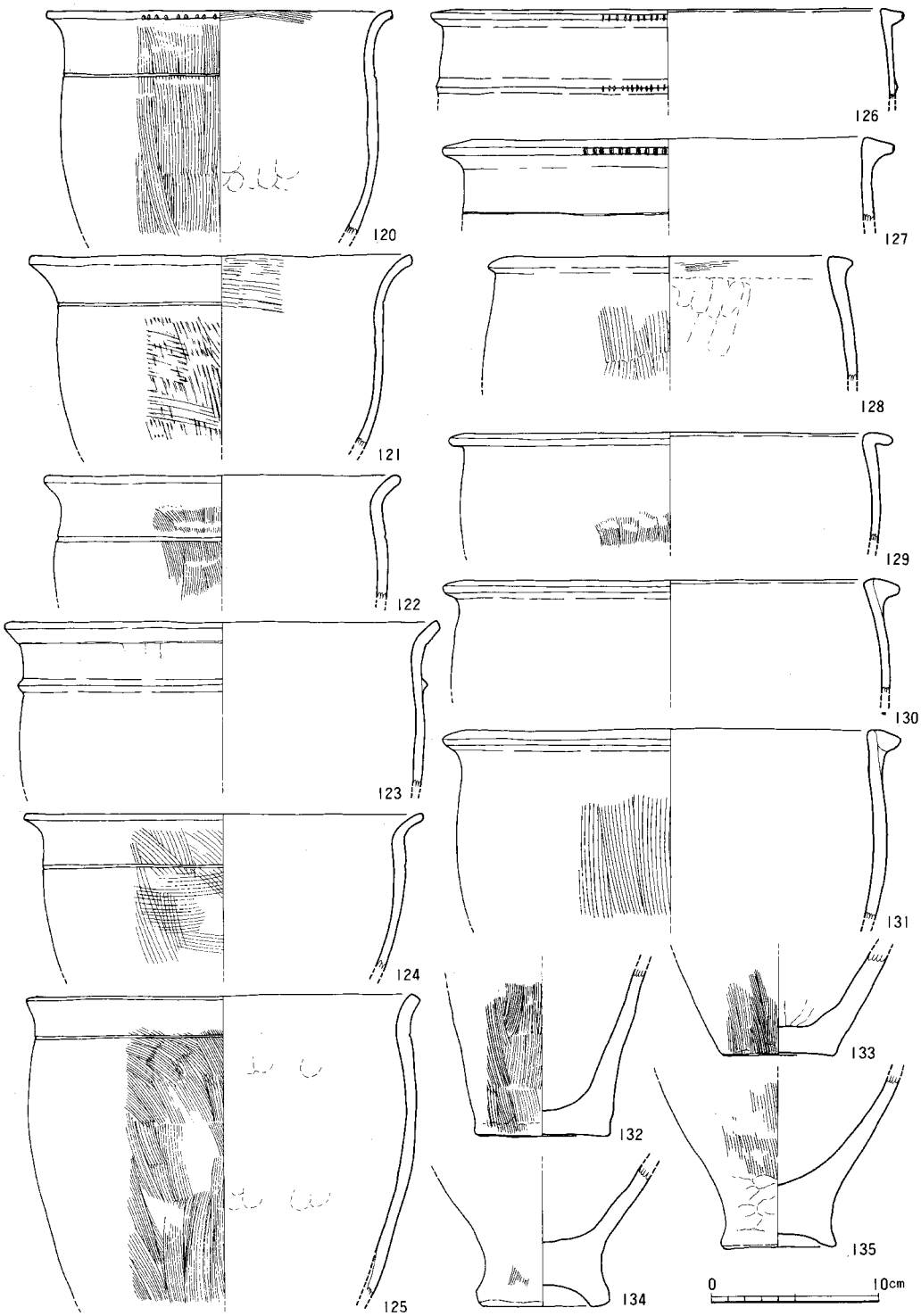


Fig.175　包含層出土土器実測図　2　（縮尺 1 / 4 ）

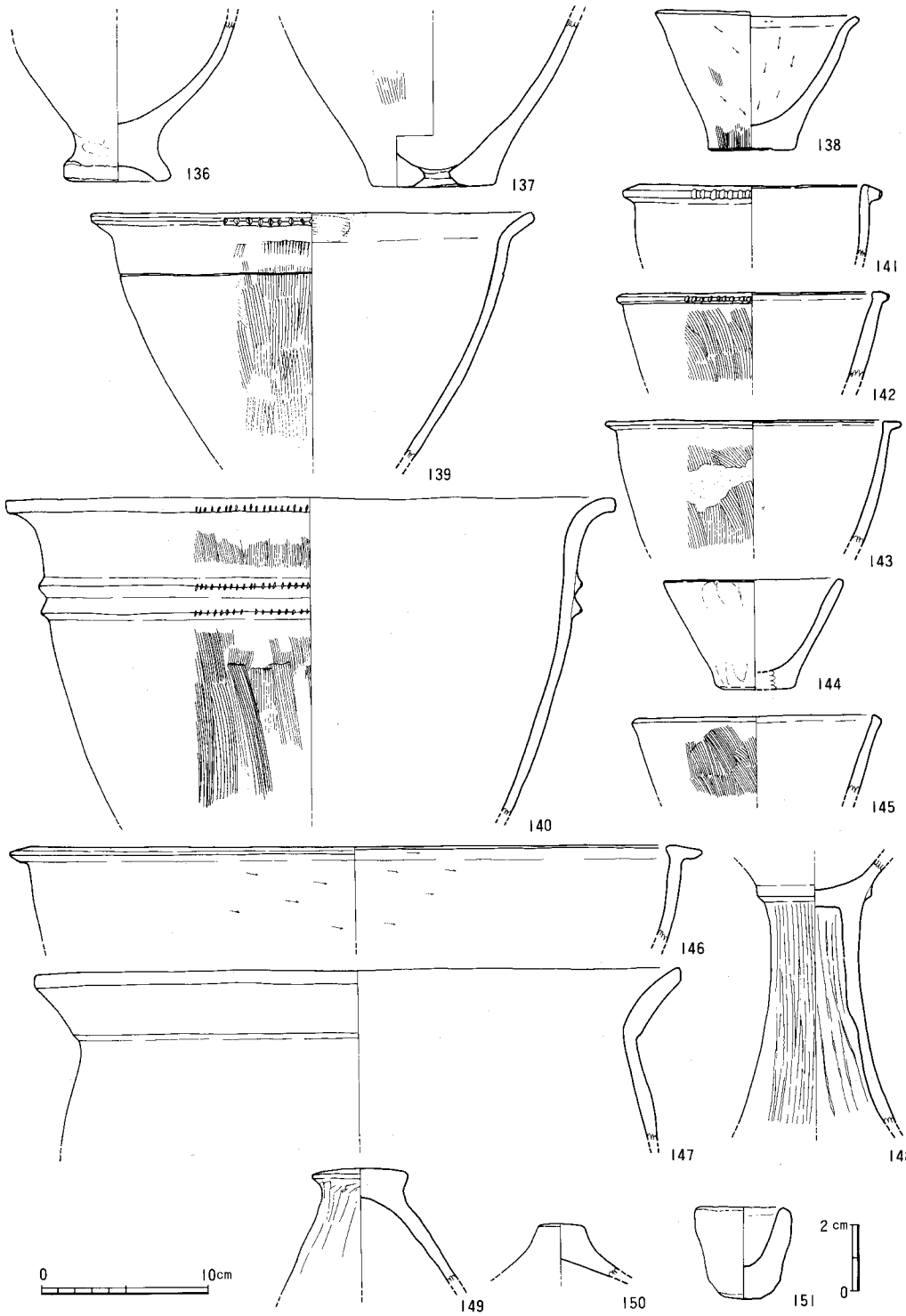


Fig.176　包含層出土土器実測図　3　(縮尺136～150；1/4、151；1/2)

2）　石製品（Fig.177～179－152～179）

各遺構および包含層から出土した石製品の種類と数についてはTab. 5・6に示すとおりである。種類については製作法の違いから大きく磨製と打製の2種類に分けられ、それぞれにその原料、素材、加工途上のもの、製品、欠損品などがある。ほとんどが欠損して廃棄されたものばかりである。

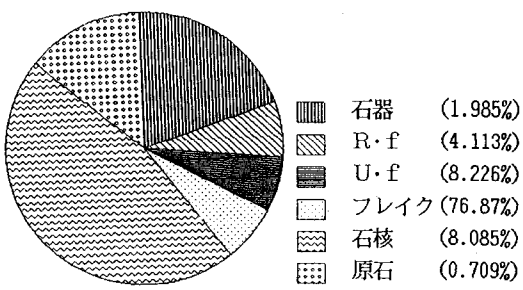
打製石器としては、1点のシルト岩製の石槍（172）、5点のサヌカイト製の剥片の他はすべて黒曜石製である。黒曜石は佐賀県伊万里市腰岳産と思われる5cm前後の小角礫を使用している。石核から復元される剥片剥離の方法は、石核の自然面および剥離面打面（無調整）から打面を頻繁に移転させながら剥離を行うもので、縄文晩期以来西北九州でみられる「無索意」もしくは「アトランダム」と称されてきた剥離法と同じものである。剥片もその90%以上が打面や背面に原礫の表皮を残し、5cmを越えるものは無く、背面に残された剥離面も90度や180度の交錯した方向からのものが複数存在しており、この剥離法を裏付けている。

石器としては、使用痕（152・153）や加工痕（154・156・157）のある剥片がそれぞれ18点と8点出土している。特徴的なものとして155のような2cm以下の小石核があるが、細かい剥離痕があることから掻器のような石器として使用された可能性がある。

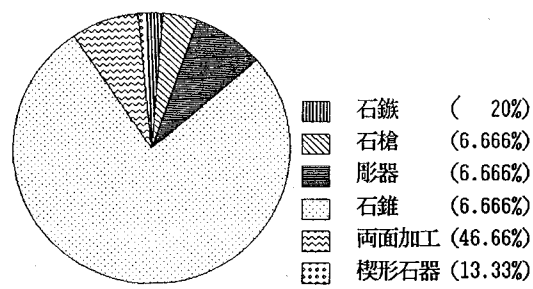
出土地点	石　器	R.フレイク	U.フレイク	フレイク・チップ	石　核	原　石	合　計
SX－01	2	5	13	69	12	0	101
SD－02	2	4	8	41	6	2	63
SC－50	1	3	4	100	6	0	114
その他の遺構	1	6	13	103	4	1	128
包　含　層	6	8	18	181	25	2	240
そ　の　他	2	3	2	48	4	0	59
合計 （百分率）	14 （ 2.0%）	29 （ 4.1%）	58 （ 8.3%）	542 （76.9%）	57 （ 8.1%）	5 （ 0.7%）	705 （100.0%）

Tab.5　黒曜石製石器遺構別出土数

a．黒曜石製石器の種類



b．打製石器の種類



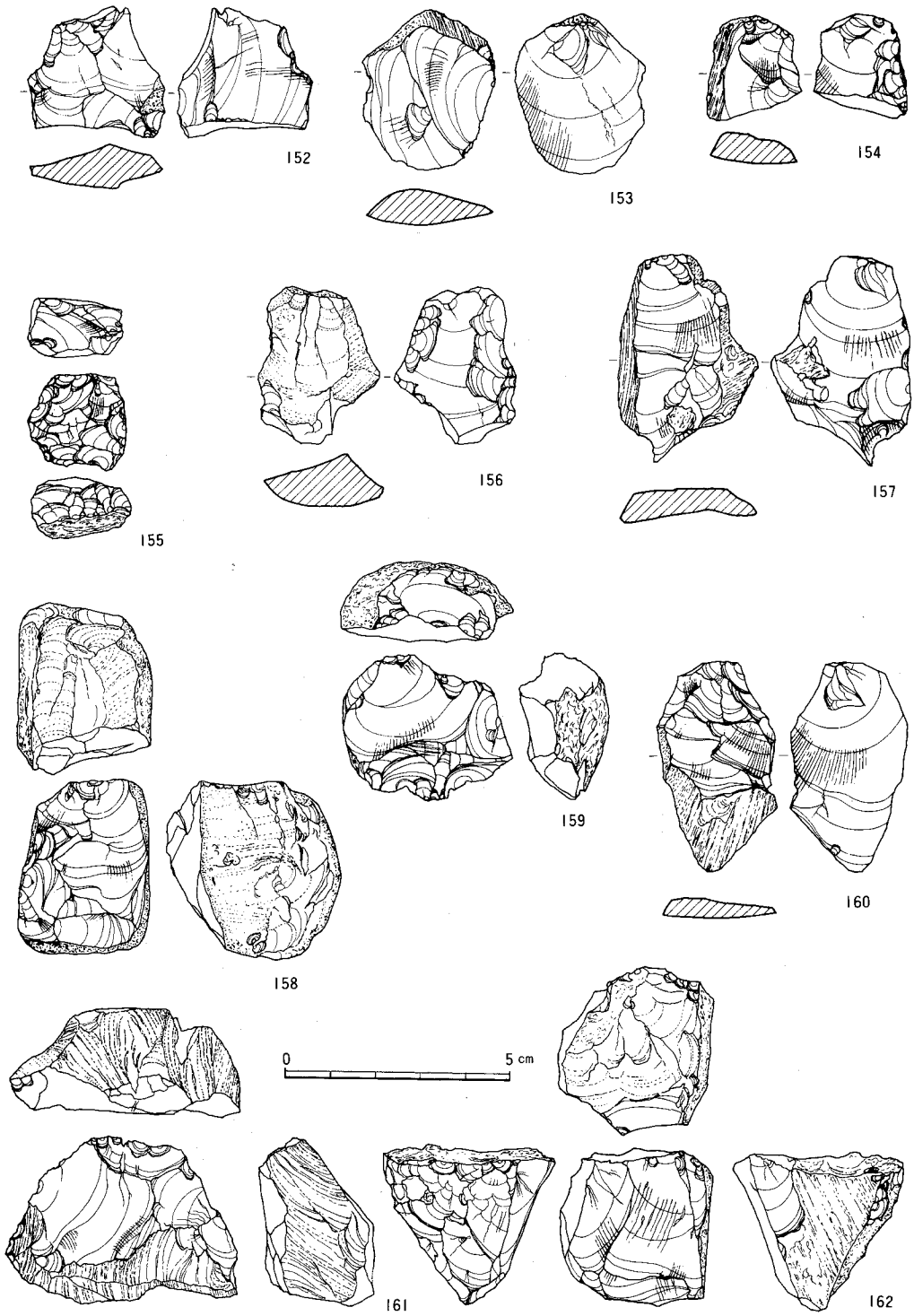


Fig.177　包含層出土石器実測図　1　(縮尺2/3)

剝片や石核の数に比べて石器の数が少ないのも特色で、調査地点の総数からみても石器や使用痕・加工痕ある剝片の黒曜石製品に占める割合はわずか14.4%と低い数値を示している。

磨製石器には、武器・狩猟具として石剣、石鏃が、収穫具として石庖丁、石鎌が、伐採・加工具として石斧、砥石、磨石、凹石、敲石などがある。この他、紡錘車、管玉などがある。

石剣は切先の破片を含めていずれも細片である。磨製石鏃は石剣の切先の破片を再加工したものである（179）。石材は、緻密な構造をもつ頁岩などの堆積岩が用いられている。

石庖丁も破片がほとんどで、全形の知り得るのは171の外湾刃半月形のものだけである。石材としては、頁岩、玄武岩が使用されている。

石鎌は破片、全形は不明である。石材は頁岩である。

石斧には太形蛤刃石斧（163～165）、蛤刃石斧、柱状片刃石斧（抉入）、扁平片刃石斧（168）、小型のノミ状の片刃石斧などがある。また、蛤刃以外の両刃の石斧もありそうである。石材としては、蛤刃石斧が玄武岩（安山岩を含む）やシルト岩が、それ以外の片刃石斧類には主に頁岩が使用されている。

砥石は10点と出土量が最も多い。砂岩を主に用いており、粗砥、中砥、細砥などがある。大型のものは置砥、小型のもの（169・170）は手持砥であろう。

磨石は破片のみで、完形のものはない。花崗岩、角閃石などが多用される。

凹石（173）は角閃石製のもので一面の中央部が凹んでいる。

敲石には2タイプあり、a.長楕円の花崗岩などの硬い石材の円礫を用いるものとb.円錐形の砂岩礫の一端を尖らせたものがある。bは側面に敲打痕をもつ。aは剝片石器などのハンマーとして、bは磨製石器の敲打器として用いられたと考えられる。

種類／地点	製品・欠損品・転用品・未製品																					原材・素材・石片						
	石戈	石剣	石鏃	石庖丁	石鎌	石斧 蛤刃	石斧 両刃	石斧 扁平片刃	石斧 柱状片刃	石斧 小ノミ形	砥石	磨石	凹石	敲石	石斧転用礫	礫器	剝片石器	紡錘車	管玉	不明磨石器	石斧未製品	両面加工品	玄武岩 原石	玄武岩 石核	玄武岩 剝片	剝片 頁岩	剝片 シルト岩	剝片 砂岩	剝片 その他
SX－01	0	1	0	5	2	1	10	4	2	1	15	2	1	2	0	6	2	0	0	1	0	2	0	1	44	3	5	3	5
SD－02	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	0
SC－50	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	2	1
他の遺構	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	4	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	13	4	0	2	1
包含層	0	1	1	1	1	8	3	0	1	0	10	3	1	1	3	10	2	4	1	2	1	0	1	1	36	1	0	1	5
その他	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	3	1	8	3	10	15	6	3	1	33	7	2	3	3	18	6	5	1	3	1	2	1	2	95	10	7	8	12
	133																						137						
	270																												

Tab.6　磨製石器遺構別出土数

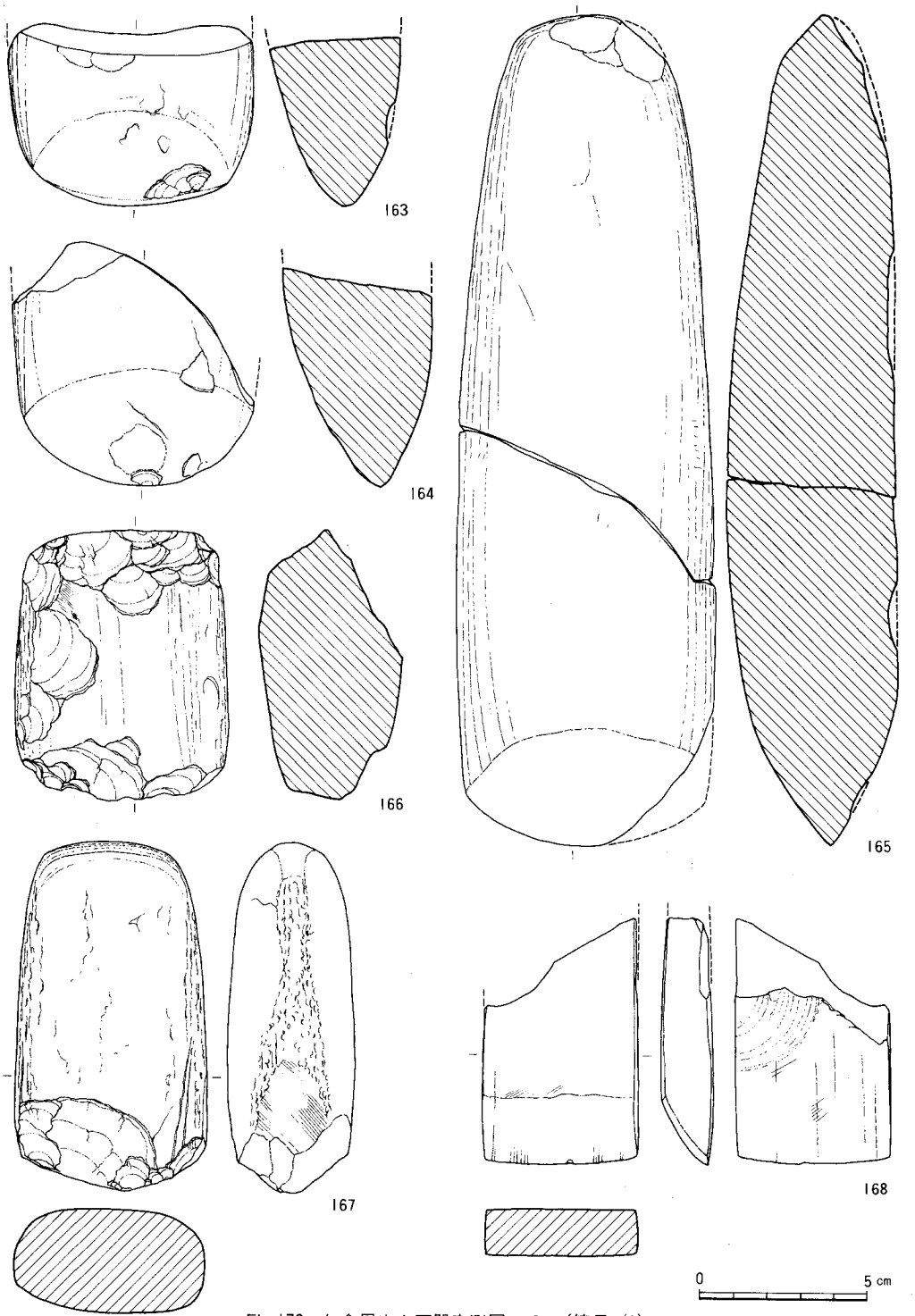


Fig.178　包含層出土石器実測図　2　(縮尺1/2)

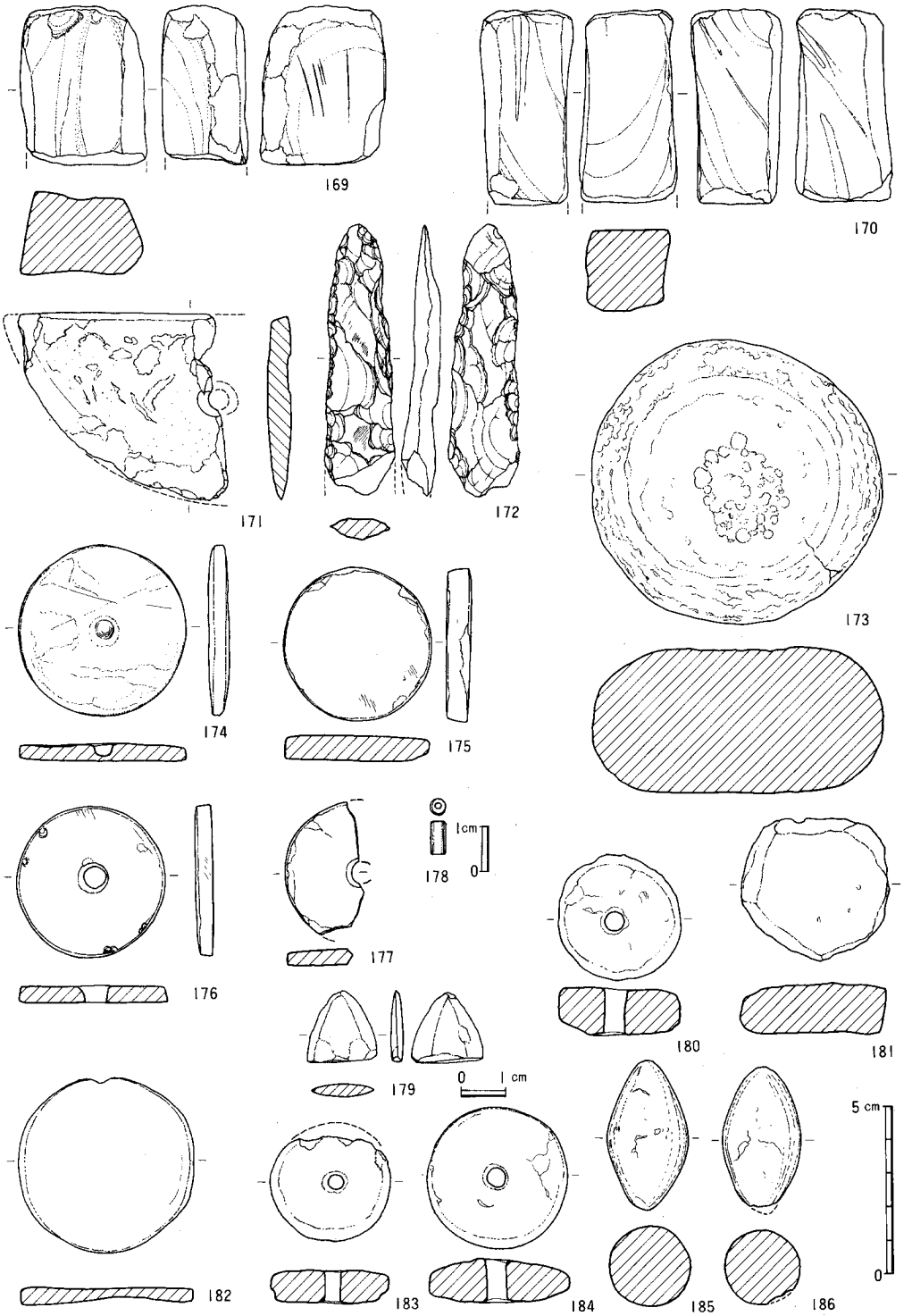


Fig.179　包含出土石製品・土製品実測図（縮尺178•179；2/3、以外は1/2）

分類としては打製石器の部類に入るが、玄武岩（安山岩）製の礫器や剝片石器がかなりの数出土している。これは石斧の未製品と異なり、大きさも10cm以下のものがほとんどで、刃部が磨耗しているものが多い（第25次調査出土品Fig.145－542～544を参照）。これを含め、玄武岩（安山岩）の剝片や破砕礫の数は黒曜石に次いで出土量が多い。剝片は蛤刃石斧の製作途中にでる屑と区別できないため、磨製石器の表中に入れた。この他礫器として使用されたと考えられるものに蛤刃石斧の欠損品を再加工したものがある。これらは、木材の粗割りの楔や敲石として使用されたと考えられる。

紡錘車は製品、未製品、破片も含め4点出土している（174～177）。石材は結晶片岩が多く、石材の破片も出土している。

管玉（178）は製品で、淡緑色の碧玉製である。

本地点では、磨製石器の製作に係わったと思われる素材や破片が多く出土しており、磨製石器の総数の約50％を占めている。未製品や工具の存在ともあわせて、遺跡内での製作が行われたことを示している。蛤刃石斧については粗割り段階のものが存在するが、素材となるような大きな原石がないため、それ以前の工程が遺跡内で行われた可能性は低い。工程の把握のためにも今後は未製品とあわせて、これらの破片や砕片にも注意をはらう必要があろう。

3）　土製品（Fig.179－180～186）

土製品としては、紡錘車（180・183・184）、円盤（181・182）と投弾（185・186）がある。182は厚さや直径が他の石製紡錘車に似ており、周囲も丸く仕上げてあることから土器の底部破片を利用した紡錘車の未製品であろう。他の紡錘車は粘土で成形・焼成されたものである。

4）　木製品（Fig.180－187・188・190・191・193）

木製品はII区のJ-8～9区の主に⑩層から出土した。⑩層になると木の枝や材が出土しはじめる。J-8-5・6区では⑩層中から基盤土にかけて掘り込まれた木製品の貯蔵施設と思われる遺構を検出することができた。この遺構は基盤の八女粘土層面で浅い土壙状になるが、木製品の周囲から人頭大の礫が検出されることから本来⑩層から掘り込まれたと考えられる。193の竪杵は完形品で、上から石によって押さえられていた。おそらくこれらの石は木製品や材の流失を防ぐものとして置かれたのであろう。遺構内部からは図示した木製品の他、幅30cm、長さ1m以上もある角材などが出土した。それらの一部には火を受けて焦げているものもあった。遺構の約半分は調査区外に展開しているが、残念ながら調査不能であった。

木製品の種類には容器（187）、諸手鍬（188）、竪杵（190・193）、用途不明の板状木製品（191）などがある。187は約3分の1の破片で、高坏の可能性もある。191は先端が尖る鋤状のもので、途中に抉りが入る。基部の抉り付近に2箇所小さい穴があるが、左側は貫通していない。

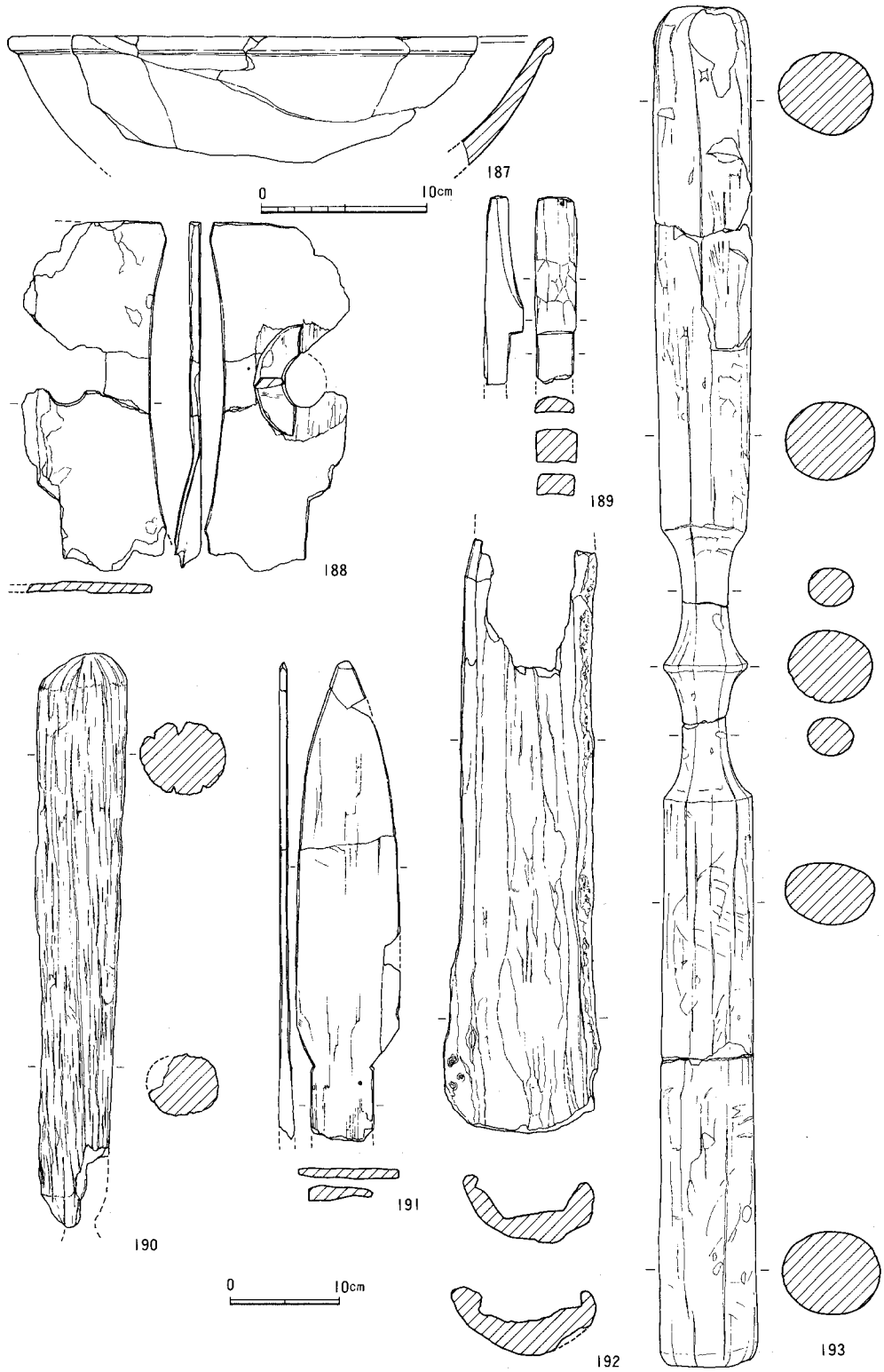


Fig.180　出土木製品実測図（縮尺187･189；1/4。以外は1/6）

4．まとめ

今回の調査で新たに判明したのは、これまで本地点を境とされてきた比恵遺跡群の北限がさらに北へ延びることである。これは、谷の落ち際が調査区内では検出されず、台地が緩いカーブを描きながらも北へ延びていることから想定された。その後に実施された第28次調査でもこのことが確認されている。また、台地上の遺構の残りが比較的よく、弥生時代前期後半の住居址や貯蔵穴が検出され、第4次調査からの遺構の拡がりが把握できたことは、該期の集落の構造を知る上で、貴重な知見をもたらしたといえよう。今後の周辺部の調査の進展によっては新たな展開が予想され、集落の全容が判明するものと思われる。

個別的な成果については、弥生時代前期末の笊の新例の追加、所謂「松菊里型」タイプの古い部類に入ると思われる住居址の発見、谷部における木製品の貯蔵施設の検出などがあげられよう。この貯蔵施設については、第4次調査において検出された2基の貯蔵土壙と一連のものと考えられ、これらが台地の際に等間隔に位置しているという現象は偶然の一致とは考えられず、興味深い。

Tab. 7　第26次地点出土遺物観察表

番号	挿図	器種	遺構 層位	特　　徴	登録 番号
Fig.158	2	壺	SX－01	沈線状の段の上下に平行沈線文と複線山形文をヘラで施文	01001
	3	壺	SX－01	肩の平行沈線文帯の間に複線の山形文と重弧文をヘラで施文	01002
	4	壺	SX－01	口縁下に不明瞭な段が巡る．器面は荒れ、調整の子細不明	01003
	5	壺	SX－01	胴上半部の破片、ヘラで複線の山形文？を施文	01004
	6	壺	SX－01	内外面ともに横ナデ	01005
	7	壺	SX－01	外面は横方向の研磨、内面はナデ仕上げ	01006
	8	壺	SX－01	やや不安定な平底．外面は乱雑なヘラによるナデ上げ	01007
	9	壺	SX－01	不安定な凸レンズ状の底部．外面は器面が荒れる。内面はナデ	01008
	10	甕	SX－01	外面は貝殻条痕、内面はナデ．口縁凸帯にはヘラでキザミを施す	01009
	11	甕	SX－01	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細は不明	01010
	12	甕	SX－01	内外面ともに荒れが進む．口唇の上下端と凸帯にヘラでキザミ	01011
	13	甕	SX－01	鉢に近い形状．口縁周辺は横ナデ、胴内外面はナデ	01012
	14	甕	SX－01	口縁は横ナデ、胴内面はナデ、外面は荒れ、調整は子細不明	01013
	15	甕	SX－01	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細は不明	01014
	16	甕	SX－01	内外面ともにハケメの後にナデ、凸帯上にヘラでキザミを施す	01015
	17	甕	SX－01	外面はハケメの後にナデ、内面はナデ	01016
	18	蓋	SX－01	外面には指頭による圧痕が多く残る	01017
	19	鉢	SX－01	外面はハケメ後にナデ、内面はナデ	01018
	20	鉢	SX－01	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細は不明	01019
	21	鉢	SX－01	内外面ともに荒れが進む．口縁下に棒状工具で沈線を引く	01020
	22	高坏	SX－01	内外面ともにナデ仕上げ	01021
	23	脚付鉢	SX－01	外面は乱雑にハケメ、鉢部内面には蜘蛛の巣状のハケメが残る	01022
	24	椀	SX－01	胴中位に器面調整の境界線の稜がつく、以下はケズリ？	01023
Fig.159	25	U・フレイク	SX－01	裏面底辺の一部に使用痕が残る。黒曜石	02072
	26	U・フレイク	SX－01	両側片の一部に使用痕が残る。黒曜石	02078
	27	楔形石器	SX－01	上下からの楔状の剥離痕が残る。黒曜石	02012
	28	彫器	SX－01	側面に2個のファシット。黒曜石	02033
	29	R・フレイク	SX－01	裏面上下に剥離痕が残る。黒曜石	02097
	30	石核	SX－01	自然面・剥離面打面。黒曜石	02013
	31	石核	SX－01	小円礫の3面に剥離面。黒曜石	02001
	32	石核	SX－01	正面に剥離面有、4点接合。サヌカイト	02399他
Fig.160	33	敲石	SX－01	一端に打痕あり。砂岩	02440
	34	砥石	SX－01	正面と2側面が研面、欠損。砂岩	02493
	35	敲石・磨石	SX－01	両面3個所に磨面、石斧転用。シルト岩	02519
	36	砥石	SX－01	中央が細くなる撥形。砂岩	02522
	37	両面加工(未)	SX－01	断面レンズ状．磨製石器未製品。凝層質砂岩	02438
Fig.161	38	砥石	SX－01	正面のみ研面、皿状に窪む。砂岩	02410
	39	砥石(台石)	SX－01	中央部が窪む、半分欠損。砂岩	02503
Fig.162	40	壺	SD－02	内外面ともに器面の荒れが著しく、調整の子細は不明	01024
	41	壺	SD－02	肩に5条の平行沈線文、羽状文を貝殻施文	01025
	42	壺	SD－02	内外面ともに器面が荒れ、調整の子細は不明	01026
	43	甕	SD－02	内外面ともに横ナデ	01027
	44	甕	SD－02	内外ともに横ナデ．口唇下端と凸帯にヘラでキザミを施す	01028
	45	甕	SD－02	外面は器面が荒れ、調整の子細は不明．内面はナデ	01029
	46	壺	SD－02	短頸壺．内外面ともに器面が荒れ、調整の子細は不明	01030
	47	高坏	SD－02	外面は非常に丁寧なナデ、内面は横方向の研磨	01031
	48	石錐	SD－02	先端部をわずかに欠損。黒曜石	02124
	49	両面加工品	SD－02	製作途中のものか。黒曜石	02118
	50	U・フレイク	SD－02	ほぼ全周に剥離痕あり。黒曜石	02112
	51	楔形石器	SD－02	上下方向からの剥離痕あり。黒曜石	02154
	52	石核？	SD－02	角礫の3側面に剥離痕あり。黒曜石	02106
	53	石核	SD－02	正面と側面に剥離面。黒曜石	02102
Fig.164	54	甕	SD－30	内外面ともに器面が荒れ、調整の子細は不明	01032
	55	壺	SD－40	甕棺と考えられる大形壺．内外面との横ナデ	01033
	56	甕	SD－40	成人用大形甕棺．内外面ともに荒れが著しい	01034
	57	壺	SD－37	外面は乱雑な研磨、内底面には指頭痕が残る	01035
	58	甕	SD－37	口縁は横ナデ、胴外面はハケメ．口唇下端にヘラでキザミ	01036
	59	甕	SD－37	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細は不明	01037
	60	甕	SD－37	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細は不明	01038
	61	甕	SD－37	外面は縦方向のナデ、内面には指頭痕が残る	01039
	62	蓋	SD－37	器面は荒れ、調整の子細不明．部分的に指頭痕が残る	01040
Fig.166	63	壺	SC－50	肩に沈線状の段、外面は丹塗りの磨研	01041

番号	挿図	器種	遺構 層位	土器の特徴	登録 番号
Fig.166	64	甕	SC－50	口縁凸帯のキザミはヘラで施す.接合面で割れている	01042
	65	甕	SC－50	内外面ともに横ナデ	01043
	66	甕	SC－50	鉢に近い小形品.内外面ともに荒れが著しく、調整の子細不明	01044
	67	甕	SC－50	外面は荒れが著しい.内面はハケメの後にナデ	01045
	68	甕	SC－50	外面はナデ、内面は荒れが著しく、調整の子細は不明	01046
	69	鉢	SC－50	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細は不明	01047
	70	高坏	SC－50	内外面ともに荒れ、調整の子細不明.内面は黒変	01048
	71	壺	SC－50	粘土紐を渦巻状に巻いて成形.器面は荒れ、調整不明	01049
	72	甕	SC－50	外底面にはケズリが施される.内面はナデ	01050
	73	壺	SC－50	外面ともに荒れが著しい.内面は指頭によるナデ	01051
	74	甕	SC－50	内外面ともに荒れが著しい.部分的にハケメが残るのみ	01052
	75	甕	SC－50	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細は不明	01053
	76	石核	SC－50	剝片利用の石核。黒曜石	02329
	77	石核	SC－50	小円礫使用の石核。黒曜石	02263
	78	石核	SC－50	小円礫使用の石核。黒曜石	00295
	79	U・フレイク	SC－50	矢端加工で、側辺に擦痕有。黒曜石	02954
	80	磨製石斧	SC－50	刃部破損、側面に抉りあり。シルト岩	02562
Fig.168	81	壺	SC－60	肩にヘラ描きの羽状文を施文	01054
	82	壺	SC－60	外面は横ナデ、内面は荒れが進む	01055
	83	甕	SC－60	内外面ともに横ナデ、口唇部にヘラでキザミを施す	01056
	84	甕	SC－60	内外面ともに器面が荒れ、調整の子細は不明	01057
	85	壺？	SC－60	内外面ともに器面が荒れ、調整の子細は不明	01058
	86	甕	SC－60	外面は荒れが進むが、部分的にハケメが残る、内面はナデ	01059
	87	甕	SC－60	内外面ともにナデ仕上げ	01060
	88	甕	SC－60	内外面ともにナデ仕上げ.内面には薄く炭化物が付着	01061
	89	甕	SC－60	外面はナデ.内面に炭化物が付着	01062
	90	紡錘車	SC－60	結晶片岩製、半欠	02575
Fig.170	91	甕	SK－03	外面はハケメの後にナデ.口唇を切るようにキザミを施す	01063
	92	鉢	SK－63	内外面ともに器面が荒れ、調整の子細は不明	01064
	93	甕	SK－63	内外ともに横ナデ、口唇全面にヘラでキザミを施す	01065
	94	壺	SK－63	外面は横方向の研磨、内底面は荒れが進む	01066
	95	甕	SK－63	内外面ともに器面が荒れ、調整の子細は不明	01067
	96	甕	SK－63	外面は荒れ、部分的にハケメを残すのみ.内面はナデ	01068
	97	甑	SK－63	外面は荒れ、部分的にハケメを残すのみ.内面はナデ	01069
Fig.171	98	高台付椀	埋土	灰釉陶器.外底は糸切り	01070
	99	打製石鏃	表土	抉りの浅い二等辺三角形。黒曜石	02955
	100	打製石鏃	表土	抉りのやや深い三角形。黒曜石	02962
	101	打製石鏃	SK－49	平基の二等辺三角形。黒曜石	02953
	102	磨石	SK－29	上下端を裁断したような球。砂岩	02545
Fig.174	103	壺	包含層	肩の凸帯にキザミ、胴上半に沈線に挟さみ羽状文をヘラで施文	01071
	104	壺	包含層	口縁下に不明瞭な2条の沈線.肩には短斜線文をヘラで施文	01072
	105	壺	包含層	外面は研磨、内面はナデ	01073
	106	壺	包含層H－7－5	内外面ともに器面の荒れが進み、調整の子細は不明	01074
	107	壺	包含層J－7－9⑫層	口縁～頸外面は横ナデ、内面はナデ	01075
	108	壺	包含層	肩に沈線状の段.外面には研磨、内面には指頭痕が残る	01076
	109	壺	包含層J－8－8⑩層上	外面は研磨、肩にハケメ原体の小口部で短斜線を押捺	01077
	110	壺	包含層J－7－9⑫層	肩の2条1組の沈線帯間に羽状文、頸には縦方向の平行沈線文	01078
	111	壺	包含層J－8－4⑩層下	外面を黒塗り磨研、肩にヘラで沈線、貝殻で羽状文を施文	01079
	112	壺	包含層J－8－2⑩層下	黒塗り磨研.肩にはキザミをもつ削り出し凸帯、ヘラ描き施文	01080
	113	壺	包含層	肩には段が巡る.外面はケンマ,内面には指頭痕が残る	01081
	114	壺	包含層	外面は横ナデ、内面は器面の荒れが進み、調整は不明	01082
	115	壺	包含層	外面は横ナデ、内面は器面の荒れが進み、調整は不明	01083
	116	壺	包含層J－8－9⑩層上	外面は黒塗り研磨、縦方向の暗文.内面はナデ	01084
	117	壺	包含層J－7－9⑫層	無頸壺.口縁下に焼成前に2孔1組の穿孔.外面は荒れる	01085
	118	壺	包含層F－7－8	内外面ともに器面の荒れが進み、調整の子細は不明	01086
	119	壺	包含層J－7－1	内外面ともに器面の荒れが進み、調整の子細は不明	01087
Fig.175	120	甕	包含層	口縁はハケメの後に横ナデ、胴外面はハケメ、内面には指頭痕	01088
	121	甕	包含層J－7－7	外面はハケメ後に口縁近くだけを横ナデ、内面は胴以下をナデ	01089
	122	甕	包含層J－8－5⑩層上	口縁は横ナデ.胴外面はハケメ、口縁下に煤付着.内面はナデ	01090
	123	甕	包含層G－7－6	器面は荒れる.口縁下にハケメの小口痕が集中し段状となる	01091
	124	甕	包含層J－8－2・⑧～⑩層	外面は荒れるが、ハケメが部分的に残る.煤が薄く付着	01092
	125	甕	包含層J－8－2⑧・⑨層	口縁は横ナデ.胴外面はハケメ、下半に煤が付着.内面はナデ	01093
	126	甕	包含層J－8－2⑩層上	口縁と胴凸帯にヘラキザミ、内外面とも荒れ、調整の子細不明	01094

番号	挿図	器種	遺構 層位	土器の特徴	登録 番号
Fig.175	127	甕	包含層J-8-2⑩層上	内外面ともに横ナデ,口縁にはハケメ小口部を押捺したキザミ	01095
	128	甕	包含層J-8-7⑧・⑨層	口縁は横ナデ,胴外面はハケメ、内面はナデ	01096
	129	甕	包含層J-8-5⑧・⑨層	口縁は折り曲げて成形,器面は荒れ、部分的にハケメが残る	01097
	130	甕	包含層J-9-2⑧・⑨層	内外面ともに器面の荒れが進み、調整の子細は不明	01098
	131	甕	包含層J-8-2⑧・⑨層	口縁は横ナデ,胴外面はハケメの後にナデ、内面はナデ	01099
	132	甕	包含層J-8-5⑧・⑨層	外面はハケメ、内面はナデ	01100
	133	甕	包含層J-9-1⑫層	外面はハケメの後にナデ、内底面には指頭痕が残る	01101
	134	甕	包含層J-8-5⑩層下	外面は荒れるが、ハケメが部分的に残る,内面はナデ?	01102
	135	甕	包含層J-8-5⑩層下	外面はハケメの後にナデ、裾には指頭痕が残る。内面はナデ	01103
Fig.176	136	脚台付鉢	包含層J-8-2⑧・⑨層	内外面は丁寧なナデ,脚台部には指頭痕、外面には煤付着	01104
	137	甑	包含層G-7-6	甕の底部に焼成後に穿孔,内外とも荒れが著しい	01105
	138	鉢	包含層J-9-1⑫層	外面はハケメの後に斜方向、内面は横方向の研磨	01106
	139	鉢	包含層F-7-5	口縁は横ナデ,胴外面はハケメ、下半に煤が付着,内面はナデ	01107
	140	鉢	包含層F-7-2	大形品,口唇下端と凸帯にヘラでキザミ	01108
	141	鉢	包含層E・D-7	口縁のキザミは棒状工具を押捺、器面は荒れ、調整は不明	01109
	142	鉢	包含層J-8-1	外面はハケメ、煤が付着,内面には炭化物が付着	01110
	143	鉢	包含層J-8-7⑧・⑨層	口縁は横ナデ,胴外面はハケメ、剥離部分あり、煤が付着	01111
	144	鉢	包含層I-7-3	内外面ともに指頭によるナデ	01112
	145	鉢	包含層J-7-9⑫層	外面はハケメ、内面には炭化物が厚く付着	01113
	146	鉢	包含層J-8-1	大形品、内外面ともに横方向の研磨	01114
	147	鉢	包含層	内外面ともに器面の荒れが進み、調整の子細は不明	01115
	148	高坏	包含層J-8-6⑫層	外面は暗文風の縦方向の研磨,脚内面には絞り痕を残す	01116
	149	蓋	包含層E・D-7	外面は乱雑なヘラナデ、内面はナデ	01117
	150	蓋	包含層G-6-8	外面は丁寧なナデ、頂部はかなり擦れている	01118
	151	鉢	包含層F-7-1	ミニチュア,指頭により成形	01119
Fig.177	152	U・フレイク	包含層	切断部・側辺に使用痕あり。黒曜石	02683
	153	U・フレイク	包含層	側辺の一部に使用痕あり。黒曜石	02273
	154	U・フレイク	包含層	裏面一側辺に加工痕あり。黒曜石	02818
	155	小石核	包含層	スクレイパーか。黒曜石	02595
	156	R・フレイク	包含層	裏面両側辺に加工痕あり。黒曜石	02796
	157	R・フレイク	包含層	裏面側辺一部に加工痕あり。黒曜石	02614
	158	石核	包含層	自然面打面、上・左方向より剥離。黒曜石	02709
	159	石核	包含層	平坦打面、周辺より剥離。黒曜石	02768
	160	フレイク	包含層	平坦打面、背面に自然面が残る。黒曜石	02677
	161	石核	包含層	自然面打面、3面に剥離痕。黒曜石	02703
	162	石核	包含層	側面に剥離痕有、自然面打面。黒曜石	02671
Fig.178	163	太形蛤刃石斧	包含層	先端部、刃先は磨耗。安山岩	02847
	164	太形蛤刃石斧	包含層	先端部。安山岩	02897
	165	太形蛤刃石斧	包含層	2点の破損品接合。安山岩	02906・02860
	166	礫器	包含層	石斧胴部片の再利用、研磨痕あり。安山岩	02946
	167	礫器	包含層	石斧再利用、側面に磨面あり。シルト岩	02924
	168	扁平片刃石斧	包含層	上半部欠損。頁岩	02951
Fig.179	169	砥石	包含層	細砥、手持ち。砂岩	02945
	170	砥石	包含層	中砥、手持ち。砂岩	02944
	171	石包丁	包含層	半分欠損。シルト岩	02999
	172	石槍	包含層	磨耗激しい、基部を欠損する。シルト岩	02714
	173	凹石	包含層	面中央部に凹部あり。角閃石	02559
	174	紡錘車	包含層	穿孔途上、未製品。結晶片岩	02957
	175	紡錘車	包含層	穿孔無し、未製品。粘板岩	02985
	176	紡錘車	包含層	一方向よりの穿孔。結晶片岩	02942
	177	紡錘車	包含層	半分欠損。結晶片岩	02882
	178	管玉	包含層	淡い緑色。碧玉	02931
	179	磨製石鏃	包含層	石剣の切先を再利用。頁岩	02871
	180	紡錘車	包含層	完形品	03001
	181	土製円盤	包含層	土器の胴部片の周囲を打ち欠く	03002
	182	土製円盤	包含層	土器底部を研磨、紡錘車の未製品か	03003
	183	紡錘車	包含層	一部欠損	03004
	184	紡錘車	包含層	完形品	03005
	185	投弾	包含層	完形品	03006
	186	投弾	包含層	一部欠損	03007
Fig.180	187	容器	SX－02	口縁部肥厚、外面わずかに黒色。カシ	04001
	188	諸手鍬	SX－02	ほぼ半分欠損、変形・収縮有。カシ	04002
	189	鍬柄	SX－01	平鍬の柄先か楔であろう。カシ	04003
	190	竪杵	SX－02	半分欠損、収縮が認めれる。カシ	04004
	191	不明板製品	SX－02	先端が尖る、基部を欠損する	04005
	192	樋状木製品	SX－01	先端欠損、樹皮が残る	04006
	193	竪杵	SX－02	完形品、一部重石により圧縮・変形。カシ	04007

第７章　第27次調査地点

１．調査の概要

第27次調査地点は、比恵遺跡群のほぼ中央部に位置し、第7次調査地点に隣接する。北側には第13次調査地点がある。調査前は福岡信用金庫小林支店の社屋があった。

本調査地点は、隣接地の調査結果から全面に遺構が存在すると予想されたので、開発予定地をすべて調査対象とした。しかし、調査区東端には貯水漕があり、遺構の存在が予想されなかったので、その場所に調査事務所を設置した。

調査は、重機によって、厚さ約70cmの表土（造成土、旧耕作土）を除去した後に開始した。遺構面は鳥栖ロームで、表土下すぐに検出される。遺構は建物基礎等の撹乱で残りはあまり良くない。遺構面の標高は約5.0～5.2mである。

遺構は弥生時代中期～古墳時代前半にかけて、溝2条、竪穴住居跡1軒、井戸4基、掘立柱建物4棟、柱穴多数を検出した。遺物は井戸から弥生土器、土師器、木製品が出土した。その他、柱穴から少量の弥生土器、土師器が出土した。

遺構番号は、井戸、溝などの遺構と柱穴に分けて、検出した順番で通し番号で付けた。(例SE01 SE02... SB07 SB08、P001 P002... P100等)

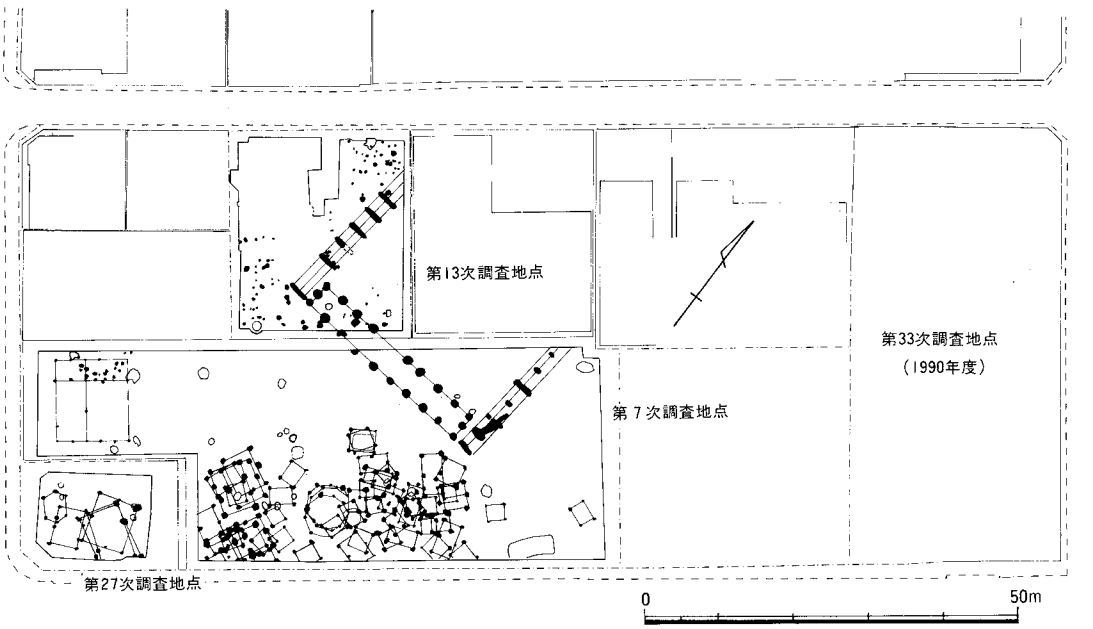


Fig.181　第27次調査地点周辺全体図

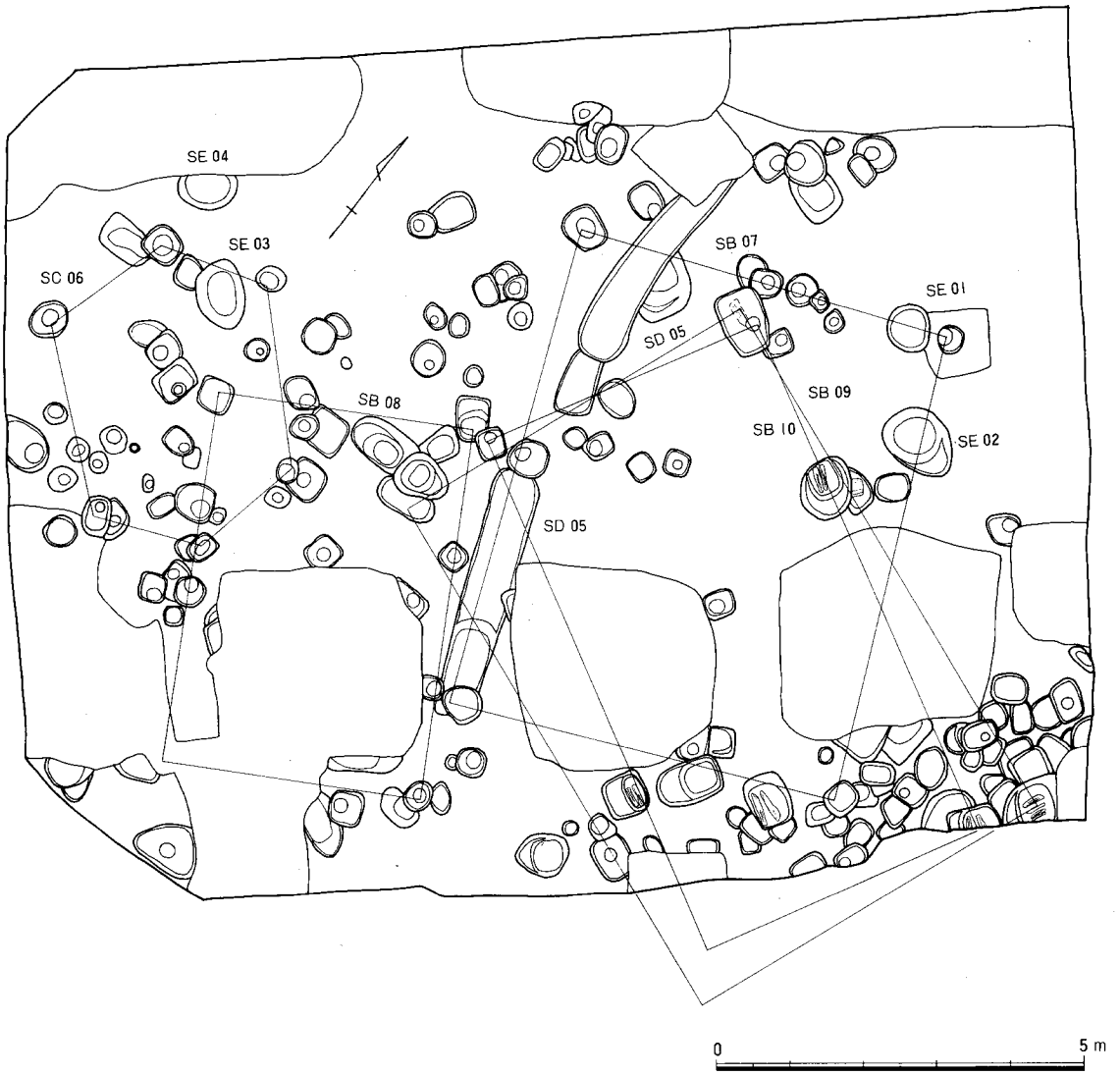


Fig.182　第27次調査地点遺構分布図

2．調査の記録

(1)竪穴住居跡

竪穴住居跡は壁や壁溝は残存しておらず、中央穴と柱穴が深さ20～30cm残存するのみである。したがってここに示した竪穴住居跡は柱穴の配列状態から復元したものである。近接する7次調査地点でも円形に柱穴が巡る竪穴住居跡が検出されている。今回の調査では一軒の竪穴住居跡が復元できた。

SC06 (Fig.183)

SC06は調査区の西側に位置する。55cm×45cmの長方形の土壙を中心にして、6個の柱穴が円形に巡っている。壁溝、貼床等は全く残っていない。中央の土壙は炉跡と考えるが、焼土等は明確には検出できなかった。柱穴は直径約20～30cmを測る。柱穴の配置から直径6m前後の円形の竪穴住居跡であったと想定できる。遺物は柱穴から弥生時代中期の土器片が少量出土している。時期は不明確であるが、すぐ北側にある井戸SE04との位置関係から弥生時代中期後半に位置づけられると考える。

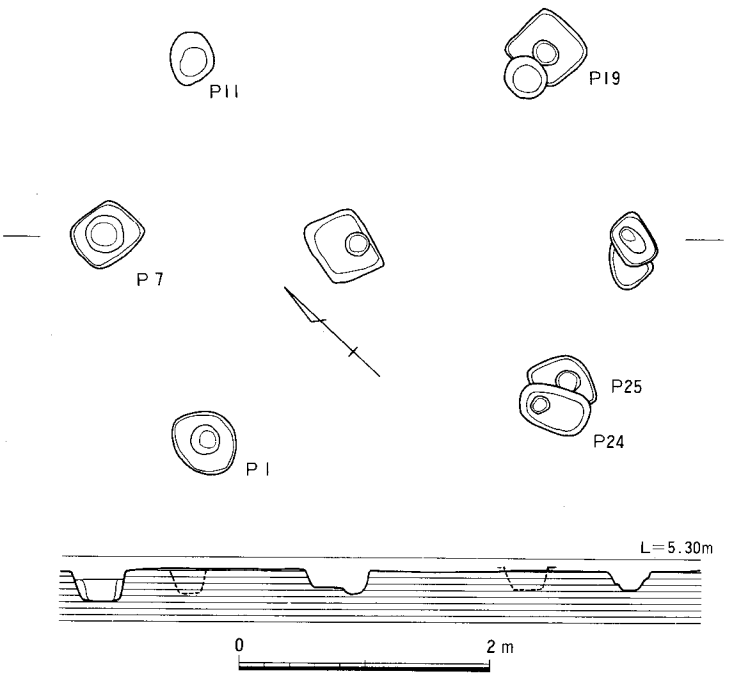


Fig.183　第1号住居址（SC－01）実測図

(2)井戸

本調査地点ではSE01～04の4基の井戸を検出した。そのうち、SE01～03は鳥栖ローム層を掘り込んだもの、SE04はその下の八女粘土まで掘り込んだものである。後者は湧水層に達しているが、前者はそこまで達しておらず、雨水などを利用した井戸だと考えられる（Fig.184）。

SE01

調査区の東側に位置する。一部、現代の撹乱によって、削平されている。平面形は円形を呈し、直径65cmを測る。断面形は底に向かって窄まる円筒形を呈し、深さは約64cmを測る。覆土は炭化物を少し含む暗褐色粘質土（ロームブロック混じり）である。上面から約30cm下で、完形復元できる土師器がまとまって出土した。本井戸は鳥栖ロームを掘り込んだだけで、湧水層まで達しておらず、雨水等を利用したものだと考えられる。遺物は床面近くで古墳時代初頭の土師器甕、器台、高杯が出土した。

SE02

SE01の南側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸105cm、短軸84cmを測る。断面形は底に向かって窄まるが、上面から30～50cm下に段が存在する。底は鳥栖ロームまでである。深さは約97cmを測る。覆土は上面から30cmは暗褐色粘質土（ロームブロック混じり）、それ以下は暗灰色粘質土である。遺物は覆土から弥生時代中期後半と弥生時代後期後半の弥生土器甕、壺、高坏などが出土した。また、最下層からは自然木が少量出土した。中期の土器は混入と考えられる。

SE03

調査区の東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸92cm、短軸69cmを測る。断面形は底に向かって窄まる。深さは約65cmを測る。覆土は暗褐色粘質土である。上面から約50cm下で、完形の土師器甕が横たわって出土した。底面は鳥栖ロームまでである。遺物は覆土から古墳時代前半の土師器甕、壺等が出土した。

SE04

調査区の西側に位置する。北側半分は基礎杭によって、上面から約1.0m程削平されている。平面形は円形を呈し、直径110mを測る。断面形は底に向かって窄まる円筒形を呈すが、鳥栖ロームと八女粘土の間の湧水層がえぐれている。覆土は、1. ローム小ブロック混じりの暗灰褐色粘質土、2. 暗灰色粘質土、3. 暗灰色粘質土（木を多量に含む）、4. 灰白色粘質土（崩れ落ちた八女粘土）である。3層から多量の木材が出土したが、その中でくり抜きの井筒を検出した。この井筒は直径60cm、高さ約60cmの丸太材を半截し、その中をくり抜いたものである。出土状況からはこの井戸に埋設されていたかは決めがたい。しかし、ここからは打ちかかれた大型甕も出土しており、それと組み合わせて使用された可能性がある。このほか、最下層からは完形の袋状口縁壺が1個出土した。井戸の時期は弥生時代中期末～後期初頭に位置づけられる。

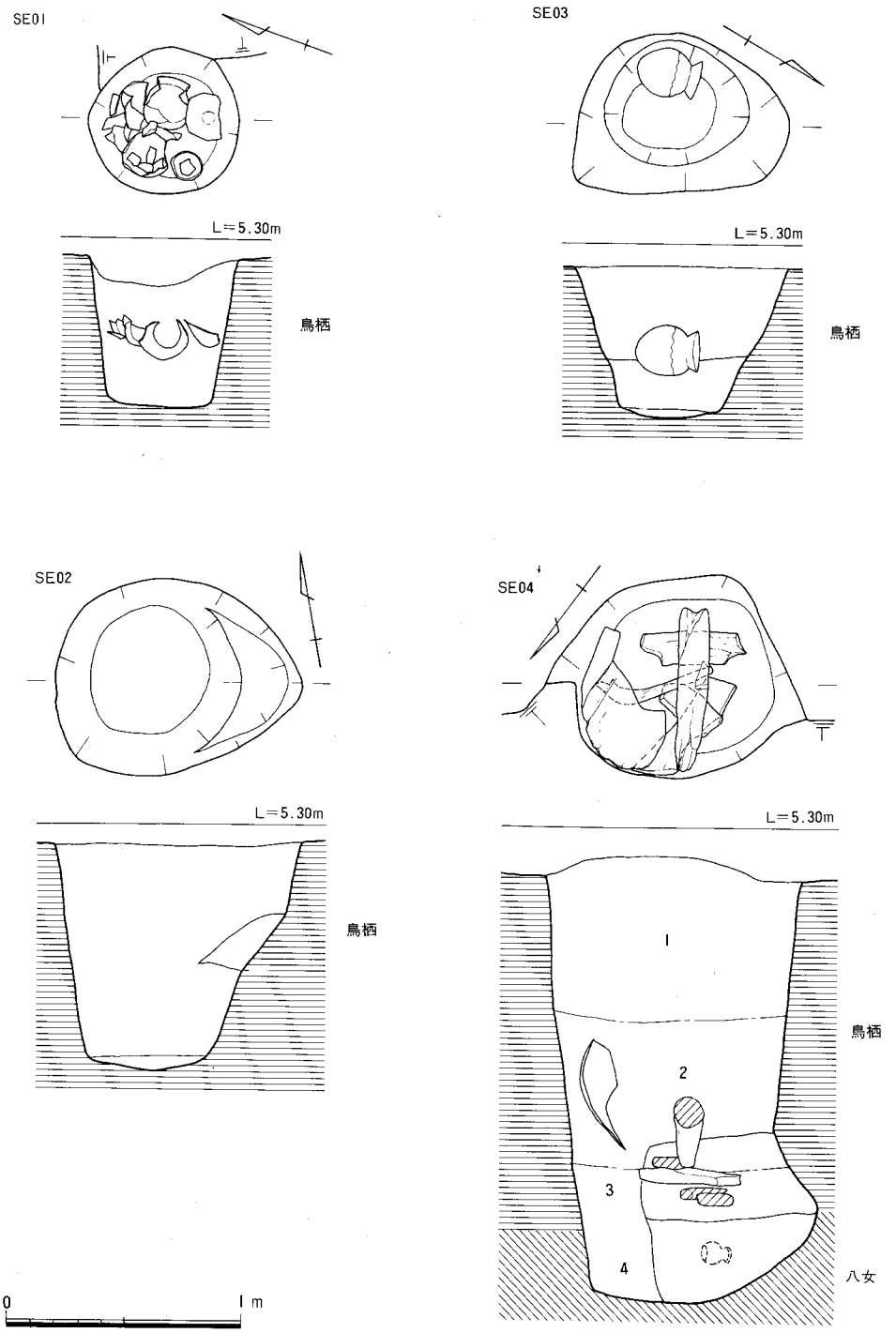


Fig.184　第1～4号井戸（SE－01～04）実測図

SE01出土遺物 (Fig.185－1～7)

土師器　甕 (1～4) 1～3は完形品である。1は口縁が直立気味に外反し、端部は丸く仕上げる。体部は長胴気味で、底部は丸底である。調整は外面は斜方向のハケメを、内面はハケメの後、ナデを施す。色調は淡褐色を呈する。器高23.1cm、口径14.6cmを測る。2は口縁が強く外反し、端部は丸く仕上げる。体部は倒卵形を呈し、底部は丸底である。調整は外面は横方向の荒い叩きを施す。胴部下半は叩きの後、縦方向のハケメを施す。色調は茶褐色を呈する。器高22.9cm、口径15.6cmを測る。3は口縁が強く外反し、端部は上方に肥厚する。体部は倒卵形を呈し、底部は丸底である。調整は外面はハケメを施す。口縁の内面は横方向のハケメを施す。胴部はヘラケズリを施す。色調は淡褐色を呈する。器高26.0cm、口径17.1cmを測る。4は丸底の底部片である。調整は外面は荒いハケメを施す。内面はナデである。色調は淡褐色を呈する。

高杯(5)　5は小型の高坏の坏部である。口縁はひろく開き、屈曲部には明瞭な段をもつ。調整は外面は細かいハケメを施す。内面はハケメの後、ヘラミガキを施す。色調は淡褐色を呈する。口径は15.4cmを測る。

器台 (6・7)　6は受け部の一部を欠くが、ほぼ完形である。受け部は直線的に開き、端部は面取りして、やや下垂する。面取りした端部にはハケメの原体による刺突文を施す。脚部は内湾気味に開く。調整は外面は縦方向の細かいハケメを施す。色調は褐色を呈する。器高19.8cm、口径14.7cm、底径12.8cmを測る。7は口縁と裾部を欠いている。受け部は緩やかに外反し、脚部は直線的に開く。調整は外面は縦方向の細かいハケメを施す。内面は横・斜方向のハケメを施す。色調は暗褐色を呈する。

SE02出土遺物 (Fig.186－8～17)

弥生土器　甕 (8・11)　8は口縁片である。直立気味に外反し、端部は面取りされる。調整は外面はナデ、内面は横方向のハケメを施す。色調は灰褐色を呈する。口径12.1cmを測る。11は丸底気味の底部で、痕跡的な平底がつく。調整は外面は縦方向のハケメを施す。内面は斜方向のハケメを施す。色調は暗褐色を呈する。

壺 (9・10)　9・10は複合口縁壺の口縁片である。9は口縁がわずかに内傾し、端部は上方を面取りする。外面の稜も鈍く、内面は丸みを帯びている。調整は外面は縦方向のハケメを施す。内面はナデを施す。色調は赤褐色を呈する。口径13.3cmを測る。10は口縁が直線的に立ち上がり、端部は面取りする。屈曲部は外側に張り出す。調整は横ナデである。色調は暗灰色を呈する。

高坏 (12～15)　12～14は脚部片である。12は柱状の脚部で、坏部は広く開く。調整は外面はハケメを施す。坏部の内面はヘラミガキを施す。色調は淡褐色を呈する。13は柱状の脚部で、裾部付近で緩やかに開く。調整は縦方向のハケメを施す。色調は灰褐色を呈する。14は柱状の脚部である。調整は縦方向のハケメを施す。色調は灰褐色を呈する。15は坏部で、口縁は外反して広く開く。屈曲部には稜をもつが、鈍い。調整は外面は横ナデを施す。内面は暗文を施す。

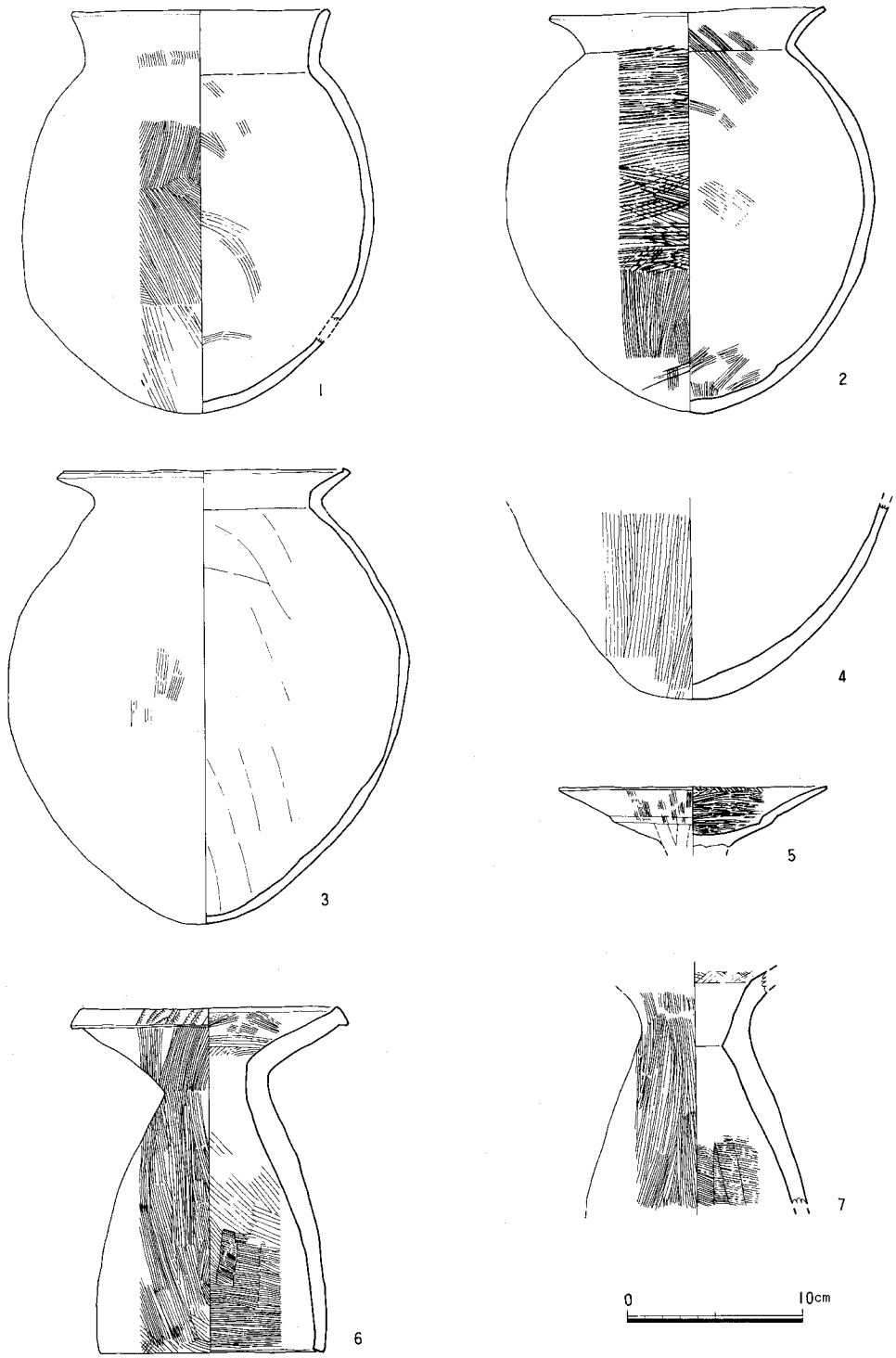


Fig.185　第1号井戸出土遺物実測図

色調は暗褐色を呈する。口径35.1cmを測る。

器台⑯　16は器台の受け部である。口縁端部は上方に肥厚し、外面にはヘラ状工具による刻目を施す。調整は内外面ともハケメを施す。色調は褐色を呈する。

砥石⑰　石材は粘板岩で、3面に使用痕が残る。残存長4.5cm、幅2.5cmを測る。

SE03出土遺物（Fig.186－18～20）

土師器　甕⑱　18は所謂布留式の甕である。口縁は内湾気味の開き、端部は面取りして、内側にわずかに肥厚する。体部は球形を呈し、丸底である。器壁は薄く、3～5mm程度である。肩部にはヘラ状工具による波状沈線を施す。調整は外面は縦・横方向の細かいハケメを施し、内面はヘラケズリである。内底面には指頭痕が残る。外面下半には煤が付着する。色調は淡褐色を呈する。器高24.5cm、口径16.4cmを測る。

壺⑲　19は複合口縁壺と考えられる。頸部は短く立ち上がり、肩部は強く張り出す。調整は外面はハケメ、内面はナデを施す。色調は淡褐色を呈する。

器台⑳　ラッパ状に開く脚である。調整はナデを施す。色調は淡褐色を呈する。

SE04出土遺物（Fig.186－21、Fig.187－22～35）

弥生土器　甕（21～25・31～34）　21は大型の甕で口縁の1／4が残存する。胴部下半で打ち欠いてある。口縁はくの字形を呈し、口縁下には断面三角形の突帯がつく。調整は外面は縦方向のハケメ、内面はナデを施す。色調は淡褐色を呈する。口径43.2cmを測る。井筒の一部として使用されたと考えられる。22は逆L字形を呈する口縁片である。調整は外面は縦方向のハケメ、内面はナデを施す。色調は褐色を呈する。口径27.0cmを測る。23～25はくの字形を呈する口縁片である。胴部は上半でややふくらむ。調整は外面は縦方向のハケメ、内面はナデを施す。23は口径28.4cmを、24は口径30.2cmを、25は口径33.4cmを測る。31～34は平底の底部片である。調整は外面は縦方向のハケメ、内面はナデを施す。31は底径10.6cm、32は底径11.4cm、33は底径11.0cmを測る。

壺（26～31）　26・27は広口壺の口縁片である。27には表面に赤色顔料が残る。口径は26は18.5cmを、27は20.8cmを測る。28・29は鋤先口縁を呈する広口壺である。29は端部外面にヘラ状工具で刻目を施す。口径は28は22.0cmを測る。30・31は袋状口縁壺である。30は口縁下に三角突帯がつく。器面には赤色顔料が残る。31は完形品である。口縁は短く内湾して袋状を呈する。体部は扁球形を呈する。器面にはわずかに赤色顔料が残る。器高15.2cm、口径6.2cm、底径6.4cmを測る。

瓢形土器㊱　瓢形土器の上半部にあたる。肩部には断面台形の突帯が巡る。器面には赤色顔料が部分的に残る。内面には指頭痕が見られる。

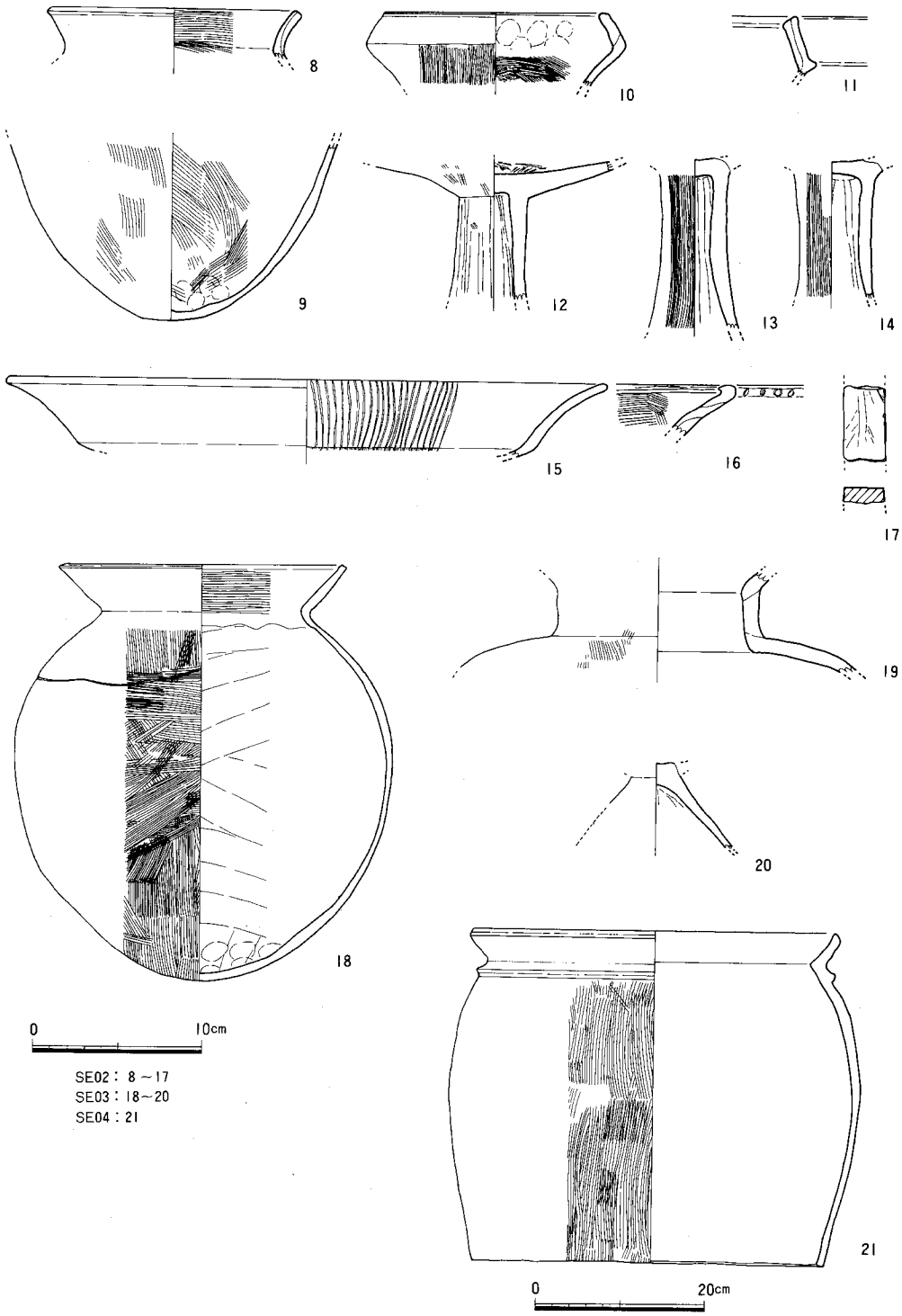


Fig.186　第２～４号井戸出土遺物実測図

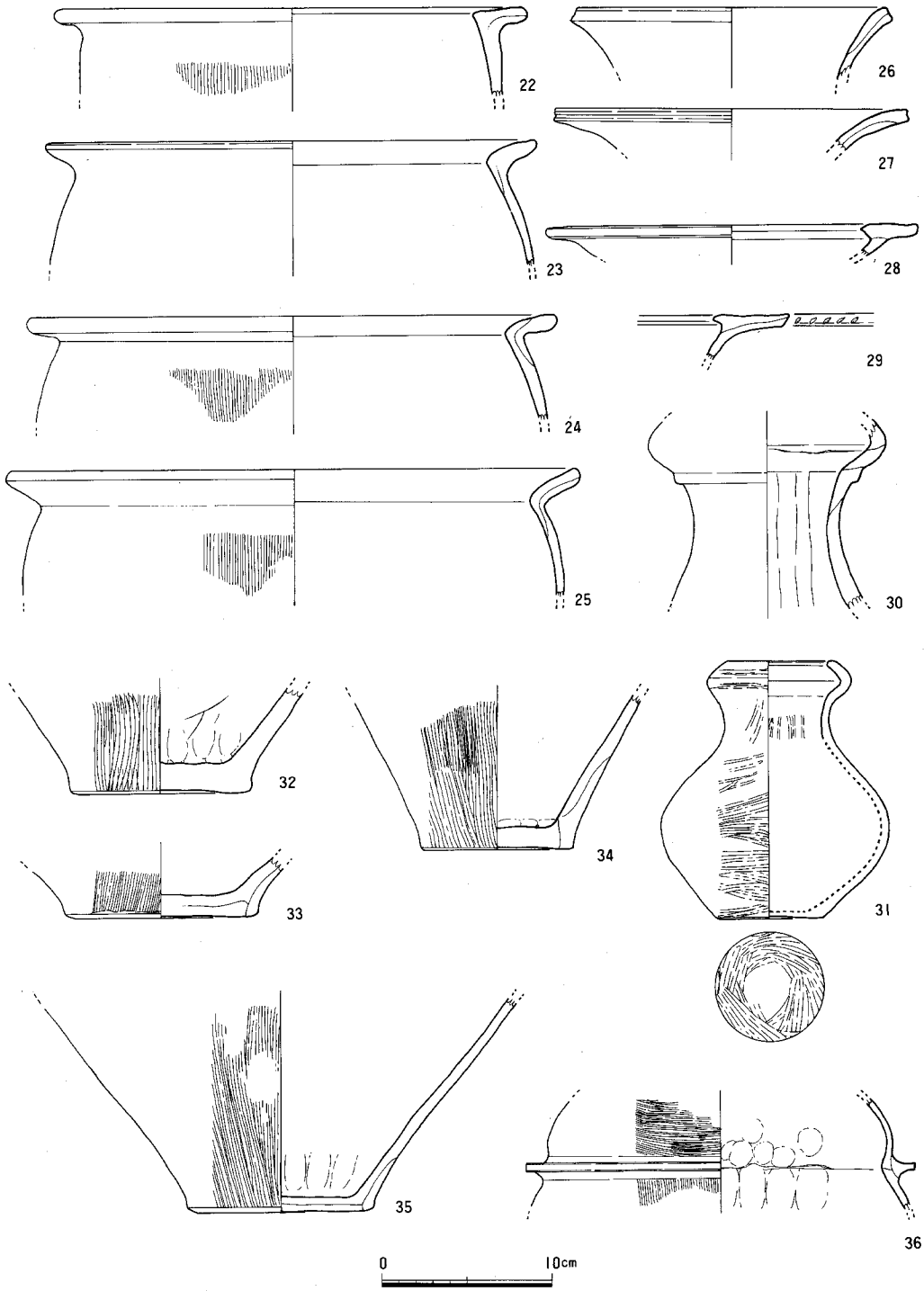


Fig.187　第４号井戸出土遺物実測図

(3)掘立柱建物

今回の調査では多数の柱穴を検出したが、建物として復元できたのは4棟である。柱穴は調査区の全体に見られたが、東南隅に著しい集中が見られる。東側の7次調査においてはその周辺に建物の集中しており、本調査区の東南側に建物の広がりがあることが予想される。

4棟の建物は互いに切りあっており、切り合い関係を記すと以下のようになる。

SD05 ⟶ SB07 ⟶ SB08

SB07 ⟶ SB09 ⟶ SB10

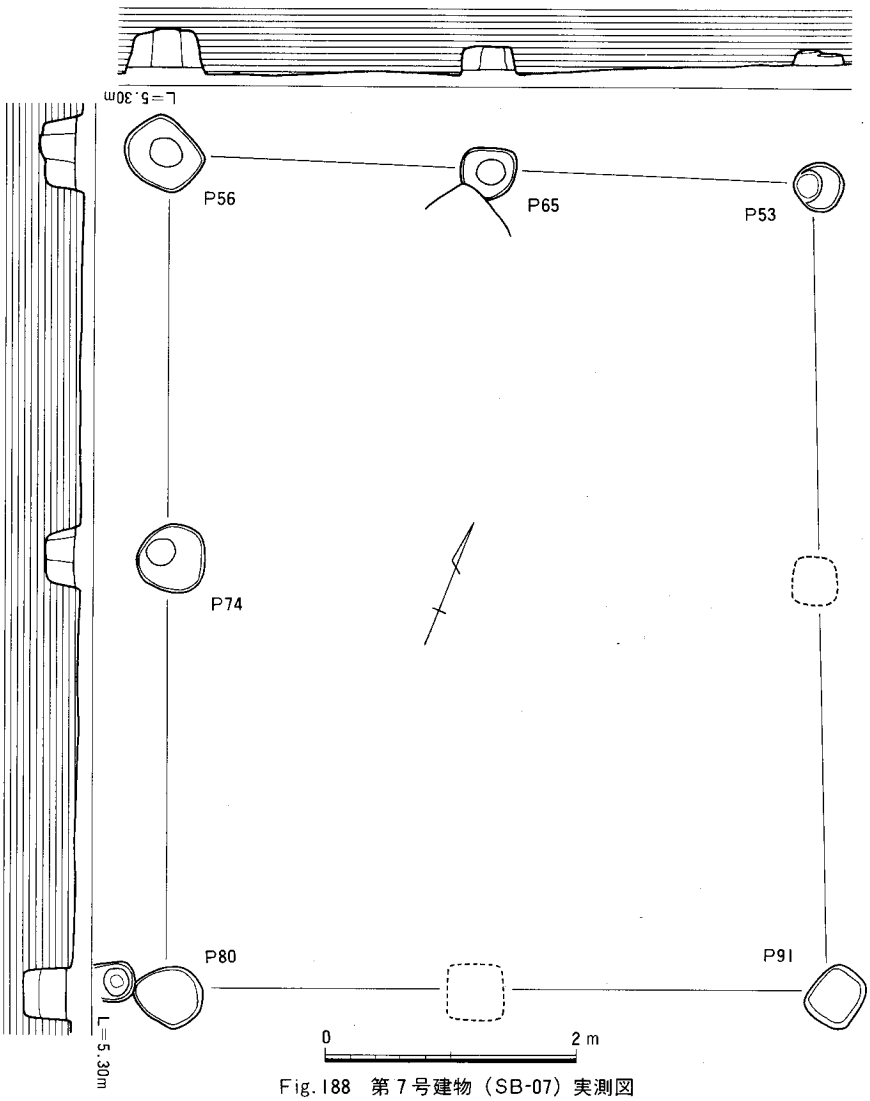


Fig. 188　第7号建物（SB-07）実測図

SB07 (Fig.188)

調査区中央にある2×2間の建物跡で、長軸方位をN－21°－Wにとる。基礎杭によって、柱の一部が欠けているが、梁行約5.2m、桁行約6.8mを測る。柱間は梁行は2.5m・2.5m、桁行は3.2m・3.5mを測る。柱穴の平面形は不整円形で、径20～30cmを測る。遺物は柱穴の覆土から弥生土器片が少量出土している。

SB08 (Fig.189)

調査区の西側にある1×3間の建物跡で、長軸方位をN－27°－Wにとる。基礎杭によって、柱の一部が欠けているが、梁行約3.5m、桁行約5.2mを測る。柱間は桁行は1.8m・1.8m・1.5mを測る。柱穴の平面形は不整方形で、径20～30cmを測る。遺物は柱穴の覆土から弥生土器片が少量出土している。この建物跡はSC06と重複するが、先後関係はSC06に後出するものと考える。

SB09 (Fig.190)

調査区の東側にあり、調査区の外側に広がるが、1×3間の建物跡と考える。長軸方位はN－66°－Wにとる。基礎杭によって、柱の一部が欠けているが、梁行約5.2m、桁行約8.0mを測る。柱間は桁行は2.9m・2.5m・2.5mを測る。柱穴の掘り方は約50～100cmの長さの長方形プランである。P66、P67、P103には底に礎板が敷かれている。P66は15×40cmの板を一枚、P67は30cmの方形の板を一枚、P103は10×30cmの板を四枚を礎板に使用する。遺物は柱穴の覆土から弥生土器

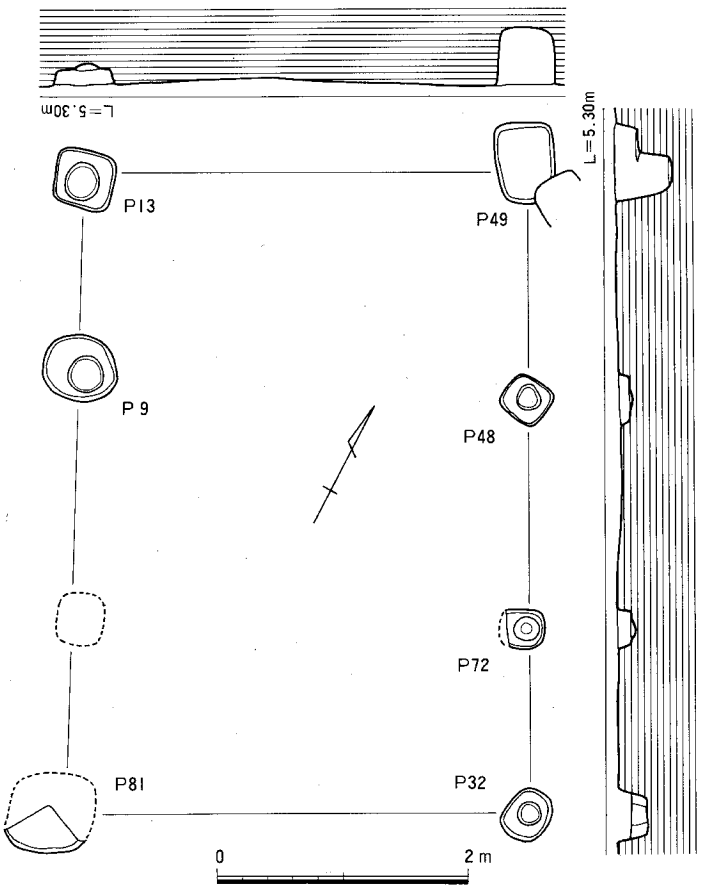


Fig.189　第8号建物（SB－08）実測図

片が少量出土している。42はP103から出土した壺口縁である。

SB10 (Fig.191)

調査区の東側にあり、調査区の外側に広がるが、1×3間の建物跡と考える。SB09との切り合い関係から、SB09を建て替えて、SB10を建築したものとと考える。P66では底の二ヵ所に礎板があり、柱を抜いた後にもう一度その位置に柱を立てたものと考える。長軸方位はN－60°－Wにとる。基礎杭によって、柱の一部が欠けているが、梁行約3.29m、桁行約7.5mを測る。

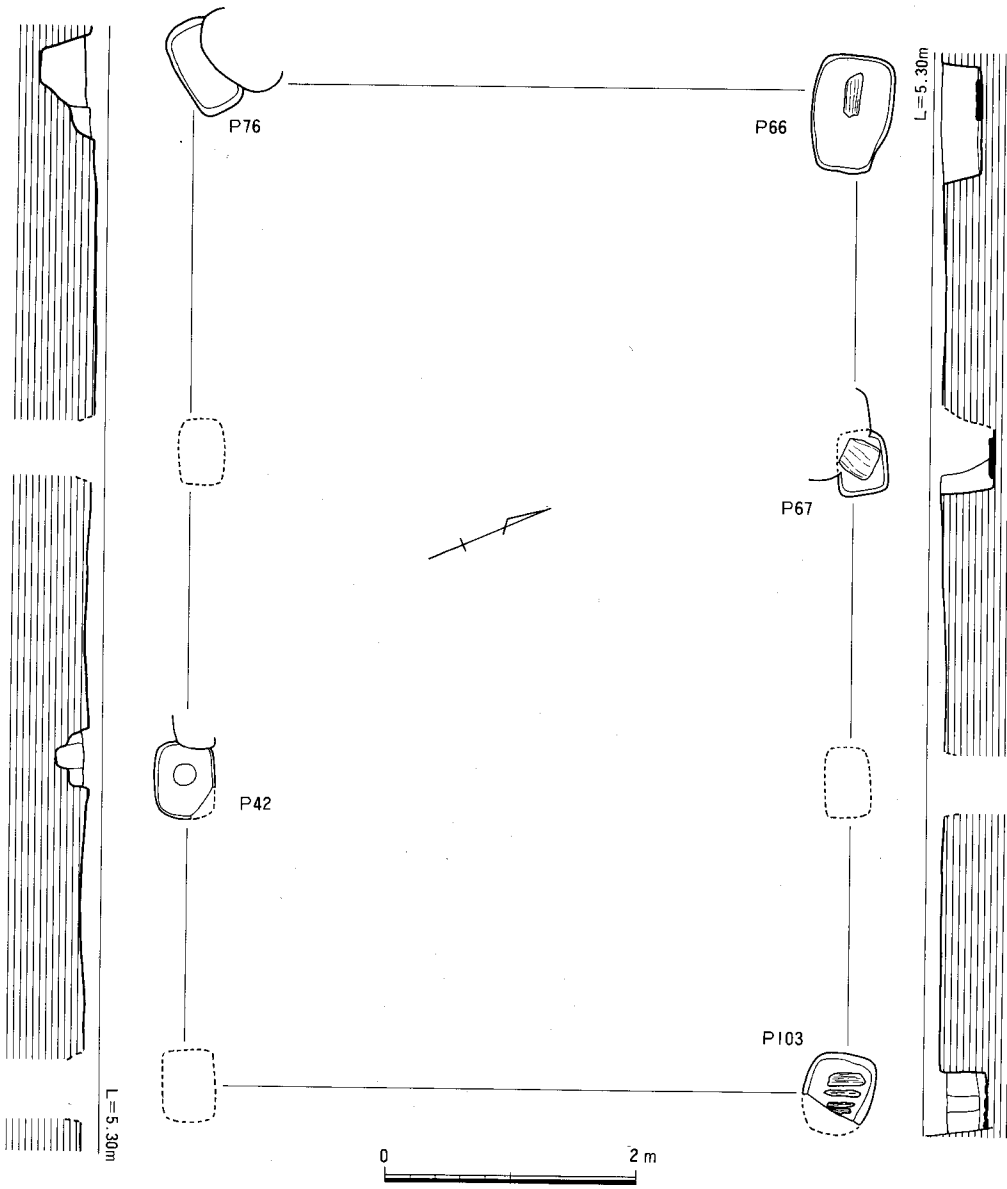


Fig.190　第9号建物（SB－09）実測図

柱間は桁行は、2.3m・2.7m・2.5mを測る。柱穴の掘り方は約50～100cmの長さの長方形プランである。P46、P51、P102は堀り方の底を掘りくぼめた二段掘りになっている。そして、その位置に礎板には10×30cmの板が二枚使用される。遺物は柱穴の覆土から弥生土器片が少量出土している。

これらの建物の時期であるが、出土遺物と切り合い関係から、SB07はSD05に後出する中期中葉以降、SB08はSC06・SB07に後出する中期後半以降、SB09は出土遺物から弥生時代後期後半、SB10はSB09に後出する弥生時代後期後半～古墳時代初頭の時期に位置づけられると考える。

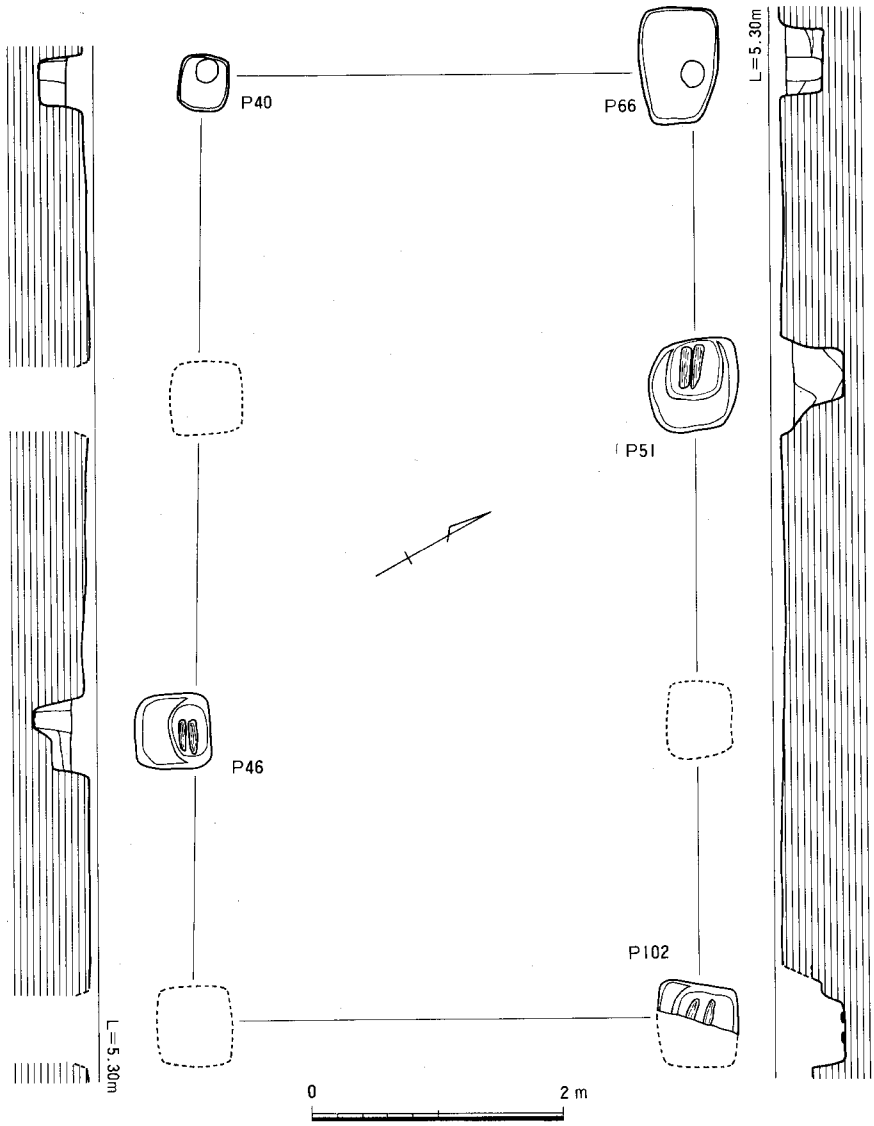


Fig.191　第10号建物（SB－10）実測図

(4)その他の遺構、遺物

SD05

調査区中央に位置する南北溝である。途中途絶えているが、幅60cm、深さ10cmを測る。覆土は暗褐色粘質土である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

SD05出土遺物 (Fig.192－37～39)

弥生土器　甕（37～39）37～39は逆L字形を呈する口縁片である。調整は外面はハケメ、内面はナデである。37は口径29.0cmを測る。

これらの出土遺物などからSD05は弥生時代中期前半～中葉に位置づけられると考える。

柱穴出土遺物 (Fig.192－40～42)

柱穴からは弥生土器、土師器等が出土したが、実測しえたのはわずかである。

40はP83から出土した甕の口縁片である。逆L字形を呈す。41はP98から出土した小型の器台である。調整は内外面ともハケメを施す。色調は淡褐色を呈する。口径9.4cmを測る。42はSB09のP103から出土した複合口縁壺である。口縁は直線的に内傾し、端部は上方につまみ上げる。屈曲部は内外面とも明瞭な稜がつく。調整は外面はハケメ、内面はナデを施す。口径17．3cmを測る。

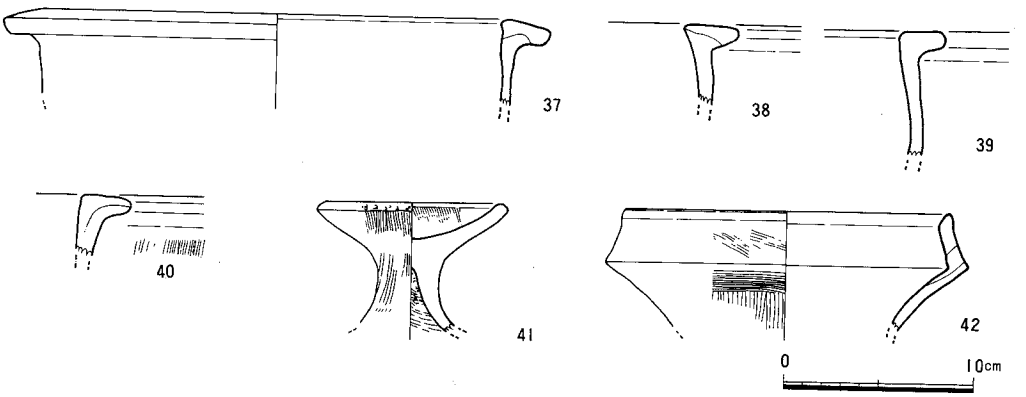


Fig.192　第5号溝（SD-05）、柱穴出土遺物実測図

3．小結

本調査地点は165m²と狭く、旧社屋の基礎等の撹乱で不明確な部分が多かったが、竪穴住居跡、井戸、掘立柱建物、溝、柱穴などを検出した。ここでは今回の調査で得られた成果と問題点について述べていく。

竪穴住居跡は1軒検出した。削平のため、壁溝の有無、規模など不明確な部分が多いが、中央穴と6個の主柱穴からなる円形プランの住居跡と考える。

井戸は4基検出した。井戸は1m前後の円形プランで、機能的に二種類に分けられる。一つは

雨水等を利用した湧水層まで達していない。いま一つは湧水層まで掘りこんだもので、SE04が相当する。比恵遺跡では今までの調査で鳥栖ローム層と八女粘土層の境と、八女粘土層の下の硬砂層に湧水層があることが知られている。SE04は前者の湧水を利用した井戸である。弥生～古墳時代にかけて素掘りの井戸が多い中で、SE04からは井筒に使用したと考えられるくり抜きの木製品が出土した。これは直径60cm程の丸太材を半裁し、その中をくり抜いたもので、高さ60cmを測る。出土した位置が井戸の中位であり、その他に土器や木材が廃棄されていたため、どの様に埋設されていたかは不明である。ただ、この井戸からは打ちかかれた大型の甕形土器が出土しており、これと併せて井筒として使用されたと考えられる。弥生時代のくり抜きの井筒の出土例は畿内では唐古遺跡や池上遺跡などが知られている。[(1)]比恵遺跡では第6次調査地点SE17から大型の甕形土器を利用した井筒が、[(2)]第7次調査地点では底に大型の槽を設置した井戸が検出されている。[(3)]周辺の板付遺跡でも第3号井戸から壁を補強するためと考えられる粗朶が検出されている。[(4)]比恵遺跡ではこの他、井桁に組まれて使用された可能性がある加工木が第6次調査地点のSE33で出土している。同様な例は有田遺跡第3次調査地点1号井戸で見られる。[(5)]井戸の構造を考える意味で今後これらの出土例の増加が期待される。

掘立柱建物は4棟検出した。調査区の東南隅には柱穴が集中しており、調査区外に建物が広がると予想される。建物は1×3間、2×2間の規模のものを検出した。建物は主軸方位、規模から大きく二時期に分けられる。Ⅰ期はN－60～66°－Wで、20～30cmの柱穴の建物である。SB07、08がこれに相当する。これらは切り合いなどから弥生時代中期後半～後期前半に位置づけられる。Ⅱ期はN－20～30°－Wで、50～80cmの柱穴で、底に礎板を敷いた建物である。SB09、10がこれに相当する。これらは切り合いなどから弥生時代後期後半～古墳時代初頭に位置づけられる。隣接する第7次調査西側にも後者の建物が多く検出されており、建物の集中が認められる。これらの建物は倉庫などの性格が考えられるが、Ⅱ期は比恵遺跡では環濠が営まれる時期でもあり、そのこととあわせて集落の在り方を考えなければならない。

今回の調査で検出した遺物・遺構は弥生時代中期前半から古墳時代初頭にすべておさまると考える。本調査区の北側には第7・13次調査で検出された2×7間の大型建物とそれを囲む柵列がある。これらは、那津官家に関連する遺構と考えられているが、今回の調査ではそれに関連するような遺構・遺物はなく、この位置が空白地であった可能性が考えられる。今後の周辺の調査成果が待たれる。

註

(1)宇野隆夫「井戸」『弥生文化の研究』7　1986

(2)福岡市教育委員会「比恵遺跡－第6次調査・遺構編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第94集』1983
　福岡市教育委員会「比恵遺跡－第6次調査・遺物編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第130集』1986

(3)小林義彦氏の御教示

(4)森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』1961

(5)福岡市教育委員会「有田・小田郡　第8集」『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第155集』1987

第8章　第28次調査地点

1．調査の概要 (Fig. 1)

本調査地点は比恵丘陵の北端部に位置する。土層は調査区際まで延長したトレンチで観察を行った。これは、試掘時まで良好に遺存していた遺構が、その後の基礎解体によって大半を破壊されていたことによる。残念な事である。

層序は第1トレンチで客土下、水田土壌、床土、検出面の鳥栖ローム（標高4. 05m）になる。第6トレンチでは、床土下、砂層と粘土の互層が堆積し、更にその下には青灰色粘土が堆積する。この青灰色粘土は遺構埋土ではなく、台地落ちに自然堆積した可能性がある。ロームは標高3. 50mまで下降する。砂層は調査区南東から北半にかけて堆積する。遺物の出土状況および、ロームの起伏の形状は調査区南東から北西にかけての流水を示していると考えられる。これは、台地形状に対応するものであろう。上述の砂層中から出土した遺物は5mメッシュを組んで、取り上げた。遺構番号は、その性格別に通し番号を付した。SC（住居跡）は2まで、SK（土壙）は6まで、SD（溝）は3まで、SX（砂層の溜り）は3までを記す。

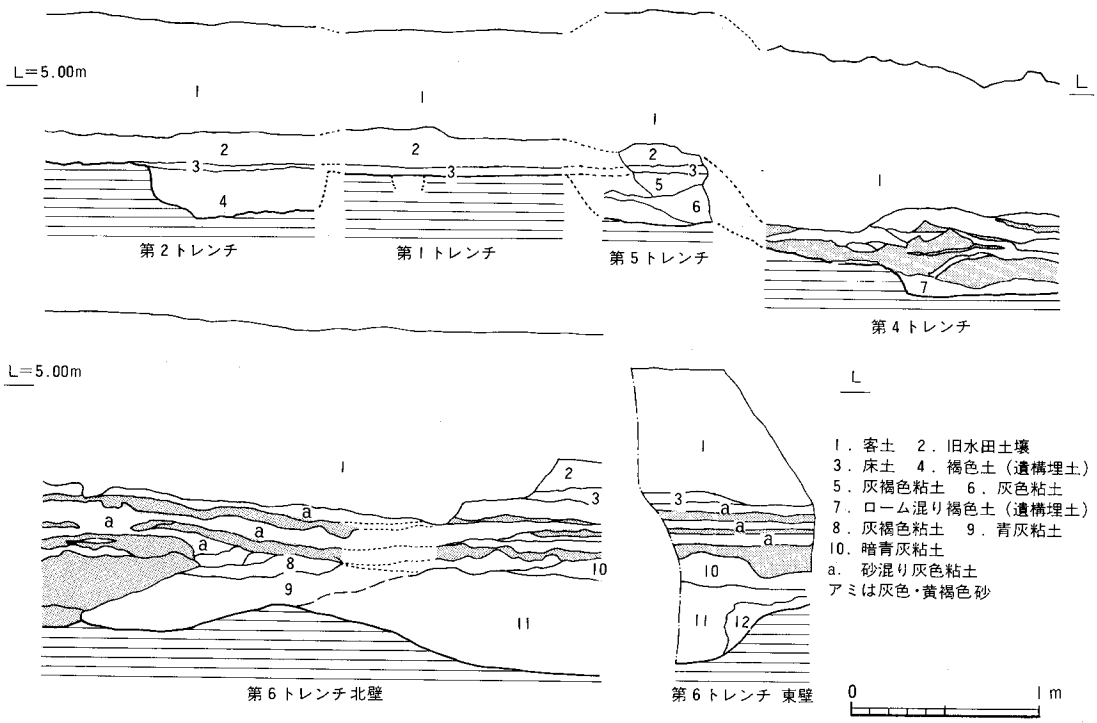


Fig.193　第28次調査地点トレンチ土層断面図（1/40）

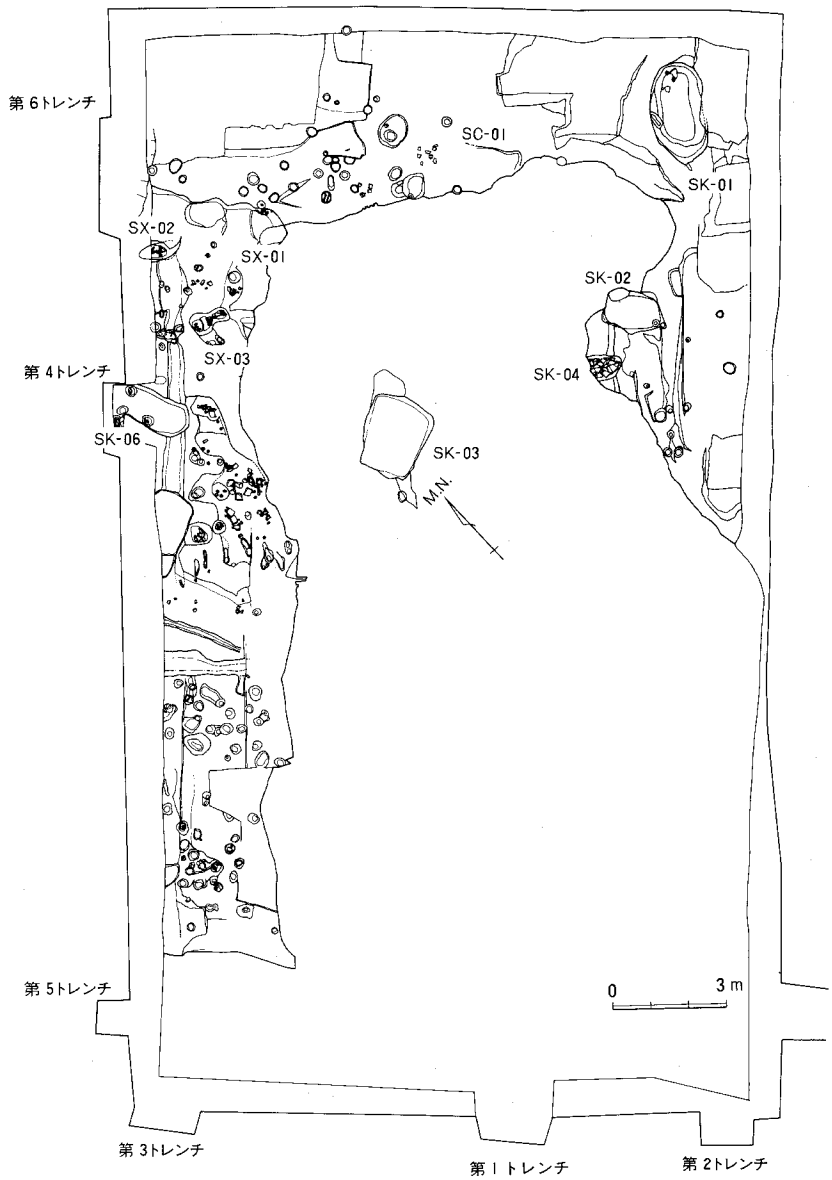


Fig.194　遺構配置図(1/200)

2．調査の記録

検出した遺構は弥生前期から中期にかけてのものに限られた。

(1)竪穴住居址 (Fig.2)

調査区東部に灰色砂と粘土に覆われた住居跡が2軒検出された。何れも残りが悪く、プランは正確に把めない。撹乱落ち際に炉址が検出された。遺物は細片少量。

(2)土壙

調査区東半に貯蔵穴、(SK－03)、甕棺、(SK－04) を含む総数6基を検出した。

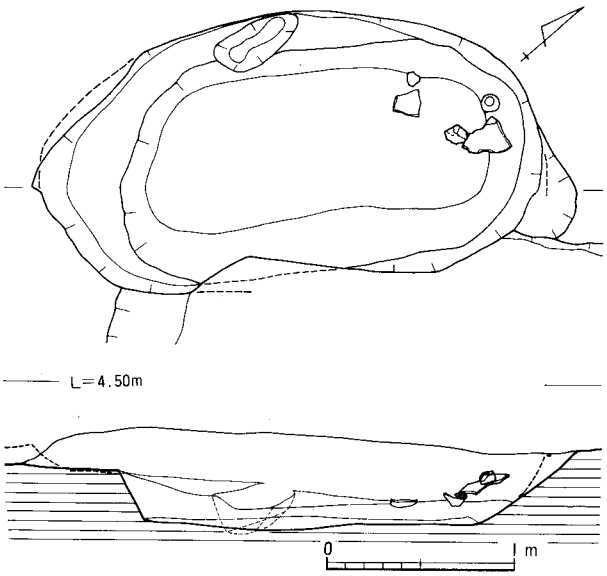


Fig. 195 SK-01実測図 (1/40) 実測図

SK－01 (Fig.195、200、202)

長軸長2.7m、短軸長1.4mの楕円形プランを呈す。深さは25cm。下層に灰黒色粘土が堆積する。遺物の1は内面ナデを施す。外面不明。2は外面ミガキ、内面不明。3は外面肩部に3条の沈線を施し、外面は横位のミガキ、内面肩部に指頭痕が残る。4は口縁端部にヘラ状原体による刻みを施す。5は3に近似した器形を施す。器面が剝落するが内面ミガキであろう。14の石包丁は表面の剝落が著しい刃部は摩耗し、丸い。頁岩製。15は滑石製紡錘車で、径3.7cmを測る。

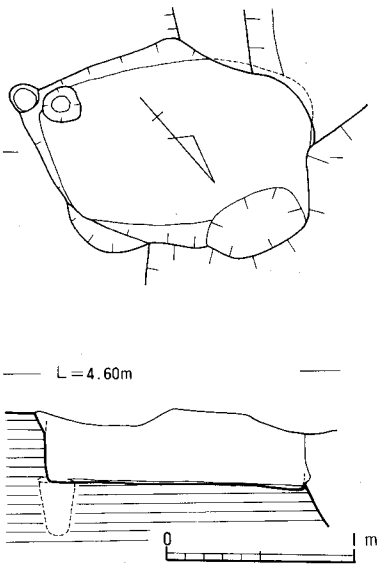


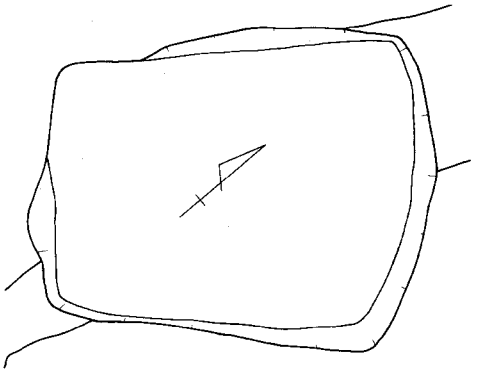
Fig. 196 SK-02実測図 (1/40)

SK－02 (Fig.196)

撹乱で、本来の形を失しているが歪な方形プランに復原できる。長軸1.4m、短軸1.0mを測る。基底部はほぼ平坦で、壁の立上がりは直に近い。遺物は弥生の細片少量。

SK－03 (Fig.197、201、203)

調査区のほぼ中央に破壊を辛じてまぬがれ遺存していた。長軸2.05m、西辺1.30m、東辺1.68mの台形プランを呈す。深さは約1m遺存し、検出面から－60cmの中央部には黒色粘土が堆積する。基底面はほぼ平坦で、このレベルでは湧水が著しい。遺物の6は壺胴部片である。4条の弧形の沈線と横位の1条の沈線が施文される。胎土は精良。7～9は口縁端部に刻みを施すが、8、9はその下位につく。8の外面には細かい摩耗したハケメが残るが、7、9はナデによってハケメはほとんど消される。10の外面は2条の突帯間をナデ調整、下位に条痕を施す。突帯には棒状の原体で刻みを付す。内面はナデ調整で、粘土帯の継目が認められる。11、12の底部片が外へ張り出すのに対し、12は不明瞭である。12の外面はナデによる粘土のはみ出しが著しい。6、9、10、13は下層の黒色粘土から出土。16は硬質砂岩製の太型蛤刃石斧である。刃部に同一方向の擦痕を残す17は、16と同一石材による柱状片刃石斧の基部である。柄装着用の低い突起を造



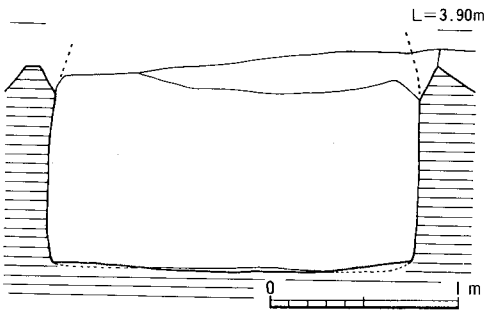


Fig.197　SK－03実測図（1/40）

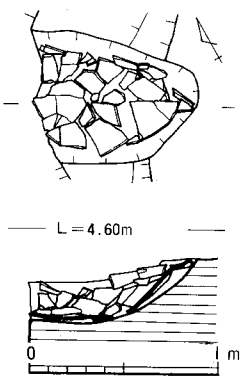


Fig.198　SK－04実測図

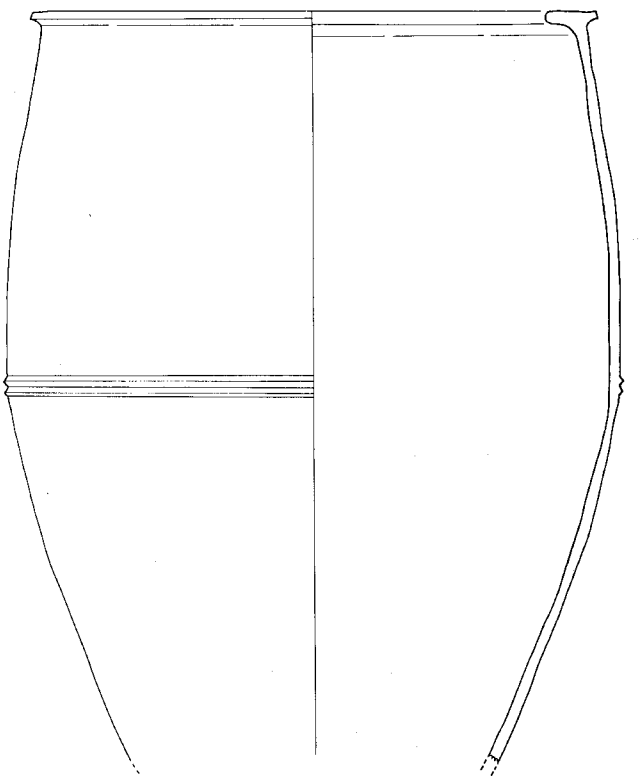


Fig.199　SK－04甕棺実測図（1/8）　0　20cm

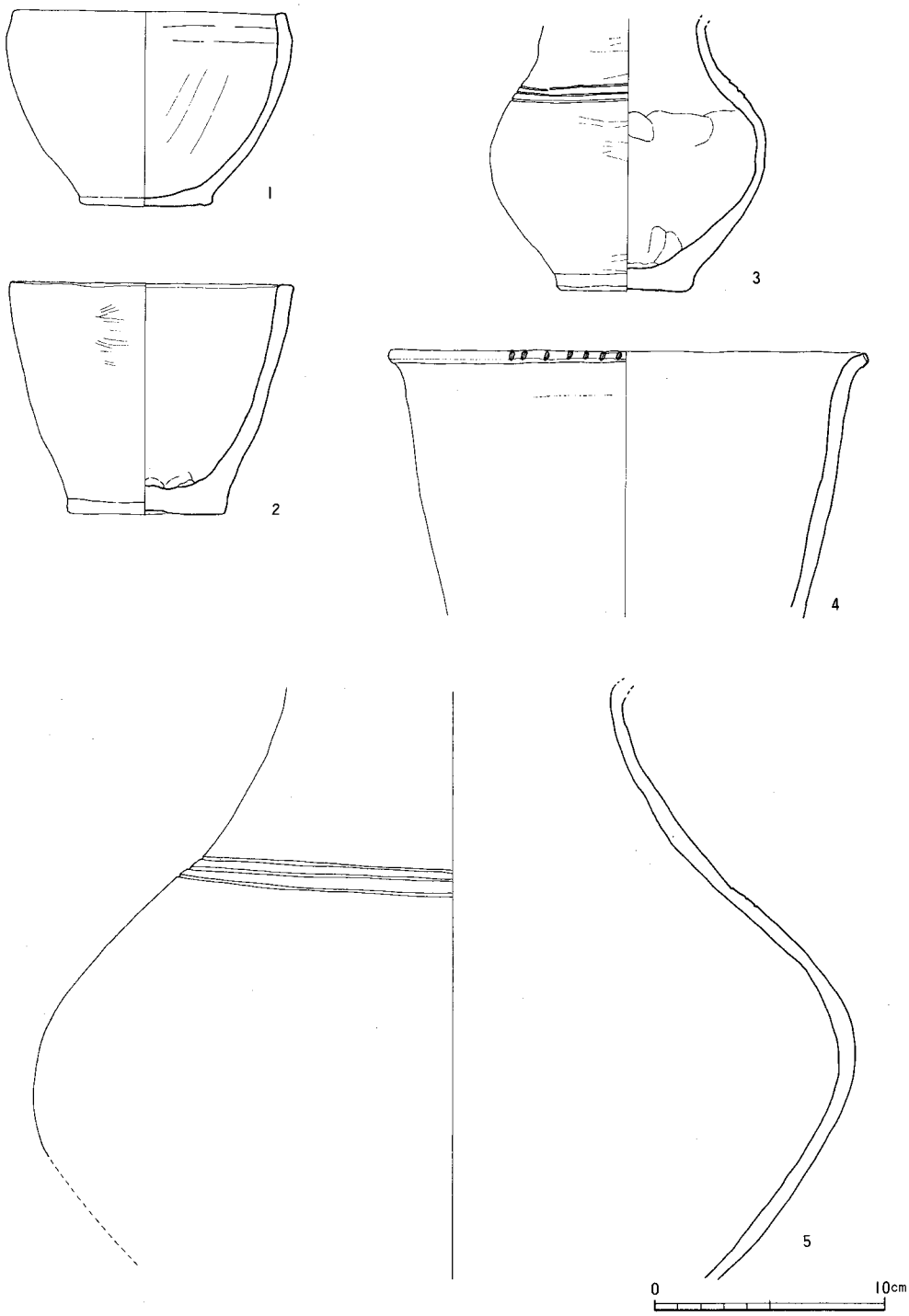


Fig.200　SK－01出土遺物実測図（1/3）

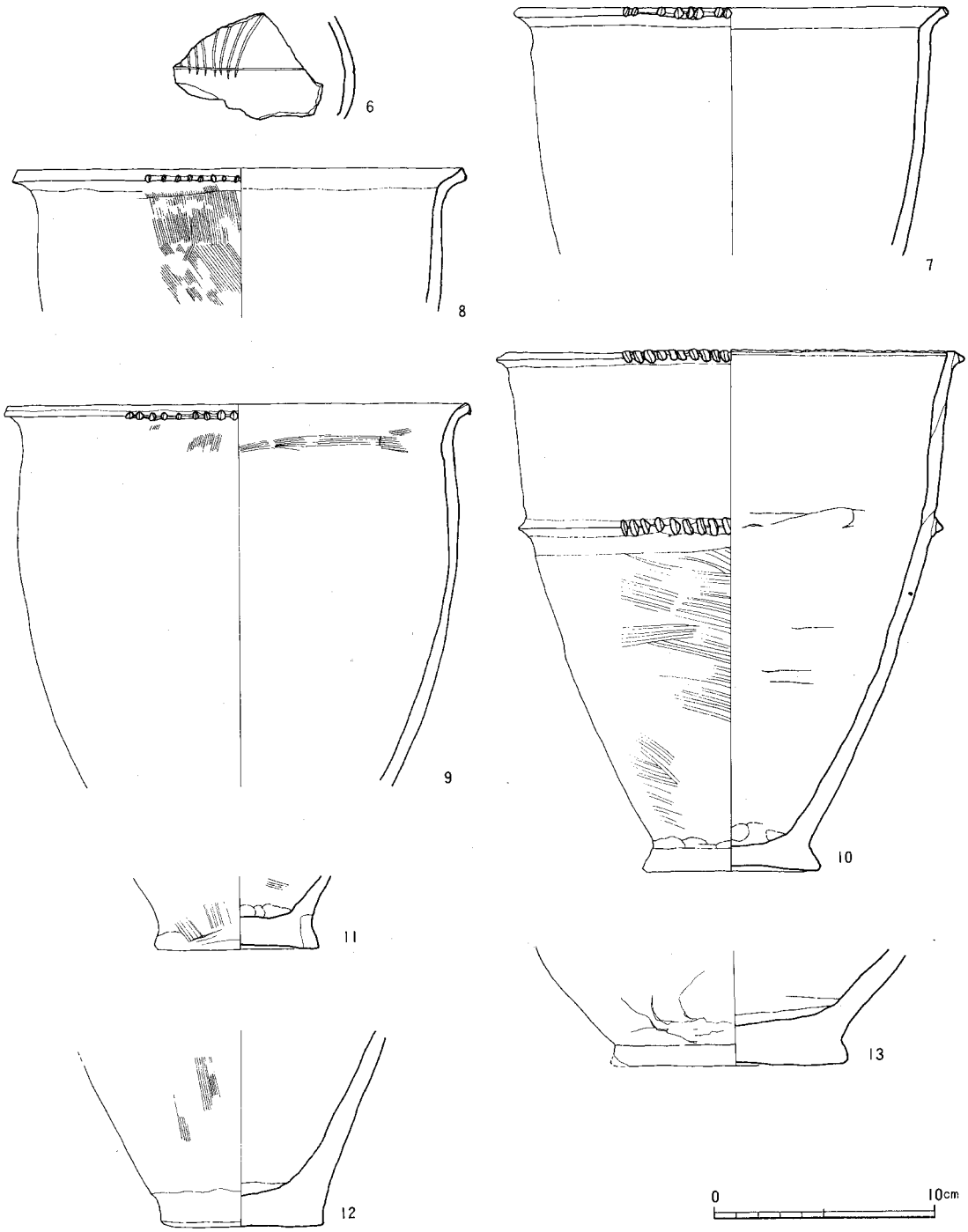


Fig.201　SK－03出土遺物実測図（1/3）

り出す。研磨は横位の方向に行う。幅4.6cm、厚み2.8cmを測る。

SK－04 (Fig.198、199)

破壊により、その大半を失する。甕棺はほぼ水平に埋置される。復原した胴部最大径は66cmを測り、この最大径部ないし、やや下に2条の突帯が巡る。弥生中基中葉か。

SK－06 (Fig.204、205)

第4トレンチ内で検出された。短軸97cmの隅丸方形を呈す。埋土は砂によって著しく、削平を受けている。尚、付近の柱穴には柱根、礎板が遺存する。遺物は18の外面はタテハケ後ナデ。19～21は器面が荒れ調整不明。

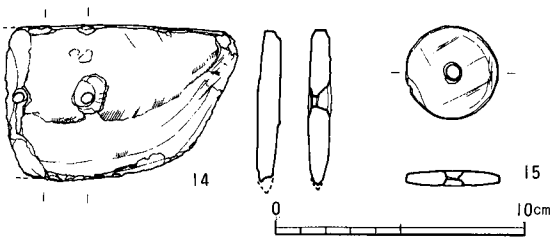


Fig.202　SK－01出土石器実測図(1/3)

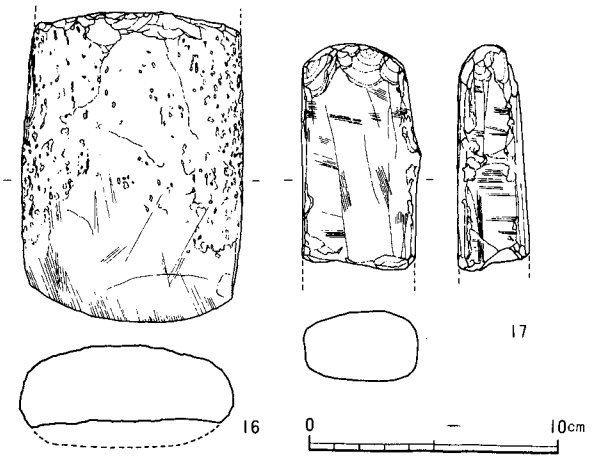


Fig.203　SK－03出土石器実測図(1/3)

(3)灰色砂層中出土遺物

(Fig.206～208)

調査区北半のほぼ全域に堆積する砂層を一応、SD－01と認定し更に5mメッシュを組み遺物取り上げを行った。また、砂層下の灰色粘土中出土との区別も記した。灰色細砂の溜まりにはSXをネーミングした。27～33は調査区北西部の砂層から出土した。SD－01出土遺物の中で下限を示す。31の外面は突帯から上位をヨコ方向のナデ調整、下位には粗いタテハケをわずかに残す。33の口縁部の内外面屈曲より上位に施された横位のハケメはナデ調整により消される。30は土製の紡錘車である。35、36、39は調査区北東部に位置するSX－01付近の砂層下灰色粘土から出土。この粘土(層厚約10cm)と砂から出土した遺物には他の細片から見ても時期差がほとんどない。40～46はSX－02灰色細砂中から出土。41の内面は横位のハケ後ナデ調整。端部近くに明瞭な段を有す。42の外面2条の突帯

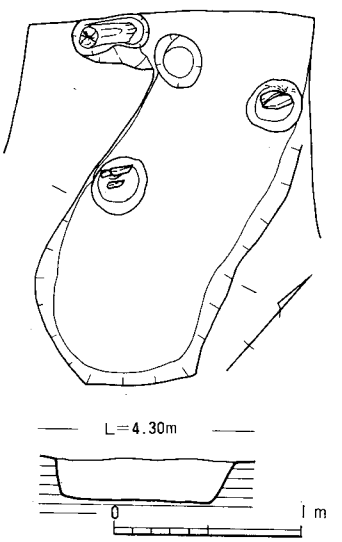


Fig.204　SK－06実測図(1/40)

には刻みがヘラ状のもので施される。44はSK－04の甕棺口縁と似る。以上の他に灰色砂～粘土中から出土した土器細片はコンテナ約15箱の量である。

概ね、弥生前期後葉～中器中葉までのものがほとんどで、降るものは調査区北西部砂層中のものに限られる。22はSX－03出土の土製紡錘車である。23は調査区北側中央の砂層中出土。土製で、中央部が突起する。突起面には約10列にわたって中心部から外周へ右回りの刺突を施す。裏面はほぼ平坦。中心部に径0.35cmの孔を穿つ。径5.3cm、厚さ2.4cm。24は頁岩製の磨製石鏃である。現存長6.6cm。鏃は摩耗し不明瞭。本来、平坦なものであろう。25は砥石を2次加工した敲石である。側縁に細かな敲打痕が残る。石材は頁岩又は凝灰岩。26は滑石製の紡錘車未製品である。径5.4cm。24～26は調査区北中央～東側の砂層中出土である。

(4)柱穴・遺構検出時出土遺物

(Fig.208、209)

47はSC－01検出時出土。頁岩製の石包丁片である。48は玄武岩製の太形蛤刃石斧である。基部、刃部とも欠損する。灰色砂層中出土。49は滑石製品である。用途は不明であるが、大型石錐とも考えられている。比恵遺跡では弥生後期～古墳前期にかけて多くの出土例をみる。3/4を欠損するが径約14.0cmに復原できる。石材は明るい褐色を呈す質の悪いものである。

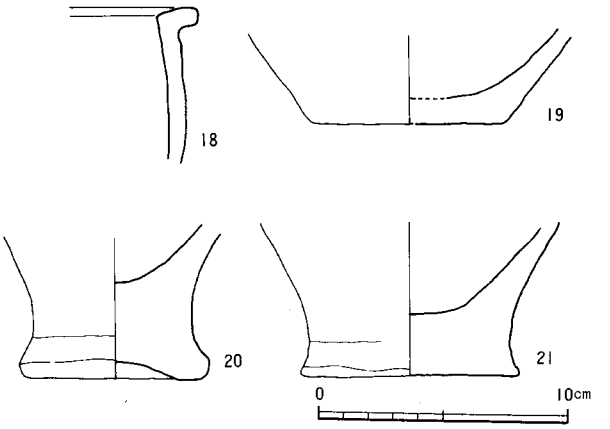


Fig.205　SK－06出土遺物実測図（1/3）

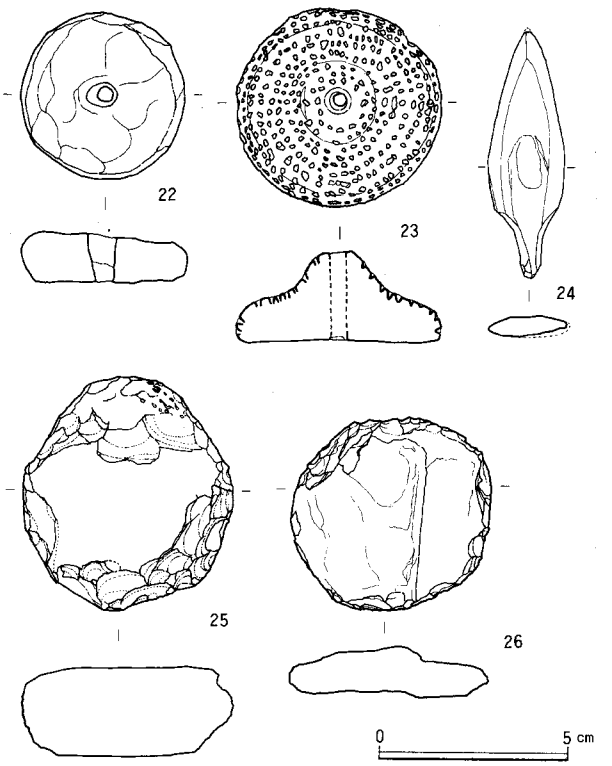


Fig.206　灰色粗砂出土土製品・石器（1/2）

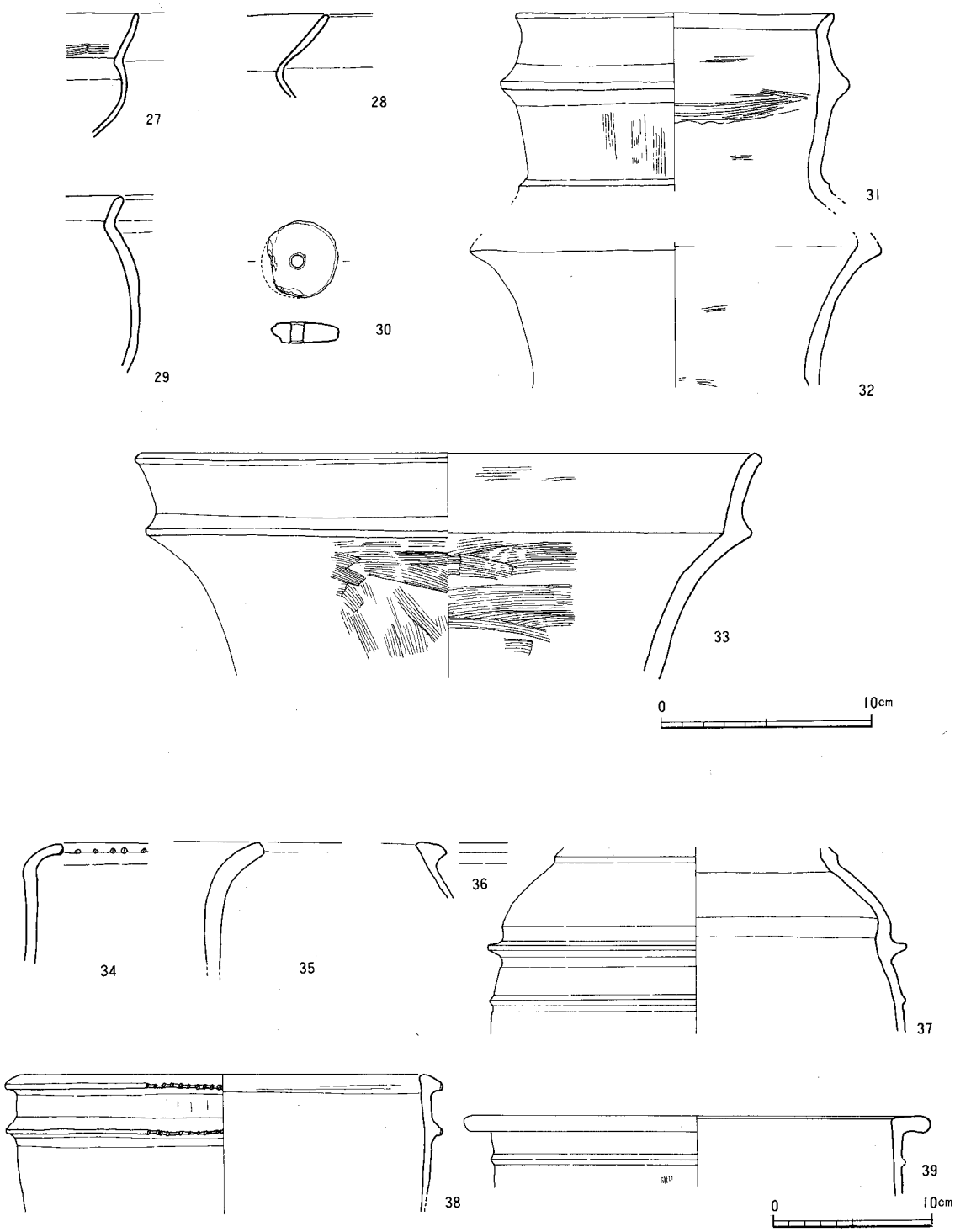


Fig.207　灰色粗砂出土土器実測図　Ⅰ　(27～33は調査区北西部から出土)(1/3、1/4)

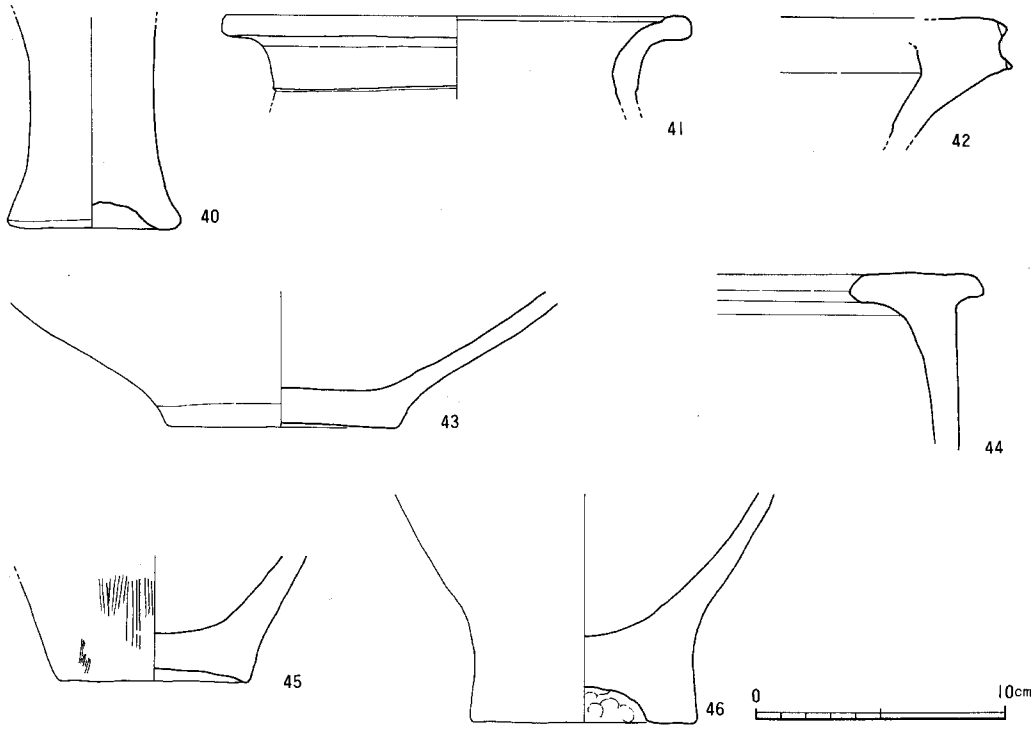


Fig. 208 灰色粗砂(SX02)出土土器実測図 2 (1/3)

3. まとめ

1、本調査区は、比恵台地の最北部に位置する。第4トレンチで検出されたロームの落ちは台地際の可能性がある。2、台地際は流水を示す砂層の堆積が認められた。砂層中の出土遺物は弥生前期後葉～中期中葉のものが大多数で一部、下限を示す古墳前期の遺物が出土した。3、遺構は大半を破壊されていたが板付Ⅰ式期の貯蔵穴が検出された。南側に隣接する第26次調査で検出された貯蔵穴の延長か。弥生中期中葉には甕棺群となる。

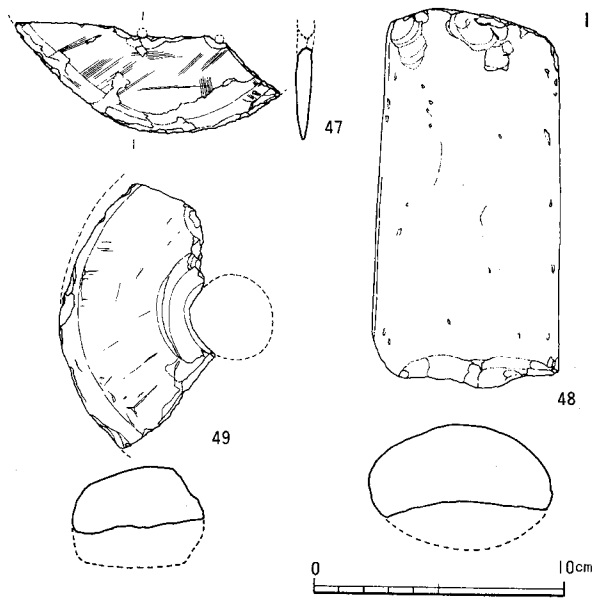


Fig.209 柱穴検出時出土遺物実測図 (1/3)

第9章　自然科学的調査

1　比恵遺跡24・25次調査によって得られた試料の花粉分析

野井英明*

1　はじめに

福岡市博多区博多駅南三丁目に位置する比恵遺跡第24・25次調査区(第1図)は、地形的には阿蘇－4火砕流堆積物の末端相である八女粘土が形成する台地（中央段丘上位面）と沖積面の境界付近に位置する。

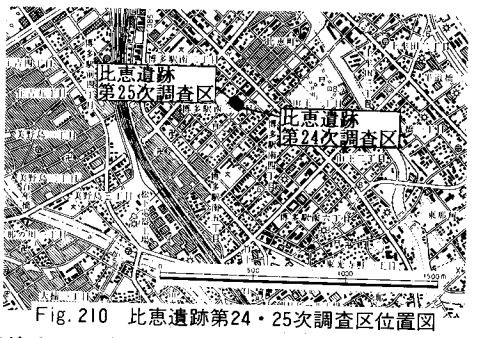


Fig. 210　比恵遺跡第24・25次調査区位置図

この台地を浸食して形成された埋没谷を埋める堆積物は、黒色粘土層で、上下2層に区分される。上下層の境界付近から下層にかけて、弥生時代前期後半から中期初め頃の遺物が多量に出土した。また、この黒色粘土層には多くの植物遺体、特に、イネ科の植物の茎が多く含まれている。この地層と八女粘土の境界は概して明瞭であり、土器片が境界に張り付くように散乱しているのが観察されることがある。また八女粘土と黒色粘土層が接する部分では黒色粘土層が八女粘土層に取り込まれている部分があり、多少の撹乱が推定される。この黒色粘土層は、水田として利用されていたのではないかとの指摘（吉留、私信）があり、今回の報告では、花粉分析によって同遺跡周辺の植生を明らかにするとともに、この問題についての考察も行った。

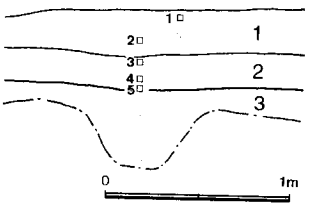


Fig. 211
比恵遺跡第24次調査区における花粉分析試料採取層準(第3調査区南北壁)

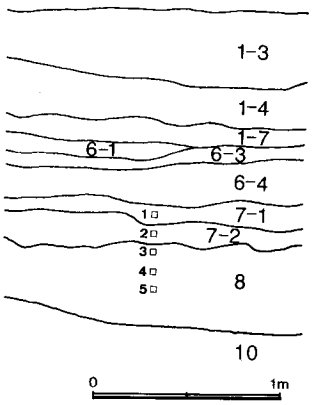


Fig. 212
比恵遺跡第25次調査区における花粉分析試料採取層準（E-4-33区 調査区壁面）

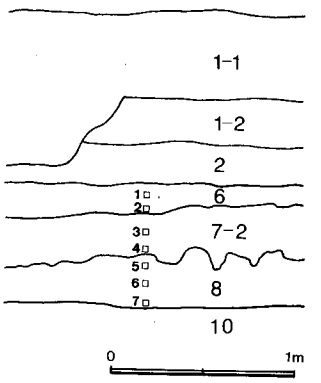


Fig. 213
比恵遺跡第25次調査区における花粉分析試料採取層準(A-3-6区　調査区壁面)

2　試料と方法

比恵第24次調査では、第3調査区南北壁面から採取した5点（Fig.211）、比恵第25次調査では、E－4－33区調査区壁面から採取した5点(Fig.212)、A－3－6区調査区壁面から採取した7点(Fig.213）の試料の花粉分析を行った。

化石花粉は、10%KOH処理、飽和$PbCl_2$による重液分離、アセトリシス処理によって抽出し、グリセリンジェリーを用いて封入した。同定は、400倍の光学顕微鏡下で花粉・胞子の総数が400～500個になるまで行い、結果を樹木花粉を総数とする百分率をダイアグラムで示した（Fig.214、215、216)。また、イネ科花粉については、位相差装置を用いてイネ型（OryzaType）と野性型（WildType）に区分を試みた。中村（1974）は、多くのイネ科花粉の表面突起の分布を走査型電子顕微鏡と位相差顕微鏡を用いて観察し、その分布状態の分類を行った。それによると、位相差像による表面構造は、(1)punctate 単独突起のみがほぼ当間隔に分布するもの、(2)maculate 単独突起と小形の島状突起が混在するもの、(3)areolate 島状突起のみよりなるもの3つに大きく区分されている。イネ、オオムギ、コムギ、カモジグサの表面構造は、中村（1974）による分類の(2)maculate に含まれ、この特徴によって、イネとそれ以外のイネ科花粉とを区分することがある程度可能になる。ここでは、位相差像による観察によって、表面構造がmaculate であるものをイネ型、それ以外を野性型と呼ぶこととする。ダイアグラムでは、イネ型の樹木花粉に対する百分率をあわせて示した。

3　結果

今回の花粉分析によって検出された花粉・胞子はつぎの通りである。

AP（樹木花粉）

Pinus（マツ属）、***Abies***（モミ属）、***Tsuga***（ツガ属）、***Cryptomeria***（スギ属）、***Podocarpus***（ナギ属）、***Alnus***（ハンノキ属）、***Carpinus***（シデ属）、***Lepidobalanus***（コナラ亜属）、***Celtis-Aphanathe***（エ

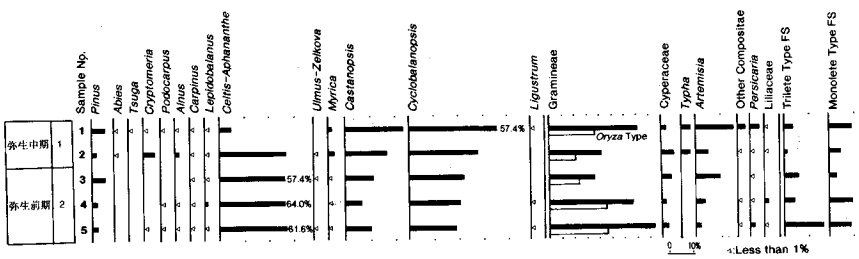


Fig.214　比恵遺跡第24次調査区第３調査区南北壁から採取した試料の花粉ダイアグラム

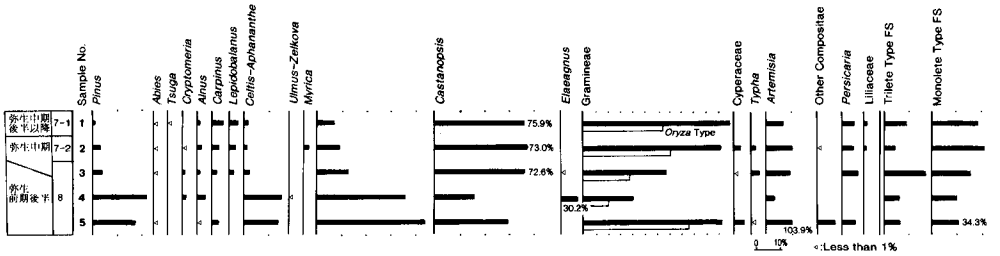


Fig.215　比恵遺跡第25次調査区 E－4－33区調査区壁面から採取した試料の花粉ダイアグラム

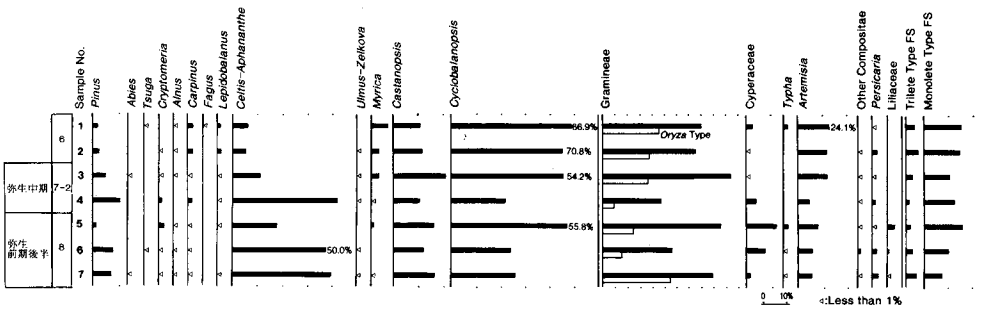


Fig.216　比恵遺跡第25次調査区 A－3－6区調査区壁面から採取した試料の花粉ダイアグラム

Celtis-Aphanathe（エノキームクノキ属）、Ulmus-Zelkova（ニレーケヤキ属）、Myrica（ヤマモモ属）、Castanopsis（シイ属）、Cyclobalanopsis（アカガシ属）。

NAP（低木・草本花粉）

Elaeagnus（グミ属）、***Ligustrum***（イボタノキ属）、Gramineae（イネ科）、Cyperaceae（カヤツリグサ科）、***Typha***（ガマ科）、***Artemisia***（ヨモギ属）、Other Compositae（その他のキク科）、***Persicaria***（タデ属）、Liliaceae（ユリ科）。

FS（シダ類胞子）

Trilete type FS（三条型シダ類胞子）、Monolete type FS（単条型シダ類胞子）。

比恵遺跡24次：木本類では、エノキームクノキ属が60%前後を占めて優占し、照葉樹林を構成するシイ属、アカガシ亜属が合わせて30%程度ずつ出現する。ほかには、マツ属が数%ずつ出現するが、これら以外の木本類は、ほとんどが1%未満の出現率を示すにすぎない。しかし、試料番号1では、エノキームクノキ属は、約5%にまで減少し、かわってアカガシ亜属が60%近い出現率を示すようになる。

草本類では、イネ科が40～80%の出現率を示し草本類のなかでは卓越している。ほかに、ヨモギ属、カヤツリグサ科が比較的高率で連続して出現する。イネ科のうち、イネ型花粉の木本類に対する比率は、試料番号5、4で最も高く、試料番号3、2で減少し、試料番号1で再び増加する。

比恵遺跡第25次A－3－6区調査区壁面：木本類では、試料番号4、6、7でエノキームクノキ属が40％余を占め優占し、シイ属、アカガシ亜属も両属あわせて約40％に達する。また、マツ属も10％程度ずつ出現する。これら以外は比較的低率である。試料番号1～3では、下部で優占していたエノキームクノキ属は10％未満になり、かわってアカカシ亜属が50～70％を占めて優占するようになる。

草本類では、イネ科が、概して50％以上を占め優占する。それ以外には、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが比較的高率でみられるが、それら以外は、1％未満のものがほとんどである。イネ型花粉は、試料番号7で樹木花粉の50％余りを占めるが、試料番号4～6ではやや減少し、試料番号1～3で再び増加する傾向がみられる。

比恵遺跡第25次E－4－33区調査区壁面：木本類では、試料番号4、5でシイ属が約40％を占め優占し、アカガシ亜属、マツ属が20～30％ずつ出現する。エノキームクノキ属は、試料番号4で約20％の出現率を示すが、試料番号6ではまったくみられない。試料番号1～3では、アカガシ亜属が70％を越える高率で出現し優占する。シイ属、マツ属は減少し、約10％ずつみられるにすぎない。

草本類は、イネ科が優占し、特に試料番号5では140％に達する出現率を示す。ほかには、ヨモギ属、タデ属などが比較的高率で出現する。イネ型花粉は、試料番号5で木本花粉に対して80％を越す高率で検出されるが、試料番号3、4で減少し、試料番号1、2で増加する。

4　考察

古植生の推定

花粉分析によって推定される古植生は、以下のようにまとめられる。

弥生時代前期：この時代の森林植生は、シイ属、アカガシ亜属などの照葉樹林を構成する要素を主体とするが、多くのエノキームクノキ属およびマツ属を交える。埋没谷を埋めた遺物包含層には樹木の立った状態で化石化しているものは観察されない事を考慮すると、これら樹木は、ほとんどが台地上に生育していたであろうと考えられる。いっぽう、谷部分の多くは、草本類で覆われていたであろう。それらの草本類は、イネ科を主体としていた。イネ科以外には、ガマ属、カヤツリグサ科、タデ属のような湿地に多くはえる植物が、出現率こそ高くないものの、検出されることから、当時の谷の多くの部分は湿地状であったと推定される。また、ヨモギ属が連続して出現するが、ヨモギ属は比較的乾燥した地域にはえるものが多いことから考えると、台地と谷の境界部分には、ヨモギ属を主とする雑草が生えていたであろう。弥生時代中期：森林を構成する要素であるシイ属、アカガシ亜属が優勢になり、特にアカガシ亜属がシイ属よりも優勢になる。弥生時代前期において優勢であったエノキームクノキ属は減少する。照葉樹林帯は、下部帯と上部帯に大別され、下部はシイ帯、上帯はカシ帯・ツガ帯と呼ばれている（沼

田・岩瀬、1975)。また、日本におけるシイの分布の北限は、最も寒い月の平均気温が2℃の等温線とほぼ一致し（吉岡、1954、1963)、カシは最も寒い月の平均気温が1℃の等温線が北限になっている（吉岡、1956)。これらのことから考えると、弥生時代前期から中期にかけて、若干の（最も寒い月の平均気温にして約1℃）気候の冷涼化が推定される。エノキやムクノキは、植生の遷移の際に一時的に出現する樹種として知られており、弥生時代前期に優勢であったこれらの樹種は、照葉樹林の下部帯から上部帯へ還移する過程において繁茂したものと考えられる。

弥生時代前期・中期を通じて、人類の森林の破壊活動は活発ではなかったであろう。それは、今回の調査地域の潜在自然植生である、照葉樹林が優勢のまま残されており、森林破壊の後、二次林として出現するマツ類、コナラ類の花粉がそれほど多くは検出されないことから推定される。

イネについて

位相差像の観察によると、イネ型花粉は、3つのセクションともに、セクションの最下部で高率で出現し、その後やや減少した後、再び増加するという同様の変化を示している。花粉で確実に同定できるタネツケバナなどの水田雑草の花粉は確認できなかったものの、草本類にはカヤツリグサ科の花粉を必ず伴っており、この中にホタルイなどのカヤツリグサ科の水田雑草が含まれている可能性がある。先にも述べたように、今回イネ型花粉としたものの中には、イネのほかにコムギ、オオムギ、カモジグサも含まれていることから、明確な判断はできないものの、今回の調査地域周辺において、弥生時代前期から粗放的なイネの栽培が行われていた可能性があり、その規模は、弥生前期後半でやや縮小し、中期になって再び拡大したのではないかと考えられる。しかし、この問題の結論は、観察試料を増やし、また走査型電子顕微鏡を使ったより詳細な検討を待つべきであろう。

文献

中村　純、1974、イネ科花粉について、特にイネ（*Oryza sativa*）を中心として。第四紀研究、**13**、187－198。

沼田　真・岩瀬　徹、1975、図説日本の植生。朝倉書店、東京178ｐ.

吉岡邦二、1954、東北地方森林の群落的研究。第4報　スダジイ北限地帯の森林。植物生態学報、**3**、219－229。

、1956、東北地方森林の群落的研究。第5報　カシ林北限地帯の森林群落。福島大学学芸部理科報告、No.5、13－23。

Yoshioka, K., 1963, The northern limits of the natural forest of *Shiia Sieboldii. Sci. Rep. Tohoku Univ. Ser.* 4, **29**, 327－336.

※）九州大学理学部地球惑星科学教室

2　彩文土器、木胎漆器等の赤色顔料について

宮内庁正倉院事務所　成瀬正和
福岡市埋蔵文化財センター　本田光子
㈶京都市埋蔵文化財研究所　岡田文男

比恵遺跡第25次調査で出土した彩文土器13点に用いられた赤色顔料、木胎漆器2点の赤色漆膜及び石片に付着していた赤色顔料についてX線分析（蛍光X線分析・X線回折）ならびに顕微鏡観察を実施し、同定を試みた。

試料

弥生前期の彩文土器は焼成後塗彩であるため、一般に文様部の残りが悪い。本来は全面黒色下地に赤色で文様を描いたものであるが、発掘時に土の方へ彩文部分がついてしまったり、運良く残っても剝落する場合が非常に多い。本遺跡出土の彩文土器は調査担当者の適切な判断、取り上げにより、即バインダー処置が行われた。黒色下地・赤色顔料とも比較的残りが良いといえる方だが、大半は辛うじてバインダーにより固着している状態である。

木胎漆器の塗彩は黒色下地に赤色で彩文、平塗り（試料No.14）、黒色下地に赤色で平塗り（試料No.15）であるが、漆膜の残りは良好で厚くしっかりしている。なお、本例の塗彩が「漆」によるものであるか否かについての科学的な同定は行っていないが、その外観、塗膜の残存状態により、これを漆製品と理解し実験を進めた。

X線分析の測定は非破壊を原則とし、土器では土器片そのものを、漆塗木器では剝落していた漆膜片を、石片もそのままで測定試料として用いた。顕微鏡観察では一部の試料について微量の採取を行った。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電圧；10mA、：検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4mm、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～66°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

光学顕微鏡観察

彩文土器についてはそのままで反射光により40～100倍で検鏡した。比較的赤色顔料が多く残っているNo.3と8から針先に付く程度のサンプリングを行いプレパラートを作成し、透過光・反射光40～400倍で検鏡した。漆膜はそのままで反射光により表面を観察をするため2mm×3mmほどの剝落片（赤色平塗り部分と思われる）を合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトGY 1252JP、HY837）に包埋した後、断面を研磨し、塗膜の厚さ、塗り重ねの回数等を観察した。石片については、針先に付く程度の採取を行い、プレパラートを作成し透過光・反射光40～400倍で検鏡した。

結果　赤色顔料の分析

X線分析（蛍光X線分析・X線回折）および顕微鏡観察の結果と、それによって明かとなった顔料の種類をTab.8に示す。

蛍光X線分析では水銀および鉄の有無のみ表中に記してある。土器試料ではこの他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として胎土部分に由来するものなので、省略した。但し鉄は胎土部分にも必ず含まれ、顔料の採取を行わない今回の分析では赤色顔料由来のものとの区別は困難である。また、X線回折では赤色硫化水銀、赤鉄鉱の有無のみについて記した。土器試料ではこの他、石英、長石等が確認されたが、それは主として胎土部分に由来するものなので、やはり省略している。

赤色顔料の付着量が少ないものについては、X線回折では赤色顔料に由来する鉱物が検出できない場合もあり、このような試料については最終的には蛍光X線分析による水銀の有無と検鏡結果が顔料同定の決め手となる。

漆塗膜の観察結果

試料14　採取試料中には木質が残存しておらず、漆による素地固めが行われていたかどうか不明。最下層は木炭粉を含む漆層である。(厚さ30μm) その上に、非常に透明度の高い漆がごく薄く1層（10μm）塗られ、最上層にベンガラ漆（80μm）が塗られている。ベンガラ中にはパイプ状粒子が観察できる。(Fig.217)

試料15　試料中には漆分を含む木質がかなり残存しており、素地固めが行われているようである。素地直上には木炭粉を密に含む漆が塗布される。その上に木炭粉がまばらな層が見られるが、密の部分と一体であるのか、別に塗られたものなのか判断しかねる（70μm）。その上に透明度の高い層があり（30μm）、透明度の非常に高い部分と微粒子が多く含まれる部分からなり、油成分などを懇話した結果と見られる。最上層はベンガラを含む漆層（30μm）で、パイプ状粒子が観察できる。(Fig.217)

考察

赤色顔料について

我が国では周知のようにベンガラは先土器時代から用いられているのに対し、朱は縄文後期以降用いられるようになる。土器の赤彩についていえば、縄文後期中葉～後葉を中心に朱が比較的多く用いられ、晩期に至ってもところにより用いられるが、弥生期以降朱が用いられることは、特殊な例をのぞいてまず無いといってよい。大雑把にみたこの傾向は今後分析例が増加しても変わることはないと考えられるが、もちろん地域毎に多少の特色がある。北部九州においては、縄文後期中葉～晩期中葉にかけて朱がベンガラと同じくらい用いられることをX線分析に基づき確認している（注1）が、夜臼式土器に用いられた赤色顔料は肉眼観察に基づく限りベンガラである。今回比恵遺跡の弥生前期彩文土器の使用顔料がすべてベンガラであることを明らかにしたが、これは従来の肉眼観察による一般的理解に根拠を与えるものとなった。しかし福岡市藤崎遺跡、比恵遺跡第30次調査出土の彩文土器には朱が用いられている（注2）。この地域ではさらに分析例を増加させ、細かく使用状況をおさえる必要がある。

赤漆について

赤漆に用いられている赤色顔料はベンガラであった。塗り重ねはなくNo.14、15とも30～80ミクロン前後の一回塗りである。出土漆器については、その漆膜の調査・研究が各地で着々と進められており、縄文時代、平安、中世の漆工技法が明らかになりつつある。(注3)。弥生時代の漆器についての、漆膜調査例は僅かである。その中で、長崎県里田原遺跡出土木胎漆器に関する報告（注4）は、試料が本例とほぼ同じ時期と考えられるだけに非常に興味深い。特に、No.14脚付杯はその形態、彩色、文様等が里田原遺跡出土品と極めて似ているのだが、その漆層もよく似た外観を示している。漆層の厚さは採取部分により異なった値が得られることが予想され、剝落片1点の計測値を単純に比較することはできないが、使用赤色顔料はベンガラ一層であり、黒漆もよく似た層構成である。縄文時代の漆製品は木胎、籠胎、土器とで漆の塗膜層に違いがみられ、木胎の赤漆は朱、ベンガラの両者を単独または併用しかつそれぞれ粒度を変えたりと種々様々な場合が多いように見受けられる。縄文晩期の土器・木器に見られる朱・ベンガラの「規制問題」はすでに指摘されているが（注5）、弥生の漆器の塗膜調査が望まれる所

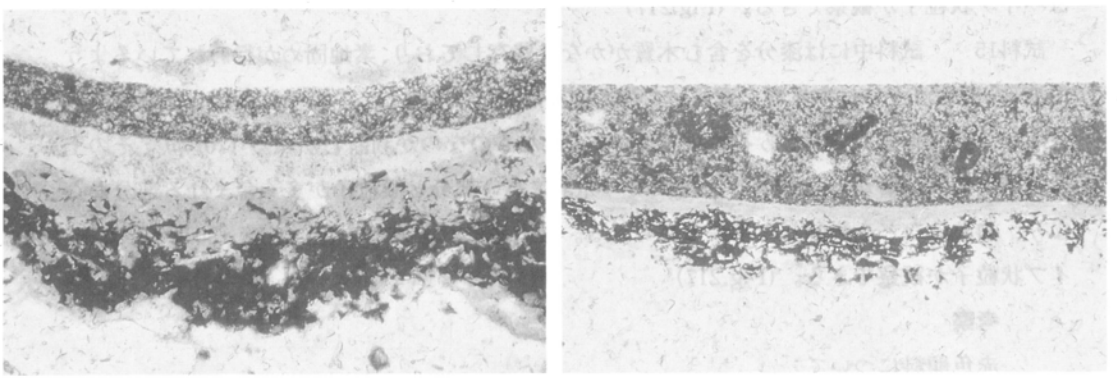


Fig.217　第25次調査地点出土木胎漆器　塗膜断面写真（約200倍）

である。特にこの地域では縄文晩期から弥生前期について、使用赤色顔料の種類との絡みを見ながら漆膜の細かい調査をする必要があるだろう。

注

（注１）成瀬正和（1983）「長行遺跡出土の赤色塗彩土器について」『長行遺跡』㈶北九州市埋蔵文化財調査報告書20
成瀬正和（1987）「四箇遺跡出土の赤彩土器について」『四箇周辺遺跡調査報告書』
福岡市埋蔵文化財調査報告書172

（注２）本田光子（1986）「小型彩文壺形土器に用いられた赤色顔料について」『藤崎遺跡Ⅳ』
福岡市埋蔵文化財調査報告書138
福岡市教育委員会1990年度調査　菅波正人氏の御厚意により本田がサンプリングを行い光学顕微鏡で朱（硫化水銀HgS）粒子を確認している。

（注３）永嶋正春（1985）「縄文時代の漆工技術」国立歴史民俗博物館研究報告6
岡田文男（1984）「遺物（土器の漆）」『栗津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会
小林幸雄（1989）「忍路土場遺跡出土漆櫛の製作技法」『小樽市忍路土場・忍路5遺跡』北海道埋蔵文化財センター

（注４）長崎県田平町教育委員会（1988）「里田原」田平町文化財調査報告書3

（注５）金子裕之（1981）「特殊な木漆器ー愛媛県船ヶ谷遺跡の場合」『月刊文化財』218

試料番号	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	顔料の種類	実測図
	鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
1	＋	－	－	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－405（20643）
2	＋	－	－	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－398（20644）
3	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－403（20645）
4	＋	－	－	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－399（20646）
5	＋	－	－	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－396（20647）
6	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－400（20648）
7	＋	－	－	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－406（20649）
8	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－401（20650）
9	＋	－	－	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－395（20651）
10	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－397（20652）
11	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－394（20653）
12	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－402（11028）
13	＋	－	－	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.122－404（17007）
14	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.136－456（20009）
15	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	Fig.136－458（20252）
16	＋	－	＋	－	ベンガラ	ベンガラ	（30612）

※＋は検出、－は未検出を表す　　14・15は木器，16は石片

Tab.8　赤色顔料分析結果

第10章　結章

1　比恵遺跡出土のカゴ類について

名古屋大学教授　渡辺　誠

1．出土状態と所属時期

本稿で報告するカゴ類は、福岡市教育委員会によって1989年8～9月に行われた、同市博多区比恵遺跡の第26次発掘調査によって出土したものである。

水溜状遺構（M0001）の最下層である粘土層中より検出されたが、伴出土器が少なく所属時期が不明確であったため、名古屋大学アイソトープ総合センター（現同大学年代測定資料研究センター）において、材の一部についてC14による年代測定を行ったところ、次節に報告されたように1970±170年B.P.という結果が得られた。これを換算すると20±170年B.C.となり、弥生時代中期前半を中心とする時期に相当する。

このカゴ類はザル状のもの1個体分であり、基本的にはその内面を上にして出土している。全体の約10分の1程度の遺存状態とみなされる。

2．編み方と形態の観察

上記のように本資料は1個体分の破片であるが、遺存状態においてA・B２群に分かれていた。Bはさらに3群に細分される（図版22－1、Fig.218左上）。

これらのうちAとＢａ・Ｂｂとは縁に近い部分、土器でいえば口縁部を含む部分である。またBaとBbとはひと続きの縁であり、Bbが折れ曲がっているのがあるから、AとBaはザル状の内側をみせているのに対し、Bbは外側をみせていることになる。そしてBcは底から立ち上がる部分である。これらの他に断片が数片あるが、これらのうち底からの立ち上がり部分の1片のみを図示した（図版22－2、同23、Fig.218）。

全体の形状は、直径約25cm、底径約13cm、そして高さ約6.5cmのザル状を呈している（Fig.218下）。底は網代編みであり、側面はその1種であるザル目編みであり、縁は巻縁で仕上げられている。

素材についての鑑定結果では、種の同定は不可能であったということであり、少なくとも木や竹ではないらしい。因みにヒノキなどの木質素材は縄文時代から使われている。一方竹製品は、弥生時代後期に属する福岡県春日市辻田遺跡出土のウケを上限としている。なお編み方自体も、縄文時代以来の伝統を引くものである。

素材の幅は、底とそれから立ち上がる側面のタテ材と、側面のヨコ材および縁とでは異なり、

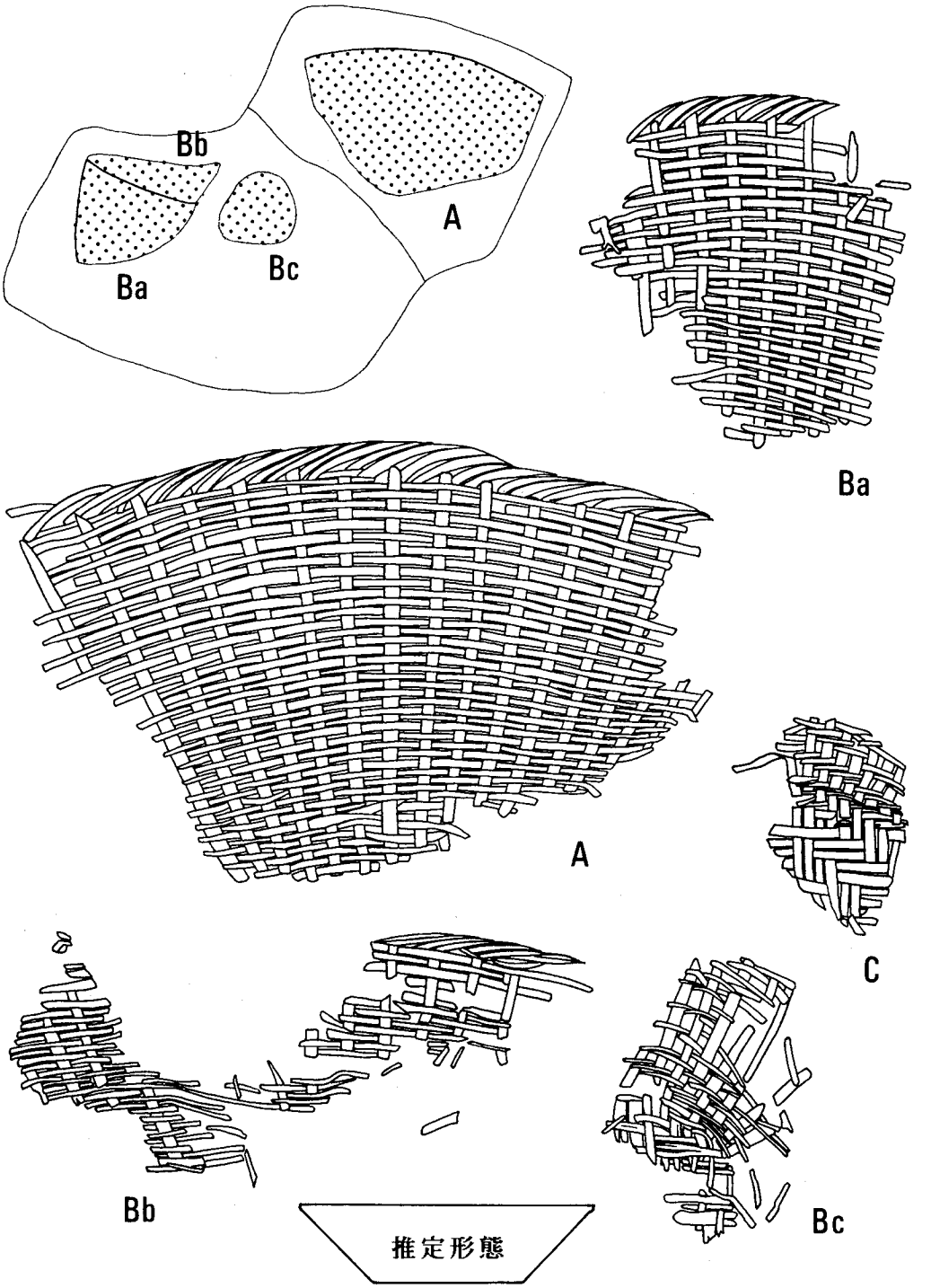


Fig.218　出土状態（上左）の概念図と各部分の実測図（実大）

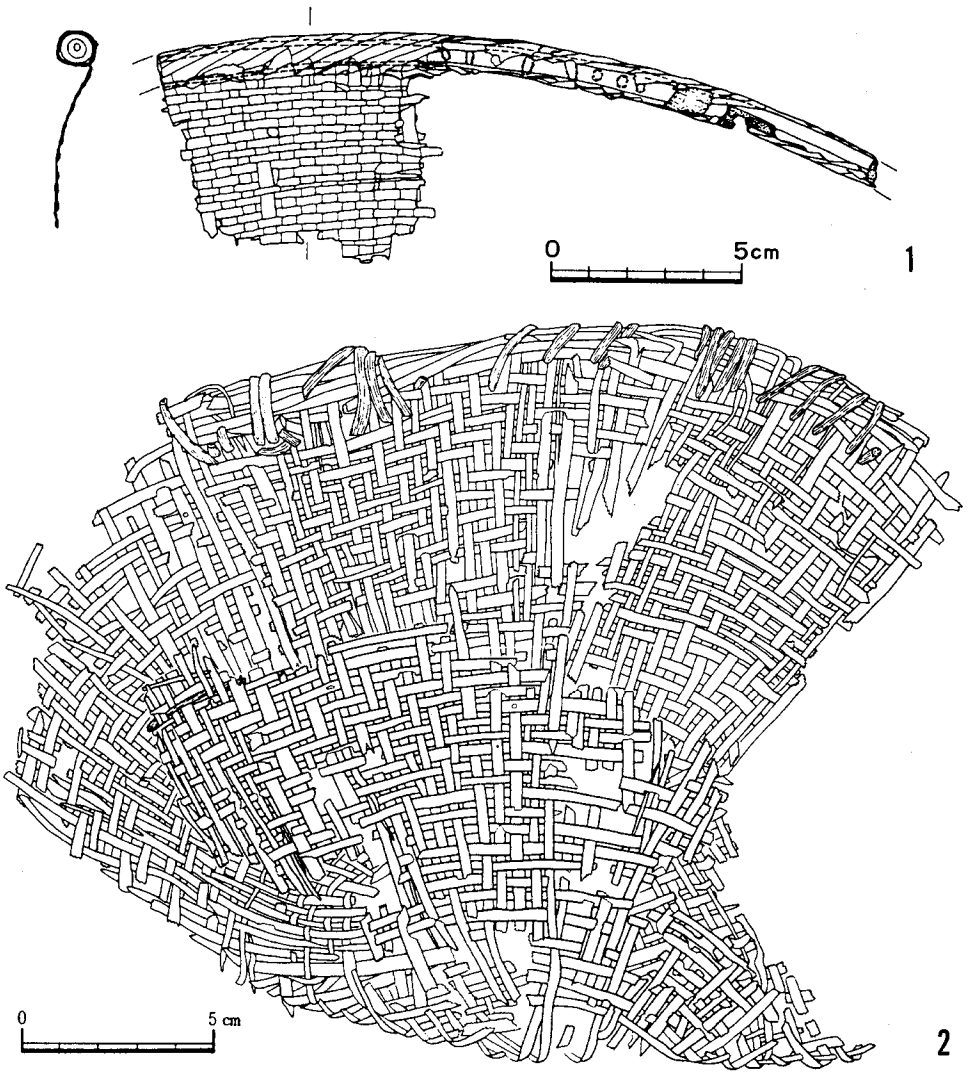


Fig.219　参考試料（1：比恵第17次調査、2：曽畑貝塚出土　各報告書より）

前者では2.0mm前後、後者では1.0～1.5mmである。

底の網代編みは、2本1単位の「2本越え・2本潜り」である。そして立ち上げる時には1本単位として、少なくとも14列までは「2本越え・2本潜り」で編み、その後を「1本越え・1本潜り」のザル目編みにしていることが、Fig.218Cの観察によって知ることができる。

立ち上がった側面はFig.218Aがもっとも良好であり、ヨコ材は42列まで確認できる。おそらくこれに10列程度加わり、Fig.218Cなどに接続するものとみなされる。これは縁の直下でのタテ材の間隔が約10mmであるのに対し、立ち上がりは無間隔になることからの推定である。

そして縁部分はおそらく同じ素材を巻いて芯にし、タテ材を芯を越えて外側に折り曲げてヨコ材に挿し込んで切り、同じ素材を2本1単位にしてタテ材を2本越えして巻縁とし、それを3周させることによって仕上げているとみなされる。

Fig.218は、以上の観察結果による推定形態である。

3．若干の検討

本資料と同じ編み方のザルの破片は、本遺跡の第17次調査においても発掘されている。第2号井戸中の出土で、弥生時代後期前葉に属する（Fig.219・1、山口他1990）。

また熊本県宇土市曽畑貝塚でも、縄文時代前期に属す類例が発掘されている（同2、江本他1988）。側面を「2本越え・2本潜り」で編み、「1本越え・1本潜り」のザル目編みでない点はやや異なるが、大きな違いではない。

したがって本遺跡資料は縄文時代の系譜を引くものであり、弥生時代に新たに出現する編組品ではないと考えられる。また素材が竹でないらしい点も、同様な観点から注目されることである。

引用文献目録

江本　直他，1988：曽畑。熊本県文化財調査報告．100。熊本。

山口譲二他，1990：比恵遺跡群・9。福岡市埋蔵文化財調査報告書．227。福岡。

謝辞

最後に、調査の機会を与えられ、かつ種々御教示下さった福岡市教育委員会の小畑弘己氏、および資料整理に御協力下さった名古屋大学考古学研究室OBの磯谷早苗嬢に対し、深謝の意を表する次第である。

2　年代測定の結果報告

名古屋大学年代測定資料研究センター
助教授　中村俊夫

RESULTS OF ^{14}C MEASUREMENTS WITH THE TANDETRON ACCELERATOR MASS SPECTROMETER AT NAGOYA UNIVERSITY

Date 1990 -- 2 --13

No.	Sample name	Meas.date (yy:mm:dd)	$\delta^{14}C$ (‰)	^{14}C age[1] (y BP)	^{14}C age[2] (y BP)	Meas.#
1)	福岡県・比恵遺跡 弥生土器破片	: :	-------	-------	1970 ±170	NUTA-1035

~~1) using ^{14}C half life of 5,730 years.~~

2) using ^{14}C half life of 5,570 years.

誤差は one sigma です。

3．比恵遺跡群出土の弥生時代の木器について

山口譲治

本遺跡群では、第4・6・7・9・10・17・18・24・26次の各調査地点で弥生時代の木器が出土している。

第4・24～26次は、比恵遺跡群の北端部の台地際に位置する調査地点で、谷部に堆積している黒色から黒褐色粘質土中に、木器が包含されている。第4・25次では貯木土壙状の遺構もあり、比較的まとまった弥生時代前期後半から前期末の木器が出土している。また、第24次では前期後半から中期前半までの木器が、第26次では前期の木器が出土している。第6次ではSE－10・16・17・23・27・31・33・35・48の9基の井戸で、中期後半から後期後半にかけての木器が出土している。第7次ではSE－02・14・15の3基の井戸で、中期後半から後期前半の木器が出土している。第9次ではSE－04・06・08・10・11・13・14・20・24の9基の井戸で、中期後半から後期後半にかけての木器が出土している。第10次ではSE－01から後期前半の木器が出土している。第17次ではSE－02・05の2基の井戸から後期前半の木器が出土している。第18次ではSE－01から後期中葉の木器が出土している。

ここでは、本遺跡群の各調査地点で出土している弥生時代の木器について、農具を中心に、中期前半までを前半期、中期後半から終末期を後半期として述べていくことにする。

1）前半期の木器

前半期の木器は、前述したように本遺跡群の北端部の調査区で出土している。出土木器は、農具、工具、狩猟・漁撈具、容器類（什器を含む）、儀器（武器形を含む）、建築部材、その他の本製品がある。

農具

農具としては、第4次で諸手鍬と鍬柄が、第24次で三又鍬・諸手鍬未製品が、第25次で諸手鍬・平鍬・鋤未製品・杁・竪杵が、第26次で竪杵が出土している。以上の出土農具は起耕具・整地具・脱穀具に分けられる。起耕具としては、私の分類でみていくと、諸手鍬のAa・Bb・Ca・Da型と未製品、平鍬Ba型と未製品、Hc型、三又鍬H型、組合せ式鋤未製品がある。整地具としては杁が、脱穀具としては竪杵が出土している。北部九州地域の同時期の起耕具としては諸手鍬A・C・D型・平鍬A型・三又鍬H型・一木造り鋤・組合せ式鋤が製作使用されている。第4次の諸手鍬Bｂ型・第25次の平鍬B型（未製品を含む）・H型の出土は北部九州地域での起耕具のあり方と相違し、豊前地域の下稗田遺跡・下郡桑苗遺跡出土の起耕具のあり方と類似している。しかし、下稗田・下郡桑苗遺跡と第4・25次での諸手鍬の形態を比較すると前者ではA・C・D型が未出土であり、後者では、A・C・D型が多量出土しており、大きく相違している。

その他の農具は整地具の杁が第25次で、第25・26次で脱穀具の竪杵が出土している。竪杵は握部中央にそろばん玉状の造り出し部をもち、北部九州地域でのあり方を示している。

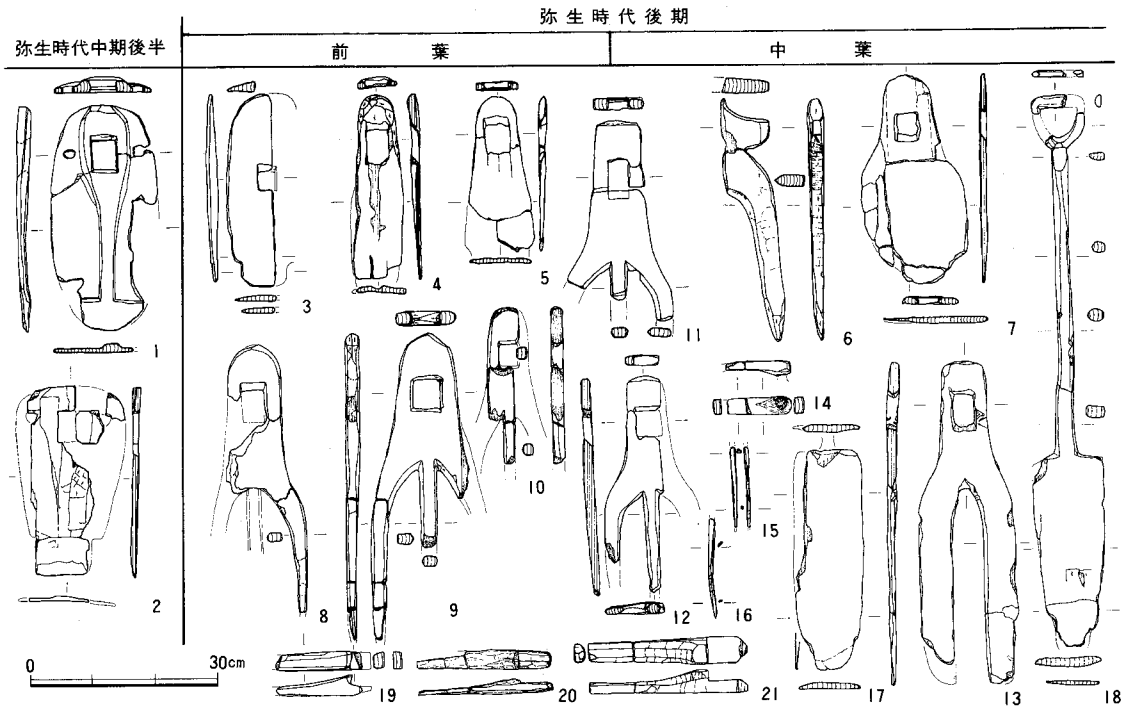
その他の木製品（工具・狩猟・漁撈具、容器類・儀器）

工具としては木工具柄・工作台と土器製作具があり、木工具柄は切断工具柄と加工工具柄に分けられる。切断工具柄としては太形蛤刃石斧柄（未製品を含む）が第4・25次で出土している。加工工具柄としては抉入片刃石斧柄が第4次で、手斧柄が第4・24・25次で出土している。工作台は第4・25次で出土している。土器製作具としては第25次でハケ目調整具の完形品がある。

狩猟・漁撈具としては第24次で網枠が出土している。

容器類としては第25次で高坏・箱形容器などがあり、第24次で高脚容器（または案）の脚部がある。第25次出土の高坏には脚台付のものが含まれており、黒漆を素地として縦線・横線を使用し彩色しており、里田原遺跡出土のものと同形態・同様の文様構成をもつと考えられる。他の高坏・容器類にも赤漆を使用している。

儀器としては第25次で把頭付の細形銅剣形木製品と剣の柄部（武器）・棍棒（武器）がある。



第6次
SE-10……3・8
SE-17……1
SE-23……20
SE-31……21
SE-35……11

第7次
SE-15……2

第10次
SE-01……4・5

第17次
SE-05……9・10

第18次
SE-01……18

第9次
SE-10……14・15・16
SE-11……6・12
SE-13……7・17
SE-14……13

Fig.220　比恵遺跡群各調査地点出土農具実測図

2) 後半期の木器

弥生時代中期後半以降の本遺跡群出土の木器は、現時点ではすべて井戸から出土している。時期ごとにみると、中期後半の木器は第6次のSE－17、第7次のSE－02・15、第9次のSE－04で出土している。後期前葉の木器は第6次のSE－10・23・27・31・33、第7次のSE－14、第9次のSE－11、第10次のSE－01、第17次のSE－02・05で出土している。後期中葉の木器は第6次のSE－35、第9次のSE－08・10・13・14・20、第18次のSE－01で出土している。後期後葉の木器は第6次のSE－48、第9次のSE－06・24で出土している。出土木器には農具・工具・容器類（什器を含む）・儀器（装身具を含む）・建築材・その他の木製品があるが、ここでは後半期の農具についてみていくことにする。

中期後半の農具は第6次のSE－17で、平鍬Ｆｃ型(1)があり、第7次のSE－15で平鍬Fc型(2)・槌がある。後期前葉の農具は第6次のSE－10で鍬類（3・8）・竪杵がありSE－23で鍬類組合せ着装具（20)、SE－31で鍬類・鍬類組合せ着装具（21)、SE－33で三又鍬Gc型があり、第7次のSE－14でツチワリがあり、第9次のSE－11で三又鍬Gc型（12）・ナスビ型木製品（6）・竪杵があり、第10次のSE－01で平鍬Gc型（4・5）があり、第17次のSE－02で鍬類・停泥・鍬類組合せ着装具（19)、SE－05で鍬類（9・10）・鋤柄・槌がある。後期中葉の農具は第6次のSE－35で鍬類（11）があり、第9次のSE－08で鍬類、SE－10でナスビ形木製品柄（14）・組合せ式鋤柄（15・16)、SE－13で平鍬Gc型（7）・一木造り鋤（17）・槌、SE－14で鍬類（13)、SE－20で又鍬、第18次のSE－01で鍬類・一木造り鋤（18）がある。後期後葉の農具は第6次のSE－48で竪杵、第9次のSE－24で三又鍬Gc型がある。以上、中期後半から後期後葉の農具は62点出土している。時期ごとにみていくと、中期後半が3点で平鍬と槌が出土している。平鍬は2点ともカシの柾目取り材を用い、Fc型である。後期前葉は37点の農具があり、起耕具が92％を占め、そのほかに竪杵2点・ツチワリ？1点があるのみである。起耕具は鍬類が24点(70％)・ナスビ形木製品1点(3％)、鋤類3点（9％)、鍬類の附属品である停泥1点（3％)、鍬類組合せ着装具3点（9％)、柄類2点（6％）である。鍬類がもっとも多く、いずれもＧｃ型で、62％を三又鍬が占め平鍬が16％（3は分類上諸手鍬Gc型であるが、刃部が一端にしかないのでここでは平鍬とする)、不明鍬が22％である。ナスビ形木製品は二又か。19～21は長い器長をもっていることから停泥も使用か。後期中葉の農具は20点あり、起耕具17点（85％)、槌3点（15％）で、起耕具のうち70％を鍬類が占めており、いずれもGc型である。鍬類では三又鍬と不明鍬が多く、それぞれ42％を占め、ほかに平鍬・二又鍬1点があるのみである。後期後葉の農具は、三又鍬と竪杵が各1点あるのみである。

以上、本遺跡群出土の後半期の農具についてみてきたが、ここで留意点をあげておく。北部九州地域の起耕具は、この時期になるとすべてGc型になる。1・2の平鍬はFc型であり、この型は畿内地域に分布すると考えられ、移入品か。開田開墾起耕具である三又鍬が水田開墾起耕具

である平鍬・二又鍬より圧倒的に多い。また、本遺跡では平鍬Ｇｃ型7点（1～5・7）・刃部が平の鋤の刃部があるものが2点（17・18）出土しているが、いずれも刃部に鉄刃を着装した痕跡がみられる。低湿地遺跡の鍬類・鋤類・ナスビ形木製品（刃部が平になるもの）に鉄刃を着装したと考えられるものは、北部九州地域での低湿地遺跡出土の刃部が平になる起耕具のなかでは、古墳時代までは10％にも満たない。本遺跡での鉄刃着装と考えられるものが出土起耕具（刃部が平になるもの）のなかで100％であるのと好対象をなしている。鉄刃着装の起耕具は台地掘削用の土木耕具といえよう。第7次のSE－14でツチワリ？が出土している。これは器長87.2cmで、ゲートボールのスティック状をなし、槌部は28cmで断面は7.1×5.2cmの楕円形をなしており、側面に使用痕がある。近代のツチワリと同様の用途をもつならば、後期前葉に苗床作りが始まったといえないだろうか。

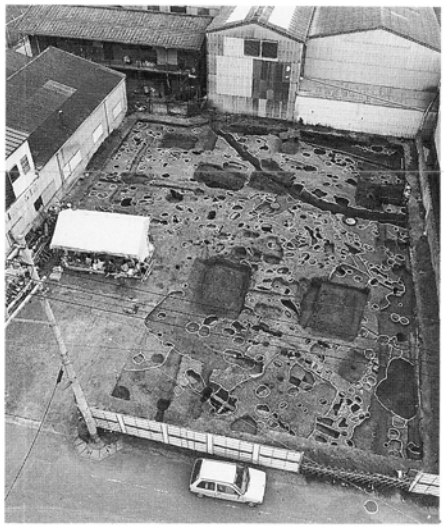
3）まとめ

本遺跡群では、前期後半から農具が出土しており、少なくとも同時期には水稲耕作が本遺跡群北端部の低湿地で開始されたと考えられる。起耕具でみていくと本遺跡における諸手鍬Bb型・平鍬B・H・Fc型は、北部九州地域に一般的にみられるものでなく、他地域からの移入品か技術移入と考えられ、木器も動くということを示しているといえよう。後半期における鉄刃着装起耕具の出土は、同器種が土木耕具であることを証明している。また、開田開墾起耕具である三又鍬の多量出土は台地掘削に使用されたためか。鉄刃着装起耕具の鉄刃は鋳造鉄刃と鍛造鉄刃が使用されたと考えられるが、青銅製鋤先を着装できると考えられる起耕具の出土は、本遺跡をはじめ北部九州地域を合わせてもない。青銅製鋤先は工具として銅斧の機能をもつか。

農具のほかの木製品のなかでは、前半期の木器のなかで、第25次出土のハケ目調整具・細形銅剣形木製品、棍棒の出土が注目される。ハケ目調整具は、スギの柾目取り材を用い、長方形の板状をなし、上・下端の相対する位置を使用している。同時期の土器製作技術を考えるうえで良好な資料であるといえる。細形銅剣形木製品の出土は、銅剣の搬入時期を考えるうえで参考となろう。棍棒は、立体的で握部と体部があり、体部には丁寧な加工で刻目を入れたものが2点があり、武器または儀器として使用されたか。

以上、比恵遺跡群出土の木器について農具を中心に現時点での成果と課題についてみてきたが、まだ分析していくのには量的に各時期の各器種とも少なく、資料の増加を待ちたい。

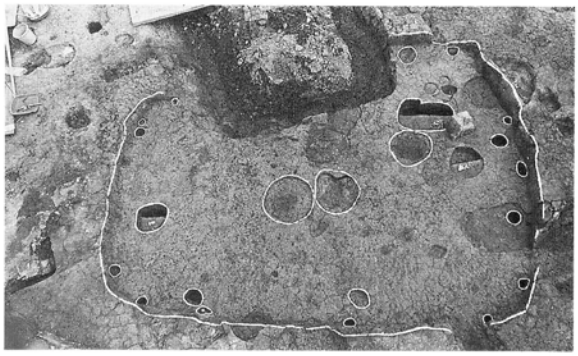
図　　版



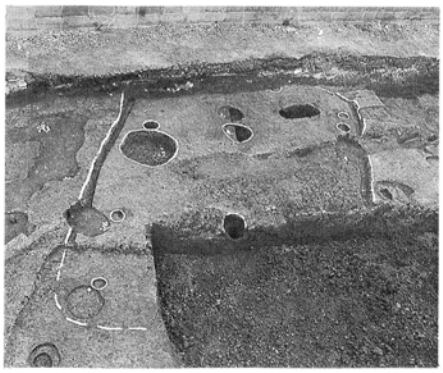
1）19次調査地点全景（北より）

2）拡張区全景（北より）

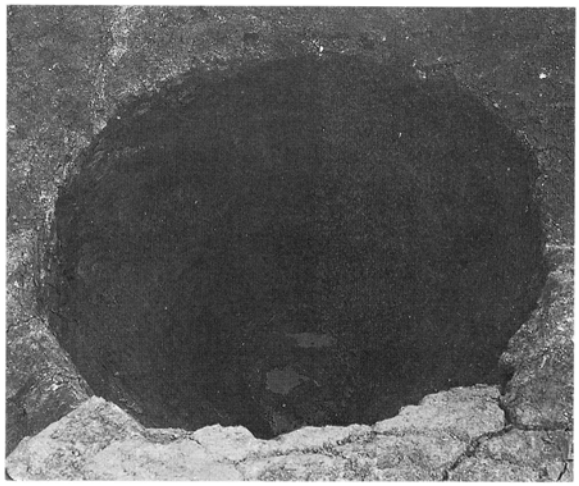
3）第 4 号竪穴住居址完掘状況（北より）



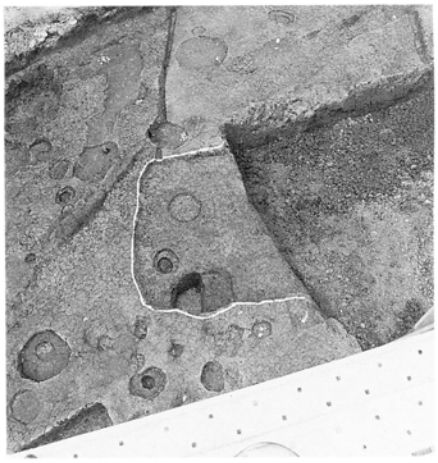
4）第 9 号竪穴住居址完掘状況（北より）



5）第12号竪穴住居址完掘状況（東より）



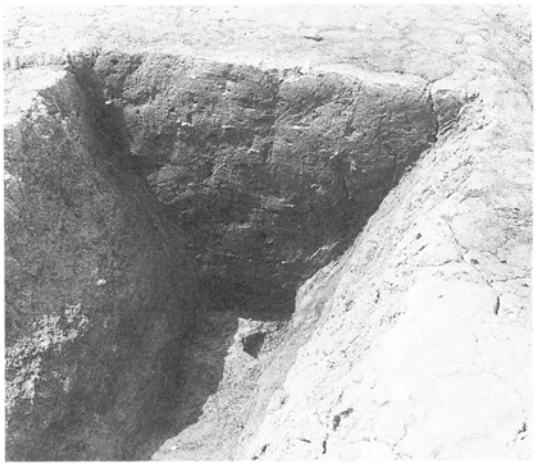
6）第16号井戸完掘状況



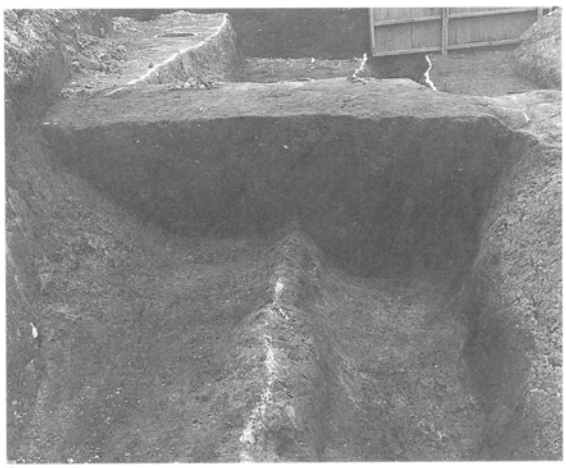
1）第 5 号土壙完掘状況（東より）

2）第 7 号土壙土層堆積状況（東より）

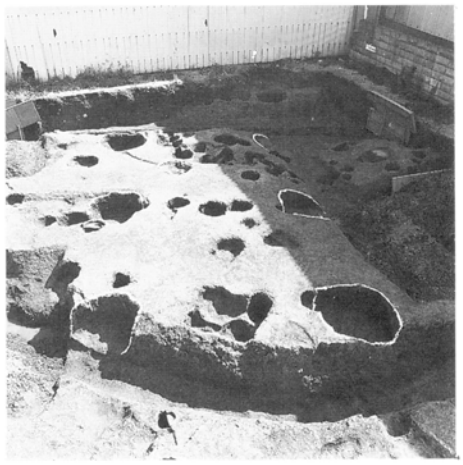
3）第 2 号溝土層堆積状況（東より）



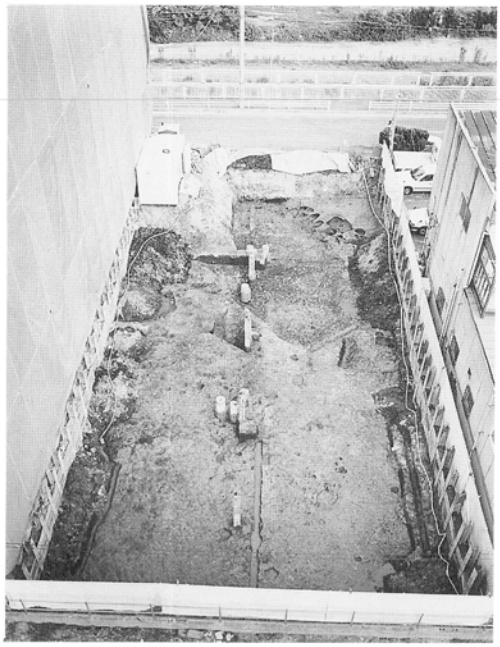
4）第 2 号溝土層堆積状況（東より）



5）第 3 号溝土層堆積状況（東より）

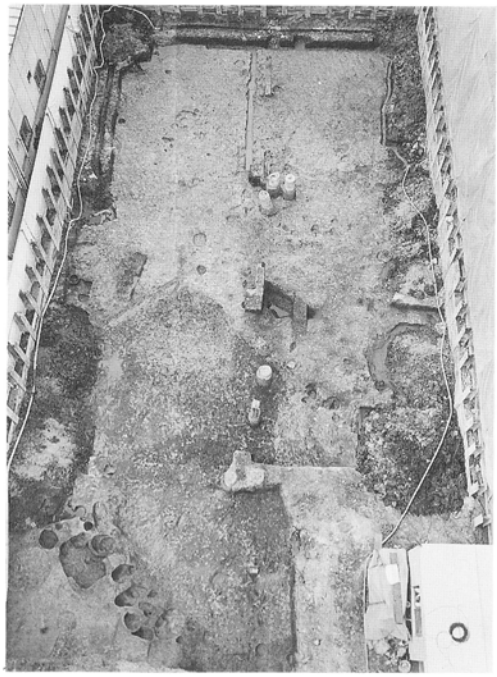


6）第20号掘立柱建物完掘状況（北より）

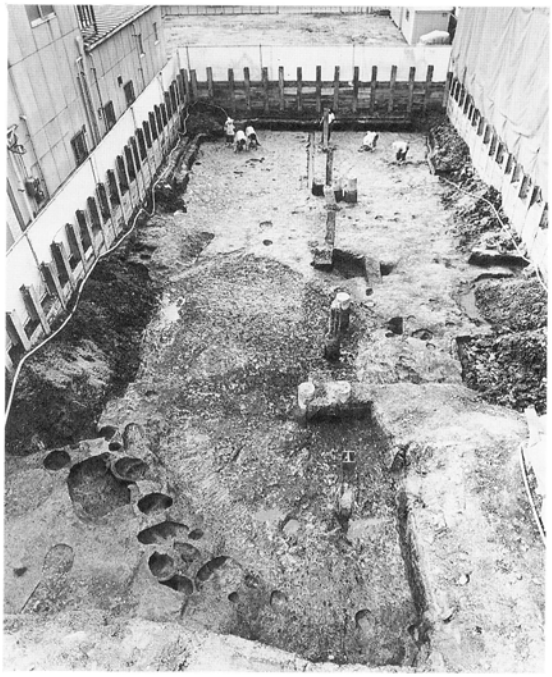


1）24次調査地点全景（北より）

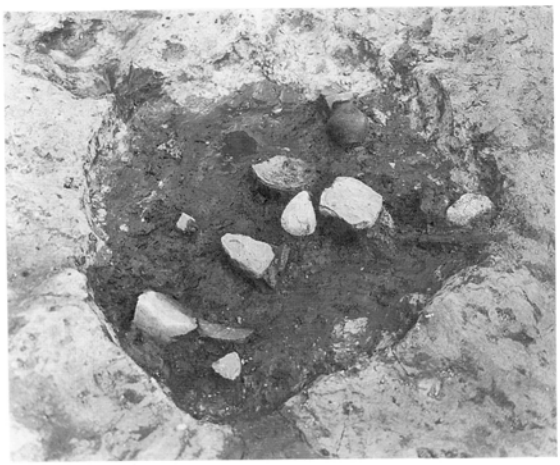
2）24次調査地点全景（北より）



3）24次調査地点近景（南より）



4）24次調査地点風景（南より）



1）24次調査地点SK02遺物出土状態（北西より）

2）SK－02完掘状態（南東より）

3）SK－03完掘状態（南東より）

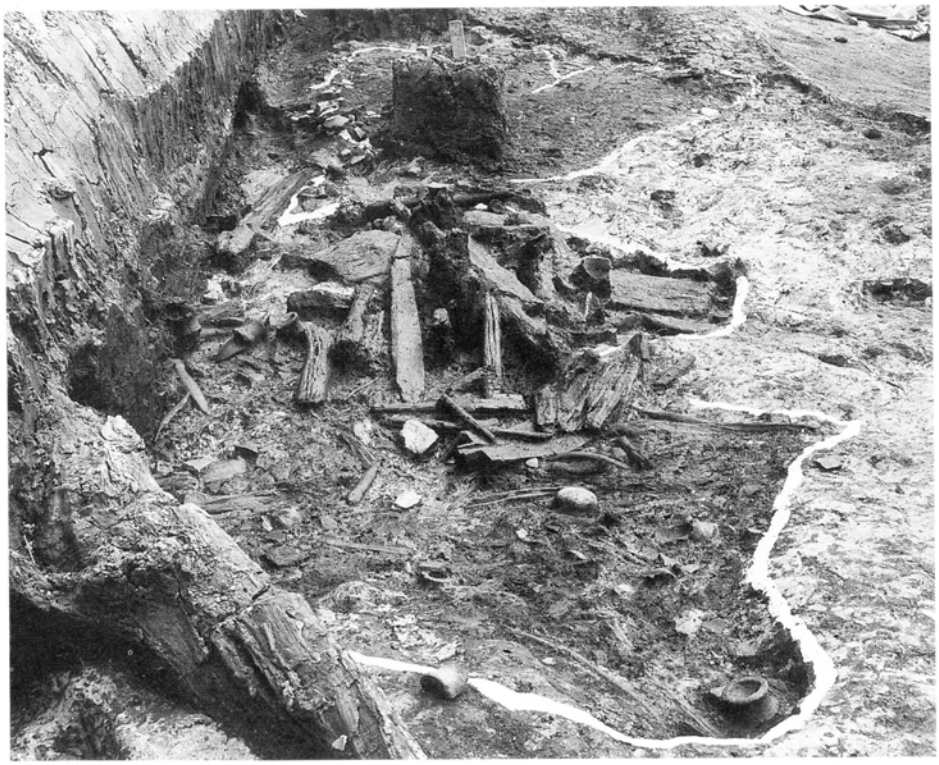
4）SX－06出土状態（北西より）

5）SX－08出土状態（北西より）

1）25次調査地点遠景
（7－2層除去後　西より）

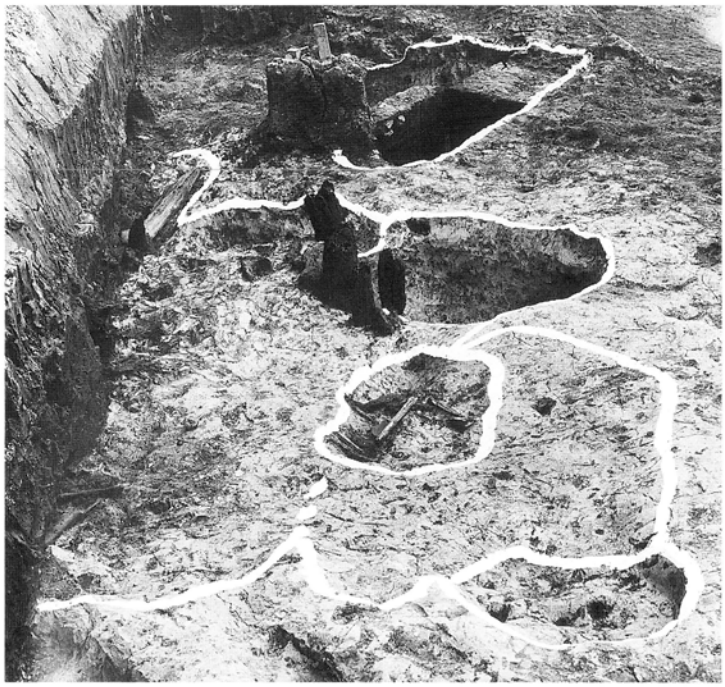
2）25次調査地点遠景
（完掘後　北西より）

1）25次調査地点全景（完掘後 北東より）

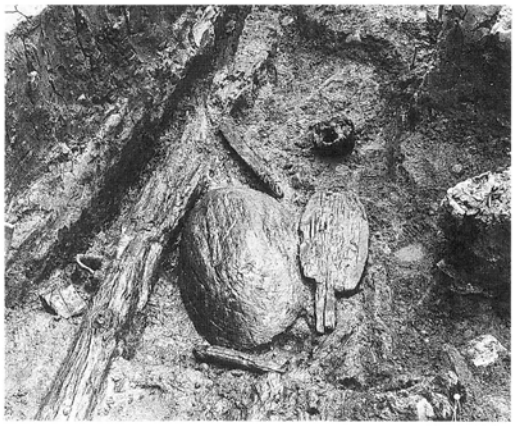


2）SK－10～13検出状況（完掘後 北東より）

図版 7



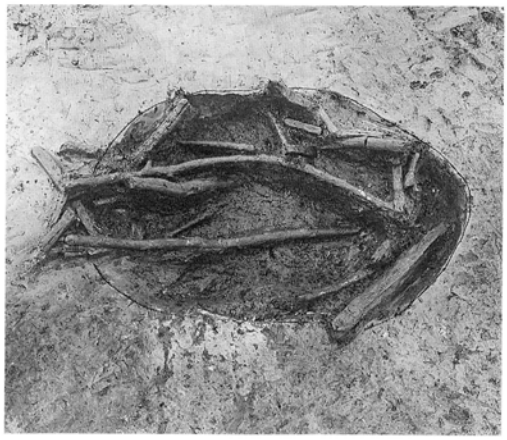
1）SK－10～13検掘状況（北西より）



2）SK－10木器出土状況

3）SK－11木器出土状況 1

4）SK－11木器出土状況 2



5）SK－14（北東より）

1） SK－12板材出土状況

2） SK－15検出状況（北東より）

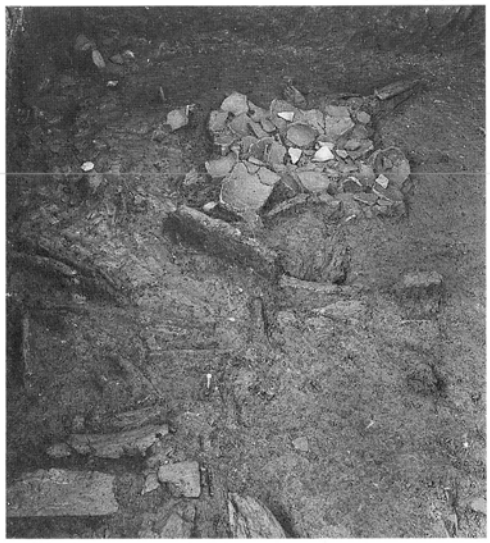
1）A・B－3区 7－2～8－2層遺物出土状況（北東より）

2）C－3区7－2～8－2層遺物出土状況（南東より）

1）C－3区8－3～5遺物出土状況

2）C－4区8－4層遺物出土状況

1） A・B－3区8－3層遺物出土状況

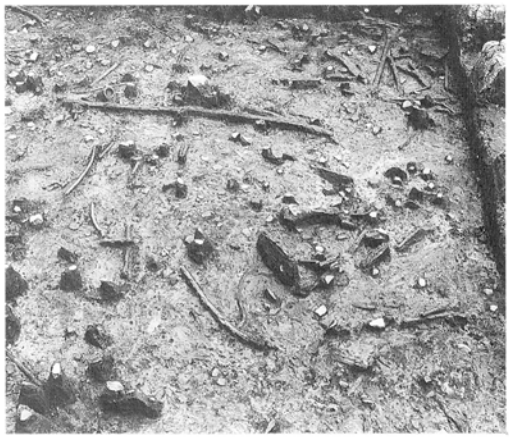


2） C－4区 8－4 層遺物出土状況

3） E－4区 8－3層遺物出土状況

4） D－3区 8－3層遺物出土状況

5） B－3区 8－3・4層遺物出土状況



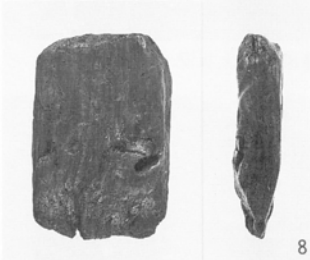
6） B－4区 8－5層遺物出土状況

4

5

636

637



8 SK－10出土木器

9

638

17

18

31

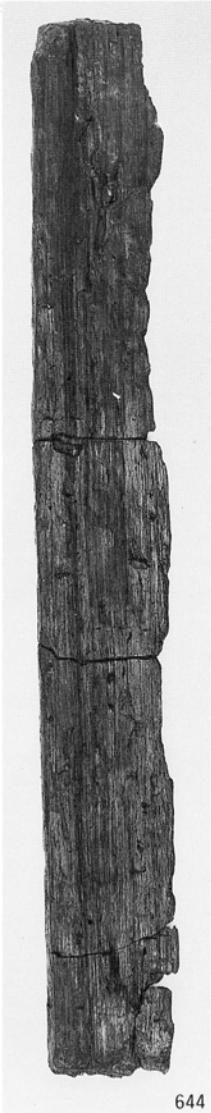
24

SK－11出土木器 1

SK－11出土木器2

106 SK－12出土木器

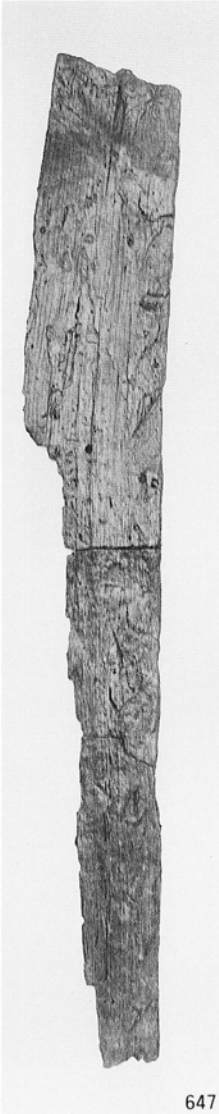
643



644

645

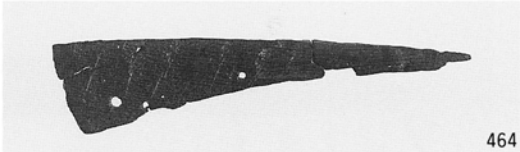
646

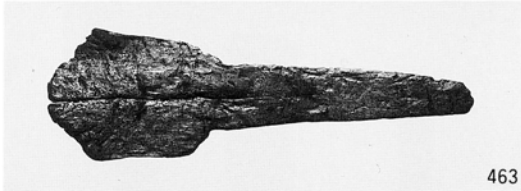


647

SK－15出土木器

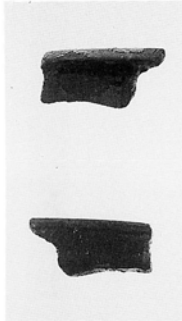
111

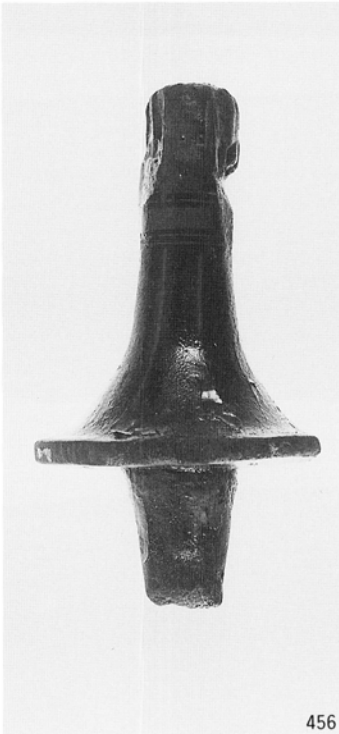

464

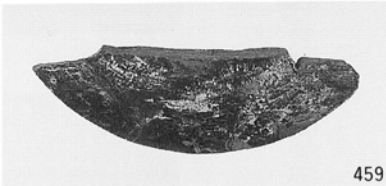

463

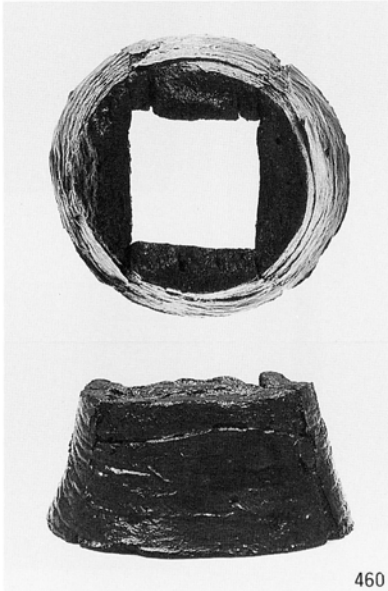
444

457


460

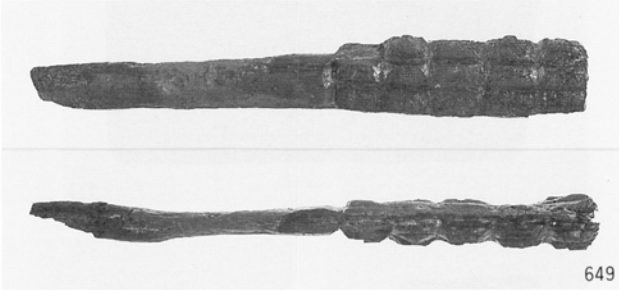

456

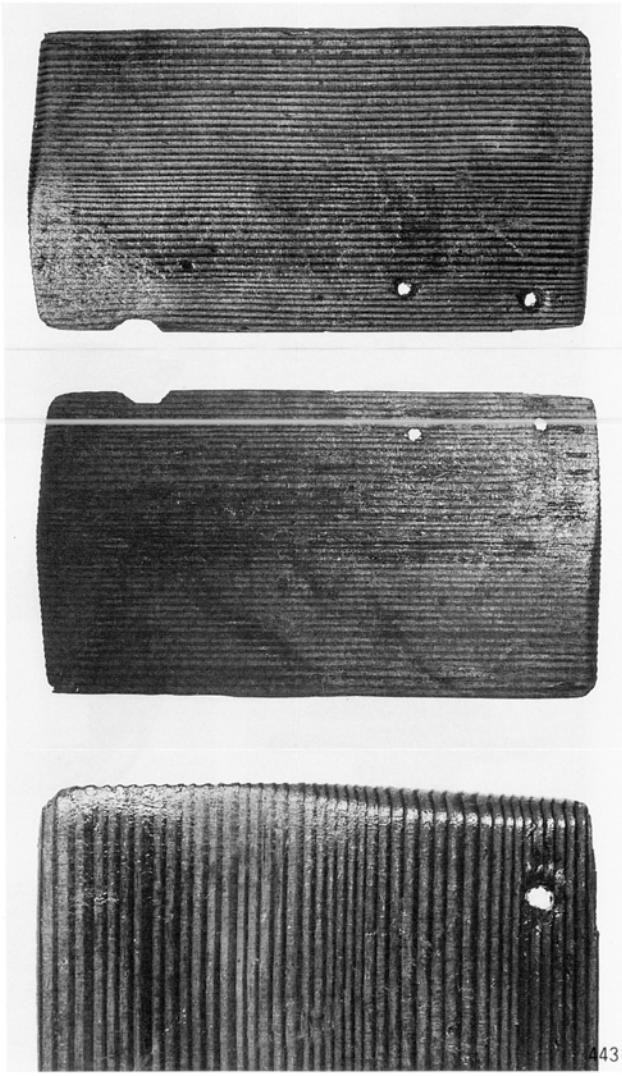

459


460

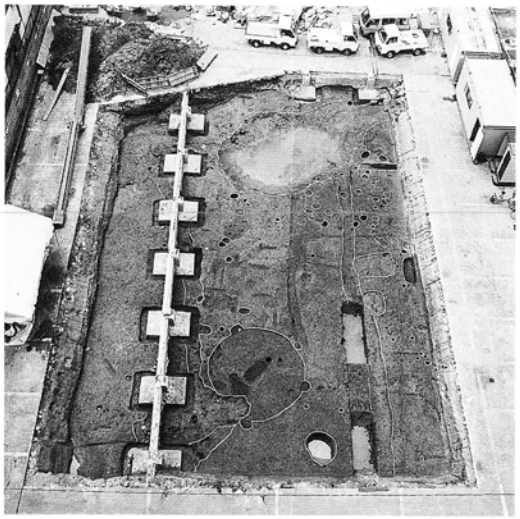
432

SK－15および8－3～5層
出土木器



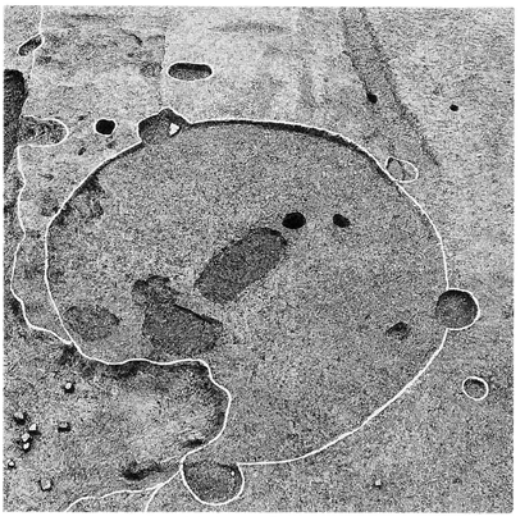


8－3～5層出土木器

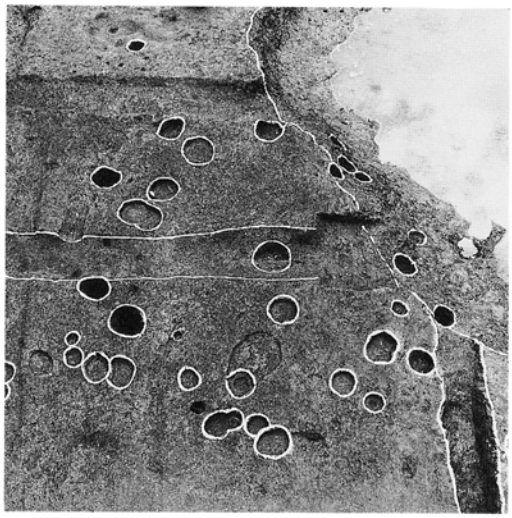


1）26次調査地点Ⅰ区全景（南東より）

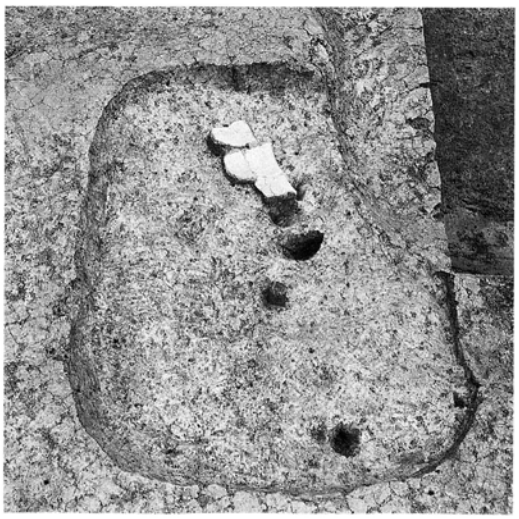
2）第1号溜池（西より）



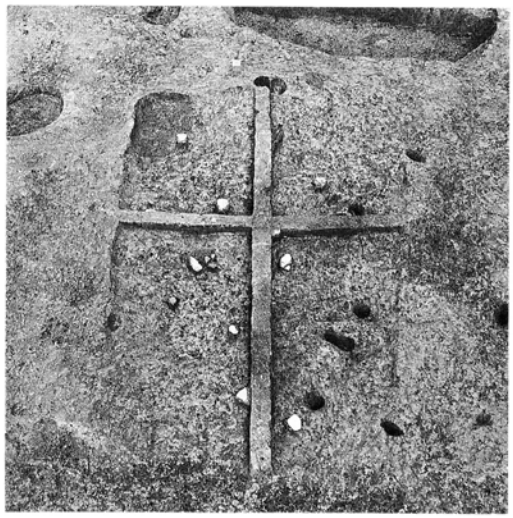
3）第50号住居址（南東より）



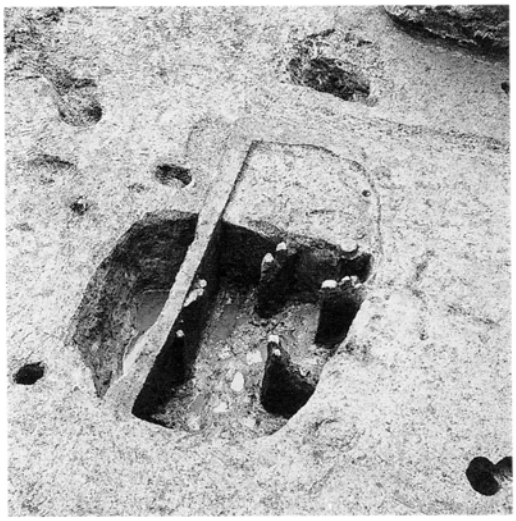
4）第60号住居址（北東より）



5）第3号貯蔵穴（北西より）



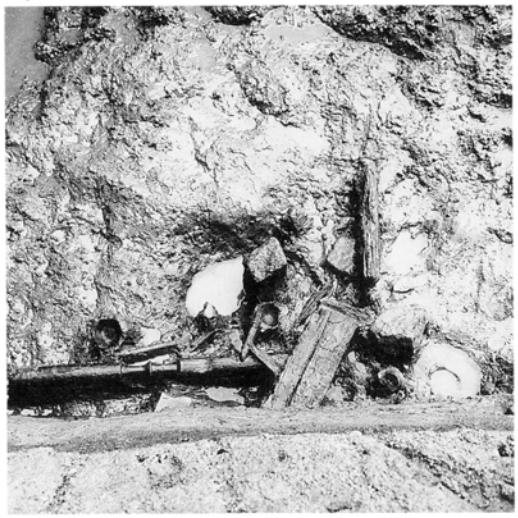
6）第33号貯蔵穴（南より）



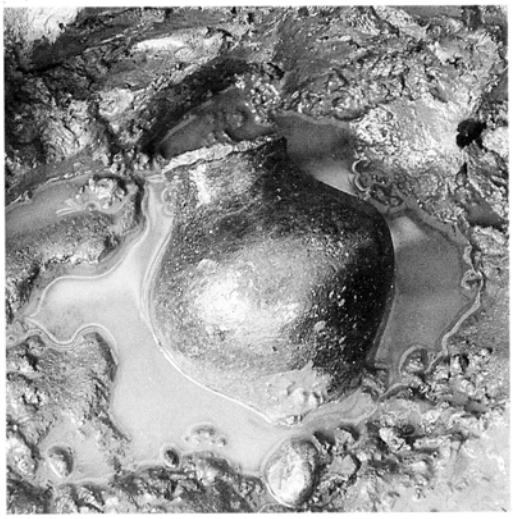
1）第63号貯蔵穴（東より）

2）包含層遺物出土状況（南東より）

3）II区調査風景（東より）

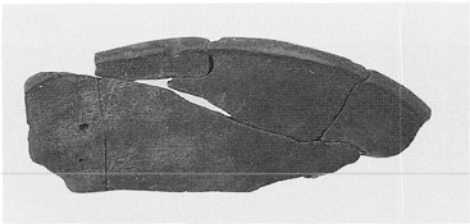


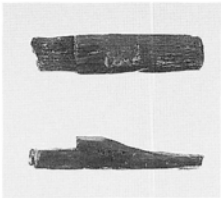
4）木器貯蔵施設（南東より）

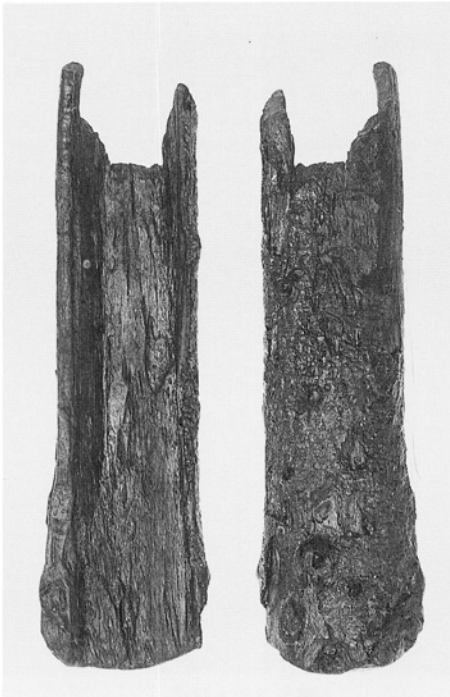


5）包含層遺物出土状況（J－8区）

6）包含層堆積状況（北西より）

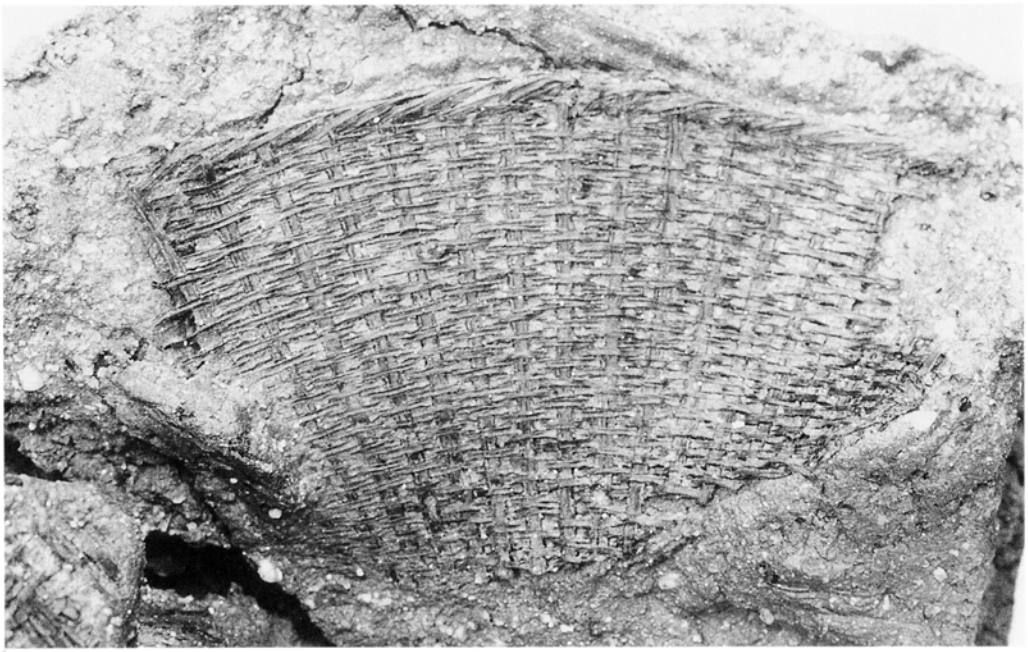






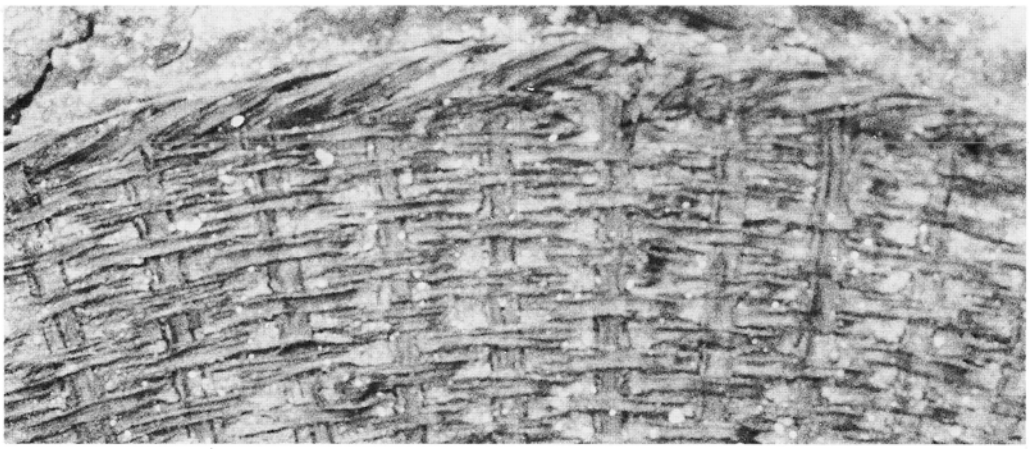
出土木製品（縮尺不同）

1）出土状況

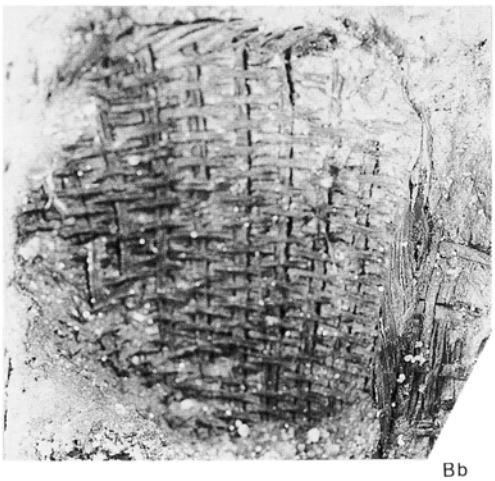


2）部分A（実大）

編カゴ出土状況



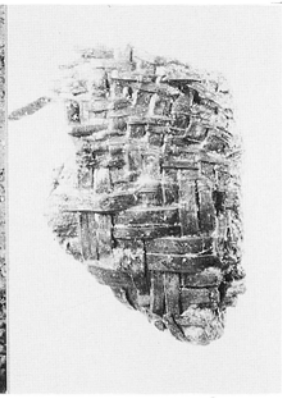
A



Bb

Bc

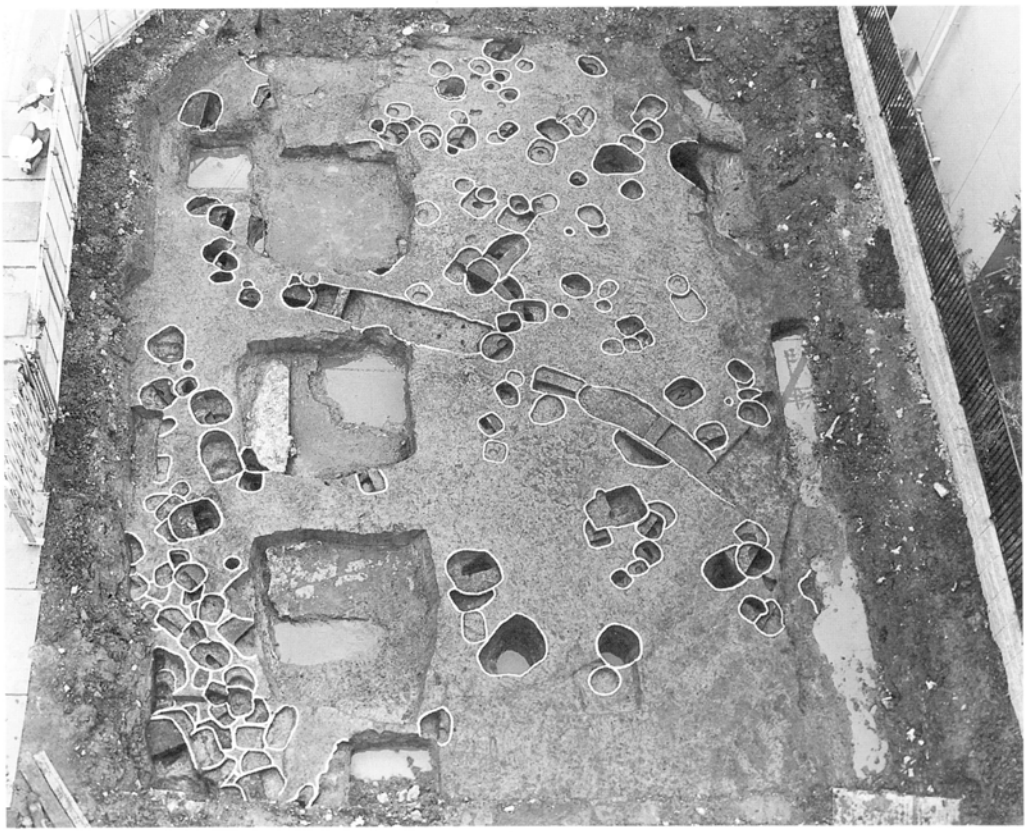
Ba



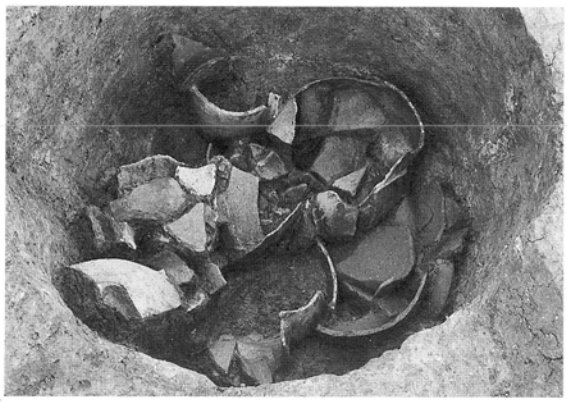
C

編カゴ部分（実大、ただしAのみ2倍）

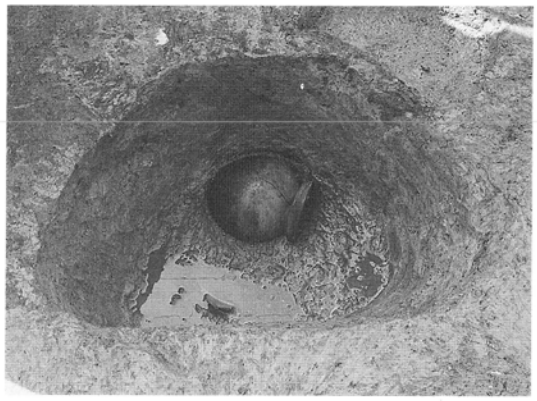
1）27次調査地点全景（南より）



2）27次調査地点全景（東より）



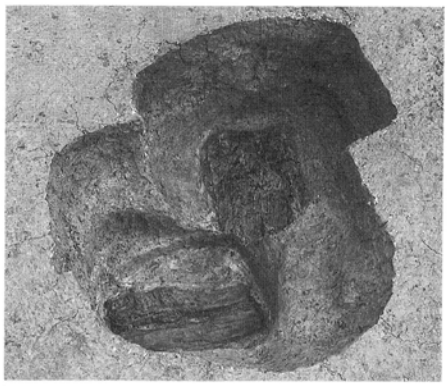
1）SE01遺物出土状況（東より）



3）SE03遺物出土状況（東より）

2）SE02完掘状況（東より）

4）SE04遺物出土状況（南より）



5）P51・67礎板（西より）

6）P66礎板（西より）

1

2

3

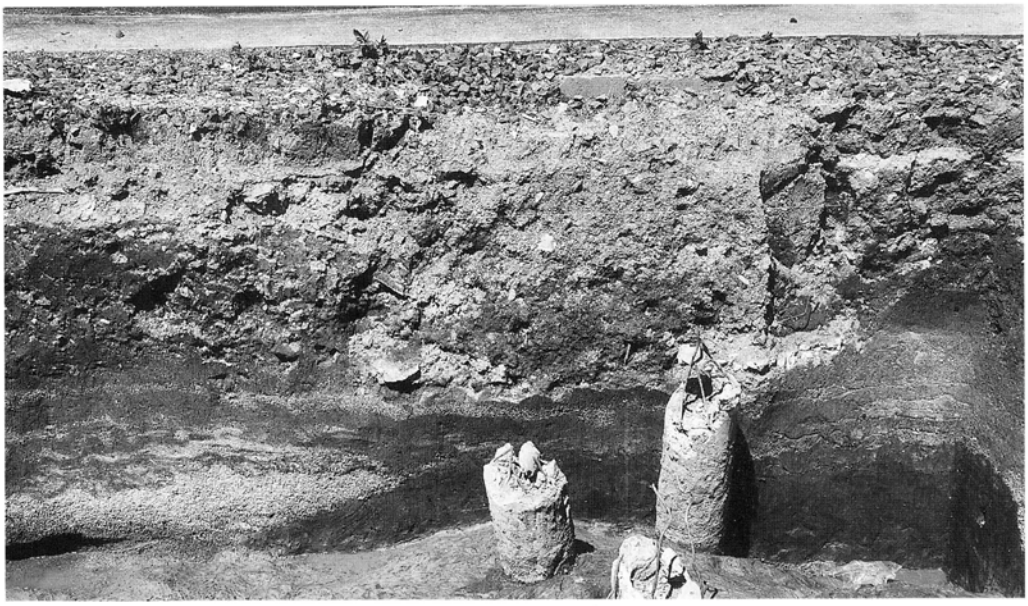
6

31

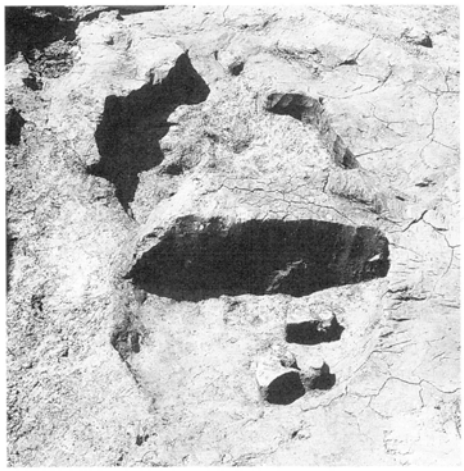
18

SE01～04出土遺物

1）28次調査地点全景（北より）



2）第6トレンチ土層断面（南より）

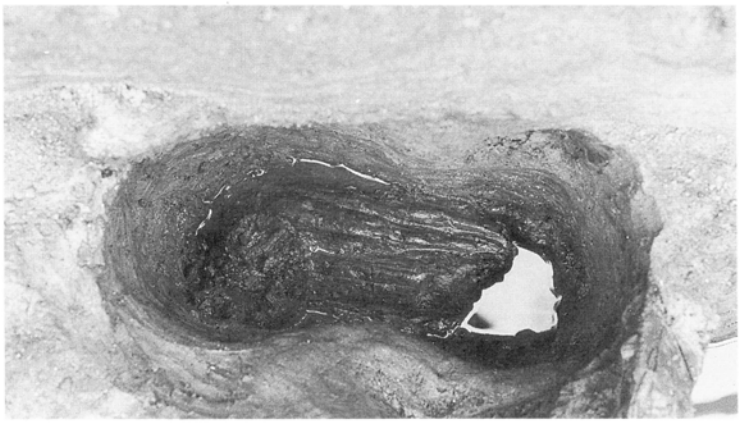


1）SX-01完掘状況（東より）

3）SK－03完掘状況（東より）

2）SK－02完掘状況（南より）

4）SK－04完掘状況（南より）



5）柱穴柱根と礎板検出状況

編集後記～まとめにかえて～

本報告書には1989年度以前に比恵遺跡群で実施した7地点の発掘調査報告を収録した。年度を追うごとに頁数が増し資料の蓄積が進んでいるが、この地域における開発の度合いに比例していることを考えるとき、単純に資料の増加と楽観視できるものではない。本文中で全体を総括できなかったため、ここで各時期別に概観してまとめとしたい。

今回は24～26、28次地点など比恵遺跡群の北端地域の報告が多く、弥生時代の旧地形、遺構分布、各種の遺物、古環境復元などで多くの知見を得ることができた。

19次調査地点では先土器時代遺物の検出があった。福岡平野で最北端の発見例である。

弥生時代前期には24～26、28次地点で遺構、遺物の検出があった。これらは台地先端部の樹枝状丘陵とその間の埋没谷に分布する。台地上には竪穴式住居、貯蔵穴などがあり、谷には木器貯蔵穴などがある。また、厚い包含層が形成されている。これは1979～80年の4次地点のあり方を追認するものである。包含層には木器や木製品を始め、多量の遺物が検出された。これらには台地上から廃棄せられたものと、掘方内に貯蔵状態で放棄されたものがあった。

弥生時代中期前半にもこの地点において遺構、遺物の出土がある。24・26次地点の「溜池」状遺構は用途不明の遺構であるが、比較的規模の大きな貯水施設とみられた。

弥生時代中期後半には19・27次地点で竪穴式住居、掘立柱建物、井戸などが、26・28次地点で甕棺墓やその痕跡が検出された。甕棺墓は接近する4次地点の墓域の延長とみられる。24次地点のSX07・08はこの墓域か、あるいは谷頭の湧水に対する何らかの祭儀の跡とみられる。

弥生時代後期から古墳時代前期には19・27次地点で竪穴式住居、掘立柱建物、井戸などが検出された。27次地点では隣接する7次地点と同時に有礎板の掘立柱建物が特徴的である。

古墳時代後期には19次地点で掘立柱建物、柵列・溝を検出した。柵列は布掘をもち、7・8・13次地点の柵列と同形態である。一連の「官衙」的施設と関連するものと考えられる。

古代～中世には19次地点で溝と掘立柱建物を検出した。集落の一部と考えられる。

以上のように、各時期を通じて遺構、遺物の豊富さが目立つ。全体的な傾向として弥生時代中期前葉までは比恵台地の先端付近に集落があり、しだいに南側に移動し、かつての集落跡の一部は墳墓となるようである。遺構、遺物の研究や植生復元を通じた詳細で具体的な集落景観の復元はこれからの課題といえよう。　　（吉留秀敏）

～・

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第255集

比恵遺跡群（10）

1991年3月25日

発行：福岡市教育委員会　福岡市中央区天神1丁目8－1

印刷：㈲松古堂印刷　　福岡市西区周船寺1丁目7－64